

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 84

# 百間川沢田遺跡 3

旭川放水路(百間川)改修  
工事に伴う発掘調査 VIII  
(本 文)

1 9 9 3

建設省岡山河川工事事務所  
岡山県教育委員会



1. 四元調査区縄文時代後期の炉床



2. 四元調査区縄文時代後期の貯蔵穴



3. 四元調査区縄文時代後期の土器



1. 高縄手B調査区縄文時代晩期の石器集積土壌2



2. 高縄手B調査区縄文時代晩期の石器集積土壌2 出土石器



1. 高縄手B調査区弥生時代前期の土壙墓・土壙群 (207・208-O区)



2. 高縄手B調査区弥生時代前期の土壙墓・土壙群 (207・208-O区) 出土土器



1. 高縄手 A 調査区の西側環濠 (溝36)



2. 高縄手 A 調査区弥生時代前期環濠内の遺構



1. 高縄手B調査区の弥生時代前期水田1



1. 高縄手B調査区の弥生時代前期水田2



1. 高縄手B調査区旧河道部の弥生時代後期水田



2. 高縄手B調査区低位部の弥生時代後期水田



1. 高縄手A調査区の古墳時代集落(206~208-J・K区)



2. 高縄手A調査区の古墳時代竪穴住居(竪穴住居18)



1. 高縄手A調査区の奈良時代井戸(井戸10)



2. 高縄手A調査区の奈良時代井戸(井戸10)出土木製品

## 序

百間川は、洪水による被害をたびたび受けていた岡山城下を守るため、今から約300年前に、著名な陽命学者である熊沢蕃山考案の「川除けの法」(放水路計画)をもとに、岡山池田藩の郡代である名土木事業家津田永忠によって造られた旭川の放水路です。

百間川は、築造以来数多くの洪水から岡山市街地を守ってきましたが、一方で通水能力が小さく、また堤防が弱いことなどから時には沿川に大きな被害をもたらすこともありました。

このため、建設省では地元の方々をはじめとする関係者のご協力を戴き、昭和49年から本格的な改修工事を進めてまいりました。その結果、昭和58年には第一段階として戦後百間川に流入した程度の規模の洪水に対しても安全な断面が出来上がり、現在、第二段階の工事をすすめている所です。

ところで、百間川では鎌木義昌氏等によって埋蔵文化財が発見されています。そこで、建設省では、岡山県教育委員会と協議を重ね、改修を行う部分について遺跡の発掘調査を行ない記録に留めることとし、昭和52年から同委員会に発掘調査を委託し今日に至っています。

この間に調査した面積は、平成3年度末で15.7万㎡に達しましたが、この中には10万㎡にも及ぶ弥生時代後期の小区画の水田跡を始めとする数々の重要な遺跡が発掘され、全国的にも注目されています。

本書は、このうち昭和57年度から平成元年度にわたって行われた百間川沢田遺跡の発掘調査の結果をまとめたものです。本書が、埋蔵文化財に対する理解の増進と、学術、文化等のため、広く活用されることを期待します。

最後に、発掘調査並びに本書の編集に当たられた岡山県教育委員会を始めとする関係各位に対し、深甚なる謝意を表します。

平成4年9月

建設省岡山河川工事事務所

所長 原田 彪

## 序

岡山平野を南北に貫流する旭川の東岸平野は、豊かな穀倉地帯でありましたが、最近では急速に市街地化が進んでいます。この平野を、旭川から分かれて東に向かって流れる百間川は、江戸時代に岡山の城下町を水害から守るために築堤・開削された人工の河川です。幅約200mを測る河川敷には貴重な動植物などが生息する自然が残され、市民の憩いの場となっていますが、その地下には貴重な遺跡も広がっています。

昭和50年から本格化した百間川の改修工事に伴い、河川敷内の遺跡の保存が大きな課題となってきましたが、岡山県教育委員会では、その取り扱いについて建設省岡山河川工事事務所と協議をすすめた結果、やむをえず破壊される遺跡の一部については記録による保存の処置をとることとなりました。

百間川遺跡群の発掘調査は、昭和52年4月の開始以来、本年で16年目をむかえています。これまで弥生時代の水田跡をはじめ、縄文時代から中世にいたる貴重な遺構・遺物が発見され、全国的にも注目されました。

調査の結果はこれまでに刊行された7冊の報告書にまとめられています。本報告書は8冊目にあたり、昭和57年度から平成元年度まで調査を実施した百間川沢田遺跡を収録しています。この調査区からは縄文時代のドングリ貯蔵穴や土器、弥生時代前期の環濠集落や墓、また弥生時代後期の水田と水路など、注目される遺構・遺物が発見されています。

この報告書が文化財の保護・保存、さらに今後の研究の一助となれば幸いと存じます。

発掘調査の実施および報告書作成にあたっては、旭川放水路（百間川）改修工事に伴う埋蔵文化財保護対策委員の先生方から種々の御教示と御指導を得、また建設省岡山河川工事事務所をはじめ関係各位から多大な御協力をいただきました。記して厚くお礼申し上げます。

平成4年9月

岡山県教育委員会

教育長 竹内 康夫

## 例 言

1. 本報告書は、旭川放水路（百間川）改修工事に伴い、建設省中国地方建設局の委託を受け、岡山県教育委員会が1982（昭和57）年度から1989（平成元）年度に発掘調査を実施した、百間川沢田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 百間川沢田遺跡は、岡山市沢田に所在する沢田遺跡のうち、百間川河川敷内に係る範囲をさす。
3. 発掘調査は1983年度以前を岡山県教育庁文化課が、1984年度以降については岡山県古代吉備文化財センターが担当し、その総面積は21,210㎡である。
4. 発掘調査および報告書の作成にあたっては、旭川放水路（百間川）河川改修工事に伴う埋蔵文化財保護対策委員会を設け、下記の方々に委員を委嘱した。対策委員各位からは終始有益なご指導とご助言をいただいた。記して深く感謝の意を表す次第である。

池葉須藤樹（元岡山市犬島中学校校長）                      鎌木義昌（岡山理科大学教授）  
近藤義郎（岡山大学名誉教授）                                  角田 茂（元岡山市岡輝中学校教諭）  
出宮徳尚（岡山市教育委員会文化課課長補佐）      水内昌康（岡山県文化財保護審議会委員）
5. 報告書の作成は、1991年度に行い、岡山県古代吉備文化財センター職員井上弘・柳瀬昭彦・浅倉秀昭・平井勝・古谷野寿郎・岡本寛久・江見正己・宇垣匡雅が担当したほか、元職員高田恭一郎・阿部泰久の協力を得た。
6. 本文の執筆にあたっては各担当者が分担し、文責は文末に明示した。
7. 本報告書に係わる自然遺物のうち、一部のものについて鑑定・同定および分析を下記の諸氏・機関に依頼し、有益な教示を得るとともに、報告をいただいた。記して厚く御礼申し上げる次第である。

石器石材鑑定 三宅 寛（岡山理科大学教授）  
木製品樹種同定 畔柳 鎮（岡山商科大学教授）  
種子同定・花粉分析・プラントオパール分析 パリノ・サーヴェイ株式会社  
サヌカイトの原産地分析 白石 純（岡山理科大学）
8. 本書の編集は平井勝が担当した。
9. 出土遺物ならびに図面・写真類は岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325-3）に保管している。

## 凡 例

1. 百間川沢田遺跡は、さらに小字名によって各調査区に分けているが、これとは別に遺跡全体に20m方眼を組み、東西のラインは北から南へ向かって200・201・202と数字を、南北のラインは西から東へ向かってA・B・Cとアルファベットを付した。そして各樹目の呼称は、各ラインの北西隅交点の名称（207B・206Dなど）に区を付して呼ぶ。
2. 本報告書の遺構全体図および各遺構図の北方位はすべて磁北である。なお遺跡付近の磁北は西偏6°30'を測る。
3. 本報告書の土層断面図や遺構実測図の高度はすべて海拔高度である。
4. 本報告書の遺構ならびに遺物実測図の縮尺率は下記のとおり統一しているが、例外については縮尺率を明記している。

### 遺構

竪穴住居・建物 1/80 井戸・土塙・土塙墓・溝断面 1/30

### 遺物

土器 1/4 土製品 1/3 石製品・金属製品 1/2 木製品 1/4

5. 土器実測図のうち、中軸線の左右に白抜きのあるものは、小破片のため口径推定が困難なものである。
6. 遺物番号は、材質を示すため、土器以外のものについて下記の略号を番号の前に付した。  
石製品：S 鉄製品：I 銅製品：B 土製品：C 木製品：W
7. 本報告書に掲載した地図のうち、第2図は国土地理院の1/25000地形図、和気・西大寺・岡山北部・岡山南部を、第4図は岡山市域図1/2500地形図を複製したものである。
8. 本報告書で使用した弥生時代から古墳時代前半期の時期は『旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査Ⅰ』において採用した、下記の土器編年に基づいている。

編 年 対 比 表

時代	遺跡		百 間 川	雄 町 (註1)	上東・川入 (註2)	
弥 生 時 代	前 期	津 島	百間川前期Ⅰ			
			百間川前期Ⅱ	雄 町 1		
		門 田	百間川前期Ⅲ	雄 町 2		
	船 山 3					
	中 期	南 方	百間川中期Ⅰ	高 田		
				雄 町 3		
		菰 池	百間川中期Ⅱ	船 山 5		
	菰 池					
	期	前 山 Ⅱ	百間川中期Ⅲ	雄 町 4		
				前 山 東		
		仁 伍		雄 町 5		
	後 期	上 東	百間川後期Ⅰ	雄 町 6		上東・鬼川市 0
				雄 町 7		
		上 東	百間川後期Ⅱ	雄 町 8		上東・鬼川市Ⅰ
				雄 町 9		
期		グランド上層	百間川後期Ⅲ	雄 町 10		上東・鬼川市Ⅱ
				+		上東・鬼川市Ⅲ
酒 津	百間川後期Ⅳ	雄 町 11		才 の 町 Ⅰ		
古 墳 時 代	前 期	玉 泊 六 層	百間川古墳時代Ⅰ	雄 町 12	才 の 町 Ⅱ	
			百間川古墳時代Ⅱ	雄 町 13	下 田 所	
			百間川古墳時代Ⅲ	雄 町 14	亀 川 上 層	
			百間川古墳時代Ⅳ	雄 町 15	+	
					川入・大溝上層	

註1 正岡陸夫他「雄町遺跡」『岡山市埋蔵文化財発掘調査報告』1 岡山市教育委員会 1972年

註2 柳瀬昭彦他「川入・上東」『岡山市埋蔵文化財発掘調査報告』16 岡山市教育委員会 1977年

# 目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
第1章 地理的・歴史的環境	1
第2章 調査および報告書作成の経緯	9
第1節 発掘調査の契機とこれまでの成果	9
第2節 調査の体制	11
第3節 調査の経過	15
第4節 報告書の作成	19
第3章 調査の概要	20
第1節 横田調査区	20
1. 横田調査区の概要	20
2. 弥生時代前期の遺構・遺物	24
(1) 土壙	24
(2) 土壙墓	33
(3) 溝	34
3. 弥生時代中期の遺構・遺物	41
(1) 水田	41
(2) 土壙	42
4. 弥生時代後期の遺構・遺物	43
(1) 水田	43
(2) 土壙	50
(3) 溝	50
(4) 柱穴群	54
5. 古墳時代の遺構・遺物	56
(1) 竪穴住居	56
(2) 建物	65
(3) 井戸	67
(4) 土壙	68
(5) 土壙墓	72

(6) 溝 .....	73
6. 中世の遺構・遺物 .....	79
(1) 土壇 .....	79
(2) 柵 .....	84
(3) 溝 .....	84
第2節 高縄手A調査区 .....	86
1. 高縄手A調査区の概要 .....	86
2. 弥生時代前期の遺構・遺物 .....	88
(1) 竪穴住居 .....	88
(2) 土壇 .....	98
(3) 円形周溝 .....	118
(4) 溝 .....	121
3. 弥生時代後期の遺構・遺物 .....	130
(1) 水田 .....	130
(2) 溝 .....	130
4. 古墳時代の遺構・遺物 .....	139
(1) 竪穴住居 .....	139
(2) 建物 .....	151
(3) 井戸 .....	156
(4) 土壇 .....	167
(5) 溝 .....	172
5. 古代の遺構・遺物 .....	175
(1) 建物 .....	175
(2) 井戸 .....	179
(3) 溝 .....	180
6. 中世の遺構・遺物 .....	183
(1) 土壇 .....	183
(2) 溝 .....	186
第3節 高縄手B調査区 .....	187
1. 高縄手B調査区の概要 .....	187
2. 縄文時代の遺構・遺物 .....	192
(1) 土壇 .....	192

(2) 石器集積土壌 .....	196
(3) 溝 .....	199
(4) 包含層の遺物 .....	199
3. 弥生時代前期の遺構・遺物 .....	205
(1) 水田 .....	205
(2) 土壌 .....	208
(3) 土壌墓 .....	217
(4) 溝 .....	224
4. 弥生時代中期の遺構・遺物 .....	230
(1) 水田 .....	230
(2) 土壌 .....	230
(3) 溝 .....	231
(4) 池状遺構 .....	237
5. 弥生時代後期の遺構・遺物 .....	248
(1) 水田 .....	248
(2) 土壌 .....	258
(3) 溝 .....	259
6. 古墳時代の遺構・遺物 .....	278
(1) 水田 .....	278
(2) 竪穴住居 .....	278
(3) 建物 .....	282
(4) 井戸 .....	282
(5) 土壌 .....	285
(6) 柵 .....	300
(7) 溝 .....	301
(8) 耕作痕 .....	307
7. 古代・中世の遺構・遺物 .....	308
(1) 建物 .....	308
(2) 溝 .....	311
(3) 包含層の遺物 .....	312
第4節 竪石調査区 .....	313
1. 竪石調査区の概要 .....	313

2. 遺構・遺物	317
(1) 水田	317
(2) 溝	317
第5節 足洗調査区	318
1. 足洗調査区の概要	318
2. 縄文時代の遺構・遺物	322
3. 弥生時代前期の遺構・遺物	322
(1) 溝	322
4. 弥生時代中期の遺構・遺物	329
(1) 溝	329
5. 弥生時代後期の遺構・遺物	339
(1) 水田	339
(2) 溝	345
6. 古墳時代の遺構・遺物	348
(1) 土壙	348
(2) 土壙群	348
(3) 溝	353
7. 古代・中世の遺構・遺物	355
(1) 土壙	355
(2) 溝	355
(3) 耕作痕	363
第6節 四元調査区	365
1. 四元調査区の概要	365
2. 縄文時代の遺構・遺物	365
(1) 土壙	365
(2) 炉床	372
(3) 貝塚	372
(4) 包含層の遺物	372
3. 弥生時代前期の遺構・遺物	392
(1) 溝	392
4. 弥生時代中期の遺構・遺物	392
(1) 溝	392

5. 弥生時代後期の遺構・遺物	393
(1) 水田	393
(2) 溝	393
6. 古墳時代の遺構・遺物	395
(1) 溝	395
7. 古代・中世の遺構・遺物	396
(1) 土壙	396
(2) 溝	397
第7節 流田・開ノ山下調査区	401
1. 流田・開ノ山下調査区の概要	401
2. 遺構・遺物	402
(1) 水田	402
(2) 溝	402
第4章 まとめ	403
付載1 植物化石分析報告	405
付載2 自然科学分析	418
付載3 サヌカイト製石器の産地について	427

## 目 次

第1図 百間川的位置	1	第8図 横田調査区弥生時代前期土壙出土 遺物	22
第2図 百間川周辺遺跡分布図 (S = 1 / 50,000)	2	第9図 横田調査区弥生時代前期包含層出 土遺物	23
第3図 グリッドの設定と調査区	15	第10図 横田調査区の弥生時代前期遺構全 体図 (S = 1 / 500)	25・26
第4図 百間川沢田遺跡の調査区位置図 (S = 1 / 7,500)	16	第11図 土壙1	27
第5図 横田・高縄手調査区の北壁土層断 面図	18	第12図 土壙1出土遺物	28
第6図 微高地西斜面洪水砂層上面出土遺 物	20	第13図 土壙2	28
第7図 横田調査区北壁土層図 (S = 1 / 80)	21	第14図 土壙2出土遺物	29
		第15図 土壙3	29
		第16図 土壙4 (S = 1 / 60)	29

第17図	土壌 5	30	第50図	柱穴群 2 (S = 1/100)	55
第18図	土壌 6 (S = 1/60)	31	第51図	横田調査区 of 古墳時代遺構全体図 (S = 1/500)	57・58
第19図	土壌 7 (S = 1/60)	32	第52図	横田調査区 of 古墳時代遺構全体図 (S = 1/250)	59
第20図	土壌 8・出土遺物	33	第53図	竪穴住居 1・出土遺物	60
第21図	土壌墓 1	34	第54図	竪穴住居 2・同中央穴・南壁側穴 (S = 1/30)	61
第22図	溝 1・出土遺物	34	第55図	竪穴住居 2 出土遺物	62
第23図	溝 2・出土遺物	35	第56図	竪穴住居 3	63
第24図	溝 3	35	第57図	竪穴住居 4・同南壁側土壌 (S = 1/30)	63
第25図	溝 4	36	第58図	竪穴住居 4 出土遺物	64
第26図	溝 5・6・溝 6 出土遺物	37	第59図	建物 1	65
第27図	溝 7・出土遺物	37	第60図	建物 2	66
第28図	溝 8	38	第61図	建物 3	66
第29図	溝 9・出土遺物	38	第62図	井戸 1	67
第30図	溝 10・出土遺物	38	第63図	井戸 2	67
第31図	横田調査区 of 弥生時代中期遺構全 体図 (S = 1/500)	39・40	第64図	井戸 2 出土遺物	68
第32図	溝 11・出土遺物	41	第65図	土壌 13・14	69
第33図	水田関係土層図 (S = 1/60)	42	第66図	土壌 15	69
第34図	弥生時代中期水田関係出土遺物	43	第67図	土壌 16	70
第35図	土壌 9・出土遺物	44	第68図	土壌 17	70
第36図	横田調査区 of 弥生時代後期遺構全 体図 (S = 1/500)	45・46	第69図	土壌 18・出土遺物	71
第37図	横田調査区 of 弥生時代後期洪水砂 埋没遺構全体図 (S = 1/500)	47・48	第70図	土壌墓 2	72
第38図	土壌 10	49	第71図	溝 22・出土遺物	73
第39図	弥生時代後期水田大畦・溝 19・20・ 21土層断面図 (S = 1/40)	49	第72図	溝 23・出土遺物	74
第40図	土壌 11	50	第73図	溝 24・25・26・出土遺物	74
第41図	土壌 12	50	第74図	溝 27	75
第42図	溝 12・出土遺物	51	第75図	溝 28	75
第43図	溝 13	51	第76図	溝 29・出土遺物	76
第44図	溝 14	51	第77図	横田調査区 of 中世遺構全体図 (S = 1/500)	77・78
第45図	溝 15	51	第78図	溝 30〈左〉・31〈中〉・32〈右〉	79
第46図	溝 16	51	第79図	土壌 19	80
第47図	溝 17	52	第80図	土壌 20	80
第48図	溝 18	52	第81図	土壌 21	81
第49図	柱穴群 1 (S = 1/100)	53			

第82図	土壙22	81	第115図	土壙39出土遺物	106
第83図	土壙23・出土遺物	81	第116図	土壙40	106
第84図	土壙24	82	第117図	土壙41	107
第85図	柵1 (S = 1/50)	83	第118図	土壙41出土遺物	108
第86図	溝33	84	第119図	土壙42	109
第87図	溝34	85	第120図	土壙43	109
第88図	溝35	85	第121図	土壙44・出土遺物	110
第89図	高縄手A調査区基本土層図 (S = 1/60)	86	第122図	土壙46・出土遺物	110
第90図	包含層出土遺物	87	第123図	土壙47	111
第91図	溝36北壁断面図 (S = 1/80)	87	第124図	土壙48	111
第92図	竪穴住居5	88	第125図	土壙49・出土遺物	112
第93図	高縄手A調査区の弥生時代前期遺 構全体図 (S = 1/500)	89・90	第126図	土壙50・出土遺物	112
第94図	高縄手A調査区の弥生時代前期 遺構全体図(1) (S = 1/250)	91	第127図	土壙51・出土遺物	113
第95図	高縄手A調査区の弥生時代前期 遺構全体図(2) (S = 1/250)	92	第128図	土壙52	113
第96図	竪穴住居6・出土遺物(1)	93	第129図	土壙53	113
第97図	竪穴住居6出土遺物(2)	94	第130図	土壙54	114
第98図	竪穴住居7・出土遺物	95	第131図	土壙55	115
第99図	竪穴住居8・出土遺物	97	第132図	土壙56	115
第100図	土壙25	98	第133図	土壙57	115
第101図	土壙26	98	第134図	土壙58	115
第102図	土壙27・出土遺物	99	第135図	土壙59	116
第103図	土壙28	100	第136図	土壙60	116
第104図	土壙29・出土遺物	100	第137図	土壙61	116
第105図	土壙30・出土遺物	100	第138図	土壙62	116
第106図	土壙31・出土遺物	101	第139図	土壙63・出土遺物	117
第107図	土壙32	101	第140図	円形周溝1 (S = 1/80・1/30)	119
第108図	土壙33・出土遺物	102	第141図	円形周溝2 (S = 1/80・1/30)	120
第109図	土壙34	103	第142図	溝36	121
第110図	土壙35・出土遺物	103	第143図	溝36出土遺物	122
第111図	土壙36	103	第144図	溝37	123
第112図	土壙37・出土遺物	104	第145図	溝38(左)・39(右)・溝38出土遺 物	124
第113図	土壙38・出土遺物	104	第146図	溝39出土遺物	125
第114図	土壙39	105	第147図	溝40	125
			第148図	溝41	125

第149図	溝42	126	第179図	建物5・出土遺物	152
第150図	溝43	126	第180図	建物6	153
第151図	溝44	126	第181図	建物7	153
第152図	溝44出土遺物(1)	127	第182図	建物8・出土遺物	154
第153図	溝44出土遺物(2)	128	第183図	建物9	154
第154図	弥生時代前期土壌・柱穴等出土 遺物	129	第184図	建物10	155
第155図	溝46・47	130	第185図	建物11	155
第156図	溝48	130	第186図	建物12	155
第157図	高縄手A調査区の弥生時代後期 洪水砂埋没遺構全体図 (S = 1/500)	131・132	第187図	建物13	156
第158図	高縄手A調査区の弥生時代後期 遺構全体図(S = 1/500)	133・134	第188図	井戸3	156
第159図	高縄手A調査区 of 古墳時代遺構 全体図(S = 1/500)	135・136	第189図	井戸3出土遺物	157
第160図	高縄手A調査区 of 古墳時代遺構 全体図(1)(S = 1/250)	137	第190図	井戸4	158
第161図	高縄手A調査区 of 古墳時代遺構 全体図(2)(S = 1/250)	138	第191図	井戸4出土遺物	159
第162図	竪穴住居9	139	第192図	井戸5・出土遺物(1)	160
第163図	竪穴住居9出土遺物	140	第193図	井戸5出土遺物(2)	161
第164図	竪穴住居10	141	第194図	井戸6	162
第165図	竪穴住居10出土遺物	142	第195図	井戸6出土遺物(1)	163
第166図	竪穴住居11・出土遺物	143	第196図	井戸6出土遺物(2)	164
第167図	竪穴住居12・出土遺物	144	第197図	井戸6出土遺物(3)	165
第168図	竪穴住居13	145	第198図	井戸7	166
第169図	竪穴住居14・出土遺物	145	第199図	井戸8	166
第170図	竪穴住居15・出土遺物(1)	146	第200図	井戸8出土遺物	167
第171図	竪穴住居15・出土遺物(2)	147	第201図	井戸9	168
第172図	竪穴住居16	147	第202図	井戸9出土遺物	168
第173図	竪穴住居17・出土遺物	148	第203図	土壌64	168
第174図	竪穴住居18・出土遺物	149	第204図	土壌65	169
第175図	竪穴住居19・出土遺物	150	第205図	土壌65出土遺物	170
第176図	竪穴住居20	150	第206図	土壌67	171
第177図	竪穴住居20出土遺物	151	第207図	土壌68	171
第178図	建物4	151	第208図	土壌69	172
			第209図	土壌70・出土遺物	172
			第210図	溝49(左)・50(右)	172
			第211図	高縄手A調査区 of 古代遺構全体 図(S = 1/500)	173・174
			第212図	溝51	175
			第213図	建物14・出土遺物	175
			第214図	建物15	176

第215図	建物16・出土遺物	177	生時代前期遺構全体図	
第216図	井戸10	178	(S = 1 / 250)	195
第217図	井戸10出土遺物(1)	179	第243図	土壌85
第218図	井戸10出土遺物(2)	180	第244図	土壌85出土遺物
第219図	溝52	180	第245図	土壌86
第220図	高縄手A調査区の中世遺構全体 図(S = 1 / 500)	181・182	第246図	土壌87
第221図	土壌71(左)・72(右)	183	第247図	石器集積土壌1(S = 1 / 12)
第222図	土壌73	183	第248図	石器集積土壌1出土遺物
第223図	土壌74(右)・75(中)・ 76(左)	183	第249図	石器集積土壌2(S = 1 / 12)
第224図	土壌77(左)・78(右)	184	第250図	石器集積土壌2出土遺物
第225図	土壌79	184	第251図	溝56
第226図	土壌71・74~78出土遺物	185	第252図	溝57
第227図	土壌80	185	第253図	旧河道西岸微高地下がり出土遺 物
第228図	土壌81	185	第254図	206~208-L・M灰黒色粘土層 出土の遺物
第229図	土壌82	185	第255図	207・208-O灰黒色粘土層出土 遺物(1)
第230図	溝53	186	第256図	207・208-O灰黒色粘土層出土 遺物(2)
第231図	溝54	186	第257図	207・208-O暗灰色粘土層出土 遺物
第232図	溝55	186	第258図	微高地東縁辺部(S = 1 / 300)
第233図	包含層出土の石製品	187	第259図	包含層出土遺物
第234図	高縄手B調査区206-Oの北壁土 層断面図(S = 1 / 60)	188	第260図	高縄手B調査区の弥生時代前期 遺構全体図(S = 1 / 500)
第235図	高縄手B調査区207-Pの北壁土 層断面図(S = 1 / 80)	188	第261図	前期水田1・2(S = 1 / 400)
第236図	208-T・U北壁断面 (S = 1 / 80)	189	第262図	前期水田出土遺物
第237図	U東10mの南北断面 (S = 1 / 80)	190	第263図	前期水田1横断面(S = 1 / 80)
第238図	208-W・X北壁断面 (S = 1 / 60)	191	第264図	土壌88
第239図	土壌83	192	第265図	土壌89
第240図	土壌84	192	第266図	土壌90
第241図	高縄手B調査区の縄文時代~弥 生時代前期遺構全体図 (S = 1 / 500)	193・194	第267図	土壌91
第242図	高縄手B調査区の縄文時代~弥		第268図	土壌92・出土遺物
			第269図	土壌93
			第270図	土壌94
			第271図	土壌95

第272図	土壙96	212	遺構全体図(2) (S = 1/500)	229	
第273図	土壙97	212	第307図	中期水田畦断面	230
第274図	土壙97出土遺物	213	第308図	中期水田覆土出土遺物	230
第275図	土壙98	213	第309図	土壙107	231
第276図	土壙99・出土遺物	214	第310図	土壙108	231
第277図	土壙100	214	第311図	土壙109	231
第278図	土壙101出土遺物	214	第312図	土壙110	231
第279図	土壙101	215	第313図	溝62	232
第280図	土壙102	216	第314図	溝62出土遺物	232
第281図	土壙103・出土遺物	216	第315図	溝63・64	234
第282図	土壙104	217	第316図	溝65 (S = 1/60)	234
第283図	土壙105	217	第317図	溝65出土遺物	235
第284図	土壙106	217	第318図	溝66	235
第285図	土壙墓3	218	第319図	溝67	235
第286図	土壙墓3出土遺物	218	第320図	溝68 (S = 1/40)	235
第287図	土壙墓4	219	第321図	溝69 (下はS = 1/40)	236
第288図	土壙墓5	219	第322図	溝69出土遺物	236
第289図	土壙墓5出土遺物	220	第323図	池状遺構1 (S = 1/120)	237
第290図	土壙墓6・出土遺物	220	第324図	池状遺構1土層断面図 (S = 1/60)	238
第291図	土壙墓7	221	第325図	池状遺構2 (S = 1/100)	239
第292図	土壙墓7出土遺物	221	第326図	池状遺構2	240
第293図	土壙墓8	222	第327図	池状遺構2出土遺物	240
第294図	土壙墓9	222	第328図	高縄手B調査区の弥生時代後期遺構全体図(1)	241・242
第295図	土壙墓9出土遺物	223		(S = 1/500)	
第296図	土壙墓10	223	第329図	高縄手B調査区の弥生時代後期遺構全体図(2)	243・244
第297図	土壙墓11	223		(S = 1/500)	
第298図	土壙墓12・出土遺物	224	第330図	高縄手B調査区の弥生時代後期洪水砂埋没遺構全体図(1)	245・246
第299図	土壙墓13	224		(S = 1/500)	
第300図	溝58 (S = 1/40)	225	第331図	高縄手B調査区の弥生時代後期洪水砂埋没遺構全体図(2)	247
第301図	溝58	225		(S = 1/500)	
第302図	溝58出土遺物	226	第332図	弥生時代後期水田(旧河道)大畦水口(1)	248
第303図	溝58出土遺物	226			
第304図	溝60	226			
第305図	高縄手B調査区の弥生時代中期遺構全体図(1)	227・228			
	(S = 1/500)				
第306図	高縄手B調査区の弥生時代中期				

第333図	弥生時代後期水田(旧河道)大 畦水口(2) ……………249	第359図	溝77・78(S=1/60) ……………263
第334図	207-Oの大畦断面図(上は縦 断、中・下は横断) ……………249	第360図	溝77出土遺物 ……………264
第335図	弥生時代後期水田(旧河道)大 畦下木質・杭残存状態(1) (S=1/90) ……………250	第361図	溝79 ……………265
第336図	弥生時代後期水田(旧河道)大 畦下木質・杭残存状態(2)・ 出土遺物 ……………251	第362図	溝80出土遺物 ……………265
第337図	弥生時代後期水田(旧河道)大 畦下木質・杭残存状態(3) ……252	第363図	溝80・117 ……………265
第338図	弥生時代後期水田(旧河道)大 畦横木検出状況 ……………253	第364図	溝83 ……………265
第339図	弥生時代後期水田層出土遺物 ……253	第365図	溝84 ……………265
第340図	弥生時代後期洪水砂層出土遺物 253	第366図	溝85 ……………265
第341図	207・208-Q水田と溝118~120 断面図(S=1/80) ……………254	第367図	溝87 ……………265
第342図	大畦・畦断面 ……………255	第368図	溝88・118・溝88出土遺物 ……266
第343図	溝107および島状高まり断面 ……256	第369図	溝89・119・溝89出土遺物 ……267
第344図	島状高まり断面(S=1/40) ……256	第370図	溝90 ……………268
第345図	島状高まり南北断面 (S=1/40) ……………256	第371図	溝91 ……………268
第346図	微高地縁辺部水田の足跡状痕跡 (S=1/200) ……………257	第372図	溝92 ……………269
第347図	土壌111 ……………257	第373図	溝92・出土遺物 ……………269
第348図	土壌112 ……………258	第374図	溝93・106出土遺物 ……………270
第349図	土壌114 ……………258	第375図	溝94 ……………270
第350図	溝70 ……………259	第376図	溝96 ……………270
第351図	溝71出土遺物 ……………259	第377図	溝97 ……………271
第352図	溝73 ……………259	第378図	溝98・99・100・101(S=1/ 40)・出土遺物 ……………272
第353図	溝74 ……………259	第379図	溝102 ……………273
第354図	溝74出土遺物 ……………260	第380図	溝112・113・114(S=1/60) ……273
第355図	溝75・77・80(S=1/80) ……261	第381図	溝116出土遺物 ……………273
第356図	溝75 ……………262	第382図	溝117出土遺物 ……………274
第357図	溝75出土遺物 ……………262	第383図	溝118 ……………274
第358図	溝76 ……………263	第384図	209・210-Uの溝断面図・209・ 210-U~W出土遺物 ……………274
		第385図	溝119 ……………275
		第386図	溝120・121 ……………275
		第387図	溝122 ……………276
		第388図	溝120~122出土遺物 ……………276
		第389図	溝120~122分岐点(S=1/80) 277
		第390図	竪穴住居21 ……………278
		第391図	建物17 ……………278
		第392図	高縄手B調査区 of 古墳時代遺構 全体図(1)(S=1/500) 279・280

第393図	高縄手B調査区の古墳時代遺構 全体図(2)(S=1/500) ……281	第427図	溝133 ……306
第394図	井戸11 ……282	第428図	溝134 ……306
第395図	井戸11出土遺物(1) ……283	第429図	溝135 ……306
第396図	井戸11出土遺物(2) ……284	第430図	溝136 ……307
第397図	井戸12 ……285	第431図	溝137・出土遺物 ……307
第398図	井戸12出土遺物 ……286	第432図	古墳時代耕作痕(S=1/150) ……308
第399図	土壌115(左)・土壌116(右)・ 出土遺物 ……287	第433図	古墳時代耕作痕出土遺物 ……308
第400図	土壌117 ……287	第434図	高縄手B調査区の古代～中世遺 構全体図(S=1/500) ……309・310
第401図	土壌117出土遺物(1) ……288	第435図	建物18 ……311
第402図	土壌117出土遺物(2) ……289	第436図	溝142 ……311
第403図	土壌117出土遺物(3) ……290	第437図	溝143 ……311
第404図	土壌117出土遺物(4) ……291	第438図	207～209-L～P包含層出土遺 物 ……312
第405図	土壌117出土遺物(5) ……292	第439図	豎石調査区土層断面図〈右岸用 水排水機場調査区〉 (S=1/80) ……313
第406図	土壌117出土遺物(6) ……293	第440図	214-M・N〈原尾島樋門高水敷 護岸調査区〉の北壁〈上・中〉 と東壁〈下〉土層断面図 (S=1/80) ……314
第407図	土壌117出土遺物(7) ……294	第441図	豎石調査区の遺構全体図 (S=1/500) ……315・316
第408図	土壌117出土遺物(8) ……295	第442図	CC・DD区包含層出土遺物 ……318
第409図	土壌117出土遺物(9) ……296	第443図	足洗調査区KKラインから西へ 3mの南北土層断面図 (S=1/60) ……319
第410図	土壌117出土遺物(10) ……297	第444図	213-L L南壁断面図 (S=1/80) ……320
第411図	土壌117出土遺物(11) ……298	第445図	足洗調査区212・213-NNの南 西から北東方向土層断面図 (S=1/60) ……321
第412図	土壌117出土遺物(12) ……299	第446図	213-PP出土遺物 ……322
第413図	土壌118 ……300	第447図	溝148 ……322
第414図	柵2(S=1/80)・出土遺物 ……301	第448図	足洗調査区の弥生時代前・中期 遺構全体図(1) (S=1/500) ……323・324
第415図	溝124(S=1/60) ……302		
第416図	溝125(S=1/60) ……302		
第417図	溝124(下)・125(上) ……302		
第418図	溝126 ……303		
第419図	溝126出土遺物(1) ……303		
第420図	溝126出土遺物(2) ……304		
第421図	溝127・出土遺物 ……304		
第422図	溝128 ……304		
第423図	溝129 ……305		
第424図	溝130 ……305		
第425図	溝130出土遺物 ……305		
第426図	溝131・132・出土遺物 ……306		

第449図	足洗調査区の弥生時代前・中期遺構全体図(2) (S = 1/500) ……325・326	第473図	土壌群1 ……348
第450図	足洗調査区の弥生時代中期遺構全体図(S = 1/500) ……327・328	第474図	足洗調査区古墳時代遺構全体図(1)(S = 1/500) ……349・350
第451図	溝149 ……329	第475図	足洗調査区古墳時代遺構全体図(2)(S = 1/500) ……351・352
第452図	溝149出土遺物 ……329	第476図	溝166 ……353
第453図	溝150・出土遺物 ……330	第477図	溝167断面図 ……353
第454図	足洗調査区弥生時代後期遺構全体図(1)(S = 1/500) 331・332	第478図	溝168 ……353
第455図	足洗調査区弥生時代後期遺構全体図(2)(S = 1/500) 333・334	第479図	溝169・出土遺物 ……354
第456図	足洗調査区弥生時代後期洪水砂埋没遺構全体図(1) (S = 1/500) ……335・336	第480図	溝171・172・173 ……355
第457図	足洗調査区弥生時代後期洪水砂埋没遺構全体図(2) (S = 1/500) ……337・338	第481図	土壌121 ……355
第458図	溝152 ……339	第482図	溝174(S = 1/60)・出土遺物…356
第459図	弥生時代後期水田大畦土層断面図 ……342	第483図	足洗調査区古代～中世遺構全体図(1)(S = 1/500)…357・358
第460図	209～213-BB～LLの水田および島状高まり出土遺物 ……343	第484図	足洗調査区古代～中世遺構全体図(2)(S = 1/500)…359・360
第461図	島状高まり土層断面図 (S = 1/40) ……344	第485図	溝175・176 ……361
第462図	弥生時代後期水田土層断面図 ……344	第486図	溝175出土遺物 ……362
第463図	溝153 ……345	第487図	溝177 ……363
第464図	溝154 ……345	第488図	溝178 ……363
第465図	溝154・155 ……345	第489図	中世耕作痕 ……364
第466図	溝156 ……346	第490図	足洗調査区土層断面図〈上はQ Qラインから東へ5mの南東-北西、 中はRRラインの西-北、 下はSSラインの南-北〉 (S = 1/80) ……366
第467図	溝157 ……346	第491図	足洗調査区土層断面図〈上はS Sから東へ10mの南-北、下は 調査区東端の南西-北東〉 (S = 1/80) ……367
第468図	溝158 ……346	第492図	四元調査区縄文時代～弥生時代前期遺構全体図〈溝179以外は 縄文後期の遺構〉(S = 1/500) 368
第469図	溝159 ……347	第493図	土壌122 ……368
第470図	溝161・163 ……347	第494図	土壌123・出土遺物 ……369
第471図	溝164 ……347	第495図	土壌124 ……370
第472図	土壌119 ……348		

第496図	土壌124出土遺物	370	第517図	213-S S~T T出土の縄文土器 (15)	388
第497図	土壌125・出土遺物	370	第518図	213-S S~T T出土の縄文土器 (16)	389
第498図	土壌126	371	第519図	213-S S~T T出土の土製品	390
第499図	土壌127	371	第520図	213-S S~T T出土の縄文時代 石器	391
第500図	土壌128	371	第521図	溝179	392
第501図	土壌129	371	第522図	四元調査区の弥生時代中期遺構 全体図 (S = 1/500)	392
第502図	四元調査区213-S S・T Tの縄 文土器分布図 (S = 1/150)	373	第523図	溝180	393
第503図	213-S S~T T出土の縄文土器 (1)	374	第524図	溝180出土遺物	393
第504図	213-S S~T T出土の縄文土器 (2)	375	第525図	四元調査区の弥生時代後期遺構 全体図 (S = 1/500)	393
第505図	213-S S~T T出土の縄文土器 (3)	376	第526図	四元調査区の弥生時代後期洪水 砂埋没遺構全体図 (S = 1/500)	394
第506図	213-S S~T T出土の縄文土器 (4)	377	第527図	溝181	394
第507図	213-S S~T T出土の縄文土器 (5)	378	第528図	溝183	394
第508図	213-S S~T T出土の縄文土器 (6)	379	第529図	四元調査区の古墳時代遺構全体 図 (S = 1/500)	395
第509図	213-S S~T T出土の縄文土器 (7)	380	第530図	溝184	395
第510図	213-S S~T T出土の縄文土器 (8)	381	第531図	溝184	396
第511図	213-S S~T T出土の縄文土器 (9)	382	第532図	四元調査区の古代~中世遺構全 体図 (S = 1/500)	396
第512図	213-S S~T T出土の縄文土器 (10)	383	第533図	溝186	397
第513図	213-S S~T T出土の縄文土器 (11)	384	第534図	溝187	397
第514図	213-S S~T T出土の縄文土器 (12)	385	第535図	溝188	397
第515図	213-S S~T T出土の縄文土器 (13)	386	第536図	溝189	397
第516図	213-S S~T T出土の縄文土器 (14)	387	第537図	溝190	397
			第538図	溝191	398
			第539図	流田・開ノ山下調査区の遺構全 体図 (S = 1/500)	399・400
			第540図	流田・開ノ山下調査区土層柱 状図 (S = 1/80)	401
			第541図	流田・開ノ山下調査区出土遺物	401

第542図 溝188・土器溜り・杭列  
 (S = 1/50) .....402

## 表 目 次

表 1 沢田遺跡の調査一覧表 .....17

## 図 版 目 次

- |      |                                   |                                 |  |
|------|-----------------------------------|---------------------------------|--|
| 図版 1 | 1 百間川沢田遺跡航空写真（北から）                | 図版11                            | 1 横田 柱穴群 1（南東から）                             |
|      | 2 百間川沢田遺跡遠景〈足洗・四元調査区付近〉（西から）      | 2 横田 柱穴群 2（北東から）                |  |
| 図版 2 | 1 横田 作業風景（北西から）                   | 図版12                            | 1 横田 204-B区古墳時代微高地斜面土器散布状況（北東から）             |
|      | 2 高縄手 A 作業風景（北東から）                | 2 横田 205-E区古墳時代微高地斜面土器散布状況（西から） |  |
| 図版 3 | 1 高縄手 B 作業風景（北東から）                | 図版13                            | 1 横田 竪穴住居 1（南西から）                            |
|      | 2 四元 作業風景（南西から）                   | 2 横田 竪穴住居 2（北から）                |  |
| 図版 4 | 1 横田 205-E・F区弥生時代前期遺構全景（南東から）     | 図版14                            | 1 横田 竪穴住居 3・建物 3・溝 29（西から）                   |
|      | 2 横田 土壙 1（北東から）                   | 2 横田 竪穴住居 4（西から）                |  |
| 図版 5 | 1 横田 土壙 4（北から）                    | 図版15                            | 1 横田 建物 1（西から）                               |
|      | 2 横田 土壙 6（北から）                    | 2 横田 建物 2（北西から）                 |  |
| 図版 6 | 1 横田 土壙 7（南東から）                   | 図版16                            | 1 横田 井戸 1（南から）                               |
|      | 2 横田 土壙墓 1（北から）                   | 2 横田 井戸 2（西から）                  |  |
| 図版 7 | 1 横田 溝 4（北東から）                    | 図版17                            | 1 横田 土壙 14（北西から）                             |
|      | 2 横田 溝 5・6（北東から）                  | 2 横田 土壙 15（東から）                 |  |
| 図版 8 | 1 横田 溝 7（北東から）                    | 図版18                            | 1 横田 土壙 18〈左〉（東から）・同鏡出土状態〈右〉                 |
|      | 2 横田 弥生時代中期水田〈203～205-B～D区〉（南東から） | 2 横田 土壙墓 2（北から）                 |  |
| 図版 9 | 1 横田 弥生時代後期水田〈203～205-B～E区〉（南東から） | 図版19                            | 1 横田 205・206-E・F区中世遺構全景（南西から）                |
|      | 2 横田 土壙 12〈左〉 同種子出土状況〈右〉（北西から）    | 2 横田 土壙 23（東から）                 |  |
| 図版10 | 1 横田 溝 16（南西から）                   | 図版20                            | 1 横田 柵 1（東から）                                |
|      | 2 横田 溝 19・20・21（北東から）             | 2 横田 溝 34（北から）                  |  |
|      |                                   | 図版21                            | 1 高縄手 A 205・206-G区弥生時代前期以前小穴群・西側環壕〈溝36〉（北から） |
|      |                                   | 2 高縄手 A 弥生時代前期環壕内               |  |

- 堅穴住居跡群（西から）
- 図版22 1 高縄手A 206~208-J・K区  
弥生時代前期の遺構（西から）  
2 高縄手A 堅穴住居5（南東から）
- 図版23 1 高縄手A 堅穴住居6（南東から）  
2 高縄手A 堅穴住居6の中央穴  
〈左〉 同石鏃出土状態 〈右〉
- 図版24 1 高縄手A 堅穴住居7（北西から）  
2 高縄手A 堅穴住居8（南から）
- 図版25 1 高縄手A 土壙26（北東から）  
2 高縄手A 土壙31（南西から）
- 図版26 1 高縄手A 土壙37（北から）  
2 高縄手A 土壙41（北東から）
- 図版27 1 高縄手A 円形周溝1（南から）  
2 高縄手A 円形周溝2〈上〉（南から）・同木棺小口板穴状遺構  
〈下〉
- 図版28 1 高縄手A 溝36土層断面  
2 高縄手A 溝38（西から）
- 図版29 1 高縄手A 溝44（北から）  
2 高縄手A 206・207-H・I区  
古墳~奈良時代遺構（南西から）
- 図版30 1 高縄手A 206~208-J・K区  
古墳時代の遺構（西から）  
2 高縄手A 堅穴住居9（西から）
- 図版31 1 高縄手A 堅穴住居10（西から）  
2 高縄手A 堅穴住居10の炉跡  
〈上〉（西から） 同断面〈下〉（東から）
- 図版32 1 高縄手A 堅穴住居11（東から）  
2 高縄手A 堅穴住居12（東から）
- 図版33 1 高縄手A 堅穴住居14（南東から）  
2 高縄手A 堅穴住居15（北東から）
- 図版34 1 高縄手A 堅穴住居16（北から）  
2 高縄手A 堅穴住居17・18（東から）
- 図版35 1 高縄手A 堅穴住居19（西から）  
2 高縄手A 堅穴住居20（北西から）
- 図版36 1 高縄手A 建物5（南から）  
2 高縄手A 建物6（東から）
- 図版37 1 高縄手A 建物9（南から）  
2 高縄手A 井戸3（南東から）
- 図版38 1 高縄手A 井戸4（東から）  
2 高縄手A 井戸5（西から）
- 図版39 1 高縄手A 井戸6（北から）  
2 高縄手A 井戸6遺物出土状態  
上層〈左〉（北から）・同底部〈右〉  
（南から）
- 図版40 1 高縄手A 井戸9（北から）  
2 高縄手A 土壙65（北東から）
- 図版41 1 高縄手A 土壙68（東から）  
2 高縄手A 206・207-I区建物  
群（北から）
- 図版42 1 高縄手A 建物15（南から）  
2 高縄手A 建物16（北から）
- 図版43 1 高縄手A 井戸16（南から）  
2 高縄手A 土壙71・72・74~79  
（南から）
- 図版44 1 高縄手A 溝53（北から）  
2 高縄手A 溝55（北から）
- 図版45 1 高縄手B 旧河道部水田下西岸  
微高地下がり〈207-L・M区〉  
（北から）  
2 高縄手B 旧河道部水田下西岸

- 微高地下がり土層断面〈207-L・M区〉(北西から)
- 図版46 1 高縄手B 旧河道部水田下東岸  
微高地下がり〈208・209-O区〉  
(北東から)
- 2 高縄手B 旧河道部水田下西岸  
微高地下がり〈207-L・M区〉の  
蛤刃石斧出土状態
- 図版47 1 高縄手B 旧河道東岸微高地下  
がりの縄文時代遺構〈206~208-  
N・O〉(北から)
- 2 高縄手B 土壙84(南東から)
- 図版48 1 高縄手B 石器集積土壙1(東  
から)
- 2 高縄手B 石器集積土壙2(北  
東から)
- 図版49 1 高縄手B 弥生時代前期水田1  
(西から)
- 2 高縄手B 弥生時代前期水田1  
(北から)
- 図版50 1 高縄手B 弥生時代前期水田2  
(北から)
- 2 高縄手B 弥生時代前期水田2  
(西から)
- 図版51 1 高縄手B 207・208-O・P区  
弥生時代前期土壙・土壙墓群(北  
から)
- 2 高縄手B 207・208-P区弥生  
時代前期遺構(北から)
- 図版52 1 高縄手B 土壙97(南から)
- 2 高縄手B 土壙101(南西から)
- 図版53 1 高縄手B 土壙103(西から)
- 2 高縄手B 土壙106(北から)
- 図版54 1 高縄手B 土壙墓3(南から)
- 2 高縄手B 土壙墓4(東から)
- 図版55 1 高縄手B 土壙墓5(南から)
- 2 高縄手B 土壙墓6(東から)
- 図版56 1 高縄手B 土壙墓7(南から)
- 2 高縄手B 土壙墓9(南から)
- 図版57 1 高縄手B 土壙墓10(南西か  
ら)
- 2 高縄手B 土壙墓12(東から)
- 図版58 1 高縄手B 208・209-W・X区  
弥生時代中期水田(北から)
- 2 高縄手B 溝62(北から)
- 図版59 1 高縄手B 溝65(東から)
- 2 高縄手B 溝66・弥生時代中期  
水田〈209・210-W区〉(北から)
- 図版60 1 高縄手B 溝68(北から)
- 2 高縄手B 弥生時代後期溝群  
〈209・210-U~W区〉(西から)
- 図版61 1 高縄手B 池状遺構1(北か  
ら)
- 2 高縄手B 池状遺構2(北か  
ら)
- 図版62 1 高縄手B 池状遺構2
- 2 高縄手B 弥生時代後期水田  
〈旧河道部の206~208-L~O  
区〉(西から)
- 図版63 1 高縄手B 弥生時代後期水田  
〈旧河道部の207~209-L~O  
区〉(北東から)
- 2 高縄手B 弥生時代後期水田  
〈旧河道部の207~209-L~O  
区〉(北から)
- 図版64 1 高縄手B 弥生時代後期水田  
〈旧河道部の207~209-L~O  
区〉の大畦水口(北から)
- 2 高縄手B 弥生時代後期水田  
〈旧河道部の207~209-L~O  
区〉の大畦下木質・杭残存状態下  
部〈下〉(南から) 同上部〈上〉(北  
から)
- 図版65 1 高縄手B 弥生時代後期水田  
〈旧河道部の207~209-L~O  
区〉の大畦下杭列(北から)(西か

- ら)
- 2 高縄手B 弥生時代後期水田  
〈微高地縁辺部の209・210-R~  
W区〉
- 図版66 1 高縄手B 弥生時代後期水田  
〈微高地縁辺部の207・208-P~  
S区〉(東から)
- 2 高縄手B 弥生時代後期水田と  
溝〈微高地縁辺部の209・210-  
R~W区〉(西から)
- 図版67 1 高縄手B 弥生時代後期水田  
〈微高地縁辺部の208・209-T~  
X区〉(西から)
- 2 高縄手B 弥生時代後期水田と  
溝〈微高地縁辺部の209・210-  
U~W区〉(西から)
- 図版68 1 高縄手B 弥生時代後期水田  
〈微高地縁辺部〉の足跡状痕跡
- 2 高縄手B 弥生時代後期水田  
〈微高地縁辺部の209-V・W区〉  
(北から)
- 図版69 1 高縄手B 溝77・82・116・  
126・128~130(北から)
- 2 高縄手B 溝86~90・118~120  
(西から)
- 図版70 1 高縄手B 溝93・95・96・98~  
100(北東から)
- 2 高縄手B 溝112・113・114・土  
壙114(南から)
- 図版71 1 高縄手B 209-U区溝断面(西  
から)
- 2 高縄手B 溝73(西から)
- 図版72 1 高縄手B 溝75・77・80・81・  
116・117(北から)
- 2 高縄手B 溝85・90~101(西か  
ら)
- 図版73 1 高縄手B 溝91~101(西から)
- 2 高縄手B 溝117(南から)
- 図版74 1 高縄手B 建物17(西から)
- 2 高縄手B 井戸11(南から)
- 図版75 1 高縄手B 井戸12(北から)
- 2 高縄手B 土壙115・116(南か  
ら)
- 図版76 1 高縄手B 土壙117第2層底(北  
西から)
- 2 高縄手B 土壙117完掘(南西か  
ら)
- 図版77 1 高縄手B 柵2〈左〉・同柱穴  
〈右〉(西から)
- 2 高縄手B 溝124・125(北か  
ら)
- 図版78 1 高縄手B 溝126・130(北か  
ら)
- 2 高縄手B 溝127・132(南東か  
ら)
- 図版79 1 高縄手B 古墳時代の遺構  
〈209・210-W区〉(西から)
- 2 高縄手B 古墳時代の耕作痕  
(南から)
- 図版80 1 堅石 弥生時代後期の水田〈原  
樋高護214-M区〉(南西から)
- 2 堅石 溝145~147〈原樋高護  
214-N区〉(南東から)
- 図版81 1 堅石 弥生時代後期水田〈排水  
機場N区216-K区〉(東から)
- 2 堅石 弥生時代後期水田〈排水  
機場P区216-L・M区〉(東か  
ら)
- 図版82 1 堅石 弥生時代後期水田〈排水  
機場S区216・217-J・K区〉(北  
から)
- 2 堅石 排水機場S区〈216・  
217-J・K区〉西壁土層断面(東  
から)
- 図版83 1 足洗 溝148(西から)
- 2 足洗 溝149(南から)

- 図版84 1 足洗 溝150 (南から)  
2 足洗 溝151 (南西から)
- 図版85 1 足洗 溝149・151・152・161～165・171～173 (東から)  
2 足洗 溝149・152・161～165・171～173断面 (西から)
- 図版86 1 足洗 弥生時代後期水田〈219・210-B B区〉(北から)  
2 足洗 弥生時代後期水田〈211・212-C C・D D区〉(西から)
- 図版87 1 足洗 弥生時代後期水田〈212・213-E E・F F区〉(南から)  
2 足洗 弥生時代後期水田〈212・213-G G・H H区〉(西から)
- 図版88 1 足洗 弥生時代後期水田〈212・213-I I・J J区〉(東から)  
2 足洗 弥生時代後期水田の水路〈213-I I・J J区〉(南東から)
- 図版89 1 足洗 弥生時代後期水田断面  
2 足洗 弥生時代後期水田〈212・213-K K・L L区〉(西から)
- 図版90 1 足洗 弥生時代後期水田〈212・213-N N・O O区〉(東から)  
2 足洗 溝154・155 (東から)
- 図版91 1 足洗 溝157・158 (南東から)  
2 足洗 溝168・169 (南から)
- 図版92 1 足洗 溝168・169木製品出土状態  
2 足洗 溝174 (南から)
- 図版93 1 足洗 溝175・176 (南から)  
2 足洗 中世の耕作痕 (北から)
- 図版94 1 四元 213-S S・T T区の北東-南西土層断面 (南西から)  
2 四元 213-S S・T T区北東-南西土層断面の縄文土器包含層と炉床 (西から)
- 図版95 1 四元 縄文時代の遺物出土状況〈213-S S・T T区〉(南から)
- 2 四元 縄文土器出土状況〈213-S S・T T区〉
- 図版96 1 四元 土壌123 (南西から)  
2 四元 土壌124 (北から)
- 図版97 1 四元 土壌125 (南東から)  
2 四元 土壌126 (南東から)
- 図版98 1 四元 土壌126のドングリ出土状態  
2 四元 土壌128 (南東から)
- 図版99 1 四元 土壌128のドングリ出土状態  
2 四元 縄文時代後期の炉床
- 図版100 1 四元 縄文時代後期の貝塚 (南から)  
2 四元 弥生時代後期水田〈213-T T区〉(西から)
- 図版101 1 四元 弥生時代後期水田〈213-T T区〉の土層断面 (北西から)  
2 四元 溝179～181・183・184・187 (東から)
- 図版102 1 四元 溝179・180・181 (東から)  
2 四元 溝179～181・183・187・189 (東から)
- 図版103 1 四元 溝180・181 (東から)  
2 四元 溝187・188 (南西から)
- 図版104 1 流田・開ノ山下 215・216-Q～W〈右岸用水〉(東から)  
2 流田・開ノ山下 215・216-Q～W〈右岸用水〉弥生時代後期水田大畦畔 (北から)
- 図版105 横田 微高地西斜面洪水砂層上面(2～5)・土壌8(15)・溝7(26)出土遺物
- 図版106 横田 弥生時代前期包含層(43)・竪穴住居1(52・53)・竪穴住居2(57～62)出土遺物

- 図版107 横田 竪穴住居4出土遺物
- 図版108 横田 井戸2(81~84)・溝25(94)・土壇23(101)出土遺物
- 図版109 高縄手A 土壇41(161・164)・土壇49(170・171)・土壇51(174・175)出土遺物
- 図版110 高縄手A 溝36(181~・183)・溝38(199)・弥生時代前期土壇・柱穴(235・241)出土遺物
- 図版111 高縄手A 溝44出土遺物
- 図版112 高縄手A 竪穴住居9(250~265)・竪穴住居10(278~280)出土遺物
- 図版113 高縄手A 竪穴住居10(266~282)・竪穴住居11(292・293)・竪穴住居12(296・297)出土遺物
- 図版114 高縄手A 竪穴住居15(307~323)・井戸3(346・347)・井戸4(362・363)出土遺物
- 図版115 高縄手A 井戸4(355~368)・井戸5(377~383)出土遺物
- 図版116 高縄手A 井戸6 出土遺物
- 図版117 高縄手A 井戸6(409・412)・土壇65(420~426)出土遺物
- 図版118 高縄手A 井戸10(430~445)・土壇71(446)・土壇75(450)・土壇77(453・454)・土壇78(457)出土遺物
- 図版119 1 高縄手B 石器集積土壇1出土遺物  
2 高縄手B 石器集積土壇2出土遺物
- 図版120 高縄手B 207・208-O灰黒色粘土層出土遺物(1)
- 図版121 高縄手B 207・208-O灰黒色粘土層出土遺物(2)
- 図版122 高縄手B 土壇92(577)・土壇97(578)・土壇101(581)・土壇墓3(583)・土壇墓5(584)出土遺物
- 図版123 高縄手B 土壇墓7(586)・土壇墓9(587~590)出土遺物
- 図版124 高縄手B 土壇墓6(585)・池状遺構1(616)・溝77(648~658)・溝117(679)・溝118(680)出土遺物
- 図版125 高縄手B 井戸12 出土遺物
- 図版126 高縄手B 溝92(667)・井戸11(685~694)・土壇117(714・715)出土遺物
- 図版127 高縄手B 土壇117 出土遺物(2)
- 図版128 高縄手B 土壇117 出土遺物(3)
- 図版129 高縄手B 土壇117 出土遺物(4)
- 図版130 高縄手B 土壇117 出土遺物(5)
- 図版131 高縄手B 土壇117 出土遺物(6)
- 図版132 高縄手B 土壇117 出土遺物(7)
- 図版133 高縄手B 土壇117(787~791)・包含層(852)出土遺物、足洗 弥生時代後期水田上面出土遺物
- 図版134 四元 213-SS~TT出土の縄文土器(1)
- 図版135 四元 213-SS~TT出土の縄文土器(2)
- 図版136 四元 213-SS~TT出土の縄文土器(3)
- 図版137 四元 213-SS~TT出土の縄文土器(4)
- 図版138 四元 213-SS~TT出土の縄文土器(5)
- 図版139 四元 213-SS~TT出土の縄文土器(6)
- 図版140 四元 213-SS~TT出土の縄文土器(7)
- 図版141 四元 213-SS~TT出土の縄文土器(8)
- 図版142 四元 213-SS~TT出土の縄文時代石器

## 第1章 地理的・歴史的環境

百間川は、江戸時代はじめの寛文9年（1669年）から貞享4年（1687年）にかけて、旭川の放水路として造られた一大人工河川である。

それ以前の旭川は、竜の口山系の西端にあたる岡山市中原付近で平野に流れ出す際に分流し、大きくは、現在の流路のように南下するものと、岡山市米田と大多羅町間の低位部に向かって南東へ流れるものと二つの流れがあったようである。

ところが、岡山城主であった宇喜田秀家が天正18年（1590年）から岡山城の大改築を行い、その際、旭川の流路を城の堀として取り込むために付け替え、ほぼ現在の姿に変えてしまった。この新しい流路は城の北方で大きく屈曲する不自然なものであったため、これ以後、岡山城下は度々の洪水の被害を受けることとなった。

この洪水を防ぐために熊沢蕃山や津田永忠により考え出されたのが百間川である。すなわち、岡山城と岡山市中原の中間付近に位置する岡山市竹田付近の東岸堤防筋に、「荒手」と称する洪水の越流堤を設け、ここからあふれ出た洪水を操山の北麓へ導き、そこから山裾に沿って東流させ、やがて操山丘陵の東端である岡山市米田の通称「大曲り」から南流させ、海へ流そうという構想である。この構想は寛文9年（1669年）現実に移され、その後、百間川内には洪水の力を更に弱めたり、沈砂の機能を備えた、第2、第3の「荒手」が築かれ、完成したのである。これが現在の百間川までに至っている。百間川という名の由来も「二の荒手」の幅が導流堤を含め100間あったことによる（註1）。百間川の流路延長は岡山市竹田から河口の沖元までで約13kmにおよぶ。

百間川の本流である旭川は、



第1図 百間川的位置



1. 百間川沢田遺跡
2. 百間川原尾島遺跡
3. 百間川兼基・今谷遺跡
4. 百間川米田遺跡
5. 備前車塚古墳
6. 唐人塚古墳
7. 賞田廃寺
8. 井寺廃寺
9. 山王山古墳
10. 乙多見遺跡
11. 雄町遺跡
12. 幡多廃寺
13. 赤田遺跡
14. 沢田大塚古墳
15. 金蔵山古墳
16. 旗振台古墳
17. 操山103号墳
18. 操山106号
19. 湊茶臼山古墳
20. 網浜茶臼山古墳
21. 操山109号墳
22. 網浜廃寺

第2図 百間川周辺遺跡分布図 (S=1/50,000)

吉井川・高梁川とともに岡山三大河川の一つに数えられる。その源は岡山県最北端の蒜山盆地の西南端、朝鍋鷲ヶ山(1081m)に発し、真庭郡川上村をはじめとして、3村・8町・1市を流れ下り、岡山市江並で瀬戸内海に注ぐ。流路延長は142kmに達する。

その上流域は早壮年期の侵食を示す(註2)山容の中国山地内にある。海拔1000~1100mの山々がそびえ、その谷間では古代より製鉄業が盛んに行われた。とくに、江戸時代から明治期にかけては大規模なたたら製鉄(註3)が盛行し、これに伴う大量の樹木の伐採は、岡山市における洪水の頻発と密接な関係をもつといわれる。

中流域はかつて隆起準平原の典型といわれた吉備高原一帯で、海拔400~500mの高原を深く削って流れる。この吉備高原の南端にあるのが海拔257mの竜の口丘陵で、その西端から、長い谷を下ってきた旭川はどっと平野へ流れ出す。

このように旭川の流域は山がちで、総面積の82.5%は山地によって占められ、平地はわずか14.7%にすぎない。しかも平地の大部分は岡山平野である(註1)。したがって大量の土砂が侵食によって運ばれ、下流の平野部でいきなり吐き出されることになる。

さてここで、百間川の位置する旭川東岸の平野(以下旭東平野と呼ぶ)について、その地理的な環境をみてみたい。この旭東平野は、地形的にはかなり外界から閉鎖された状態にあるといえる。西は旭川が流れ、北には竜の口丘陵、南には操山丘陵が長く横たわっている。この三方向の閉鎖線は強固であり、明瞭な境界線となりうる。これに対して東はやや閉鎖性が弱い。しかし、南東には芥子山を中心とする丘陵があり、北東には穴甘山山王山丘陵が北から派生し、この両丘陵の間も低平ではあるが丘陵状を呈している。古代以前においては、一つの地域として認識しやすい地理的条件にあったといえる。

このように、旭東平野は単一地域としてのまとまりをもっているが、他地域との連絡は困難ではない。西では、旭川を渡れば旭川西岸の平野部が続き、20km離れた高梁川まで平野が連続している。東へは、芥子山と山王山間の小さな谷部を溯れば、幅広く、低い峠を越えて、砂川流域の平野部に出る。この道は現在国道2号線やJR山陽本線が走っている。この平野部からさらに3km程東へ平野部を行けば吉井川に達し、北へ砂川を溯れば山陽町の広い盆地部に至る。また、旭川の水運もあり、その上、操山丘陵と芥子山の間では、干拓以前には海岸線が入り込んでいたと推定されることから、航海船の定泊も不可能ではない。むしろ、旭東平野は交通の要所ともいえる。奈良時代、この平野に国府が置かれたことは、きわめて自然な成り行きであったとも思われる。

この旭東平野には縄文時代以後、数多くの遺跡が形成されるが、その基盤となっている平野の地学的な構造について略述しておきたい。

百間川遺跡群のうち、原尾島遺跡や沢田遺跡では、微高地を掘り下げると、やがて砂層が現

## 第1章 地理的・歴史的環境

われるが、その上面には腐植物が薄層をつくって一面に堆積している。その面の高度は海拔50cm前後であるが、それに連なると考えられる腐植物を資料として、広島大学の協力で<sup>14</sup>C年代測定を試みたところ6005± $\frac{105}{100}$  y. B. P. (HR-095)の年代を得た。これに対しては、この腐植物の載った砂層が縄文海進最盛期の三角州堆積物とみなされている(註4)。

前述のように、旭川は長い丘陵地帯を侵食して深い河谷を形成し、岡山市中原で一気に平野部へ注ぐ。このため、この地点で扇状地を形成し、その末端からは低平な三角州地帯を生じる。旭東平野では、中原付近を頂点とし、東南方向へ緩く傾く扇状地が形成され、その末端は4mの等高線付近にあたる。このため、この付近には国府市場・雄町・清水などの湧泉が分布するという(註4)。扇状地の末端から海側は三角州低地になっているが、この三角州地帯が弥生小海退に伴う浅谷の開削作用を受け、分断されたものが微高地となっていて、自然堤防の微高地とは異なるとされる。(註4)。この三角州の微高地上に遺跡が展開する。

なお、JR赤穂線以東の上道地区や平野北東部の東岡山地区は旭川の堆積作用が及ばないため、広範囲に後背湿地が残っていたとされる(註4)。

地理的環境についての説明はこれで終わり、次に、歴史的環境について述べることとする。

旭東平野周辺で確認されたもっとも古い遺物として、操山旗振台北遺跡(註5)出土のナイフ型石器がある。後期旧石器時代のもので、旧石器時代の遺物としてはこれのみが付近で確認されたものである。

縄文時代の遺跡としては、これまで旭東平野では、百間川遺跡群の調査の端緒となった、国道2号線百間川橋建設工事の際の縄文土器の出土と雄町遺跡(註6)出土の晩期の土器しか知られていなかった。しかし、改修工事に伴う発掘調査の進行によって、次々と新しい事実が発見され、今や、百間川の各地から縄文土器の出土が相継いでいる。もっとも古いものでは沢田遺跡の旧河道から出土した中期の土器片が2片ある(註7)。これについては磨滅が激しいため、また旧河道からの出土ということもあって、上流域あるいは丘陵部からの流入の可能性が考えられる。しかし、同じく沢田遺跡から出土した後期終末の凹線文土器(註7)については大形の破片で磨滅も少なく、この付近での居住が推測されることとなった。1984年度には百間川橋下の微高地内から、一定の範囲でやはり後期終末の土器片の散布が確認された。そして1987年度には、沢田遺跡の東端の丘陵裾部から微高地上にかけて、多量の後期後半の彦崎Ⅱ式土器片の散布がみつき(註8)、その包含層の下では貯蔵穴も確認されたことから、この時期からすでに低地部への人々の進出がみられ、定住が始まっていたことが明らかになった。

縄文時代晩期の遺物は雄町遺跡をはじめ、百間川遺跡群すべての遺跡から出土している。なかでも、百間川沢田遺跡からは多量の出土があり、これに伴って、サヌカイト製の打製石鍬や石庖丁形打製石器の出土がみられ(註9)、農耕の開始を遺物の面から裏付けようとしている。

これに対して、水田や堰等の遺構は今だ検出されず、旭東平野における水稻耕作の開始は今だ弥生時代前期中葉から遡りえていない。

弥生時代前期の遺跡は縄文時代晩期から続くものが多い。旭東平野では雄町遺跡・百間川原尾島遺跡・百間川沢田遺跡・百間川米田遺跡などが知られているが、やはり、百間川遺跡群の調査の進展により、新しい事実が判明している。

1984年度には百間川原尾島遺跡で前期後半の水田が検出されたが、1986年度には百間川沢田遺跡でやはり前期の水田が2面重なって検出され（註10）、下層のものは前期の中葉ではないかと考えられている。これら前期の水田は地形のたわんだ部分に作られたものが多く、全体に等高線に平行した方向に長くなる傾向があり、後期の方眼状の規格化された形状とは大きく異なる。また水田面積も小さいようである。

百間川沢田遺跡では前期中葉の環濠集落が確認された（註11）。幅4m、深さ2mの環濠を、90×100mの卵形にめぐらせた集落で、環濠の内側から竪穴住居4軒、円形周溝遺構2基が検出された。岡山県内では初の確実な検出例であり、今後の類例が注目される。

また、百間川原尾島遺跡の旧河道では、前期の杭列が水路を横断する形で10mにわたって打ち込まれているのが確認され、かなり大規模な灌漑土木工事が実施されていたことが明らかとなった（註12）。

このように、旭東平野では、すでに弥生時代前期にはかなり大規模な水田経営が行なわれていたことが考えられ、その力を生みだす人的結合も進んでいたことが想定される。それに対して、環濠集落の存在がどういう意味をもつのか、今後検討されるべき課題である。

弥生時代中期の遺跡は前述の遺跡の他に、赤田遺跡（註13）、乙多見遺跡（註14）などがある。赤田遺跡では高杯形土器で蓋をした甕棺墓が出土している。百間川遺跡群の中では百間川兼基・今谷遺跡が中心的な位置を占めるようになり、多くの遺跡や遺物が集中して出土している（註15）。なかでも、多量のガラス溶滓や20数棟にもものぼる掘立柱建物の存在は注目され、ガラス工場の可能性も考えられている。この遺跡の南に位置する操山丘陵の谷部からは3個の銅鐸が出土していて（註16）、これとの関連も注意される。

弥生時代後期になると遺跡の数はさらに増加するが、それと同時に、微高地間には水田がびっしりと展開し、今日と変わらぬ風景がみられるようになる。この水田は百間川の外へも当然続いていくもので、藤原遺跡（註17）の調査などでも確認されている。百間川遺跡群の中では百間川原尾島遺跡が母村的な大規模集落に成長し、各住居跡からガラス小玉や銅鐸などの優秀な遺物を出土している。また、周溝をめぐらせた住居なども検出されている。原尾島遺跡はその後も長く、中心集落としての姿を保っていく。

弥生時代の最終末には、あたかも古墳時代の到来を招くかのように、大洪水が旭東平野を被

いつくす。百間川遺跡群内の各所で厚い洪水砂の堆積が確認されている。

古墳時代の象徴である前方後円墳は旭東平野の周縁の丘陵にも多く築造されている。なかでも、操山丘陵では、特殊器台形埴輪の出土が知られている網浜茶臼山古墳（全長74m）（註18）や操山109号墳（全長74m）（註19）に始まり、湊茶臼山古墳（全長150m）（註20）、そして金蔵山古墳（全長165m）（註21）と続く、首長墳の系譜がたどられ、まさに旭東平野に君臨した首長の奥津城にふさわしい。これに対して、三角縁神獣鏡11面を含む、総数13面の鏡を出土し、小林行雄氏の「同範鏡論」（註22）の中で重要な位置を占める、竜の口丘陵の独立墳、備前車塚古墳（註23）は、吉備の最古式古墳の中で例外的に特殊器台形埴輪をもたず、その孤立性が注意されていたが、最近では、堅穴式石室の使用石材からも、その特異性が指摘されている（註24）。古墳時代の集落遺跡は弥生時代後期からさらに増加するようである。方形の住居が一般的となり、やがて5世紀の末からはカマドが造りつけられるようになる。掘立柱建物の住居も登場するようで、それぞれの集落で定着の動きがみられる。百間川沢田遺跡では、多くの井戸が掘られ、1軒の住居が1基の井戸を所有することが考えられるという（註25）。

飛鳥・奈良時代の代表的な遺跡は寺院跡である。旭東平野でも賞田廃寺（註26）幡多廃寺（註27）・井寺廃寺の存在が知られている。このうち前の2廃寺は発掘調査が実施され、いずれも奈良時代の盛期には壇上積基壇で整備され、奈良三彩などの優秀な遺物を出土していることから、これらの寺院の檀那であった氏族（おそらく上道氏）が、中央政府ときわめて強い関係にあったことが知られる。また、この三ヶ寺の建築・修復時期を考えると補完関係にあることが指摘され（註28）、これら三ヶ寺それぞれの建立者である氏族が互いに強いきずなで結ばれていたことが想定されている。

奈良時代にはこの旭東平野に備前国府が置かれていたといわれている。しかし、その所在地には諸説があり（註29）、いまだ明らかにされていない。しかし、これを傍証するかのような資料として、百間川米田遺跡における倉庫群（註30）と百間川原尾島遺跡の人形、斎串等の出土した溝跡（註31）がある。前者には「上三宅」と墨書されたり、「官」の字を押した須恵器が出土して、官衙関連施設の可能性が強く、国府の物資積み出し港かともいわれている。後者は「祓」の儀式をとり行なった場所ではないかといわれ、国府の辺境という位置から、この地が選ばれたのではないかと考えている。

なお、奈良時代の文献資料として著名な『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』（天平19年(747年)）には、備前国の水田の記載があり、その中に「上道郡五十町 大邑良章原東山守江 西石間江南海 北山」（註32）という字が見られる。この「大邑良」を現在の「大多羅」に、「石間」を現在の「岩間」に比定する考えがある。この考えに立てば、百間川米田遺跡は、茶臼山の南麓付近にあった大安寺領と隣接していたこととなる。

平安時代以降の旭東平野の状況はあまり明確ではないが、百間川原尾島遺跡からは多量の輸入陶磁器を含む中世遺物が出土し、近年の発掘では規格された集落の一部が明らかになっている(註33)。また百間川米田遺跡では、すでに多量の畿内産瓦器が出土し、その活発な交流が知られている。

(岡本寛久)

註

- (註1) これらの歴史については『百間川小史』建設省・岡山県・岡山市 1986年に負うところが多い。
- (註2) 光野千春・沼野忠之・高橋達郎『岡山の地学』山陽新聞社 1982年
- (註3) 柳瀬昭彦他『奥土用・神庭谷製鉄遺跡』中国電力俣野川発電所埋蔵文化財発掘調査委員会 1986年
- (註4) 藤原健蔵・白神宏「岡山平野中部の沖積層と海水準変化」『瀬戸内海地域における完新世海水準変動と地形変化』藤原健蔵(広島大学文学部) 1986年
- (註5) 鎌木義昌「第1編 原始時代」『岡山市史・古代編』岡山市 1962年
- (註6) 高橋護・正岡睦夫他「雄町遺跡」『埋蔵文化財発掘調査報告』岡山県教育委員会 1972年
- (註7) 岡田博・浅倉秀昭・二宮治夫・中野雅美・内藤善史他『百間川沢田遺跡2・百間川長谷遺跡2』岡山県教育委員会 1985年
- (註8) 『岡山県埋蔵文化財報告18』岡山県教育委員会 1988年
- (註9) 『岡山県埋蔵文化財報告14』岡山県教育委員会 1984年
- (註10) 『所報 吉備』第2号 岡山県古代吉備文化財センター 1987年
- (註11) 『岡山県埋蔵文化財報告18』岡山県教育委員会 1988年  
『百間川の遺跡群』岡山県古代吉備文化財センター 1989年
- (註12) 河本清「百間川遺跡群 水田跡が語る稲作技術」『原像日本⑤発掘と復元』旺文社 1988年
- (註13) 出宮徳尚・根木修・間壁忠彦・間壁葎子・水内昌康『幡多庵寺発掘調査報告』岡山市遺跡調査団 1975年
- (註14) 正岡睦夫「岡山市乙多見における溝改修工事に伴う出土土器」『岡山県埋蔵文化財報告3』岡山県教育委員会 1973年
- (註15) 正岡睦夫・下澤公明・高畑知功・内藤善史『百間川兼基遺跡1・百間川今谷遺跡1』岡山県教育委員会 1982年
- (註16) 鎌木義昌「岡山県兼基遺跡」『日本農耕文化の生成』 1961年
- (註17) 高畑知功「Ⅹ. 発掘調査報告〔1〕 藤原遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告16』岡山県教育委員会 1986年
- (註18) 宇垣匡雅「竪穴式石室の研究—使用石材の分析を中心に—」『考古学研究』第34巻第1号・第2号

第1章 地理的・歴史的環境

考古学研究会 1987年

(註19) (註18) に同じ

(註20) 近藤義郎「湊茶臼山古墳」『岡山県史』第18巻 考古資料 岡山県1986年

(註21) 西谷真治・鎌木義昌『金蔵山古墳』倉敷考古館 1959年

(註22) 小林行雄『古墳時代の研究』青木書店 1961年

(註23) 近藤義郎・鎌木義昌「備前車塚古墳」『岡山県史』第18巻 考古資料 岡山県1986年

(註24) (註18) に同じ

(註25) 中野雅美「弥生・古墳時代初頭の井戸」『考古学と関連科学』鎌木義昌先生古希記念論文集刊行会  
1988年

(註26) 出宮徳尚・伊藤晃・水内昌康『賞田廃寺発掘調査報告』岡山県教育委員会 1971年

(註27) (註13) に同じ

(註28) (註13) に同じ

(註29) 高橋護「古地形からみた備前国府」『岡山県埋蔵文化財報告1』岡山県教育委員会 1971年

(註30) 井上弘・岡田博・二宮治夫・光永真一他『百間川当麻遺跡2』岡山県教育委員会 1982年

(註31) 『所報 吉備』第6号 岡山県古代吉備文化財センター 1989年

(註32) 『岡山県史』編年資料 岡山県 1988年 67ページ 147号文書

(註33) 『岡山県埋蔵文化財報告19』岡山県教育委員会 1989年

## 第2章 調査および報告書作成の経緯

### 第1節 発掘調査の契機とこれまでの成果

岡山平野を南北に貫流する旭川の東岸に所在する百間川遺跡は、国道2号線の百間川橋をはさんでA地点とB地点の2箇所が周知されていた。昭和43年、建設省が旭川放水路（百間川）の改修工事を計画していることを知った岡山県教育庁文化課は、建設省岡山工事事務所に対し、以下の要望を行った。第1に、改修工事計画予定地には文化財保護法に基づく、周知の遺跡である「百間川遺跡」が所在すること。第2に、事業者である建設省は、文化財保護法に基づく措置、特に昭和32年6月11日閣議了解になった「文化財保護に関する関係官庁間の連絡強化について」の趣旨にそって、事前に文化財の保護に遺漏のないように計らうこと、の大略二点である。これに対して建設省は、河川内の土地買収交渉及び工事施行の調査計画を進めている段階であるとの回答であった。

その後建設省は、計画にそって地元耕作者と土地買収交渉に入り、難航の末昭和49年に決着をみたことから、昭和50年10月には河川敷に工事用道路を施工するなどして、本格的工事に入る姿勢を示した。

岡山県教育委員会は、このような改修事業の状況をふまえ、直ちに協議を申し入れ、実状の聴取と、改修事業に伴う百間川遺跡の取扱いについて協議した。その結果、基本的には埋蔵文化財包蔵地の範囲が確定したならば、当該地は発掘調査が終了した後に改修工事を施工することで合意した。

昭和51年4月には、建設省中国地方建設局岡山河川工事事務所長名で、文化財保護法第57条の3に先立つ事前協議の文書が提出され、これに基づいて協議を重ねた。そして昭和51年9月1日付で、中国地方建設局長より確認調査の依頼文書が提出され、同年11月1日から確認調査を実施するに至った。

確認調査（第1次調査）は、低水路部分の遺跡の確認および古地形の復原と新田サイフォン部分の一部発掘調査で、昭和51年11月1日から昭和52年3月31日まで実施した。その結果、岡山市原尾島（第1微高地）、同沢田（第2微高地）、同兼基・今谷（第3微高地）の3箇所に微高地が広がり、そこに遺跡が所在することが判明した。

昭和52年からは、確認調査の成果を基に、建設省の工事計画にそって発掘調査を進め、現在も継続中である。この間、調査の進展とともに各微高地間にも遺跡の広がりが確認され、また

## 第2章 調査および報告書作成の経緯

確認調査では海ではないかと考えられていた岡山市米田（旧当麻遺跡）一帯も、遺跡であることが判明するなど、発掘調査対象範囲は著しく増加した。

百間川遺跡群における遺跡の形成は、縄文時代後期に始まる。沢田遺跡では多量の縄文後期土器とともに貝塚やドングリの貯蔵穴が発見されており、当時の食生活を知る貴重な資料となっている。また、同じ沢田遺跡で水稻農耕開始期の遺構・遺物も発見されており、このうち土器は「沢田式」と命名され、中部瀬戸内地域の基準資料となっている。

弥生時代には原尾島、沢田、兼基・今谷、米田の各遺跡に集落が認められるが、特に沢田遺跡の前期の環濠集落、今谷遺跡の中期の掘立柱建物群は注目される。さらにこれらの集落周辺に広がる前・中・後期の水田、とりわけ洪水砂で埋没した後期水田は延長3kmにもおよんでいる。

古墳時代も原尾島、沢田、兼基・今谷、米田の各遺跡に集落が形成されており、竪穴住居、掘立柱建物、井戸、溝などが発見されている。

古代では米田遺跡で企画的に配置された掘立柱建物や倉庫とともに「上三宅」と墨書された須恵器が発見されており、官衙的性格を有する遺跡と考えられる。

中世は米田遺跡で海浜に形成された建物群と、運河と推定される大溝などが発見されている。また原尾島遺跡でも溝で囲まれた建物群や土壙墓などが発見されており、中世村落を考えるうえで貴重な資料となっている。

（平井勝）

## 第2節 調査の体制

発掘調査は、岡山県教育委員会が建設省中国地方建設局から委託を受け、昭和52年度から実施しており、現在も継続している。調査開始から発掘調査の主管は岡山県教育庁文化課であるが、昭和59年11月から発掘調査そのものは岡山県古代吉備文化財センターが担当している。

今回報告する沢田遺跡は、昭和57・58・59・61・62・平成元年度に実施したものである。調査員は昭和57年度当初6名の3班体制であったが、昭和59年度からは8名4班になり、昭和60年度には再び6名3班、さらに昭和62年度からは3名1班体制となり、現在に至っている。

なお、発掘調査にあたっては、遺跡の保護・保存ならびに調査の専門的な指導および助言を得るため、岡山県遺跡保護調査団の推薦を受けた方々に「旭川放水路（百間川）河川改修工事に伴う埋蔵文化財保護対策委員会」の委員を委嘱している。

### 旭川放水路（百間川）河川改修工事に伴う埋蔵文化財保護対策委員会

池葉須藤樹	元岡山市犬島中学校校長	鎌木義昌	岡山理科大学教授 岡山県文化財保護審議会委員
近藤義郎	岡山大学名誉教授 岡山県文化財保護審議会委員	角田 茂	元岡山市岡輝中学校教諭
出宮徳尚	岡山市教育委員会文化課	水内昌康	元岡山市桑田中学校校長 岡山県文化財保護審議会委員

### 発掘調査

昭和57年（1982）度

#### 岡山県教育庁文化課

文化課長	早田憲治	課長代理	橋本泰夫
文化財主幹	高原健郎	埋蔵文化財係長	河本 清
主任	田中建治	主任	遠藤勇次
文化財保護主査	井上 弘（調査担当）	文化財保護主査	柳瀬昭彦（調査担当）
文化財保護主事	浅倉秀昭（調査担当）	文化財保護主事	平井 勝（調査担当）
文化財保護主事	古谷野寿郎（調査担当）	文化財保護主事	岡本寛久（調査担当）
主 事	石井 茂		

第2章 調査および報告書作成の経緯

昭和58年（1983）度

岡山県教育庁文化課

課長	早田憲治	課長代理	橋本泰夫
課長代理	吉本唯弘	文化財主幹	高原健郎
課長補佐	河本 清	主任	遠藤勇次
文化財保護主査	柳瀬昭彦（調査担当）	文化財保護主事	平井 勝（調査担当）
文化財保護主事	古谷野寿郎（調査担当）	文化財保護主事	江見正己（調査担当）
主 事	榎原充二	文化財保護主事	山本明雄（調査担当）
主 事	岩崎仁司（調査担当）		

昭和59年（1984）度（4月1日～10月30日）

岡山県教育庁文化課

課長	松元昭憲	参 事	橋本泰夫
課長代理	逸見英邦	課長代理	吉本唯弘
文化財主幹	佐々木清	課長補佐	河本 清
主任	古瀬 宏	主任	遠藤勇次
文化財保護主査	井上 弘（調査担当）	文化財保護主査	柳瀬昭彦（調査担当）
文化財保護主事	平井 勝（調査担当）	文化財保護主事	岡本寛久（調査担当）
文化財保護主事	江見正己（調査担当）	主 事	榎原充二
文化財保護主事	平井泰男（調査担当）	文化財保護主事	山本明雄（調査担当）
主 事	宇垣匡雅（調査担当）		

昭和59年（1984）度（11月1日～3月31日）

岡山県教育庁文化課

課長	松元昭憲	課長代理	逸見英邦
課長代理	吉本唯弘	課長補佐	河本 清
主任（兼）	遠藤勇次		

岡山県古代吉備文化財センター

所長（兼）	松元昭憲	次 長	橋本泰夫
総務課長	佐々木清	調査課長（兼）	河本 清
主任	古瀬 宏	主任	遠藤勇次
文化財保護主査	井上 弘（調査担当）	文化財保護主査	柳瀬昭彦（調査担当）

文化財保護主事	平井 勝 (調査担当)	文化財保護主事	岡本寛久 (調査担当)
文化財保護主事	江見正己 (調査担当)	主 事	榎原充二
文化財保護主事	平井泰男 (調査担当)	文化財保護主事	山本明雄 (調査担当)
主 事	宇垣匡雅 (調査担当)		

昭和61年(1986)度

岡山県古代吉備文化財センター

所 長	橋本泰夫	総務課長	佐々木清
調査課長	河本 清	主 査	遠藤勇次
文化財保護主査	柳瀬昭彦 (調査担当)	主 任	花本静夫
文化財保護主任	平井 勝 (調査担当)	文化財保護主任	岡本寛久 (調査担当)
主 事	片山淳司	主 事	宇垣匡雅 (調査担当)
主 事	高田恭一郎 (調査担当)	主 事	阿部泰久 (調査担当)

昭和62年(1987)度

岡山県古代吉備文化財センター

所 長	橋本泰夫	総務課長	佐々木清
調査第一課長	河本 清	総務主幹	藤本信康
文化財保護主査	柳瀬昭彦 (調査担当)	主 任	花本静夫
文化財保護主任	平井 勝 (調査担当)	主 任	岡田祥司
文化財保護主任	岡本寛久 (調査担当)	主 事	片山淳司
主 事	高田恭一郎 (調査担当)	主 事	阿部泰久 (調査担当)

平成元年(1989)度

岡山県古代吉備文化財センター

所 長	長瀬日出明	次長(調査第一課長事務取扱)	河本 清
総務課長	竹原成信	課長補佐兼総務係長	藤本信康
課長補佐兼第一係長	柳瀬昭彦 (調査担当)	主 任	岡田祥司
主 任	平松郁男	主 任	片山淳司
文化財保護主査	平井 勝 (調査担当)	文化財保護主査	藤田耕平 (調査担当)
文化財保護主事	高田恭一郎 (調査担当)	主 事	杉野 正
主 事	嶋田慶彦	主 事	大西治郎

## 第2章 調査および報告書作成の経緯

主 事 渡邊徹也

最後になりましたが、酷暑、厳寒の中、日々発掘調査に従事されました下記の方々に、厚くお礼申し上げます。

赤城久夫 尾松代吉 佐々木和勲 松本友彦 笹田誠 松本包房 岡崎洋子 伍賀芳子  
坂本由美子 西崎宏子 藤田光子 難波靖代 赤木輝吉 遠藤明雄 大森善太郎  
岡本汎 小西修 籠井英夫 石田芙美子 入江美代子 国塩志保里 中村初子  
服部勝得 兵藤きよ子 大前仁介 佐野雅男 新開清 永井巳之介 服部弘 松本三郎  
成本和繁 出原喜美子 新名定子 津島健子 原年子 原住子 明坂善美 加藤勢津子  
石浜常夫 国重正武 西郷安夫 藤原勝治 山田道夫 鈴木順一 岡本孝 楠見静子  
西崎知子 野崎千珠子 藤田球江 岡本喜代子 榊原末美 石田義人 橋本基  
富田孝行 内田賢二 吉永京市 山下誠 藤本順一 服部美登利 真重貞一 大窄暢毅  
岩上太郎 畑本敏男  
事務所  
田中純子 河上優子 木村仁美 光信恵子 長曾律子 青山洋子 坂本恵里香

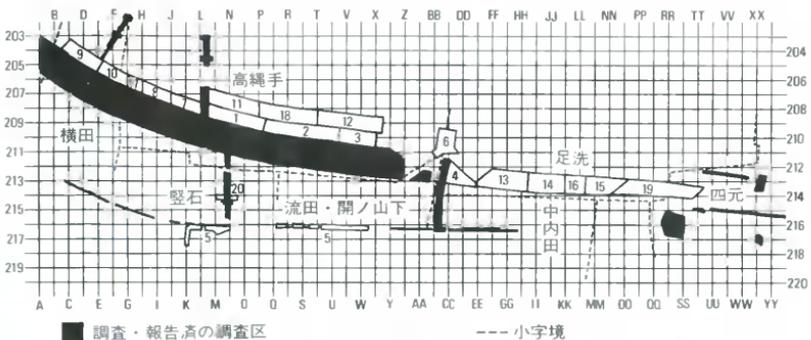
### 第3節 調査の経過

岡山市沢田の百間川沢田遺跡は、国道2号線の百間川橋下流側に所在する。発掘調査は昭和52年度から実施されており、昭和56年度までの成果についてはすでに報告書が刊行されている。今回報告するのは昭和57年度からであり、その対象面積は21210㎡である。

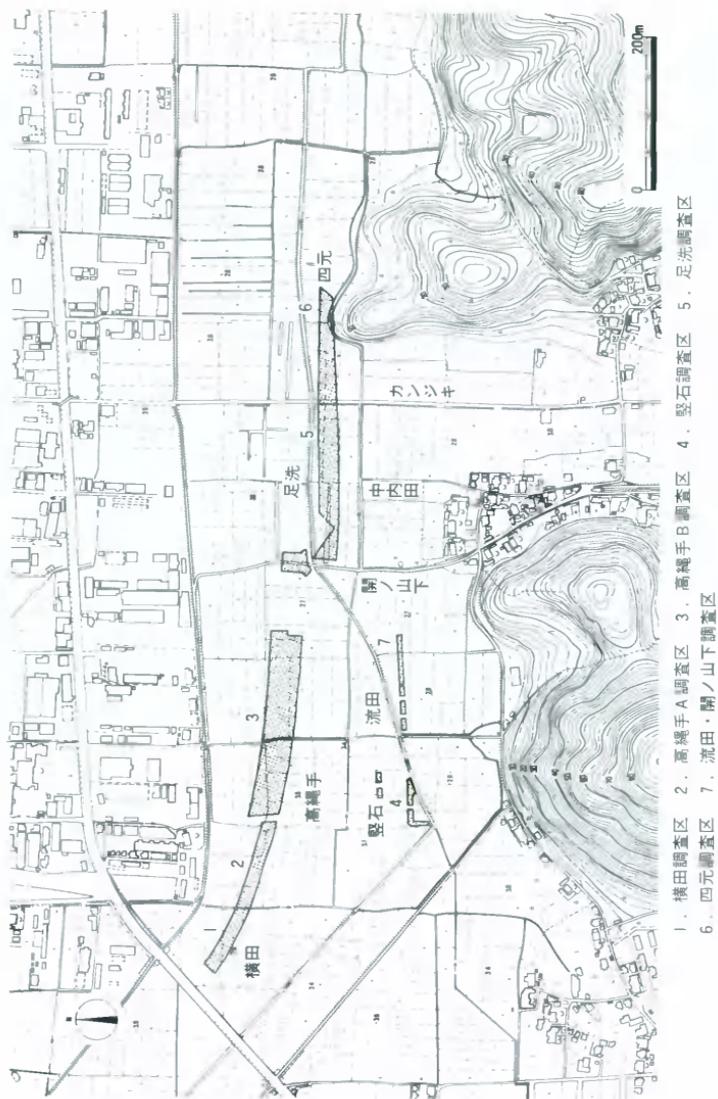
発掘調査は工事工程にそって進められるため、各調査区は細分されるが、基本的にはまず小字名によって横田、高縄手（A・B）、堅石、足洗、四元、流田・開ノ山下に大別し、ついで低水路掘削部（中央幅80m）、樋門、用水路などの工事名称を付し、さらに遺跡全体に組まれた20m方眼によって位置を示している（第3図）。

昭和57年度からの調査については表1の一覧表に示すとおりである。調査員1人1月あたりの処理面積は平均130㎡であるが、沢田遺跡の中心部は遺構密度が高く、100㎡前後となり、周辺の水田部では200㎡前後になる。

なお足洗調査区と四元調査区については、当初の確認調査で遺跡はないと判断され、低水路掘削部分の幅40mについてはすでに掘削が行われていた。しかし、昭和56年までの調査成果に加え、昭和57年から始まった調査の過程で、足洗調査区にも洪水砂埋没水田が延びる可能性が高まったため、低水路側の断面によって確認したところ水田層が認められたことから、調査対象範囲を広げた。さらに昭和61年には採山から派生した丘陵先端にあたる四元調査区にも確認の試掘溝を入れたところ、弥生時代の基盤層下で縄文時代後期の土器を発見し、ここも調査対象地となった。（平井勝）



第3図 グリッドの設定と調査区（調査区に数字は表1の番号である）

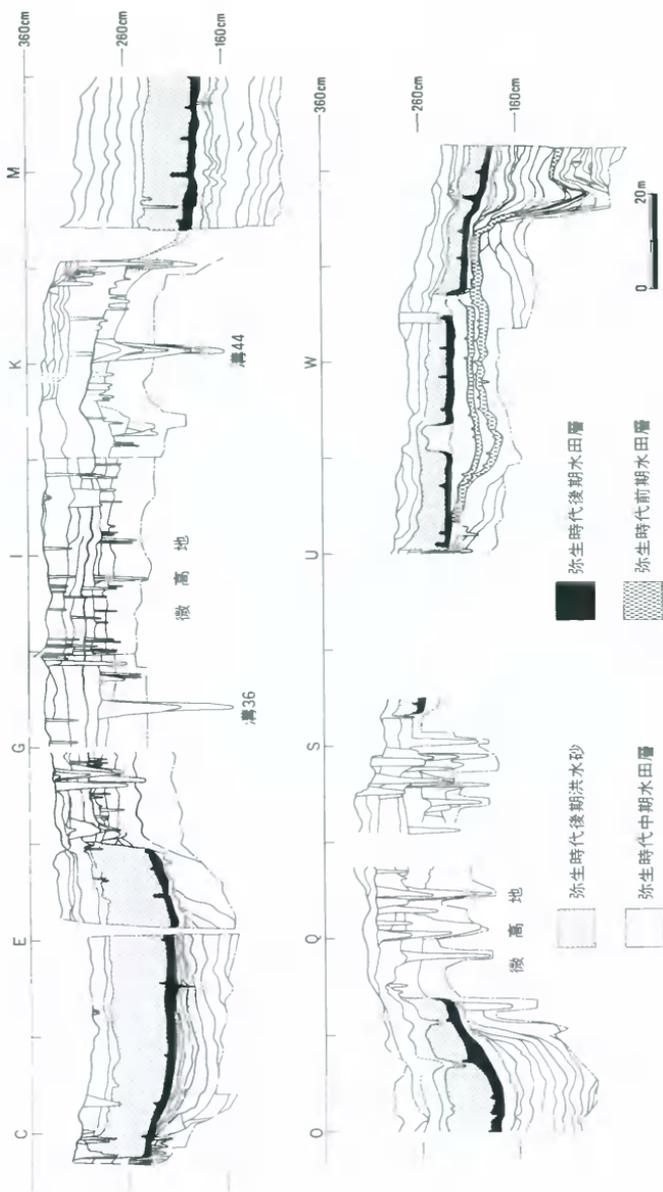


1. 横田調査区
2. 高縄手A調査区
3. 高縄手B調査区
4. 堅石調査区
5. 足洗調査区
6. 四元調査区
7. 流田・関ノ山下調査区

第4図 百間川沢田遺跡の調査区位置図 (S=1/7,500)

表1 沢田遺跡の調査一覧表

番号	調査地区名	担当者	面積	調査期間	遺物数
1	高縄手・低水路 207~209-L~P	柳瀬・岡本	1520㎡	1982・04・01~11・08	34
2	高縄手・低水路 208~210-P~U	平井・古谷野	2200㎡	1982・04・01~10・14	27
3	高縄手・低水路 209・210-U~W	井上・浅倉	1050㎡	1982・04・01~08・17	2
4	足洗・低水路 211~213-BB~DD	柳瀬・岡本	660㎡	1983・02・02~03・31	6
5	竪石、流田・右岸用水 216-J~W	井上・浅倉	600㎡	1982・08・18~11・11 1982・11・17~12・10	2
6	高縄手、足洗・低水路 209~211-AA~CC	井上・浅倉	530㎡	1983・02・01~03・31	1
6	高縄手、足洗・低水路 209~211-AA~CC	江見・山本	270㎡	1983・04・01~05・14	1
7	高縄手・低水路 206~208-J~L	平井・江見	840㎡	1985・02・09~1985・03・31	16
8	高縄手・低水路 206・207-H~I	井上・岡本	820㎡	1986・01・18~04・30	25
9	横田・低水路 203~205-B~E	岡本・阿部	910㎡	1986・04・01~06・05 08・15~10・25	22
10	横田・低水路 204~206-D~F	岡本・阿部	810㎡	1986・10・26~1987・03・31	16
11	高縄手・低水路 206~208-L~O	平井・高田	1470㎡	1986・04・01~06・05 08・07~12・18	19
12	高縄手・低水路 208・209-T~X	柳瀬・宇垣	1830㎡	1986・04・01~05・11 08・01~12・01 0987・01・17~03・31	8
13	足洗・低水路 212・213-DD~HH	岡本・阿部	1520㎡	1986・06・06~08・14	3
14	足洗・低水路 212・213-HH~JJ	平井・高田	1200㎡	1982・06・06~08・07	3
15	足洗・低水路 212・213-LL~NN	平井・高田	640㎡	1986・12・19~1987・02・28	4
16	足洗・低水路 212・213-KK~LL	柳瀬・宇垣	470㎡	1986・12・02~1987・01・16	2
17	高縄手・低水路 205・206-G	柳瀬・高田 阿部	400㎡	1987・10・08~1988・01・16	12
18	高縄手・低水路 207~209-P~S	柳瀬・高田 阿部	1720㎡	1987・10・23~1988・03・31	14
19	足洗、四元・低水路 213・214-NN~TT	平井・高田 阿部	1620㎡	1987・04・01~10・07	48
20	竪石・原尾島樋門 214-M~N	平井・藤田 高田	130㎡	1989・12・05~12・15	2
合		計	21210㎡		267箱



第5図 横田・高縄手調査区の北壁土層断面図

## 第4節 報告書の作成

報告書の作成は、担当者2名で平成3年（1991）度に行った。対象面積は21210㎡、出土土器の箱数は267箱で、これに石製品・土製品・金属器・木製品など751点加わる。

出土遺物の水洗・注記はすでに終了しており、4月からただちに復元作業を開始した。同時に土器以外の遺物についても1点1点の台帳の作成と実測にむけての選定作業を行った。土器の復元は数名の整理作業員であったが、目標とする12月までに267箱を処理するのは、かなり困難な工程であった。

実測も4月から開始したが、実測の必要な遺物数の把握は、復元作業の終了間近でないと明らかにならないため、とりあえず復元の終了した土器から順次行っていった。復元作業が進行した10月になって、実測必要量の推定が可能となり、土器約2880点、石器その他の遺物450点が見積られた。しかし、数人の実測要員が一年間に実測できる点数は限られており、土器であれば1人1月55点前後、石器であれば20点前後であるから、前述した遺物の点数は達成不可能であった。このため土器についてはさらに点数を削減せざるを得ず、最終的に土器1313点、石器その他の遺物は35点しか実測をすることができなかった。この遺物の削減選定にあたっては、極力遺跡の全体像を把握できるように勉めたが、住居跡、井戸の遺物が中心となり、溝、土壌、土器溜り、包含層の遺物については割愛したものが多い。

土器の実測は一部を残して1月中に終わり、2月からは石器及びその他の遺物の実測に取りかかった。

遺構・遺物のトレースおよび図の作成は専ら2名の担当者が行い、原稿の執筆については各調査担当者が分担した。しかし、発掘調査に出ている者が多いことや、遺構・遺物の量に比較して報告書作成期間が短いことから、年度末近くになっても残量が多く、完成にむけて多大な努力を強いられることとなった。

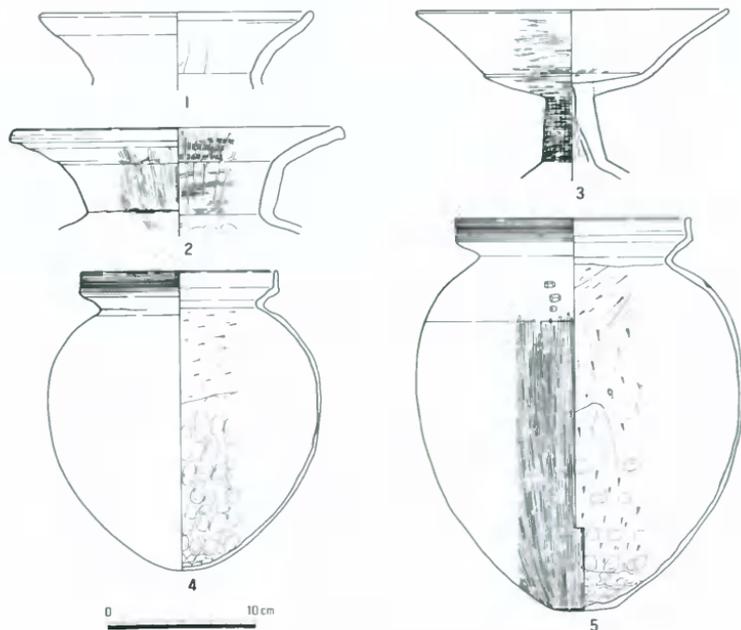
（平井勝）

## 第3章 調査の概要

### 第1節 横田調査区

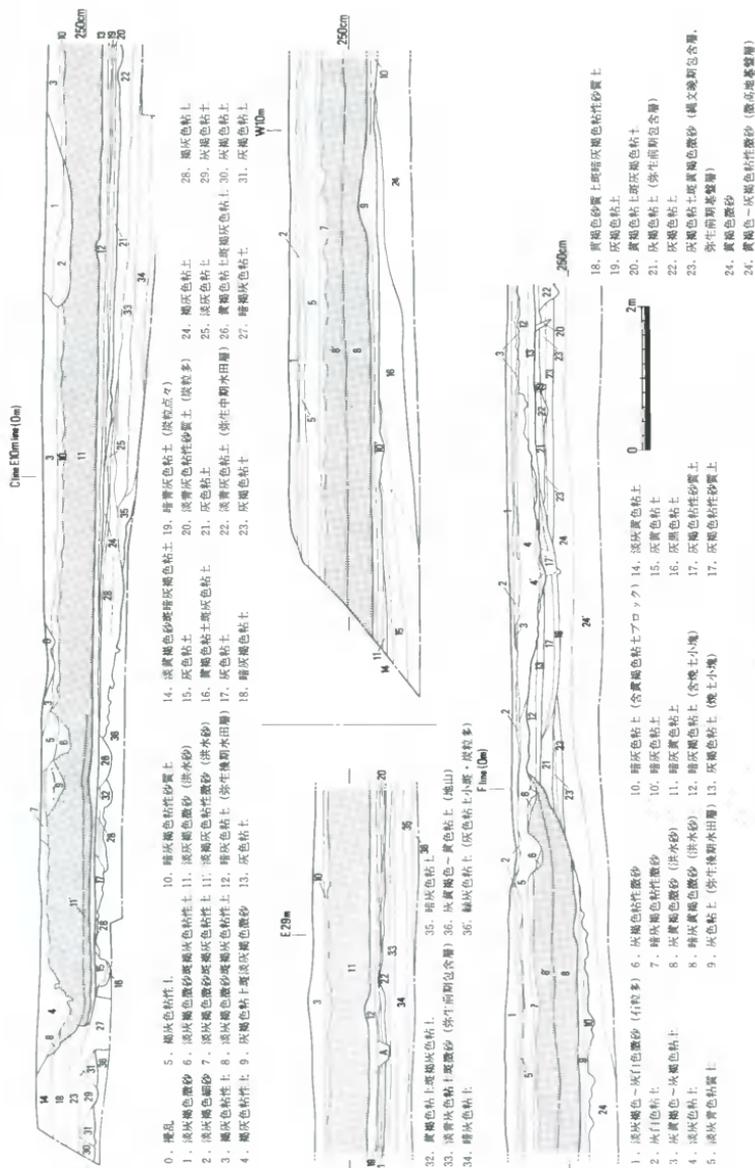
#### 1. 横田調査区の概要

横田調査区は百間川沢田遺跡の西端に位置し、Cライン付近からGラインまでの全長約100m、幅約20mの調査区である。この調査区の南に接して幅40mの低水路が掘削されているが、その工事に伴う発掘調査は昭和52年度から56年度まで実施され、報告書もすでに刊行されている。(『百間川沢田遺跡2・百間川長谷遺跡2 旭川放水路(百間川)改修工事に伴う発掘調査Ⅴ』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告59 以下『沢田2』と略す。)この調査区は百間川原尾島遺



第6図 微高地西斜面洪水砂層上面出土遺物

1. 横田調査区の概要



第7図 横田調査区北壁土層図 (S=1/80)

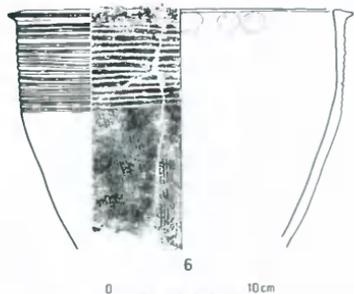
跡と百間川沢田遺跡の境界にあたるため、今回報告する遺構の一部には過去に百間川原尾島遺跡として報告された微高地上に位置するものがある。

当調査区の旧地形は調査の結果、東西の両側に微高地が形成されていて、その間は本来河道であったと考えられる低位部からなっていることが判明した。第7図は横田調査区の北壁の土層断面図である。ドットを入れた層は砂層で、弥生時代終末に発生したと考えられている洪水による堆積層である。百間川遺跡群での共時性を示す指標となる土層として重要である。第6図に示した土器は東側の微高地の斜面部分の洪水砂層上面から出土した(図版12)もので、第7図下段の7層から8層に埋没していた。土器の年代は百・古・Ⅰ期で、東側の微高地における洪水後の集落開始時期を示すと共に、洪水の時期がこの年代からそう隔たっていないことも暗示している。

この洪水砂層が低位部を埋めているが、その直下の粘土層は弥生時代後期の水田層であり、以下報告するように、碁盤目状の畦で区画された水田遺構が確認されている。当調査区では『沢田2』にもあったように、後期の水田層の下に4層の間層を挟んで弥生時代中期の水田層が拡がり、等高線と平行した方向に細長く伸びた水田区画が低位部全面で検出された。さらにこの下にも粘土層の堆積が続いているが、畦のような断面は認められず、明瞭な水田遺構は確認されていない。

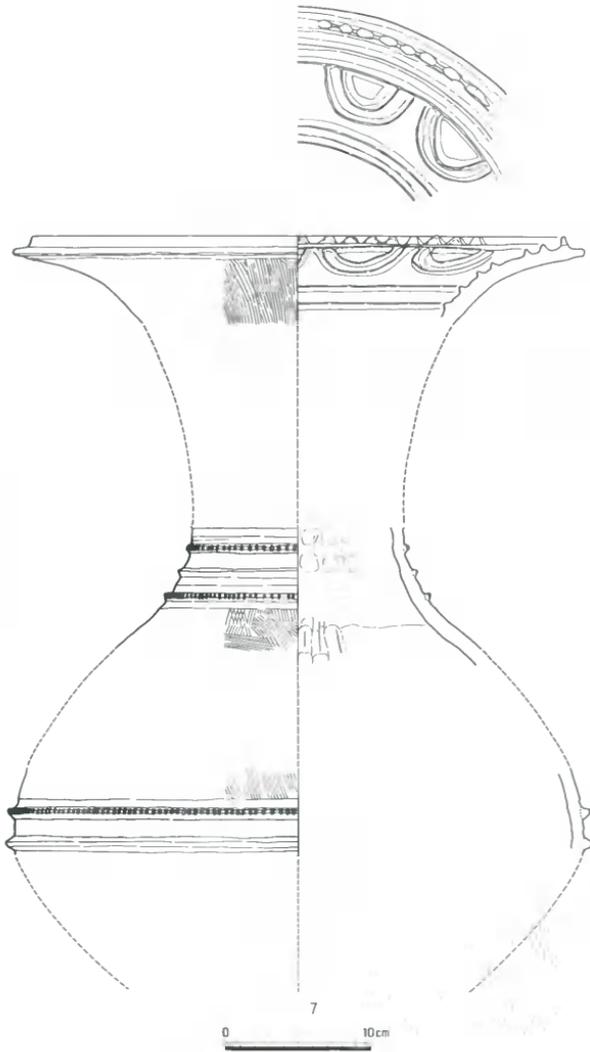
低位部では水田の他に、後期の水田層直下で直径70cm前後の柱穴状の小土壇が多く検出され、それらがあるまどまりをもって配置されていることから、なんらかの施設の痕跡であると判断された。その立地からすれば、水田耕作に関係したものとするのが妥当であろうが、用途不明である。

東西両側の微高地上では、縄文時代晩期から中近世までの遺構・遺物が出土しているが、時間的にはかなり不連続で、遺構・遺物のまったく存在しない時期もみられる。また、東と西の微高地で微妙に時期のずれる場合も認められる。



第8図 横田調査区弥生時代前期土壇出土遺物

西側の微高地は国道2号線百間川橋の北詰あたりに中心があるようで、大部分は百間川原尾島遺跡として扱われている。弥生時代前期の遺構にはいくつかの溝と土壇があった。これらの遺構は第7図上段の23層直下で検出される。また同33層はこの時期の斜面堆積層とみられ第9図の土器が出土している。各遺構から出土したり、第8図や第9図に示した土器はすべて百・前・Ⅲの年代を示し、この微高地はこの時期を盛期とするようであ



第9図 横田調査区弥生時代前期包含層出土遺物

る。

東側の微高地は、東に続く高縄手A調査区の全域にまで及び、弥生時代前期には環濠集落が形成され、6軒の竪穴住居をはじめとして多くの土壇や柱穴等が検出されたことから、当期の中心集落がここに占地していたと考えられる。出土遺物から百・前・Ⅱと百・前・Ⅲの二時期にわたって遺構が存在したことが知られ、さらに百・中・Ⅰから百・中・Ⅱの遺構・遺物も若干みられる。ちなみに、環濠集落の時期は百・前・Ⅱと考えられる。

なお、この微高地では縄文時代晩期の遺構・遺物も検出されていて、百間川遺跡群のなかでも当期の遺物の豊富な微高地として注目される。

横田調査区に含まれる範囲は環濠の外側にあたり、弥生時代前期には大形の土壇3基と溝が7条検出され、他は柱穴状の小土壇が散在するにすぎない。

横田調査区における弥生時代後期の遺構は少なく、前述の低位部における柱穴群の他には、微高地の端部から傾斜面にかけて溝が10条みられる程度にすぎない。

古墳時代に入ると、東側の微高地では再び集落が形成され、多くの竪穴住居が建てられることとなる。今回報告の横田調査区でも3軒の竪穴住居が検出され、掘立柱建物も3棟みられるなど、遺構の密集がみられる。また、これらの遺構と切り合う形で溝が数条走っている。集落は古墳時代前半が中心で、溝は6世紀代の須恵器を含み、古墳時代後半と考えられる。

これに反して西側の微高地では、検出面積の狭いこともあるが、古墳時代後半の溝が2条と土壇2基を検出したにすぎない。ただ、古墳時代前期の土器溜りが微高地斜面に形成されている。

その後、横田調査区で遺構が検出されるのは中世に入ってからで、柵1列と溝状の遺構と土壇がわずかにみられるのみで、集落内に位置する様相は認められなくなっている。

(岡本寛久)

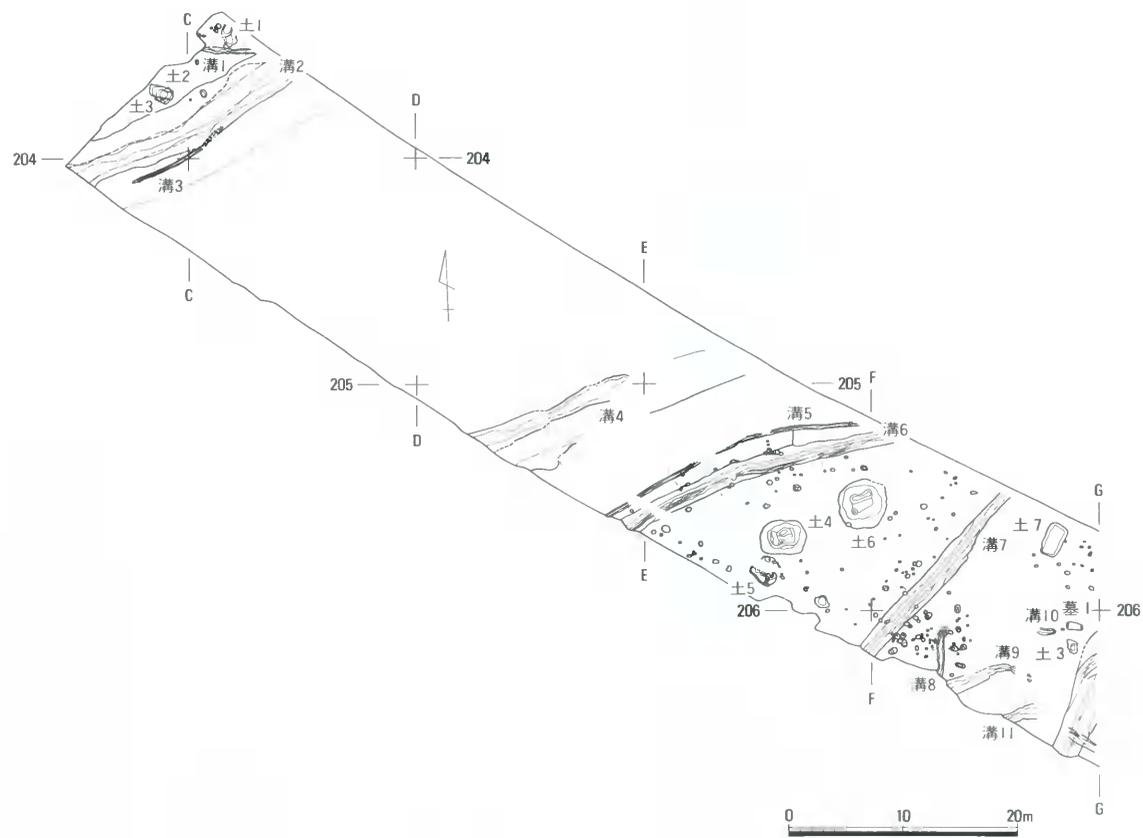
## 2. 弥生時代前期の遺構・遺物

### (1) 土壇

#### 土壇1 (第11・12図、図版4)

203C区の北東部に位置する。一部は調査区外にあり、全形は把握できなかった。検出時は楕円形の土壇と考えたが、発掘してみると底部は二段になり、土層観察の結果から二個の土壇が重複したものであることが判った。ただ、その前後関係は不明であるが、出土土器の年代はいずれも百・前・Ⅲ期であり、時間的な隔りは小さい。

北側の深い土壇は、検出部分で長さ120cm、幅84cm、深さ28cmを測り、埋土には炭や焼土が多く含まれ、とくに下層では炭の薄層が何層も認められた。ゴミ穴として一定期間利用されていた

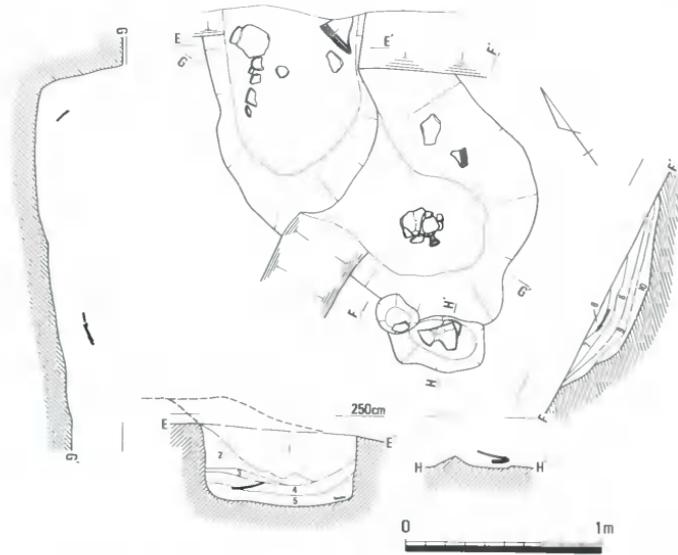


第10図 横田調査区の弥生時代前期遺構全体図 (S=1/500)

たものと考えられる。南側の土壌は残存部分で、長さ143cm、幅115cmあり、深さ20cmとやや浅い。埋土にはやはり炭や焼土が多く含まれていることから、同様の機能が考えられる。一方が埋没後、他方が近接して掘穿されたものであろう。第12図の土器のうち、8・10・12は北側土壌、9・11・13は南側土壌出土である。(岡本)

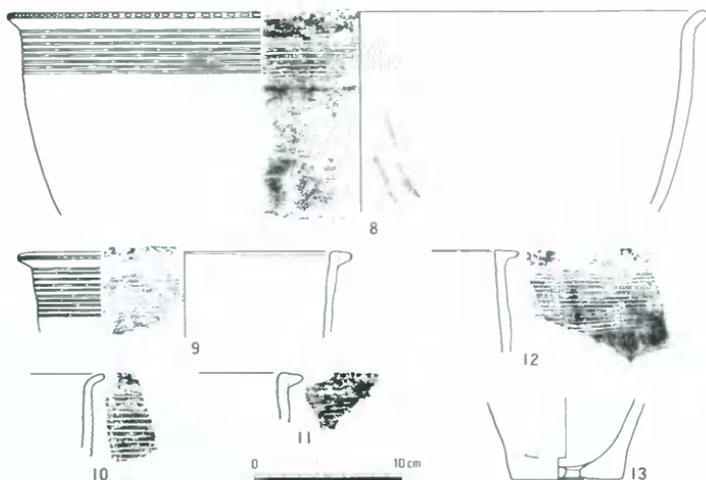
#### 土壌2 (第13・14図)

203B区の東半に位置し、長方形の平面形をもつ土壌である。検出面で長軸210cm、短軸103cmを測るが、底部は二段となり、南東部分が一段落ち込む。浅いところは深さ12cm、一段深いところは深さ31cmである。底部は平坦ではなく、少し凹凸をもっている。埋土のうち、第1層は弥生時代後期の溝の埋土である可能性が高く、第2層と第3層はよく類似している。第2層から第4層まで灰黄色粘土の小塊を含んでいることから、一時に埋められたと考えられる。出土した土器の年代から百・前・Ⅲ期の遺構とされる。(岡本)

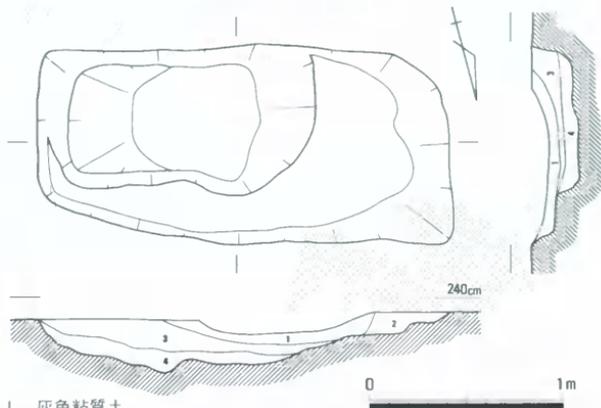


1. 暗茶褐色粘質土 (炭・焼土・土器片多)
2. 茶褐色粘質土 (炭・焼土・土器片)
3. 暗茶褐色粘質土 (焼土・土器片・炭薄層)
4. 灰茶褐色粘質土 ( // )
5. 茶褐色粘質土 (黄褐色粘土ブロック・炭薄層多)
6. 灰褐色粘質土 (炭・焼土)
7. // (炭・焼土多・層下面炭)
8. // (炭・焼土少)
9. 灰茶褐色粘質土 (黄褐色粘土ブロック・炭・焼土多・層下面炭)
10. 灰茶褐色粘質土 (炭・焼土少)

第11図 土壌1



第12図 土壙1 出土遺物

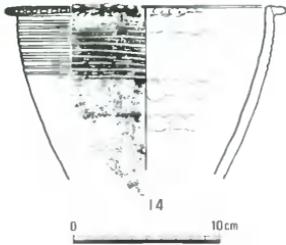


1. 灰色粘質土
2. 灰褐色粘質土（灰黄色粘土ブロック）
3. 灰褐色粘質土（灰黄色粘土ブロック）
4. 暗灰褐色粘質土（灰黄色粘土ブロック多）

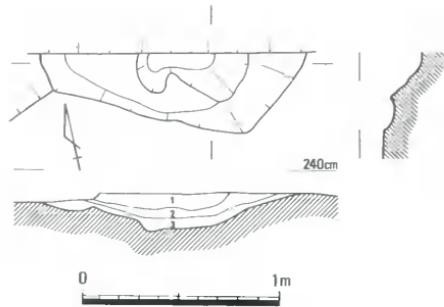
第13図 土壙2

土壙3（第15図）

土壙2によって大きく破壊されている。残存部分で、長径136cm、短径42cm、深さ20cmを測る。中央部分が一段深く落ち込む。埋土は3層であるが、第2・3層では粘質砂の小塊が多く含まれ、土壙2の埋土と類似している。出土土器はⅡ・前・Ⅲのようである。（岡本）

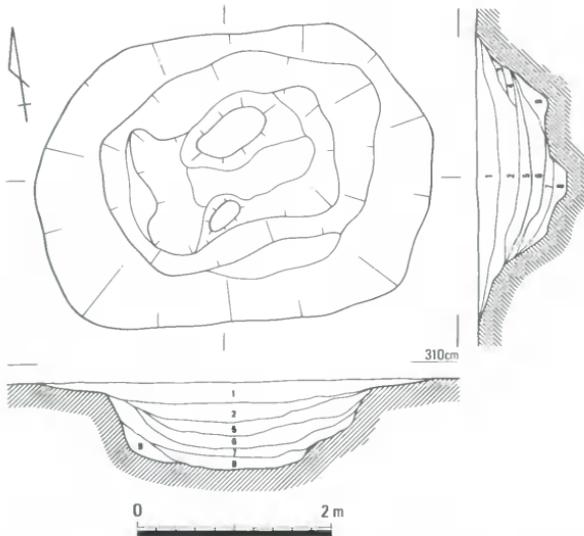


第14図 土壙2 出土遺物



1. 灰茶褐色粘質土
2. 灰褐色粘質土（黄褐色粘質砂ブロック多）
3. 暗灰褐色粘質土（灰黄褐色粘質砂ブロック）

第15図 土壙3



- |                       |                            |
|-----------------------|----------------------------|
| 1. 黄褐色粘質土             | 6. 黄褐色粘質土（黄褐色土ブロック・炭・焼土若干） |
| 2. 明黄褐色粘質土（黄褐色土ブロック多） | 7. 灰褐色粘土（炭・焼土若干）           |
| 3. 黄褐色粘質土（黄褐色土ブロック）   | 8. 灰色粘土                    |
| 4. 明黄褐色粘質土            | 9. 灰黄褐色粘質土                 |
| 5. 暗褐灰色粘質土（黄褐色土ブロック）  |                            |

第16図 土壙4（S=1/60）

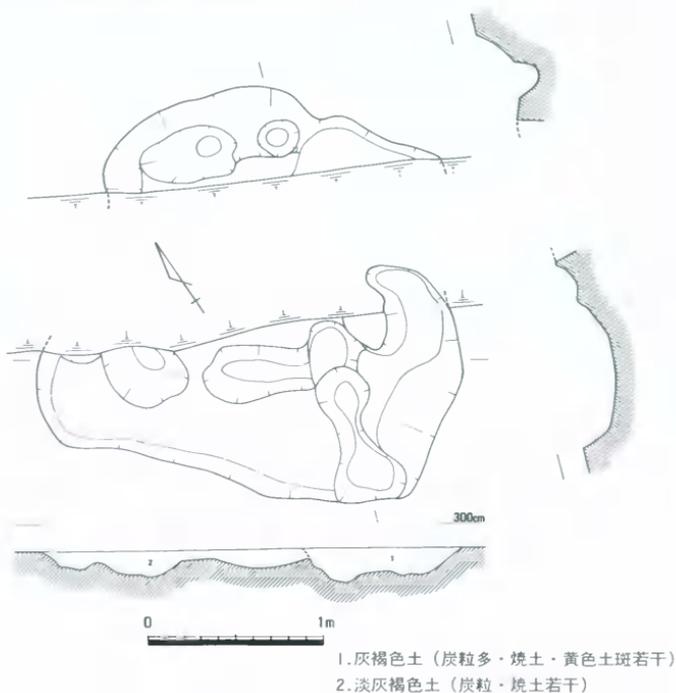
土壌4 (第16図、図版5)

205E区の南半にある大形の土壌である。平面形はやや角張った楕円形で、底部付近では長方形に近くなる。検出面で長径414cm、短径300cm、底面では長径132cm、短径42cmを測る。壙壁の傾斜は深さ10~15cmまでは緩く、そこから急角度となる。この部分での土壌の大きさは長径302cm、短径200cm程である。土壌の深さは92cmで、底面は平坦に近いが南と北に突出した部分が存在する。埋土は細かく分層されるが、炭や粘土を含む層はほとんどみられず、地山の黄褐色土の小塊を含む層が多い。各層の断面形はレンズ状のものがほとんどで、人為的な瞬間の埋没状況は呈していない。

出土遺物はきわめて少なく、また小片のため、弥生時代前期のものとは判断できない。用途についても類例に乏しく、不明と言わざるをえない。 (岡本)

土壌5 (第17図)

205E区にあり、土壌4の南に近接している。中央部は旧トレンチにより破壊されている。不

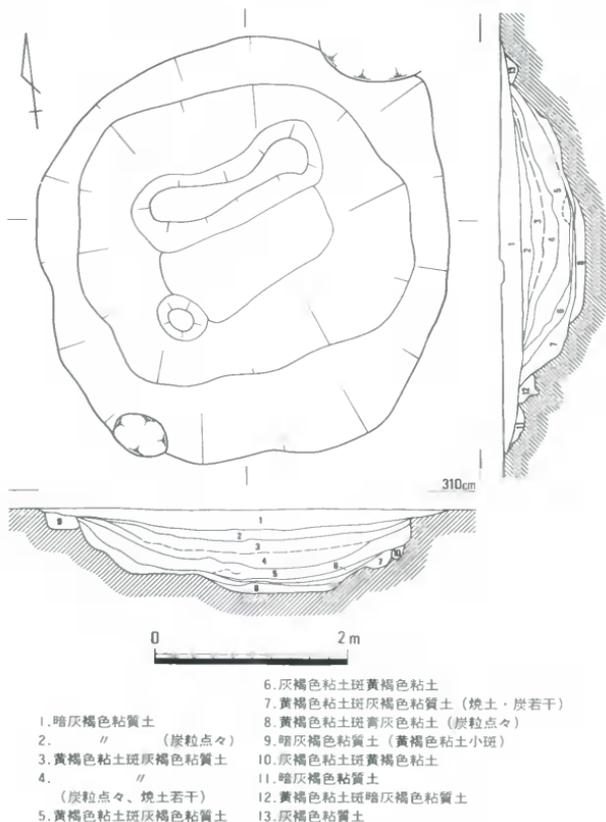


第17図 土壌5

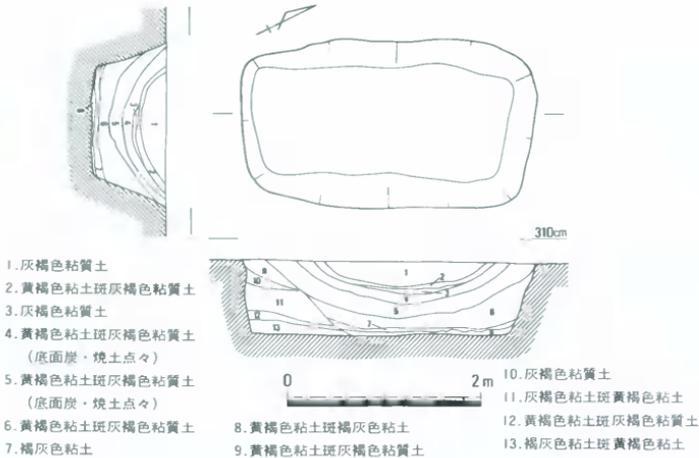
整形な土壌で、底面もきわめて凹凸に富み、深い小穴が不規則に認められる。目的を持って人為的に掘られた土壌とは考えにくい。埋土には炭粒を多く含み、焼土も若干みられる。上層観察では、土壌の重複の可能性もある。長径276cm、短径270cm、深さは30cm程度を測る。出土遺物はないが、上層関係より弥生時代前期と推定される。 (岡本)

#### 土壌6 (第18図、図版5)

205E区と206F区の境界部分で検出された大形の土壌で、西に3m離れて位置する土壌4と  
きわめてよく類似している。検出面で長径488cm、短径444cmを測るが、深さ10cmまでは緩やか  
であった壁壁がそこから急角度で下がり、その肩部では長径350cm、短径298cmとなる。土壌の  
深さは88cmである。底面はほぼ平坦で長方形に近く、長径164cm、短径84cmとなる。この土壌で



第18図 土壌6 (S=1/60)



第19図 土壙7 (S=1/60)

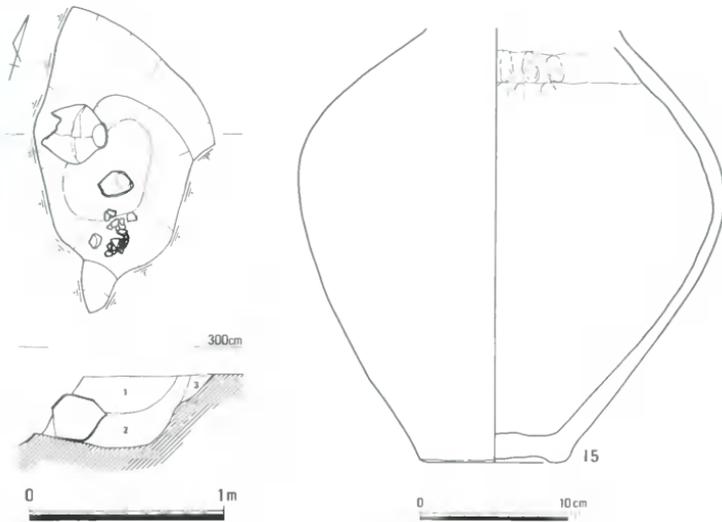
も底面の北側に隆起部分があり、南西隅にも突出部がつく。埋土は細かく分層されるが、中央部分が厚く、周縁で薄くなるレンズ状の堆積を示すものが多い。炭や焼土は若干含まれるのみだが、ほとんどの層が地山の黄褐色粘土の小塊を含んでいる。底部の8層では炭粒が点々と認められた。上層観察では一瞬の埋没は考えられず、徐々に埋まっていったものと思われる。規模や形態の酷似から、土壙4と同じ用途をもって作られたことは確かであるが、それが何であるかは判然としない。出土遺物はきわめて少ないが、百・前・Ⅲの土器片が出土している。

(岡本)

土壙7 (第19図、図版6)

205F区東半に位置する長方形の大形土壙である。長軸305cm、短軸177cm、深さは78cmを測る。底面も長方形で、長軸269cm、短軸122cmあり、きれいな平坦面となっている。土壙の断面は台形を呈する。埋土は多くの層に分けられるが、1層～8層までと9層～13層までの2群の間で不連続面が認められる。1層から5層までは壙内へ落ち込んだような堆積状況を呈している。地山の黄褐色粘土の小塊を含む層がほとんどであるが、4層と5層では層の底面近くに炭や焼土が点々と認められる。出土遺物はわずかの土器片とサヌカイト片であるが、土器の年代は百・前・Ⅰか百・前・Ⅱと考えられる。この土壙の用途についてははっきりしないが、その形状から明確な意図があったことは確かと考えられ、何か腐朽するようなものを埋めていた可能性も土層状況から考慮される。

(岡本)



1. 灰黄褐色粘質土
2. 褐灰色粘質土
3. 灰黄褐色粘質土

第20図 土坑8・出土遺物

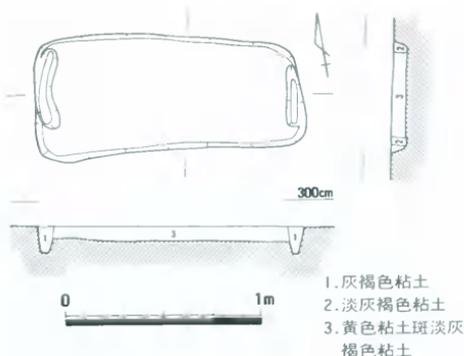
## 土坑8 (第20図、図版105)

206G区に位置するが、新しい時代の遺構によって大半を破壊されている。現存部分で長径159cm、短径93cm、深さ37cmを測る。坑壁の傾斜角度は上方は緩く、下方は急となる。底面はかなり丸味をもっている。埋土のうち2層には黄灰色土の小塊が包含されている。底面に接して、口頸部を欠損した大形の壺が、底部と遊離した状態で出土した。(岡本)

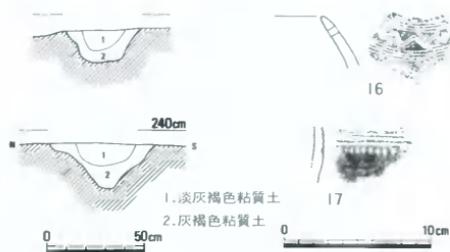
## (2) 土坑墓

## 土坑墓1 (第21図、図版6)

206F区の北東隅で検出された。長軸138cm、短軸65cmを測る長方形の平面形をもち、長軸方向は東西をとる。西辺側が東辺側より10cm程度広くなっている。深さはわずか8cmしか残存していなかったが、底面では東西の短辺側で木口板を埋めた穴が検出され、土層断面でも厚さ5~8cmの木棺の板痕跡が確認された。木口板の穴は西辺で長さ42cm、東辺は32cmあり、深さは底面より8cm下がっていた。側板は木口板を挟むような形で坑底面上に据えられたようで、底板は痕跡を認めなかった。出土遺物はなかったが、土層関係から弥生時代前期の遺構と考えられる。(岡本)



第21図 土壙墓1



第22図 溝1・出土遺物

(3) 溝

溝1 (第22図)

203C区の北半で検出された溝で、幅56cm、深さ22cmを測る。4.8m分を検出したが、ほぼ直線状で東西方向をとる。底部の高さから、水は東から西へ流れていたと推定される。断面形は上流側が台形で、下流側はV字形に近い。埋土は二層に分けたが、それほど大きな相違は認められない。出土遺物は少ないが、百・前・Ⅲの無頸壺や甕の破片が出土している。(岡本)

溝2 (第23図)

203B区から203C区にかけて位置する。微高地の裾部にあたり、幅4.5mと広いわりには深さは30cmとごく浅いため、地形のたわみのような印象を受ける。しかし、土層断面をみると、南側の壁の立ち上がりは明瞭で、底には灰褐色粘土の堆積があり、溝としての

機能が充分にあったと考えられる。溝底の高さは東端と西端がほぼ等しく、水流の方向は断定できない。しかし、既刊の『百間川原尾島遺跡2』で報告された溝164が、同一の溝と考えられ、それは東から西へ水が流れていたとされる。(岡本)

溝3 (第24図)

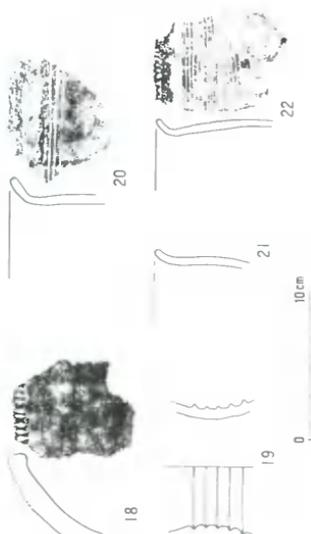
203C区から204B区にかけて検出した溝状の遺構である。9.5m分が残存している。幅35cm、深さは7cmにすぎない。微高地の傾斜面の始まり付近に位置し、溝としての機能は疑問である。遺物の出土はみられなかったが、層位的には溝2より下層に位置している。(岡本)

溝4 (第25図、岡版7)

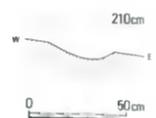
205D区にあり、『沢田2』の溝2と同一の遺構である。微高地の傾斜面の下端部分にあり、わずかに溝状の凹みが、微高地に沿うように認められるにすぎない。図上では幅2mを測る。第25図6層には暗灰色粘土の小塊が多く含まれているが、これが溝としての機能による可



- 1. 褐灰色粘土
- 2. 褐灰色粘土 (溝14)
- 3. 褐灰色粘土
- 4. 灰色粘土
- 5. 褐灰色粘土 (炭粒多)
- 6. 灰褐色粘土
- 7. 淡褐灰色粘土 (弥生後期水田層)
- 8. 褐灰色粘土
- 9. 淡灰褐色粘性砂質土
- 10. 淡黄褐色粘土



第23図 溝2・出土遺物



第24図 溝3

能性がある。5層や6層からは百・前・Ⅱの上器が出土している。 (岡本)

溝5 (第26図、図版7)

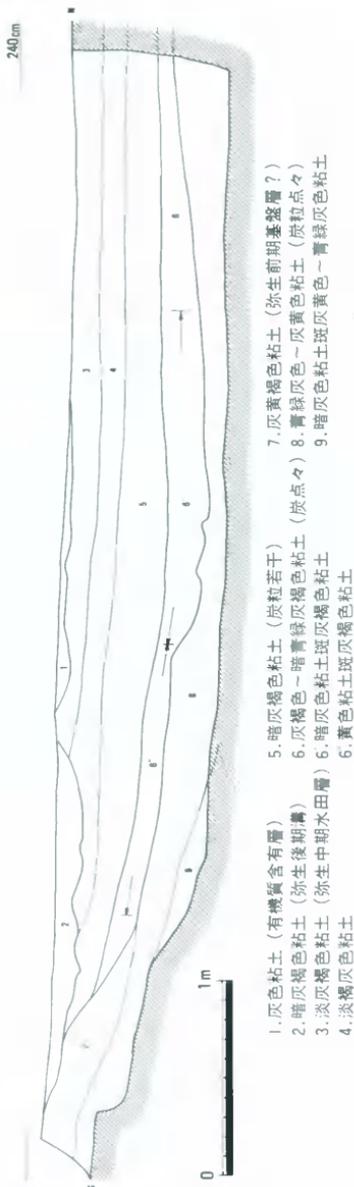
205E区にあり、微高地の端部に沿うように走る。弥生時代後期の水田の造成に伴って一部を削平されている。幅37cm、深さ14cmで、断面は碗形を呈している。遺物は出土していないが、次に述べる溝6と平行していることから、同時期に存在していたと考えられる。『沢田2』の溝7がこれにあたる。(岡本)

溝6 (第26図、図版7)

205E区の中央付近を、溝5と平行して走る幅の広い溝である。水は東から西へ流れていたと考えられる。幅1.8m、深さ32cmを測る。断面観察の結果等から、溝6には、幅45cm、深さ27cmの小さな溝が重複していることが判明した。この溝は溝6よりは新しいものであったが、その

走行が溝6とほとんど同じであったため、発掘中には別の溝として識別できなかった。埋土は3層認められた。第1層には焼土が含まれていた。第26図に示した土器が溝6出土のものである。百・前・Ⅲと考えられる。『沢田2』の溝3と同一の遺構である。

(岡本)



- 1. 灰黄色粘土 (有機質含有層)
- 2. 暗灰褐色粘土 (弥生後期溝)
- 3. 暗灰褐色粘土 (弥生中期水田層)
- 4. 淡褐色粘土
- 5. 暗灰褐色粘土 (炭粒若干)
- 6. 灰褐色～暗青緑灰褐色粘土 (炭粒点々)
- 7. 暗青緑灰褐色粘土 (炭粒点々)
- 8. 暗青緑灰褐色粘土 (炭粒点々)
- 9. 暗青緑灰褐色粘土 (炭粒点々)

第25図 溝4

溝7 (第27図、図版8・105)

北東から南西に向かって直線的に伸びる溝である。205F区から206F区にかけて位置する。北端部分は現代用水路により一部削平されている。幅210cm、深さは51cmあり、断面形は、上方の開いたV字形となる。溝壁の途中に肩をもち、そこから下は角度がきつくなる。流れの方向は北東から南西である。『沢田2』の溝5がこれと同一である。出土遺物の年代は百・前・Ⅲを示す。埋土は2層で、上層は不均質な土、下層は地山の黄褐色粘土小塊を含む。(岡本)

溝8 (第28図)

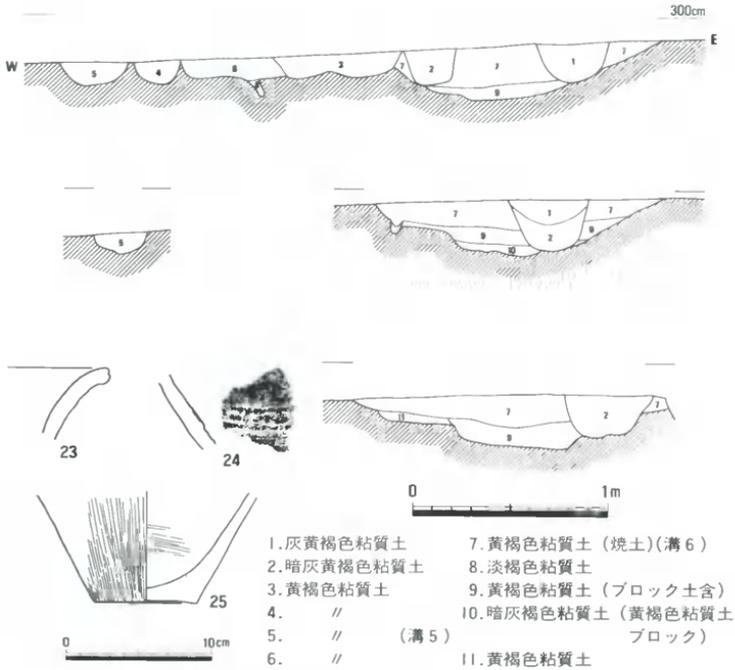
206F区の西半で検出した溝状の遺構である。『沢田2』では、これに続く遺構はみられない。検出長4.2mで、幅68cm、深さ13cmを測る。断面は皿状を呈し、底面は平坦に近い。埋土は2層だが、レンズ状の均整な堆積を示さない。百・前・Ⅲの土器が出土している。(岡本)

溝9 (第29図)

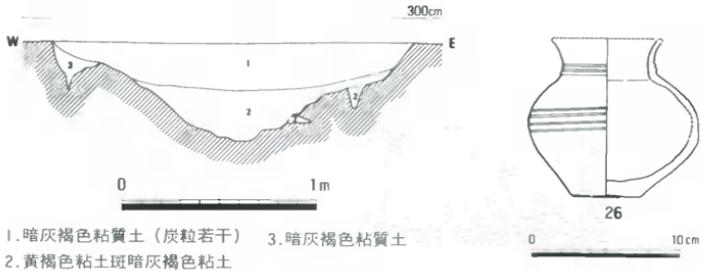
206F区の中央付近に位置する。近・現代用水路による破壊を大きく受けていたが、『沢田2』の溝6の続きで、さらに東へ延び、後述する溝3と接続する可能性が高い。幅136cm、深さ23cmで、断面は皿状を呈する。百・前・Ⅲ期の土器が出土していて、この年代の遺構と考えられる。埋土は1層である。(岡本)

溝10 (第30図)

206F区の北東部で検出された溝状の遺構である。現代用水路によって破壊を受けている。残存長172cm、幅56cm、深さ14cmを測る。直線的ではなく、湾曲している。底部の高さは東西端ではほぼ等しい。埋土は1層である。弥生時代前期の壺底部



第26図 溝5・6・溝6出土遺物

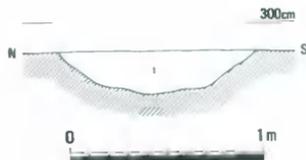


第27図 溝7・出土遺物



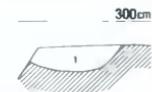
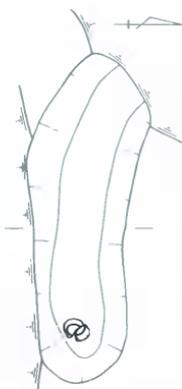
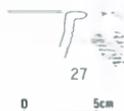
1. 褐灰色粘質土  
2. 灰黄褐色粘質土

第28図 溝8



1. 灰黄褐色粘質土

第29図 溝9・出土遺物



1. 淡灰黄褐色粘質土

第30図 溝10・出土遺物



が出土している。(岡本)

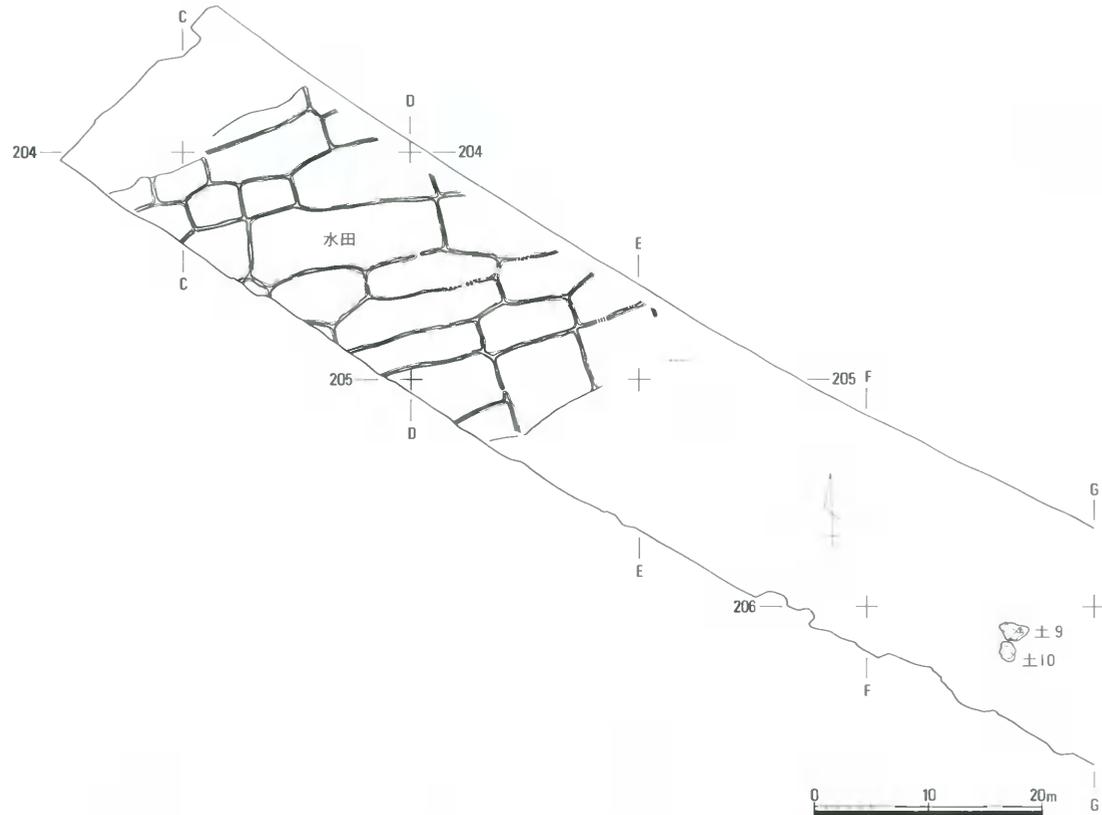
溝11 (第32図)

206 F区から207 I区まで70mにわたって検出された。『沢田2』の溝9と同一の溝であり、両方を合わせると全長120mとなる。溝底の高度から流水は東から西へ向かっていたと推定される。この溝の東端は溝41と接して終わっているが、土

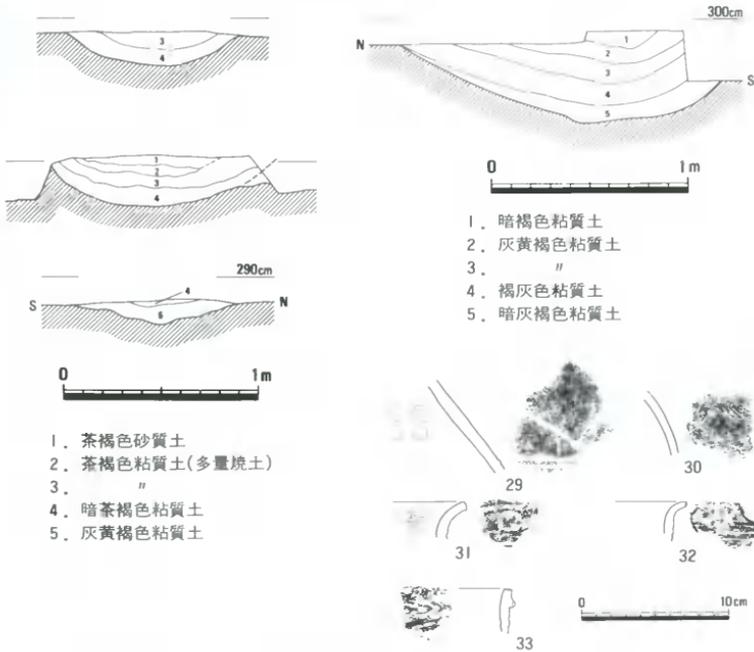
層断面観察(第148図)では、溝41が溝11を切っていると判断された。しかし、溝41の西肩が溝11との接合付近では西へ突出していることから、溝41と溝11が連続した溝として、同時に機能していたこともあったと考えられる。溝11は大部分が幅60~95cm、深さ6~13cmを測るが、206 F区では幅を広げて136~166cmとなり、深さは40cmと急に深くなっている。この部分では、環濠の溝36と交叉しているが、溝36の埋没後に溝11が掘られたと観察された。溝の断面は皿状を呈しているが、206 F区(第32図右)では中央底部が幅30cmで一段落ち込む。第32図左の断面は西から順に図示しているが、東端の断面でも中央底部の凹みが認められる。埋土は5層に分けられるが、上半で多量に焼土や炭を含む層が存在する。

出土遺物にはいくらかの土器片と石鏃3個がある。土器の年代は百・前・Ⅱであるが、溝36との切り合い関係や溝41との関連などから判断して、溝11の時期は百・前・Ⅲと考えられる。

(岡本)



第31図 横田調査区の弥生時代中期遺構全体図 (S=1/500)



第32図 溝11・出土遺物

### 3. 弥生時代中期の遺構・遺物

#### (1) 水田

原尾島側の微高地と沢田側の微高地の間にある旧河道と考えられる低位部全面で検出された。幅18m、長さ40mの範囲に及ぶ。『沢田2』では下層水田として報告され、さらに南側へ幅20m分が検出されている。

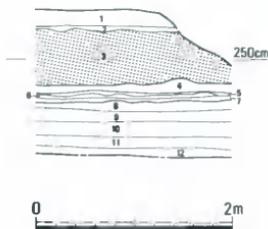
田面は幅35～40cm、高さ3～5cmの畦で細かく仕切られているが、それぞれの区画の面積には大きな差があり、きわめて不規則な印象を受ける。たとえば、中央付近のもっとも広い区画は長さ16.4m、幅5.6mで約80㎡あるのに対し、その北西隣の小さな区画は長さ4.4m、幅2.6mで約10.5㎡に過ぎない。しかし、一見不規則にみえる区画も、東西方向の畦は屈折しながらも連続していて、『沢田2』の下層水田の東西畦とも連続する。この水田の検出された低位部はかつて河道があったと考えられ、中央付近がもっとも低くなっている。検出時で、東西の肩部と中央部との高さには27cmの差があった。したがって、東西方向は等高線と平行する方向と言

### 第3章 第1節 横田調査区

える。このような地形の所で水田を作るために、等高線に平行した方向で畦を設けて段々の水田をつくり、さらに南北方向の畦で任意に区画していったものと推定される。このために、水田区画が東西方向に細長い形状を呈することになったのであろう。ちなみに、段の幅は3～5mあり、一番低い区画までに4ないし5段あるため、検出時に5cmという畦の高さは、一区画内全面に水を張ることのできるぎりぎりの高さと言えそうである。畦を切って水を流す「水口」が3ヶ所認められたが、全区画にはなく、基本的には畦を越えて下位の水田に水を溢れめる方法が取られていたのではないかと考えられる。なお、畦は水田層の淡青灰色粘土層を盛り上げたようである。

この水田の年代であるが、第33図に示したように、この中期水田層は、弥生時代後期の水田層の下に3層（所によっては4層）の間層を挟んで位置していて、どの層からも遺物の出土をみていることから、かなり絞ることができる。第34図の上段の土器は百・中・ⅠないしⅡの時期のもので、中期水田層の直上層（第33図7層）から出土している。2段目の土器は中期水田層（第33図8層）出土のもので、百・前・Ⅲに属する。3段目は中期水田層下第1層（第33図9層）出土で、やはり百・前・Ⅲの年代が与えられる。下段の土器は百・前・Ⅱ期で、中期水田層下第2層（第33図10層あるいは第25図5層）から出土している。これらの出土遺物から判断して、この水田の年代は百・中・Ⅰ期ではないかと考えられる。

なお、水田の東西両端は後世の削平を受けていると考えられ、この水田は耕作時にはより広がっていた可能性がある。（岡本）



1. 褐灰色粘土
2. 暗灰褐色粘性砂質土
3. 淡灰褐色微砂(洪水砂)
4. 暗灰色粘土(弥生後期水田層)
5. 暗灰色粘性砂質土(炭粒点々)
6. 淡青灰色粘性砂質土
7. 暗褐色粘土
8. 淡青灰色粘土(弥生中期水田層)
9. 淡青灰色粘性微砂
10. 青緑灰色～灰色～黄緑灰色粘土
11. 暗灰色粘土
12. 黄緑色～淡青緑色粘土(弥生前中期基盤)

#### (2) 土壌

##### 土壌9（第35図）

206F区の北半に位置する。近世以降の用水路によって上方は大きく削平されている。平面形は不整な三角形を呈し、長径267cm、短径146cmを測る。底部は西に片寄って不整形な広い底面をもつが、東半にも長径63cmの小土壌が認められ、図示した土器片はこの小土壌から出土している。

複雑な底部形状や不整形な平面形、それに断面土層の観察などから、土壌の重複している可能性も考えられる。土壌

第33図 水田関係土層図（S=1/60）

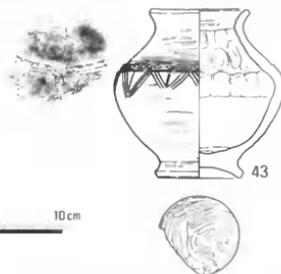
の深さは、広い底面部分で41cm、小土壇では43cmとなっている。出土した土器片は甕の底部で、弥生時代中期前半のものと考えられる。(岡本)

## 土壇10 (第38図)

206F区の北半中央付近に位置し、土壇9と近接している。やはり上方は用水路によって破壊されている。平面形は長径183cm、短径135cmの楕円形で、深さは41cmである。埋土は二層で、下層は地山と同質の土が多くを占めている。出土遺物は僅少だが、弥生時代中期とみられるものが認められる。(岡本)



## 中期水田層



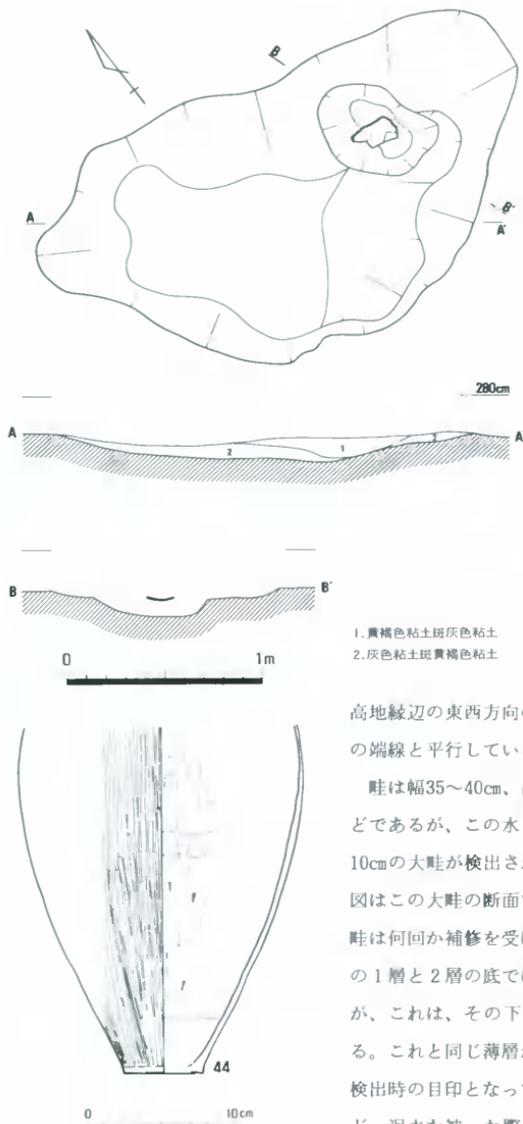
第34図 弥生時代中期水田関係出土遺物

## 4. 弥生時代後期の遺構・遺物

## (1) 水田

203B区から205E区まで、弥生時代中期の水田が検出された低位部全域に展開する。中期水田の上方10cm～20cmに4層の間層を挟んで、厚さ8～12cmの弥生時代後期水田層(暗灰色粘土層)が堆積している(第7図)。原尾島側の微高地縁辺では、この水田層の直下から弥生時代前期の遺構が検出されることから、弥生時代後期の水田は、微高地の周縁を掘削し、低位部の面積を拡大して作られたことが知られる。沢田側の微高地周辺でも、第39図にみられるように、溝状の凹部が微高地縁辺に沿う形で検出され、これも微高地の掘削に伴うものと考えられる。弥生時代後期の水田は中期のそれより一層拡大したものと言える。

水田は水田層を盛り上げた畦によって基盤目状に区画されているが、南北方向の畦は、東西

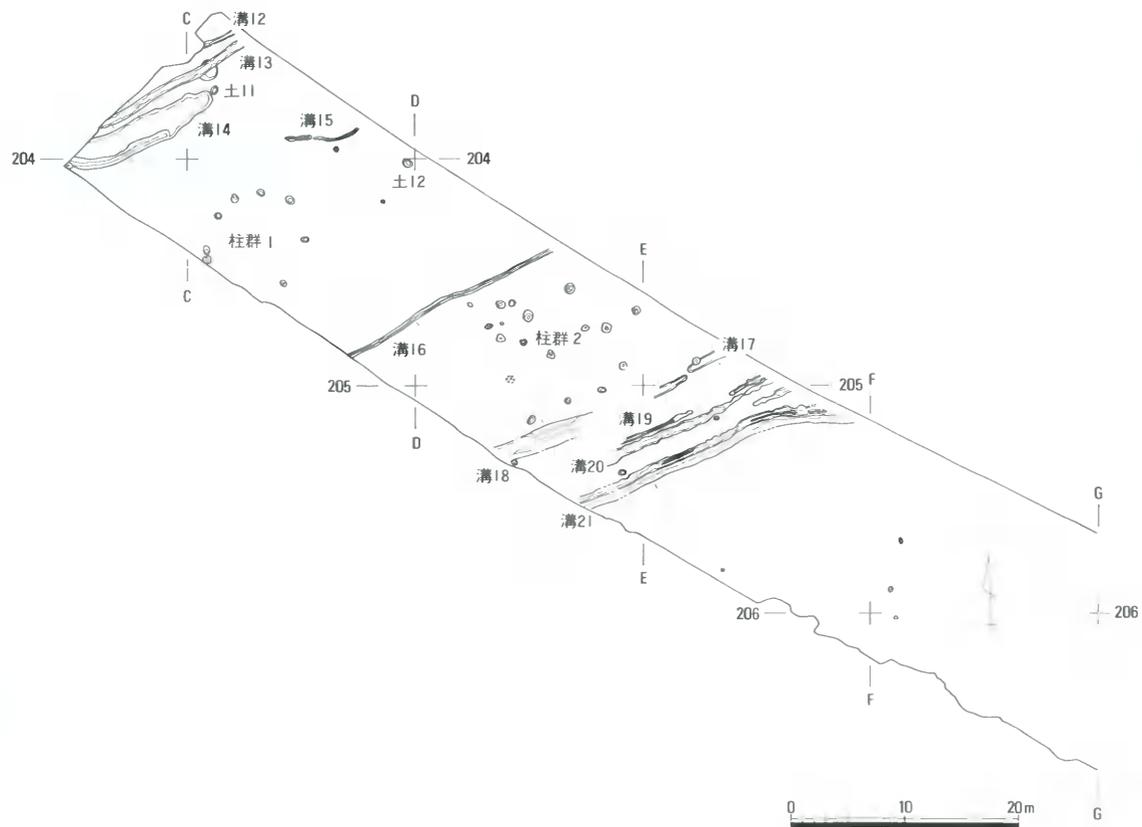


第35図 土壌9・出土遺物

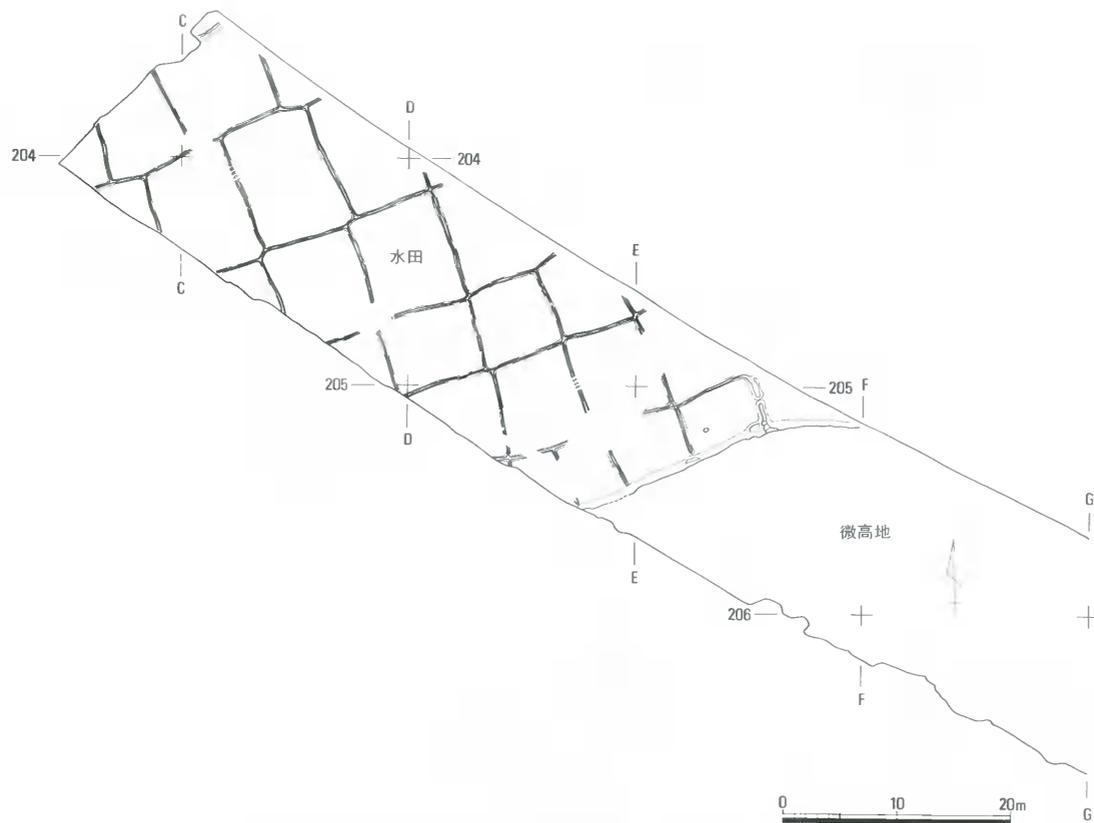
1. 黄褐色粘土 灰褐色粘土
2. 灰色粘土 黄褐色粘土

方向の畦にくらべて交叉部分でかなりズレが目立っている。全体的にみると、沢田側の微高地縁辺の水田区画は小さく、原尾島側の微高地に向かうにつれて広がって行く。もっとも小さな区画は、 $4.2\text{m} \times 6.2\text{m}$ 、約 $26\text{m}^2$ であるのに対し、もっとも広い区画は $7.8\text{m} \times 10.8\text{m}$ 、約 $84\text{m}^2$ あり、3倍強の面積となっている。水田区画はほぼ長方形を呈していて、中期水田の細長い区画からはかなり変化している。しかし、等高線と平行する東西方向の畦が直線的なのに比べて、直交する南北方向の畦がズレている状況は中期水田と似ている。なお、微高地縁辺の東西方向の畦は、それぞれ近接する微高地の端線と平行している。

畦は幅 $35 \sim 40\text{cm}$ 、高さ $5 \sim 7\text{cm}$ 程度の小畦がほとんどであるが、この水田の東端で、幅 $80 \sim 95\text{cm}$ 、高さ $10\text{cm}$ の大畦が検出されている。第39図上段の土層断面図はこの大畦の断面であるが、この観察によると、大畦は何回か補修を受けているようにみられる。第39図の1層と2層の底では灰白色微砂の薄層が認められたが、これは、その下の層の上面に堆積したものである。これと同じ薄層が、大畦の上面でもみられ、大畦検出時の目印となっていたことから考えると、洪水など、泥水を被った際に残された可能性が高い。したがって、大畦は毎年作られるのではなく、ある期間定



第36図 横田調査区の弥生時代後期遺構全体図 (S=1/500)

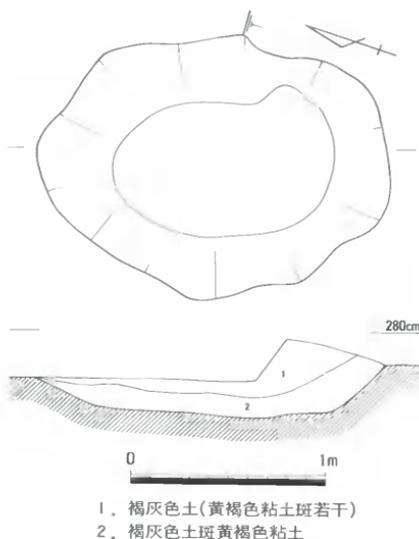


第37図 横田調査区の弥生時代後期洪水砂埋没遺構全体図 (S=1/500)

位置にあって、補修されながら機能していたものとみられる。

この大畦では水口が認められたが、他の小畦では、沢田側の微高地との取り付き部分以外には、3ヵ所しか水口が存在しなかった。旧河道部のような低位部の水田では水口の存在しない場合が多く、そのような部分は中央付近がもっとも低くなった凹状の地形をなしているために、畦を越させて水配りをする方法が採られたものと推測される。ちなみに、発掘時点で、微高地縁辺の水田と低位部中央の水田では20~25cmの高度差がある。

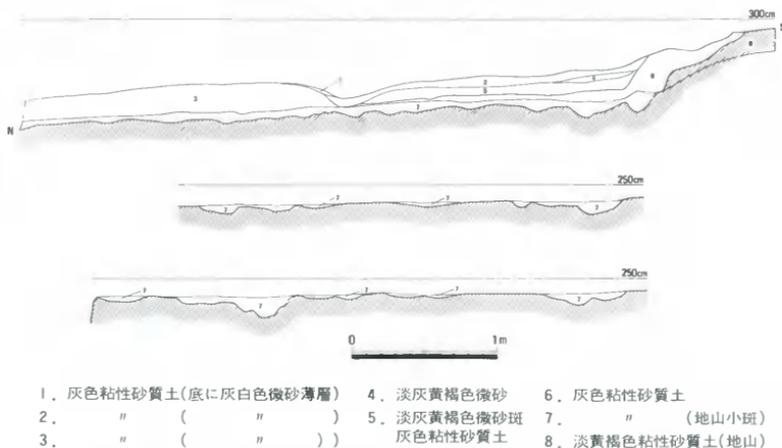
水田層からは若干の土器片が出土したが、弥生時代後期のものとしか判断できず、細かい時期比定は困難である。ただ、水田層を覆っている洪水砂層の上面から出土した第6図の土器の年代が下限ではある。



1. 褐灰色土(黄褐色粘土斑若干)
2. 褐灰色土斑黄褐色粘土

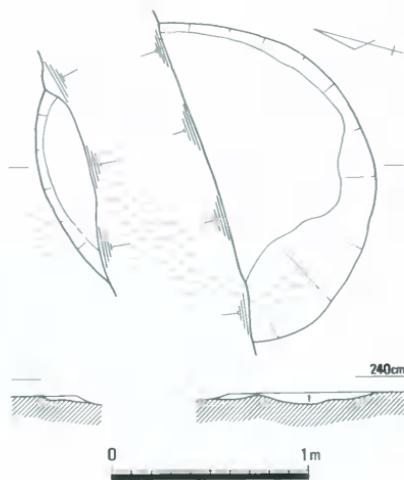
第38図 土壌10

(岡本)



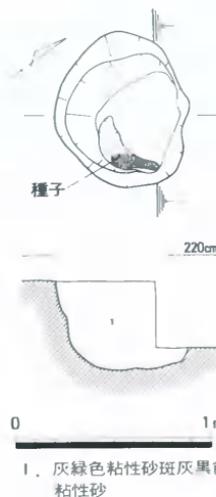
1. 灰色粘性砂質土(底に灰白色微砂薄層)
2. " ( " )
3. " ( " )
4. 淡灰黄褐色微砂
5. 淡灰黄褐色微砂斑  
灰色粘性砂質土
6. 灰色粘性砂質土
7. " (地山小班)
8. 淡黄褐色粘性砂質土(地山)

第39図 弥生時代後期水田大畦・溝19・20・21土層断面図 (S=1/40)



1. 灰黄褐色粘質土

第40図 土壌11



1. 灰緑色粘性砂斑灰黒色粘性砂

第41図 土壌12

(2) 土壌

土壌11 (第40図)

203C区の西端に位置する。中央部分を溝13によって破壊されている。平面形は卵形で、長径184cm、短径159cm、深さ6cmを測る。坑壁の傾斜は緩く、底面との境は明確ではない。底面は平坦ではなく、南半が一段深くなる。埋土は1層である。出土遺物は僅少で、弥生時代後期としか判断できない。(岡本)

土壌12 (第41図、図版9)

204C区の北東隅で検出された。円形の土壌で、北東部は調査区の側溝によって削平されている。長径81cm、深さ47cmを測り、底面はかすかな凹面となる。坑壁の傾斜は急だが、途中に肩をもち、そこから下

は垂直に近く落ちる。埋土はブロック状の混合土1層であるが、この土は後述する柱穴群2の柱穴埋土とよく類似している。坑底からメロンの仲間の種子が大量にかたままって出土している。この土壌は第33図の6層上面で検出されたもので、明らかに弥生時代後期の水田造成以前の遺構である。遺物は僅少である。(岡本)

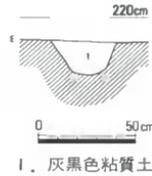
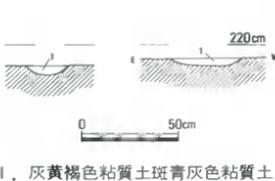
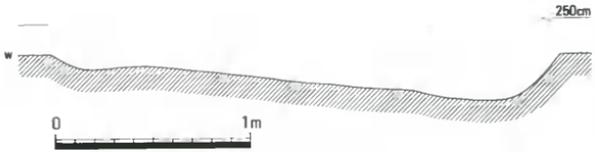
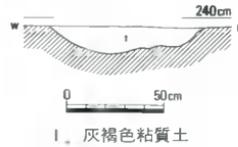
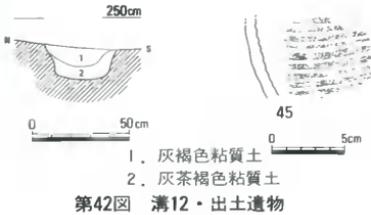
(3) 溝

溝12 (第42図)

203C区の北西部で3m分を検出した。幅50cm、深さ35cmを測り、底面はほぼ平坦で幅23cmあり、断面図は台形に近い。埋土は2層に分けているが、主に色調の相違によるものであり、大きな違いはない。遺物は少量だが、弥生時代後期の長頸壺の破片がある。(岡本)

溝13 (第43図)

203B区から203C区にかけて検出された。幅70~80cm、深さ



7～10cmの規模をもつが、溝底はきわめて凹凸があり、溝壁と底面との境の線も複雑に入り込んでいる。このため、溝状遺構と表現した方が適切である。この遺構は、『百間川原尾島遺跡2』の溝201～206と同じ性格をもつものと考えられ、弥生時代後期水田の開墾痕跡の一つとみてよい。遺物がいくらか出土している。土器と石鏃1点、サヌカイト片、それに種子がある。土器の年代は弥生時代前期（百・前・Ⅲ）と弥生時代後期の両期のものがみられる。第7図上段の17層がこの溝にあたり、水田層の下に位置している。（岡本）

溝14（第44図）

溝13と平行し、その南側に近接して位置する。幅270～300cm、深さ20cm程の広くて浅い溝状の落ち込みで、その南辺が幅92cmの溝となって4～5cm程一段深くなる。この遺構は、203C区の南西隅付近から始まることや、溝13と平行していることから溝としての機能は疑問である。溝13ほどに底面の凹凸は認められなかったが、同じ性格の遺構と考えられる。遺物は少ない

が、弥生時代前期と後期の土器片が含まれ、石鏝も出土している。 (岡本)

溝15 (第45図)

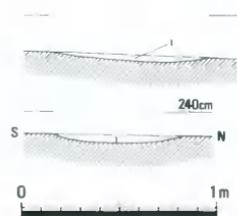
203C区の南半で、弥生時代後期の水田層を除去して検出された溝状の遺構である。途中で一度切れるが、その東側は幅23cm、深さ4cm、西側は幅40cm、深さ3cmを測る。溝とするにはあまりにもかすかな痕跡であるため、なんらかの農作業の痕跡と捉えた方が適当と考えられる。遺物は僅少で、弥生時代前期と後期らしい土器片があるが、層位より弥生時代後期の遺構と判断される。 (岡本)

溝16 (第46図、図版10)

204D区と204C区にまたがり、北西から南東へほぼ直線的に走る溝で、『沢田2』の溝26あるいは溝19と同一の遺構である。遺構は弥生時代後期の水田層の直下に位置し(第7図中段左のA層)、幅38cm、深さ18cmを測る。溝壁の傾斜はかなり急で、断面形は台形を呈する。埋土は灰黒色粘質土1層である。遺物は少なく、弥生時代後期の土器片が出土している。底面の高度は北端と南端ではほとんど変わらず、流水の方向は不明である。 (岡本)

溝17 (第47図)

204E区と205E区の境界付近にあり、途中で切れている。東側(第47図上段)で幅80cm、深さ4cm、西側(第47図下段)で幅72cm、深さ6cmを測る。幅の割には浅いため、断面は皿形となる。埋土は弥生時代後期の水田層とよく類似した灰色粘性砂質土である。遺物は僅少で、弥生時代後期らしい土器片が認められる。この遺構は、後述する溝19~21と位置関係や埋土がよく似ていて、同じ性格をもっていたと考えられ、溝としての機能は疑問である。 (岡本)



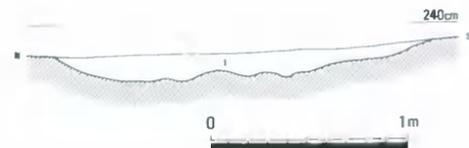
1. 灰色粘性砂質土

第47図 溝17

溝18 (第48図)

205D区の北半にあり、沢田側の微高地の裾部に位置する。弥生時代中期水田面まで掘り下げた段階で検出された。第25図

の2層がこの溝にあたる。したがって、弥生時代中期水田層を切ることになる。幅は200cmで、中央部に幅65~145cmの一段凹む溝状の落ち込みがある。深さは20cmを測る。埋土は暗灰褐色粘土で、一見統くようにみえる溝17の埋土とは異なっている。遺物は少なく、弥生時



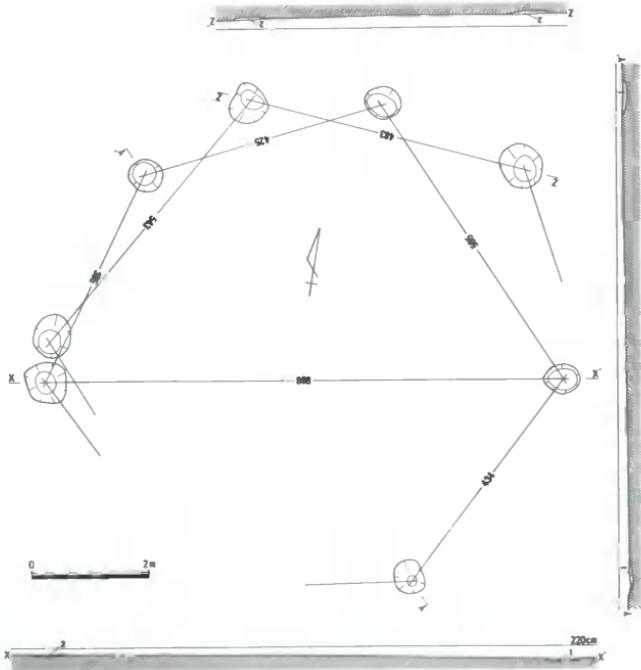
1. 暗灰褐色粘土

第48図 溝18

代前期(百・前・Ⅲ)と弥生時代後期の土器片が出土している。隣接する調査区では、この溝の続きは検出されなかった。(岡本)

溝19～21(第39図、図版10)

205D区と205E区にまたがって位置する。弥生時代後期の水田層を除去して検出した溝状遺構である。埋土は水田層とよく類似した灰色粘性砂質土であるが、地山の淡黄褐色粘性砂質土の小斑を含んでいる。いずれの溝も微高地端とはほぼ平行していて、溝19は375cm、溝20は300cm、溝21で60cmの距離がある。ただ、東端では微高地端が南へ湾曲するのに対し、溝19・20は湾曲せず、溝20と溝21の間に別の溝が現われる。それぞれの溝の幅は、もっとも広いところで測ると、溝19が50cm、溝20で100cm、溝21は90cmあって二筋に分かれているが、どれも幅が一定せず小刻みに変化している。また、溝底も凹凸に富み、通有の流水のある溝とは形状を異にし



1. 褐灰色粘質土 2. 淡青灰色粘土斑褐灰色粘質土

第49図 柱穴群1 (S=1/100)

ている。これらの溝は『沢田2』の溝21～25と接続するもので、水田に関係した遺構と考えられ、水田の開墾痕跡の可能性が指摘されている。出土遺物は若干で、時期不明のものがほとんどである。 (岡本)

#### (4) 柱穴群

##### 柱穴群1 (第49図、図版11)

204C区の西半で、8個の柱穴が環状に配置されているのが検出された。検出面は弥生時代中期水田の畦検出面とほぼ等しいが、次に述べる柱穴群2の層位関係や、遺構の類似性から弥生時代後期の遺構と判断している。

柱穴は円形のもものがほとんどであるが、四辺形に近いものもみられた。長径は59～77cm、深さは3～10cmときわめて浅い。埋土は褐灰色粘質土であるが、淡青灰色粘土の小塊を含むものが半数あった。柱痕跡を認めるものはなく、すべて1層であった。

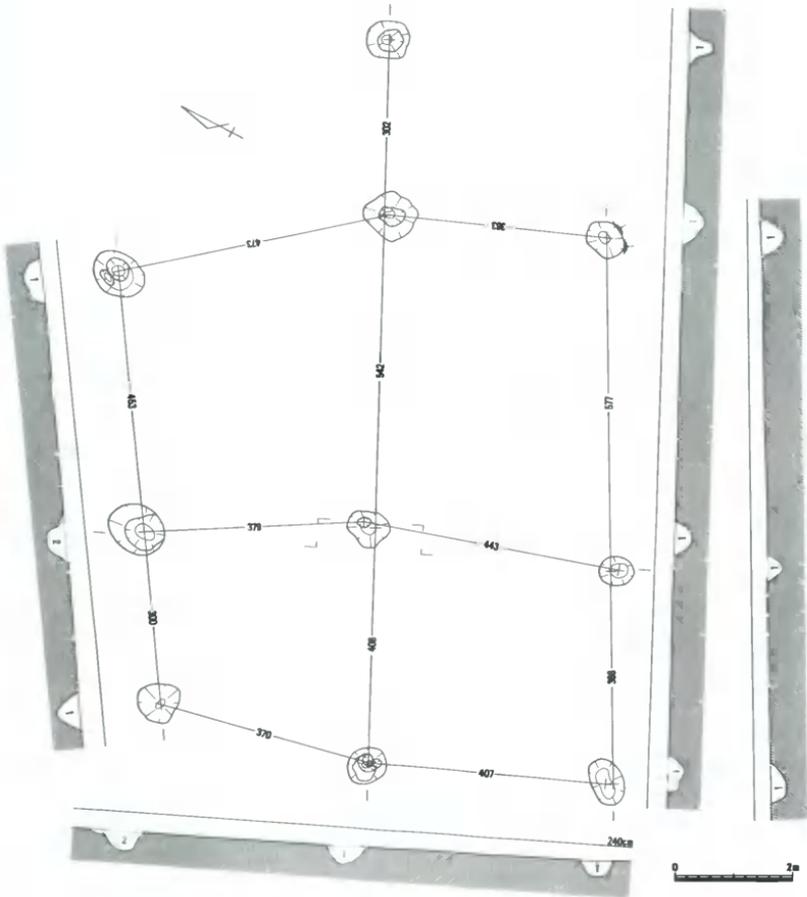
柱穴の配置をみると、図示したように、5個で六角形が作られるようで、残りの3個で、これと重複するもう一つの六角形ができそうに見える。しかし、柱穴間で距離はかなり差があって不整形なため、推測の域を出ない。ただ、すべてを一つの構築物の柱穴とするには、近接しすぎる柱穴があるのも事実である。このような環状の柱穴をもつ建築物としては住居が一般的だが、環の直径が886cmもあり、住居としては大きすぎることや、旧河道上の低位部という立地からも疑問視される。層位的には、弥生時代後期水田層下にあたるが、水田耕作に関係した遺構と考えるのがもっとも妥当なようである。ただ、柱穴という根拠はないものの、あまりにも浅い穴であるため、柱穴とすれば、大幅な削平を受けていることになる。したがって、その原因となった水田開墾はこの遺構の機能を奪うものであるため、水田耕作とは直接関係しない遺構の可能性も十分に考える。柱穴からの遺物の出土はみられなかった。 (岡本)

##### 柱穴群2 (第50図、図版11)

204D区から205E区にかけて、弥生時代後期水田層の下の層を除去した段階で19個の柱穴状の穴を検出した。このうち、直径の大きなものや、深いものを選び、また位置関係を考慮して第50図を作成した。ただし、図の下辺柱列の中央柱穴の位置は写真からの復元である。

柱穴は楕円形のもものが多く、四辺形や三角形に近いものもあった。長径は60～99cm、深さは27～41cmを測る。柱穴の埋土は灰黒色粘性砂で、ほとんどの柱穴に灰黄色粘性砂の小塊を含んでいた。図示した柱穴の半分には柱痕跡とみられる小さな円形の凹みが底に確められたことから柱穴と考えてよい。しかし、断面の土層観察では柱痕跡は確認できなかった。

柱穴の配置から2間×2間の構築物を図上に示したが、縦方向の柱穴はほぼ直線的に並ぶのに対して、横方向では直線とならずに胴張りを呈する。また柱間もまちまちで不規則である。



1. 灰黄色粘性砂斑灰黑色粘性砂 2. 灰黑色粘性砂

第50図 柱穴群2 (S=1/100)

一方、図の頂点の柱穴と、下辺の中央柱穴、それに、右辺・左辺の上2個の柱穴で六角形を作ること可能である。しかしこれも、不規則であることに変わりはない。このような不規則性は、自ずからその遺構の性格を表わしているものと考えられ、半恒久的な堅ろう性からはほど遠い簡易性を示している。しかし、具体的に何物かを述べることは困難である。

この柱穴群が検出されたのは、前述のとおり、後期水田層の下の暗灰色粘性砂質土層のさら

に下にある淡青灰色粘性砂質土層（第33図6層）上面である。ところが、柱穴の埋土である灰黒色粘性砂と暗灰色粘性砂質土はきわめてよく類似しているため、この柱穴群を水田層直下で見落としていた可能性も強く、水田層直下の遺構とも考えられる。そうすると、水田耕作に伴う構築物である確率も高くなる。

柱穴からは弥生時代前期と後期の遺物が出土していて、層位的にも弥生時代後期の遺構と考えられる。なお、前述の土壌12も、このような遺構の柱穴である可能性が濃い。（岡本）

## 5. 古墳時代の遺構・遺物

### (1) 竪穴住居

#### 竪穴住居1（第53図、図版13・106）

205E区の東半に位置する、平面形が方形の竪穴住居である。壁体溝と中央穴を検出したが、柱穴は竪穴内では見つからなかった。北隅が溝26により一部破壊されている。竪穴の規模は一辺が265cm×262cmで、竪穴住居としては小形である。住居の中央に長径65cm、短径52cm、深さ6cmの中央穴があり、その西から南にかけての縁辺に炭の密集が認められた。また、中央穴の西側で焼土の広がりが見出され、長径46cm、短径38cmを測った。遺構の残存状況は悪く、埋土の厚さはわずか2cm程度にすぎない。壁体溝は幅18cmであるが、深さは4cmときわめて浅い。

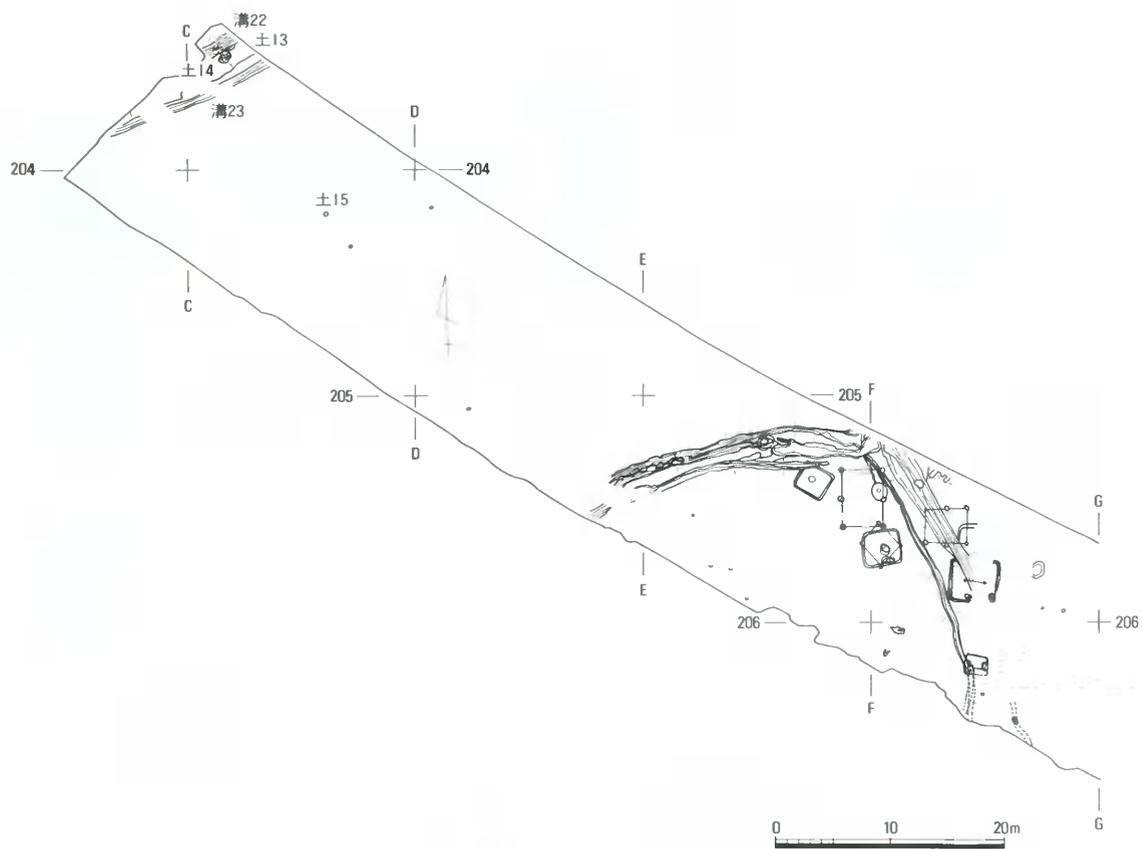
残存状況の悪さにもかかわらず、出土遺物は多く、土器片の他に鉄鏃も出土している。図示した土器のうち、52は床面出土である。また、この住居跡の埋土から出土した土器片のなかに、竪穴住居4の床面や埋土から出土した土器片と接合するものが数点あり、遺構の同時性や先後関係を考えるうえで注目される。出土遺物から判断して、この住居の時期は百・古・Ⅲである。（岡本）

#### 竪穴住居2（第54・55図、図版13・106）

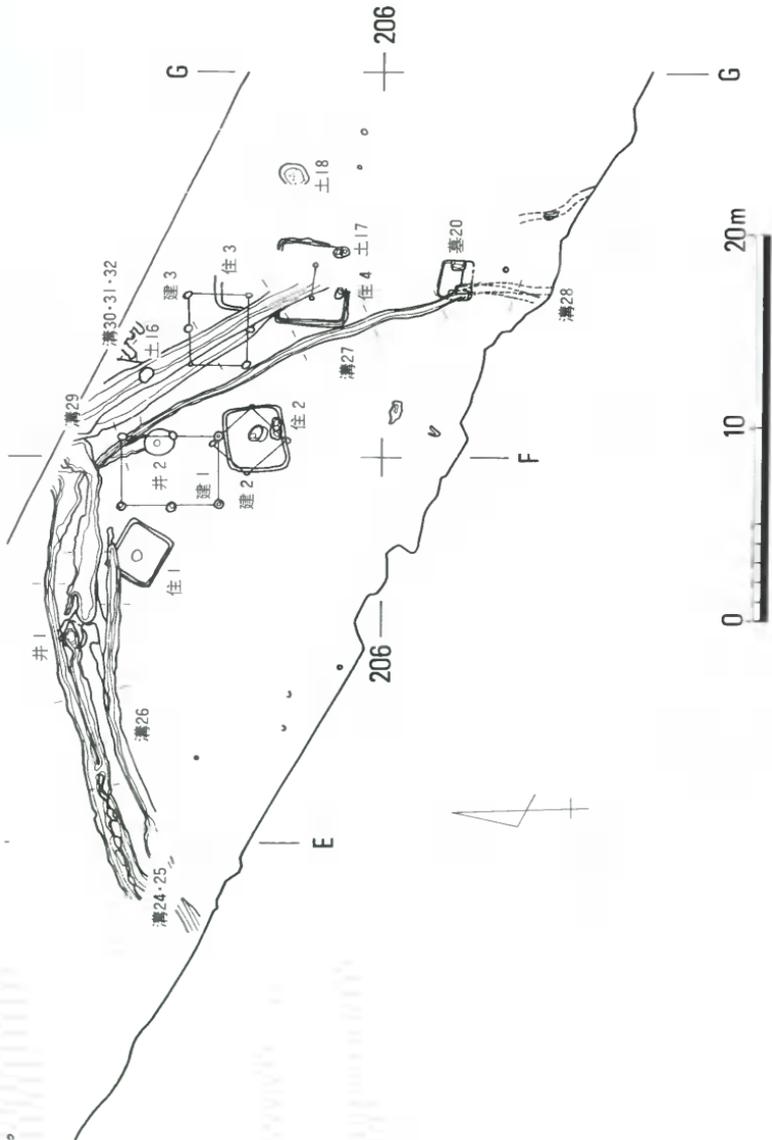
205E区と205F区にまたがって位置している。平面形は方形を呈するが、角は少し丸味をもち、また、東辺と西辺は厳密には平行しない。竪穴の規模は、東西軸345cm、南北軸320cm、深さ16～20cmを測る。壁体溝は幅15～20cm、深さ3cmである。竪穴内からは柱穴は検出されず、中央穴と南壁側で土壌が1基確認された。床面ではかなりの土器片の散布がみられたが、北東隅と中央穴付近に集中があり、南壁側の土壌では甕のほぼ完形品が出土した。

中央穴は、図示したように、熱を受けて赤色に変化した焼土層が2層あることから、一度掘りなおされたとみられる。新しい穴は長径94cm、短径63cmのそら豆形で、住居の中央に近い北端部がもっとも深く、11cmの深さがあった。中央穴の上面では炭の薄層も認められた。

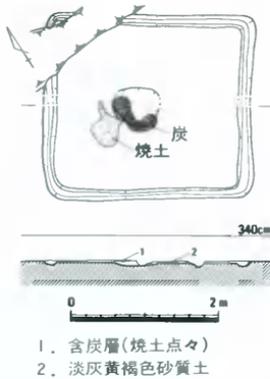
南壁側の土壌は長径114cm、短径59cm、深さ20cmを測る。壙底は段構造になり、中央部分が一



第51図 横田調査区の前古墳時代遺構全体図 (S=1/500)



第52図 横田調査区の古墳時代遺構全体図 (S=1/250)



段深くなる。ただ、その一段深い底は凹凸がはげしい。完形の甕は、東側の一段高い段よりさらに少し浮いた状態で出土した。

出土遺物は土器がほとんどであるが、ガラス小玉が1点出土している。図示した土器のうち、58のみが埋土中出土、他は床面上出土である。これらの遺物の年代は百・古・I期であり、住居の時期も同期と考えてよい。

(岡本)

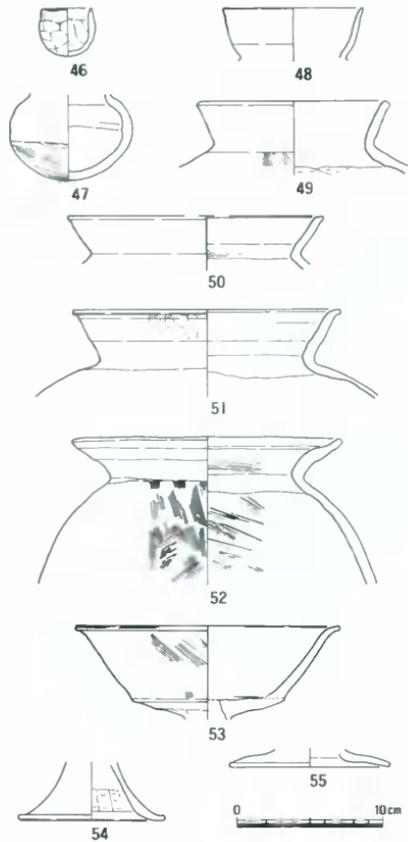
竪穴住居 3 (第56図、図版14)

205F区の中央付近で検出された溝状遺構である。最大幅38cm、深さ8cmを測る。溝はほぼ直角に屈折し、その両端は現代用水路と溝29によって破壊されている。埋土は淡褐色砂質土で、他の竪穴住居の埋土と類似している。

このような形態や埋土から判断すると、この遺構は竪穴住居の壁体溝である可能性も高い。大部分が大きく破壊されているため不明な点が多いが、ここでは竪穴住居としておく。ただし、柱穴は検出されず、また南端が少し西へ振っているのも気掛りではある。遺物は土器が若干出土したにすぎない。古墳時代前半の遺構と考えられる。

竪穴住居 4 (第57・58図、図版14・107)

205F区の南半中央に位置し、竪穴住居3と重複する関係にある。住居の中央部分は南北に

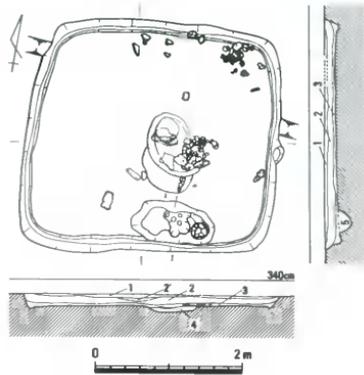


第53図 竪穴住居1・出土遺物

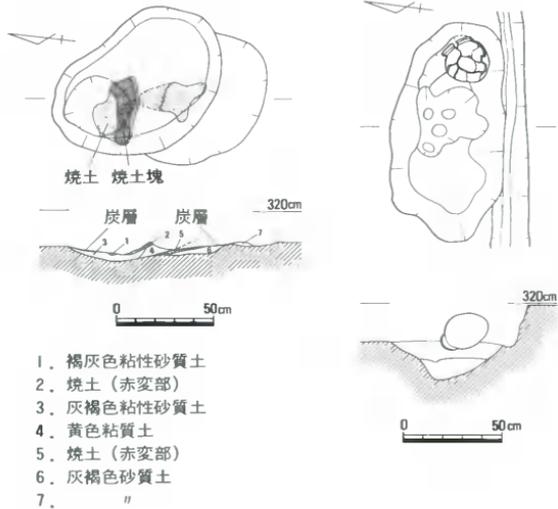
走る溝29と現代用水路により大きく破壊され、東辺も一部消滅している。平面形は方形で、隅は丸味をもっている。東西軸は452cm、南北軸は376cmを測り、東西に長い長方形を呈している。竪穴の壁の傾斜はあまり急でなく、西辺では途中で段がある。壁体溝は幅が16~22cm、深さは12cmで、貼り床の上面では幅4~7cmの壁体痕跡(第57図トーン部分)が認められた。

主柱穴は2個1対で、172cmの距離を隔て、東西に位置している。西の柱穴は長径27cm、深さは床面から74cmと深く、柱根が一部残存していた。東の柱穴は長径23cmで、深さは西の柱穴とはぼ等しい。

住居内からは2基の土壌が検出された。1基は南辺側の中央付近にあり、1基は南東隅に位置する。前者はこ

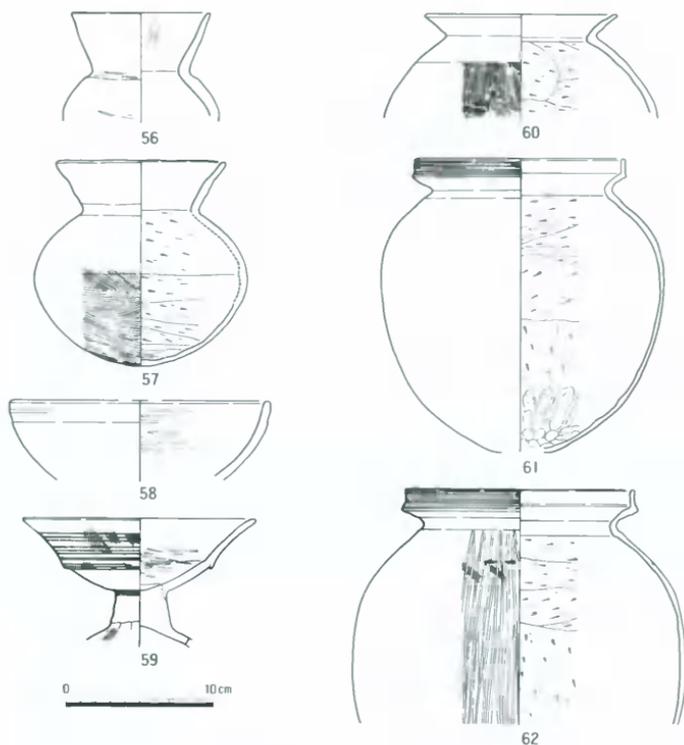


- 1. 淡灰黄褐色砂質土
- 2. 淡灰褐色砂質土
- 3. 灰褐色砂質土
- 4. 灰褐色粘性砂質土
- 5. 暗灰褐色砂質土



- 1. 褐灰色粘性砂質土
- 2. 焼土(赤変部)
- 3. 灰褐色粘性砂質土
- 4. 黄色粘質土
- 5. 焼土(赤変部)
- 6. 灰褐色砂質土
- 7. "

第54図 竪穴住居2・同中央穴・南壁側穴 (S=1/30)

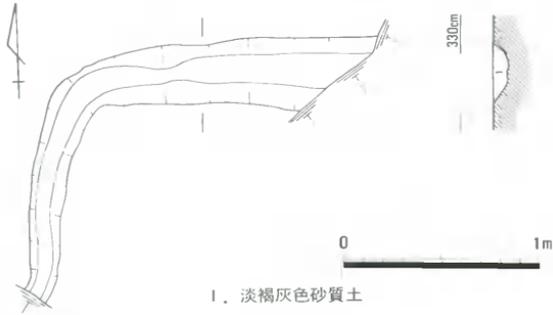


第55図 竪穴住居2出土遺物

の住居に伴う施設と考えられるが、後者については竪穴住居であり類例をみず、また複雑な土層関係から住居に伴う施設かどうか疑問であり、ここでは独立した土壌として扱い、土壌17として後述している。南壁側中央の土壌は長径59cm、短径54cm、深さは18cmを測る。底面は段状になり、南寄りに最深部がある。高杯の杯部のはほぼ完形品（第58図77）が土壌の底面直上から出土している。

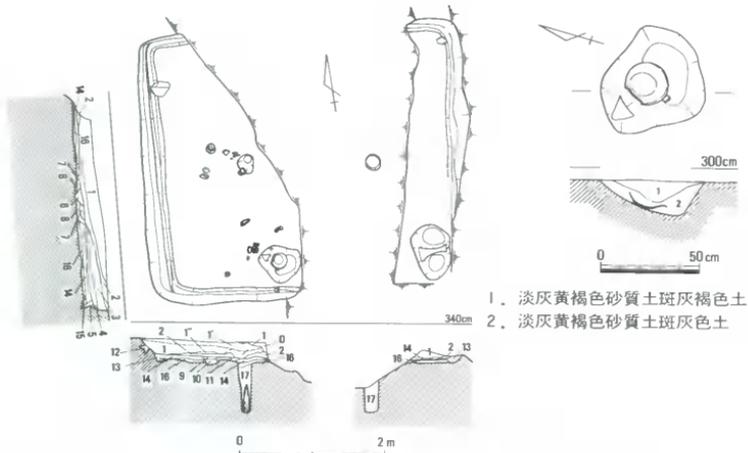
埋土は複雑であるが、第57図14層が貼り床層で、この上面が住居の床面となる。床面より上の埋土の堆積は周辺からの土砂の流入によって埋没したことを窺わせる。貼り床層の下にはもう1層があり、竪穴掘削時に床面にできた凹凸のある程度消して平坦にするために用いられている。

住居内からはかなりの遺物が出土した。図示した土器のうち、63・65・66・67・72・73・



1. 淡褐灰色砂質土

第56図 竪穴住居3

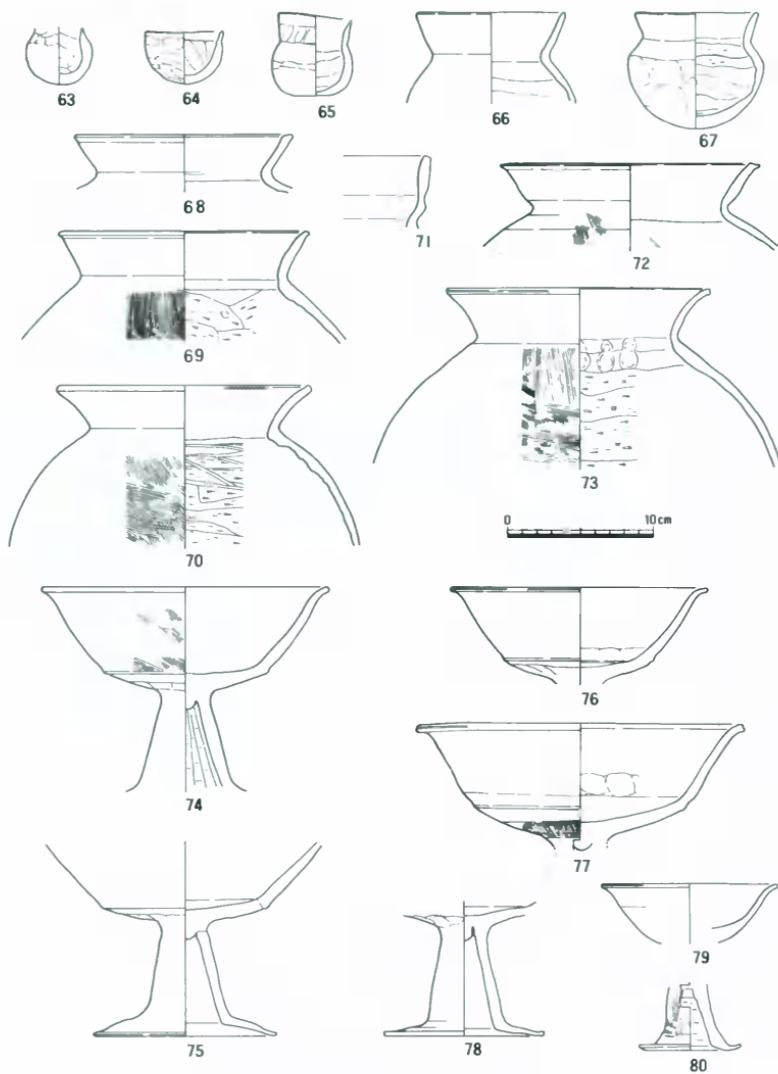


1. 淡灰黄褐色砂質土斑灰褐色土

2. 淡灰黄褐色砂質土斑灰色土

- |                 |                |                      |
|-----------------|----------------|----------------------|
| 0. 淡灰色土(溝29)    | 6. 暗褐灰色土       | 14. 灰色土斑淡灰黄褐色砂質土(貼床) |
| 1. 暗灰褐色土(炭・焼土塊) | 7. 灰黄色粘土斑灰褐色土  | 15. 黄褐色粘土斑灰色土        |
| 1. 灰褐色土         | 8. 黄褐色粘土斑暗灰褐色土 | 16. 淡灰黄褐色砂質土斑暗灰色土    |
| 1. 暗灰褐色土        | 9. 灰黄褐色粘土      | 17. 灰色粘土斑黄褐色粘土       |
| 2. 灰黄褐色粘土斑暗灰褐色土 | 10. 灰黄褐色粘土斑灰色土 |                      |
| 3. 灰褐色土         | 11. 灰黄色粘土斑灰褐色土 |                      |
| 4. 灰褐色粘土斑暗灰色土   | 12. 灰褐色土(炭・烧土) |                      |
| 5. 灰色土          | 13. 黄褐色粘土斑灰色土  |                      |

第57図 竪穴住居4・同南壁側土壇 (S=1/30)



第58図 竪穴住居4出土遺物

75・78は床面出土であるが、さらに注目される事実として、72・73・75については、破片の一部が竪穴住居1の埋土から出土しているということがある。また、74は竪穴住居1と竪穴住居4の両方の埋土から破片が出土している。この事実は竪穴住居1と竪穴住居3の同時性を示すものではあるが、そのような土器片の散布が生じた原因は今後検討されなければならない。竪穴住居4の時期は当然に百・古・Ⅲである。(岡本)

## (2) 建物

## 建物1 (第59図、図版15)

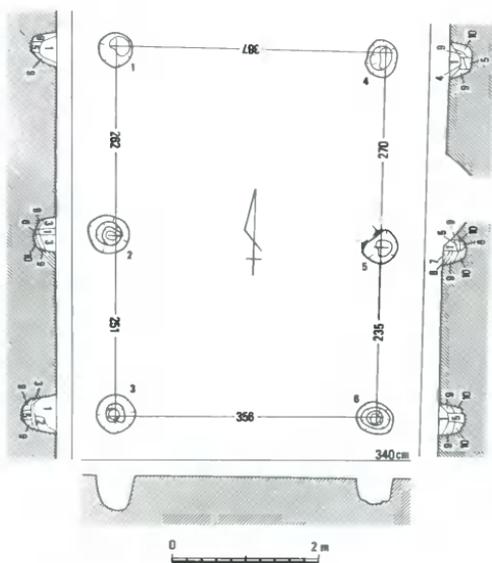
205E区と205F区の境界に位置する。2間×1間で南北棟の掘立柱建物である。梁間は南が356cm、北は367cm、東側桁行は505cm、西側桁行は513cmを測り、厳密には柱穴の中心を線で結んだ平面形は長方形とならない。また、東側桁行・西側桁行ともに、中央の柱穴は桁行の中点から南へずれている。柱穴の直径は47~58cm、深さは29~50cmで、柱穴2・3・6には柱のめり込んだ痕跡があり、その直径は19~26cmを測る。すべての柱穴の断面で柱痕跡が確認された。

遺物としては、柱穴から百・古・ⅠかⅡとみられる土師器片が出土しているが、柱穴4が6世紀末~7世紀初頭とみられる須恵器の出土した溝27を切っていることから、埋土も考慮に入れて、これ以降、奈良時代より古い時代の遺構と考えられる。

(岡本)

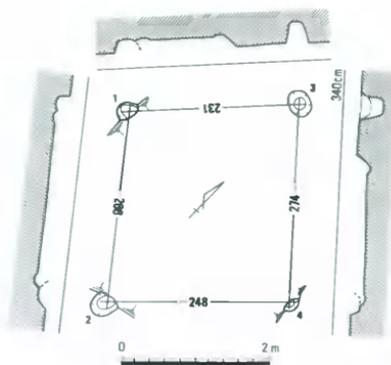
## 建物2 (第60図、図版15)

205F区と205E区にまたがり、竪穴住居2と重複して検出された。1間×1間の規模の掘立柱建物で、柱間から南北棟と

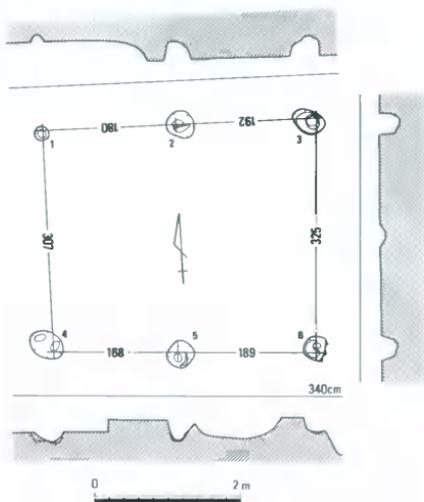


- |                  |             |
|------------------|-------------|
| 1. 褐灰色粘性砂質土      | 6. 灰粘質土     |
| 2. 黄褐色粘質土斑褐灰色粘質土 | 7. 灰黄褐色粘質土  |
| 3. 褐灰色粘質土        | 8. 黄灰褐色粘質土  |
| 4. 暗褐灰色粘質土       | 9. 灰褐色粘質土   |
| 5. 灰褐色粘質土        | 10. 暗灰褐色粘質土 |

第59図 建物1



第60図 建物2



第61図 建物3

考えられるが、実際は北西-南東方位をとる。各柱穴の中心を結ぶと平行四辺形にはなるが、長方形は呈さない。柱穴3は長径38cm、深さ18cmを測るが、他の柱穴は堅穴住居2によって破壊を受けている。柱穴3の埋土は上層が淡灰褐色粘性砂質土、下層が灰褐色粘質土である。出土遺物は僅少であるが、柱穴埋土等から古墳時代の遺構と考えられる。(岡本)

#### 建物3 (第61図、図版14)

205F区の中央付近で検出された掘立柱建物である。2間×1間の東西棟建物で、棟の方向は建物1とはほぼ直交する。建物1の東辺とこの建物の西辺間の距離は約3.7mを測る。位置関係からみると、同時に存在してもおかしくはない。発掘調査時には、この建物と溝29の重複関係もあって、柱穴1・4を上方で検出することができず、1間×1間の建物と認識していたが、その後の整理過程で、下方で検出した柱穴によって、2間×1間の建物になることが判明した。柱穴は長径37~49cm、深さは25cm前後を測る。各柱穴ともに柱根のめり込みが認められた。柱穴の埋土は淡灰褐色粘性砂質土である。建物の規格性であるが、西辺が東辺より18cm短く、桁行の中央柱穴も中点からかなりはずれるなど、あまり厳密ではない。出土遺物が僅少なため、この建物の

の時期を確定することは困難であるが、埋土の類似や位置関係から建物1と同時期の可能性が高い。(岡本)

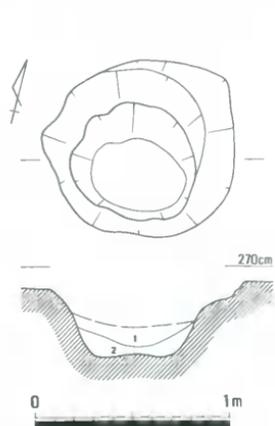
## (3) 井戸

## 井戸 1 (第62図、図版16)

205E区の中央付近にある。弥生時代後期の水田の微高地端部に位置し、上層には洪水砂とよく類似した砂が堆積していたため、水田検出時に確認された。平面形がほぼ円形の素掘りの井戸で、長径は100cm、深さは45cmを測る。壁面は一部階段状を呈している。井戸としては浅く、底面の海拔高は223cmと、隣接する井戸2の底面よりは98cmも高い。底面の長径は49cmである。出土土器は少ないが、その年代は百・古・Ⅰか百・古・Ⅱと考えられる。(岡本)

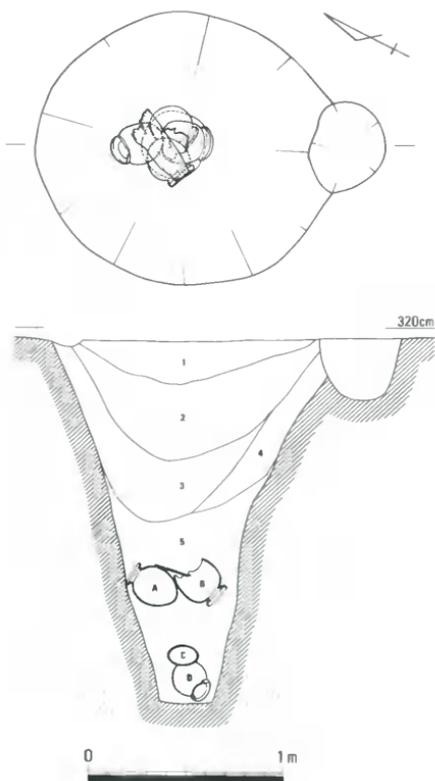
## 井戸 2 (第63・64図、図版16・108)

205F区の西端中央付近で検出された。素掘りの井戸で、平面形は円形を呈し、壁は急傾斜で落ち込む。検出面で直径145cm、底面は直径35cmを測る。深さは190cmあり、底面の海拔高は125cmである。埋土は5層に分けられるが、第5層の粘土が下半を埋めている。土器が多く出土し、底面からは完形の甕が2点重

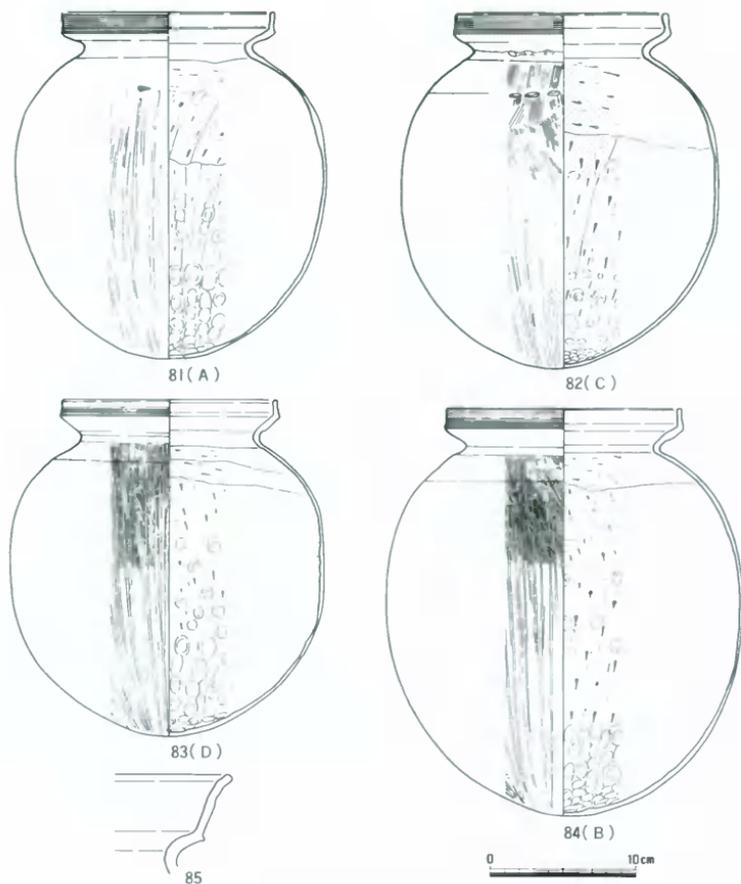


1. 灰色粘性砂質土
2. 黄褐色粘土斑灰褐色粘土

第62図 井戸 1



第63図 井戸 2



第64図 井戸2出土遺物

なってみつかった。また、底面から50cm上方でも完形・半完形の甕が2点出土した。いずれも第5層に含まれていたものである。これらの遺物から、この井戸の年代は百・古・Ⅱと考えられる。(岡本)

(4) 土壌

土壌13 (第65図)

203C区の西端中央付近に位置し、溝22によって大部分を破壊されている。残存部分の長径が101cmを測る不整形な土壇である。墳壁から底面にかけて凹凸が激しく、深さは12cmである。埋土は1層で、暗灰色粘質土がつまっていた。出土遺物は少なく、弥生時代後期から古墳時代初頭頃と考えられる土器片がみられる。(岡本)

#### 土壇14 (第65図、図版17)

203C区の西端で検出され、前述の土壇13の南わずかに20cmに位置する。平面形は不整形な楕円形を呈し、底面は凹凸に富む。長径118cm、短径101cm、深さ20cmを測る。埋土は灰色粘性砂質土1層である。前述の土壇13との形態的な類似が注意される。出土遺物は少ないが、弥生時代後期の土器片が認められる。しかし、土層関係から考えて古墳時代の遺構とされる。(岡本)

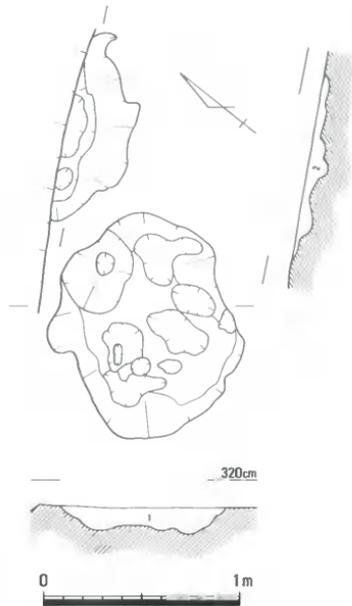
#### 土壇15 (第66図、図版17)

204C区の中央付近に位置する。柱穴状の土壇で、平面形は円形に近く、断面形はU字形を呈している。長径45cm、深さ42cmを測る。埋土は暗灰色粘性砂質土のみで、柱痕跡は認められなかった。墳底面から須恵器の杯身の完形品が出土した。陶邑田辺氏編年のTK 10型式に近いと考えられる。これ以外には遺物は出土しなかった。したがって、この土壇の年代は6世紀中頃とみられる。

この土壇は形態的には柱穴である可能性が高いが、周辺では他の柱穴は検出されていない。完形品の須恵器の出土から考えると、何か特殊な機能をもった土壇であるかもしれない。(岡本)

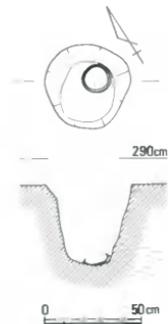
#### 土壇16 (第67図)

205F区の北西部に位置する。溝29を掘り上げた段階で検出された。平面形は隅丸の方形を呈するが、北辺では半円形の突出部があって、階段状をなしている。長軸80cm、短軸60cm、深さは36cmを測る。墳壁は急角度で、断面形は箱形に近い。埋土は2層で、下層では黄褐色粘

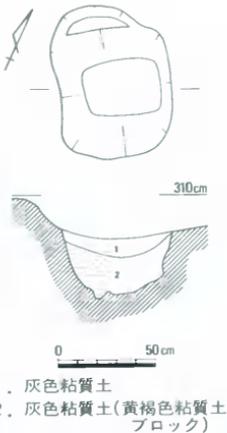


1. 灰色粘性砂質土 2. 暗灰色粘質土

第65図 土壇14

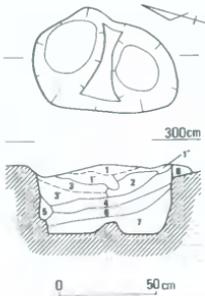


第66図 土壇15



1. 灰色粘質土
2. 灰色粘質土(黄褐色粘質土ブロック)

第67図 土壌16



1. 灰黄色微砂斑雜灰色粘性砂質土(炭粒・焼土多)  
(炭粒・焼土)
1. 灰黄色微砂斑雜灰色粘性砂質土  
(炭粒・焼土若干)
2. 黄白色粘土
3. 灰黄色微砂斑雜灰色粘性砂質土
3. "
4. 灰黄緑色微砂斑雜灰色粘性砂質土
5. 灰色粘土
6. 灰色粘性砂質土斑灰黄緑色微砂
7. 黄白色粘土斑灰色粘性砂質土
8. 灰色粘性砂質土

第68図 土壌17

質土のブロックが含まれる。遺物は少ないが、埋土から古墳時代後期の遺構と考えられる。また、溝29よりは古い遺構であるため、7世紀までは降らないとみられる。(岡本)

土壌17 (第68図)

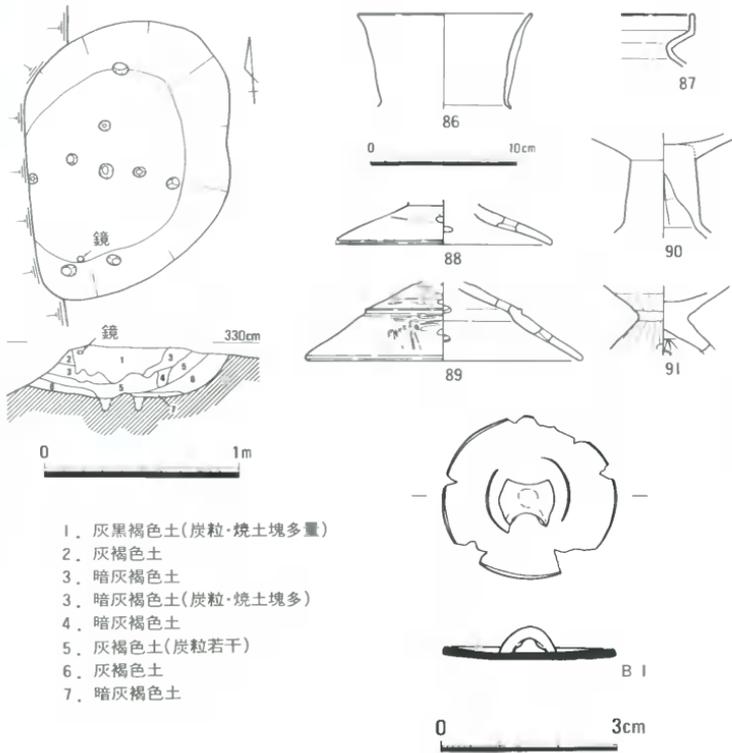
205 F 区の南半中央付近にある。ちょうど堅穴住居 4 の南東隅に位置し、床面下から検出された。検出面では長径77cmの不整形な楕円形を呈するが、底面は南北二つに分かれ、中央部分に土手状の高まりがある。上層断面の観察では南北両底面と土手土にも同じ土が堆積していることから、二つの土壌の重複は考えられない。壙壁は垂直に近く、深さは37cmを測る。埋土は複雑で、何枚もの薄層に細分されるが、3～7層はブロック状の混合土であり、人為的な堆積層の可能性が考えられる。上面の1層では炭や多量の焼土が認められた。

この土壌と堅穴住居 4 の関係であるが、位置的には堅穴住居の施設である可能性が考えられる。しかし、堅穴住居 4 にはすでに南辺に土壌が一つ付属しているため、土壌17が伴うとすれば、きわめて異例なものと言わざるをえない。ただ、前述の埋土の状態や上面の多量の焼土は気になるところで、カマド様の施設の痕跡であるとも考えることも否定しきれない。この土壌の年代は堅穴住居 4 の年代である百・占・Ⅲか、その少し前と考えられる。(岡本)

土壌18 (第69図、図版18)

205 F 区の南東部で検出された。現代用水路によって一部破壊を受けていたが、平面形は楕円形を呈する。底面はわずかに凹み、壙壁は湾曲して立ち上がる。長径は155cm、深さは27cmである。埋土は7層に分けられるが、大きくは、炭粒や焼土塊を多量に含んだ上層(1～3層)と、それらを含まない下層とに分される。上層からは土器片がかなり出土し、小形銅鏡も1面、鏡面を上にして検出された。底面では直径6～8cmの小さな穴が認められ、炭や焼土を含んでいるものもあったことから、この土壌に伴う可能性が高い。しかし、配置の上で規格性のようなものは見てとれない。

小形銅鏡は面径29.0mm、鏡縁厚1.5mmの凸面鏡で、直径9.5mmの鈕のまわりに、一重の細い圈



1. 灰黒褐色土(炭粒・焼土塊多量)
2. 灰褐色土
3. 暗灰褐色土
3. 暗灰褐色土(炭粒・焼土塊多)
4. 暗灰褐色土
5. 灰褐色土(炭粒若干)
6. 灰褐色土
7. 暗灰褐色土

第69図 土壌18・出土遺物

線をめぐらせ、そこから鏡縁にかけては素文となっている。鈕高は6.0mmを測り、鈕の両側に半円形の孔があげられている。鏡縁は垂直面ではなく、傾斜面をなしている。重量は2.58gである。百間川沢田遺跡では、『沢田2』高縄手A調査の竈穴住居21からもかつて小形銅鏡が出土しているが、それに較べて、今回出土の銅鏡はより精良なつくりである。

小形銅鏡を出土したことで、この土壌の性格が問題となる。上層で銅鏡といっしょに出土した土器片はいずれも細片であり、投棄されたと考えられる。また、上層には炭粒や焼土が多量に含まれ、種子もみられたことから、その可能性は高い。埋土が細分され、その中には炭粒を若干含む層もあり、状況からはゴミ穴とみるのが妥当である。しかし、底面の小穴の存在は異例で、別の用途も考えさせる。したがって、最終的にはゴミ穴として利用されたとしておく。土器片の中には壺や甕の破片もあるが、高杯の破片が目につく。あるいは祭祀行為の後、一括

して投棄されたことも考えられるが、想像の城を出ない。

この土壌の年代は、出土土器からみて百・古・Ⅱではないかと考える。

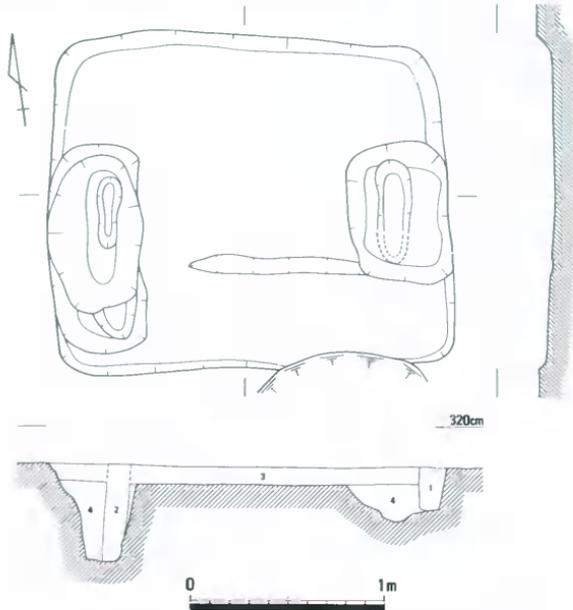
(岡本)

(5) 土墳墓

土墳墓 2 (第70図、図版18)

206F区の北半中央付近で検出された。溝28・29と位置的には重複するが、これらの溝の底面下から検出されているため、溝よりは古い年代の遺構である。

土墳墓としているが、木棺の小口板を埋め込んだ穴が明瞭に認められるため、組合式の木棺墓と考えられる。木棺は、東西204cm、南北181cm、深さ11cmの方形の掘り方内に埋納されている。木棺の主軸方向は東西で、掘り方の東西両辺に沿って、小口板を埋め込むための穴が検出された。東側の穴は長径74cm、短径53cm、深さ19cmを測り、平面形は隅丸の長方形を呈している。底面で、長さ推定54cm、幅19cmの小口板のめり込み痕らしい凹みをつつけたが、土層断面



1. 灰褐色粘土  
2. " (黄褐色粘土斑若干)  
3. 黄褐色粘土斑灰褐色粘土  
4. 黄褐色粘土斑暗褐色粘土

第70図 土墳墓 2

観察では、小口板痕跡は厚さ13cmで、掘り方の東壁に添って認められた。西側の穴は検出面で長径109cm、短径49cm、深さ40cmを測るが、南側に階段状になり、中段で測ると長径は83cmとなる。底面にはやはり小口板痕跡らしい凹みがあり、土層断面観察でもこの部分で厚さ12cmの小口板痕跡が確認された。この凹みは長さ37cm、幅13cmを測る。土層断面観察で確認された東西の木口板痕跡の距離から、木棺の内法長は約150cmと復元される。木棺の側板の痕跡については、南側板の庄痕らしい凹みが90cm分検出され、幅は10cmを測る。深さはごくわずかにすぎない。その位置をみると、木口板の庄痕らしい凹みの南端よりわずかに南にあるようで、小口板を側板で挟む型式の木棺が推定される。底板については、土層断面観察では確認されなかった。

この土壌墓から出土した少量の土器はいずれも小片であったが、弥生時代と考えられるものがみられた。しかし、埋土から判断すると古墳時代の遺構と考えられ、しかも、遺構の重複関係から、6世紀後半から末期にかけての溝28や29に先行することは確実である。したがって、この土壌墓の年代は古墳時代前半としておきたい。(岡本)

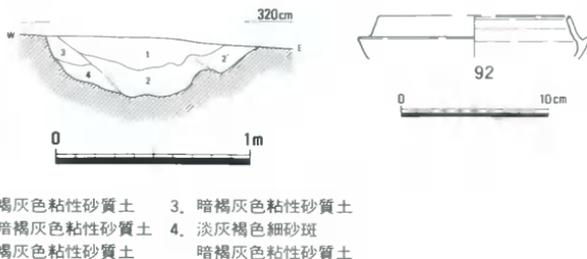
## (6) 溝

## 溝22 (第71図)

203C区の西端に位置する。調査区の北西隅にあたり、2.7m分を検出したにすぎない。幅120cm、深さ40cmを測る。断面観察からすると、この溝は一度掘り直されたようで、新しい溝の壁は45°位の傾斜をもつのに対し、古い溝の傾斜はもっと急傾斜で、湾曲していたようである。埋土は各層とも粘性砂質土である。遺物としては少量の土器片があるが、6世紀中頃とみられる須恵器が含まれている。(岡本)

## 溝23 (第72図)

203B区から203C区にかけて検出された。溝22と平行するようである。幅84cm、深さ28cmを



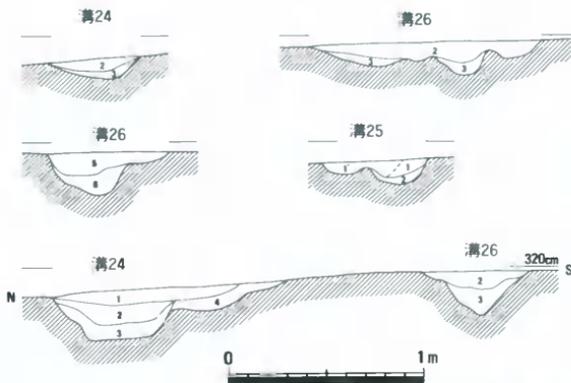
- |              |              |
|--------------|--------------|
| 1. 褐灰色粘性砂質土  | 3. 暗褐灰色粘性砂質土 |
| 2. 暗褐灰色粘性砂質土 | 4. 淡灰褐色細砂斑   |
| 2. 褐灰色粘性砂質土  | 暗褐灰色粘性砂質土    |

第71図 溝22・出土遺物

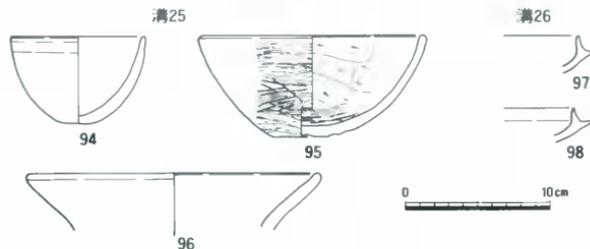


1. 灰黄褐色粘性砂
2. 灰褐色粘性砂
3. 暗灰黄褐色粘性砂

第72図 溝23・出土遺物



- |            |            |            |
|------------|------------|------------|
| 1. 灰色粘質土   | 3. 暗灰褐色粘質土 | 5. 淡灰褐色粘質土 |
| 1. 暗灰色粘質土  | (黄褐色砂ブロック) | 6. 灰褐色粘質土  |
| 2. 淡灰褐色粘質土 | 4. 灰色粘質土   |            |



第73図 溝24・25・26・出土遺物

測る。溝底は平坦な面を持ち、断面形は少し歪んだ台形となる。埋土は3層に分けられるが、いずれも粘性砂である。底面の高度を測ると、調査分の北端は南端より5cm低い。溝の壁と底は弥生時代後期の洪水砂層である。出土した遺物の中に6世紀中頃の須恵器がみられ、時代的にも溝22と併行する。(岡本)

溝24～26(第73図、図版108)

205D区から205E区にかけて、わずかに湾曲しながら東西に延びる3条の溝である。その走行は弥生時代後期水田の微高地端部の線をほぼ踏襲しているようであり、あたかも微高地を画するような溝である。西側の溝から溝24・25・26と呼ぶ。3条の溝は等間隔をおいて平行するのではなく、複雑にからみ合っている。溝24と溝25は接触し合い、東側では離れていく。上層断面図を観察すると、

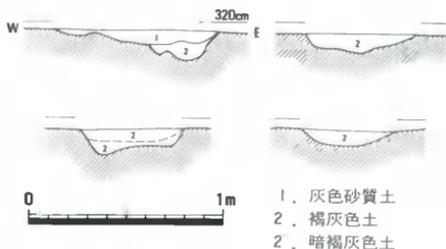
溝25が古く、それを壊して溝24が掘られたようである。溝26は堅穴住居1の付近で終わるが、205E区の中部付近で枝分かれする浅い溝があり、その先は再び深く広がり溝となる。この溝には溝25の先端からも浅い溝がつながっている。

溝の規模であるが、溝24は幅60～85cm、深さ18cm、溝25は幅70cm、深さ15cm、溝26は60～75cm、深さ19cmを測る。断面の形状では、溝24が台形、溝26はV字形となる。埋土はいずれも灰褐色系の粘質土が中心で、一部灰色粘質土を混じえる。とくに溝25は灰色粘質土が主体である。各溝ともに埋土は2層に分けられるが、いずれも色調の相違によるもので、本質的な差ではない。溝底の高度は東端と西端で数cmしか違わないため、流水方向を推定することはむづかしいが、形状等から東から西へ流れていた可能性が高い。

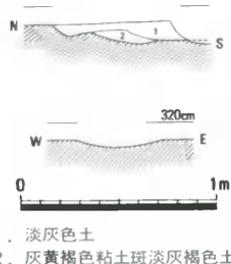
出土遺物は多くはないが、各溝から土器片が出土している。溝24と溝26では須恵器がみつき、その形態から6世紀末から7世紀初頭頃と考えられる。溝25では須恵器は出土せず、図示したような百・古・1の上師器がみられる。94はほぼ完形である。しかし、埋土からみて、溝24や溝26と大幅に時期差があるとは考えられず、溝25も古墳時代後期の遺構と考えたい。ちなみに、溝24・25は『沢田2』の溝52、溝26は『沢田2』の溝51と同一のものであるが、『沢田2』では百・古・1期とされながら、それより下る可能性も指摘されていた。（岡本）

#### 溝27 (第74図)

205F区の西部から206F区にかけて位置する。底面の高度を測ると南端が北端より12cm高く、南南東から北北西へ流れていたと考えられる。発掘調査時での所見では前述の溝25と切り合い関係にあり、溝27が破壊されているように観察されたが、埋土の上では互いによく類似しているため、溝25へ続いていた可能性も否定できない。溝の幅は58cm、深さは15cmを測る。断面形は皿状をなすが、底面がかすかに確認できる。第74図の断面図は左列上段から右列下段



第74図 溝27



第75図 溝28

第3章 第1節 横田調査区

へ、北から南の順に配している。埋土は褐灰色土1層で、場所によっては下層が暗色になっている。出土遺物は少ないが、6世紀末から7世紀初め頃の須恵器片が1片含まれ、埋土等から判断してもこの時期の溝とみられる。

この溝の南端は近世以降の水路によって大きく破壊をうけているため、過去の調査区との連続性が明瞭ではないが、規模や走行から判断して『沢田2』の溝103と同じ溝と考えられる。

(岡本)

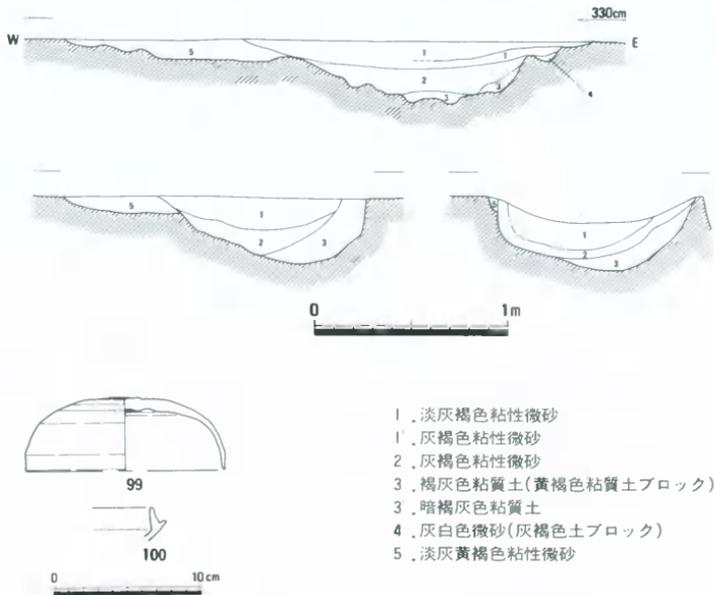
溝28 (第75図)

206F区で溝27と重複して検出された。近世以降の水路で多くを破壊されているため、ごく一部の検出にとどまり、不明な点が多い。溝27を破壊して掘穿されていることから、溝27より新しい時期の遺構である。幅は45cm、深さは15cmである。遺物は僅少だが、6世紀後半の須恵器が認められる。この溝は206F区の北半中央付近で終わり、北へは延びていない。第75図の上段は縦断面である。『沢田2』の溝63' か溝66' と連続する可能性がある。

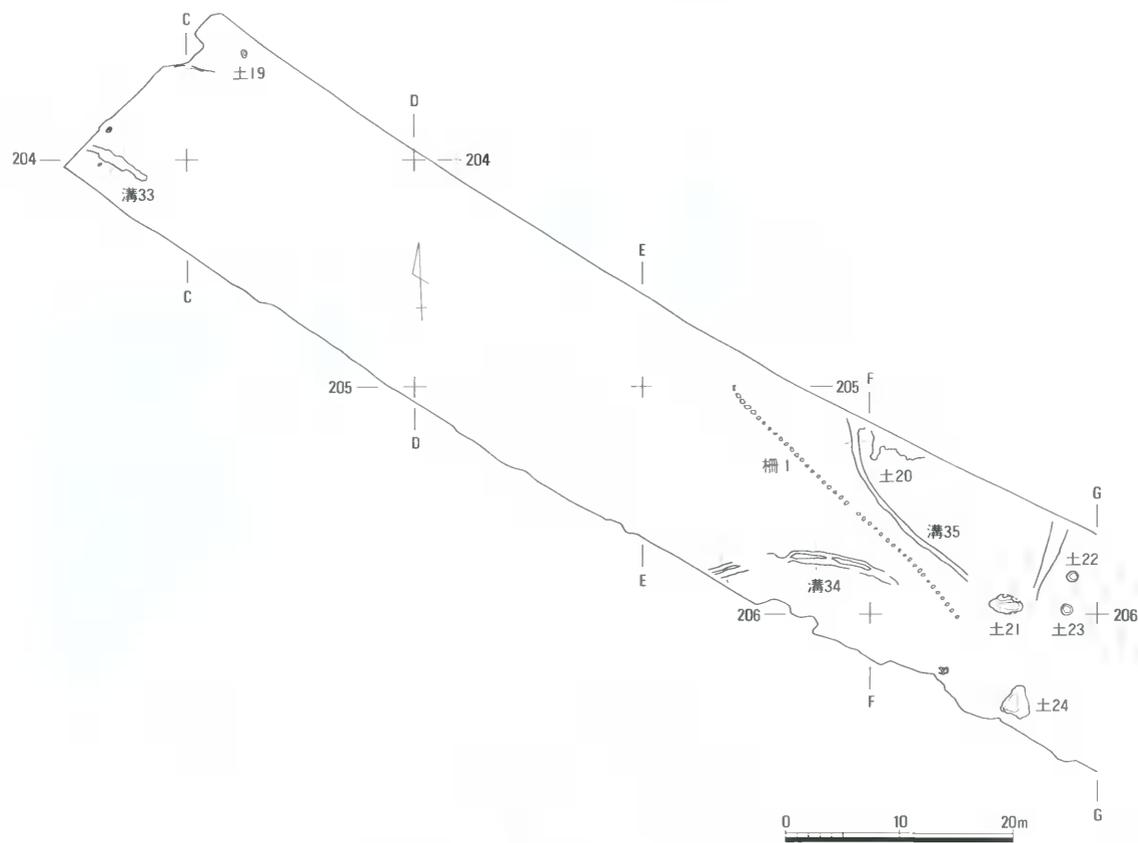
(岡本)

溝29 (第76図、図版14)

205F区を北北西から南南東へ直線的に走る溝である。南部は現代水路によって大破され

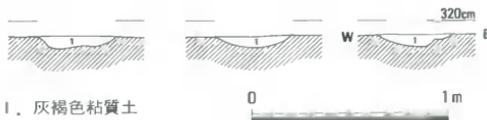


第76図 溝29・出土遺物



第77図 横田調査区の中世遺構全体図 (S=1/500)

ていたが、わずかに残された痕跡から、206F区へも続いていたことが確認された。検出された溝は最大幅が232cmあるが、西側は深さ10cmの浅い段になり、東側132cm分が深さ38cmの一段深い溝に



I. 灰褐色粘質土

第78図 溝30&lt;左&gt;・31&lt;中&gt;・32&lt;右&gt;

なっている。深い溝の西側壁は傾斜が緩やかだが、東側壁は急傾斜で、底面はかなり丸味もっている。溝底にはたくさんの凹凸が認められたが、比較的規則性をもつようで、底面で2列、西側壁の傾斜変換点付近で1列の計3列の凹みの並びが確認された。凹みは深さ3cm程度とごく浅いため、杭跡とは考えにくく、その性格は不明であるが、『沢田2』高縄手B調査区の柵列状遺構という類似例がみられる。底部の高度を測ると北端部から南端部へ向かって低くなるため、水は北から南へ流れていたと考えられる。

第76図の上層断面は北から順番に示しているが、この観察によって、溝29は3条の溝が重複したものであることが判明した。1・2層が最終の溝で、3層の溝を掘り直したかとも考えられる。5層がもっとも古い溝で、南部ではやや東へ振っていたようである。この3条の溝は埋土の上でも違いがみられる。1・2層は粘性微砂、3層は粘質土、5層は粘性微砂と変化をみせている。

出土遺物がいくらかみられ、土師器と須恵器が含まれる。須恵器は6世紀後葉と考えられる。調査区北壁の上層観察によると、溝29は溝24～26より新しいとみられることから、溝29の時期は7世紀初頭以降と考えられる。現代用水路によって大きく破壊されているため、過去の調査区との連続関係があまり明瞭ではないが、走行方向と形状から判断して、『沢田2』の溝104・105と接続する可能性が高い。(岡本)

#### 溝30～32 (第78図)

205F区の調査区北端で検出された3条の溝の先端部である。西から溝30・31・32と呼称する。溝30は幅40cm、深さ3cm、溝31は幅42cm、深さ6cm、溝32は幅40cm、深さ3cmを測る。埋土はいずれも灰褐色粘質土1層である。出土遺物は溝30と溝32のみみられたが僅少で、どれも小破片のため時期を明確にできなかった。埋土から判断して古墳時代後期の遺構と考えられる。(岡本)

## 6. 中世の遺構・遺物

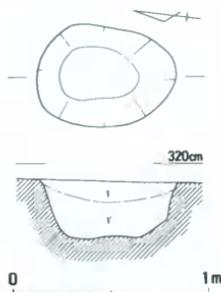
### (1) 土壌

土壌19 (第79図)

203C区の西半で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径71cm、短径53cm、深さ32cmを測る。壙壁は急角度で、底面はほぼ平坦である。埋土は淡褐灰色粘性砂質土1層で、下半は色調が濃くなっている。遺物としては弥生時代後期から古墳時代初期とみられる土器片が若干あるが、埋土から判断して中世の遺構と考えられる。(岡本)

土壌20 (第80図)

205F区の北西端、調査区の北端で部分的に検出された不整形な大形の落ち込みである。調査区の北端で径540cmを測る。深さは9cmにすぎない。後述する溝35と接続している可能性がある。遺物は若干の土器片で、古墳時代の須恵器が含まれるが、埋土から中世の遺構と判断される。(岡本)



Ⅰ. 淡褐灰色粘性砂質土  
Ⅱ. 褐灰色粘性砂質土

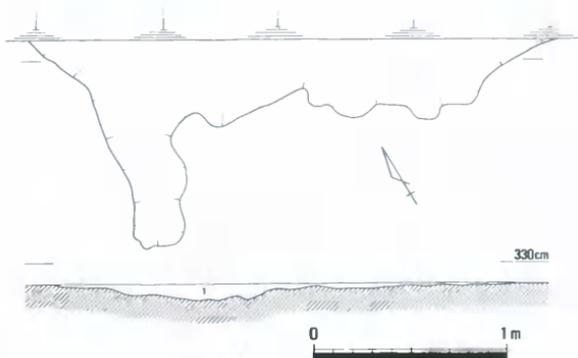
第79図 土壌19

土壌21 (第81図)

205F区の南端に位置し、現代用水路の底面で検出された。検出面で長径300cm、短径161cmを測る大形土壌である。深さは24cmあり、他の中世遺構の検出面から測ると35cm程度であったと推定される。埋土は2層で、下層はブロック状の土を混入していた。遺物としては土師器片がわずかにあり、中世のものではないかと考えられる。この土壌の用途は明確ではないが、溝35の流走方向に位置していることは注意される。(岡本)

土壌22 (第82図)

205F区の東端付近で検出された。不整形な円形の平面形をもち、長径100cm、短径89cm、深さ17cmを測る。底部は小さな凹凸をもつものの、広い平坦面となる。壙壁の傾斜はあまり急ではない。埋土は灰色土1層で、灰白色粘土や灰褐色土の小塊を含んでい

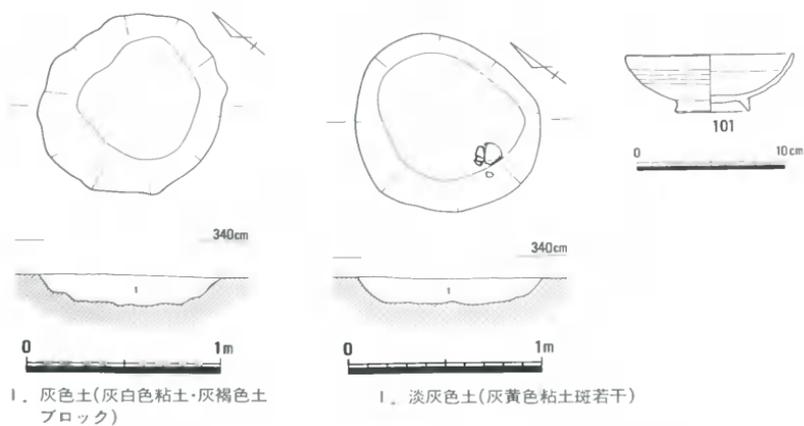


Ⅰ. 明灰黄色粘質土

第80図 土壌20



第81図 土壌21



第82図 土壌22

第83図 土壌23・出土遺物

る。南に隣接する土壌23と同種・同期の遺構と考えられ、中世、なかでも鎌倉時代の13世紀後半とみられる。土師器の高台付碗の破片が出土している。 (岡本)

土壌23 (第83図、図版19・108)

205F区の南東隅にあり、土壌22の南2mに位置している。平面形は円形に近く、長径100cm、短径90cm、深さ15cmと、土壌22と同規模である。墳底は広い平坦面をもち、墳壁の傾斜は急ではない。埋土は淡灰色土1層で、灰黄色粘土の小塊が若干含まれる。遺物としては、底面から土師器の高台付碗の完形品が出土している。この土器の年代から、この土壌の年代は鎌倉時代の13世紀後半と考えられる。



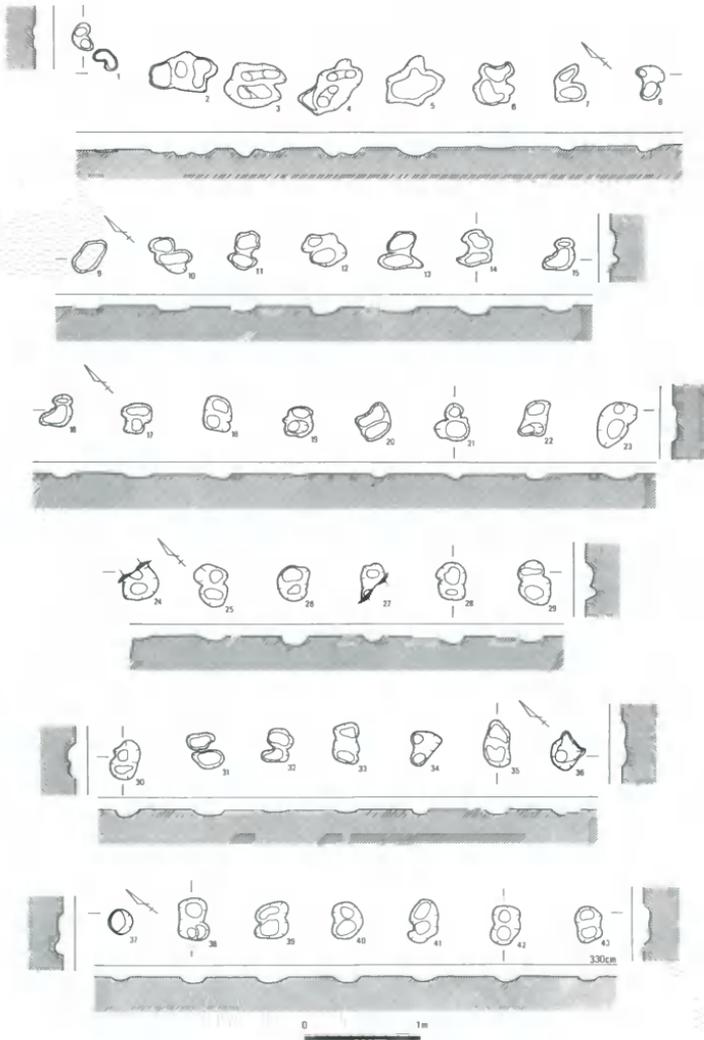
1. 淡灰色微砂 3. 灰色粘性土  
2. 灰色微砂 4. 灰黄色粘土斑暗灰色粘性土

第84図 土壌24

この土壌の性格であるが、前述の土壌22や、隣接する高縄手A調査区の土壌71～78と一連のものと考えられる。完形の土器を埋納するものが多く、一定地区に集中することなどから、墓地的な性格が強いものとみられる。 (岡本)

土壌24 (第84図)

206F区の中央付近に位置し、現代用水路の底面に検出された。平面形は三角形に近いが、これには、西半が用水路によって上方を大きく破壊されていることも考慮しなければならない。長径295cm、短径247cm、深さ47cmの大形土壌である。墳壁の傾斜はきわめて緩やかで、三角形の平坦な底面をもつ。埋土は2層で、下層には灰黄色粘土の小塊が含まれる。遺物と



第85図 柵1 (S=1/50)

しては中世とみられる土師器や須恵器の破片が少し出土している。

この土壌24と前述の土壌21は位置関係や規模・埋土の類似から、同じ性格の遺構ではないかと推測される。ちなみに、両土壌の距離は6.3mである。 (岡本)

## (2) 柵

### 柵1 (第85図、図版20)

205E区から205F区の南端まで、28.5mにわたって柱穴列が検出された。柱穴列はわずかに蛇行するものの、ほぼ直線的に北西から南東へ延びている。柱穴間の距離は心々間で65～67cm程度を測る。個々の柱穴は、そのほとんどが底部に2カ所の凹みを残し、なかには柱穴31のように2個の柱穴に分かれたものも認められる。この凹みは柱痕跡と考えられるため、各柱穴には2本の柱が立っていたこととなる。おそらく、2本の柱で1本の横木を挟むような構造ではなかったかと推測される。最大の柱穴3は長径54cm、深さ10cm、最小の柱穴37は長径22cm、深さは6cmである。どの柱穴も深さは10cm内外で浅く、残存状況の悪さを示している。一つの柱穴内の南北2個の凹みのうち、南側がより深いものが多いが、北側がより深いものもあり、明瞭な規格とはいえない。柱穴の埋土は明灰黄色粘質土である。半分ぐらいの柱穴から土器片の出土をみているが、明瞭に中世と考えられるものはなく、大きめの破片はすべて古墳時代のものである。

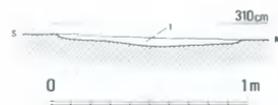
この柵と他の遺構との位置関係をみると、後述する溝34や溝35はこの柵に近づくとき湾曲し、柵とは交差しない。このことは、遺構の同時存在を考える上で注意される。 (岡本)

## (3) 溝

### 溝33 (第86図)

203B区と204B区の境界付近に位置する溝状遺構である。全長5.8m分を検出したが、溝底の高度からみて、もう少し西で終わると推定される。外形線は曲折がかなりあり、最大幅は100cmを測る。深さはわずか8cmにすぎない。全体の形状から判断して、流れのあった溝とは考えられない。埋土は灰黄色粘性土1層である。遺物は少なく、弥生時代後期の土器片も含まれるが、埋土から判断して中世の遺構と考えられる。

(岡本)



1. 灰黄色粘性土

第86図 溝33

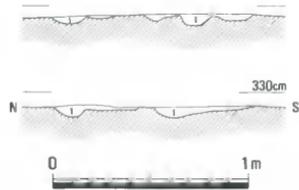
### 溝34 (第87図、図版20)

205E区の南部から205F区の南西隅にかけて検出された、『沢田2』の溝69'に連続する溝である。この溝は、2条の溝が部分的に分離したり、合体したりして

きている。2条の溝の幅は35cmと60cmあり、合体部分の幅は103cmを測る。深さは4~7cmと浅い。溝底には小さな凹凸がたくさんあり、平坦な底面は認められない。出土遺物は若干の土師器・須恵器片で、古代以降のものと考えられる。埋土は明灰黄色粘質土1層で、これから中世の遺構と判断される。(岡本)

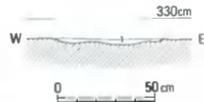
## 溝35 (第88図)

205 E区の北東隅から205 F区の南部中央付近へ湾曲しながら延びる。溝底の高度から判断すると、北から南へ流れていた可能性が強い。溝の幅は55cm、深さは3cmを測る。調査区の北端部分では急に幅が広がっているが、すぐ東に位置する土塙20と接続する可能性がある。その場合には土塙20の排水路という用途が考えられる。埋土は明灰黄色粘質土で、これから中世の遺構とみられる。(岡本)



1. 明灰黄色粘質土

第87図 溝34



1. 明灰黄色粘質土

第88図 溝35

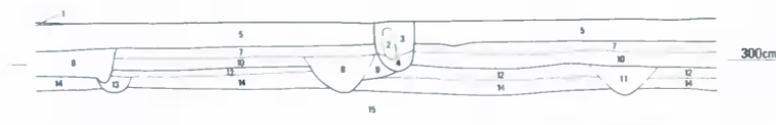
## 第2節 高縄手A調査区

### 1. 高縄手A調査区の概要

高縄手A調査区は、GラインからLラインまでで、全長108m、幅19mの広さをもつ。全面が微高地になり、百間川沢田遺跡の中心部にあたる。遺構・遺物としては、縄文時代晩期から近世のものまで連続とした継続が認められるが、とくに弥生時代前期と古墳時代前期においては大規模な集落の中心部分となり、多くの遺構・遺物の出土をみている。

第89図は206 I区の調査区北壁の土層断面図である。現代の水田層は除去されている。2～4層は奈良時代の建物の柱穴である。5層は古墳時代の洪水堆積の砂層と考えられる。6層は竪穴住居の埋土である。7層は弥生時代後期の包含層で、土器片や焼土が点々と含まれている。10層は7層より淡色の均質な土で、遺物をあまり含んでいなかった。12層は弥生時代前期の包含層で、上面が弥生時代前期の遺構の検出面になっている。遺構の多くはこの面で検出されている。14層は縄文時代晩期の包含層である可能性が高く、第90図に示した土器片などが出土している。15層は微高地の基盤の土で、土器の包含などは認められなかった。第91図は、弥生時代前期の環濠である溝36の断面が入った206G区の北壁土層断面図である。ここでは古墳時代の洪水砂層はなく、中世の包含層が2層残存している。5層は89図の7層に、6層は同図の10層に、15層は同図の12層に対応すると考えられる。

次に、各時代における遺跡の概要を述べたい。弥生時代前期には環濠集落が形成されている。環濠で囲まれた内部では、竪穴住居5軒や円形周溝2条が検出され、他に多くの土壇や柱



- |                    |                   |
|--------------------|-------------------|
| 1. 灰黄褐色粘性微砂        | 9. 暗灰褐色粘性土        |
| 2. 褐灰色粘性砂質土        | 10. 暗灰褐色粘性土       |
| 3. 暗灰褐色粘土斑灰褐色砂質土   | 11. 暗灰褐色粘性土(炭粒若干) |
| 4. 灰褐色微砂斑暗灰褐色粘性土   | 12. 灰褐色粘性土(土器片)   |
| 5. 淡灰褐色微砂(洪水砂層)    | 13. 灰褐色粘性土        |
| 6. 暗灰褐色粘性土         | 14. 灰褐色粘土斑黄褐色粘土   |
| 7. 暗灰褐色粘性土(土器片・焼土) | 15. 黄褐色粘土(地山)     |
| 8. 暗灰褐色粘性土(黄色粘土斑)  |                   |

0 2m

第89図 高縄手A調査区基本土層図 (S=1/60)

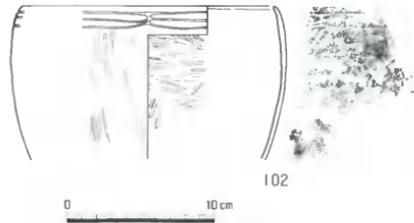
穴が認められた。土壌の中には墓状を呈するものもあり、円形周溝との存在とも関連して注目される。柱穴については建物としてまとめることができなかったが、掘立柱建物の存在も十分に推測される。環濠の外側でも土壌がかなり認められている。これらの遺構のほとんどが百・前・Ⅱと考えられる。環濠が埋没した百・前・Ⅲになると、東西方向に長く走る溝が数条と土壌がいくらか存在するにすぎなくなる。

弥生時代中期の遺構は検出されず、弥生時代後期には、水田が調査区の南端で少し入り込み、それに伴う溝の他、2条の溝が存在する。

古墳時代前期に入ると再び集落が形成される。竪穴住居12軒、掘立柱建物10棟、井戸7基など主要な遺構が集中している。竪穴住居では重複関係がみられ、数世代にわたる居住が考えられる。主要遺構の出土遺物をみると百・古・Ⅰから百・古・Ⅲにまで及び、掘立柱建物については竪穴住居より後出するものが多いとみられることから、4世紀から5世紀前半までは集落が継続していたと考えている。

奈良時代に入ると掘立柱建物3棟、井戸1基、溝1条が存在する。掘立柱建物は方形の柱穴掘り方をもって庇が伴い、井戸からは斎串や鎌の柄が出土するなど、一般の集落とは様相を異にしている。

中世には調査区の西端で墓状の土壌の密集がみられ、東端では南北方向の溝の集中がある。他には、溝や土壌が若干にすぎない。(岡本)



第90図 包含層出土遺物



- |                     |               |                     |
|---------------------|---------------|---------------------|
| 1. 暗灰橙色細砂           | 7. 褐灰色粘質土     | 12. 暗灰緑褐色粘質土        |
| 2. 暗灰色細砂            | 7. (7層より褐色強い) | 13. 暗灰緑色粘質土         |
| 3. 灰黄色粘土 } (中世包含層)  | 8. 褐灰色粘質土     | 14. 暗灰緑色粘土          |
| 4. 灰白色粘土 }          | 9. 暗灰褐色粘質土    | 15. 黄褐色粘質土(弥生包含層)   |
| 5. 褐灰色粘質土 } (弥生包含層) | 10. 褐灰色粘質土    | 16. 明黄褐色粘質土 } (基盤層) |
| 6. 褐灰黄色粘質土 }        | 11. 黄褐色粘質土    | 17. 緑灰黄色粘質土 }       |

第91図 溝36北壁断面図 (S=1/80)

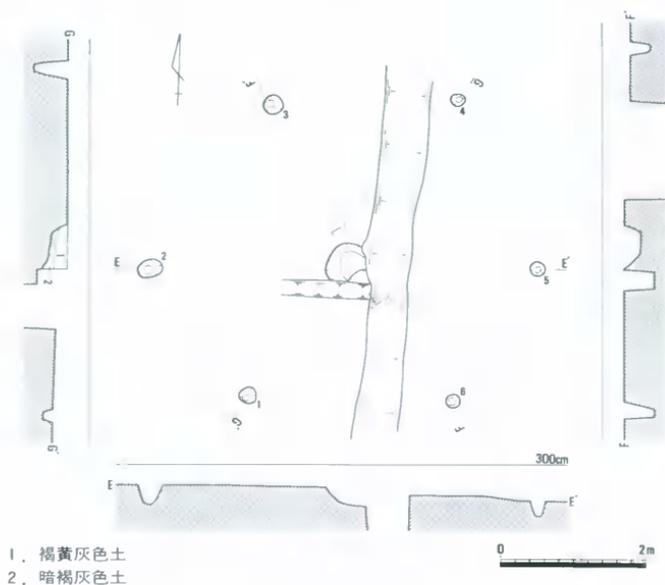
## 2. 弥生時代前期の遺構・遺物

### (1) 竪穴住居

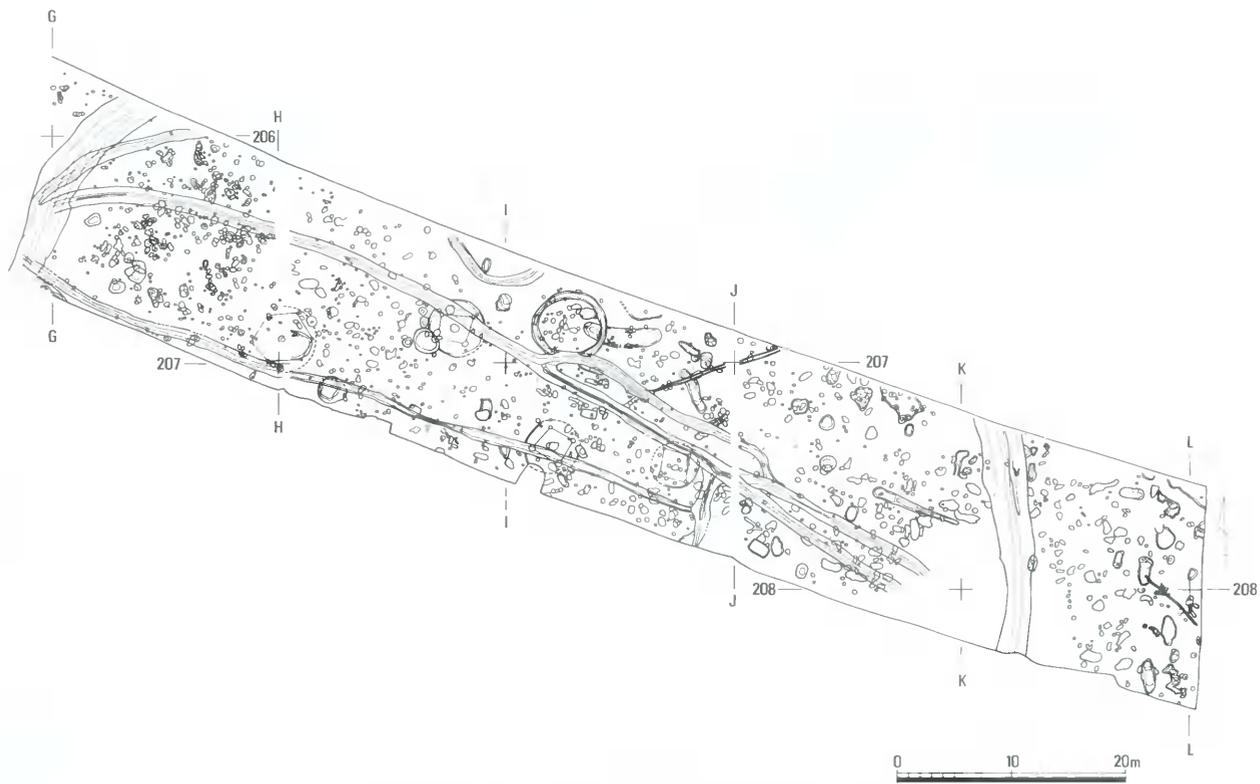
#### 竪穴住居5（第92図、図版22）

206G～H区にまたがって検出された。G区部分で褐色土の広がりが確認されたがはっきりとした平面としてとらえられなかったため、5～10cmほど掘り下げたところ、中央ピットを中心として3つの柱穴が確認された。併せて続きがあると思われる過年度調査のH地区の排土を行い、残りの柱穴を確認した。そのため住居の平面、壁体等は十分とらえることができなかった。

柱穴は全部で6つで、径6cm前後、深さ28～40cmである。埋土は暗褐色粘質土であった。それらの中心を結ぶ線は六角形をなし、やや東西に長い。中央ピットは側溝により切られており正確な数値は不明だが、残存部で長径70cm、短径60cm、深さ30cmほどである。中央ピット埋土中より多くの焼土、炭、サヌカイトチップ、土器小片が出土した。土器片は縄文晩期と弥生前期のものであった。住居の時期は土器からは前期としかいえないが、検出状況や中央ピットの類似から他の住居とはほぼ同じⅠ・前・Ⅱの遺構であろう。（阿部）



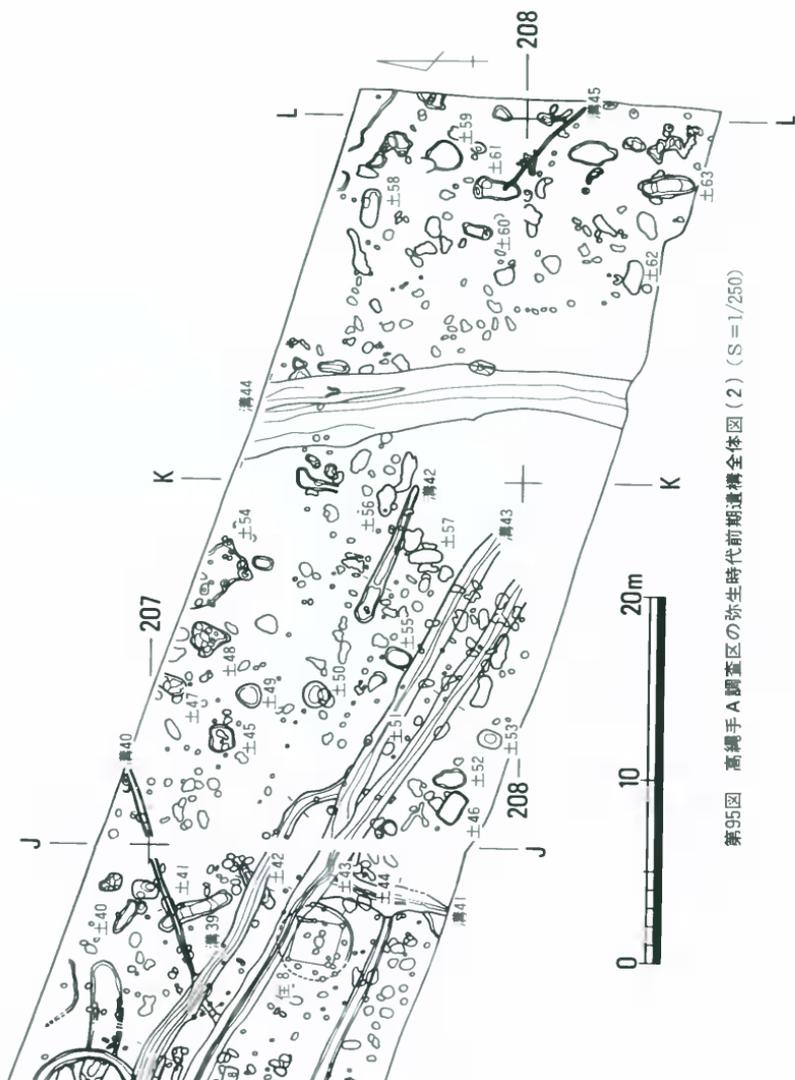
第92図 竪穴住居5



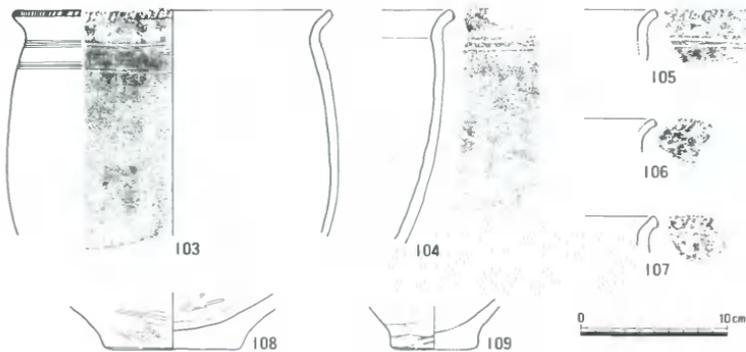
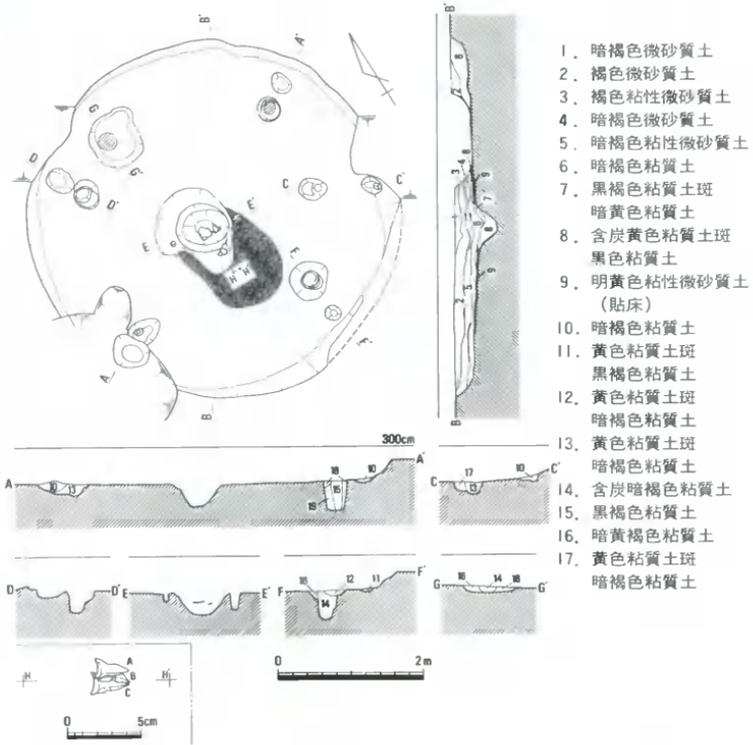
第93図 高縄手A調査区の弥生時代前期遺構全体図 (S=1/500)



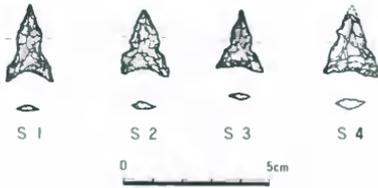
第94図 高縄手A調査区の弥生時代前期遺構全体図(1) (S=1/250)



第95図 高縄手A調査区の弥生時代前期遺構全体図(2) (S=1/250)



第96図 竪穴住居6・出土遺物(1)



第97図 竪穴住居6出土遺物(2)

このことから、当初は4本柱で建築され、後に補助柱が外側に追加されたものと考えられる。C、G断面のピットも追加の柱穴の可能性が高い。内側の柱穴は径約30cm、深さ約35cmを測り、いくつかでは柱材痕跡も認められるが、西側の柱穴のみがやや浅くなっている。住居跡中央には長径71cm深さ32cmの中央穴があり、その両側縁には径5cmと14cmの小ピットが認められる。床面は壁ぎわから約50cmのところまで若干下がって、そこから中央穴にむかってゆるやかな傾斜を示しており、貼床もこの部分に明瞭に認められた。なお、壁体薄は精査したが認められなかった。

床面にはサヌカイトの剥片・チップが多数散布しており、そのうち中央穴南側のスクリーントーンで示した範囲が最も剥片・チップの密度が著しかった。また、この部分では3点の石鏝が重ねて置かれた状態で出土している。石鏝はこの3点のほかにも2点出土しているが、いずれも同形で、凹基で両側縁に挟りを入れている。

土器は主に中央穴から出土しており(103~106)、他は床面および覆土からの出土である。このうち壺103では頸部をめぐる沈線が半截竹管によって施されており、他はヘラ描きである。出土土器から本住居跡は百・前・Ⅱに位置づけられる。(宇垣)

#### 竪穴住居7(第98図、図版24)

207 I 区の西部で検出された。検出時には外形線が不明瞭だったために発掘を誤り本来の縁の外側まで掘り下げてしまい、柱穴の検出によって掘りすぎに気付いた。このため、この住居の正確な規模は不明であるが、柱穴の位置から推定して、直径5m程度の円形の住居跡ではないかと考えられる。

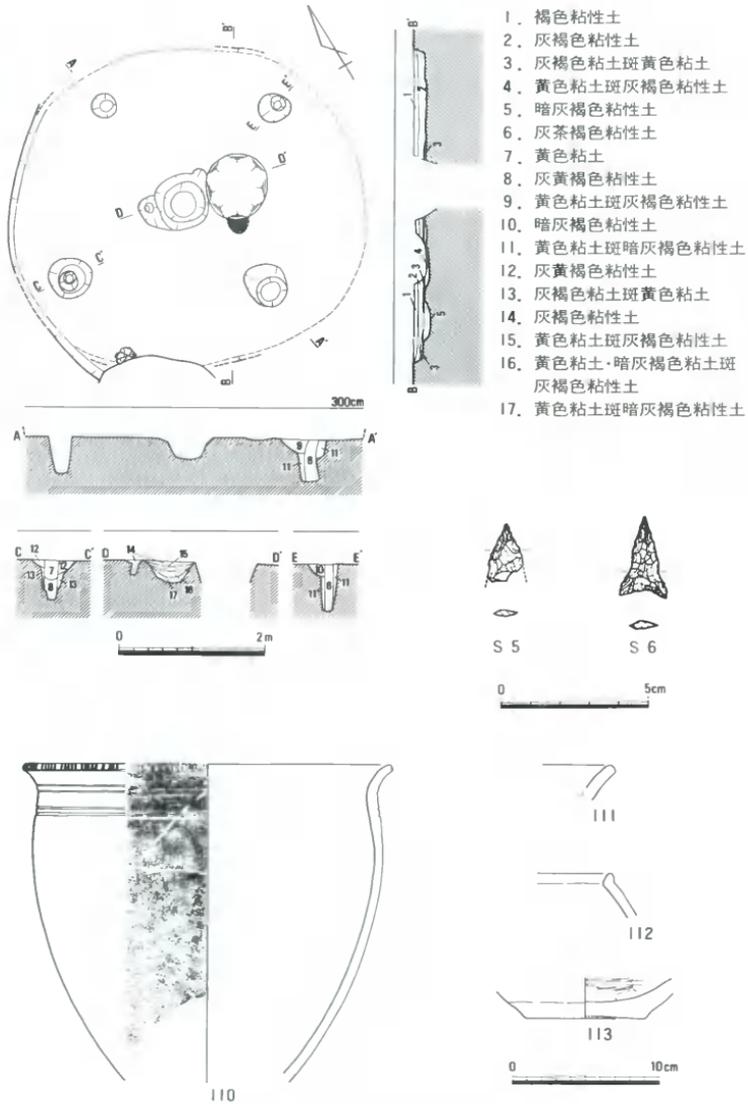
主柱穴は4本で、東西南北に配置されているが、柱穴の中心を結ぶ線は方形とはならず、歪んだ四角形となる。これは柱穴間の距離が揃っていないことによるが、とくに西柱穴と南柱穴の間隔が広い。柱穴の直径は34~64cm、深さは52~68cmを測り、柱穴の断面では柱痕跡が明瞭に認められた。柱痕跡から復元される柱の直径は20cmである。

住居の中央には長径78cmの円形に近い平面形をもつ土壇があり、深さは32cmであった。土壇内の埋土は4層(第98図14~17層)に分けられたが、14層には炭、焼土が若干含まれ、16層と

#### 竪穴住居6(第96・97図、図版23)

環濠内はほぼ中央で検出したもので、円形の平面をなし径5.05m、深さ30cmを測る。

A、F、D断面で示す4ヶ所のピットが主柱穴であり、いずれも内外2基が隣接している。内側の柱穴内には遺物が認められないのに対し、外側の柱穴の埋土にはサヌカイト剥片・チップが多量に含まれている。



第98図 竪穴住居7・出土遺物

17層はブロック状の混合土で、16層には点々と、17層では多量の炭が含まれていた。この土壌のすぐ西に直径14cm、深さ16cmの小穴が、やや内傾する形で検出され、他の例からみて、井戸5によって破壊された部分にもう1穴あり、対をなしていたものと推測される。この井戸5の南に接して、サヌカイトのチップの密集が認められた。

住居内の埋土は単純で、3層が貼床層と考えられ、それ以下の層は、住居掘り方の凹凸を埋めた土とみられる。床面までの深さは14~15cmと浅い。

出土遺物はかなりあり、土器片の他に石鏃が2点認められる。このうち完形の石鏃は、その独特の形状が竪穴住居6出土の石鏃と同型で注意される。製作・使用された時期がある程度限定されるのではないかと予測している。110の甕は床面から出土したもので、半截竹管による沈線が引かれている。

これらの土器や石鏃から、この住居の年代は百・前・Ⅱと考えられる。 (岡本)

#### 竪穴住居8 (第99図、図版24)

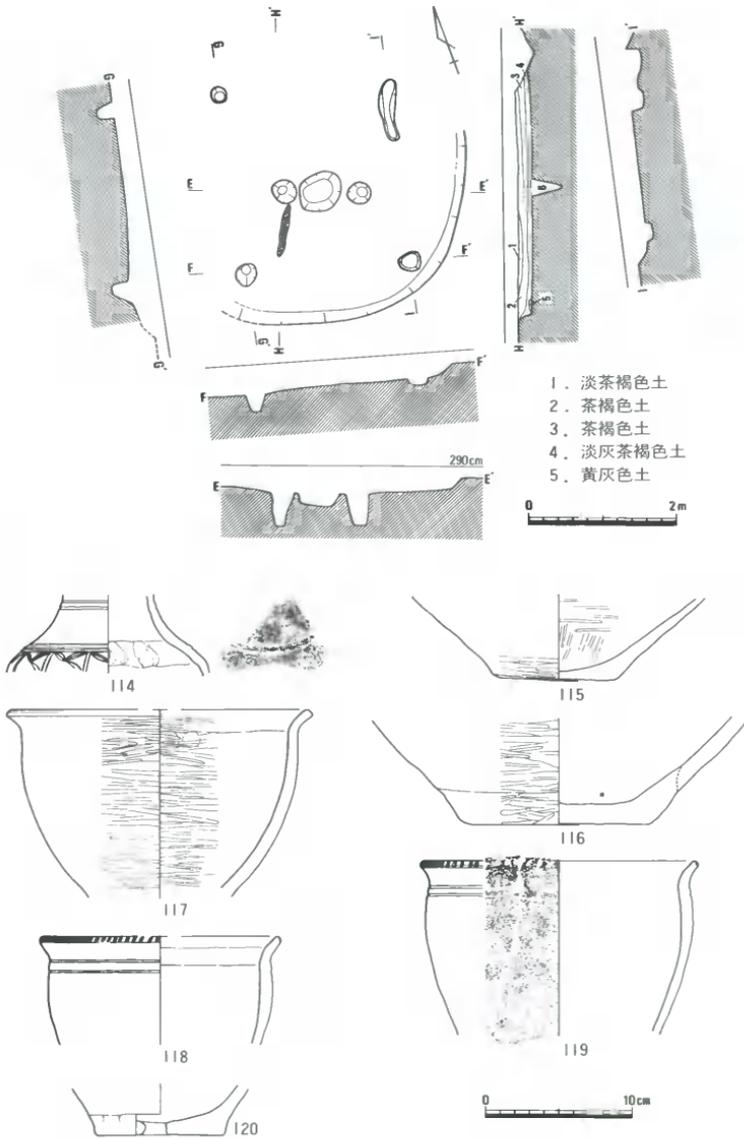
207 I 区の東部に位置し、前述の竪穴住居7からは東方へ6m離れている。北部は溝38によって破壊をうけている。この住居跡についても外形を明瞭に捉えることができず、実際よりはかなり大きく掘り下げてしまった。このために正確な規模については不明だが、東辺から南辺にかけての外形は、検出された柱穴の位置から判断して本来の線に近いと考えられるため、この住居の直径は4m程度と推測される。

住居の中央には長径65cm、短径52cm、深さ17cmの不整形な楕円形の土壌が検出された。その東側10cmと西側4cmには2個の柱穴状の穴があり、その直径は34cm、深さは45cmと47cmを測った。2個の穴の距離は心々で112cmであった。西側の穴の南には、長さ80cm、幅10cmにわたって、サヌカイトのチップの散乱が認められた。この2個の穴に挟まれた楕円形の土壌を住居の中央と考えて推定した住居範囲内には15個前後の柱穴が検出されたが、深さや位置関係から考え、図示した4個の柱穴が、この住居の柱穴ではないかと推測される。いずれの柱穴も、中央穴の両側の穴より規模が小さいため、住居の構造としては、中央穴の両側の柱で棟を支え、周囲の4つの柱が、それを補強するような役目をもっていたのではないかと想像される。周囲の4個の柱穴は直径22~32cm、深さ9~24cmを測り、南西の柱穴のみはかなり浅い。

この住居の埋土は単純な堆積で、4層に分けられた。貼床らしい層は認められなかった。住居周辺からの土砂の流入によって埋没したものであろう。

出土土器はかなりあった。114は中央穴から出土した壺で、頸部に2条の沈線、肩部には両側を沈線で描いて突帯風にみせた横帯の下に、横走る1条の沈線と2条の縦線で区画した中に有軸木葉文を連続して描いている。116も中央穴出土で壺の底部である。甕の頸部の沈線は2条である。

これらの土器の示す年代から、この竪穴住居の時期は百・前・Ⅱと考えられる。 (岡本)



第99図 竪穴住居8・出土遺物

(2) 土壌

土壌25 (第100図)

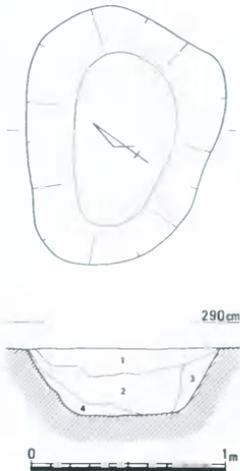
ややいびつな楕円形で、短径100cm、長径135cmを測る。土壌26とはほぼ同規模だが、深さは検出面より35cmである。遺物は顕著なものはないが土壌26と同時期のものであろう。(阿部)

土壌26 (第101図、図版25)

短径111cm、長径135cmを測るややいびつな楕円形をした土壌である。深さは60cmで、やや袋状の断面を呈する。底部より、肩部から上を欠いた前期の壺が出土している。(阿部)

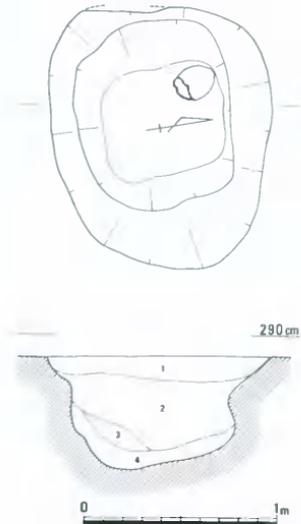
土壌27 (第102図)

207H区の北西隅に位置する。検出面で長径250cm、短径240cm、深さ53cmを測る大形の土壌である。墳壁は、上端部では緩い傾斜をもつが、途中に肩があり、そこから垂直に近く落ち込む。この肩部の線でみると、土壌の平面形はやや角張った楕円形を呈し、長径209cm、短径



1. 淡暗黄褐色粘質微砂
2. 暗黄褐色粘質土(炭粒含)
3. 暗黄褐色粘質土(炭粒少含)
4. 暗黄褐色粘質土

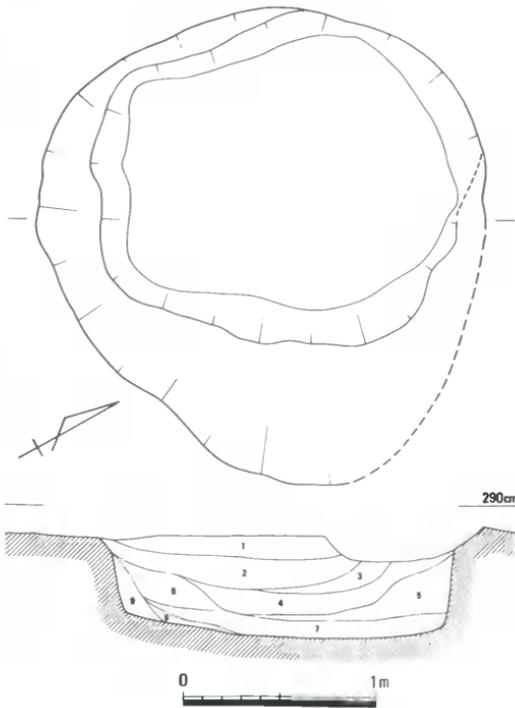
第100図 土壌25



1. 黄褐色粘質土
2. 褐黄色粘質土
3. 暗褐黄色粘質土
4. 暗褐黄灰色粘土

第101図 土壌26

2. 弥生時代前期の遺構・遺物

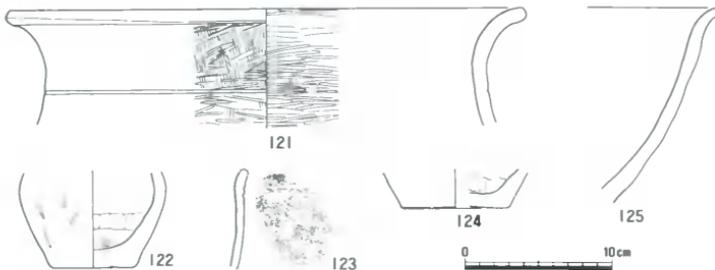


1. 茶褐色土 2. 暗茶褐色土 3. 茶褐色土  
 4. 淡黄茶褐色粘質土 5. 茶褐色土 6. 淡灰茶褐色土  
 7. 灰茶褐色土 8. 灰茶褐色土 9. 淡灰黄褐色土

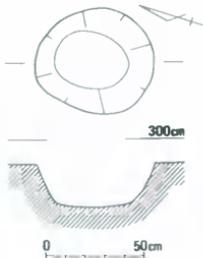
176cmを測る。底面はわずかに凹面となるが、平坦に近い。埋土は複雑で9層に分けられ、色調の濃淡が交互に繰り返されるようで、一時の埋没とは考えにくい。出土遺物は少ないが、包含された土器には大型壺や鉢の破片があり、年代は百・前・Ⅱと考えられる。(岡本)

土壌28 (第103図)

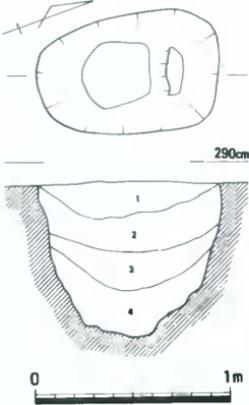
206H区の中央付近で検出された、平面形が歪んだ円形を呈する土壌である。長径62cm、短径55cm、深さ22cmを測る。遺物として、弥生時代前期の土器片が少し出土している。(岡本)



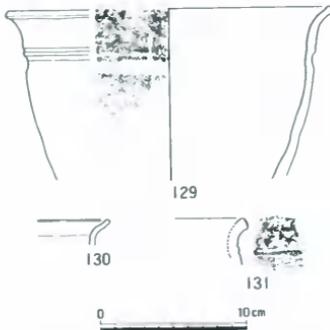
第102図 土壌27・出土遺物



第103図 土壙 28



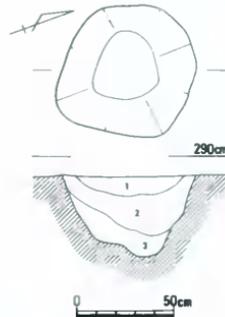
1. 黄褐色斑茶褐色粘性土
2. 黄茶褐色粘性土
3. 淡黄茶褐色粘性土
4. 黄褐色斑暗黄茶褐色粘性土



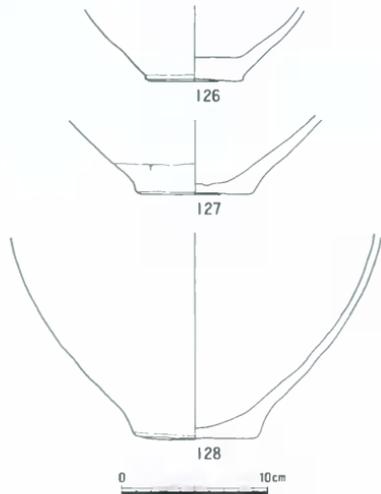
第105図 土壙 30・出土遺物

土壙29 (第104図)

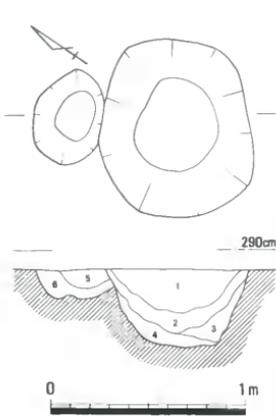
206H区の南部中央付近に位置する。平面形は隅丸方形で、長軸70cm、短軸66cm、深さは43cmである。壙壁の傾斜は急角度で、底面には凹みが認められた。埋土は3



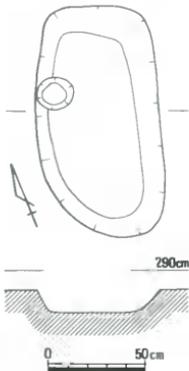
1. 淡黄褐色粘性土
2. 黄褐色粘性土
3. 黄褐色斑茶褐色粘性土



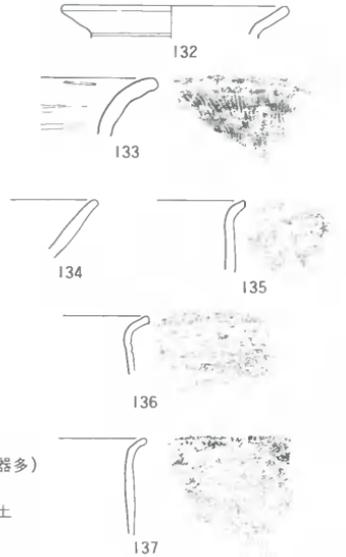
第104図 土壙 29・出土遺物



1. 淡茶褐色粘性土
2. 暗茶褐色粘性土(炭・土器多)
3. 黄褐色斑茶褐色粘性土
4. 茶褐色斑暗黄褐色粘性土
5. 黄茶褐色粘性土
6. 淡黄茶褐色粘性土



第107図 土壌32



第106図 土壌31・出土遺物

層に分けられ、2層と3層では炭粒が含まれていた。各層とも中央部分が厚くなっている。遺物としては若干の土器片があるが、底部のみで、弥生時代前期としかわからない。(岡本)

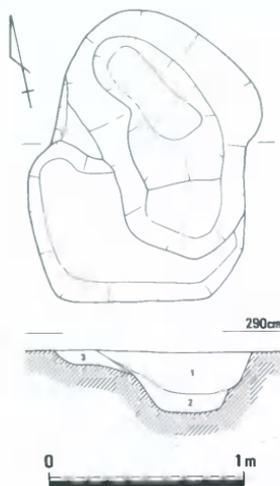
土壌30 (第105図)

206H区の南部、先の土壌29の南8cmに近接する。やや角張った楕円形の平面形をもつ。長径94cm、短径65cm、深さ81cmを測る。墳壁の傾斜は急角度で、底面は二段になっているが、あまり平坦ではない。埋土は4層に分けられる。1層では炭粒が少量含まれ、2層では炭粒と土器片が若干含まれるが、4層ではそれらより多くの炭粒や土器片が包含されている。出土遺物は少量の土器片であるが、その年代は百・前・Ⅱと考えられる。(岡本)

土壌31 (第106図、図版25)

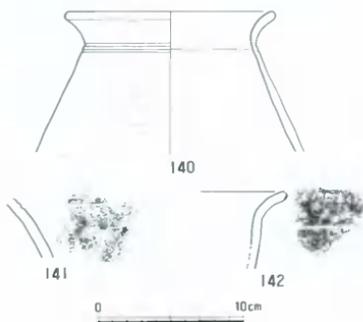
やはり206H区の南部中央付近にあって、土壌30の南西1.4mに接近して位置する。検出時には一つの土壌とみていたが、発掘によって接触する二つの土壌であることが判明した。ここでは南側の大きい土壌を土壌31として記述する。平面形は楕円形で、長径94cm、短径80cm、深さは41cmである。墳壁の傾斜はかなり急で、底面はやや凹面となる。埋土は4層に分けているが、3層と4層は類似している。2層には炭や土器片が多量に含まれていた。

出土遺物はやや多く、土器片の他に、石鏃がある。出土した土器には逆「L」字状口縁の甕は認められず、百・前・Ⅱの年代が与えられる。(岡本)



第108図 土壌33・出土遺物

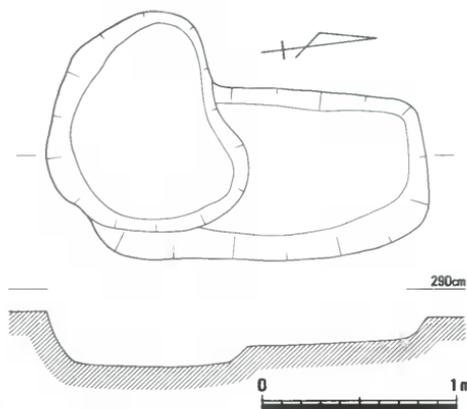
1. 暗茶褐色粘性土
2. 暗黄褐色粘性土
3. 黄褐色粘性土



土壌32 (第107図)

206H区の東端にあり、後述する円形周溝1の内側に位置する。長方形に近い平面形をもち長軸124cm、短軸64cm、深さ11cmを測る。底面は

2. 弥生時代前期の遺構・遺物

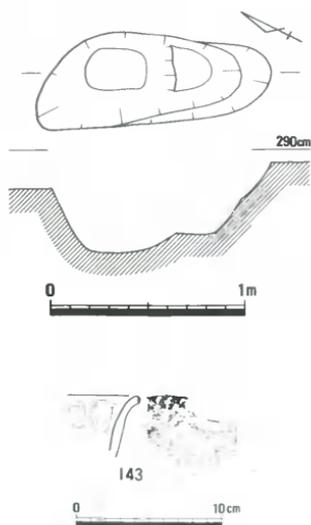


第109図 土壌33

平坦で、断面図は台形を呈する。出土遺物はなかったが、土層関係から弥生時代前期の遺構と考えられる。(岡本)

**土壌33 (第108図)**

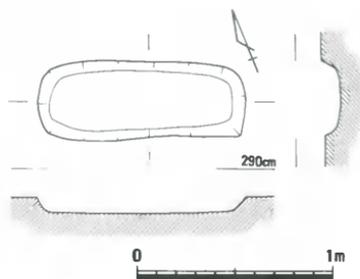
206H区と206I区との境界に位置する。平面形は不整形で、底部は階段状を呈している。土壌の南西部に深さ16cmの一段目があり、そこから6cm下がった二段目が土壌の南東部にある。最深部分は土壌の北半にあり、検出面からの深さは32cmを測る。土壌全体では長径160cm、短径115cmである。土層断面観察によれば、2基の土壌の重複したものである可能性が高い。1層に土器が含まれている。出土遺物は少ないが、土器の年代は百・前・Ⅱとみられる。(岡本)



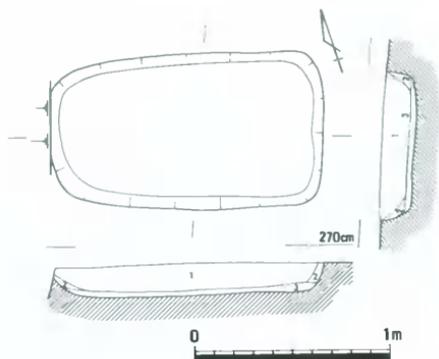
第110図 土壌35・出土遺物

**土壌34 (第109図)**

207H区の東端で検出された。やはり、2基の土壌の重複である可能性が高い。西側の不整形な楕円形の土壌は長径120cm、短径104cm、深さ29cmを測る。東側の土壌は長方形で、長軸174cm、短軸94cm、深さ13cmである。



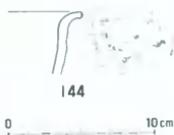
第111図 土壌36



る。出土遺物はなく、土層関係から弥生時代前期の遺構と考える。(岡本)

土壙35 (第110図)

207 I 区の北端にあり、溝39によっ

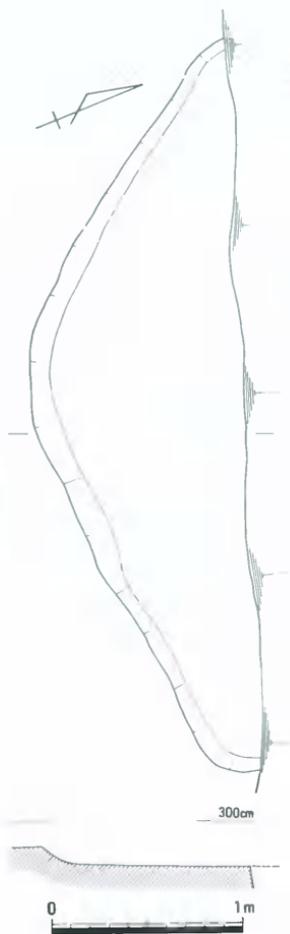


1. 灰黄褐色粘性微砂
2. 褐灰黄色粘性微砂
3. 灰黄褐色粘性微砂

第112図 土壙37・出土遺物



第113図 土壙38・出土遺物



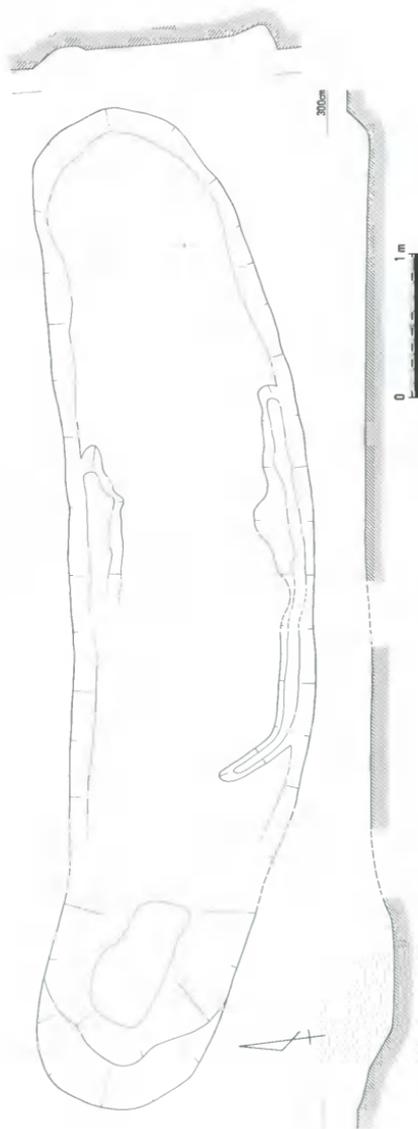
て一部破壊を受けている。細長い楕円形の平面形をもち、底部は2段になっている。墳壁の傾斜はかなり急である。長径126cm、短径50cmを測り、深さは浅い段で37cm、最深は47cmである。遺物がいくらか出土している。出土土器の年代は百・前・Ⅱである。(岡本)

#### 土壌36 (第111図)

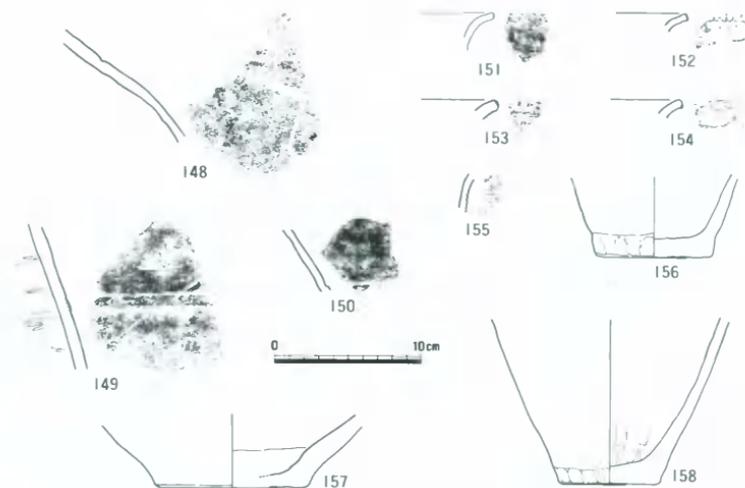
207 I 区の北端に位置する。平面形は長方形で、長軸110cm、短軸42cm、深さ10cmを測る。底面はほぼ平坦で、断面形は台形を呈する。形態から土壌墓を想わせるが、埋土は淡黄褐色粘性土のみで、棺痕跡等は検出されなかった。遺物は少なく、出土土器は細片のため時期は明確でない。(岡本)

#### 土壌37 (第112図、図版26)

207 I 区の北部で検出された。長軸を東西方向におく長方形の平面形をもつ土壌で、東側の短辺が西側の短辺より長くなっている。長軸140cm、東側短辺長80cm、西側短辺長60cm、深さ17cmを測る。埋土は上層の断面観察によって3層に分けられる。色調的には類似しているが、1層は黄褐色粘性微砂の小塊をかなり含み、3層は粘性が強いというように土質を異にしている。2層のありようからすると、木棺の側板が存在していた可能性が強く、土壌墓と考



第114図 土壌39



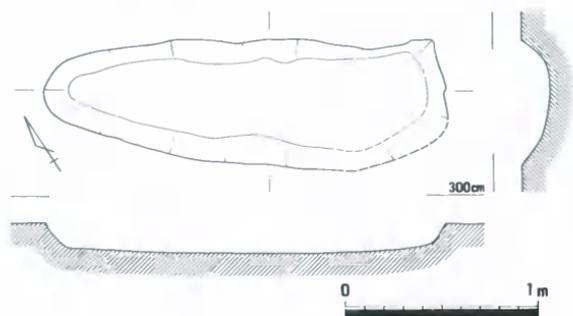
第115図 土壙39出土遺物

えられそうである。3層は墓底を整えた土、2層は棺と墓壙の間につめられた土、1層は棺を埋めた土と推測される。

遺物が若干出土している。図示した土器は甕で、口唇部に刻目を施し、胴部は無文である。百・前・Ⅱであろうか。(岡本)

土壙38 (第113図)

206 I 区にあり、調査区の北端で部分的に検出された。検出部分の形状は鈍角三角形で、その



第116図 土壙40

長辺部分の長さは384cmを測る。深さは11cmとごく浅い。出土遺物はわずかだが、縄文時代晩期の土器片と弥生時代前期の土器片が出土している。百・前・Ⅱ期の遺構ではないかと考えられる。

(岡本)

## 土壙39 (第114・115図)

206 I 区の南部中央付近に位置する大形の土壙である。円形周溝2によって一部を破壊されている。全体の形状は少し湾曲したへちまのような形で、両端が丸くなっている。長径は522cm、短径173cmを測る。底部は広い平坦面をもち、西端部分では一段深い凹みがある。この凹みの深さは27cm、広い平坦面の深さは17cmである。中央付近の底面の両側には、深さ4～6cmの細長い溝状の凹みがあり、南側のもは西端部が内側へ曲がり込む。埋土は一層である。

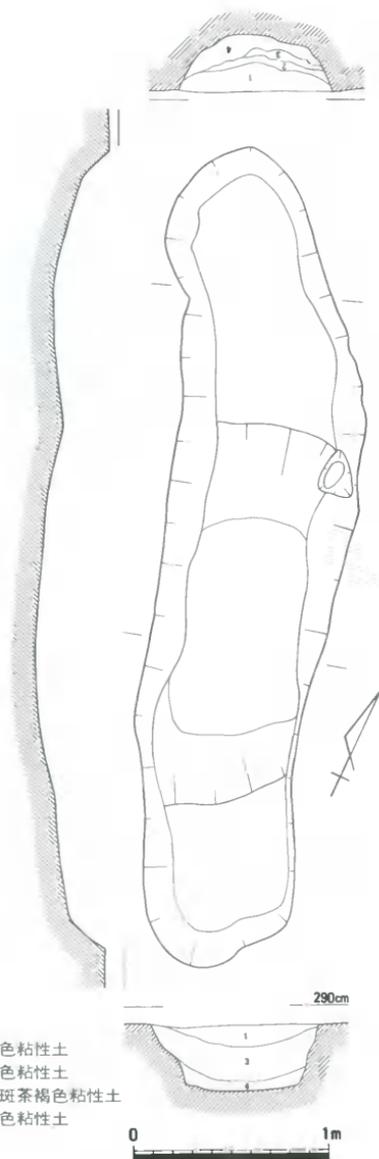
出土遺物がいくらかみられる。土器には削り出し突帯をもつ大型壺の破片や如意状口縁の甕があり、百・前・Ⅱと考えられる。(岡本)

## 土壙40 (第116図)

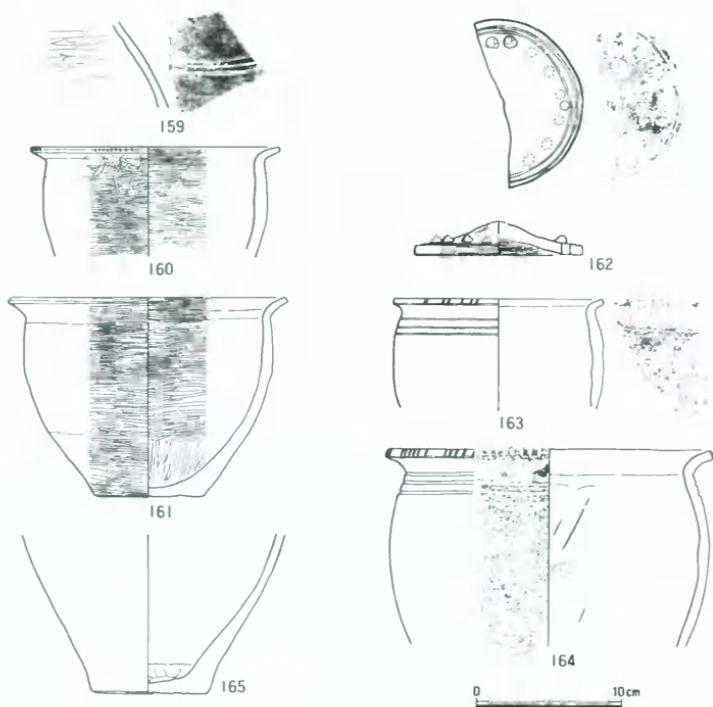
206 I 区の南西隅で検出された。細長い平面形を持ち、北端は丸く、南端は角張っている。長軸の方向は北西から南東である。長径210cm、短径70cm、深さ16cmを測る。底面は広いが、かすかな凹面となっている。埋土は一層である。出土土器が少しあるが小片で、弥生時代前期としか判断できない。(岡本)

## 土壙41 (第117図、図版26・109)

207 I 区の北東隅に位置する長大な土壙である。全長426cm、幅101cm



第117図 土壙41



第118図 土壙41出土遺物

を測る。平面形はかすかにS字状に屈折しているようにみえる。南北両端ともに隅丸の長方形に近い形をしている。底部は段構造をなし、中央部分が、北側で10cm、南側で6cmの段差で落ち込む。中央部分の深さは検出面から39cmを測る。第117図の横断面をみると、北側と南側の高い段の底面はかなり丸く凹んでいるが、中央部の落ち込みは底面が平坦で、壙壁の傾斜も急角度のため、断面形は台形に近くなっている。埋土は4層に分けられる。1・3・4層は壙内全体に認められたが、2層は北側の高い段の部分にしかないようである。2層には小石が多量に含まれていた。4層は土壙の縁辺で厚く、中央部では薄い。3層は逆に中央部で厚くなっている。

出土遺物はかなりあり、石鉄やサヌカイト片と土器がある。出土した土器のなかには大きな破片がみられ、160や162は1/2程度の残存、161は口縁から底部まであり、2/3の残存率であった。土器の示す年代は百・前・Ⅱと考えられる。

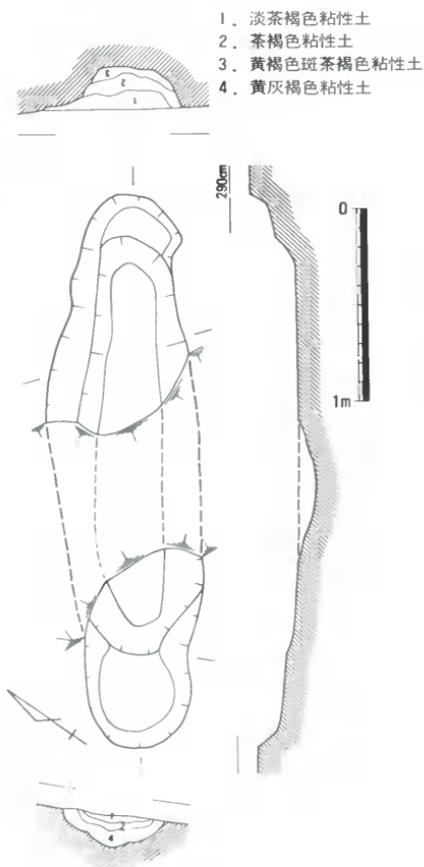
なお、この土壙は溝40によって一部破壊をうけている。

(岡本)

## 土壌42 (第119図)

207 I 区の東端にあり、溝39によって中央部を大きく破壊されている。長径286cm、短径推定80cmの細長い平面形を呈し、両端は丸くなっている。底部は階段状で、東西両端に狭い平坦面があって、中央部が一段深く落ち込む。中央部の凹みの長径は216cmを測る。底面はほぼ平坦で、中央部の断面形は台形に近い。埋土は、土層断面実測面ではそれぞれ3層からなっているが、最下層は黄褐色粘土斑の有無で相違が認められる。出土遺物は少ないが、百・前・Ⅱの土器片が認められる。

(岡本)



第119図 土壌42

## 土壌43 (第120図)

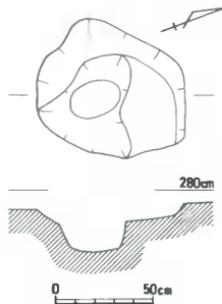
207 I 区の東端付近で検出された。

溝41に破壊されている。平面形は方形に近く、長径84cm、深さ25cmを測る。底部は、深さ9cmの底面の南部が一段深く落ち、底面径28cm、段差16cmの柱痕様の凹みができている。このような形状から柱穴である可能性が強い。出土土器は少なく、弥生時代前期のものとは判断できない。

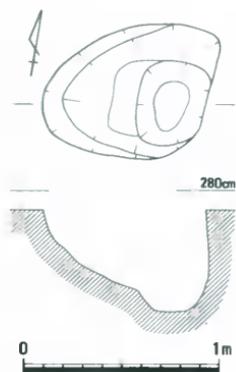
(岡本)

## 土壌44 (第121図)

前述の土壌43のすぐ南12cmに近接している。東半は溝41によって削られているが、楕円形の平面形をもっていた



第120図 土壌43



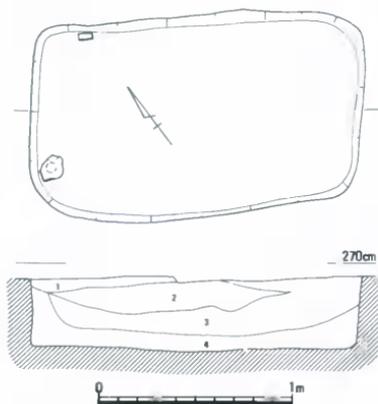
第121図 土壌44・出土遺物

土壌45

207J区の北西寄りで検出された土壌である。平面形はやや歪んだ隅丸長方形を呈する。底は平坦であるが、穴が3個所穿たれている。埋土は茶灰色土で、遺物は出土しなかった。時期は検出面から前期と考えられる。(平井勝)

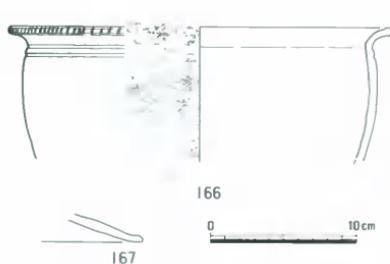
土壌46 (第122図)

207J区の南西端で検出された土壌である。平面形は長方形を呈し、長さ1.7m、幅1.07mを測る。底は平坦で、壁は垂直に立

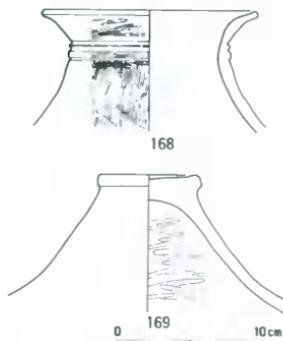


1. 灰黄色粘質土 2. 暗灰色粘質土  
3. 黄灰色粘質土 4. 暗黄灰色粘質土

第122図 土壌46・出土遺物



と推定される。残存長径は86cm、深さ47cmである。この土壌も底部の東側に長径44cm、短径36cm、深さ14cmの柱痕跡状の凹みが認められた。柱穴である可能性が高い。出土した土器片は少ないが、図示のような甕や蓋があり、百・前・Ⅱではないかとみられる。(岡本)



上り、深さ40cmを測る。遺物は土器がわずかに出土した。168は壺で、口縁部と頸部の境に削り出しの突帯がめぐる。169は蓋で、内面は丁寧に磨かれている。時期は百・前・Ⅱである。

(平井勝)

#### 土壌47 (第123図)

207J区北端中央で検出された長楕円形の土壌である。底には浅い穴が穿たれている。遺物は土器がわずかに出土したが、詳細な時期は不明である。検出面からは前期と考えられる。(平井勝)

#### 土壌48 (第124図)

207J区の北端寄りで検出された不整形な土壌である。底面にはさらに穴が穿たれ、凹凸が著しい。埋土は茶灰色上である。遺物は土器がわずかに認められ、前期と考えられる。(平井勝)

#### 土壌49 (第125図、図版109)

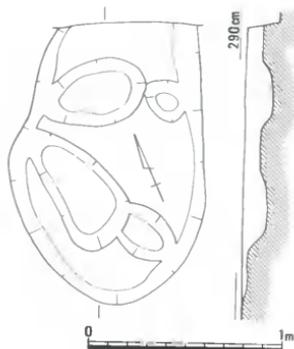
207J区の北寄りで検出されたほぼ円形を呈する土壌である。壁は急斜に立上り、底は平坦であるが、南端の壁ぎわに穴が穿たれている。遺物は、土器が南端で2個体まとまって出土した。いずれも壺で、百・前・Ⅱと考えられる。(平井勝)

#### 土壌50 (第126図)

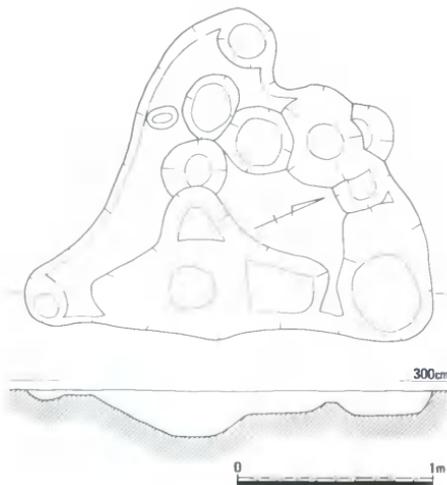
207J区の中央近くで検出された円形の土壌で、径約1.43mを測る。壁は急斜に立上り、底はほぼ平坦である。遺物は、土器が南端の壁ぎわから出土した。図示したのは2点で、壺の口縁部と底部である。百・前・Ⅱと考えられる。(平井勝)

#### 土壌51 (第127図、図版109)

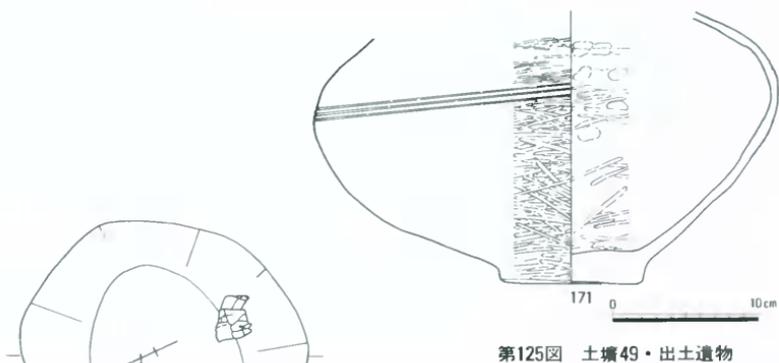
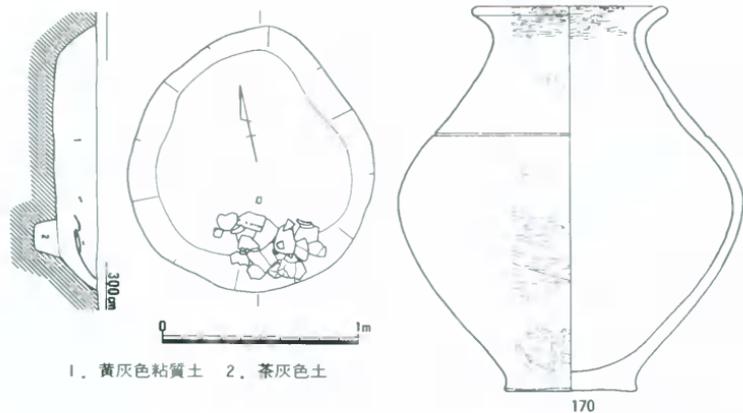
207J区の西南寄りで検出された楕円形の土壌である。検出面では長径70cm、深さ5cmあまりであるが、土壌内の遺物と考えられる土器の出土状況から、もう少し高



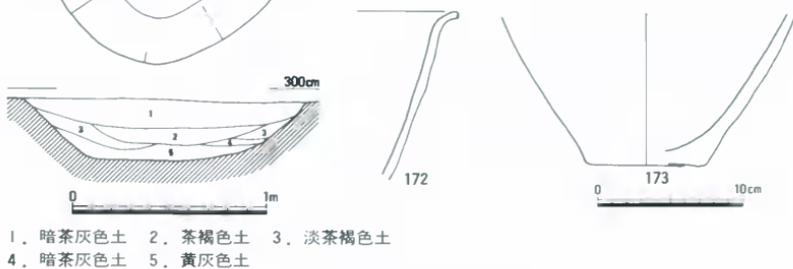
第123図 土壌47



第124図 土壌48

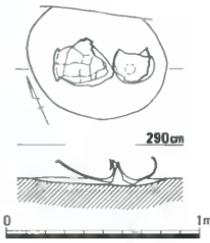


第125図 土壙49・出土遺物



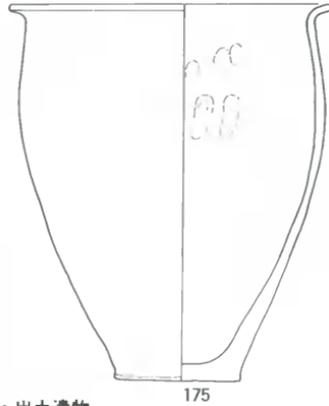
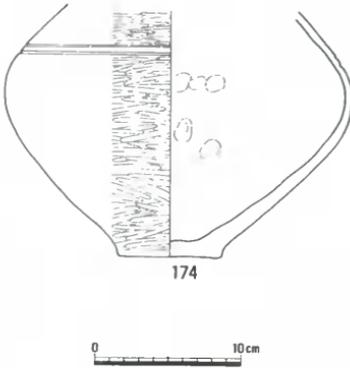
第126図 土壙50・出土遺物

2. 弥生時代前期の遺構・遺物

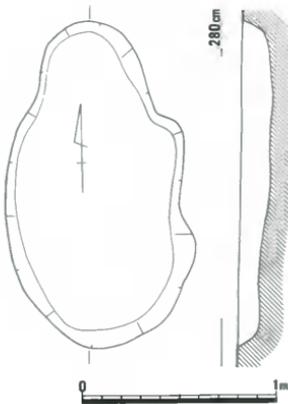


い位置から掘り込まれていたと推定され、規模ももう少し大きかったであろう。土壌内には壺と甕が口縁部を上にして置かれていたが、上部が削平されたような状態で、壺は口縁部が、甕は口縁部から胴部の一部が欠けていた。

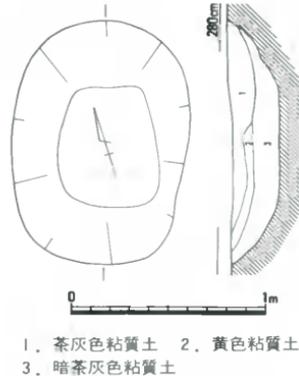
土器は174の壺と175の甕である。174は頸部と胴部の境界に沈線が2条めぐる。175は如意状の口縁部をもつ甕で、口縁端部に刻目はない。百・前・Ⅱと考えられる。（平井勝）



第127図 土壌51・出土遺物



第128図 土壌52



1. 茶灰色粘質土
2. 黄色粘質土
3. 暗茶灰色粘質土

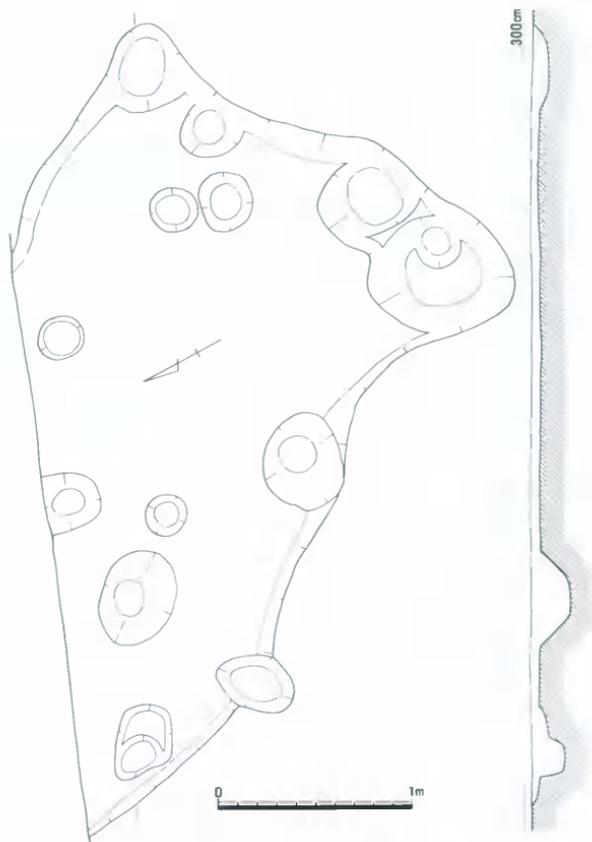
第129図 土壌53

土壌52 (第128図)

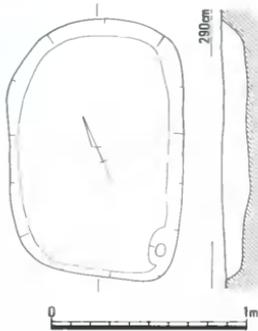
207J区の南西端近くで検出された長楕円形を呈する土壌である。壁は急斜に立上り、底はほぼ平坦である。埋土は茶灰色粘質土である。遺物は土器がわずかに出土し、前期と考えられる。(平井勝)

土壌53 (第129図)

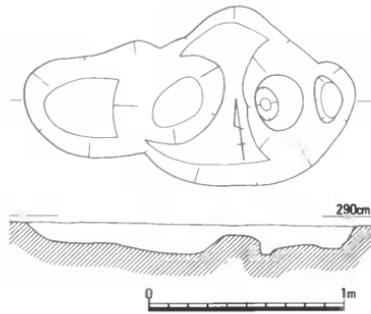
207J区の南端で検出された隅丸長方形を呈する土壌である。壁はやや緩やかに立上り、底は平坦である。長さ1.26m、幅89cm、深さ24cmを測る。遺物は突帯文土器と前期の土器がわずかに出土した。(平井勝)



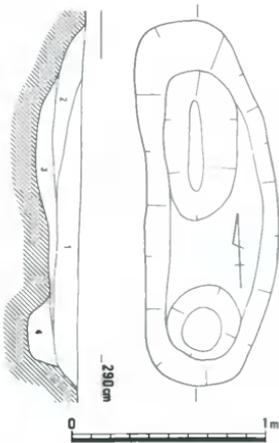
第130図 土壌54



第131図 土壙55

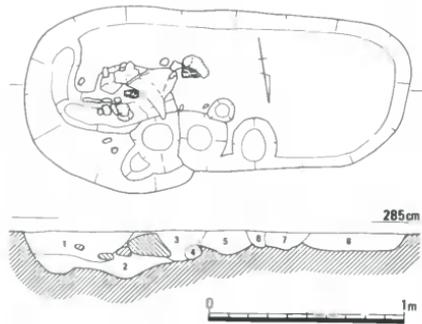


第132図 土壙56



1. 暗灰色粘質土 2. 暗灰色粘質土  
3. 茶灰色粘質土 4. 茶灰色粘質土

第133図 土壙57



1. 黄灰色土(炭多く含む) 2. 黄灰色土 3. 黄灰色土(炭多く含む)  
4. 赤褐色土 5. 淡茶灰色土 6. 茶灰色土 7. 淡茶灰色土  
8. 黄茶灰色土  
〈断面の斜線塊は焼土塊〉

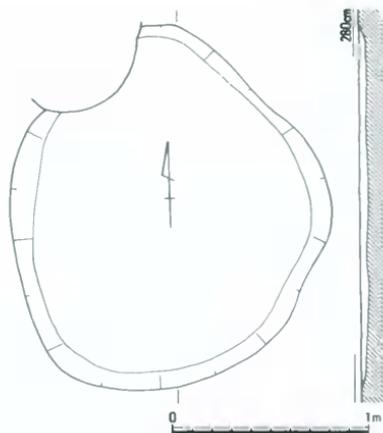
第134図 土壙58

土壙54 (第130図)

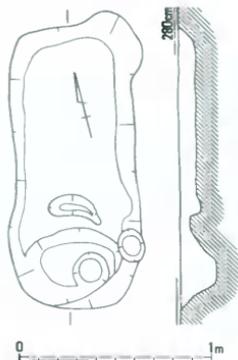
207J区の北東寄りで検出された不整形な土壙である。深さは10cmあまりと浅く、底はほぼ平坦であるが、多くの穴が不規則に穿たれている。埋土は茶灰色土である。遺物は出土しなかったが、検出面から前期と推定される。(平井勝)

土壙55 (第131図)

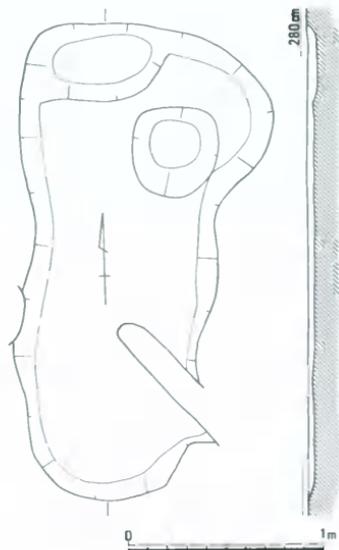
207J区の中央やや南寄りで検出された隅丸長方形の土壙である。壁は急斜に立上り、底はほぼ平坦である。長さ1.35m、幅88cmを測る。埋土は茶褐色粘質土で、炭や焼土粒を含む。遺



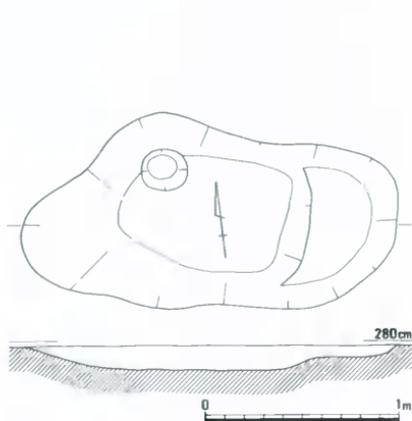
第135図 土壌59



第136図 土壌60



第137図 土壌61



第138図 土壌62

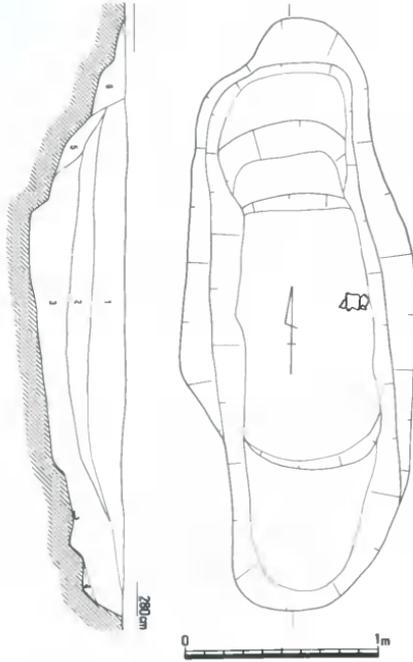
物は出土していないが、検出面から前期と考えられる。

(平井勝)

土壌56 (第132図)

207 J 区の東端中央で検出された不整形な土壌である。切り合い関係などは確認できなかったが、長楕円と円形を呈する2つの土壌であった可能性もある。底は穴が穿たれ、凹凸が著しい。埋土は黄灰色土である。遺物は出土しなかったが、検出面から前期と考えられる。

(平井勝)



1. 暗褐色粘質土 2. 暗茶灰色粘質土  
 3. 暗灰色粘質土 4. 茶灰黄色粘質土 5. 暗灰色粘質土  
 6. 暗灰色粘質土(黄色土ブロック含む)

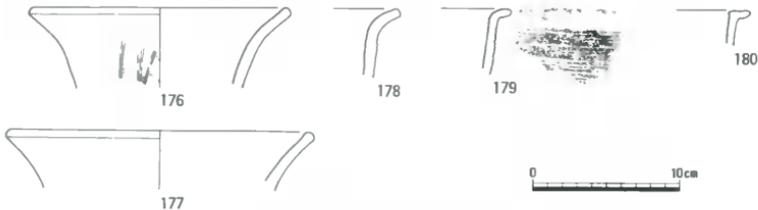
土壌57 (第133図)

207 J 区の南東寄りで検出された隅丸長方形の土壌である。壁は緩やかに立上り、南北両端の底には浅い穴が穿たれている。遺物は土器がわずかに出土しており、百・前・Ⅱと考えられる。

(平井勝)

土壌58 (第134図)

207 J 区の中央やや東寄りで検出された隅丸長方形の土壌である。長さ1.92m、幅97cmを測る。壁は急斜に立上り、底は東側に向かって凹凸を繰り返しながら深くなる。埋土はブロック状をなしており、20~30cm大の、焼土塊を含んでいる。遺物は出土していない



第139図 土壌63・出土遺物

いが、検出面から前期と考えられる。

(平井勝)

土壌59 (第135図)

207K区の南東寄りで検出された楕円形の土壌である。検出面からの深さは5cmあまりと浅く、底は平坦である。埋土は茶灰色土である。遺物は出土していないが、検出面から前期と推定される。

(平井勝)

土壌60 (第136図)

207K区の南東寄りで検出された隅丸長方形の土壌である。長さ1.48m、幅61cmを測る。壁は急斜に立上り、底は平坦であるが、南端には穴が穿たれている。埋土は茶灰色土である。遺物は出土していないが、検出面から前期と考えられる。

(平井勝)

土壌61 (第137図)

207K区の南端東寄りで検出された隅丸長方形の土壌である。南東側は溝45に切られている。長さ2.42m、幅90cmを測るが、深さは検出面から5cmあまりである。埋土は茶灰色土である。遺物は出土しなかったが、検出面から前期と考えられる。

(平井勝)

土壌62 (第138図)

208K区の中央やや北寄りで検出された土壌である。大略隅丸長方形を呈するが、北西側が北に張り出しており、やや不整形となっている。壁は緩やかに立上り、中央部の底は平坦であるが、東側は一段高くなっている。埋土は茶灰色土である。遺物は出土していないが、検出面から前期と考えられる。

(平井勝)

土壌63 (第139図)

208K区の東端中央近くで検出した隅丸長方形の土壌である。長さ3.08m、幅1.18m、深さ48cmを測る。土壌は段状に掘り込まれており、特に北側は4段にもなる。埋土はレンズ状に堆積しており、下層には炭を多く含んでいる。遺物は土器が少量認められ、このうち5個体が図示できた。176と177はいずれもラップ状に開く壺の口縁部である。178～180は甕である。180は突帯を貼付けて逆L字状の口縁をつくり出している。時期は百・前・Ⅲと考えられる。

(平井勝)

(3) 円形周溝

円形周溝1 (第140図、図版27)

206H区と206I区にまたがって円弧を描く溝の一部が検出された。ただ、検出部分の東西両端と中央部分では少し屈折するような形状を示し、完全な円弧とはいえない。溝の幅は68～107cmを測り、中央の屈折部分では狭くなっている。溝の深さは一定ではなく、部分によってはかなり変化があり、12～54cmまで幅がある。溝の埋土は3層に分けられる。1層には部分的に炭粒や焼土塊が含まれ、また黄褐色粘土塊も若干みられる。2・3層は地山の黄褐色粘土と灰褐色粘土とのブロック状の混合土で、3層では黄褐色粘土の割合が大きくなっている。

調査区北壁の上層断面観察によると、周溝内側では地山の黄褐色粘土層の上に縄文時代晩期の包含層とみられる灰褐色粘土斑黄褐色粘土層があって、そのさらに上面に厚さ3~6cmで灰褐色粘土層が認められた。この層と下の縄文時代晩期の包含層との境は明瞭で、灰色粘土の薄層を認めるところもあった。このことから、この層については周溝の内側へ盛られた土と考えることも可能である。部分的な発掘であったために、この周溝の性格については断言できないが、後述する円形周溝2と同じものであったことは確かである。

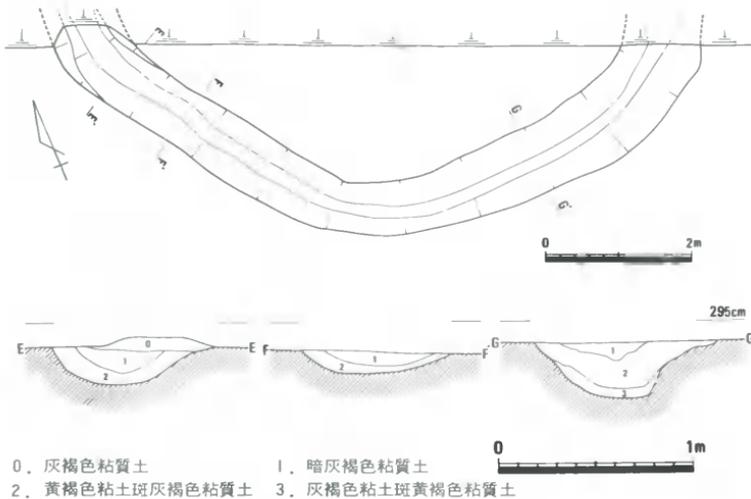
円形周溝1からは土器の細片が出上しているが、弥生時代前期としか判断できない。

(岡本)

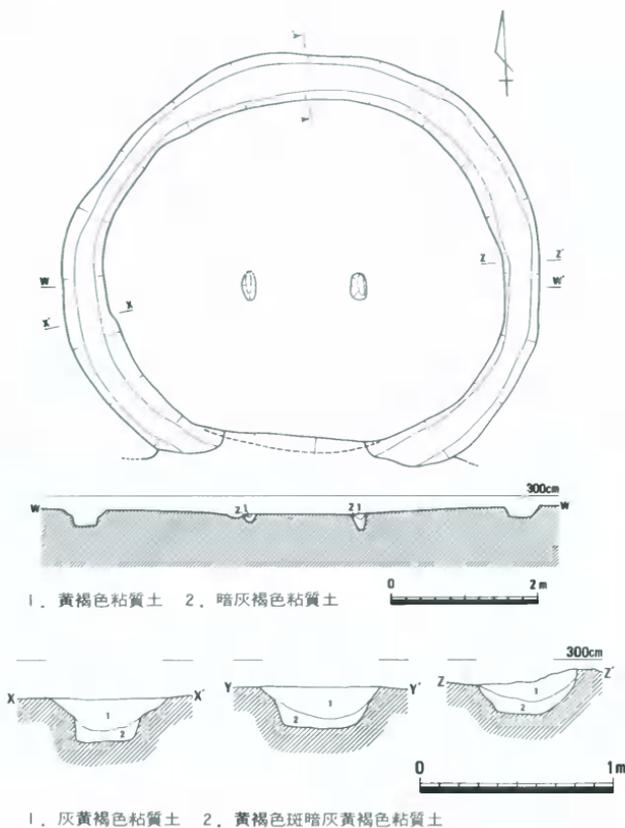
#### 円形周溝2 (第141図、図版27)

206 I 区の南西隅、前述の円形周溝1からわずか2m南東に位置している。周溝の南部分は溝39によって破壊をうけていた。周溝に囲まれた部分は、周溝の内側の肩で直径5.6mを測る。溝の幅は40~72cmで東部と北西部が狭くなっている。溝の深さは17~24cmで周溝1のような大きな幅はみられない。埋土は2層に分けられ、下層はブロック状の混合土であった。

この周溝では、周溝に囲まれた部分がほぼ残存していて、小穴が10前後検出されたが、その中に長楕円形の穴が2個、周溝で描かれた円の中心を挟んで、対称するような形でみつかった。東側の穴は長径37cm、短径22cm、深さ23cmを測り、底面は長径29cm、短径7cmときわめて



第140図 円形周溝1 (S=1/80・1/30)



第141図 円形周溝2 (S=1/80・1/30)

細長い形状を示していた。西側の穴は長径推定42cm、短径19cm、深さ11cmで、底面は長径推定29cm、短径7cmとやはり細長く、深さでは異なるものの、形態的には東側の穴と対称的であった。この2個の穴の間隔は中心間の距離で153cmを測る。この2個の穴の性格であるが、その位置関係や形態から考えて、木棺の小口板を埋設する穴であった可能性が高い。そうであるとすると、この周溝遺構は円形周溝墓ということになる。ただ、調査担当者として述べると、この穴の検出はかなり困難であったため、100%確実とは言いきれないし、検出にあたって、予断があったことも否定できない。今後の類例の増加を待ちたい。

周溝から出土した土器は少ないが、百・前・Ⅱではないかと考えられる。

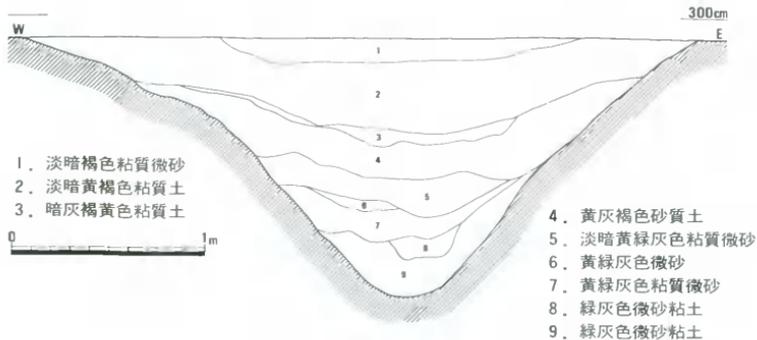
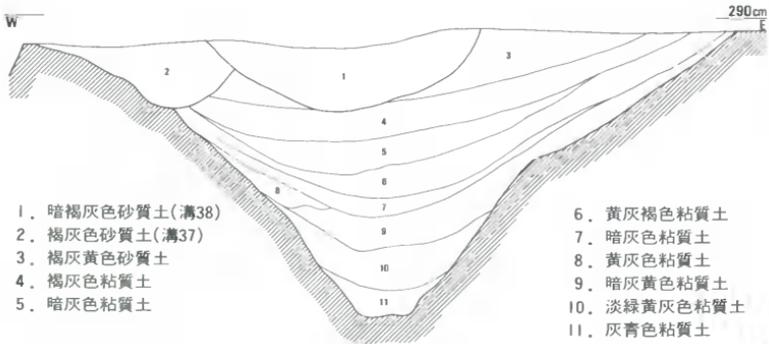
(岡本)

(4) 溝

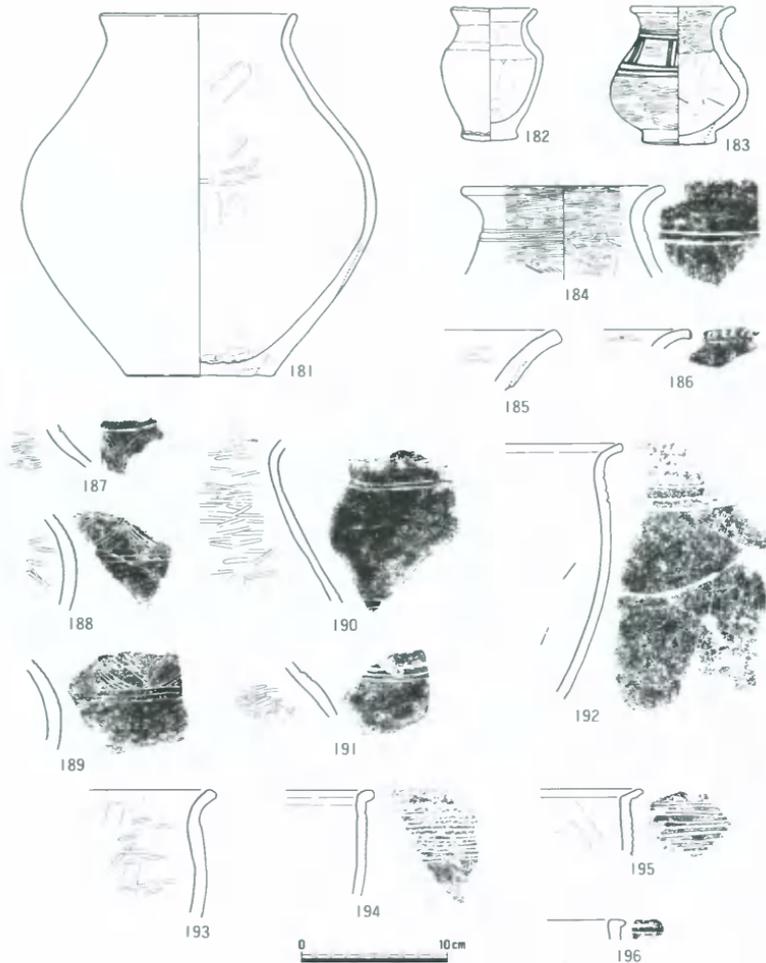
溝36 (第142・143図、図版21・28・110)

205～6F区と同G区の境界付近にかけて約19m分を検出した。『沢田2』で「同時代の遺構をとり囲む環濠と考えられる遺構」として報告されている溝69,70のうち溝69の続きである。

検出面での数値は幅3.4～3.6m、深さ1.4～1.6mを測る。断面は緩やかなV字状である。肩口より40cmほど下から、上へかけて傾斜が緩くなっており、人がよじ登れないほどではない。今回報告する溝36、溝44(『沢田2』溝70の続き)によって環濠の北部のカーブがより明らかになり、環濠がとり囲む形もある程度推定できるようになった。



第142図 溝36



第143図 溝36出土遺物

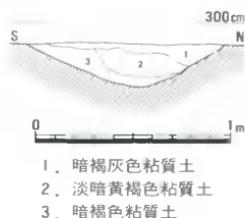
この環濠に関わるような橋などの構造物や防御施設の痕跡を溝底や斜面で精査したが特にこの範囲では見つからなかった。ただ環濠にそった土塁状のものがあつたと推定される状況はいくつか指摘できる。溝の埋上を見ると第142図上では6～9層がこの微高地の基盤層とほぼ同じ色調・土質を示すか、またはそのブロックを顕著に含み、かつ溝の内側（東側）より流れ込

んでいる様子がうかがわれる。第91図の11、12層についても同じことが指摘できる。また溝の肩口より東側3mほどの幅ではほとんどビットや土壌が検出されておらず、原地表よりの地下げを考慮しても、それより東側で密集してビット群が検出されているのと状況を異にしている。以上のことより溝を掘った時の排土を利用して環濠の内側に幅2～3mほどの土塁状のものを築いていたことが推定される。

遺物の取り上げに際しては下層、中層、上層に分けた。第142図上の層で対応させると下層は10、11層にあたる、環濠が機能していた時期に堆積した粘土層。中層は6～9層にあたる、土塁を崩して埋めたと考えられる層。上層は3～5層にあたる、最終的に環濠に堆積した層である。それぞれ色調、土質により比較的容易に掘り分けることができた。遺物はいくつかを除いて破片が主で量もさほど多くはない。第143図の181の壺は全体の3分の2ほど、182と183の小壺はほぼ完形で出土した。出土位置はそれぞれ下層上位、中層、下層中位である。いずれも百・前・Ⅱである。破片では下層から190、192が、中層からは184、186、187、195が、上層からは194が出土している。他のものは中層～上層にかけてのものである。194、195、196（出土層位不明）が百・前・Ⅲの他は百・前・Ⅱを示す。この溝の埋設後、百・前・Ⅲの溝11、38、39が横切っており、この環濠は百・前・Ⅱに掘られ、ほぼ百・前・Ⅱの間で放棄、埋積していったと考えられる。（阿部）

#### 溝37（第144図）

207G区北側で検出した。検出長は16.5m、幅1～1.3m、深さ25～30cmを測る。北側は未調査区へ続き、南側は横田調査区の溝11、または溝9に続くと思われるが、間を近現代用水が大きく削っており、つながりははっきりしない。第144図では掘り直したような断面だが、他の断面では褐灰黄色上の単一の堆積を示す。遺物は百・前・Ⅲの土器片が少量出土した。第142図で示すようにほぼ同じ時期の溝38には切られている。（阿部）

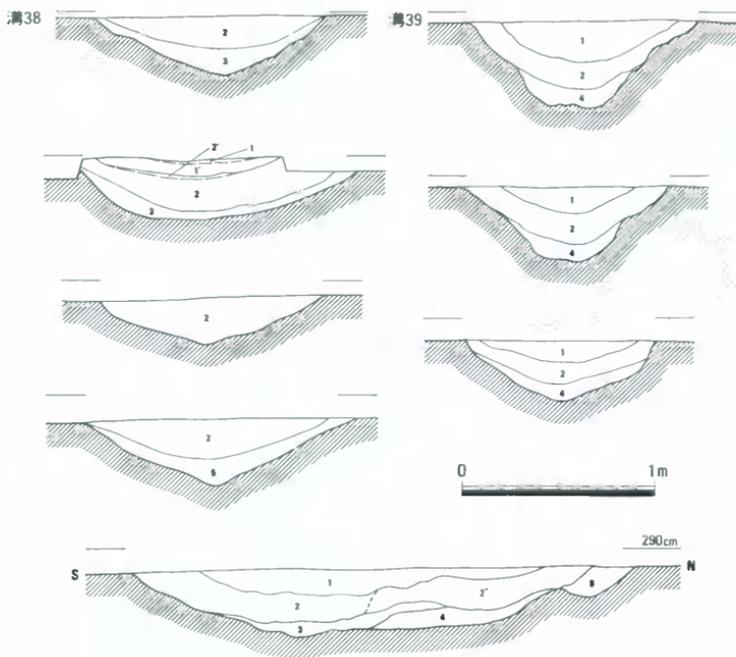


第144図 溝37

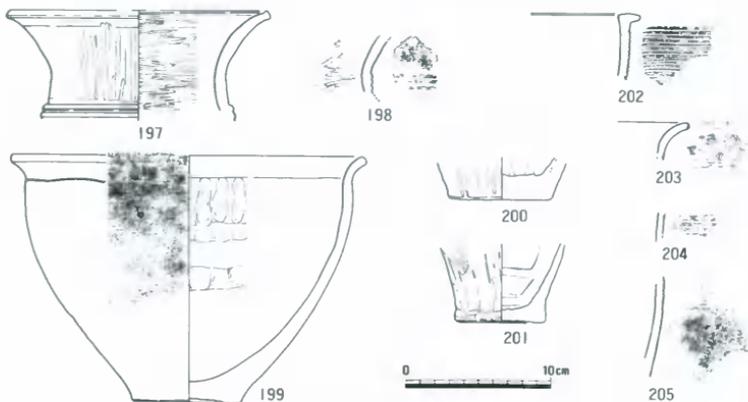
#### 溝38（第145図、図版28・110）

206G区から207J区にかけて85m分が検出された。西端が幅広い現代用水路によって破壊されているため、その西方で検出された溝群との連続関係が明瞭ではないが、溝10とつながり、さらに『沢田2』の溝6と連続する可能性が高い。ただ、206G区での湾曲からみると、『沢田2』の溝9・10と続く可能性も否定できない。環濠となる溝36の上面で検出されていることから、溝36の埋設後に掘られた溝である。206H区から東へはわずかに湾曲するものの、ほぼ直線的に伸びる。206I区と207J区の西端付近に分岐があるが、これは掘り直しによって生じたもので、同時に存在したものではない。溝の幅は約120～150cm、深さは23～35cmを測る。207I区

第3章 第2節 高繩手A調査区



- |                  |                 |            |
|------------------|-----------------|------------|
| 1. 灰黄褐色粘性土(焼土・炭) | 2. 被熱赤変部分       | 4. 淡褐色粘性土  |
| 1'. 焼土塊          | 2'. 褐色粘性土       | 5. 暗灰褐色粘性土 |
| 2. 暗褐色粘性土        | 3. 黄褐色粘土斑暗褐色粘性土 | 6. 黄褐色粘性土  |



第145図 溝38(左)・39(右)・溝38出土遺物

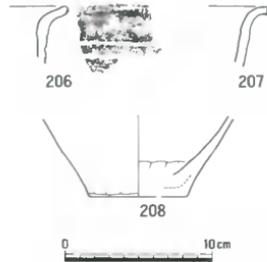
では、溝の底が「V」字状に1段落ち込む。溝底の高度を測ると、西から東へじょじょに深くなっていることから、水は東へ流れていたものと考えられる。第145図の断面図は西から順に並べてあり、最下段は206 I 区の分岐点の断面である。この溝の上層では焼土塊や炭粒が点々と含まれていたが、第145図の左列2段目の断面にあるように、竪穴住居6と重複している付近では多量の焼土塊があり、その下の層の上面が赤色に熱変化を受けていることから、溝中で物を焼いたと考えられる。溝が埋没して、その機能を失ったのちのこととみられる。この溝は、竪穴住居6・8を破壊しているため、これらの遺構より新しい時代のものである。

出土遺物は少ないが、199はほぼ完形で、竪穴住居6との重複部分から出土している。沈線が多条化した逆「L」字形口縁の甕があり、百・前・Ⅲと考えられる。

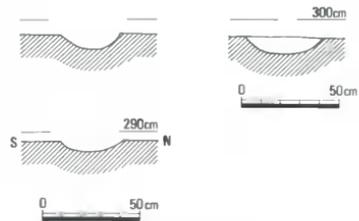
なお、溝の東端については弥生時代後期の水田によって削平されているため不明であるが、『沢田2』の溝94～97のいずれかと連続する可能性が、走行方向の上からは考えられる。ただ先の報告書では後期水田に伴う溝としている。より東については、これも水田による削平と考えられる。（岡本）

#### 溝39（第145・146図）

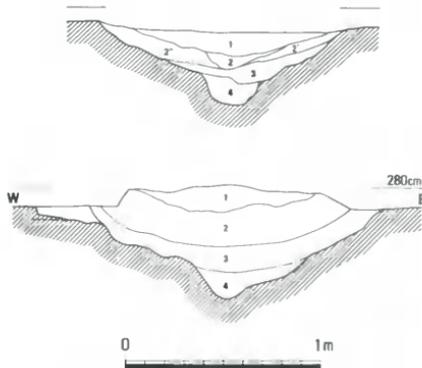
溝38の旧流路と考えられる。207 I のすぐ東で屈曲し、207 J 区の西端付近で溝43と接する。全長約23mである。幅80～120cm、深さ32～45cmを測る。埋土は3層に分けられ、1層の下面に少量の炭を含む。206 I 区の部分では、溝壁の中途に肩があり、傾斜度



第146図 溝39 出土遺物



第147図 溝40



1. 茶褐色粘性土 2. 暗黄褐色粘性土
2. 淡黄茶褐色粘性土 2. 黄茶褐色粘性土
3. 黄褐色斑茶褐色粘性土 4. 淡茶褐色粘性土

第148図 溝41

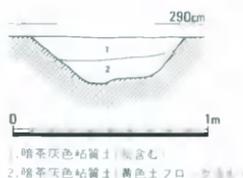
が変化している。この溝ではこの部分がかもっとも深くなっている。溝39は円形周溝2を破壊している。第145図最下段の断面図の6層が円形周溝2である。

出土遺物は少なく、図示した土器は百・前・Ⅱと考えられる。 (岡本)

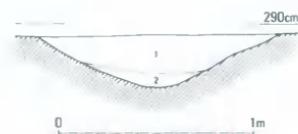
溝40 (第147図)

207 I区から206 J区にかけて検出された。溝底の高さから判断して、北東から南西へ流れていたと考えられ、207 I区の北部中央付近で溝38に注ぐ。溝の幅は約40cm、深さは5～8cm程度と浅い。断面形は皿状を呈し、埋土は1層である。出土遺物は少ないが、凹石がある。出土

土器の年代は百・前・Ⅲと考えられる。 (岡本)



第149図 溝42

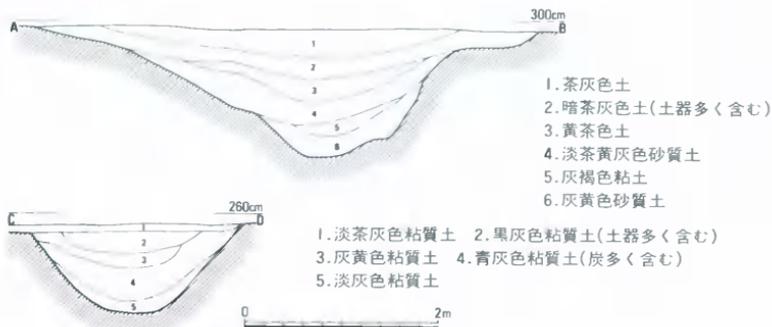


1. 茶灰色粘質土 2. 暗茶灰色粘質土

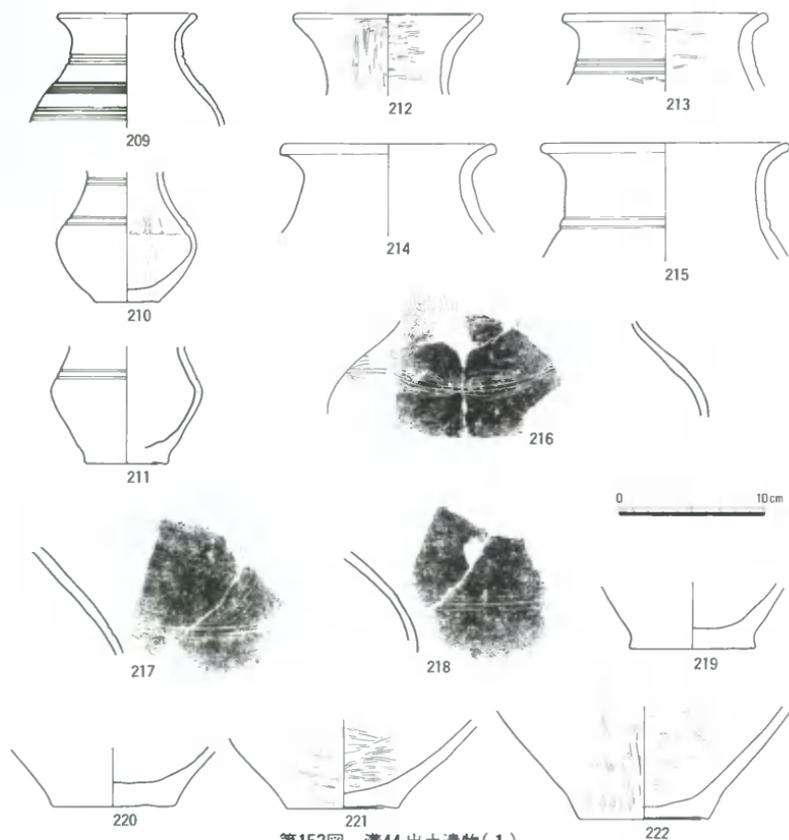
第150図 溝43

溝41 (第148図)

207 I区の東端付近に位置する南北方向の溝状遺構である。『沢田2』によれば南へは延びていないため、全長はわずか7mにすぎない。北端は溝38と接し、溝11の東端がこの溝41に接して終わっているため、溝38と溝11をつなぐバイパス的な溝と考えられそうであるが、第148図下段の溝11との接合部の断面観察によると、溝11を切っているようにみられた。3つの溝のうちでは、溝41がかもっとも深い。溝の幅は第148図上段の断面部分で254cm、溝11との接合部では268cmを測る。溝の深さは溝11との接合付近がかもっとも深く59cmである。溝の底部が1段深く落ちるため、壊壁の途中に肩をもつ。埋土は4層に分けられ、1層には、溝11との接合付近で、多量の焼土が含まれてい



第151図 溝44



第152図 溝44 出土遺物(1)

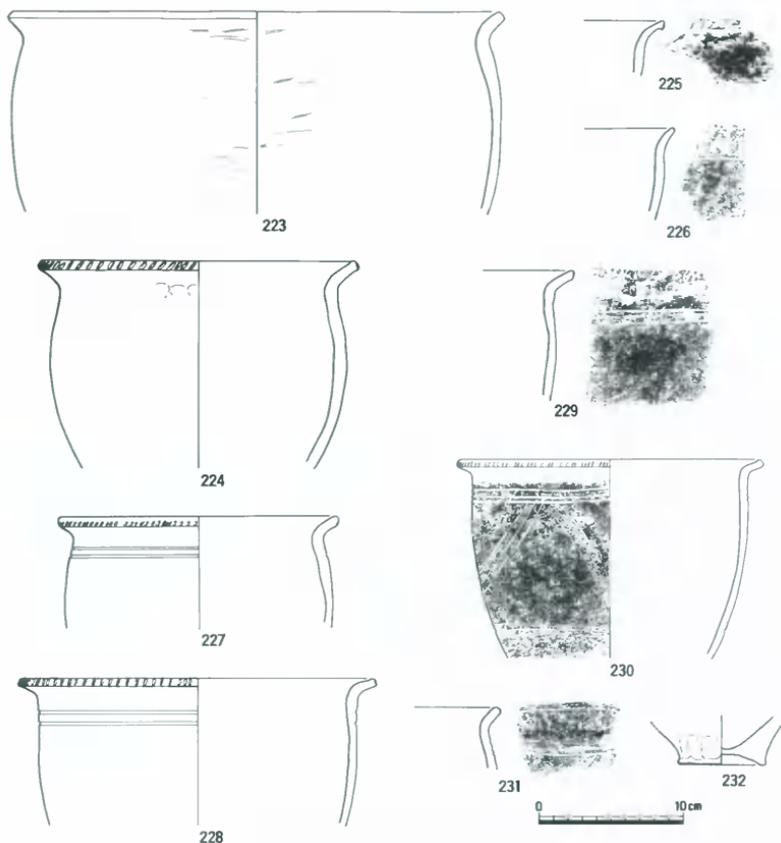
た。このような状況は溝11や溝38でもみられたことで、溝が埋没して機能を失ったあと、その痕跡である凹みが、ゴミの焼却や廃棄に利用されたのであろう。このことはまた、3つの溝が同じころに廃絶したことを思わせ、その同時存在の可能性を示唆する。

溝41の出土遺物は少なく、土器も小片であったが、縄文晩期と百・前・Ⅱのものがみられた。

(岡本)

#### 溝42 (第149図)

207J区の中央東寄りで見出された溝である。ほぼ東西方向に流走する長さ8mあまりの溝で、西側は幅が広く、東側は狭くなっている。深さは20cmあまりで、埋土には炭を含む。遺物



第153図 溝44出土遺物(2)

は土器がわずかに認められ、前期と考えられる。

(平井勝)

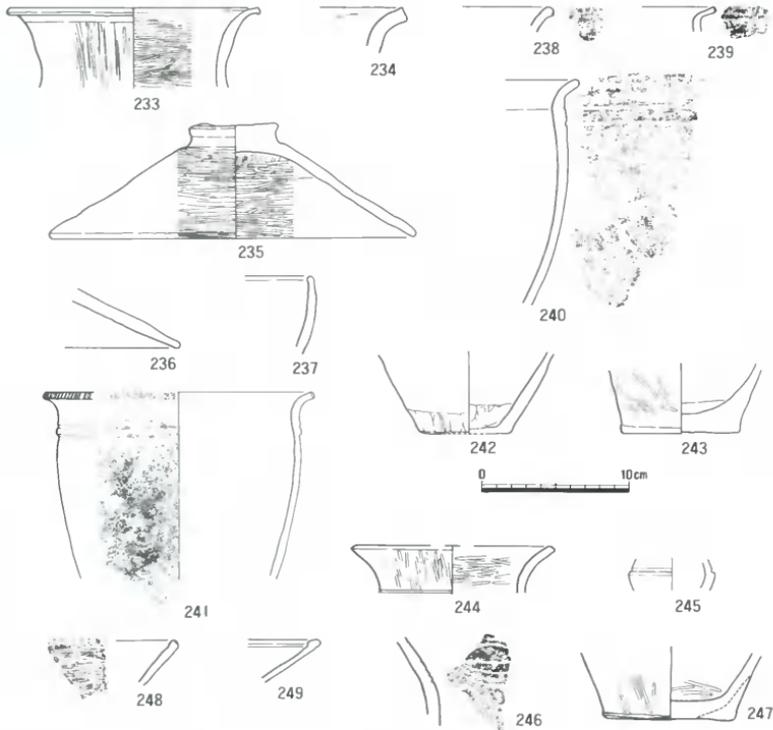
溝43 (第150図)

207J区の南寄りで検出した溝である。溝はほぼ北西から南東方向に流走するが、北西端は溝38に切れ、南東端は弥生時代後期の水田によって切られている。溝の深さは27cmで、その断面は丸みをもつ底から緩やかに壁が立上っており、上面での幅は1.22mを測る。遺物は土器が少量出土しており、前期と考えられる。

(平井勝)

溝44 (第151～153図、図版29・111図)

207・208K区の西部から検出された、湾曲しながらも南北方向に延びる大形の溝で、その南



第154図 弥生時代前期土壙・柱穴等出土遺物

部分は弥生時代後期水田によって上面が削平されている。溝は断面逆台形状を呈し、規模は残りのよい北端付近で幅約510cm、深さ約130cm、溝底の海拔1.6mを測る。また、北部の平面プランおよび断面からも明らかなように掘り替えがなされており、調査区外で二股に分岐することも考えられる。溝内には粘質土が堆積していたが、遺物はおもに第2層から出土しており、その年代観は百・前・Ⅱを示す。なお、壺形土器底部219は胎土中に数mmの結晶片岩を多含するもので搬入品である。一方、当溝は前回調査の溝70にあたり、また、今回調査の溝36、前回調査の溝69との関連が考えられ、当溝は環濠の東部分にあたる可能性が高い。（江見正己）

#### 溝45

207K区の南東端から208K区の北東端にかけて検出された溝である。北西から南東に流走する溝であるが、長さ6mあまりで両端とも途切れる。断面はU字形を呈し、幅15cm、深さ5cmを測る。遺物は出土していないが、検出面から前期と考えられる。（平井勝）

### 3. 弥生時代後期の遺構・遺物

#### (1) 水田

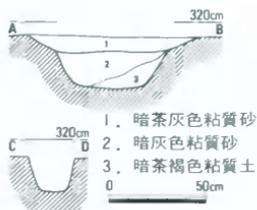
本調査区の南端で弥生時代後期の洪水砂で埋没した水田が検出された。これは本調査区の南側で確認された、微高地縁辺に広がる水田の北辺をなすものである。微高地と水田面との比高は50cmあまりで、その接するところが急斜に立上る。水田面には幅25cm前後、高さ5cm前後の小畦畔が築かれているが、微高地に取り付く側には水口が設けられている。水田層は暗灰色粘上で、厚さ6cm前後を測る。  
(平井勝)

#### (2) 溝

##### 溝46 (第155図)

207K区の西端から207J区の南東寄りで見出された溝である。溝は北東から南西方向に流走するが、南側では溝47が上部に重なり、さらに南西端は後期水田によって切られている。深さは20cm前後で、断面は平坦な底部から壁が急斜に立上るU字形を呈し、上面での幅は23~50cmを測る。遺物は土器がわずかに出土したが、詳細な時期は知りえない。しかし、検出面と合わせて考えれば、後期と推定される。

(平井勝)

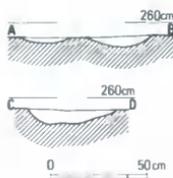


第155図 溝46・47

##### 溝47 (第155図)

207J区の南東寄りで見出された溝である。溝は北東から南西方向に流走するが、南側は溝46の上に重なり、さらに南端は後期水田によって切られている。深さは10cmあまりと浅く、底はほぼ平坦で、壁は緩やかに立上る。検出面での幅は80cm前後であるが、北東側は狭く、南西側に向かって広がる。遺物は土器がわずかに認められた。時期は検出面と遺構の切り合い関係から、後期と考えられる。

(平井勝)

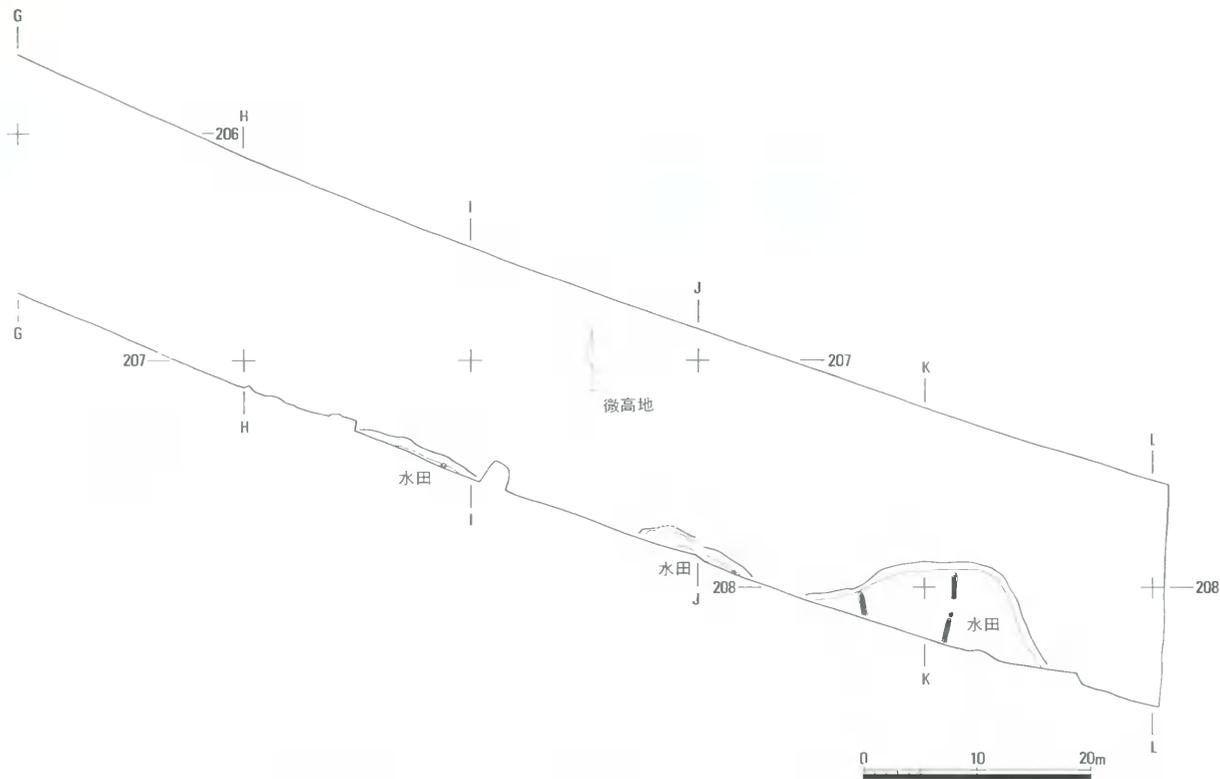


第156図 溝48

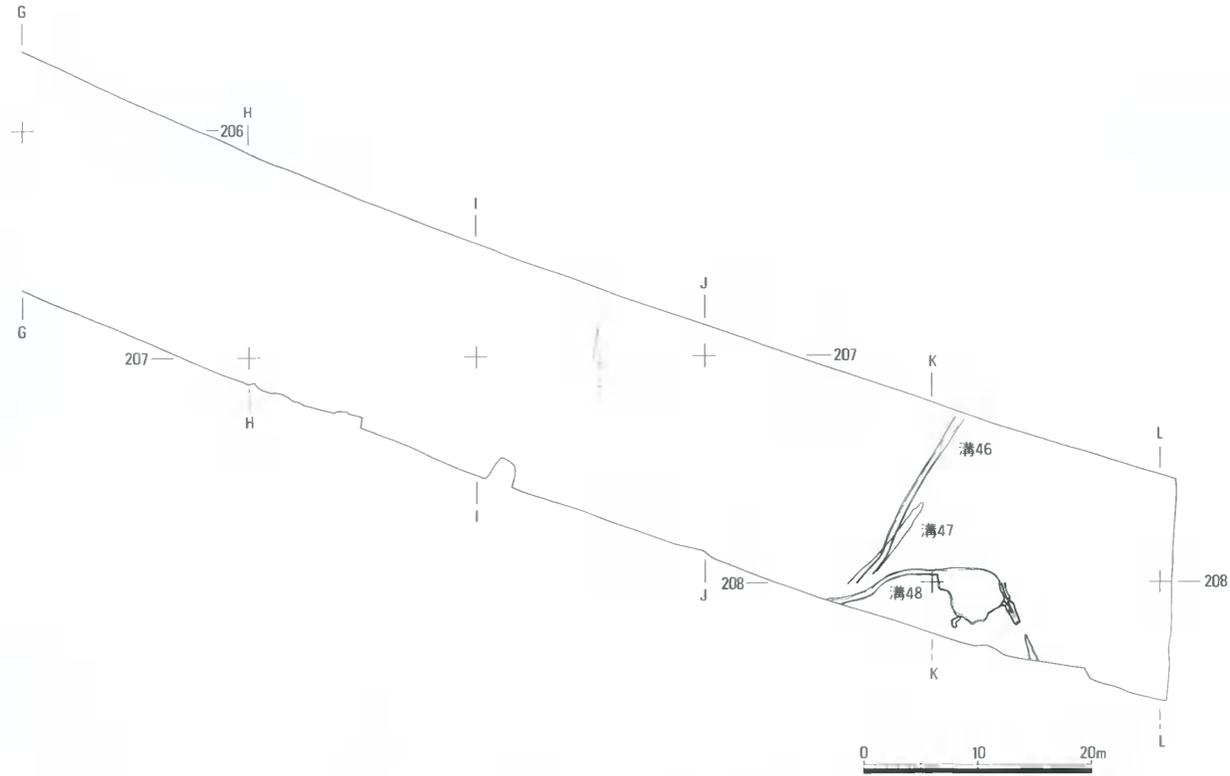
##### 溝48 (第156図)

207J区の南東端から207K区の南西端、208J区の北東端から208K区の北西端で見出された溝である。溝は弥生後期の水田層下で見出され、ほぼ水田が微高地に接する場所に掘り込まれている。深さは10cm前後と浅く、幅も20~40cmと一定せず、途切れる部分も認められる。埋土は淡茶灰色粘質土である。遺物は出土しなかったが、後期と考えられる。

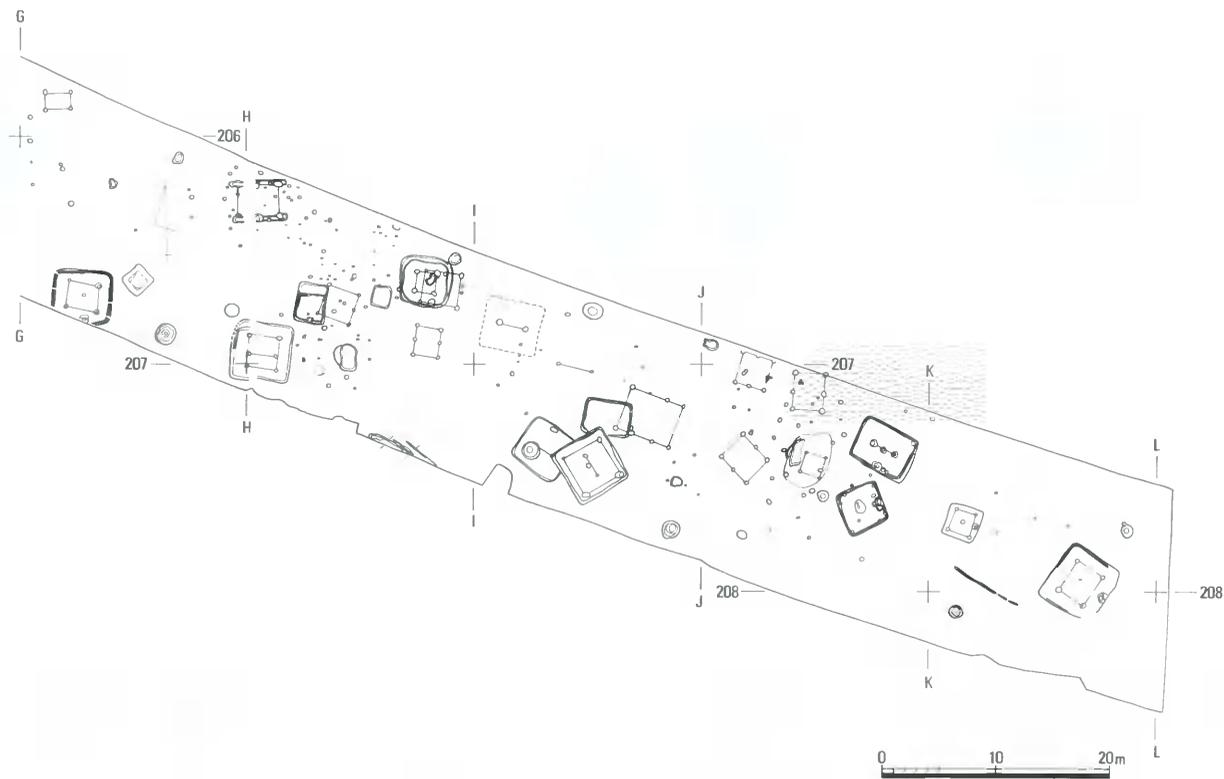
(平井勝)



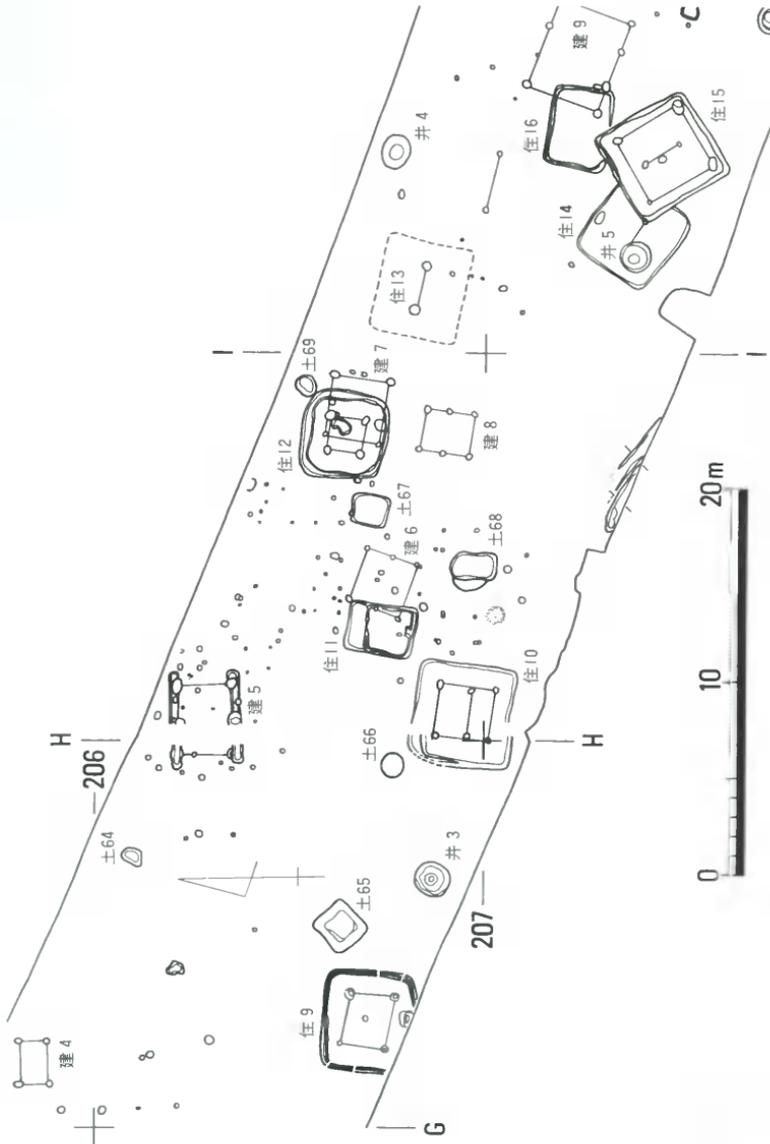
第157図 高縄手A調査区の弥生時代後期洪水砂埋没遺構全体図 (S=1/500)



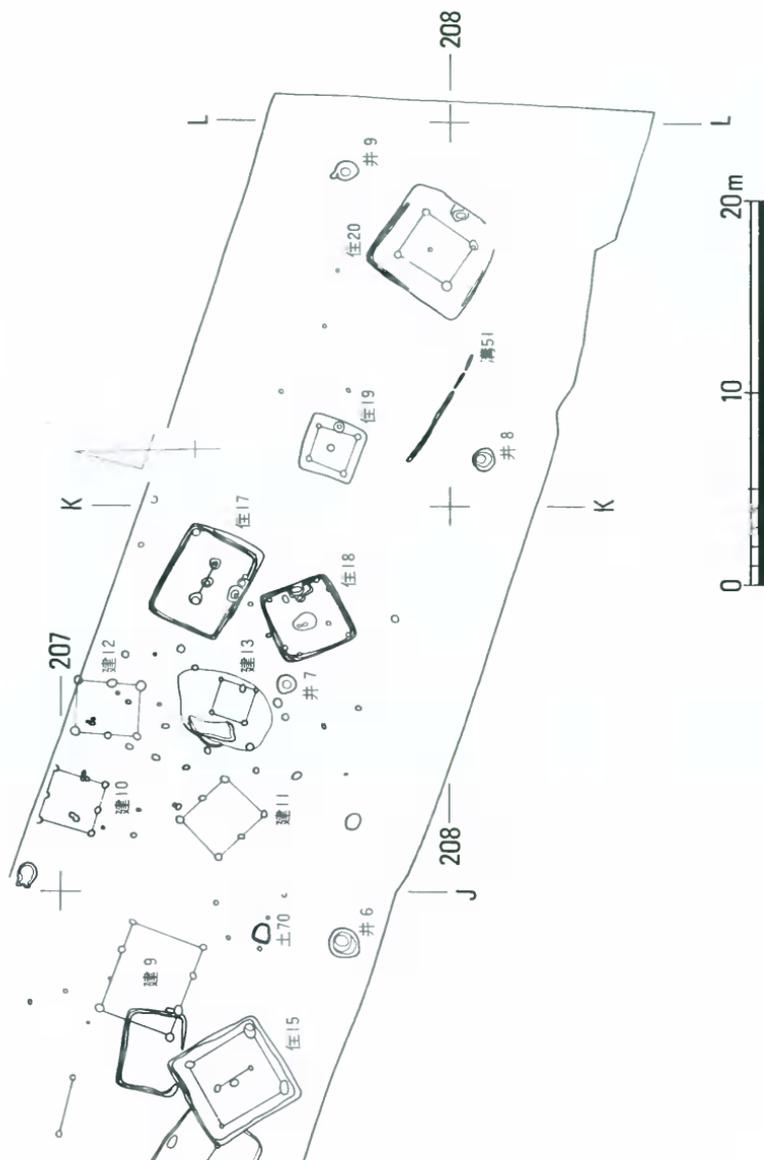
第158図 高縄手A調査区の弥生時代後期遺構全体図 (S=1/500)



第159図 高縄手A調査区の高墳時代遺構全体図 (S=1/500)



第160図 高縄手A調査区の古墳時代遺構全体図(1) (S=1/250)



第161図 高縄手A調査区の古墳時代遺構全体図(2) (S=1/250)

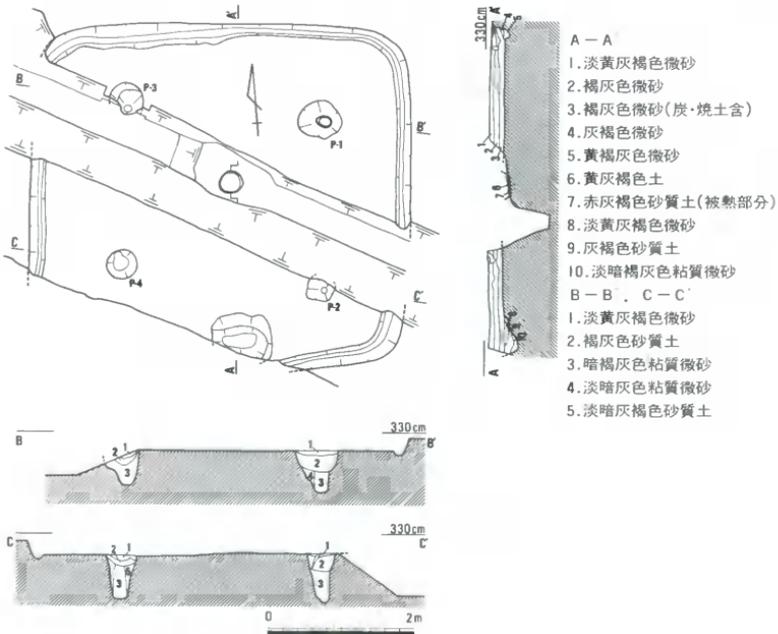
## 4. 古墳時代の遺構・遺物

## (1) 竪穴住居

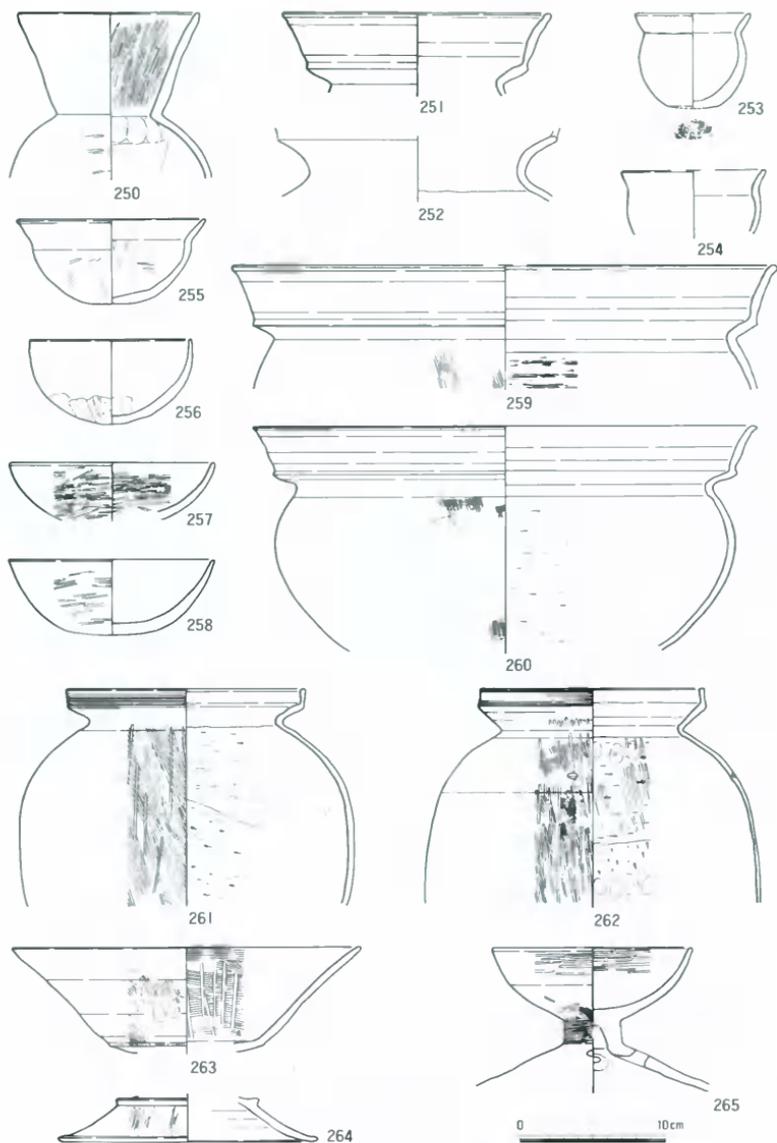
## 竪穴住居 9 (第162・163図、図版30・112)

206Gの南西寄りに検出された隅丸長方形の竪穴住居である。規模は長辺520cm、短辺480cm、床面までの深さ約20cmを測るが、住居址のほぼ中央部は第一次調査時のトレンチで一部削平を受けている。また、南西隅の一部は旧調査区の側溝で切られている。

住居址の床面には、4本の柱穴と南辺の壁体溝に接する位置に隅丸方形の土壇、およびほぼ中央に浅い火処を持つ。柱穴の掘り方は径約40~60cmのほぼ円形を呈し、深さ60cm前後と比較的整っている。P-1とP-4は、一部土層的に柱痕跡が認められ、とくにP-1は掘り方の径も大きいことから抜き方の可能性が強い。隅丸方形土壇は、80×70cm(推定)、深さ18cmを測る。堆積土層は3層に大別されるが、一部に炭層が認められ、また底面から少し浮いた状態で



第162図 竪穴住居 9

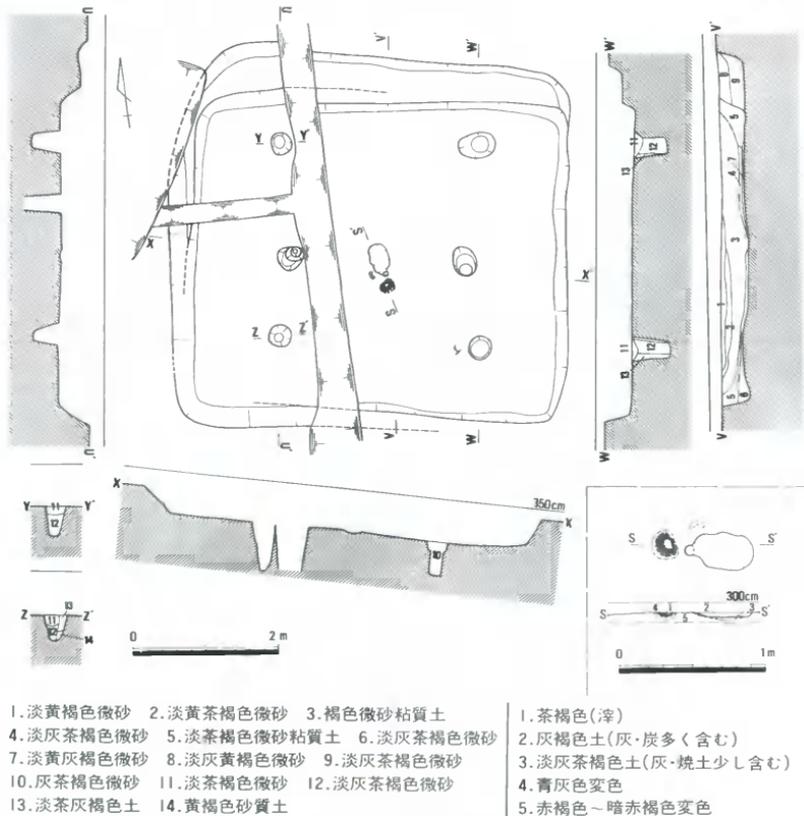


第163図 竪穴住居9出土遺物

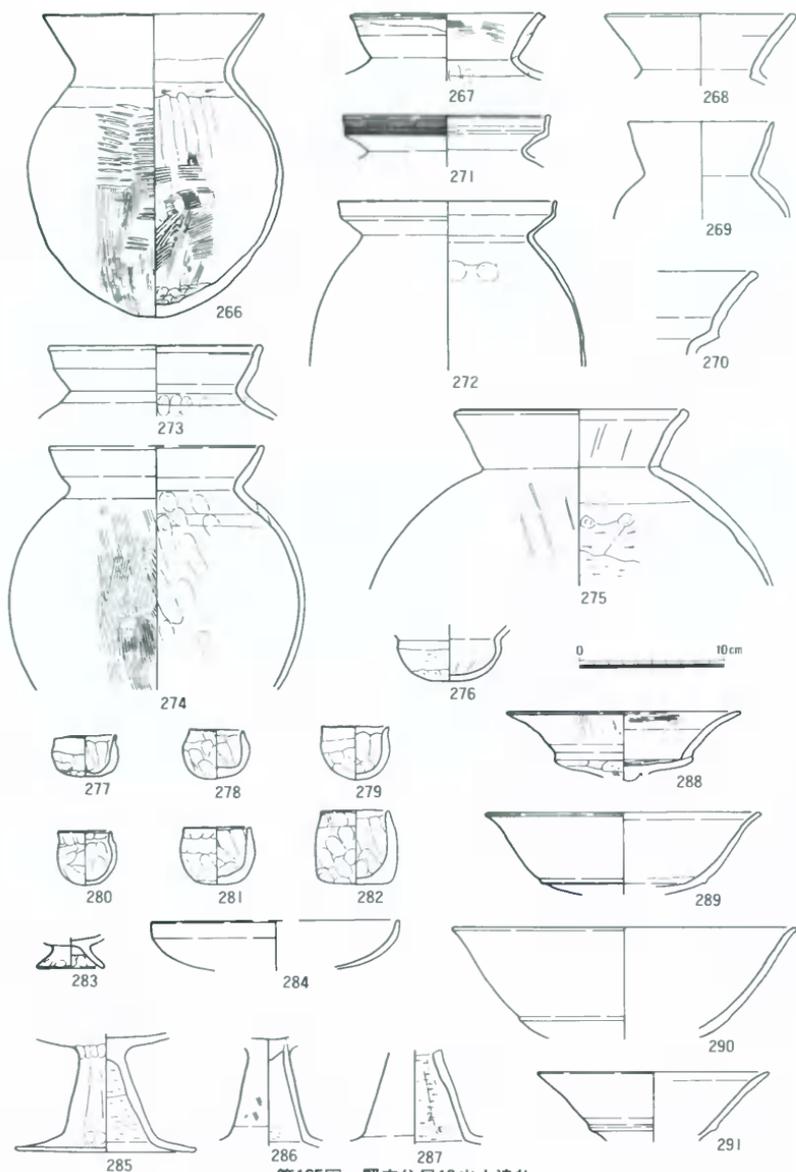
炭・灰が堆積し、その周辺の径約30cmの円形部分が被熱され、赤褐色に焼土化した状態を示す。検出面から床面までの約20cmほどの厚さの覆土は3層に大別され、遺物はおもに床面から少し浮いた状態で少量出土している。いずれも破片であるが、隅丸方形土甕の甕と比較してとくに時期差はなく、百・古・Iに比定されよう。(柳瀬)

#### 竪穴住居10 (第164・165図、図版31・112・113)

西から約3分の1付近にある南北のトレンチを堺に2年次に分けて調査したため、図面にずれを生じているが、方形を呈する竪穴住居である。検出時には、ほぼ5m前後の住居跡として調査したが、掘り進めるうちに、北辺に平行な線が内側に見られることに気付いた。それをベッド状遺溝の可能性も考えたが、トレンチに見られる床面は、同一レベルで北側の壁ま



第164図 竪穴住居10



第165図 竪穴住居10出土遺物



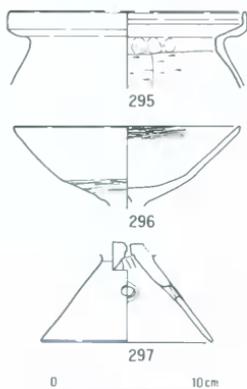
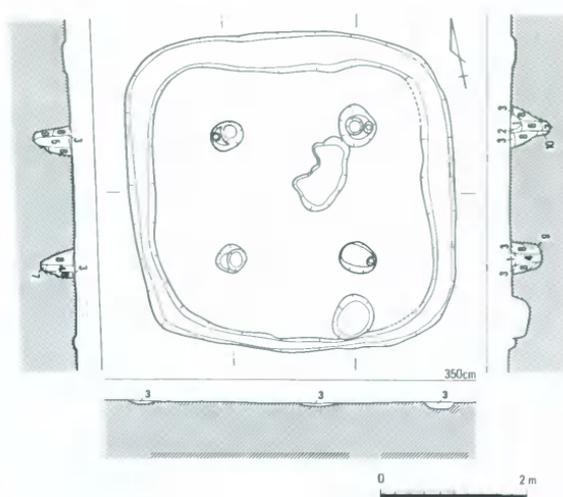
第166図 竪穴住居11・出土遺物

で続くものが見られた。そこで、断面V-V'を検討した結果、北側を埋め規模を縮小した建替の住居であると考えに至った。古い住居は、南北5.20～4.80m、東西5.5mを測るものである。床面には、6本の柱穴を検出したが、古い住居が4本柱と考えられる。柱穴間の距離は、東西2.8m、南北2.7～2.6mを測る。新しい住居は、東西に長い長方形を呈するもので、規模は、東西長5.5m、南北長4.34mを測る。柱穴は、床面のほぼ中央に、2本を検出した。柱穴間の距離は、2.4mを測る。

新しい住居の中央に鍛冶炉を検出した。S-S'の位置に示すものがそうである。南側のものは、ほぼ円形を呈するもので長径22cm、短径20cmを測る。その中央には茶褐色を呈する鍛冶滓を検出した。滓の下層は青灰色を呈し堅く焼けており、その下層は赤褐色に変色していた。北側のものは、長径48cm、短径26cmを測る楕円形に赤変するもので、青灰色に変色する層は見られず、灰、炭を多く含む灰褐色の層が見られた。住居から出土した遺物から、百・古・Ⅱの時期の竪穴住居と考えられる。(井上)

#### 竪穴住居11 (第166図、図版32・113)

平面形が長方形を呈する住居跡で、長軸の方向は、ほぼ北を向く。住居跡の規模は、長辺



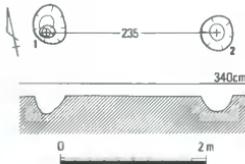
1. 炭灰灰褐色砂質土
2. "
3. 淡灰褐色砂質土
4. 灰褐色砂質土
5. 灰褐色粘性砂質土
6. 黄褐色粘土斑灰褐色砂質土
7. 黄褐色粘土斑褐灰色粘性砂質土
8. 灰褐色粘性砂質土
9. 灰黄褐色粘性砂質土
10. 褐灰色粘性砂質土

第167図 竪穴住居12・出土遺物

竪穴住居12 (第167図、図版32・112)

206H区の東部に位置する。幅20~58cm、深さ8cmの広くて浅い壁体溝をもち、平面形は隅丸方形である。竪穴の規模は東西4.5m、南北4.5mとほぼ方形である。主柱穴は4本で、柱穴の直径は44~60cm、深さは30~54cmを測る。各柱穴ともに柱痕跡が確認され、その太さは直径15cmであった。柱穴間の距離は柱痕間で180~185cmを測る。北東柱穴の南西側に深さ4cmほど

3.44m、短辺2.58mを測る。北側には、幅約1mに一段高くベッド状を呈しており、溝はその下段を廻る。溝の廻る範囲は、ほぼ正方形を呈しており、2.58m四方である。この住居跡の床面から炭化材を検出した。炭化材を検出した範囲は、ほぼ溝の廻る範囲と一致する。南辺のはほぼ中央において方形の上填を検出した。床面からは、この住居跡に伴う柱穴は検出されなかった。床面に接した状態で高杯、甕が出土した。出土した土器の時期は、百・古・1と考えられ、住居跡も同時期のものと考えられる。(井上)



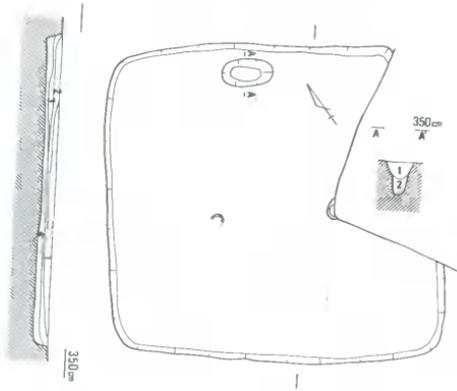
第168図 竪穴住居13

器が出土している。このような土壇は、古墳時代前期の竪穴住居ではしばしば認められているものであり、この土壇も竪穴住居12に伴うと考えられる。竪穴住居12では埋土は確認されず、床面も削平によってとばされている。

この住居の年代は、南壁側の土壇から出土した土器の年代から判断して百・古・Ⅱと考えられる。

(岡本)

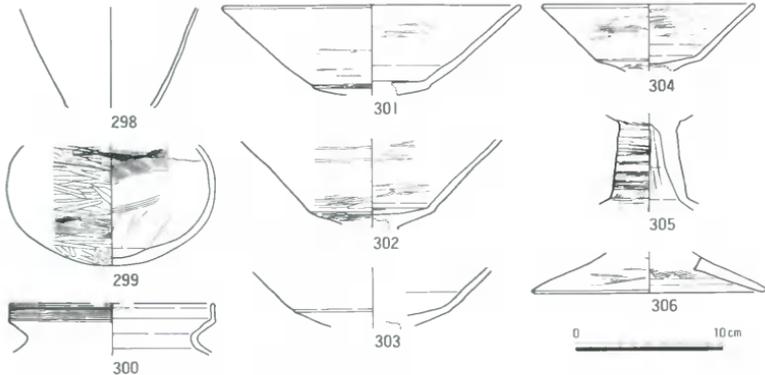
の不整形な土壇が検出され、その長径は110cmである。埋土の上面に焼土があり、炉に関係した施設とみられる。南側の壁体溝に接して、長径66cm、短径54cm、深さ25cmの卵形の平面形をもつ土壇が検出され、図示した土



1. 淡黄茶褐色微砂
2. 淡灰茶褐色微砂
3. 灰褐色微砂
4. 淡茶灰褐色微砂粘質土



1. 黄灰褐色砂質土
2. 暗灰褐色砂質土



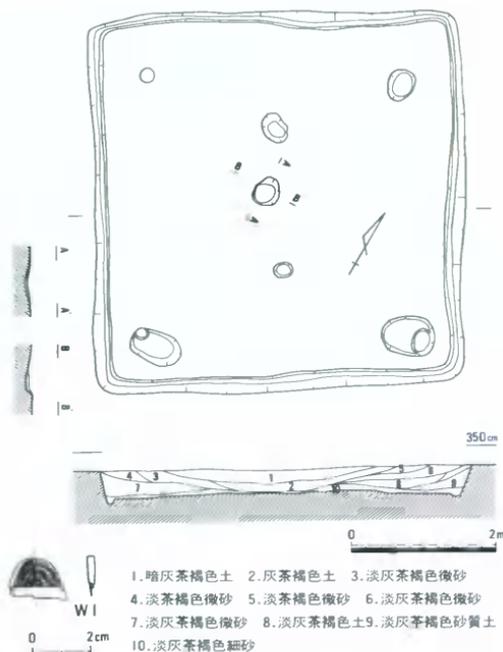
第169図 竪穴住居14・出土遺物

竪穴住居13 (第168図)

206 I 区の南西部で大形の柱穴が2個検出された。柱穴1は長径55cm、深さ23cmを測り、底部に直径22cmの柱痕跡のめり込みが認められた。柱穴2は長径50cm、深さ22cmを測る。柱穴間の距離は235cmであった。この2個の柱穴が検出された付近には、他に同規模の柱穴が認められず、2個の柱穴が対になるものと考えられる。竪穴住居12の削平状況から考えると、この対の柱穴は、主柱穴が2本の竪穴住居の床面が、その後の削平によって失われた状態の可能性が強いと判断される。柱穴から出土した土器片は少量で小片のため古墳時代前期のものとはかわからない。(岡本)

竪穴住居14 (第169図、図版33)

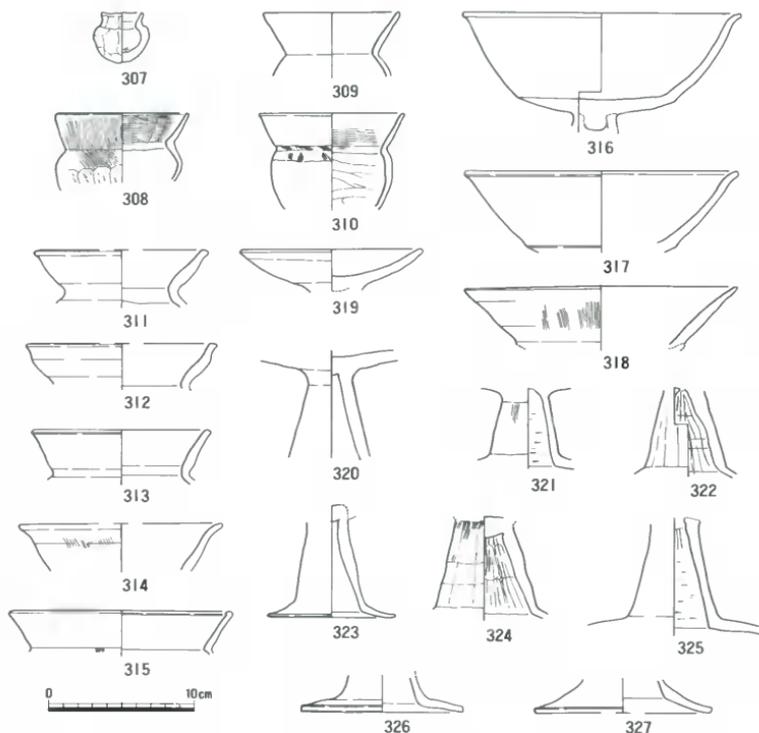
平面形が方形を呈するもので、竪穴住居15と重複して検出した。東部の一部を欠くのはそのためである。住居の規模は、南北長4.40m、東西長4.42mを測る。柱穴は、床面のはほぼ中央付近に東西に1.58mの距離をおいて2本を検出した。柱穴は、それぞれ他の遺構と重複しており、東側は竪穴住居15に、西側は井戸5により切られている。北辺の壁に接しては、そのほぼ中央に長円形の土壇を検出した。長径68cm、短径36cm、深さ44cmを測るものである。出土した土器は、百・古・Iと考えられ、同時期の竪穴住居と考えられる。(井上)



第170図 竪穴住居15・出土遺物(1)

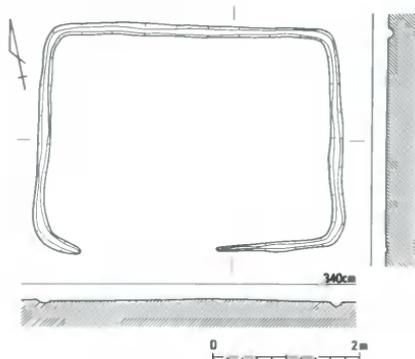
竪穴住居15 (第170・171図、図版33・114)

平面形が方形を呈する住居跡で、竪穴住居14と切り合っているが、この住居跡の方が新しい。住居跡の規模は、南北長5.08m、東西長5.12mを測る。柱穴は、6本を検出した。4本の柱穴は、それぞれ

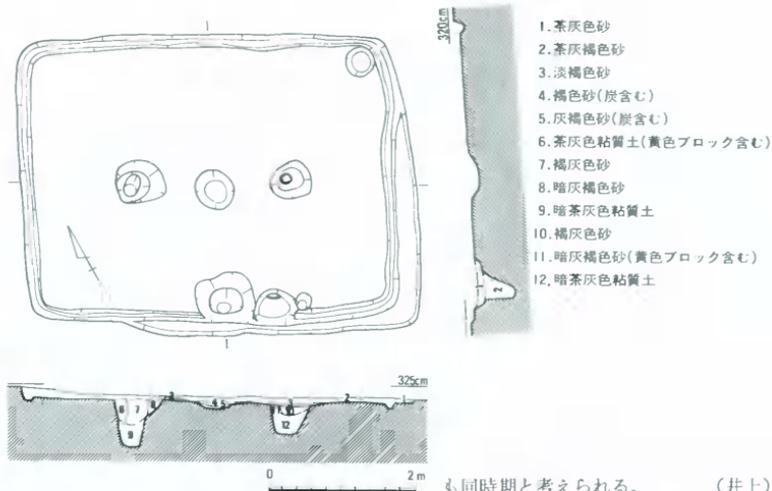


第171図 竪穴住居15 出土遺物(2)

住居跡の角に近い位置にあり、南北間の距離は、東側3.44m、西側3.48mを測る。残る2本の柱穴は、住居跡のはぼ中央に、1.98mの距離をおいて掘られており、そのはぼ中心に径約40cmの円形を呈し、中央部分がやや窪む焼土面を検出した。焼けた面は、赤褐色を呈する部分のみであるが、竪穴住居10のように鍛冶炉の可能性もある。遺物としては、土器の他に柱穴より櫛が出土している。土器の時期は、百・古・Ⅱと考えられ、住居跡



第172図 竪穴住居16



も同時期と考えられる。(井上)

竪穴住居16 (第172図、図版34)

207 I 区の北部中央付近で、長方形にめぐる溝が検出された。南側の一部は竪穴住居15によって破壊されている。その形態から判断して竪穴住居の壁体溝と考えられる。溝の幅は18cm、深さは7cmと浅い。おそらく住居の床面下まで削平をうけたものと判断される。溝によっ



第173図 竪穴住居17・出土遺物

て画された長方形の東西幅は418cm、南北幅は310~320cmを測る。区画内からは、柱穴はおろか何の施設も検出されなかった。溝の出土遺物がないため、この住居の年代は不明だが、竪穴住居15の百・古・Ⅲよりは古いことは確実である。(岡本)

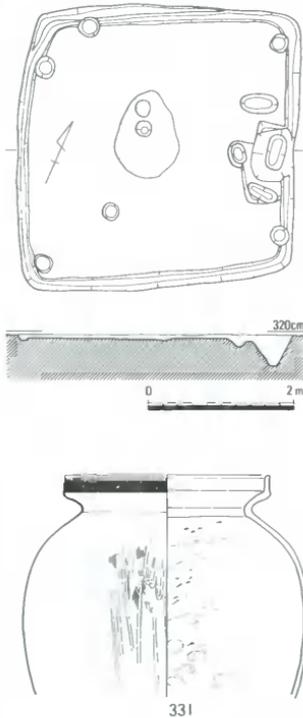
竪穴住居17 (第173図、図版34)

207 J 区の東寄りで検出された長辺5.3m、短辺4.2mを測る長方形の竪穴住居である。検出面からの深さはわずか10cmあまりで、埋土は灰を含む茶灰褐色砂であった。住居内には長軸にそって柱穴が2本と、その中央には中央穴が穿たれている。中央穴は深さが10cmあまりで、埋土の中には炭が認められた。南辺の中央には壁に接して土塊が掘り込まれている。平面形はいびつながら方形を意識しているようである。深さは50cmであるが、上端から6cmほど下がった場所に平坦面を形成している。

遺物は土器が少量出土した。328は口縁端部がわずかに立上る壺、329と330は口縁部外面に楕状工具による沈線がめぐる甕である。時期は百・古・Ⅱと考えられる。(平井勝)

## 堅穴住居18（第174図、図版34）

207J区の中央東寄りで検出した方形の堅穴住居である。平面形は正方形に近いが、南西辺が3.8mであるのに対し、他の3辺は3.6mとやや狭くなっている。深さは検出面から6cmあまりで、埋土は炭を多く含む淡灰黄色砂である。住居内には住穴が四隅に掘られているが、南東と南西隅については深さが30～40cmあるものの、北東、北西隅については10cmあまりと浅く、やや問題が残る。中央部は長さ1.2m、幅90cmの楕円形の範囲がわずかに凹み、さらに穴が2つ穿たれている。この浅い凹みには焼土や炭が認められた。北東辺の中央の壁に接して長方形の土壌が掘り込まれている。この土壌の西側には



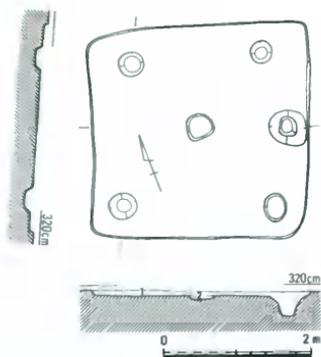
第174図 堅穴住居18・出土遺物

小判形を呈する深さ10cmあまりの穴が2段に穿たれている。

遺物は土器が少量出土した。図示し得たのは甕で、球形に近い胴部に、強く外反しさらに垂直に立上がる口縁部をもつものである。いずれも口縁端の外面には櫛状工具による沈線がめぐる。時期は百・古・Ⅱと考えられる。(平井勝)

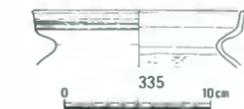
## 堅穴住居19（第175図、図版35）

207K区の西南で検出された方形の堅穴住居である。平面形は一辺2.9mのほぼ正方形を呈し、深さは検出面から6cmを測る。住居内の四隅には柱穴が配され、中央部にも浅い穴が穿たれている。柱穴はいずれも10cmあまりの深さで、柱穴としては浅い。中央の穴は深さ6cmほどで、底は焼けて少し赤くなっており、埋土中にも炭や焼土が認められた。東辺の中央には壁に接して土壌が掘り込まれている。平面形は隅丸方形に近く、深さは28cmを測る。なお、本住居



1. 淡茶灰色砂 2. 明茶灰色砂(炭・焼土含む)

第175図 竪穴住居19・出土遺物



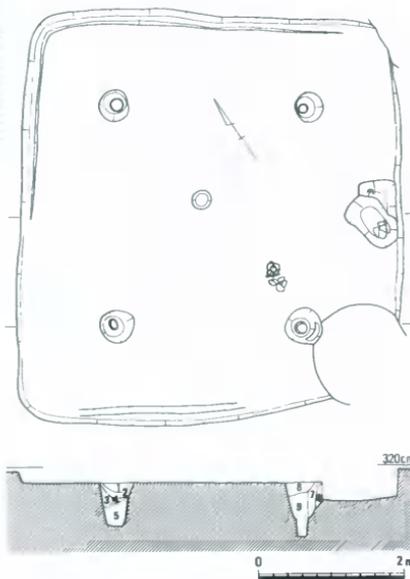
には壁体溝は認められなかった。

遺物は土器がわずかに出土しており、百・古・Ⅱと考えられる。(平井勝)

竪穴住居20 (第176・177図、図版35)

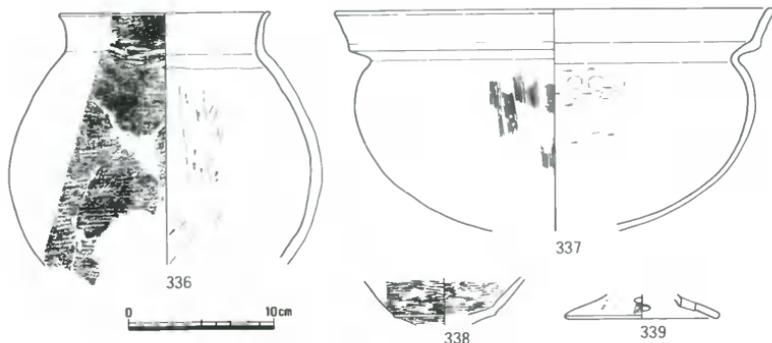
207K区の南東端から208K区の北東端で検出された方形の竪穴住居である。

平面形は長軸5.75m、短軸5.2mのやや長方形を呈するが、南東辺は北西辺に比べて少し短くなっている。深さは検出面から14cmで、埋土は淡茶灰色砂である。住居内には壁にそって一部溝が認められた。四隅近くには柱穴が配され、中央には小さくて浅い穴が穿たれている。南東辺の中央の壁に接して、2つの土壇が掘り込まれている。その切り合い関係は明確にし得なかったが、先に長方形を呈した深さ15cmほどの土壇が掘られ、ついで隅丸方形を呈する深さ20cmの土壇が掘られたものと推定される。



1. 灰黄褐色土 2. 黄灰色土 3. 灰黄褐色土  
4. 暗黄褐色土 5. 黄褐色土 6. 灰茶褐色砂質土  
7. 黄色土 8. 淡灰茶色土 9. 灰黄褐色粘質土

第176図 竪穴住居20



第177図 竪穴住居20出土遺物

遺物は土壌内から高杯や鉢、南側柱穴近くから甕などがまとまって出土したが量は少ない。336は球形の胴部にゆるく外反する口縁部がつく甕で、胴部外面にはタタキ目がみられる。337は鉢、338と339は高杯の杯部と脚部である。時期は百・古・Ⅱと考えられる。（平井勝）

## (2) 建物

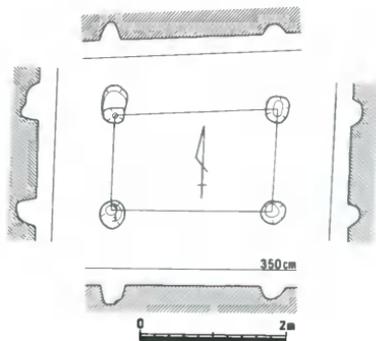
## 建物4（第178図）

205G区の南西寄りに検出された1×1間の建物である。柱穴は径35cm前後の不整形円形を呈し、深さ20～25cm、柱穴間の長さは長辺220cm、短辺140cmを測る。

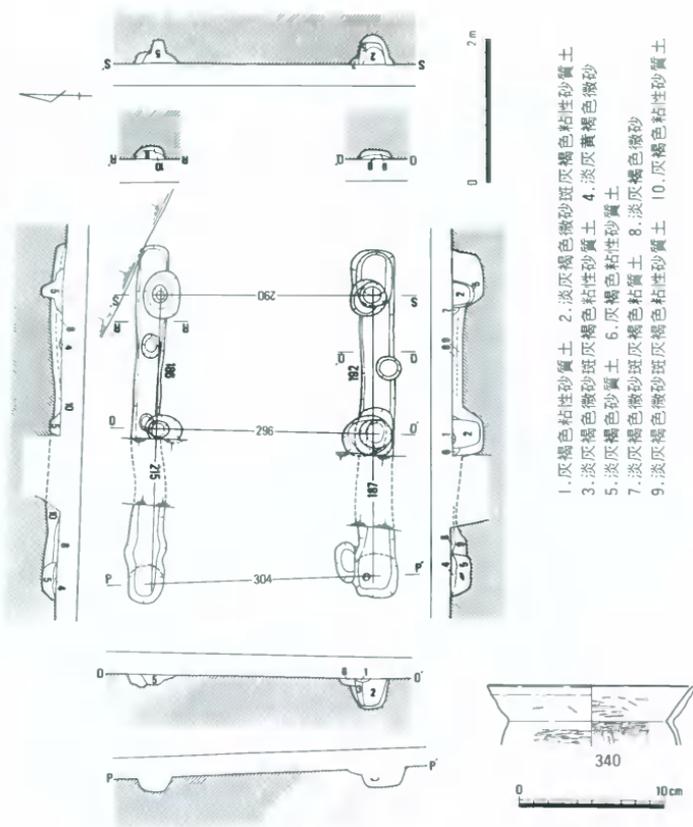
埋土は褐灰色～灰褐色の砂質土で、遺物としては土器の小片しか出土していない。しかし埋土の質と色調、および建物の特徴から、百・古・Ⅰの時期とみられる。（柳瀬）

## 建物5（第179図、図版36）

206G区と206H区にまたがって位置する2間×1間の掘立柱建物である。棟の方向は東西方向をとる。桁行に沿って溝が掘られ、南桁行側では、溝の中央と東西両端が柱穴状に深くなっている。北側桁行の溝は幅42cm、深さ16～19cmを測り、南側桁行の溝は幅46cm、深さ14cmである。南側桁行の柱穴状部分は、東端が長径76cm、深さ43



第178図 建物4



第179図 建物5・出土遺物

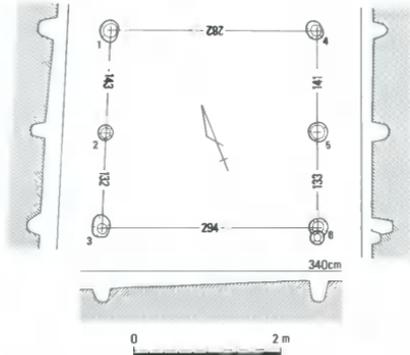
cm、中央が長径66cm、深さ42cmを測る。この2条の溝が埋まった後に、再度、同規模の掘立柱建物の柱穴が、2条の溝と重複して掘られている。おそらく、建て替えられたものと考えられる。二度目の柱穴は長径52~70cm、深さは15~38cmを測る。掘立柱建物の規模は、東梁間が290cm、西梁間は304cm、北桁行401cm、南桁行379cmであり、柱穴の心々を結んだ平面形は台形となる。

最初の建物は、桁行の柱穴を結ぶように溝が掘られているが、おそらく、この溝には横木が埋められ、その横木に各柱根が固定されていたのではないかと推定される。したがって、この時代の掘立柱建物としては、きわめて強固につくられた特殊な建物といえるようである。

出土した土器は少ないが、南桁行の西端柱穴から図示した土器が出土している。その年代は百・古・ⅠかⅡと考えられる。この時期の建物は周辺では検出されていないが、このことも特異性のあらわれであろうか。(岡本)

#### 建物6 (第180図、図版36)

206H区の中央付近にあり、竪穴住居11と重複している。2間×1間の南北棟の掘立柱建物である。梁間が広く、桁行の柱間の倍以上の長さを持つ。柱穴の直径は22~32cm、深さは19~29cmを測る。東西の桁行ともに、南側ほど深くなっている。桁行の中央の柱穴もともに中点より南にずれている。柱痕跡は確認されなかった。柱穴の中心を線で結んだ平面形は正確な長

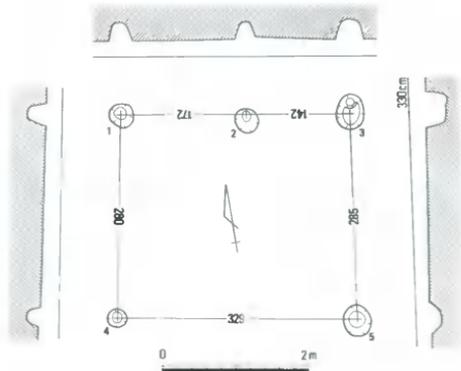


第180図 建物6

方形とはならない。5個の柱穴から土器片が出土しているが、小片のため年代は不明である。ただ、建物の時期は竪穴住居11よりは新しい。(岡本)

#### 建物7 (第181図)

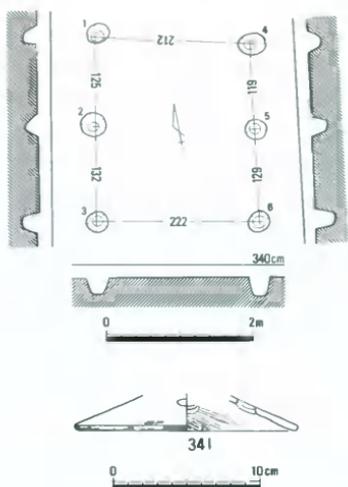
206H区の東端に位置し、竪穴住居10と重複して検出された。東西棟の掘立柱建物である。2間×1間とみられるが、南桁行では中央の柱穴が存在していない。柱穴の規模は、長径が28~48cm、深さは16~28cmを測る。柱穴3では直径20cmの柱痕跡らしい凹みが検出されたが、他の柱穴では柱痕跡は認められなかった。柱穴底部の高度では南桁行の柱穴が高い。3個の柱穴から土器の出土があったが、小片のため時期は不明である。竪穴住居10よりは新しい時期の建物と考えられる。(岡本)



第181図 建物7

#### 建物8 (第182図)

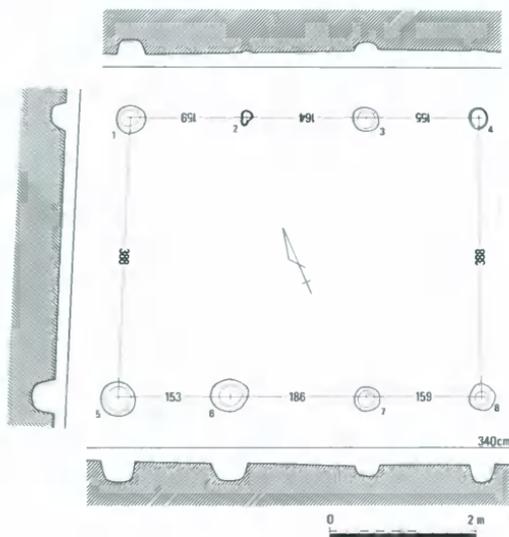
206H区の南棟隅で検出された。2間×1間で南北棟の



第182図 建物8・出土遺物

掘立柱建物である。棟の方向が建物7の棟方向とはほぼ直交し、西側桁行が建物7の西梁間の延長上にあることから、同時に存在していた可能性が高い。建物7の南2mに位置する。柱穴はいずれも円形に近く、直径は30～38cm、深さが17～28cmである。柱穴底部の高度は両桁行ともに南側ほど低くなっている。柱痕跡はどの柱穴からもみつからなかった。柱穴の中心を結んだ線で描かれている四辺形はかなり歪んだものになる。2個の柱穴から土器がわずかに出土している。図示した土器は柱穴6から出土した。建物7との関係から竪穴住居12よりは新しい時期の建物と考えられる。(岡本)

建物9 (第183図、図版37)



第183図 建物9

2071区の北東部に位置し、竪穴住居16と重複関係にある。3間×1間の東西棟の掘立柱建物である。建物6とはほぼ直交するようである。沢田遺跡における古墳時代の建物としては大形で、梁間388cm・桁行全長498cmを測る。桁行の柱間は南北ともに中央が広がっている。柱穴はほぼ円形で、直径30～54cmを測る。柱穴2は後世の攪乱を受けて変形している。柱穴の深さはかなり不統一で、もっとも浅い柱穴4は2cm、もっとも深い柱穴5は30cmである。柱痕跡の認め

られた柱穴はなかった。柱穴の中心を線で結ぶと、北側桁行と南側桁行は平行し、東側梁間もこれにはほぼ直交するため、平面形はかなり長方形に近づく。6個の柱穴から遺物が出土している。小破片の土器で年代ははっきりしない。遺構の重複関係から考えると、この建物9は堅穴住居15や16より新しい時期の遺構と考えられる。

(岡本)

#### 建物10 (第184図)

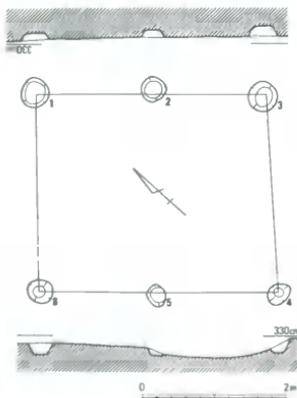
206 J 区の南西端から207 J 区の北西端にかけて検出された2間×1間の建物である。東西棟建物であるが主軸は少し東に振っている。柱間寸法は、桁行2.75m、梁行2.7mである。柱穴は10cm前後の浅いものが多い。遺物は土器がわずかに出土しているが、詳細な時期は知り得ない。検出面とも合わせて考えるならば古墳時代の前半期と推定される。

(平井勝)

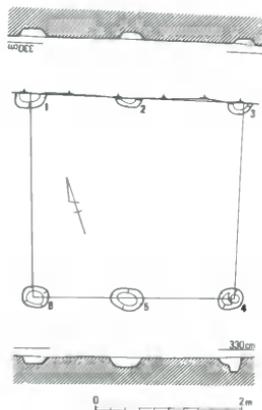
#### 建物11 (第185図)

207 J 区の中央西寄りで見出された2間×1間の建物である。棟の主軸は北西から南東方向をとる。柱間寸法は北東側が3.12mであるのに対し、南西側は3.23mと少し広い。梁行は2.75mを測る。柱穴はいずれも浅い。遺物はわずかに土器が認められる。時期は古墳時代前半期と考えられる。

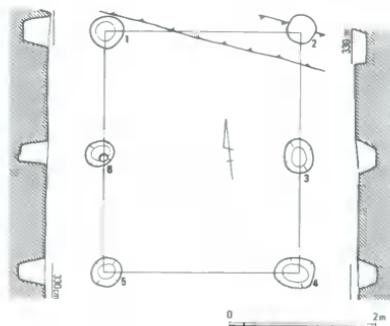
(平井勝)



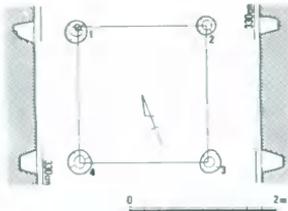
第185図 建物11



第184図 建物10



第186図 建物12



第187図 建物13

建物13 (第187図)

207J区の中央で検出された1間×1間の建物である。柱間寸法は南側と北側が1.7m、東側と西側が1.9mである。遺物は土器がわずかに出土した。時期は古墳時代前半期と考えられる。(平井勝)

(3) 井戸

井戸3 (第188・189図、図版37・114)

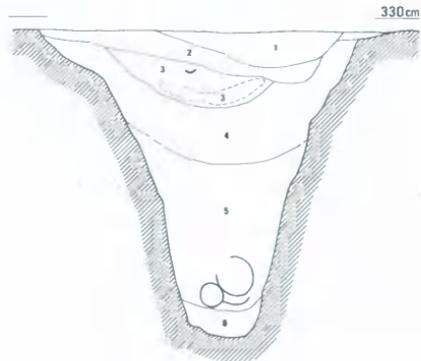
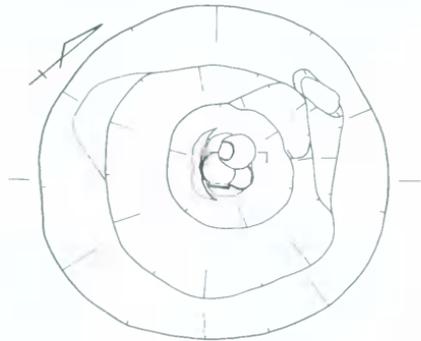
206G区の南寄りに位置する長径約180cmのはぼ円形を呈する素掘りの井戸である。深さは約60cmを測り、底に至るに従い急速に径を減じていき、底での径は約40cmに満たない。堆積土層は6層に区別され、第1～第4層が砂質土、第5・6層は粘質土である。第3層の下部には炭を多く含む、第6層には少量含む。

遺物は、第3層に少量の土器片を含むほかは、第5層の下部にはほぼ完形の甕2個体と比較的大きな甕片1個体分が重なるように出土しているだけである。

第5層出土の甕346・347などの特徴は、百・占・Ⅱを呈する。(柳瀬)

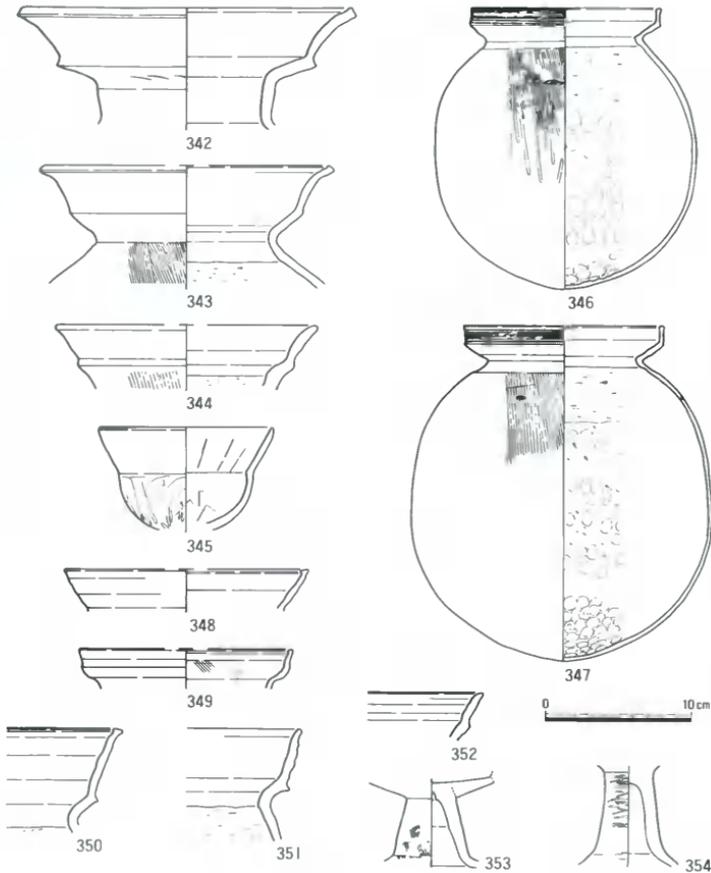
建物12 (第186図)

207J区の北端中央で検出された南北棟の2間×1間の建物である。柱間寸法は桁行が1.65m等間、梁行は2.6mを測る。遺物は土器がわずかに出土した。時期は古墳時代前半期と考えられる。(平井勝)



- |            |           |
|------------|-----------|
| 1. 暗灰色砂質土  | 4. 褐色砂質土  |
| 2. 黄灰色砂質土  | 5. 灰褐色粘質土 |
| 3. 灰褐色砂質土  | 6. 暗灰色粘質土 |
| 3. (炭多く含む) |           |

第188図 井戸3

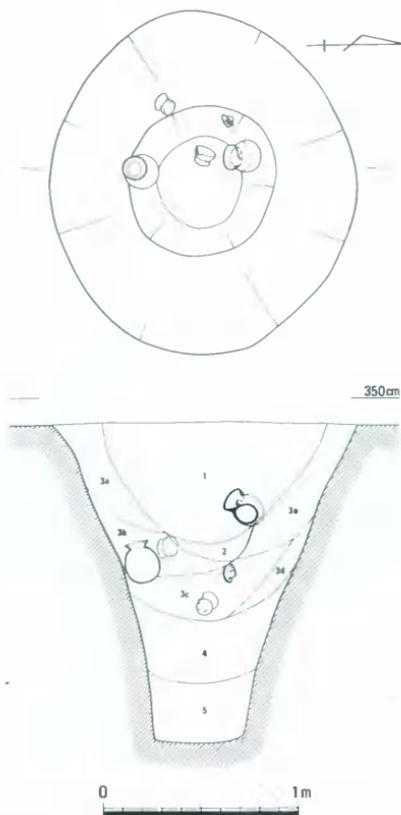


第189図 井戸3出土遺物

井戸4 (第190・191図、図版38・114・115)

206 I 区の調査区北端付近に位置する。平面形が楕円形を呈する素掘りの井戸である。検出面での規模は長径180cm、短径158cmを測り、深さは168cmである。底面は平坦で、長径80cm、短径75cmと円形に近くなる。壁の傾斜は急で、とくに下半はきつくなる。

埋土は細分することが可能であったが、大きくは5層に分けられる。1層から3層にかけては土器片が多く含まれ、完形に近い土器も何点もあったことから、井戸としての機能が失われた後に投棄されたものと考えられる。1層の底には焼土塊や炭粒が点々と含まれ、ゴミ穴とし



1. 灰褐色微砂 2. 灰褐色微砂 3a. 淡灰褐色微砂  
 3b. 黄色粘土斑灰褐色微砂 3c. 灰褐色粘性微砂(炭粒多)  
 3d. 暗灰褐色微砂 4. 暗暗灰色粘性微砂 5. 灰色粘性微砂

第190図 井戸4

整形でかすかな凹面となり、長径48cm、短径38cmである。

埋土は5層に分けられるが、第4層は黄色粘土斑の有無や色調の相違から3層に細分可能である。第2層には炭粒が点々と含まれ、第3層では多量の炭粒が包含されていたが、これは井戸が廃棄されてから後の使用状況を物語っている。また、第4b層と第4c層でも炭粒が点々と認められ、この層では完形に近い土器の出土もみられたことから、第4層も井戸の機能が失われた後の堆積の可能性を示している。第5層は粘性の強い土である。

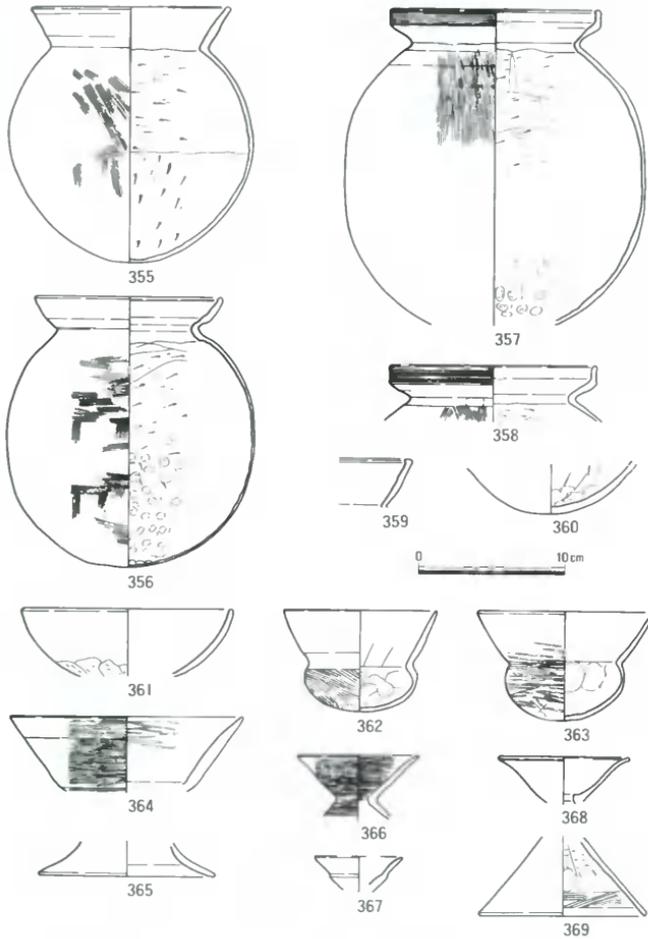
て利用されたことを示している。また、3C層の底でも多量の炭粒が確認されている。5層は均質な層で、井戸の使用中に堆積した可能性が高い。

図示した遺物はいずれも1～3層から出土している。このうち、355・359・360・365・367・369は1層出土である。また、362は完形品で、355・356もほぼ完形に近い。356や359の甕の口縁端部は内側に肥厚し、小型丸底土器や小形器台の共件など典型的な布留式併行を示している。百・古・Ⅱと考えられる。

井戸4の廃絶は百・古・Ⅱであるため、掘削時期についてはそれ以前と推定される。しかし、素掘りの井戸であるために、そう長期にわたる使用を考えると困難なため、百・古・Ⅱの期間内に納まる可能性もある。(岡本)

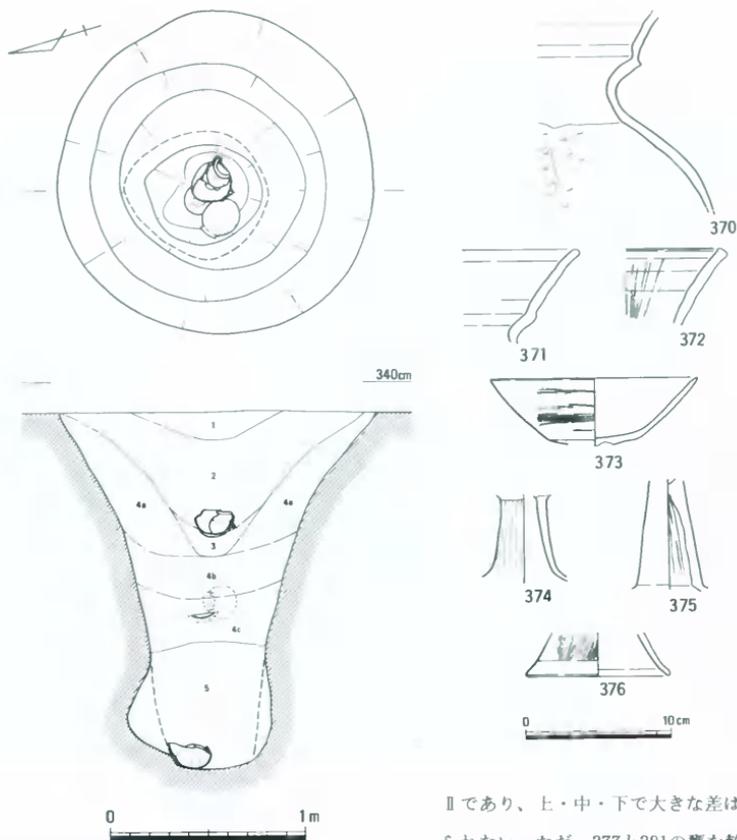
井戸5 (第192・193図、図版38・115)

207 I 区の西半中央付近にあり、竪穴住居14と重複しているが、竪穴住居の埋没後に掘られている。平面形は円形で、素掘りの井戸である。検出面での規模は長径168cm、短径162cm、深さ187cmを測る。壁の傾斜は急で、深くなるにしたがいさらに角度を増す。底部付近の扶れは崩落によるものと考えられる。底面は不



第191図 井戸4出土遺物

遺物の出土状態をみると、第2層・第4c層・第5層の底部でそれぞれ集中が認められ、これは前述の炭粒の分布状態とよく対応している。ある時間幅において、ゴミの投棄が連続したものと推測される。この三カ所の上器集中部分を上・中・下と表現すると、下から出土したものは381で、第192図の断面図に図示した土器である。中から出土したものは370・372・373・383の4点で、断面図に図示されているのは373・383である。それ以外の土器はすべて上部出土のもので、断面図に図示したのは377である。これらの土器の示す年代はおおむね百・古・



1. 淡灰褐色砂質土 2. 灰褐色粘性砂質土  
 3. 暗灰褐色粘性砂質土 4a. 淡灰褐色粘性砂質土  
 4b. 黄色粘土斑暗褐色粘性砂質土 4c. 黄色粘土斑灰褐色粘性砂質土  
 5. 暗灰色粘性砂質土

第192図 井戸5・出土遺物(1)

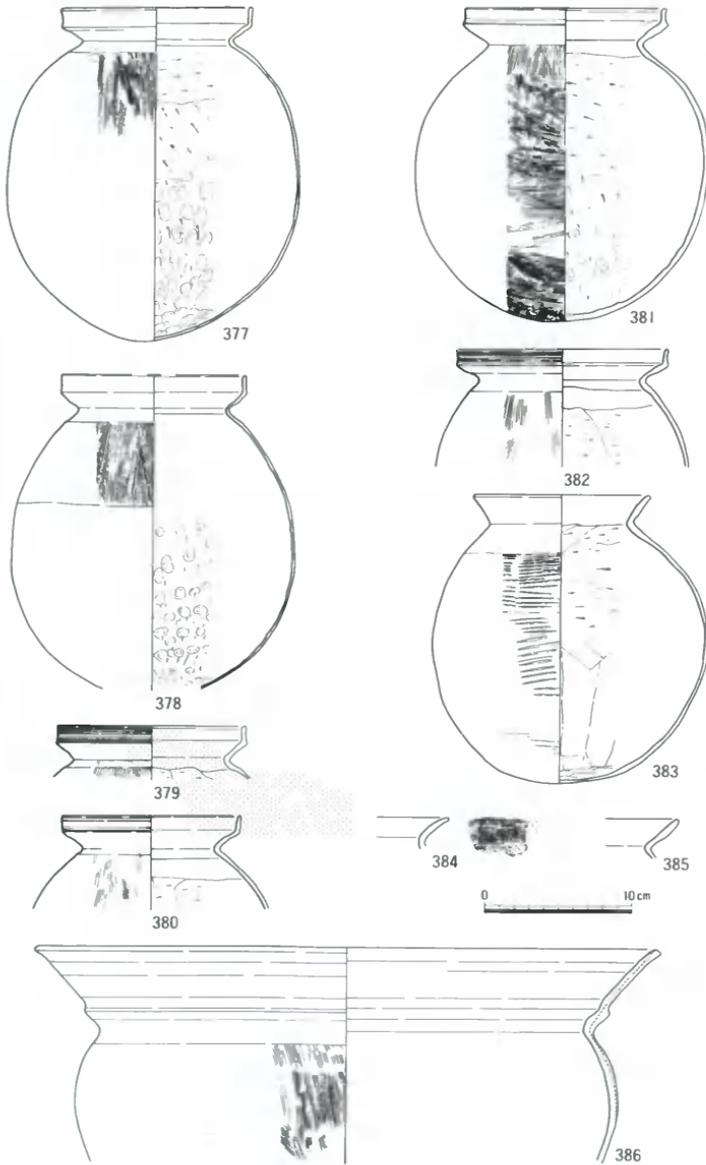
ある。口縁部の立ち上がり部分でも違いがある。

以上のような土器の年代観からみて、井戸5は百・古・Ⅱの期間の中で機能し、廃絶したものと考えられる。 (岡本)

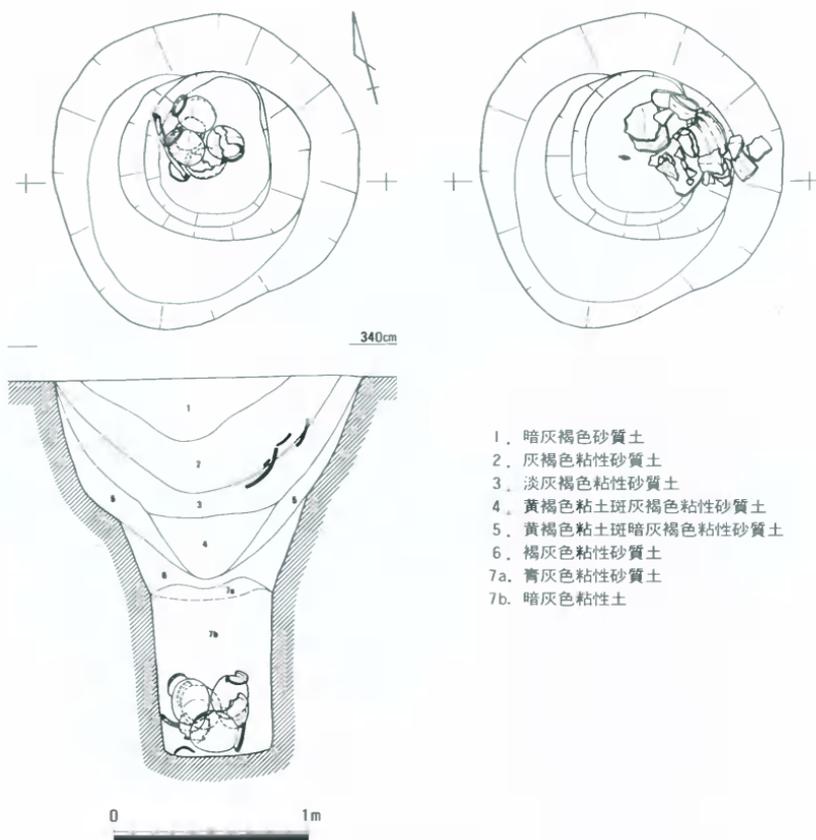
井戸6 (第194～197図、図版39・116・117)

207 I 区の南東隅で検出された素掘りの井戸である。平面形は不整形な円形を呈し、検出面

Ⅱであり、上・中・下で大きな差はみられない。ただ、377と381の甕を較べると、体部の形状が、前者はずん胴で底部が尖るのに対し、後者は球形に近く、時期的な変化が認められるよう



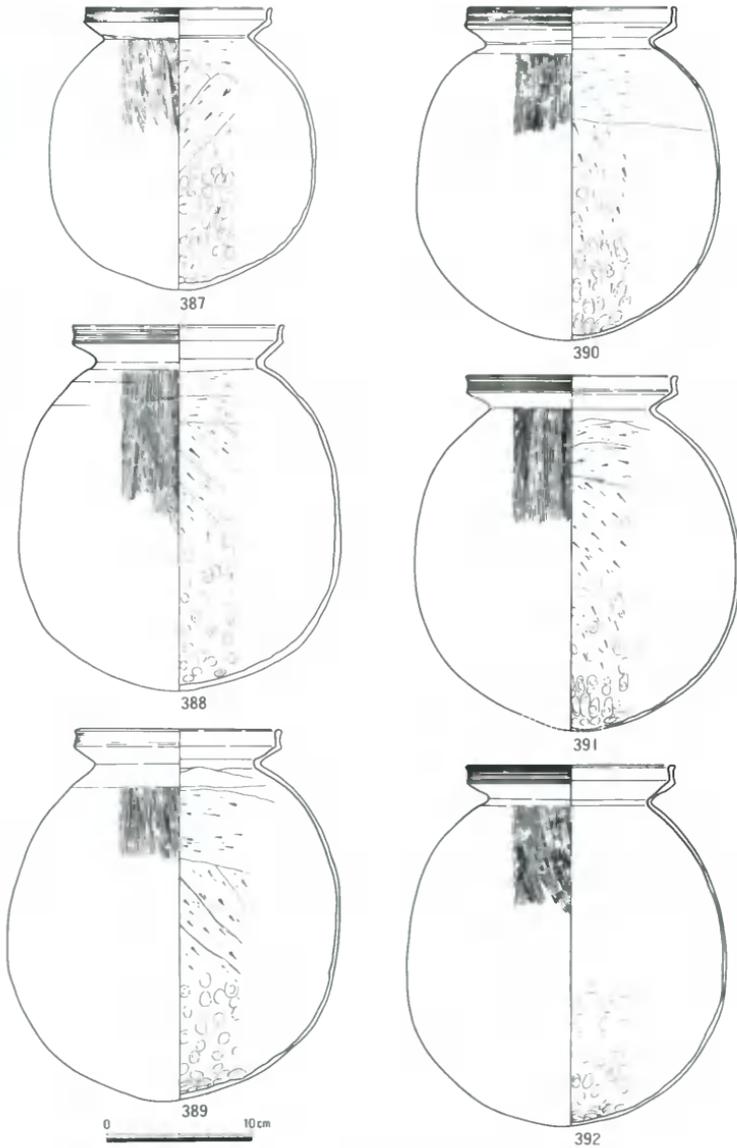
第193図 井戸5出土遺物(2)



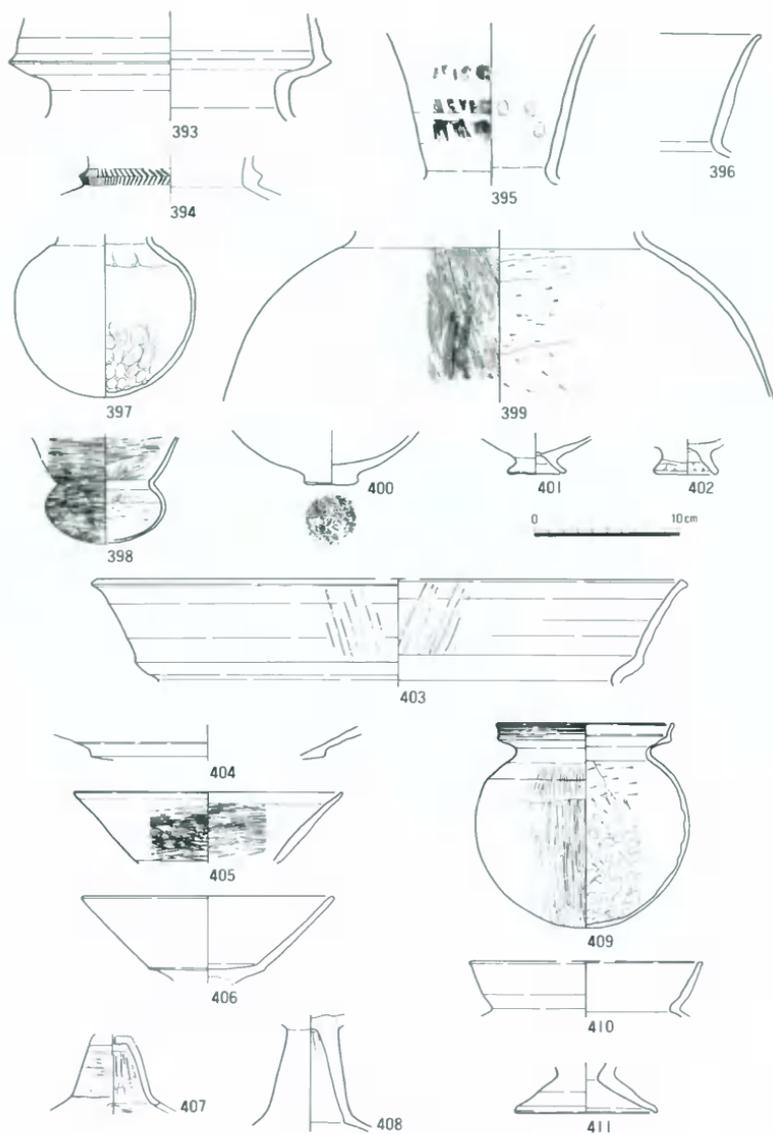
第194図 井戸6

では長径168cm、短径159cm、深さは198cmを測る。この井戸は二段構造になっていて、上方は深さ106cmのすり鉢状の土壇となり、下方は最大径99cmの円筒状の井戸本体となっている。上方の土壇の底部付近の埋土にあたる第4層と第5層には、地山の砕粒である黄褐色粘土斑が含まれている。この層には炭粒や土器片がほとんど認められなかったことから考えると、この二層は自然崩落によって形成された可能性も考えられる。第2層と第3層では炭粒が点々と認められ、土器片も含まれ、とくに第2層では大形壺の土器片も含め、多量の土器が投棄された状態で出土した。崩落によって拡大した穴をゴミ穴として利用したものであろう。

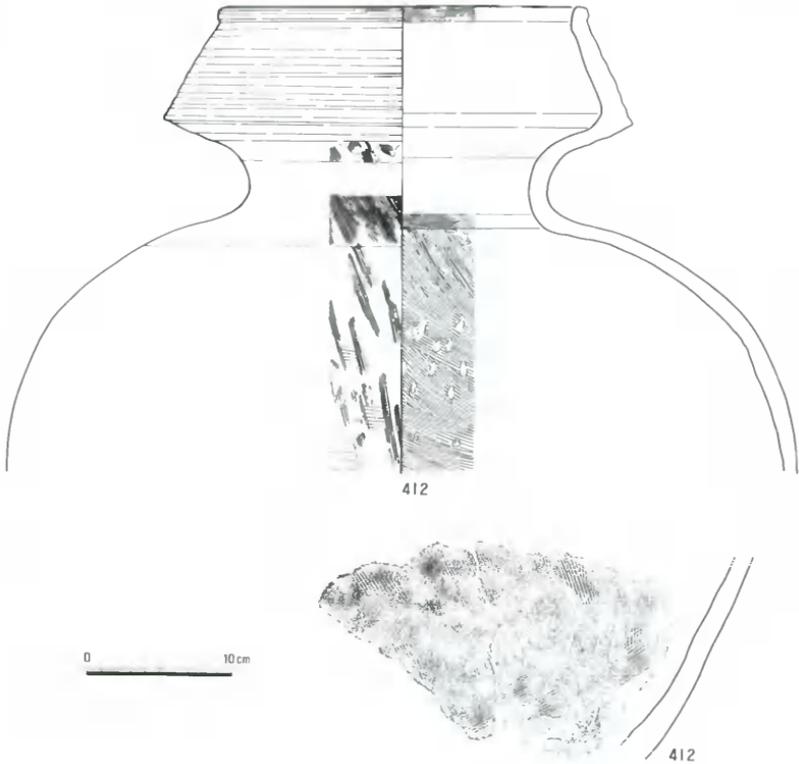
遺物の出土状態は、前述の第2層と第3層での多量出土の他に、井戸底部の第7b層からも



第195図 井戸6出土遺物(1)



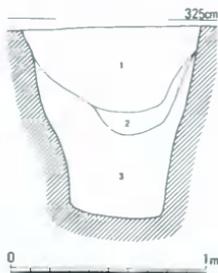
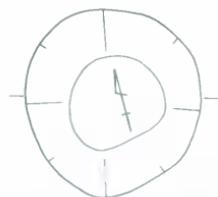
第196図 井戸6出土遺物(2)



第197図 井戸6出土遺物(3)

完形に近い甕が6点積み重なって出土した。土器の他にも木切れや縄の破片も伴っていた。点数の多さからすると誤って落としたものとは考えられず、これも人為的に投棄されたことが想定されるが、完形品がほとんどであったことからすれば、より積極的に埋め置かれた可能性、たとえば井戸あるいは水祭祀のために埋納されたという考えも起こってくる。第7 a層の上面をみると中央部分が不自然に盛り上がっているが、このことも人為的な埋め戻しの可能性を示している。ただ、第7 a層と第7 b層の上は黄褐色粘土斑などは含まず、均質であるため、埋め戻しがあったとすれば、土を選んだことを考えなければならない。

第195図に示した土器が底部から重なって出土した甕である。口縁部の細部などについては違いがあるものの、全体の器形や調整などはよく類似して斉一性を示し、良好な一括資料として把握することができる。体部は球形よりは長めで下膨れとなり、底部は尖り気味の丸底とな



1. 淡褐色砂(炭を含む)
2. 暗灰色砂(黄色ブロック含む)
3. 暗灰色砂(炭を含む)

第198図 井戸7

井戸6は百・古・Ⅱには廃絶したと考えられる。

(岡本)

井戸7 (第198図)

207J区の中央近くで検出された井戸である。平面形は長径1m、短径87cmの楕円形を呈し、深さは1mを測る。底はほぼ平坦で径50cmである。埋上は3層に大別され、1・3層には炭を含む。遺物は土器がわずかに認められた。いずれも図示し得るものではないが、百・古・Ⅱと考えられる。(平井勝)

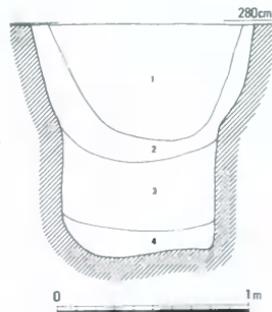
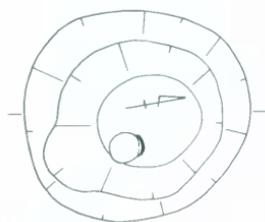
井戸8 (第199図)

208K区の北西端近くで検出された井戸である。検出場所は洪水砂が堆積しており、本来は洪水砂上面で検出されるのであるが、洪水砂を除去した段階で確認し得た。井戸の平面形は1.10mの円形を呈し、深さは検出面から1.20mを測る。底はほぼ平坦で、壁は底か

る。体部外面は肩部付近ではハケが認められるものの、それからは底部までナデによってハケが消されている。体部内面は全面ヘラケズリされるが、肩部付近では横方向に削られている。底部から中央付近にかけて指頭圧痕が多く認められる。どの甕も外面全面に煤が付着し、とくに底部から中央付近までは厚い。第196図と第197図の土器は第2層・第3層出土である。各器種の土器がみられるが、特に注目されるものとして第197図の大型壺がある。強く屈折した口縁は内傾しながら高く立ち上がり、外面には凹線状のかすかな凹み為何れも認められる。体部は内外面共にハケ調整されるが、外面では粗細二種のハケが使い分けされている。外面はハケ調整の後にナデかヘラミガキされたようで光沢がある。胎土は緻密で、角セン石や金

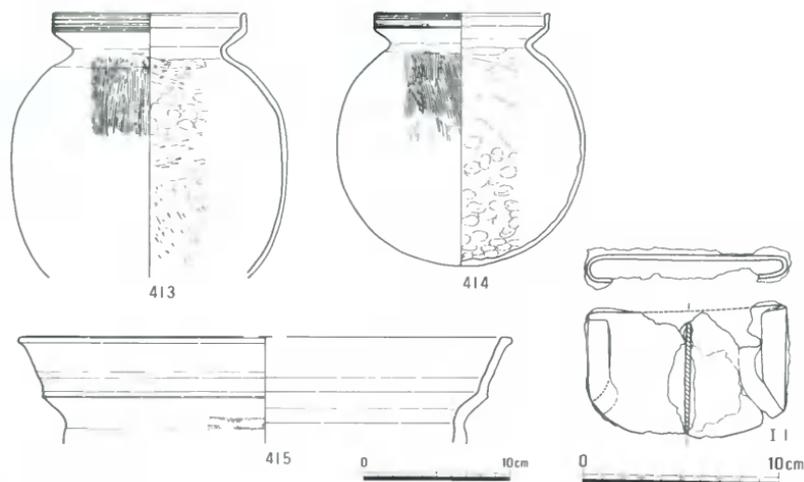
雲母片が含まれている。色調はにぶい橙色である。

出土した土器の年代から判断して、井



1. 暗茶灰褐色砂質土(炭多く含む)
2. 茶灰色砂(炭含む)
3. 灰青褐色粘土
4. 淡灰青色砂

第199図 井戸8



第200図 井戸8出土遺物

ら60cmあまりのところまではほぼ垂直に、そこから上はやや緩やかに立上がる。埋土は4層に分けられ、上の2層は砂質で炭を含む。遺物は鉄製鋤・鎌先1点と土器で、底には完形の甕が1個認められた。413・414は甕で、いずれも球形の胴部に強く外反しさらに上方に立上がる口縁部をもつ。415は鉢である。時期は百・古・Ⅱと考えられる。(平井勝)

## 井戸9 (第201・202図、図版40)

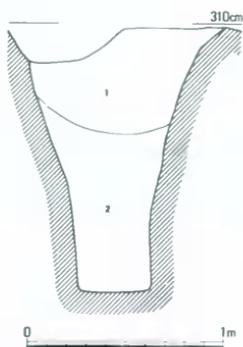
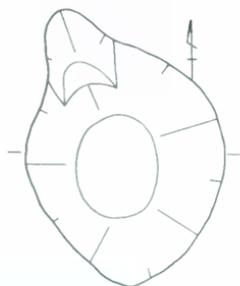
207K区の東端南寄りで検出された井戸である。平面形は北側が一部突出する楕円形を呈し、長径1.26m、短径1mを測る。深さは1.4mで、壁は平坦な底から途中まではほぼ垂直に立上がり、そこからやや傾斜が穏やかになる。遺物は土器がわずかに出土した。時期は百・古・Ⅰと考えられる。(平井勝)

## (4) 土壌

## 土壌64 (第203図)

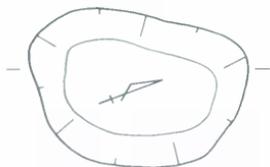
205G区の北寄りに検出された不整形の土壌である。短径80cm、長径110cmを測り、深さは4～8cmと比較的浅い。覆土は淡灰黄色の粘質土のほぼ単層であるが、底部近くには茶灰褐色の粘質土がブロック状に認められる。

遺物は破片ばかりが数片出土したのみであるが、時期は百・古・Ⅰと思われる。(柳瀬)



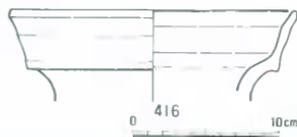
1. 淡黄灰色砂 2. 黄灰褐色砂

第201図 井戸9



1. 淡灰黄色粘質微砂 2. 灰褐色土

第203図 土壌64



第202図 井戸9出土遺物

土壌65 (第204・205図、図版40・117)

206G区の住居址1の東側に隣接して検出された、比較的大型の方形土壌である。規模は長辺220cm、短辺205cm、深さ約120cmを測る。断面形は逆台形を呈する。また、底面の一部には、40×60cmの長楕円で、深さ15cm程のピット状落ち込みがある。

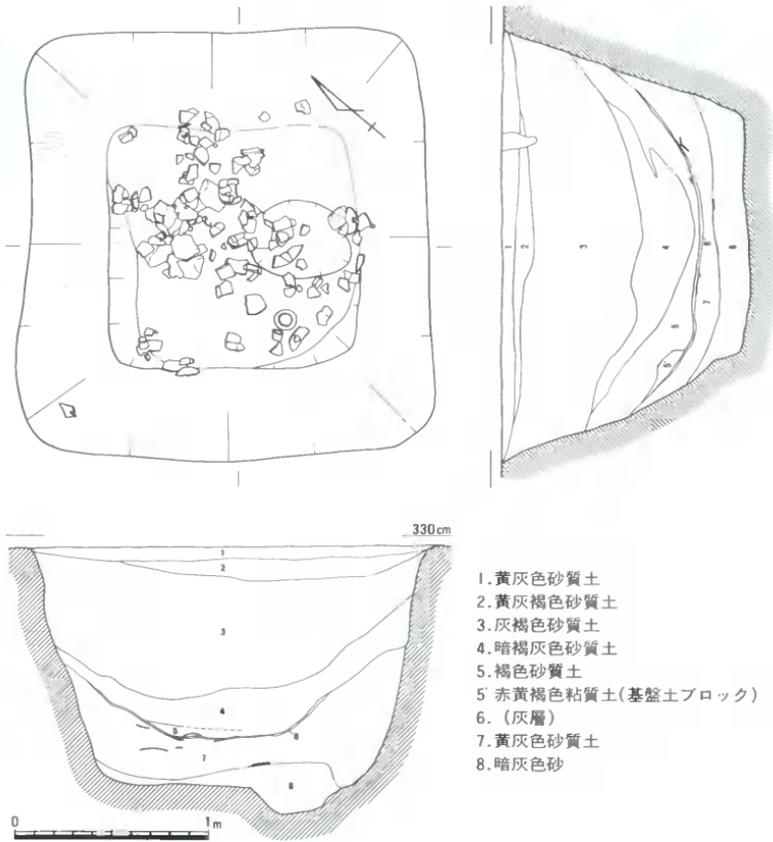
堆積土層は8層に細別できる。そのうち第3・4層には基盤層の黄色粘土塊を多く含み、層の厚い割に単一土層を示すことから、比較的短期間に埋没したと思われる。第6層は1～3cmの厚さの純灰層であり、第6層中および第7層上半部中に、第204図に示した遺物の分布がみられた。なお、他の上層中にはままたった形での遺物分布は認められていない。土壌の形状、深さ等からすれば、貯蔵穴などの用途が考えられるが、埋没の過程で第6層および第7層の土器分布にみられるような何らかの行為があったことを示す。

出土遺物の大半は第6・7層の土器が占め、その中で完形近く復元できる土器も多い。

時期は百・古・1と思われる。 (柳顔)

土壌67 (第206図)

206H区の中央付近南寄りに位置する。平面形は隅丸の方形を呈し、長軸194cm、短軸170cm、深さ16cmを測る。基底は広い平坦面となる。埋土は2層に分けられるが、第1層は色調と粘性の違いから細別される。1層は淡色で粘性が弱い。第2層の断面をみると中央が薄くて周辺が厚いた



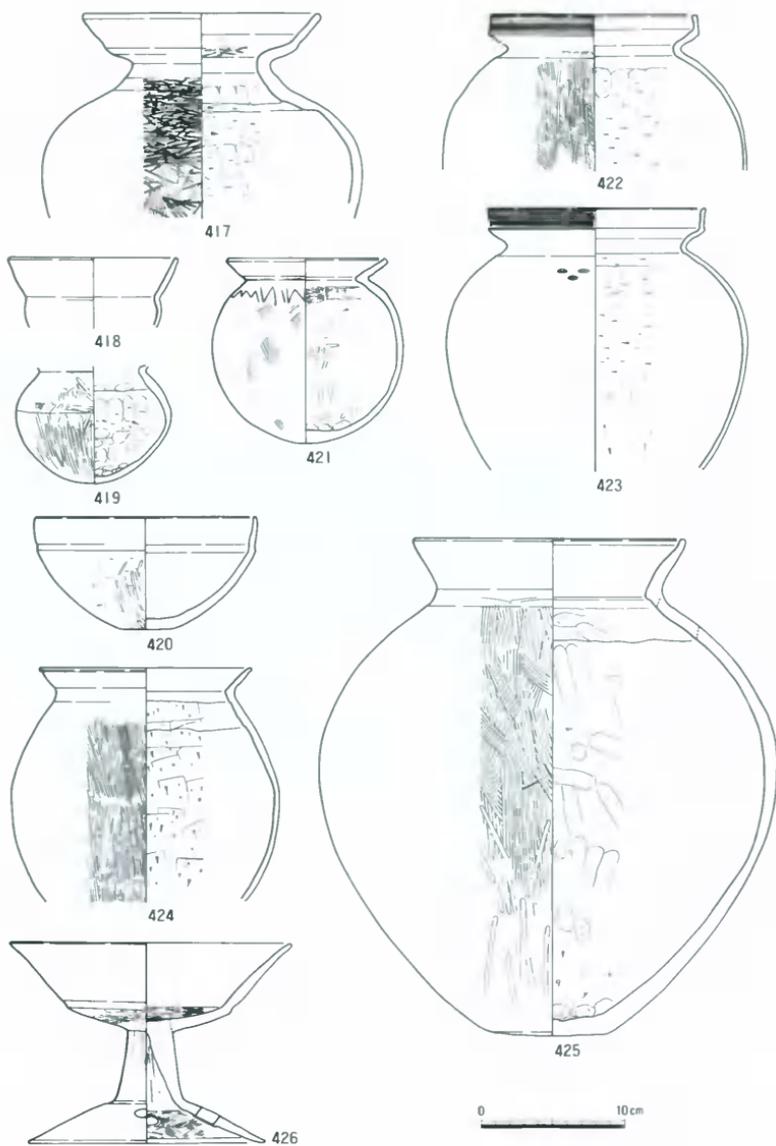
1. 黄灰色砂質土
2. 黄灰褐色砂質土
3. 灰褐色砂質土
4. 暗褐色砂質土
5. 褐色砂質土
- 5' 赤黄褐色粘質土(基盤土ブロック)
6. (灰層)
7. 黄灰色砂質土
8. 暗灰色砂

第204図 土壌65

め、周辺からの土砂の流入という自然的要因で形成されたと考えられる。出土土器は少なく細片のため、その年代は明確ではないが、百・古・ⅠかⅡとみられる。(岡本)

土壌68 (第207図、図版41)

206H区と207H区の境界に位置する。不整形な隅丸長方形の土壌の西側に、約15cm浅い広い段がついている。2基の土壌の重複である可能性もある。長方形の土壌は長軸237cm、短軸136cm、深さ27cmを測る。墳底はほぼ平坦な広い底面となっている。墳内埋土は1層とみられる

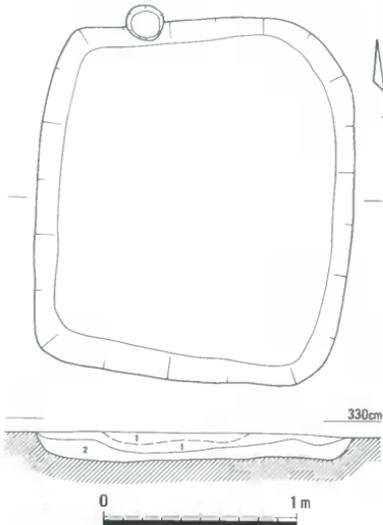


第205図 土壙65出土遺物

が、下半はやや暗色で粘土斑が少なくなっている。西側の段は、長方形土壇の西辺から64cm張り出し、最大幅は190cmである。埋土は長方形土壇と変わらない。出土遺物は少なく、土器も細片で、百・古・IかIIと考えられる。(岡本)

土壇69 (第208図)

206H区の東端近くにある、竪穴住居12の北東隅と近接している。平面形は楕円形を呈し、長径113cm、短径98cmを測る。深さは20cmである。壇壁の傾斜は急で、底面はわずかに波打った平面となり、土壇の中心から南へ片寄っている。埋土は灰褐色砂質土1層である。出土遺物は僅少で、古墳時代前期とみら



- 1. 淡灰褐色砂質土
- 1'. 淡灰褐色砂質土
- 2. 淡灰褐色砂質土斑灰褐色粘性砂質土

第206図 土壇67

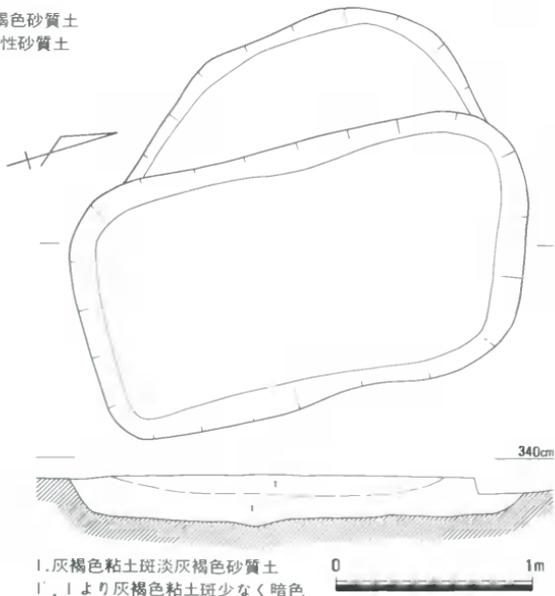
れる土師器片がある。

(岡本)

土壇70 (第209図)

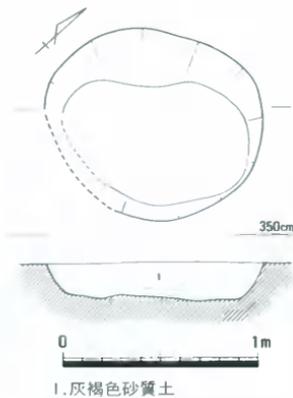
207 I 区の南東端付近に位置する。平面形は不整形で、長径113cm、短径96cm、深さ9cmを測る。

壇壁の傾斜は緩く、底面も平坦ではなく、断面形は皿形を呈する。埋土は灰褐色砂質土1層である。竪穴住居15の東隅か



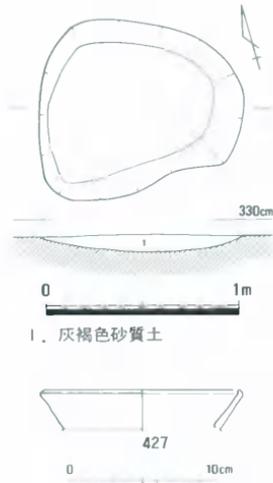
- 1. 灰褐色粘土斑淡灰褐色砂質土
- 1'. 1より灰褐色粘土斑少なく暗色

第207図 土壇68



第208図 土坑 69

ら約3.8m東に位置している。出土遺物は少ないが、図示のように、百・古・Ⅱとみられる甕の口縁が出土している。



第209図 土坑 70・出土遺物

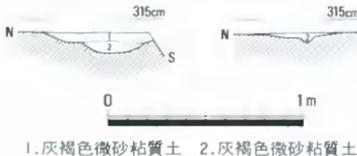
(岡本)

(5) 溝

溝49・50 (第210図)

207H区の中央付近、今回報告する調査区の南端に位置する。弥生時代後期水田を埋めた洪水砂層の上面で検出された。より北の微高地上面へも続いていた可能性があるが、調査においては確認できなかった。

溝49は幅が50cm以上、深さは11cmで、埋土は2層に分けられた。出土遺物として古墳時代前期らしい土器片がある。

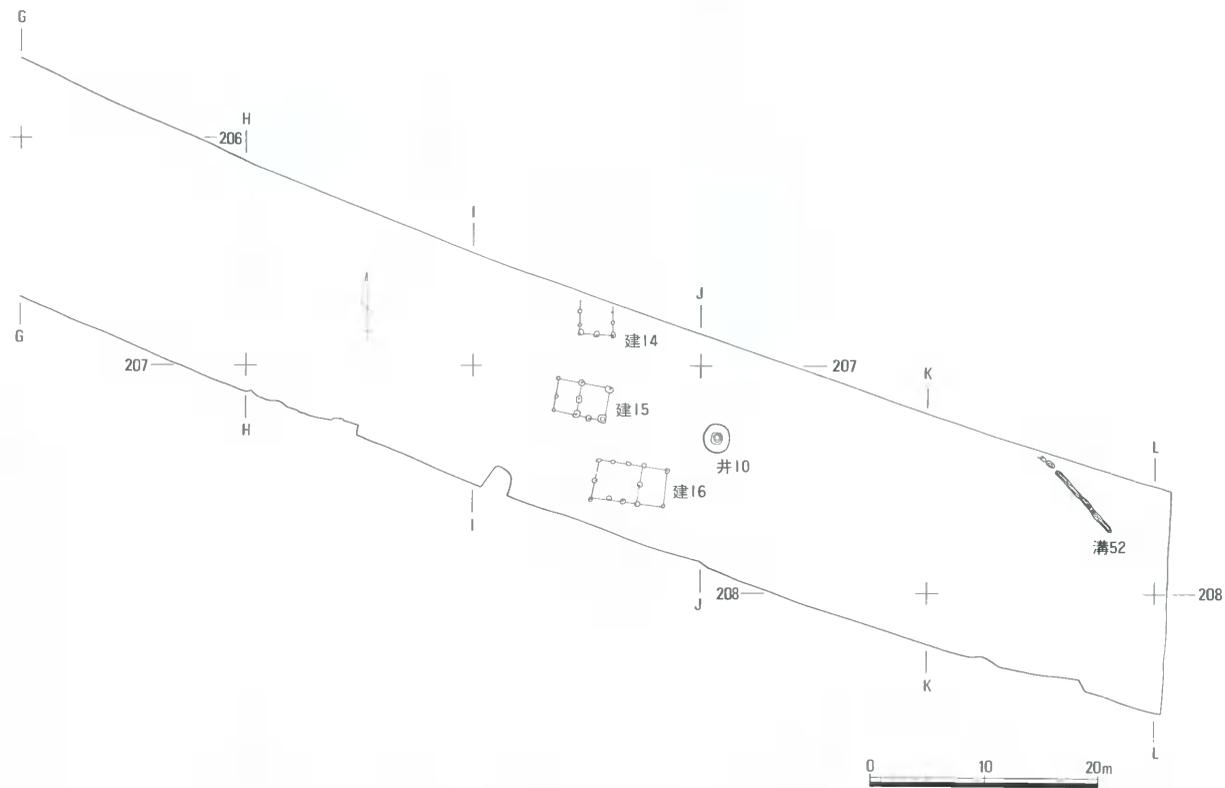


第210図 溝49(左)・50(右)

溝50は幅60cm、深さ8cmを測り、埋土は1層であった。出土遺物はなかった。

この2条の溝は、『沢田2』の溝110～113に連続すると考えられるが、このような洪水砂の上面で検出された溝には古墳時代後期のものが多く、『沢田2』にあるように百・古・Ⅱと比定できるかさらに検討が必要である。

(岡本)



第211図 高縄手A調査区の古代遺構全体図 (S=1/500)

## 溝51 (第212図)

207K区の南西端から208K区の北端西寄りで見出した北西から南東方向に流走する溝である。溝は幅20cm、深さ6cmを測り、全長6.5mあまりで途切れる。埋土は灰色粘質土である。遺物は出土しなかったが、検出面から古墳時代と考えられる。



(平井勝)

## 5. 古代の遺構・遺物

## (1) 建物

## 建物14 (第213図)

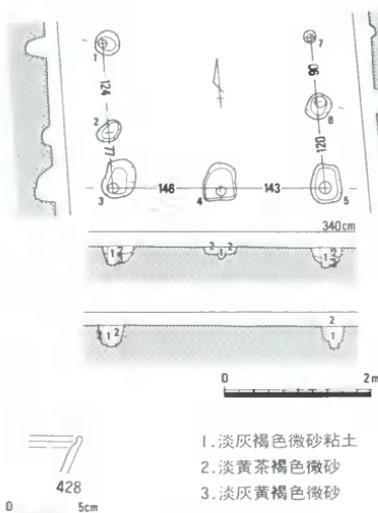
206I区の中央付近で見出された。発掘調査中には、柱穴3～5で柵を考え、柱穴1と6が対になるように解釈していた。しかし、いずれの柱穴も柱痕跡が明瞭で埋土も類似し、両者を組み合わせて建物としても大きく歪むことがないことから、ここでは建物として紹介しておく。

建物は検出部分で2間×2間の規模をもち、南北棟の掘立柱建物と推測される。ただ、柱穴2と7は小さくて浅いため、この建物の柱穴と考えてよいか疑問で、とくに柱穴2については位置的にも問題が多い。南側梁間の柱穴は不整形な方形に近い掘り方をもち、長軸は52～55cmを測る。深さをみると、両端の柱穴にくらべて中央が浅く、24cmと12cmである。柱痕跡は直径14～18cmを測る。柱穴1は円形の掘り方で直径34cm、深さ30cm、柱穴6は方形に近い掘り方をもち、長軸36cm、深さは25cmを測る。梁間と桁行のなす角度は直角とはならず、南東角で84°30′を測る。南梁間の方位はMN-86°-Wである。

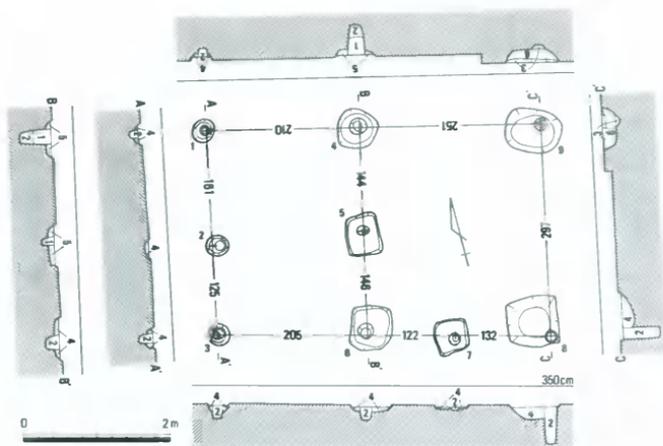
各柱穴から少量の土器片が出土している。図示したものは、柱穴5から出土した土師器の杯の口縁部で、口縁端部を内側に肥厚させ、その下に凹線状の溝がめぐっている。奈良時代のもと考えられる。この他に須恵器の破片もみられた。(岡本)

## 建物15 (第214図、図版42)

207I区の北端中央付近に位置



第213図 建物14・出土遺物



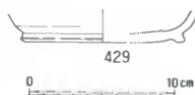
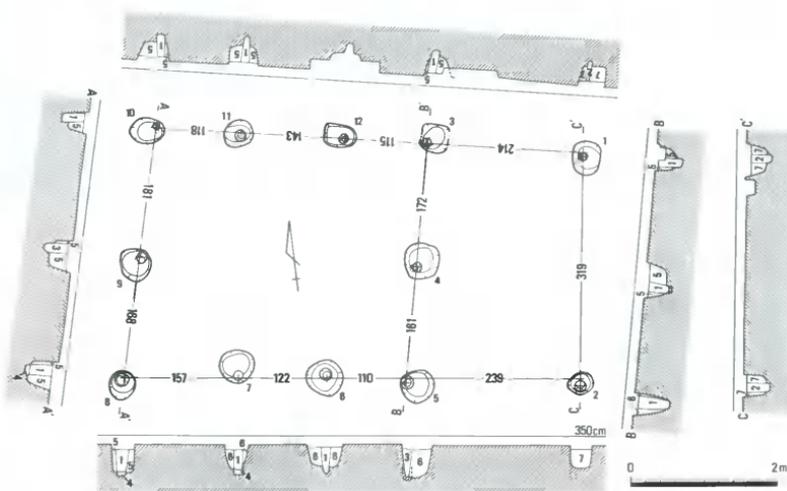
1. 褐色粘性砂質土 2. 灰色粘性砂質土 3. 淡灰褐色粘性砂質土  
 4. 暗褐色灰色砂質土 5. 暗灰褐色砂質土 6. 灰褐色粘土斑淡灰褐色粘性砂質土

#### 第214図 建物15

し、建物14の南4mにある。2間×2間の南北棟の掘立柱建物で、西側に底をもっている。北梁間と東桁行では中央の柱穴を欠くが、構造的な必要性に基づくものかもしれない。柱穴は、不規則ではあるが、いずれも方形の掘り方をもち、柱痕跡が明瞭に認められる。長軸は46～78cm、深さが7～21cmを測るが、西桁行と南梁間の中央柱穴はやや規模が小さく、また浅いようである。柱痕跡は直径が18～24cmあり、各柱穴ともに柱のめり込みが認められる。とくに柱穴4では柱穴底面から35cm、柱穴8でも34cmに達している。庇の柱穴は円形の掘り方をもち、直径31～35cm、深さは7～13cmを測る。やはり柱痕跡は明瞭だが、直径は14～17cmと身舎のそれよりは細くなっている。

建物の構造をみると、梁間と桁行のなす角度が直角とならず、やや歪んだ四角形となっている。また、梁間の柱間とくらべて庇の柱間が長いことも特徴としてあげられる。庇や南梁間の中央の柱穴の位置が中点からかなりはずれていることも指摘することができ、全体としては、方形の掘り方の柱穴をもつ建物としては、かなり簡易な建物とみることができる。もし、官衙的な建物であったとしても、納屋のような雑舎の一つにすぎないのではないかと考えられる。南梁間の方位はMN-75°30'-Wを示す。

柱穴2を除くすべての柱穴から土器の出上があったが、いずれも僅少で小片のため年代を明確にすることはできなかった。しかし、隣接する建物14や建物16との位置関係や遺構の類似性



- |              |              |
|--------------|--------------|
| 1. 暗灰褐色粘性砂質土 | 2. 褐灰色粘性砂質土  |
| 3. 灰褐色粘性砂質土  | 4. 淡灰色粘性微砂   |
| 5. 灰褐色粘性砂質土  | 6. 灰黄褐色粘性砂質土 |
| 7. 淡灰褐色粘性砂質土 |              |

### 第215図 建物16・出土遺物

から判断して奈良時代の遺構とすることに問題はないと考える。

(岡本)

#### 建物16 (第215図、図版42)

207 I 区の中央部分東寄りで見出された。先の建物15の南3mに位置し、棟の方向はほぼ直交させるようである。3間×2間の東西棟の掘立柱建物で、東側に底をもつようである。柱穴1は方形に近い掘り方をもち、規模も他の柱穴と差がなく、また、梁間側に底がつくため、4間×2間の建物とすることも考えられるが、柱穴2が円形の掘り方をもって小規模であり、柱穴1と2の中間に柱がなく、柱穴3・5との柱間が他の桁行の柱間に比べてかなり長いことなどから、東側の1間を底と考えたい。前述の建物15も底の柱間が長かったことに注意したい。

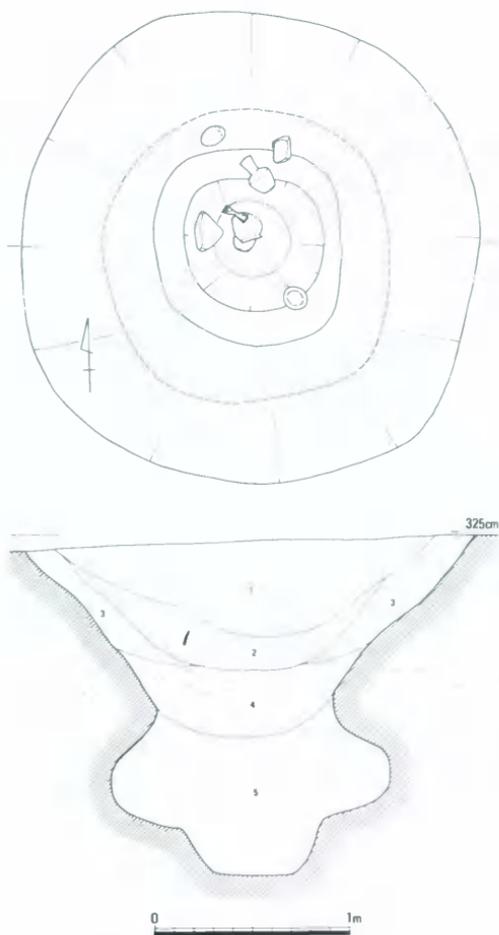
柱穴は、方形の掘り方をもつものと円形の掘り方をもつものが混在しているが、北桁行は方形、南桁行は円形ときれいに分離されるようである。この違いは底の柱にまで及んでいる。柱穴の長軸ないし長径は40~51cmを測り、柱穴2は34cmと小さい、深さについては大きな違いは

認められず、28～46cmの幅のなかに取まる。すべての柱穴で柱痕跡が確認され、その直径は12～20cmを測る。やはりすべての柱穴で、4～14cmの柱のめり込みが認められた。

建物の構造をみると、前述の建物15以上に歪みが顕著で、建物の南西角などは83°を測る。また、北桁行と南桁行の全長の差が13cm、東梁間と西梁間では16cm、西梁間と庇の柱間では30cmにもなり、柱痕跡が直線上に列ぶだけに、その歪みは意図的なものかと思えてくる。桁行や梁間の中間の柱穴も等間の位置ではなく、必要数を満たしたという感じを受ける。基本的には用材の不統一によるものであろうか。北桁行の方位はMN-79°30' -Wを測る。

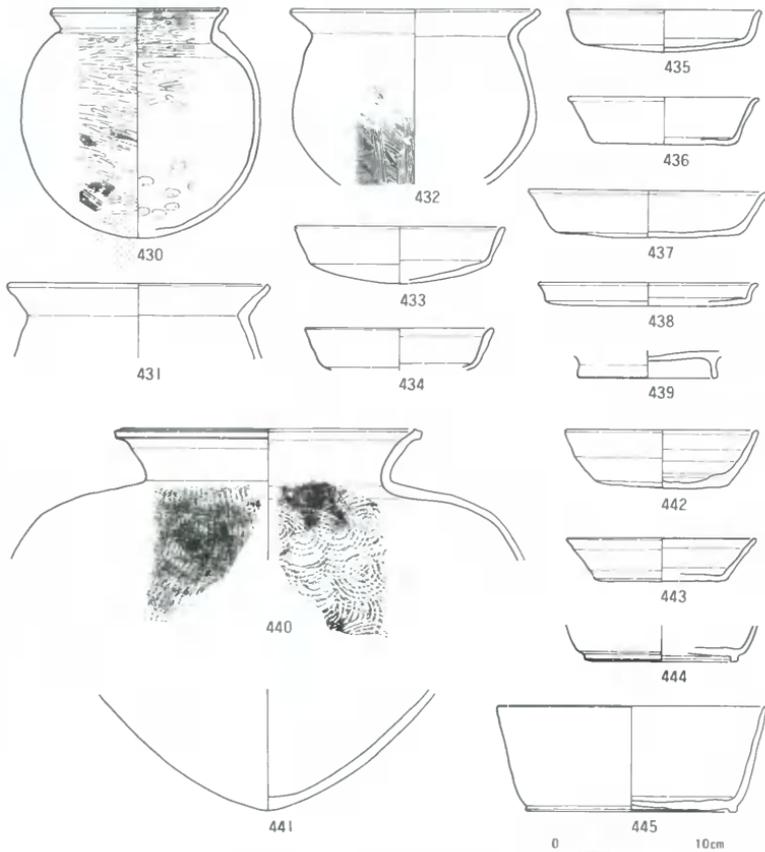
出土遺物については、柱穴12を除いたすべての柱穴から土器の出土があった。いずれも小片ではあるが、柱穴3と柱穴9からは確実に奈良時代と考えられる土器片があり、図示したものは須恵器の杯の高台である。

建物14～16はいずれも奈良時代のもので、15と16については位置関係から共存していた可能性が高い。雑舎的なものと考えられる。(岡本)



1. 淡茶灰色粘質土砂 2. 淡灰青  
1. 淡茶灰色粘質土 2. 淡青灰色粘質土 3. 暗茶灰色粘質土  
4. 暗灰色粘質土 5. 暗灰色粘質土(炭多く含む)

第216図 井戸10

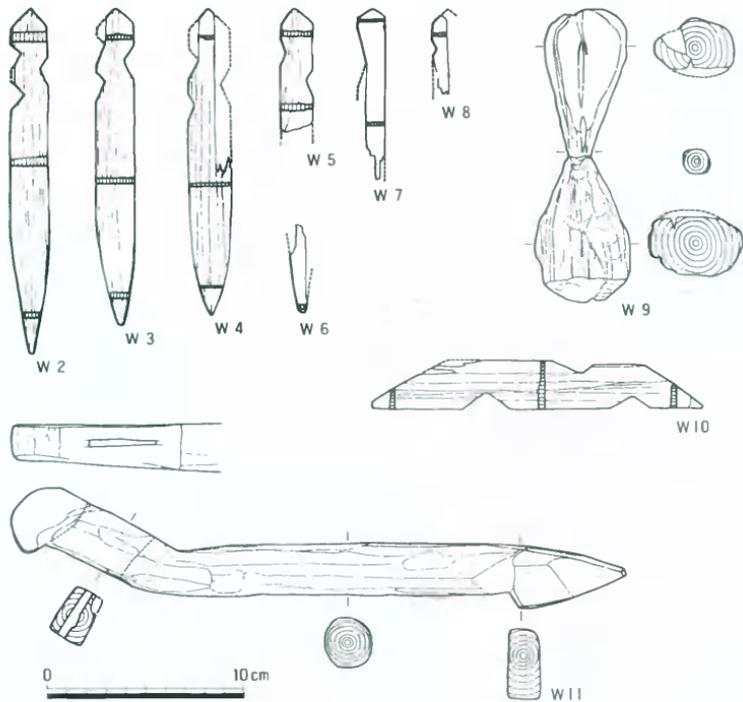


第217図 井戸10 出土遺物(1)

## (2) 井戸

井戸10 (第216～218図、図版43・118)

207J区の西端北寄りで検出された井戸である。平面形は南北2.47m、東西2.3mの円形を呈し、深さは1.74mを測る。底はほぼ平坦で、壁は25cm立上がったところから80cmの間が大きく扶れ、そこから上はロート状に大きく開いている。埋上は1～4の上層、5の下層と大きく分かれ、遺物の多くは下層から出土した。



第218図 井戸10 出土遺物(2)

遺物は土器と木器が出土した。土器は須恵器と土師器が認められる。須恵器は杯(442～445)と甕(440)と鉢(441)がある。土師器は杯(433～439)と甕(430～432)がある。土師器の甕はいずれも球形の胴部にく字状に外反する口縁部がつくもので、430は内外面ともヘラミガキによって丁寧に調整している。木器は斎串(W2～W8)・馬形(W10)・木錘(W9)・鎌柄(W11)が認められる。斎串としたものは袈りが左右対称ではなく、馬形によく似ている。しかし、頭部は山形にカットし、先端を尖らせていることから斎串と考えた。時期は奈良時代と考えられる。(平井勝)

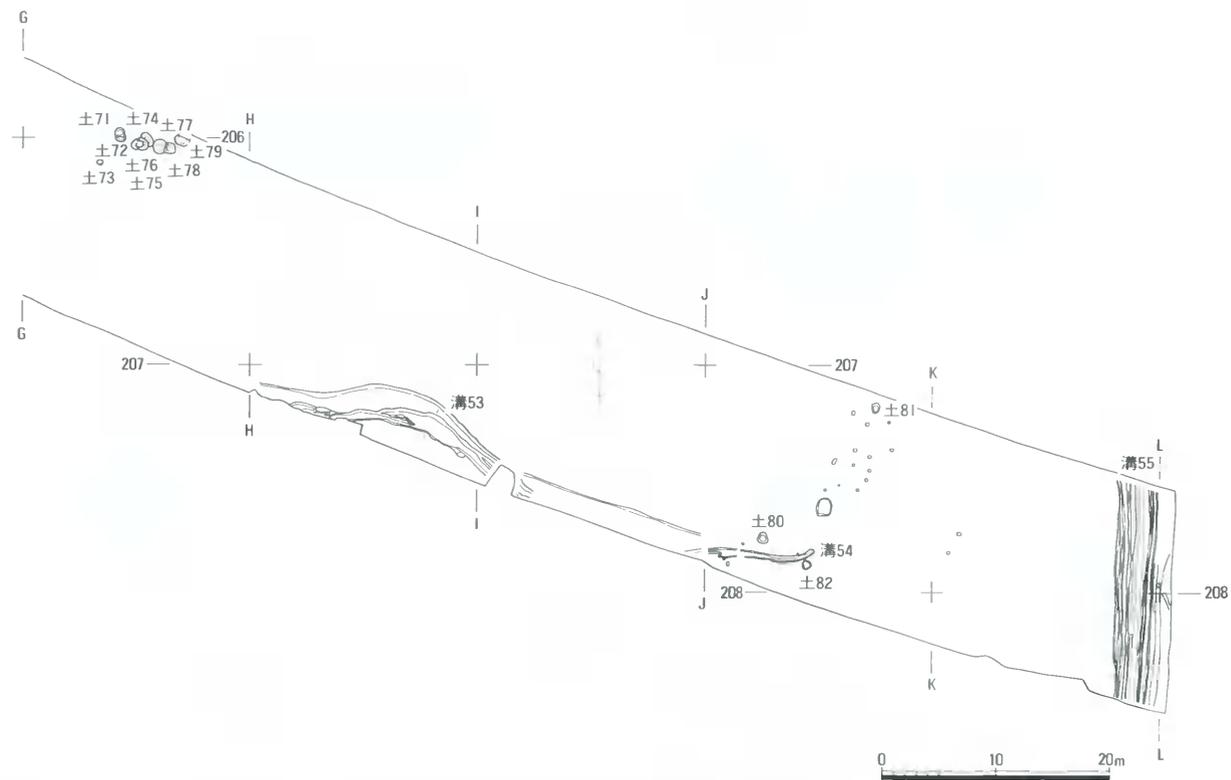


第219図 溝52

(3) 溝

溝52(第219図)

207K区の中央で検出された北西から南東方向に流走す



第220図 高縄手A調査区の中世遺構全体図 (S=1/500)

る溝である。北西端は調査区外へ続くが、長さ9mあまりで南東端は途切れる。底は高さが一定せず、繭状に深くなった部分が連続して溝となっている。遺物は出土しなかったが、検出面および埋土から古代と考えられる。

(平井勝)

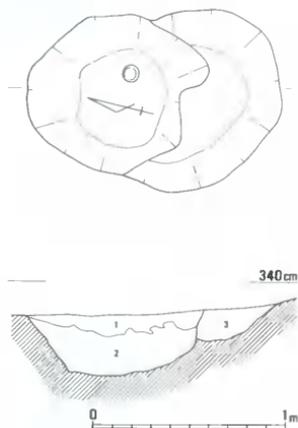
## 6. 中世の遺構・遺物

### (1) 土壌

土壌71・72 (第221図、図版43)

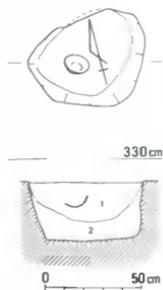
土壌8の西側に隣接して、切り合った状態で検出された。土壌72は径90cm、土壌71は径70cmの不整形円形を呈し、深さはそれぞれ約15cm、約30cmを測る。両者ともに埋土は淡白色の粘土が基調であり、とくに土壌71には茶褐色の粘土ブロックが多く含まれていた。

土壌71からのみ皿が出土している。(柳瀬)



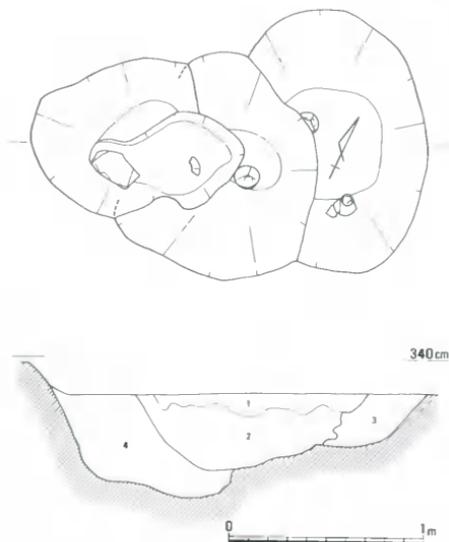
1. 灰白色粘土(褐灰色ブロック含)
2. 暗灰白色粘土(褐灰色土ブロック含)
3. 暗灰白色粘土

第221図 土壌71(左)・72(右)



1. 灰白色粘質微砂
2. 淡暗灰色粘質微砂

第222図 土壌73

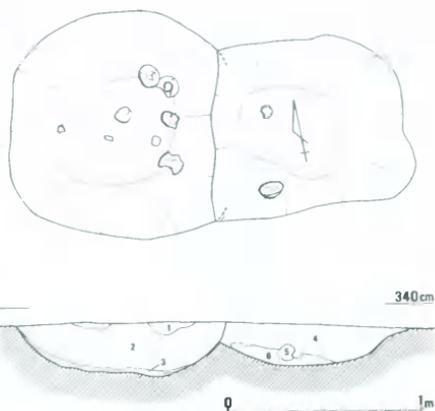


1. 灰白色粘土
2. 暗灰白色粘土
3. 淡灰白色粘土(褐色土ブロック含)
4. 暗灰白色粘土(褐色土ブロック含)

第223図 土壌74(右)・75(中)・76(左)

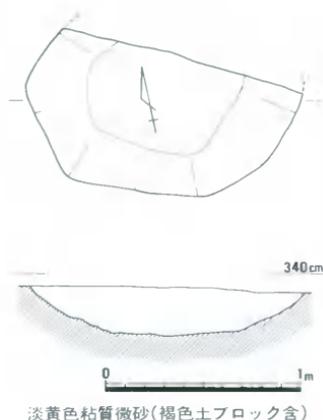
土壌73 (第222図)

他の土壌より南に少し離れた位置に検出された少し小ぶりの土壌である。径約50cmの不整形円形を呈し、深さは約30cmを測る。



1. 淡灰黄色土  
2. 淡灰黄色粘土(褐色土ブロック含)  
3. 淡灰黄色粘土  
4. 淡灰黄色粘土(褐色土ブロック含)  
5. 淡灰黄色粘土  
6. 淡灰褐色粘土

第224図 土壌77(左)・78(右)



淡黄色粘質微砂(褐色土ブロック含)

第225図 土壌79

遺物はほぼ完形の碗が1点出土している。他の土壌は、遺物の出土状態から土壌墓と考えられ、土壌9についても同様に考えてよいが、規模からすれば小児用の土壌墓であろう。

時期は出土遺物から13世紀後半と考えられる。(柳瀬)

土壌74・75・76 (第223図、図版43)

土壌80の西側に接して検出された同種の3基の土壌である。いずれも径1m前後の不整形円形を呈し、深さは土壌74が約30cm、土壌75が約40cm、土壌8が約55cmを測る。土層断面の切り合い関係からは、土壌75が一番新しいが、土壌74と76の新旧関係は不明である。

埋土は茶褐色の粘土ブロックを含む淡灰色または淡灰黄色で、他の土壌とはほぼ同一である。

土壌74・75にはほぼ完形の碗が出土している。

(柳瀬)

土壌77・78 (第224図、図版43)

土壌の南西側に隣接して、一部重なり合って検出された。隅丸方形に近い平面形態を示す2つの土壌である。土壌78は90×100cm(推定)、深さ22cm、土壌77は120×110cm、深さ約30cmを測る。埋土は土壌79と同様にはほぼ単一の淡灰黄色土粘質土で、底部近くは粘質が強い。

遺物は、土壌77・78ともに淡灰黄色土中から出土した数点の碗がある。完形に近いものも多く、土壌墓の副葬品と考えた方がいいかもしれない。碗の高台の特徴等からいえば、13世紀後半と思われるが、土壌

77・78の出土遺物とくに新旧の差はない。ただ、土層断面からは土壌77が後出である。(柳瀬)

#### 土壌79 (第225図、図版43)

205G～206G区にまとまって検出された土壌のうちの東端に位置する。調査区の北側の側溝に一部切られているが、長径140cm、短径約100cm(推定)の不正楕円を呈す。深さ約25cmを測る。埋土は淡灰黄色の粘質土の単層で、一部に暗茶褐色の粘土ブロックを含む。

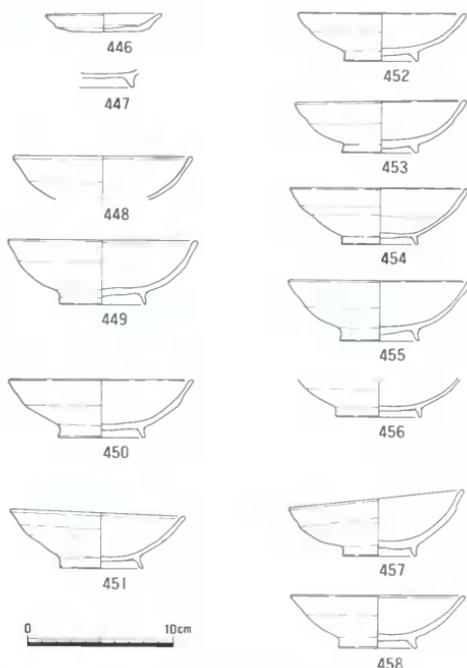
遺物の出土をみていないが、埋土の質から以下の土壌群と同時期と思われる。(柳瀬)

#### 土壌80 (第227図)

207J区の南西寄り検出された土壌である。平面形はややゆがんだ楕円形を呈し、深さは8cmを測る。埋土は淡灰黄色土である。遺物は出土しなかったが、検出面および埋土から中世と考えられる。

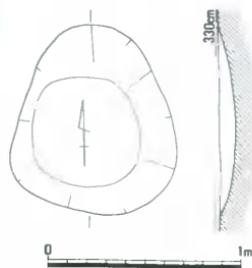
#### 土壌81 (第228図)

207J区の北東寄り検出された小判形の上層である。深さは7cmと浅く、底は平坦で、壁は

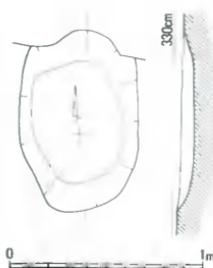


第226図 土壌71・74～78 出土遺物

(平井勝)



第227図 土壌80



第228図 土壌81



第229図 土壌82

緩やかに立上がる。埋土は淡灰黄色土である。遺物は土器がわずかに認められた。時期は中世と考えられる。(平井勝)

土壌82 (第229図)

207J区の南端中央寄りで検出された不整形な土壌である。深さは5cmを測り、底は平坦である。埋土は淡灰黄色土である。遺物は土器がわずかに出土した。時期は中世と考えられる。(平井勝)

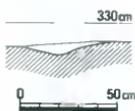
(2) 溝



1. 淡灰褐色粘土 斑淡黄灰色粘土

第230図 溝53

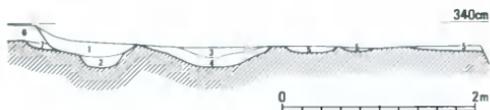
溝53 (第230図、図版44)  
207H区から207I区にかけて現代水田層を除去したところ、調査区の南端で灰白色粘土の堆積部分が現われ、その北辺は弧状を描いていた。厚さ10~20cmのこの層を剥ぐと、北辺の弧に沿うように、最大幅164cm、深さ20cmの溝状遺構が検出された。溝底はかなり凸凹があり、複雑な様相を呈していた。出土遺物としては奈良時代のみがみられたが、埋土の淡黄灰色粘土は中世の遺構で一般に認められることから、この溝も中世のものと考えられる。『沢田2』の溝125と溝127がこの溝によってつながることが判明した。(岡本)



第231図 溝54

溝54 (第231図)

207J区の南端近くで検出された東西方向に流走する溝である。幅は一定せず狭い場所で30cm、広い場所で70cmを測る。深さは6cmと浅い。埋土は淡灰色土である。遺物は認められなかったが、検出面および埋土から中世と考えられる。(平井勝)



1. 淡黄灰色粘質土 2. 淡灰粘質土 3. 淡黄色 灰色粘質土  
4. 灰色粘質土 5. 灰色粘質土 6. 淡褐色灰色粘質土 7. 灰白色粘質土

第232図 溝55

溝55 (第232図、図版44)

207K区から208K区の東端で検出された南北に流走する5条の溝である。5条の溝は一番西側の溝が西側から2条目の溝に切られている以外は、大きく切り合うことなくほぼ平行している。これらの溝の東側には中世の水田層と推定される灰色粘質土が認められる。溝内からの出土遺物としては、須恵器や土師器、そして瓦などの細片があるが詳細な時期は知り得ない。(平井勝)

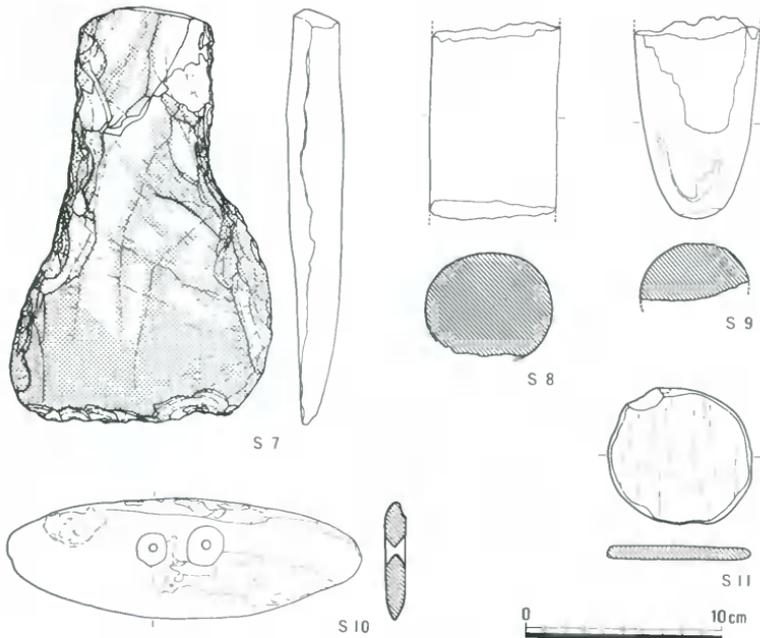
### 第3節 高縄手B調査区

#### 1. 高縄手B調査区の概要

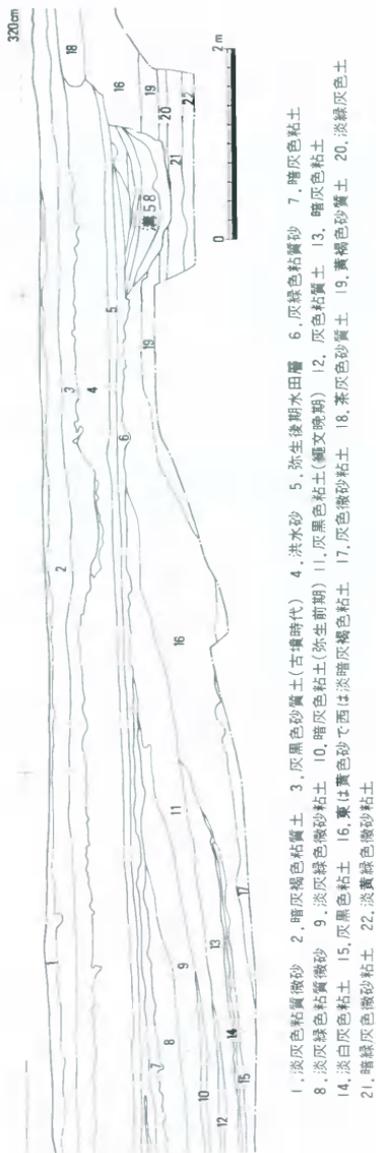
高縄手B調査区は国道2号線百間川橋の下流350m付近に位置し、現地表で標高4mあまりを測る。調査範囲は低水路掘削予定幅80mのうち、すでに調査を終えた幅40mの北側に残された幅40m、長さ240mである。

高縄手の古地形を大局的に見れば、北から南に向かって延びる微高地およびその縁辺部にあたる。高縄手B調査区はその東半部にあたり、西端には高縄手A調査区の微高地とを分断する旧河道があり、中央部には微高地、そして東側から南側には低部位が広がっている。

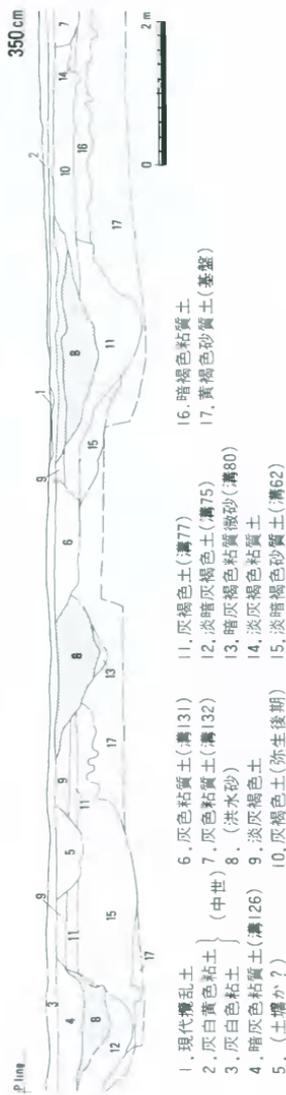
調査区の西端を、西北から南方向へ大きくカーブして流走する旧河道は、幅約50mを測る。深さは確認することはできなかったが、縄文晩期にはかなり埋没しており、微高地との比高は



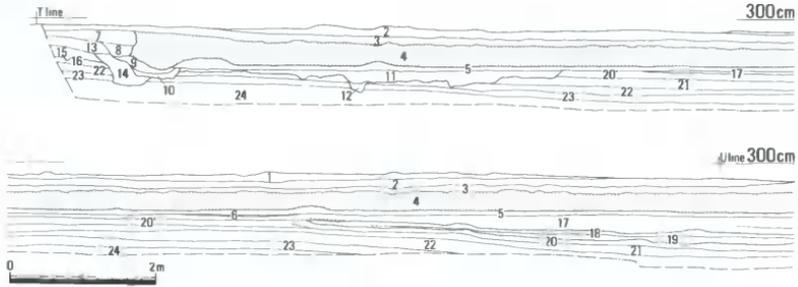
第233図 包含層出土の石製品



第234図 高縄手B調査区206-Oの北壁土層断面図 (S=1/60)



第235図 高縄手B調査区207-Pの北壁土層断面図 (S=1/80)



- |                    |                  |                   |
|--------------------|------------------|-------------------|
| 1. 淡黄灰色粘土(中世)      | 9. 灰褐色粘質土(＃)     | 17. 黄褐色粘質土        |
| 2. 暗黄灰色粘質土(中世か)    | 10. 暗灰色粘質土(＃)    | 18. 褐灰色粘質土(前期水田1) |
| 3. 暗灰色粘質土(古墳時代後期か) | 11. 灰褐色粘質土(溝100) | 19. 褐色粘質土         |
| 4. 黄色微砂(洪水砂)       | 12. 淡灰色砂層        | 20. 暗褐色粘質土(前期水田2) |
| 5. 濃灰色粘土(弥生後期水田)   | 13. 褐灰色砂質土       | 21. 褐色粘質土         |
| 6. 黄灰色粘質土          | 14. 灰褐色粘質土(溝94)  | 22. 灰褐色粘質土        |
| 7. 灰褐色粘質土          | 15. 黄灰色砂質土       | 23. 暗褐色粘質土        |
| 8. 褐灰色砂質土(溝93)     | 16. 灰黒褐色粘質土      | 24. 淡青灰色粘土        |

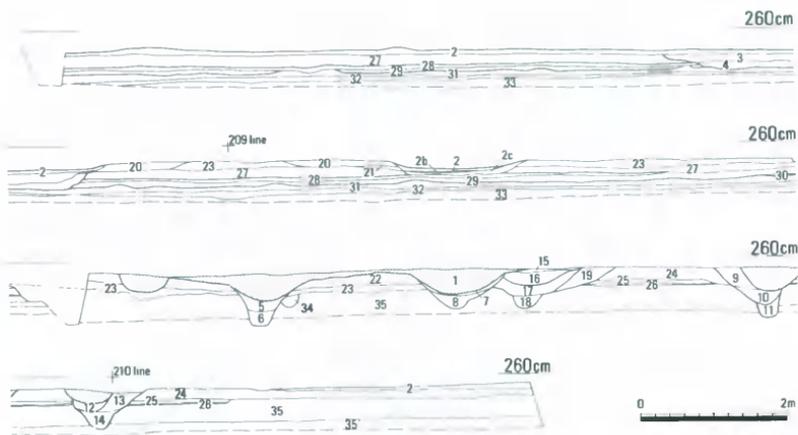
第236図 208-T・U北壁断面 (S=1/80)

1.6m程度になっている。この段階には沢田式の土器片が斜面から底まで包含されており(第234図11層)、また斜面部には土壌や溝などが掘られている。したがって大雨等の増水時には水が流れていたかも知れないが、少なくとも日常的に水が流れている状態ではなかったようである。なお花粉分析およびプラントオパール分析によれば、第234図13層から上にイネ科の花粉およびイネ科のプラントオパールが認められるようになり、そのうち10層(弥生前期)と5層(弥生後期水田層)は特に高率を示している。

旧河道は弥生時代後期にはほぼ埋没しており、その上に後期の水田が造成されている。この水田を覆うように、旧河道部には厚く洪水砂が堆積しており、最大厚は50cmにも達する。

旧河道の東側に広がる微高地は、北西から南東に延びる微高地の一角をなし、東西幅約40mを測る。微高地には弥生時代の基盤層となる黄色砂質土が厚く堆積しており、縄文晩期および弥生前期の遺構はこの上面で検出される。晩期の遺構の多くは209R区付近に多く認められ、包含層からは第233図の石鎌、石製円板、石棒などが出土している。

微高地の旧河道に接する場所には弥生前期の土壌ないし土壌墓が集中している。中期の遺構は少ないが、後期になると多数の溝が掘削されており、弥生時代を通じてこの微高地が居住域



- |                     |                    |
|---------------------|--------------------|
| 2. 灰色粘質土(後期水田層)     | 28. 灰色粘質土(前期水田2)   |
| 4. 暗灰色粘質土(〃)        | 29. 淡灰褐色粘質土(前期水田2) |
| 20. 灰褐色粘質土(島状高まり盛土) | 30. 淡褐色粘質土         |
| 21. 灰色粘質土           | 31. 暗赤黒色粘質土(前期水田1) |
| 23. 黄灰色粘質土          | 32. 黒灰色粘質土         |
| 27. 暗黄灰色粘質土         | 33. 灰黄色粘質土         |

第237図 U東10mの南北断面 (S=1/80)

として利用されることはなかったようである。

古墳時代においては溝が認められるものの、古代から中世になるとさらに遺構は少ない。

微高地の東側から南東側には低部位が広がり、弥生前期から水田が認められる。前期の水田は二面検出されており、いずれも地形にそった長方形区画の水田である。中期の水田は一部しか検出されておらず、様相は明確でない。洪水砂で埋没した後期の水田は、微高地に掘削された溝と接続しており、水路から水田への給水の状況が明らかになった。

弥生時代を通じて水田として利用された低部位であるが、古墳時代以降は明確な遺構が少なく、耕作痕と推定される浅くて細長い穴が多数集中してみられる程度である。

なお本調査区の包含層からは縄文晩期から中世にいたる時期の遺物が出土しているが、このうち石製品の一部を第233図に掲げておく。S7はサスカイト製の打製石鎌で、石器集積遺構付近から出土した。長さ21.8cmを測る大形で、基部は刃部より幅を狭くして柄のようにしている。中央の側縁は少し扶られ、両側縁ともに刃潰しが施されている。全体に使用による磨滅が



1. 明灰色粘性微砂質土(古墳時代ないし中世)
2. 黄灰色粘性微砂質土(古墳時代後期) 3. 黒灰色微砂質土(古墳時代前期)
4. 明黄灰色微砂(洪水砂流土) 5. 暗褐色微砂(洪水砂) 6. 暗黄色微砂( " )
7. 黄灰色微砂( " ) 8. 暗褐色粘質土(弥生後期水田) 9. 暗灰色粘質土
10. 黒褐色粘質土 11. 黄灰色粘性微砂質土(上面でビット等) 12. 灰色微砂質土
13. 灰色砂質土 14. 褐黒色粘質土(中期水田) 15. 明黄灰色粘質土 16. 明黄灰色粘質土
17. 黄灰色粘性微砂質土 18. 淡黄灰色粘質土 19. 褐灰色粘土 20. 黒褐色粘土
21. 黒褐色粘性砂質土 22. 淡褐色粘質土 23. 黒褐色灰色粘性砂質土 24. 灰黄褐色粘性砂質土
25. 褐黒色粘土 26. 黒灰色粘土(晩期包含層は24,26層下側に位置するが当断面には認められない)
27. 黒褐色粘土 28. 暗灰色粘土 29. 黒褐色粘土 30. 明灰褐色粘土 31. 暗灰色粘土
32. 暗灰色粘土 33. 灰色粘土 34. 暗灰色粘土
37. 明黄色粘土 38. 暗灰色粘土

第238図 208-W・X 北壁断面 (S=1'60)

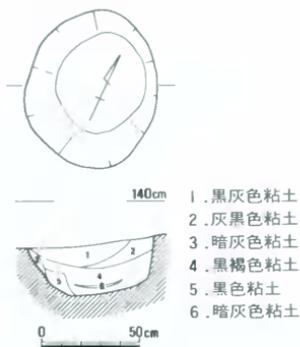
認められる。特に刃部には全面に光沢が著しいが、それとともに縦方向の擦痕がみられる。また刃部先端は再生しており、ここには磨滅痕はない。S8とS9は結晶片岩製の石棒で、図示したもの以外にも数点出土している。S11は結晶片岩製の石製円板で、周辺は丁寧に打ち欠いた後磨いている。石棒とともに縄文晩期に属する可能性が強い。S10は磨製の石包丁で、磨きが入っていない部分が認められる。弥生前期に属する可能性が強い。(平井勝)

## 2. 縄文時代の遺構・遺物

### (1) 土壌

#### 土壌83 (第239図、図版47)

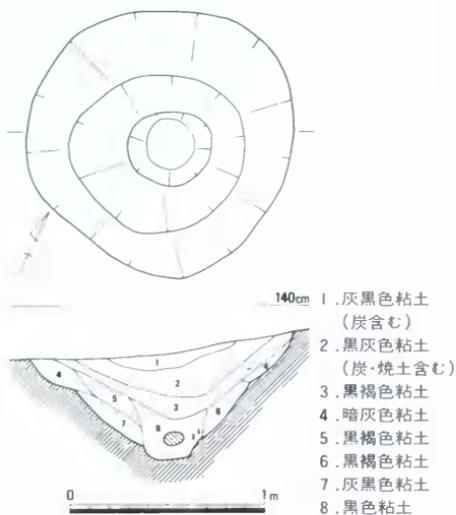
207O区の南先端で検出された土壌である。平面形は南北83cm、東西66cmの楕円形を呈し、深さは26cmを測る。底は平坦で、壁は急斜に立上る。埋土は自然に埋没したような堆積状態で、黒色の粘土を基調としている。遺物は出土しなかったが、突帯文土器を包含する灰黒色粘土層の下で検出したことから晩期と考えられる。(平井勝)



第239図 土壌83

#### 土壌84 (第240図、図版47)

208O区の北西寄りで検出した土壌である。平面形は径1.35mあまりの円形を呈し、深さは55cmを測る。底は径25cmと狭く、壁はロート状に立上る。埋土は黒色の粘土を基調とし、炭や焼土も認められる。遺物は突帯文土器がわずかに出土した。(平井勝)

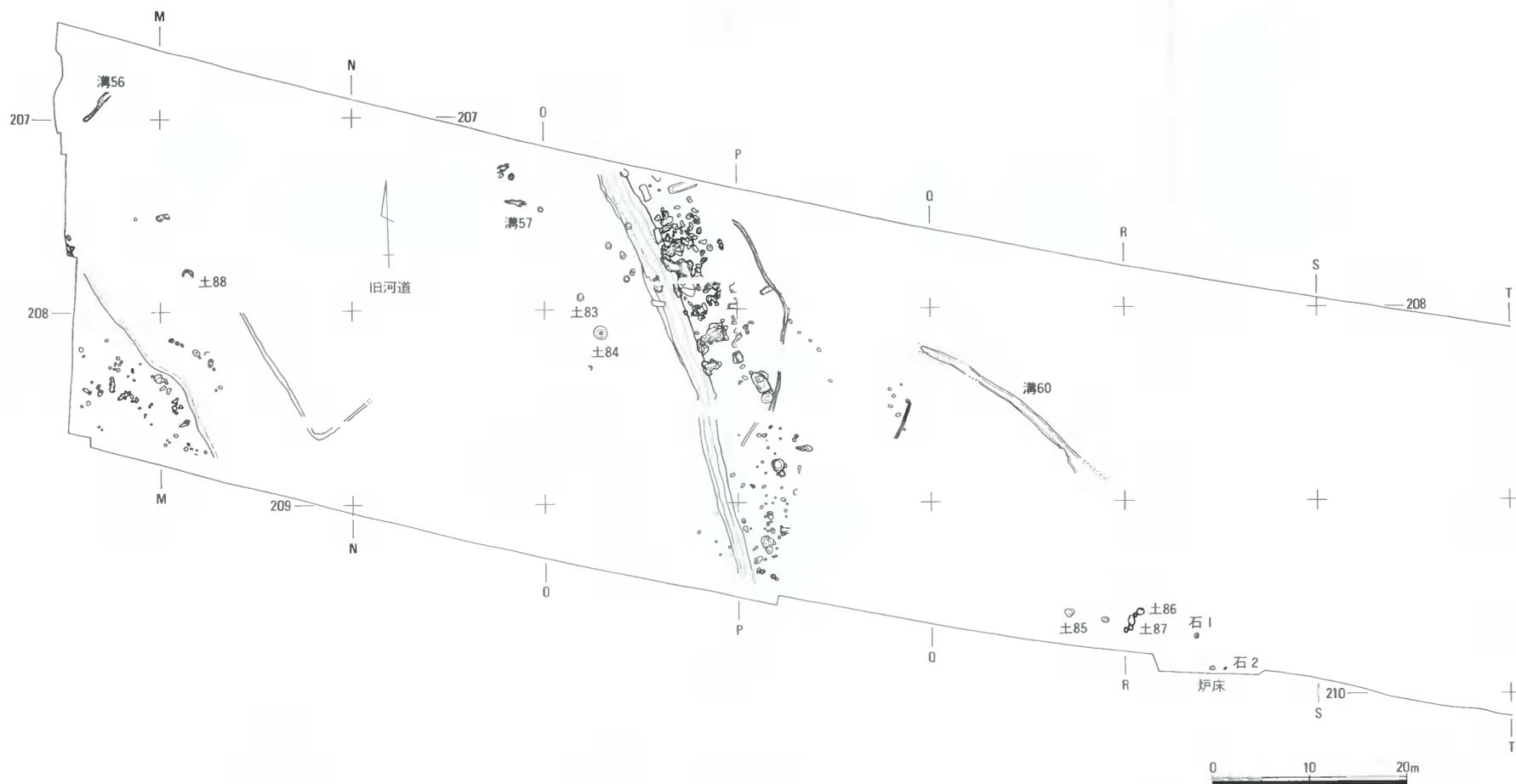


第240図 土壌84

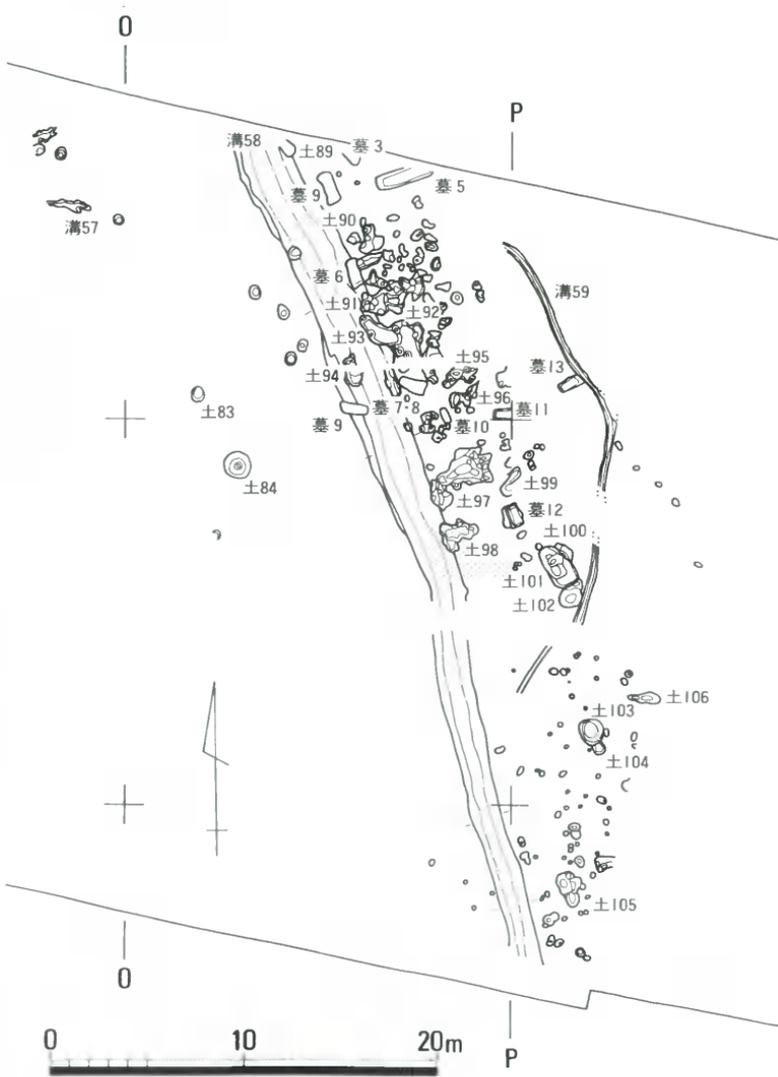
#### 土壌85 (第243図・244図)

209Q区の中央からやや東寄りで検出された土壌である。平面形は東西97cm、南北77cmのゆがんだ楕円形で、深さは24cmを測る。底部は丸みをもっており、壁は緩やかに立上る。埋土は暗黄灰色土である。遺物は土器が少量出土した。459~462は深鉢である。このうち459~461は口縁部に刻目突帯をめぐらす。462は頸部と胴部の境界部で、沈線をめぐらしている。463は浅鉢である。時期は沢田式と考えられる。(平井勝)

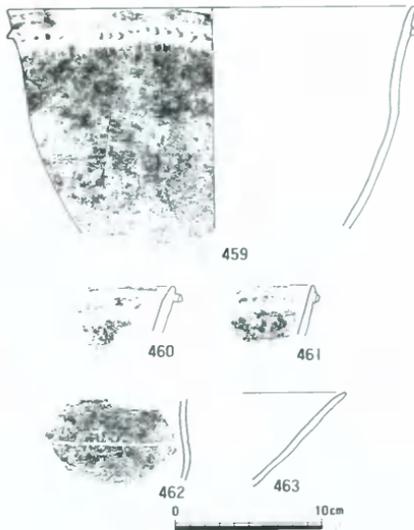
(平井勝)



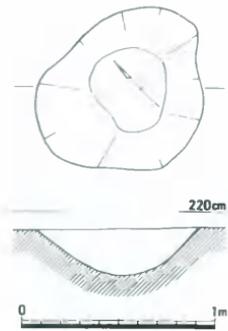
第241図 高縄手B調査区の縄文時代～弥生時代前期遺構全体図 (S=1/500)



第242図 高縄手B調査区の縄文時代～弥生時代前期遺構全体図 (S = 1 250)



第244図 土壌85出土遺物

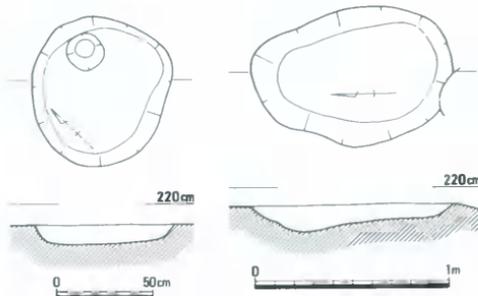


第243図 土壌85

土壌86 (第245図)

209R区の西端中央で検出した土壌である。平面形は東西76cm、南北70cmのややゆがんだ円形を呈し、深さは10cmを測る。底は平坦で、壁は急斜に立上る。埋土は暗黄灰色土である。遺物は出土しなかったが、検出面および埋土から晩期と考えられる。

(平井勝)



第245図 土壌86

第246図 土壌87

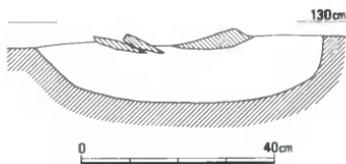
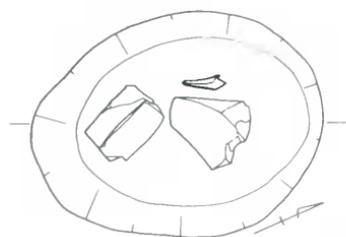
土壌87 (第246図)

209R区の西端やや南寄りで見出された土壌で、周辺には4基が接して認められる。平面形は長さ1.02m、幅70cmの楕円形を呈し、深さは10cmを測る。底は北端が少し深くなり、南側は一段高くしてほぼ平坦である。埋土は暗黄灰色土である。遺物は出土していないが、検出面などから晩期と考えられる。

(平井勝)

(2) 石器集積土壌

石器集積土壌1 (第247・248図、図版48・119)



第247図 石器集積土壌 1 (S=1/12)

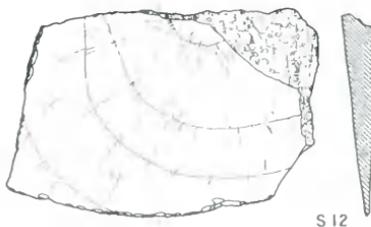
209R区の南寄りで見出された土壌である。最初黄褐色砂質土層上面でサスカイト製石器が発見されたため、遺構の検出を行ったが明確さを欠くため、少し下げた段階で再度検出を行い楕円形の掘り込みを確認した。土壌は長径60cm、短径47cm、深さ14cmを測り、埋土はやや暗い黄褐色砂質土であった。石器は土壌内に置かれたような状態であるが、底からは浮いている。

出土した石器は、石包丁状石器1、削器1、石核1、剥片1で、いずれもサスカイト製である。石包丁状石器は長方形形状を呈し、刃部には珪酸の付着によると考えられる光沢が一部認められる。削器(S12)は大形の剥片の一边を利用したものである。

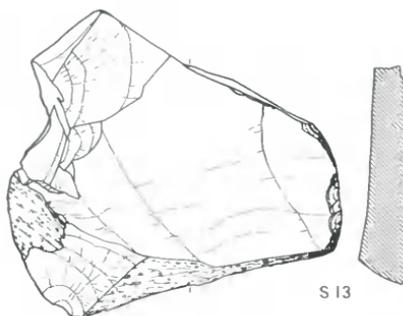
時期は検出面から縄文晩期と考えられる。(平井勝)

石器集積土壌 2 (第249・250図、図版48・119)

209R区の南寄り、石器集積土壌 1 の南側30m付近で見出された遺構である。調査区の南側側溝を掘り下げ途中で石器の存在が確認されたが、黄褐色砂質土層上面を少し下げた段階においても明確な遺構として確認することができなかった。しかし、石器集積土壌 1



S 12



S 13



S 14

第248図 石器集積土壌 1 出土遺物

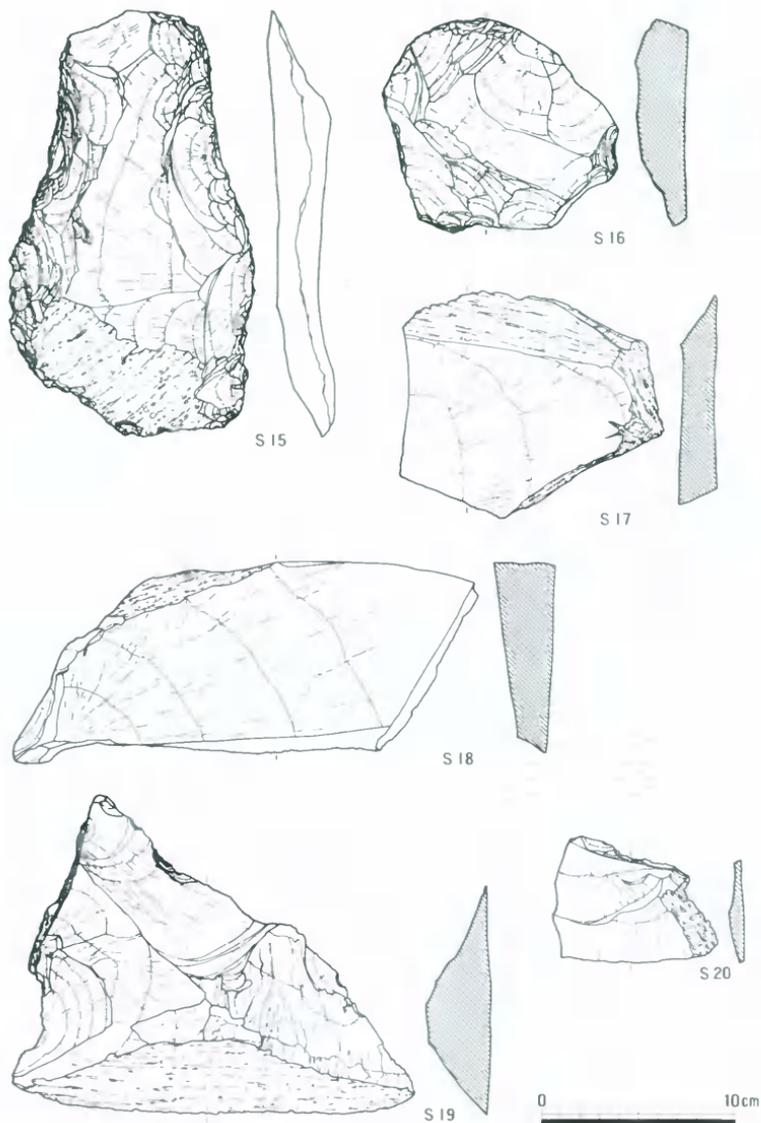


140cm



0 30cm

第249図 石器集積土壌 2 (S=1/12)



第250図 石器集積土壌2出土遺物

と同じく、本来は土壌内に一括して置かれていた可能性が強いことから、石器集積土壌とした。

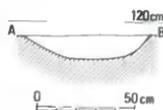
石器は黄褐色砂質土層上面より少し深い位置にあり、打製石鎌1、石核4、剥片1の6点がまとめて置かれていた。S15は石鎌で、基部の両側縁は少し抉りが入り、刃潰しが行われている。刃部はやや粗雑で、一部自然面が残る。使用痕はなく、未使用あるいはそれに近い段階のものと考えられる。S16～S19は板状の石核である。S16とS19は剥片の剝離を行っているが、S17とS18は剥片の剝離が認められず、おそらく石材産出地から板状で持ち込まれたままの姿をとどめていると考えられる。S20は剥片である。石材はいずれもサヌカイトである。

時期は検出面から縄文晩期と考えられる。(平井勝)

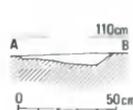
### (3) 溝

#### 溝56 (第251図)

206L区の南端東寄りで見出された北東から南西に流走する溝である。沢田式土器を包含する灰黒色粘土層の下で見出した。溝の幅は60cm、深さ12cmを測る。底の高さは斜面にそっ



第251図 溝56



第252図 溝57

て、南面が高く、北東に向かって低くなる。埋土は灰黒色粘質土である。遺物は出土していないが、検出面から晩期と考えられる。(平井勝)

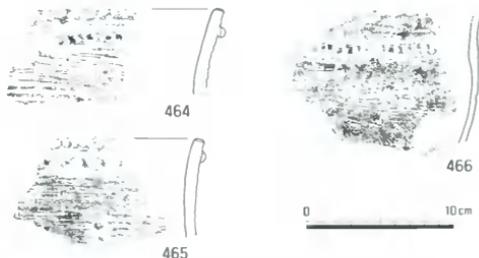
#### 溝57 (第252図)

207N区の北東寄りで見出された溝である。溝はほぼ東西方向に流走し、幅45cm、深さ8cmを測る。底の高さは斜面にそって東が高く、西に向かって低くなる。埋土は灰黒色粘土である。遺物は出土していないが、検出面から晩期と考えられる。(平井勝)

### (4) 包含層の遺物

#### 旧河道部西岸 (第253図)

L～O区の旧河道部分では弥生時代後期の水田が全面に広がっているが、水田層の下は旧河道の堆積層が厚く重なっている。いずれの層も微高地縁辺の傾斜面で薄く、河道中心部に向かって厚さを増していく。水田層下には、まず



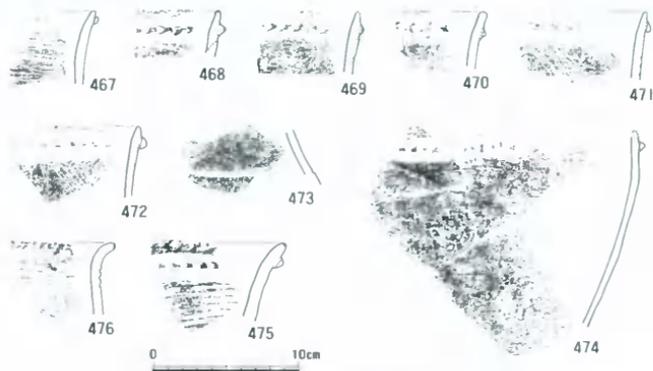
第253図 旧河道西岸微高地下がり出土遺物

青灰色粘性砂質土層があり、次に淡青灰色粘質土がみられる。その下には弥生時代前期の包含層である暗褐色粘性砂質土が続く。この前期包含層の下には暗灰色粘性砂質土が堆積しているが、この層の上面では注意される状況が検出された。弥生時代後期水田の経営時の微高地端から10m程離れた位置で微高地縁辺に平行する形で畦状の隆起が認められ、208ラインから南へ15m続き、そこから直角に折れて旧河道中央へ6m伸びて確認されなくなる。弥生時代前期の水田の可能性が考えられたが、この部分での検出のみに終わった。海拔高は160cm前後を測る。さらに下は、暗灰色粘質土層の縄文時代晩期包含層で、第253図にあるような突帯土器片や蛤刃石斧が半折して出土している。 (岡本)

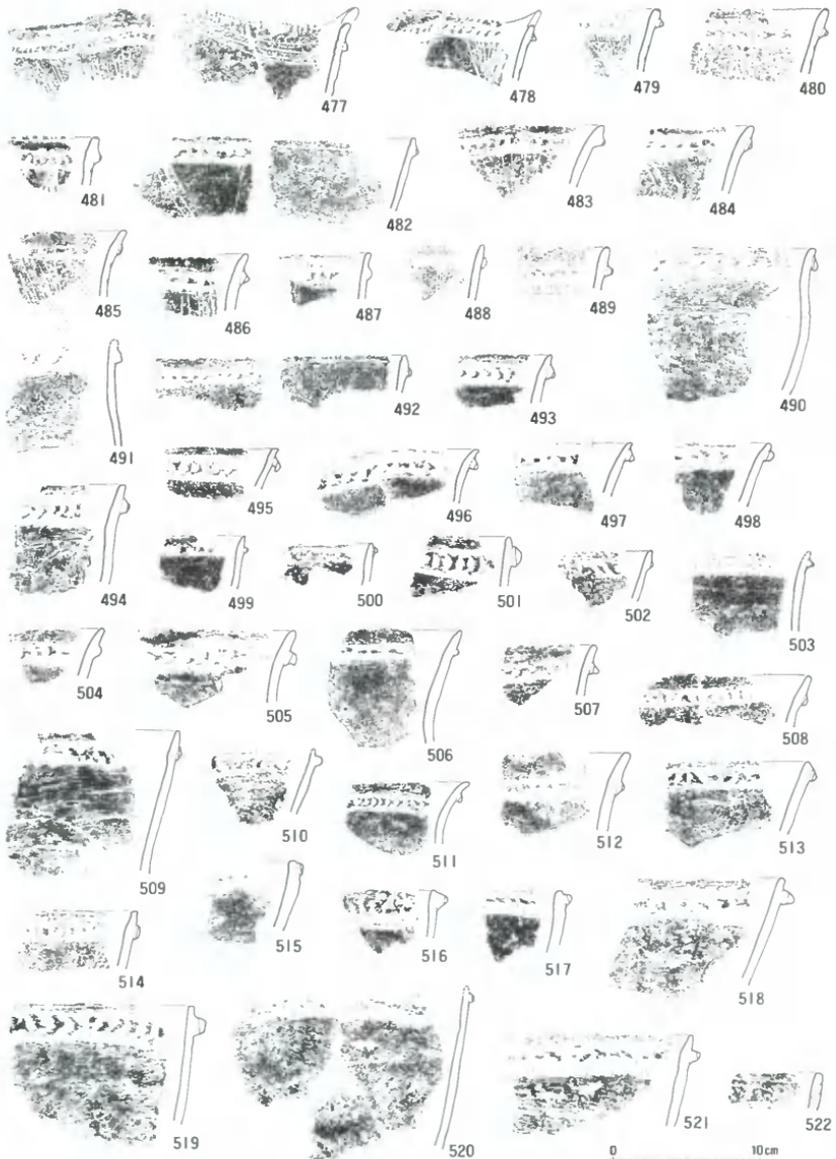
旧河道 (第254～257図)

206～208 L～O区にはほぼ南北方向に流走する旧河道が認められる。この旧河道の両岸から斜面部にかけて晩期の遺構・遺物が認められることから、旧河道にそって西岸は肩部から約6m、東岸は約10mの範囲で掘り下げた。両岸とも似たような土層が観察され、このうち灰黒色粘土層に晩期の遺物が包含されていた。なお、この層は旧河道全体に広がっているが、遺物が含まれるのは斜面部のみである。

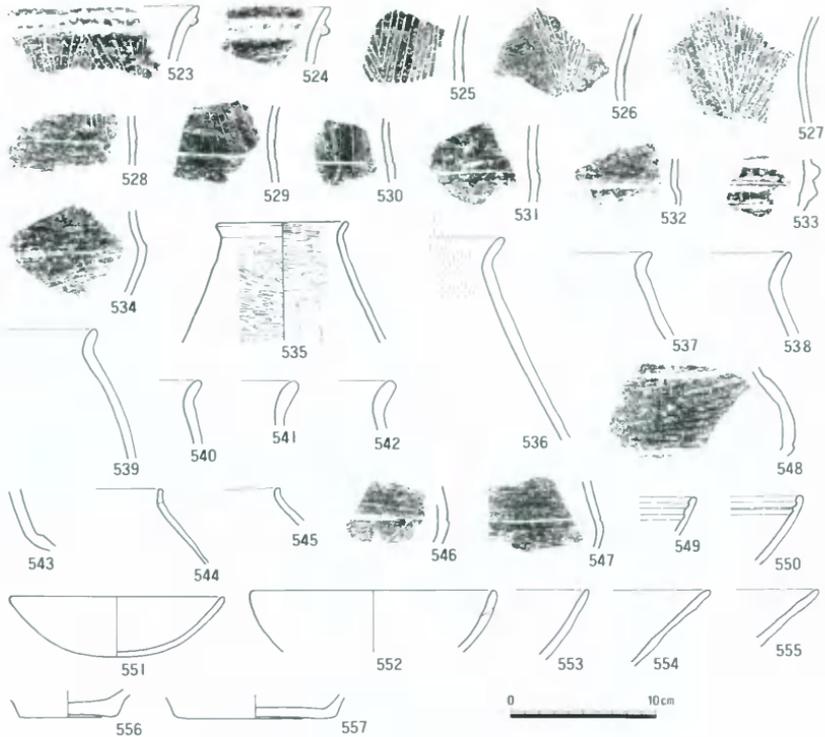
西岸にあたる206～208 L・M区の灰黒色粘土層からは土器やサヌカイトの剝片などが出土した。土器は1点弥生時代前期が混在するものの、その他は晩期に属する。467～472・474・475は口縁部に刻目突帯をめぐらす深鉢である。471と472は頸部に篋描文が施される。474はバケツ形の器形を呈するもので、胴部外面はヘラ削りを行っている。475は口縁端部に刻目を施し、頸部外面は二枚貝による条痕調整が認められる。473は壺で、頸部と胴部の境界に段がみられる。476は甕で、口縁部には3条の沈線がめぐる。時期は475が前池式、467～474は沢田式、



第254図 206～208-L・M灰黒色粘土層出土の遺物



第255図 207・208-O 灰黒色粘土層出土遺物 (1)

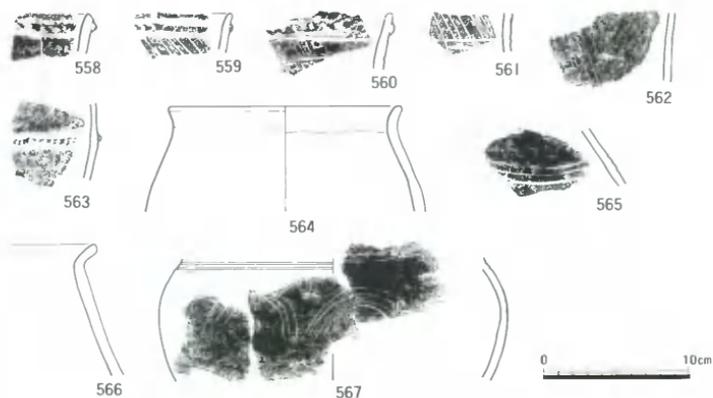


第256図 207・208-O灰黒色粘土層出土遺物(2)

476は百・前・Ⅱに属する。

東岸の207・208O区灰黒色粘土層からは土器とともに、石皿、石鉢、石鏃、楔形石器が出土した。一点のみ弥生時代前期の土器が混在するが、その他はすべて晩期に属する。477～532・534は深鉢である。このうち477～521・523・524は口縁部に刻目突帯をめぐらすもので、篋描文をもつもの(477～489・523・524)と無文とがある。477は波状口縁で頸部外面には篋描文が施される。内面は口縁端部に刻目、そして波頂部から短い沈線を垂下させ、そこから波頂部間を結ぶように3～4条の沈線を施している。482と492は口縁内面に沈線がみられる。

535～543は壺であるが、ハ字状の長い頸部にく字状に外反した短い口縁部がつくもの(535～537)と、く字状に外反する短い口縁部からすぐ胴部にいたるもの(538～542)がある。前者は頸部と胴部との境界に段がみられる。544～555は浅鉢である。544・545は胴部から



第257図 207・208-O暗灰色粘土層出土遺物

内傾しながら立上る頸部の上端をやや外反させた短い口縁部がつくもので、頸部と胴部の境界には沈線がめぐる。549～555は碗形になるもので、549・550は口縁内面に沈線が2条めぐる。以上の土器の時期は沢田式と考えられる。なお1点混在していた弥生土器は、断面三角形をした2条の突帯をめぐらすもので百・前・Ⅲに属する。

同じ場所で灰黒色粘土層の上に堆積していた暗灰色粘土層からは、沢田式が弥生時代前期の土器・石鏃・楔形石器・有孔砥石などとともに出土した。558～563は深鉢で、篋描文を施すものが多い。563は胴部にも刻目突帯をめぐらしている。564～567は壺である。565と567は頸部と胴部の境界に沈線が2条ないし3条めぐる壺で、567は胴部上半に重弧文が施される。時期は558～564・566は沢田式に、565・567は百・前・Ⅲに属すると考えられる。

さて、207・208O区の灰黒色粘土層から出土した土器は、533を除けばほぼ同一時期に属するもので、『沢田2』高縄手B調査区微高地上の土器溜り13・14出土土器を指標とする沢田式に最も類似する。

沢田式は深鉢形土器6割と、浅鉢形土器4割、それに壺形土器がわずかに加わる。深鉢は頸部がくびれ、頸部と胴部の境界下で脹らみ、そして胴下半に向かってすぼまる器形が多い。口縁部の文様のうち、口縁端部の刻目は極めて少なくなる。突帯はほとんどのものに認められ、その位置は口縁端部から少し下がったところが約8割、端部に接するものは約2割である。頸部の文様は篋描文で約3割を占める。浅鉢は碗形を呈するもの、ボール状を呈するもの、口縁部が段状に屈曲するもの、逆く字形に屈曲する胴部に短く外反する口縁部がつくものなどがあるが、このうち逆く字形に屈曲する胴部をもつものが約半分を占めている。壺は八字状の頸部から短く外反する口縁部をもつものである。

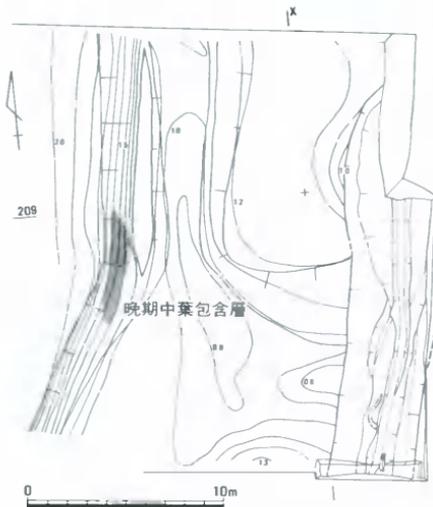
以上の沢田式と今回出土した土器を比較すると、ほとんど違いは認められないようであるが、若干異なる様相もみうけられる。まず深鉢では、口縁部からずいぶん下がった位置に突帯が貼付けられているものがある。512を典形とし、506～508などは通常的位置よりは下がった位置にあり、しかもこの時期の端部が尖りぎみに仕上げられるのに対し、丸くないし面をもつように仕上げられる。壺には、ハ字形の頸部に短く外反する口縁部をもつもの以外に、なで肩の胴部にく字状に外反する口縁部をもつもの（538～542）が認められる。この壺は日本であまり類例はないが、韓国の無文土器文化では一般的にみられる。ただこの土器がその影響を受けて製作されたものであるのか、それともそのものであるのかは明らかでない。（平井勝）

微高地東縁辺部（第258・259図）

調査区の東端、WとXラインの間付近で微高地は終わって低位部となる。微高地と低位部の境界が完全になくなるのは弥生時代後期末の洪水堆積以降と考えられ、それ以前は水田面、あるいは遺構面がその部分で段差をなしている。

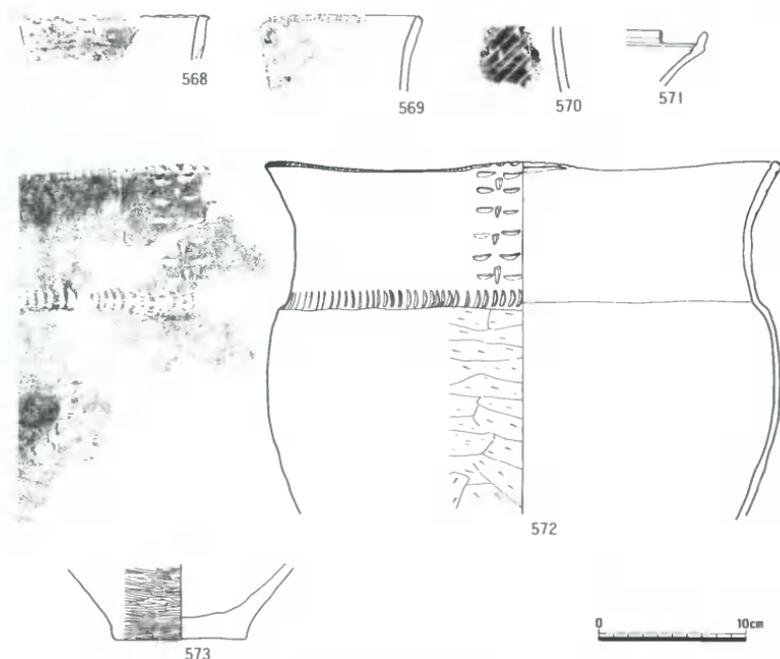
微高地縁辺の埋積がはじまるのは縄文晩期であったようで、初期の堆積層中から晩期中葉、谷尻式の深鉢の大形破片と、同時期と考えられる深鉢、浅鉢の小破片が出土している（570～572）。570は綾杉文状に施文する深鉢の破片である。

この部分では貯蔵穴等が存在する可能性も想定して掘り下げをおこなったが、そうした遺構は認められなかった。



第258図 微高地東縁辺部（S=1/300）

縄文時代晩期以後、弥生時代前期も継続して埋積が進んでいる。前期の土器573を含む堆積層は薄い部分で40cm、深い部分では1m以上に達するが、土器の包含量は少ない。堆積層は黒色粘質土、砂などの薄層からなっており、低湿地の状態では埋積が進んでいったものと考えられる。全体図では前期の一時期（20層上面）における微地形を示しているが、埋積面は数十cmの起伏をもち、島状の高まりを形成している。前期の埋積によって微高地縁辺に比較的安定した低位部が形成されたとみられ、後述の中期水田はこの部分を利用して営まれている。（宇垣）



第259図 包含層出土遺物

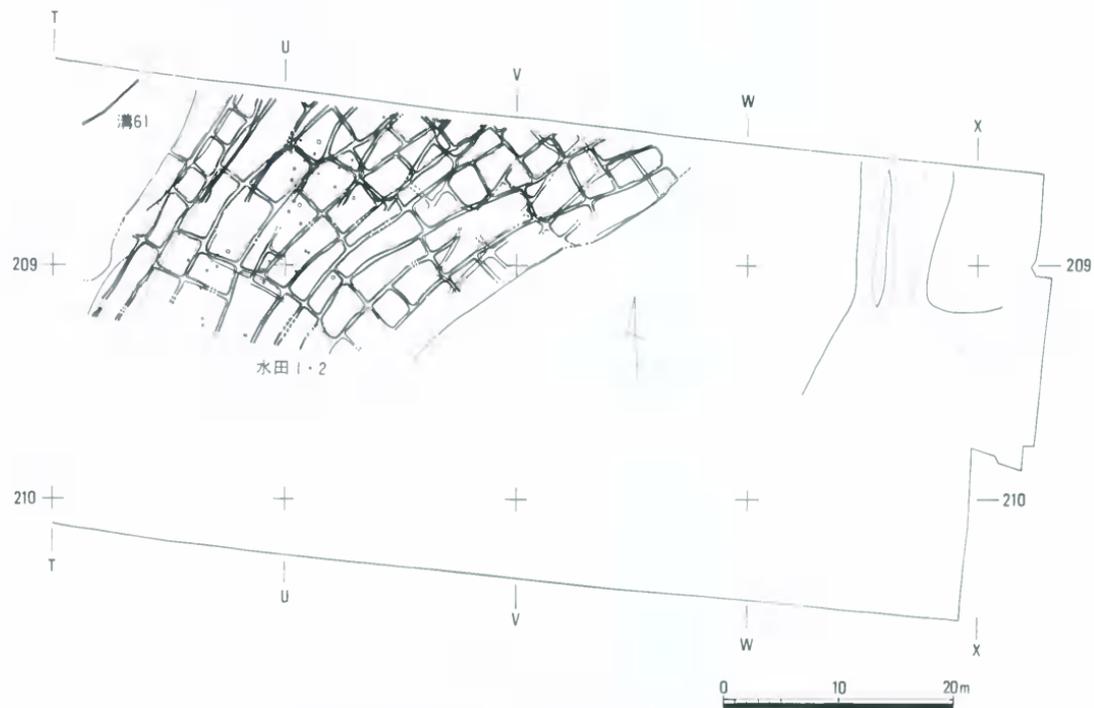
### 3. 弥生時代前期の遺構・遺物

#### (1) 水田

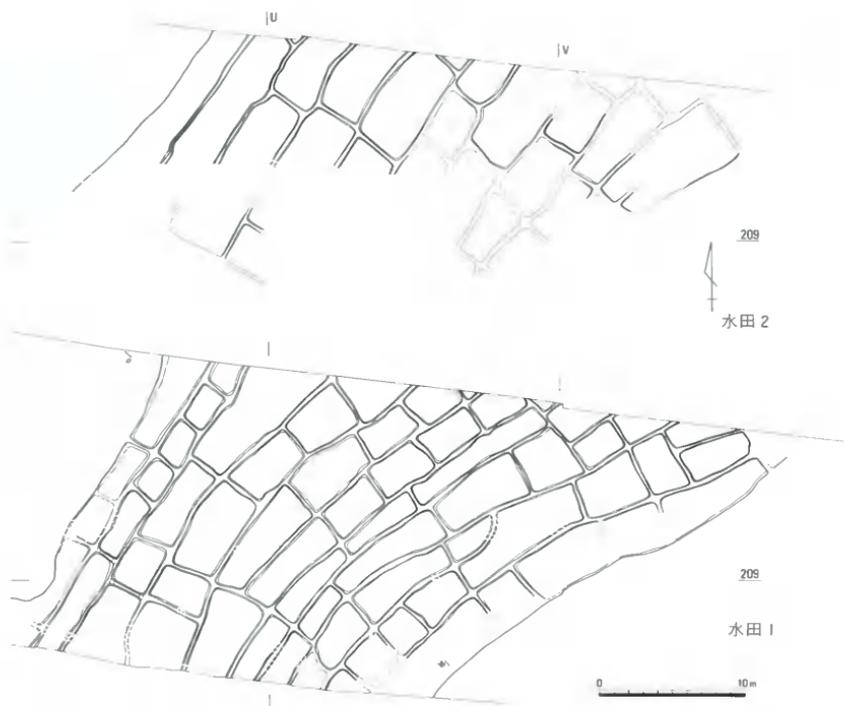
水田 1・2 (第260～263図、図版49・50)

208・209T～V区において弥生時代前期の水田を検出した。水田は上層下層の2面からなり、ともに南西から北東方向にのびる浅い谷状地形のなかに形成されている。側縁部の水田が内側にむかってかなりの傾斜を示していることからみて、検出した谷状地形自体は水田形成時以後に生じたものと判断できるが、第263図に示すように水田層下は浅い谷が埋積した状態を示しており、水田は微高地縁辺の谷が埋没した地形を利用して営まれたものと考えてよい。谷状地形は北西側の傾斜が強いのに対し、南東側はゆるやかに上がっており、肩部も明瞭でない。

水田 2 (上層水田)は弥生後期水田下22cmで検出した水田で、覆土は明黄灰色粘質土、水田層は暗灰色粘質土からなる。畦畔は幅30～45cmとやや細く、高さも最大3cmである。遺構を認



第260図 高縄手B調査区の弥生時代前期遺構全体図 (S=1/500)

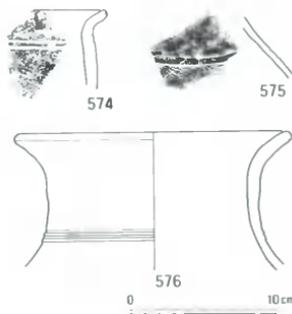


第261図 前期水田1・2 (S=1/400)

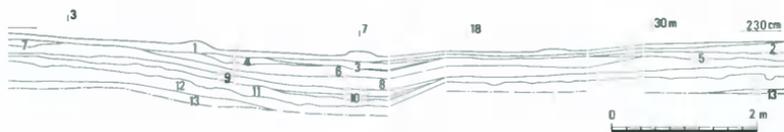
識する以前の段階で下げすぎた部分も一部あるが、本来、遺存範囲は下層水田よりも狭く、209 U・V区ではほとんど遺存していない。

水田1(下層水田)は水田2の下16cmで検出した。覆土は淡灰色粘質土、水田層は暗褐色粘質土で、畦畔は残りのよい部分で幅30~50cm、高さ4~5cmを測り、断面は低い台形をなす。

水田1、2の畦畔の形状はよく似ており、谷状地形の軸線に平行する弧状の畦畔と、南東方向から放射状にのびる畦畔によって区画されており、それぞれの水田区画はおおむね長方形を呈している。区画の長辺を



第262図 前期水田出土遺物



- |                     |                      |
|---------------------|----------------------|
| 1. 灰色粘質土(前期下層水田層)   | 8. 明灰黄色粘質土(晩期土器細片含む) |
| 2. 暗灰色粘質土(晩期土器細片含む) | 9. 淡黄灰色粘質土           |
| 3. 灰黑色粘質土( " )      | 10. 黄灰色粘質土           |
| 4. 黒灰色粘質土( " )      | 11. 暗灰色粘質土           |
| 5. 黄灰色粘質土           | 12. 淡灰色粘質土           |
| 6. 暗灰色粘質土           | 13. 暗灰黄色粘性砂質土        |
| 7. 暗灰色粘質土           |                      |

第263図 前期水田1横断面 (S=1/80)

なす谷状地形に平行する畦畔は弧状に連続するのに対し、それに直交する畦畔は「あみだくじ」状に配置されている。また、水田1では谷状地形軸線に直交する畦畔のほうが低くなる傾向が認められる。水田1、2とも水口は認められなかった。

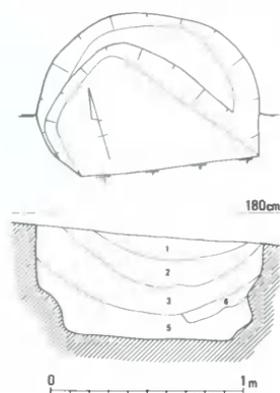
水田1においては谷状地形底部分の水田が8.4~19.2㎡、北西側縁部の水田が4.2~6.8㎡と面積の差が大きく、傾斜の強い部分ほど水平面を造るために水田面積を小さくしている状況を読み取ることができる。水田2においても南東側の水田が小さくなる傾向は認められるが水田規模の差は小さく、埋没によって傾斜が弱まったものと考えられる。傾斜の強い部分に形成された水田の区画は小さく、平坦部で大きくなるのは弥生後期水田において認められる傾向であるが、前期の場合も同様であり、原尾島遺跡において検出された前期の水田では、1区画260㎡の大形の区画も認められる。

出土量は少ないが、下層水田層から575、576、下層水田覆土から574などの前期の土器と縄文晩期土器小破片が出土している。弥生土器は百・前・Ⅱ期であることから、水田はその時期ないしそれからあまり隔たらない時期に形成されたものと考えられる。

下層水田の下は谷状地形の堆積層となっており、下層水田に先行する水田は認められなかった。堆積層状部には晩期土器の細片が少量含まれており、3、4層下面では小規模なピットが散在する状況であった。(宇垣)

## (2) 土壌

土壌88 (第264図)



1. やや暗い褐灰色微砂
2. 淡灰白褐色粘質微砂
3. 暗灰色粘土
4. 黒灰色粘土
5. 灰黒色粘土

第264図 土壌88

207M区の南西端寄りで検出された土壌である。南側は削平されているため正確な平面形は不明であるが、径1.1mあまりの円形を呈するものと推定される。ただ2段目の掘り込みは隅丸長方形のようでもある。底は平坦で、2段に掘り込まれた壁はいずれもほぼ垂直に立上っている。埋土は整然と堆積しており、上層は微砂、下層は粘土である。遺物は土器がわずかに出土しており、前期と考えられる。(平井勝)

土壌89 (第265図)

207O区の北西寄りで検出した土壌である。平面形は隅丸長方形を呈するものと推定され、長さ1.2m、幅65cm、深さ40cmを測る。底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は水平に近い堆積状態である。土壌墓の可能性も考えられる。遺物は出土していないが、時期は検出面および溝58との切り合い関係から前期でも百・前・Ⅱより新しいと考えられる。(平井勝)

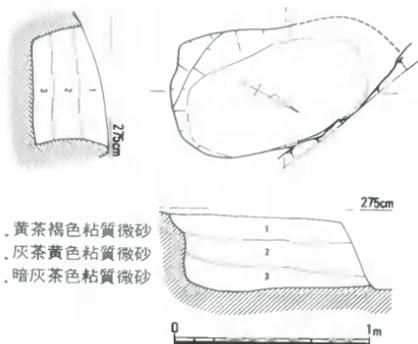
土壌90 (第266図)

207O区の中央で検出された土壌である。土壌の平面形は西端を土壌墓6に切られているが、東端が突出した長楕円形と推定される。内部はさらに不整形に穴が穿たれ、底は凹凸が著しい。埋土は灰茶色土である。遺物は出土していないが前期と考えられる。

(平井勝)

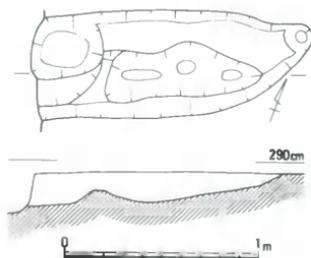
土壌91 (第267図)

207O区の中央、土壌90の南側で検出された土壌で



1. 黄茶褐色粘質微砂
2. 灰茶黄色粘質微砂
3. 暗灰茶色粘質微砂

第265図 土壌89

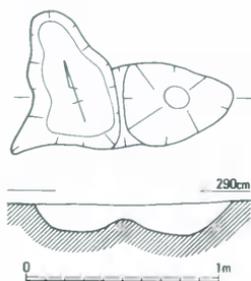


第266図 土壌90

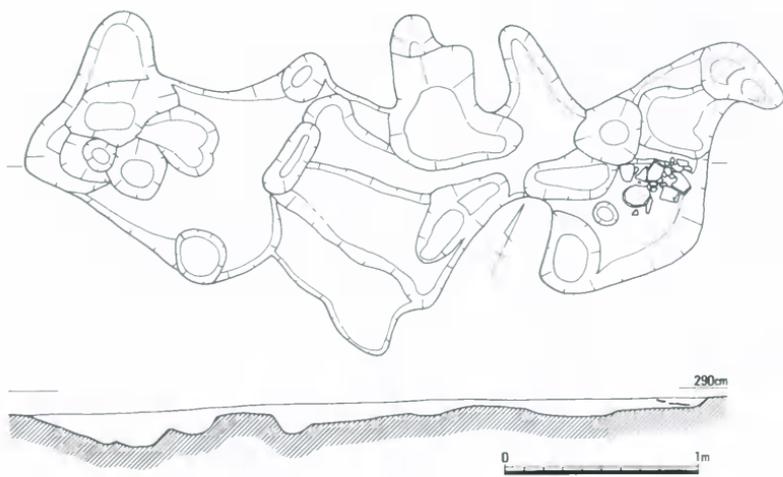
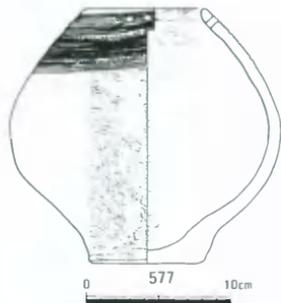
ある。平面形は不整形で、2つの土塊であったとも考えられる。埋土は灰黄色土である。遺物は出土していないが前期と考えられる。(平井勝)

土塊92 (第268図)

207〇区の中央近く、土塊91の南側で検出された土塊である。平面形はアメーバー状の不整形なもので、いくつかの土塊が重なり合った結果とも考えられる。深さは浅く、底は凹凸が著しい。埋土は灰茶色土である。遺物は土塊の北東端で土器が一個体分まともって出土した。577は無頸の壺で、口縁部に接して多条の沈線と刺突が交互にめぐっている。また2個一對と



第267図 土塊91



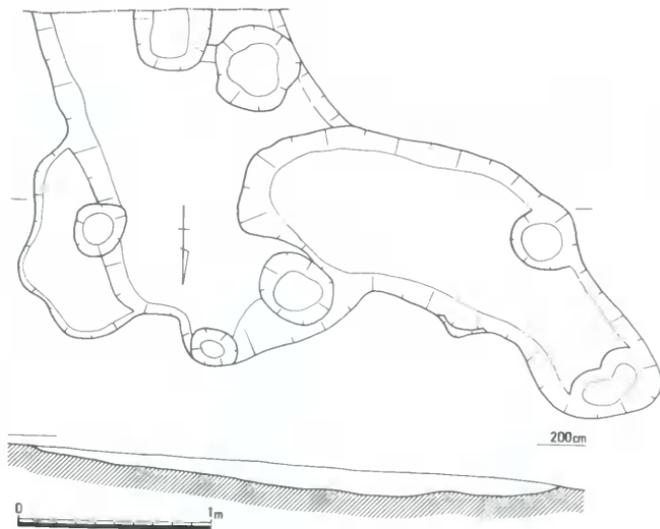
第268図 土塊92・出土遺物

なる小孔が穿たれている。時期は百・前・Ⅲと考えられる。

(平井勝)

#### 土壙93 (第269図)

207〇区の南東寄り、土壙92の南側で検出された土壙である。平面形はアメーバー状の不整形形を呈し、深さは12cmを測る。長楕円形の土壙が二つ切り合っているとも考えられるが、区別することはできなかった。埋土は灰を含む茶灰色土である。遺物は出土しなかったが、前期と



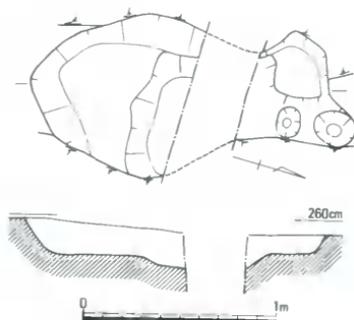
第269図 土壙93

考えられる。

(平井勝)

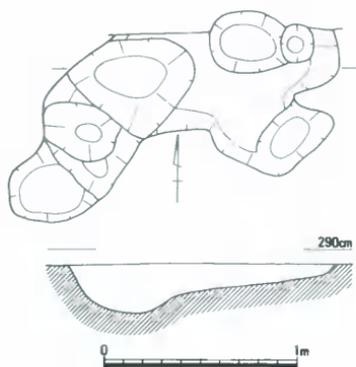
#### 土壙94 (第270図)

207〇区の南端中央寄り、土壙93の南西側で検出された土壙である。平面形は長さ1.35m、幅87cmの長楕円形を呈し、深さ18cmを測る。底は中央が少し深く、長軸の両端は一段高くなっている。埋土は炭や焼土を多く含む茶灰色土である。遺物は出土しなかったが、溝58の埋没後に掘られていることから、百・前・Ⅲ頃と考えられる。

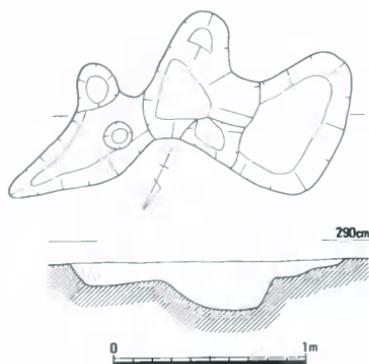


(平井勝)

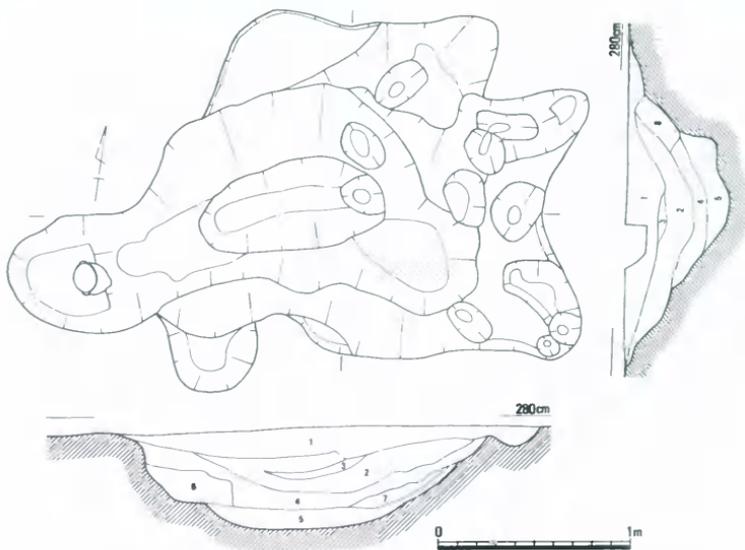
第270図 土壙94



第271図 土壙95



第272図 土壙96



1. 茶灰色土 2. 黄茶褐色土 3. 暗茶褐色土 4. 暗茶褐色土 5. 暗茶褐色土(炭・焼土含む)  
6. 茶黄灰褐色砂質土 7. 茶褐色土 8. 茶黄褐色土

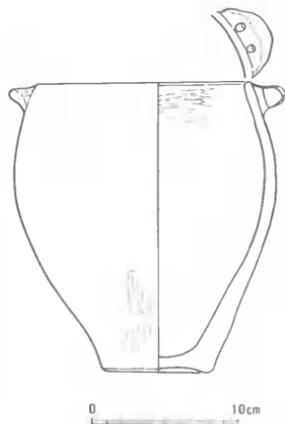
第273図 土壙97

## 土壌95 (第271図)

207O区の南東端近くで検出された土壌である。平面形はアムーパー状の不整形なもので、深さは24cmを測る。底には多くの穴が穿たれているため凹凸が著しい。埋土は焼土や炭を含む茶灰色土である。遺物は出土していないが、時期は前期と考えられる。(平井勝)

## 土壌96 (第272図)

207O区の東南端、土壌95の南側で検出された土壌である。平面形はアムーパー状の不整形を呈し、深さは25cmを測る。底は中央が深く長軸の両端は一段と高くなる。埋土は茶灰黄色土である。遺物は出土はなかったが、時期は前期と考えられる。(平井勝)



第272図 土壌96出土遺物

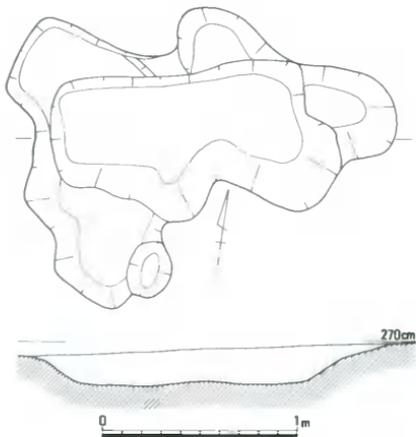
## 土壌97 (第273・274図、図版52)

208O区の北東端で検出された土壌である。平面形はアムーパー状の不整形を呈しているが、深さは50cmあり、しっかりした掘り込みである。中央部は小判形に一番深く掘られ、壁はいくつかの傾斜変換点をもちながら、緩やかに立上る。埋土は比較的整然と堆積しており、炭や焼土を含む層も認められる。遺物は土壌の西側から完形の土器が一点出土した。578は口縁部に一對の把手を張り付けた鉢

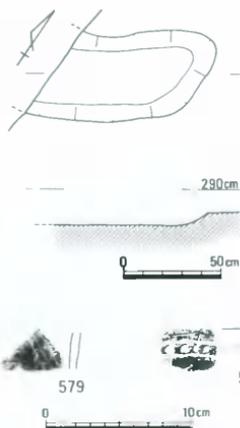
である。把手は上面から見ると耳状をなし、2個一対となる小穴が穿たれている。調整は一部器表が荒れている部分もあるが、内外面ともにヘラミガキと思われる。時期は百・前・Ⅲと考えられる。(平井勝)

## 土壌98 (第275図)

208O区の北東寄り、土壌97の南側で検出された不整形な土壌である。東西に長軸をもつ隅丸長方形のやや深い土壌に、浅い土壌がヒレのように付いており、二つの土壌が切り合っているとも考えられるが、区別はつかなかった。埋土は茶灰色土である。遺物は出土しなかったが、時期は前期と考えられる。(平井勝)



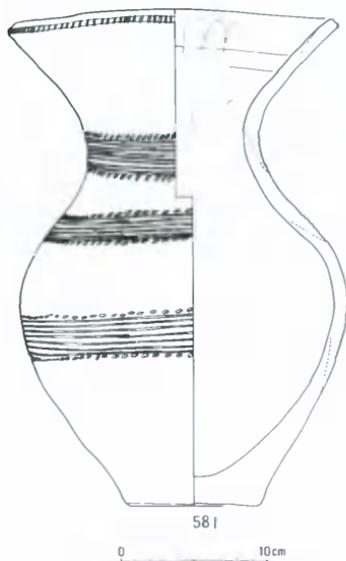
第275図 土壌98



第276図 土壌99・出土遺物



第277図 土壌100



第278図 土壌101出土遺物

#### 土壌99 (第276図)

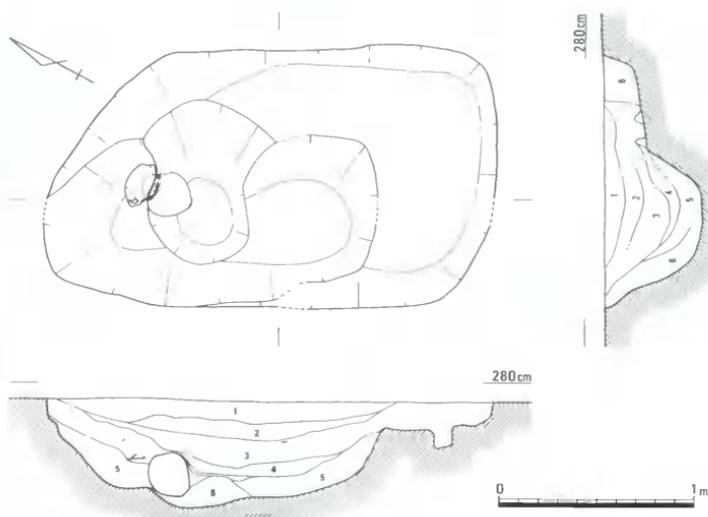
208P区西側で検出された。西端を欠くが、長辺75cm、短辺50cm、深さ7cmを測る不整な長方形を呈する。縄文晩期の土器小片が出上している。貼付突帯をもつ口縁部で、579には3条のヘラ描き状の沈線が施されており、この文様は『沢田2』の土器溜り13の出土土器のような山形文になると思われる。いずれも深鉢である。前期の土器は出上していないが検出状況から前期と考えられる。(阿部)

#### 土壌100 (第277図)

208P区西側で検出された。土壌101に切られており全体の規模は不明だが、現存部で長形114cm、短径54cmを測る。復元すれば径110cmほどの不整な円形の土壌であったろう。埋土は茶褐色土で、遺物は出上していない。(阿部)

#### 土壌101 (第278・279図、図版122)

208P区西側で検出された。不整な長方形を呈し、長辺235cm、短辺135cm、深さ50~55cmを測る。底面にはほぼ接する形で完形の壺が出土している。完形の土器が1個体出土する点で周辺の土壌墓と共通しており、この土壌101も土壌墓であろう。土壌内の長辺170cm、短辺90cmの深い部分が埋葬の主体であったと考えられる。5層上面に焼土粒を含む幅1~2cmほどの顕著な炭層があることから、棺の有無は不明だが埋葬主体と壺を墓塚に入れた後、5・6層の土で埋め、そこで何かを燃やす行為が行われ、最終的に2~4層の上で埋められたのであろう。(1層



1. 茶褐色土 2. 茶褐色土(黄色土ブロック含) 3. 淡暗茶褐色粘質土 4. 黄灰褐色粘質土  
5. 暗灰褐色粘質土(層下に顕著な炭層) 6. 淡暗黄褐色粘質土

第279図 土壌101

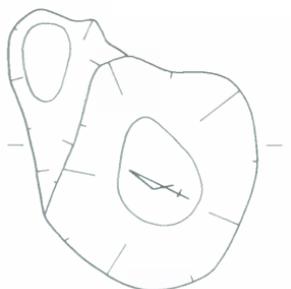
は落ち込みと考えられる)なおこの土壌の時期は出土遺物より、百・前・Ⅲと考えられ、土器をもつ他の土壌墓と同じ時期である。(阿部)

土壌102 (第280図)

土壌101の南に接して検出された。土壌101や溝59によって部分的に切られているが、長径160cm、短径120cmほどの楕円形の土壌である。前期土器片が少量出土したのみであるが、土壌101との切り合いから少なくとも百・前・Ⅲ以前ではある。(阿部)

土壌103 (第281図、図版53)

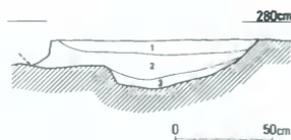
208P区に位置する、平面形がほぼ円形の土壌である。検出面では長径141cm、短径125cmを測ったが、土壌の南側の壙壁上端がごく緩い傾斜になって張り出しているためで、急傾斜になる肩部で測ると長径120cm、短径115cmとなる。深さは35cmである。底面は平面に近いが少し丸く凹んでいる。壙内埋土は5層に分けられたが、1層と5層は固くしまった土で、1層には炭が多く含まれ、5層にも炭粒を含むことから類似性がみられ、2～4層はあまりしまりのないことと、黄褐色砂を含むことで似ている。このことから、埋土を1層と2～5層の上下に二分することが可能である。



遺物としては、縄文時代晩期（谷尻式）と弥生時代の前期の土器片、それに石鏃・サヌカイト片がある。図示した遺物は壺の肩部の破片で、軽い段と沈線がみられる。（岡本）

土壌104（第282図）

前述の土壌103に北辺を破壊されている。平面形は楕円形を呈し、残存部で長径69cm、短径61cm、深さは25cmを測る。壙壁の傾斜は急で、底面との境は明瞭である。底面はかなり丸味をもち、縁辺と中心で6cmの高さの違いがある。埋土は3層に分けられるが、いずれも炭粒を含まない。2・3層には地山の砕粒が含まれる。遺物は若干で、その年代は不明である。（岡本）

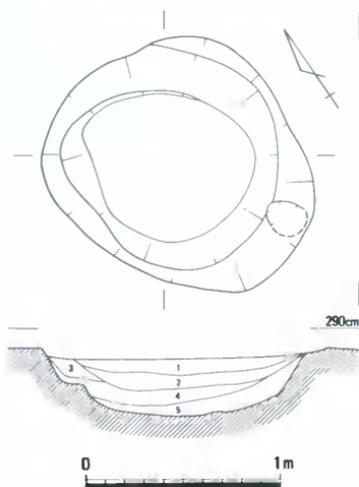


1. 黄灰褐色砂質土(炭粒・焼土粒少含)
2. 茶褐色土(炭粒・焼土粒含)
3. 淡暗茶褐色土(炭粒・焼土粒含)

土壌105（第283図）

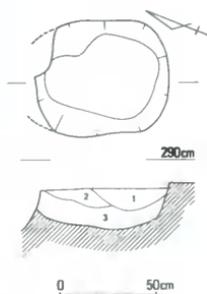
209P区の西端に位置する。土壌の重複した遺構である可能性が高く、平坦面の数からすれば4個以上の土壌の重複とも考えられる。全体では長径180cm、短径114cmを測り、深さはもっとも大きい土壌で37cm、他の3土壌

第280図 土壌102



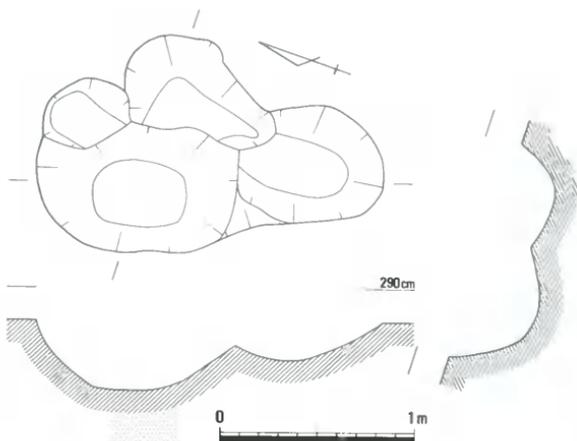
1. 暗褐色土(炭多)
2. 暗灰褐色土(含炭)
3. 黄褐色砂質土斑灰褐色土
5. 暗灰褐色土(含炭)

第281図 土壌103・出土遺物



1. 暗褐色土  
2. 黄褐色砂質土斑暗褐色土  
3. 暗褐色土斑黄褐色砂質土

第282図 土壇104



第283図 土壇105

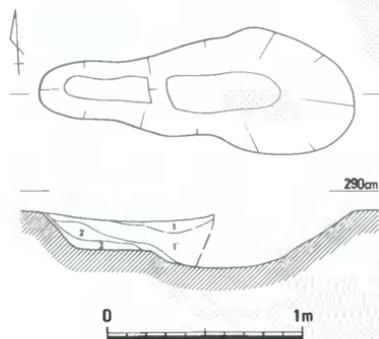
では北から30cm、25cm、20cmである。もっとも大きい土壇は長径105cmになる。埋土は暗褐色土1層である。遺物には弥生時代前期の土器片がみられるが、若干にすぎない。

(岡本)

土壇106 (第284図、図版53)

208P区の中央付近に位置する。長径163cm、短径64cmで、細長い瓢箪形の平面形をもつ。底面は二段になり、浅い部分で20cm、深い部分では30cmの深さがある。埋土は三層に分けられ、1層は色調の相違で細分される。遺物は出土しなかった。

(岡本)



1. 褐色粘質土      2. 黄褐色粘性砂質土  
1'. 暗褐色粘質土    3. 暗褐色粘質土

第284図 土壇106

分けられ、1層は色調の相違で細分される。遺物は出土しなかった。

### (3) 土壇墓

土壇墓3 (第285・286図、図版54・122)

207O区の北西寄り、調査区の北端で検出された土壇墓である。平面形は長楕円形を呈すると推定されるが、北側は調査区外となっている。底はやや丸みをもち、壁はやや緩やかに立上っている。内部には底からわずかに浮いた状態で壺が1点認められた。出土遺物は土器が1

第3章 第3節 高縄手B調査区

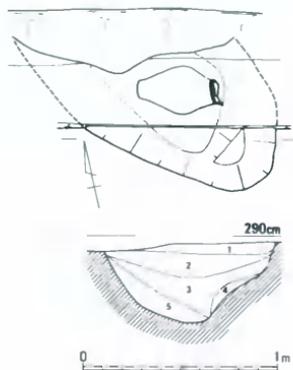
点である。583は口縁部を打欠いた長胴の壺で、頸部には6条の沈線がめぐる。調整は全体に器表が荒れているため確実でないが、胴部下半にはヘラミガキが認められる。時期は百・前・Ⅲと考えられる。(平井勝)

土墳墓4 (第287図、図版54)

207〇区の中央近くで検出された土墳墓である。平面形は長さ1.55m、幅61cmの長方形を呈するが、西側長辺の西端と、南側短辺が一部突出している。壁はほぼ垂直に立上る。土墳内には木棺痕跡が認められることから長さ1.35m、幅40cmの木棺が置かれていたと推定される。遺物は出土しなかったが、時期は検出面から前期と考えられる。(平井勝)

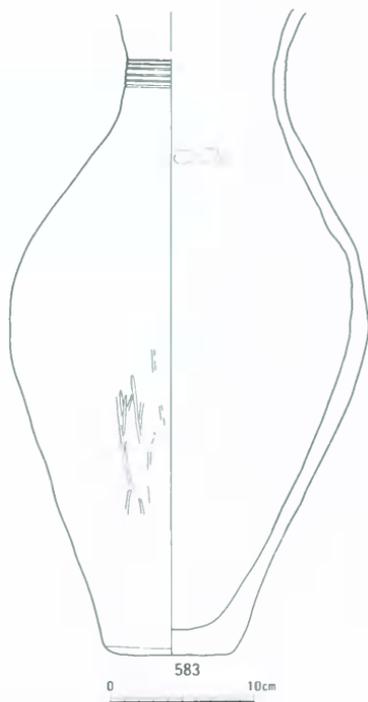
土墳墓5 (第282・289図、図版55)

207〇区の北東寄り、土墳墓4の東側で検出された土墳墓である。北東端は調査区外のため明確でないが、長さ2.9m以上、幅80cmの長方形を呈する土墳墓である。底は東側に向かって少し下がっている。東端の底から少し浮いた状態で壺

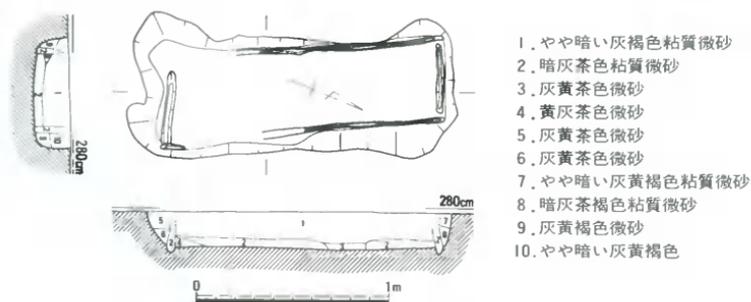


1. 淡灰黄白色微砂 2. 褐灰色微砂  
3. 暗灰茶褐色粘質微砂 4. 暗茶褐色粘質土  
5. 暗黄茶色砂

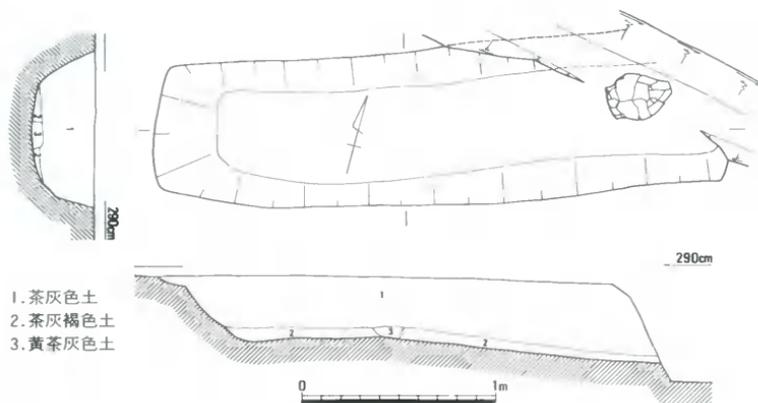
第285図 土墳墓3



第286図 土墳墓3出土遺物



第287図 土墳墓4



第288図 土墳墓5

が1点出土した。遺物としては副葬されたと考えられる土器が1点であった。壺は長い胴部に緩やかに外反する口縁部が続くもので、口縁部に一部刷毛目が認められるが、全体的にヘラミガキによる丁寧な調整が施されている。時期は百・前・Ⅲと考えられる。(平井勝)

土墳墓6 (第290図、図版55・124)

207〇区の中央近くで検出された土墳墓である。平面形は1.44m、幅60cmの長方形を呈し、深さは10cmを測る。底は南に向かって少し低くなるが、ほぼ平坦である。埋土は灰黄茶色土で

第3章 第3節 高縄手B調査区

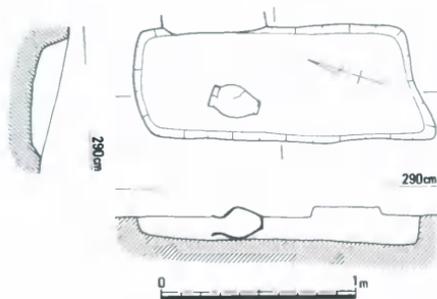
ある。遺物は北西寄りの底に接して壺が一点副葬されていた。壺は口縁部を欠いているが、球形の胴部に緩く外反する口縁部がつくものである。時期は百・前・Ⅲと考えられる。(平井勝)

土墳墓7 (第291・292図、図版56)

2070区の南東寄りで検出された土墳墓である。平面形は長さ1.46m、幅70cmの長方形を呈し、深さは16cmを測る。底はやや凹凸があり、壁は急斜に立上る。内部には底より少し浮いた状態で一個体の土器が大きく3分割され置かれていた。出土遺物は副葬されたと考えられる土器1個体であった。土器はボーリングのピンに似た特異な形態をしている。胴部は一部欠けており、ここに窓状の開口があった可能性も考えられる。文様は胴部から棒状の頭部下半に多条沈線と刺突を交互にめぐらしている。また頭部先端近くには一対の小孔が穿たれ、さらに先端には円形の刺突が施されている。時期は百・前・Ⅲと考えられる。(平井勝)

土墳墓8 (第293図)

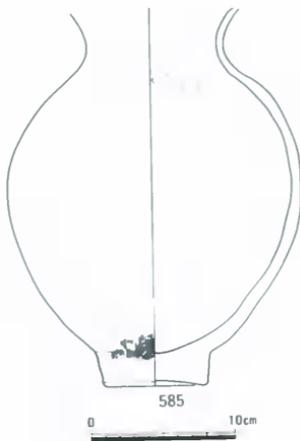
2070区の南東寄り、土墳墓7の西に接して検出



第290図 土墳墓6・出土遺物



第289図 土墳墓5出土遺物

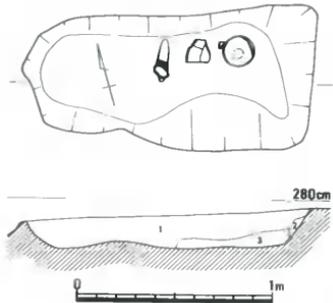


された土墳墓である。溝58の上端と重なり、西側長辺は溝の掘り込みの肩を土墳の底とまちがえて掘り下げたため、土墳本来の形状を明確にし得なかったが、ほぼ長方形を呈していたと考えられる。遺物は出土しなかったが、検出面ないし溝58との切り合い関係から百・前・Ⅲと考えられる。(平井勝)

土墳墓 9 (第294・295図、図版56)

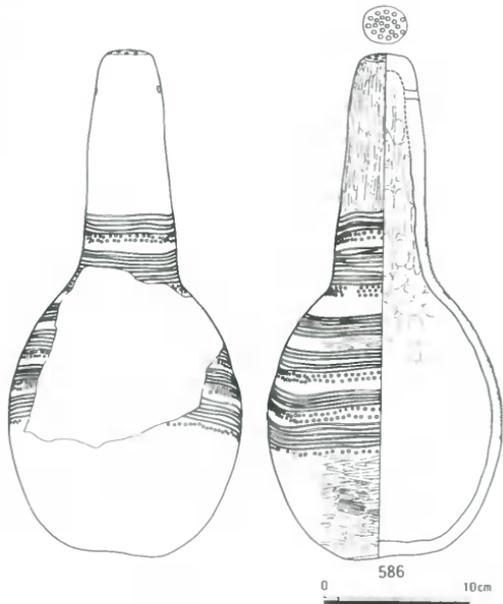
2070区の南端中央で検出された土墳墓である。平面形は西端が削平され明確でないが長さ138m、幅58cmの長方形を呈する。底は東端が高く、西端に向かって低くなっている。遺物は土器が西側でまともに出土した。587は壺で、

最大径を中央にもつやや長い胴部に短い頸部から強く外反する口縁部がつく。588は台付無頸壺である。口縁部から胴部にかけては沈線と刺突が交互にめぐり、そして若干の無文部をもって沈線と円形浮文が施される。口縁部には2個1対の小孔が1対、さらに台部にも1対の小孔が穿たれている。蓋にも2個1対の小孔が1対穿たれている。589は壺で、口縁端部がわずかに外方へつまみ出され、尖りぎみに仕上げられている。調整は内外面ともにヘラミガキが施されている。590は鉢で、内外面ともにヘラミガキによって丁寧



- 1. 茶灰色微砂
- 2. 黄褐色微砂
- 3. 黄茶灰色微砂

第291図 土墳墓 7



第292図 土墳墓 7 出土遺物

第3章 第3節 高縄手B調査区

は2個一対となる小孔が一対穿たれている。時期は百・前・Ⅲと考えられる。

(平井勝)

土墳墓10 (第296図)

207〇区の南端東寄りで見出された土墳墓である。平面形は長さ76cm、幅40cmの隅丸長方形を呈し、深さは5cmを測る。底は平坦で、壁は急斜に立上る。埋

土は茶灰色土である。遺物は出土しなかったが、時期は前期と考えられる。

(平井勝)

土墳墓11 (第297図)

207〇区の南東端で見出された土墳墓である。平面形は長さ84cm以上、幅57cmの長方形を呈し深さは10cmを測る。底は西端が少し凹むものの、ほぼ平坦である。埋土は茶灰色土である。遺物は出土しなかったが、時期は前期と考えられる。

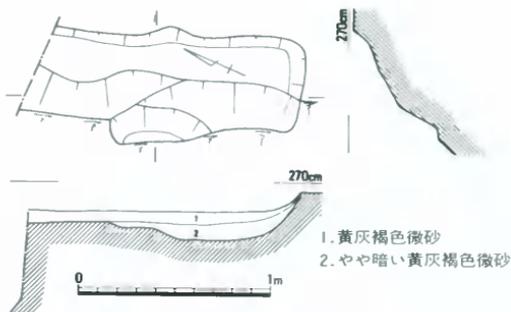
(平井勝)

土墳墓12 (第298図、図版57)

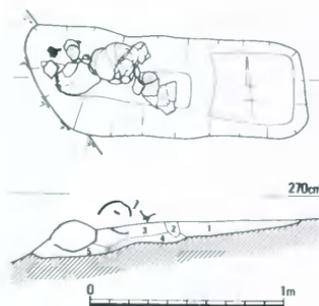
小口板・側板の痕跡を残す木棺墓である。この土墳墓群中で木棺痕跡を残すものとしては他に土墳墓4があるのみである。墓壇は長辺115cm、短辺

65~70cm、深さ10cm、棺の内法は長辺90cm、短辺37cm程度の小規模なものである。早い時期に腐朽、陥没したのか、検出平面はかなり不定形であった。そのため断面の設定が軸よりはずれ、土層を図示していない。土層中にみる小口板痕は暗褐色土がやや外向きに幅5cmほどで、また側板痕は幅5cmほどで垂直に観察された。埋土は褐黄灰色粘質土であった。遺物はごく少量の土器片のみであるが、時期を特定できるものでは図示した百・前・Ⅱの壺肩部の小片が出土している。

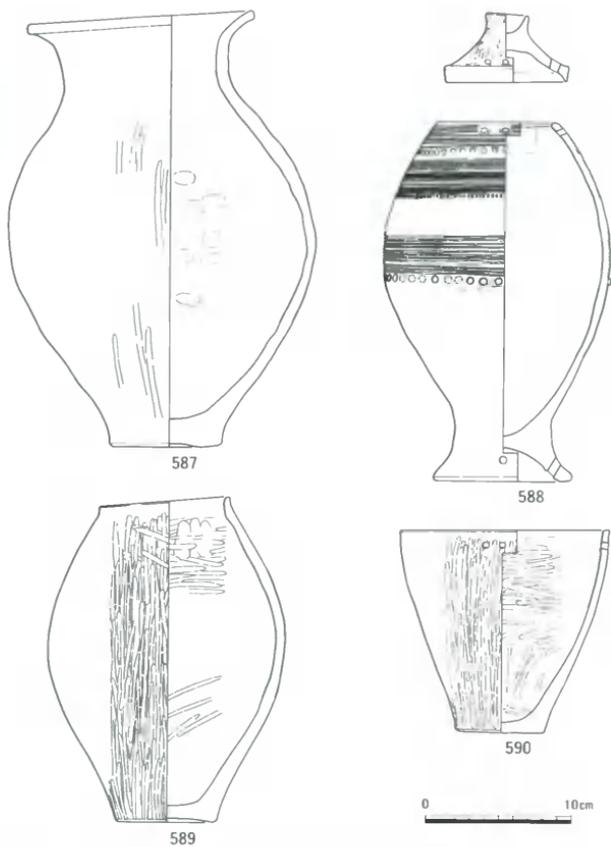
土墳墓13 (第299図)



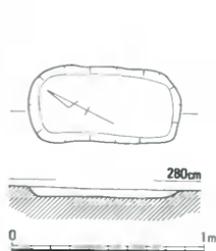
第293図 土墳墓8



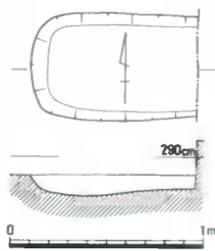
第294図 土墳墓9



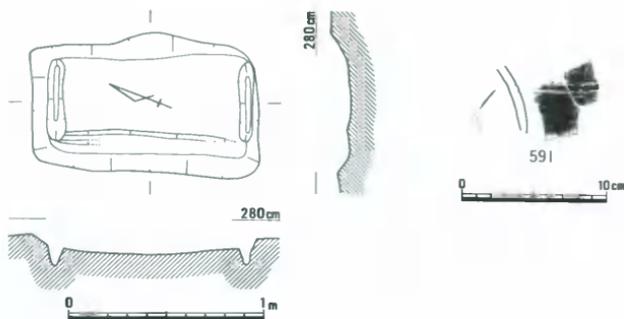
第295図 土壙墓9出土遺物



第296図 土壙墓10



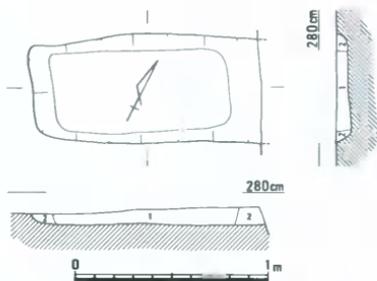
第297図 土壙墓11



第298図 土墳墓12・出土遺物

溝59と接して検出されたが切り合いは明確でない。長辺は117cm、短辺は57cmを測る長方形の土墳である。深さは10cm弱と浅いが、埋土をみると中央に長辺90cm、短辺42cmほどに1層があり、その周辺が2層によって埋められているような状況であり、土墳墓の底部かと考えられる。遺物は小片のみであるが、前期のうちでとらえられよう。（阿部）

(4) 溝



1. 暗褐灰色粘質土 2. 淡褐灰黄色粘質土

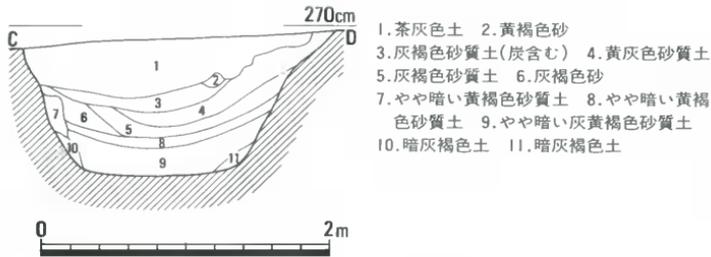
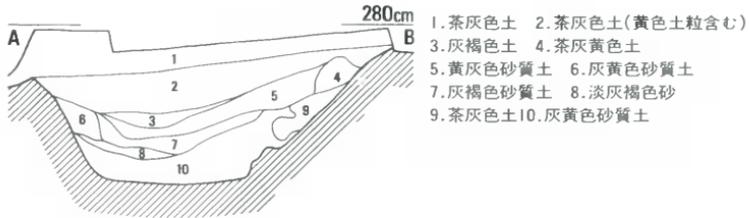
第299図 土墳墓13

溝58（第300～303図）

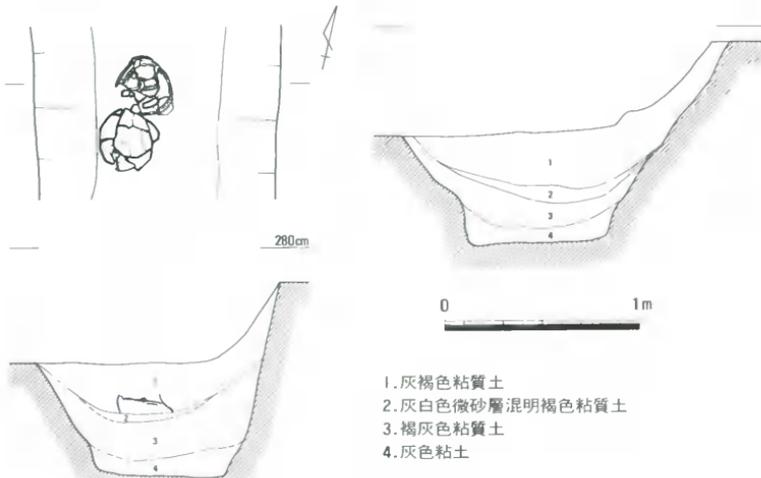
207～209O区で検出されたはほ南北に流走する溝である。溝は微高地から旧河道に移行する肩部に掘削されており、幅は広い場所で2.4m、狭い場所で1.2m前後を測る。底は平坦で、壁は急斜に立上る。埋土は整然と堆積している。遺物は土器と石器が出土している。土器は沢田式と前期の土器が混在していた。592～595は口縁部に刻目突帯をめぐらす甕で、594と595には篋描文が施されている。597と598は如意状を呈する甕の口縁部で、沈線が数条めぐる。599は壺の頸部であるが、6個の小孔が円形に配置されている。石器は石鎌3点、磨製石斧が1点ある。溝の時期は百・前・Ⅱと考えられる。（平井勝）

溝59

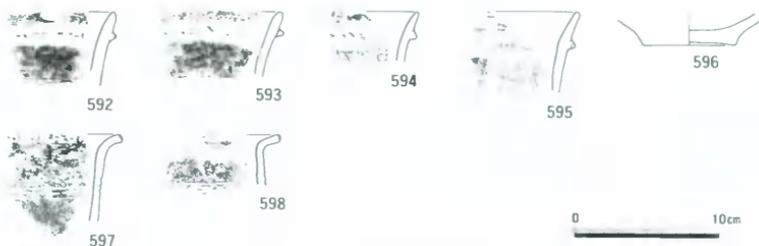
207O区と207P区の境界から東へカーブしつつ208Oと208P区の境界へ至る、検出長26mの



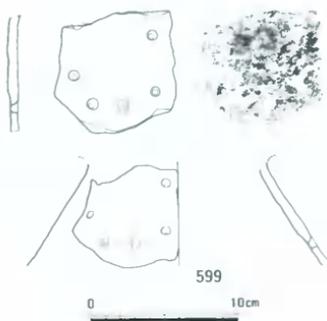
第300図 溝58 (S=1/40)



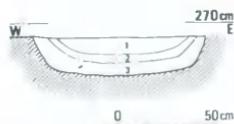
第301図 溝58



第302図 溝58出土遺物



第303図 溝58出土遺物



1. 淡黄灰褐色粘質微砂  
(炭粒・焼土粒少含)
2. 淡黄灰褐色粘質微砂  
(鉄分含、炭粒・焼土粒少含)
3. 暗褐色粘質微砂  
(炭粒・焼土粒少含)

第304図 溝60

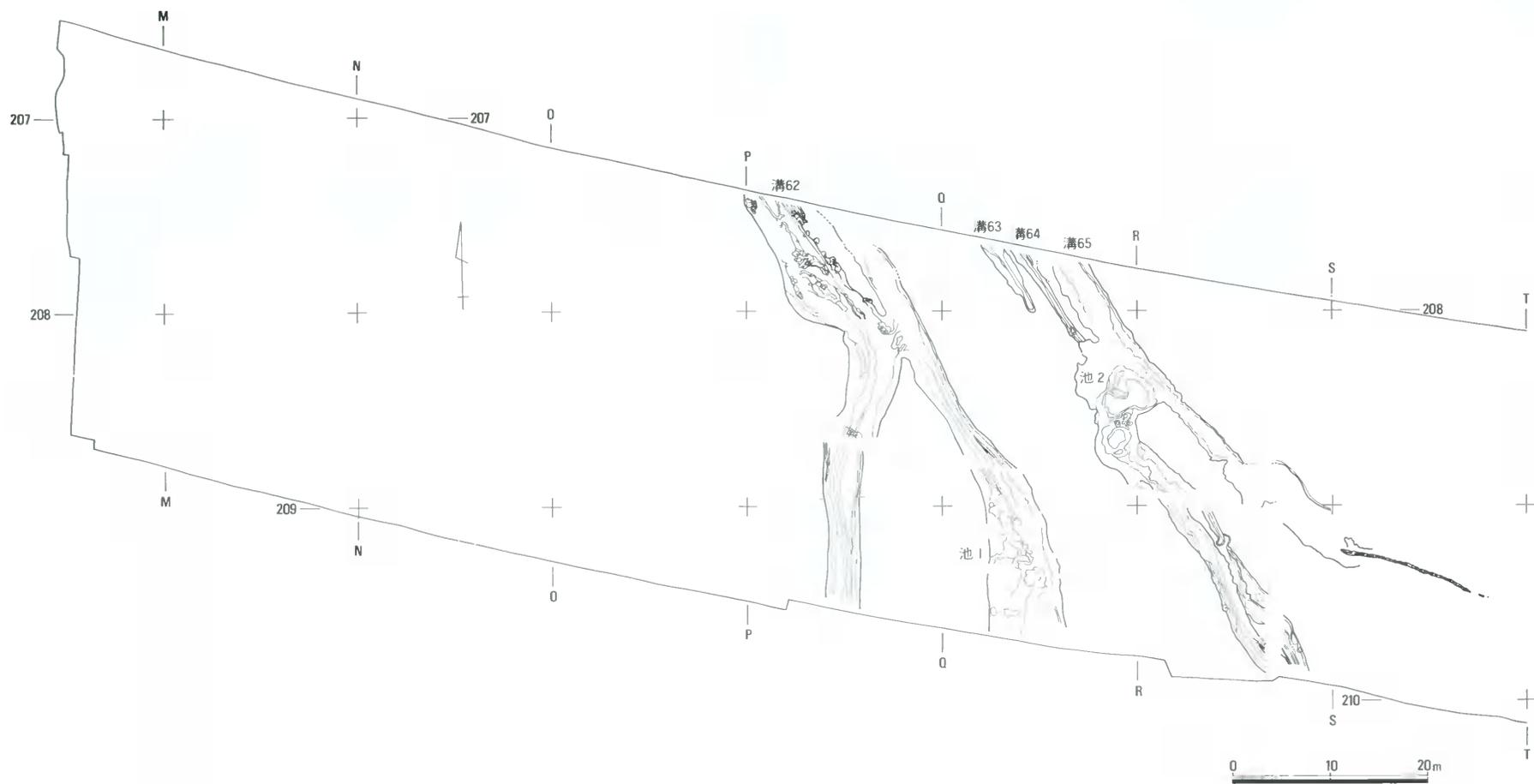
溝である。溝としては小規模であり、また溝底高は南端がわずかに北端より1、2 cm程度低いだけであり、むしろ中央部のほうが低い。遺構や周囲の状況を考えて用事的な機能をしていたとは考えにくい。この溝を境とするように溝の東側ではピットが散在するだけなのに対して、溝の西側には多数の上墳・土壌墓がつくられており対象的である。この溝は上墳(墓)群を区画する境界のような役割を果たしていた可能性がある。(阿部)

#### 溝60 (第304図)

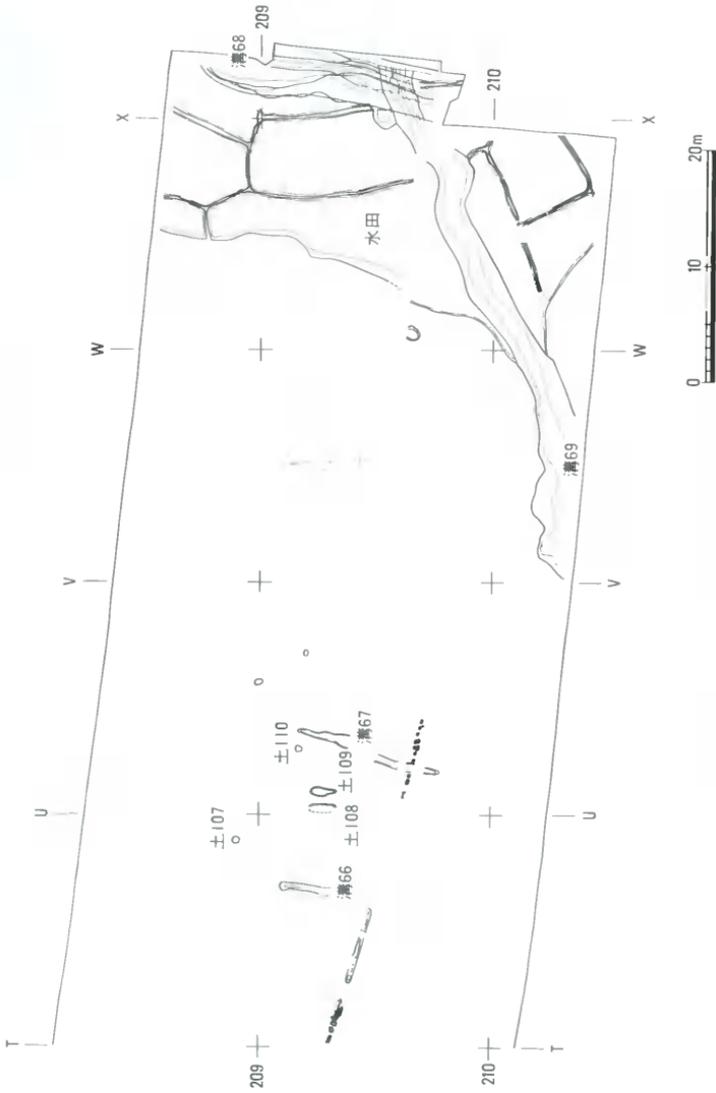
208Q区を北西から南東に向けて調査区をななめに横切るように検出された。検出長は22m。北への続きは溝62・77などによって削られ、また南端付近で浅くなり平面もはっきりしなくなる。幅80~100cm・深さ12~20cmを測る。流走方向は溝底の海拔高より北西から南東へ向けてと考えられる。その差は22mで13cmである。(阿部)

#### 溝61

前期水田の北西側で検出した幅12cm、深さ5 cmの小規模な溝で、埋土は暗赤黒色土である。前期水田の北西縁に平行しているが、水田との関係は明らかでない。(宇垣)



第305図 高縄手B調査区の弥生時代中期遺構全体図(1) (S=1/500)



第306図 高縄手B調査区の弥生時代中期遺構全体図(2) (S=1/500)

#### 4. 弥生時代中期の遺構・遺物

##### (1) 水田

208～210W・X区において検出した。微高地縁辺の低位部に形成された水田であるため、それぞれの区画は大きい。沢田遺跡北西部および原尾島遺跡において検出された中期水田は亀甲形あるいは横長の長方形の区画を特徴とするが、当調査区のものも同様な形状をとっている(図版58)。水田面は灰色ないし暗黄色の微砂質土～砂質土によって覆われており、部分によっては水田面直上を黒褐灰色粘質土が覆っている。水田層は厚さ5cm程度の黒褐灰色微砂質土であるが、黄色が強くなる部分もある。畦畔は幅50～70cm、高さ6cmと低平であり、基部では水田層下の明黄色土が畦畔の形を反映してわずかに高まる状況が認められ、畦畔の移動がなされないうちに埋没した可能性が考えられる。

水田覆土からの出土土器は600のみであり年代の推定が困難であるが、水田埋没後に掘削された溝66からは百・前・Ⅱ期の土器が出土している。前期土器が含まれるのは水田下の堆積層のかなり下部であることからすれば、水田の時期は百・中・Ⅱのなかに収まる可能性が高い。この中期水田は沢田遺跡北西部から原尾島遺跡にかけて検出されている下層水田と同時期である可能性も考えられるが、水田層の色調が異なっている。(宇垣)



1. 暗灰色粘質土
2. 黒褐灰色粘質土(水田層)
3. 明黄色灰粘質土



第308図  
中期水田覆土出土遺物



1. 灰黄色微砂質土(水田層)
2. 明黄色微砂質土

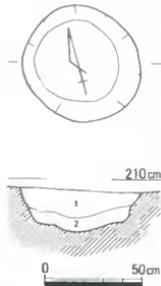
第307図 中期水田畦断面

##### (2) 土壌

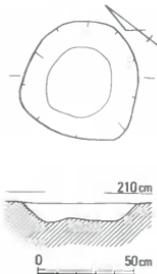
土壌107～110(第309～312図)

208・209T・U区では前期水田2上面において土壌107～110と溝66、67を検出した。いずれも土器をほとんど伴っていないが、土層の関係から中期前半前後と考えられる。

土壌108、109は船底形の土壌である。土壌108は長さ232cmで埋土は暗灰褐色粘質土である。土壌109は長さ230cm、幅81cmの浅い土壌で暗灰色粘質土がはいる。このうち土壌108は形状か



第309図 土壙107



明黄色粘質土

第312図 土壙110

土壙107は径60cm、深さ22cmの円形の土壙で、上層は明黄灰色粘質土、下層は地山ブロックを多く含んでいる。土壙110も径58cm、深さ6cmの円形の土壙で埋土は明黄色粘質土である。



明灰褐色粘土

第310図 土壙108



明灰色粘土

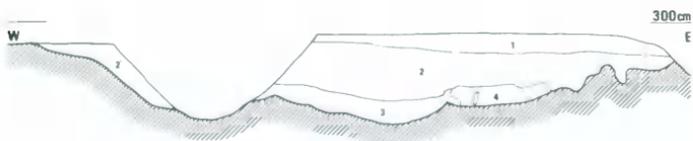
第311図 土壙109

ら土壙墓の可能性も考えられる。

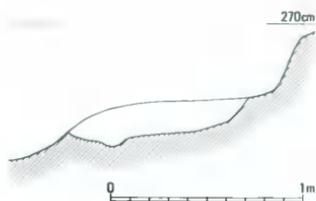
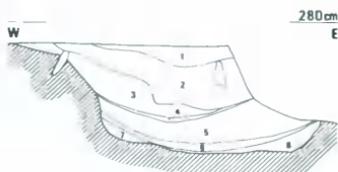
### (3) 溝

溝62 (第313・314図、図版58)

207P区から209Q区にかけてゆるく逆「く」の字状に蛇行して検出された。蛇行する部分で北西から南東へ流走する溝と合流しており、この合流する溝もここで併せて記述する。便宜上西側の蛇行する溝を西溝、東側の溝を東溝とする。西溝は幅3.4~6m、深さ63~88cmを測る比較的大きな溝である。検出全長は45mである。溝底の形状は大小の凹凸が著しい。小穴については杭痕と考えられるものが多い。特に207P区では断面が逆三角形を呈する、径10~20cm、深さ15~20cm程度の明かな杭痕の小穴群が検出されている。木質は残っておらず、粘土または粗

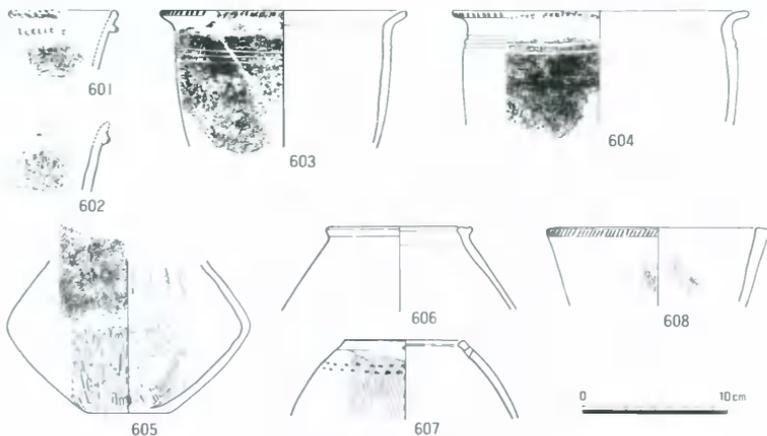


1. 黄褐色土  
 2. 暗褐色砂質土  
 3. 灰褐色粗砂  
 4. 暗褐色粘質土



1. 淡灰黄色砂質土  
 2. 淡灰白褐色砂質土  
 3. 淡灰黄褐色砂質土  
 4. 淡灰白黄色微砂  
 5. 褐灰色土  
 6. 白灰色土と暗灰色微砂互層  
 7. 暗灰褐色粘質土  
 8. 暗灰褐色粘質土(微砂含)

第313図 溝62



第314図 溝62出土遺物

砂がつまっている。2 mほどの範囲で25個の杭痕がまとまっている部分がある他は6 mほどの範囲に前述のものも含めて40個ほどの杭痕が散在し、特に規則性は認められず、護岸などに関わるものか、橋などの構造物があったのか、その性格については明確でない。

埋土を見てみると、底部は他の中期溝と同様の粗砂が顕著に堆積しているがそれによって廃絶したものではなく、最終的には茶褐色の砂質土により埋積している。なお、この溝の屈曲部分の西側よりこの溝に先行する溝が7.5 mほど検出された。第313図の下、左の断面がそれである。深さ約60 cm、溝底の海拔高は210 cmで、同じ部分の西溝とほぼ同じである。この部分は埋土の状況や出土遺物より弥生前期にまで遡ると考えられる。すなわち西溝は前期に掘削され、埋没後流路をほぼ踏襲する形で再び中期に大きく掘り直されたものである。「く」の字状の屈曲は前期の段階である程度つけられたものであろうが、すくなくとも中期の再掘削の段階で前期の時よりも大きく東へ曲がる形に掘り直された結果、西側に前期の部分が削り残される形となったのである。

この溝の埋没後再び後期になって、溝75が掘られたときに他の溝との合流を意図しないにも関わらず、西溝の流路を踏襲して大きくカーブさせたのは、掘りやすいところをねらって掘削の労力を少しでも省こうとしたものであろうか。当時の溝の掘削場所選定がどういう判断で行われたのか、興味深い変遷である。

東溝は207 P区で溝77によって削られてしまっているが、さらに北に延びると思われる。南は池状遺構1に流れ込んでいる。検出全長は42 mである。西溝が逆「く」の字状に蛇行する部分で合流している。合流部分は鞍部状になっており、その最低部での海拔高は溝底とほぼ同じである。この部分での東溝の溝底は大きく溝77によってえぐられており、どのような形で合流していたかは不明である。合流部以南の東溝の底が残っている部分を見ると西溝より約20 cmほど高く、かつ通常の走流方向とは逆に北、すなわち合流部分の方へ低くなっていることからみて、東溝から西溝へ流れ込んでいたと考えられる。 (阿部)

#### 溝63・64 (第315図)

いずれも207 Qから208 Q区の北端にかけて近接して検出した溝である。溝63は幅1.8 m、深さは検出面より26~30 cmを測る。南半分を後期水田によって削平され検出全長は8 mである。

溝64は幅1 m前後、深さは検出面より6~18 cmを測る。ほぼ並行して走る後期溝85により東側肩部を削られ、14.5 mを検出した先は溝87と重なってしまい、その先は不明である。

この溝は二度掘られており、第315図7層が先行する溝にあたる。下層溝はやや東に中心がずれるが、流路はほぼ重なる。幅50~75 cm、深さ10~14 cm、検出全長は11.5 mを測る。

溝63・64の切り合いは同様の細砂を含む粘質土が連続して堆積しており明確ではない。埋土を見ると溝63は溝底には粗砂が顕著に入るものの全体的には他の中期の溝のようにそれによって堆積した状況ではない。溝64にも粗砂の堆積はない。またこの2本の溝はその南端において、中期の粗砂の浅い溜りを切っていることから、時期的には中期の洪水による粗砂の堆積よ

り後である。

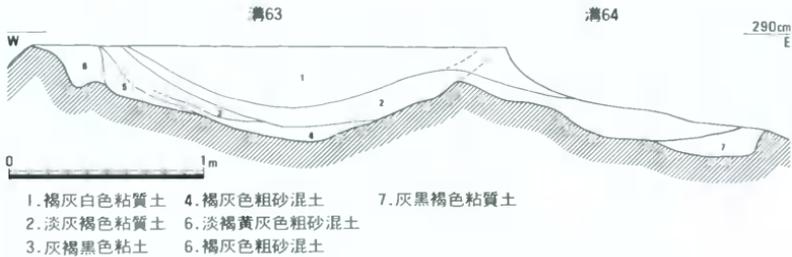
(阿部)

溝65 (第316・317図、図版59)

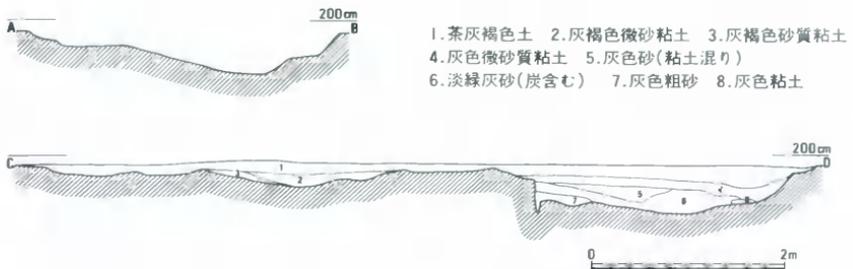
207Q区から209S区にかけて検出された。幅3.8~1.3m、深さについては溝88がほぼ同じ流路を走り、この溝の底部を掘削しているため、部分的にしか分からないがRライン付近で40cm前後である。検出全長は44mを測り、全体が粗砂で埋まっている。南側へ行くほど溝としての形状がはっきりせず、溝底が前述の理由でわからないながらも、浅くなって行くようである。溝底の形状は凹凸が激しい。池状遺構2以南の部分については溝としての恒常的な機能にやや疑問も残る。あるいは中期の粗砂をもたらした洪水時にえぐられた部分かとも思われる。しかし、池状遺構2までの部分については、平面、断面ともはっきりしており、底部に粘質砂の堆積も若干見られる。池状遺構2に接していることから、それと一体となって機能していた溝であろう。

(阿部)

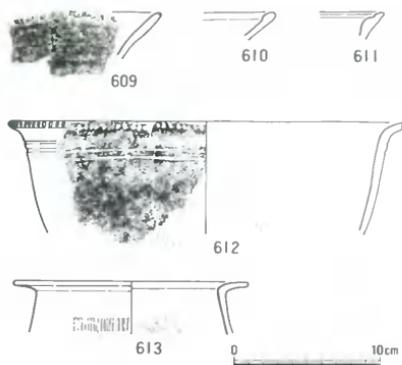
溝66、67 (第318・319図、図版59)



第315図 溝63・64



第316図 溝65 (S=1/60)

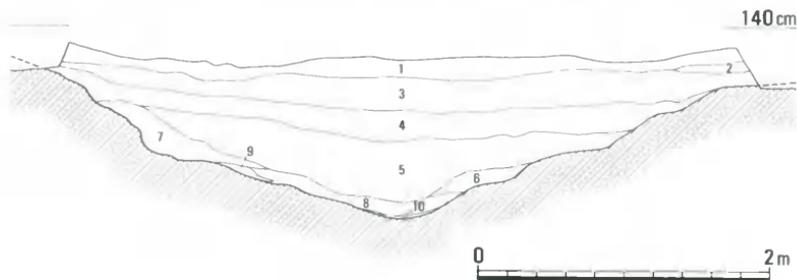


第317図 溝65出土遺物

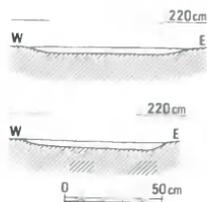
前期上層水田の上面において検出した溝で、いずれもほぼ直線をなして南流する。溝66は最大幅60cm、長さ4.4mを測り、埋土は明黄色粘質土である。溝67は最大幅110cm長さ4.6mを測り、暗灰色粘質土がはいっている。遺物は伴っていないが、土層関係から中期の遺構と考えられる。この二つの溝の間には土壌108、109が所在しており、一連のものである可能性もある。（宇垣）

溝68（第320図、図版60）

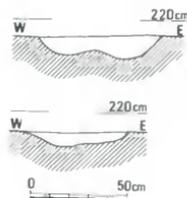
調査区の東端、208・209X区において検出した南北方向の溝で、幅4.2m、深さ1.2mを測る。調査区北端でやや東側に屈曲しており、その部分では溝の掘り直しが認められる。下部には木枝が多量に堆積しており、そのなかには杭状に端部が切断された木材も含まれていたが、製品等は認められなかった。溝底部から前期、晚期土器の小片が少量出土しているが、溝壁面



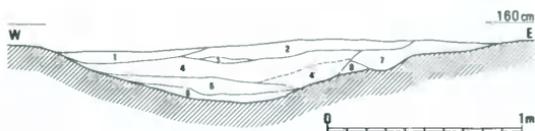
第320図 溝68 (S=1/40)



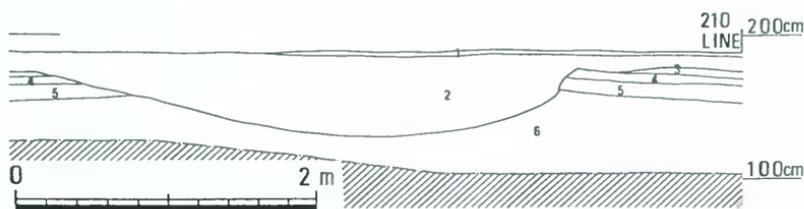
第318図 溝66



第319図 溝67



1. 灰黄色砂質土 2. 灰色微砂質土 3. 黄色砂 4. 灰色粘性砂質土  
5. 灰黄色砂 6. 暗灰色粘質土 7. 赤黒褐色粘質土 8. 灰色粘質土



1. 黒色粘質土(後期水田) 2. 淡灰褐色砂礫(溝69) 3. 淡灰褐色粘質土  
4. 黒色粘質土(中期水田) 5. 淡青灰色砂質土 6. 黒灰色炭混り粘土

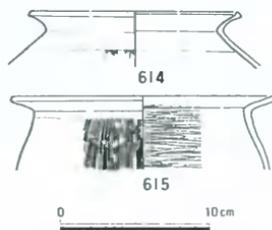
第321図 溝69 (S=1.40)

からの流入と考えられる。

溝の埋没後に中期水田が営まれており、百・中・Ⅱよりも若干古い時期のものとみられる。(宇垣)

溝69 (第321・322図)

210Vの南西部から209Xの南西部にかけて検出した幅の広い浅い溝である。ほぼ直線的に伸びているが、209W東部では大きくS字状に蛇行している。また210Vの南西部の北岸では凹凸が見られる。検出面は上層水田層を除去し、その下層の淡灰褐色砂礫層を除去した海拔170cm前後である。すなわち下層水田とはほぼ同一レベルで検出したことになる。北東の209X部分は4年後に別の調査班が調査している。検出全長約50m、平均幅350cm、平均の深さ50cmを測る。西方では図で示すように10本の杭が集中して、溝の主軸に対して直角に並んで、打ち込まれたまま出土した。護岸施設とは考え難く、取水の為に樋の施設であろうか。杭はすべて掘り上げた。長いもので82cm、太いもので10cmを測り、原木を縦に四分割し、先端を鋭利な刃物(鉄器)で鉛筆の先のように尖らせていた。埋積土は淡灰褐色砂礫で、第321図上図のように分層できた。一気に洪水で埋没したもので



第322図 溝69出土遺物

あろう。出土遺物としては、図示しているくの字状に外反する口縁を持つ甕片2点と、図示していないが高杯片1点がある。この土器から溝の埋没した時期は百・中・Ⅱと考えたい。

(浅倉)

#### (4) 池状遺構

##### 池状遺構1 (第323・324図、図版61)

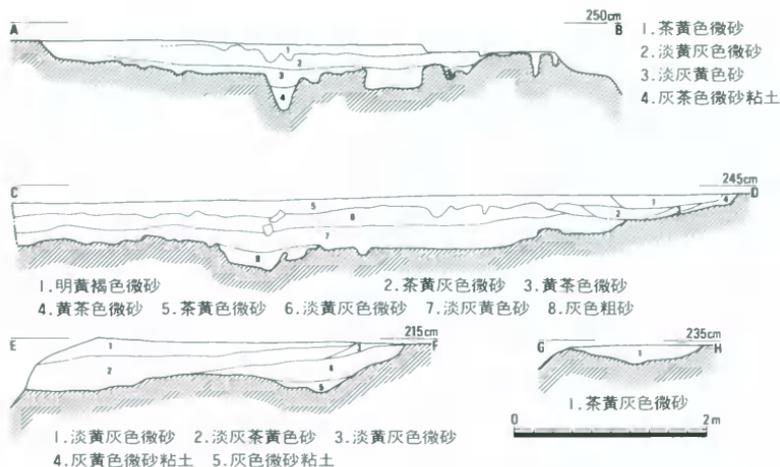
208Q区から209Q区にかけて検出した。溝62が東西に分流した東側の溝に形成された遺構である。西側の一部が後世の溝によって切られているが、本来の形状は大きくは変わっていないものと考えられる。平面形は南北に長い楕円形を呈している。

遺構の底には灰茶色微砂粘土で埋まった径2、3cm大から30cm大までの穴が、150cmから190cmの等高線の間にも円環状に分布している。穴の分布密度には濃い所と薄い所があり、水の流入口の北側は濃く、流入口の南側は薄く分布している。また、導水路部分の東西の肩口には、それぞれ直線的に並んでいる。

遺物は含まれていないが埋土の状況から、時期は弥生時代の中期と考えられる。(古谷野)



第323図 池状遺構1 (S=1/120)



第324図 池状遺構1 土層断面図 (S=1/60)

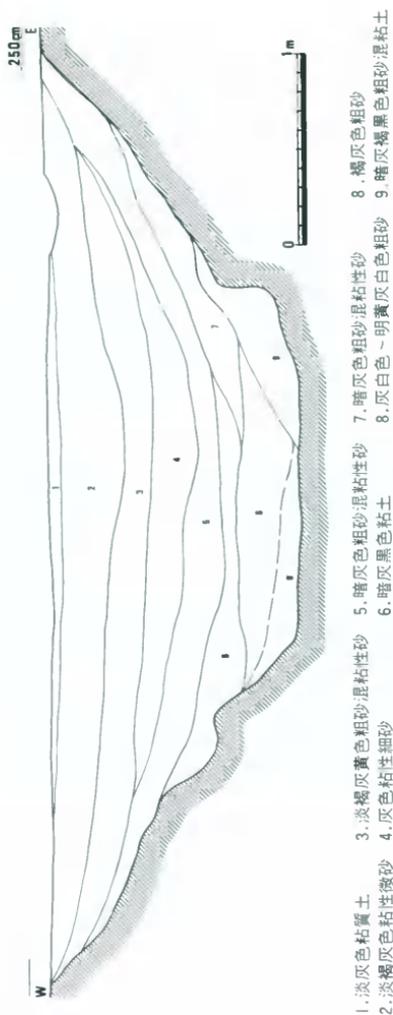
池状遺構2 (第325～327図、図版62)

208Q区東側から208R区にかけて検出された。池底は2つの底に分かれ、その間に底面より約25cmほどの高まりが見られる。底面に接して、倒れて折り重なった状態の杭が出土したことが注目される。この池にはかなり杭が使用されていたらしく、底面から多くの杭痕が検出された。杭痕は径5～15cmほどで中には粗砂や暗褐色粘土がつまっている。穴の断面が逆三角形を示したり、池の壁面に打ち込まれていたものはそのままの形で褐色土に置き変わっており、これらの小穴が杭痕であることは確実である。これらの杭がどのように使われていたかを復元してみると次のように考えられる。まずこれらの杭は列状に打ち込まれている。3列考えられ、まず池の北辺の杭が出土した部分である。北西から南東へ、池の縁や溝65に沿うような形で杭先を穴中に残す、比較的等間隔の整然とした列が認められる。その南側に1列、中央の高まりに1列あるがこれらは多くの杭を雑然と打ち込んでいる。ではどのような構造物であったのか。出土した杭にまじって長さ120cm以上(欠損)、幅15cmほどの平行に3分割して作った材、半裁しただけの材、加工痕のない木などがあった。北側の列については杭にこれらの材を横木として組み合わせた護岸的なものであったと思われる。後の2列については板の横材があったかどうかは不明だが、杭を密集して立て並べた堰のようなものであったと考えられる。池の機能については溝65の水を池下流の溝に配水するための貯水が目的であったと考えられる。杭列は水位調節や沈砂の目的であったのだろうか。しかし溝65は208R区の南で不明確になってお

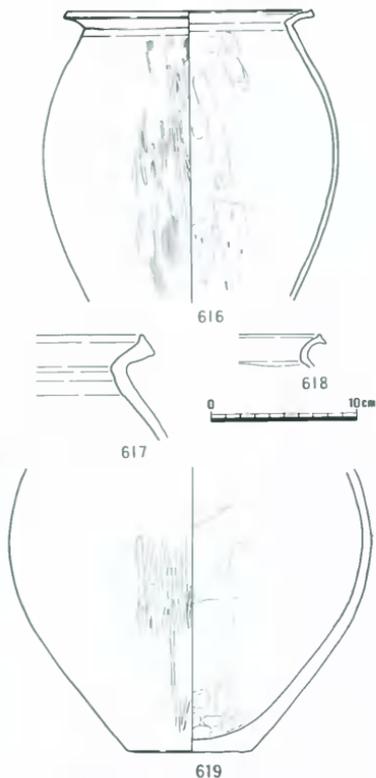
りどの程度用水の機能を果たしていたかについてはやや疑問が残る。この池の廃絶については他の溝にも見られる中期の洪水砂とされる粗砂が目される。図示し得ていないがRラインで設定した断面では埋土の3分の2ほどで、かなりの粗砂ブロックを含む暗灰色粘土の層と粘土を含む粗砂の層との堆積が、かなり乱れ、入り組んでいるといった状況が見られる。この洪水時に杭が倒され、同時に池の大部分が埋没したのであろう。ただ第326図に示した池の南側の



第325図 池状遺構2 (S=1/100)



第326図 池状遺構2

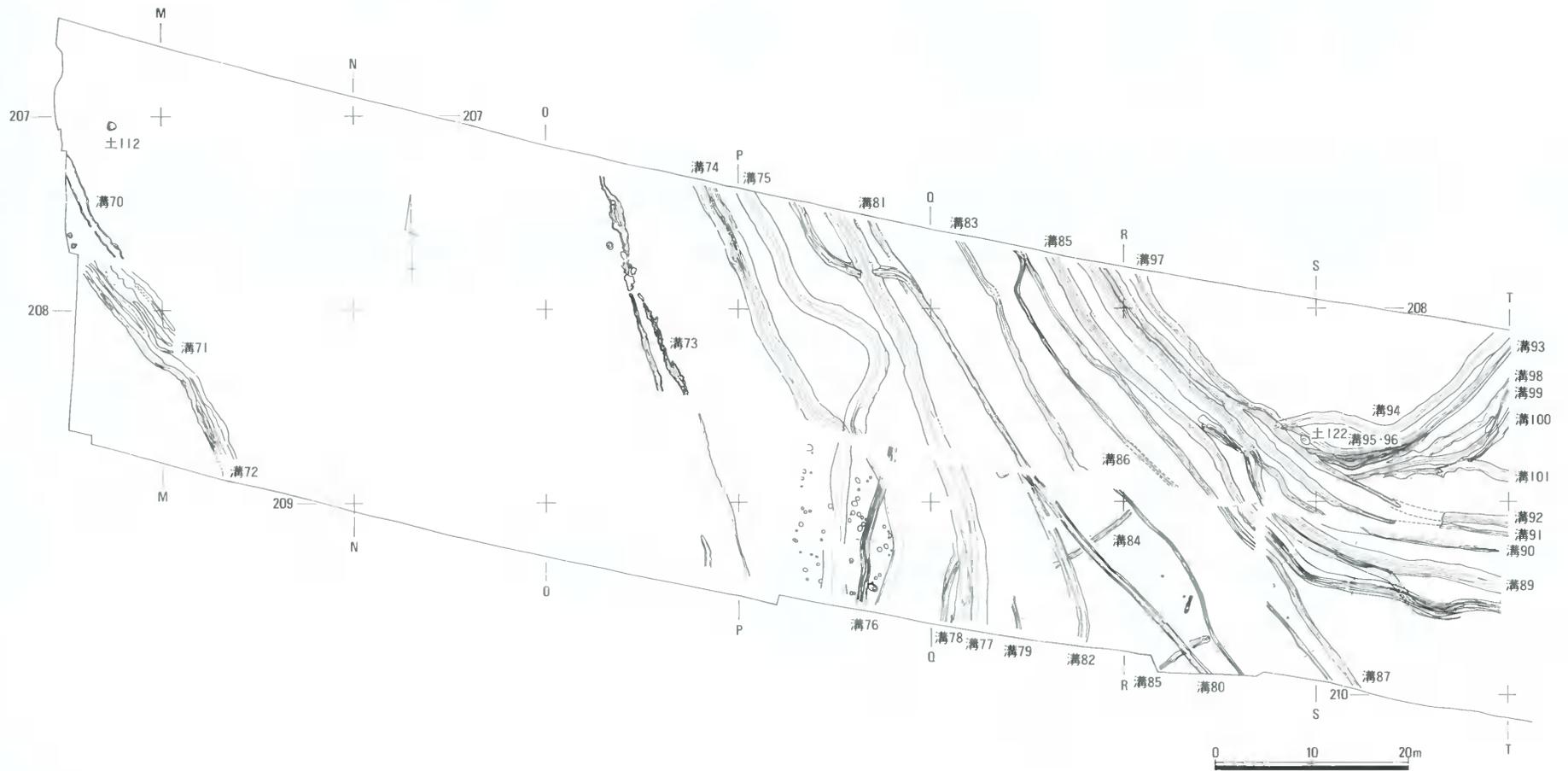


第327図 池状遺構2 出土遺物

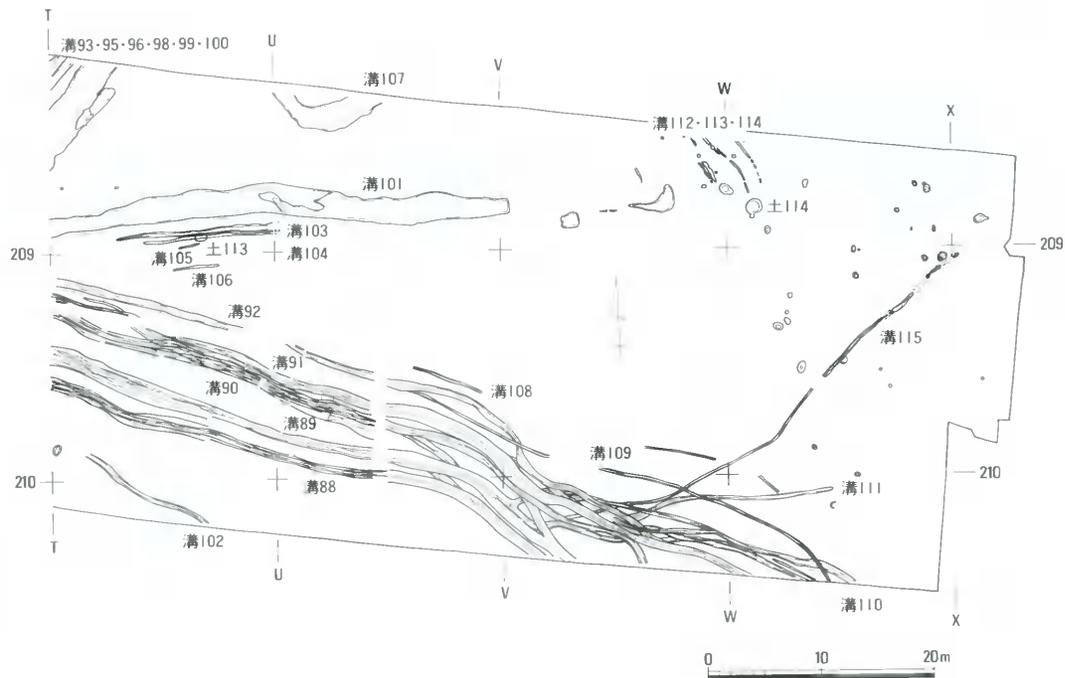
断面では粗砂と粘土層が互層になって徐々に水平堆積をしており、洪水時の埋没は池の北側が主で、杭列によって中央高まり部より南部分はさほど埋没せず、洪水後放棄された後に埋まっていったの

であろう。

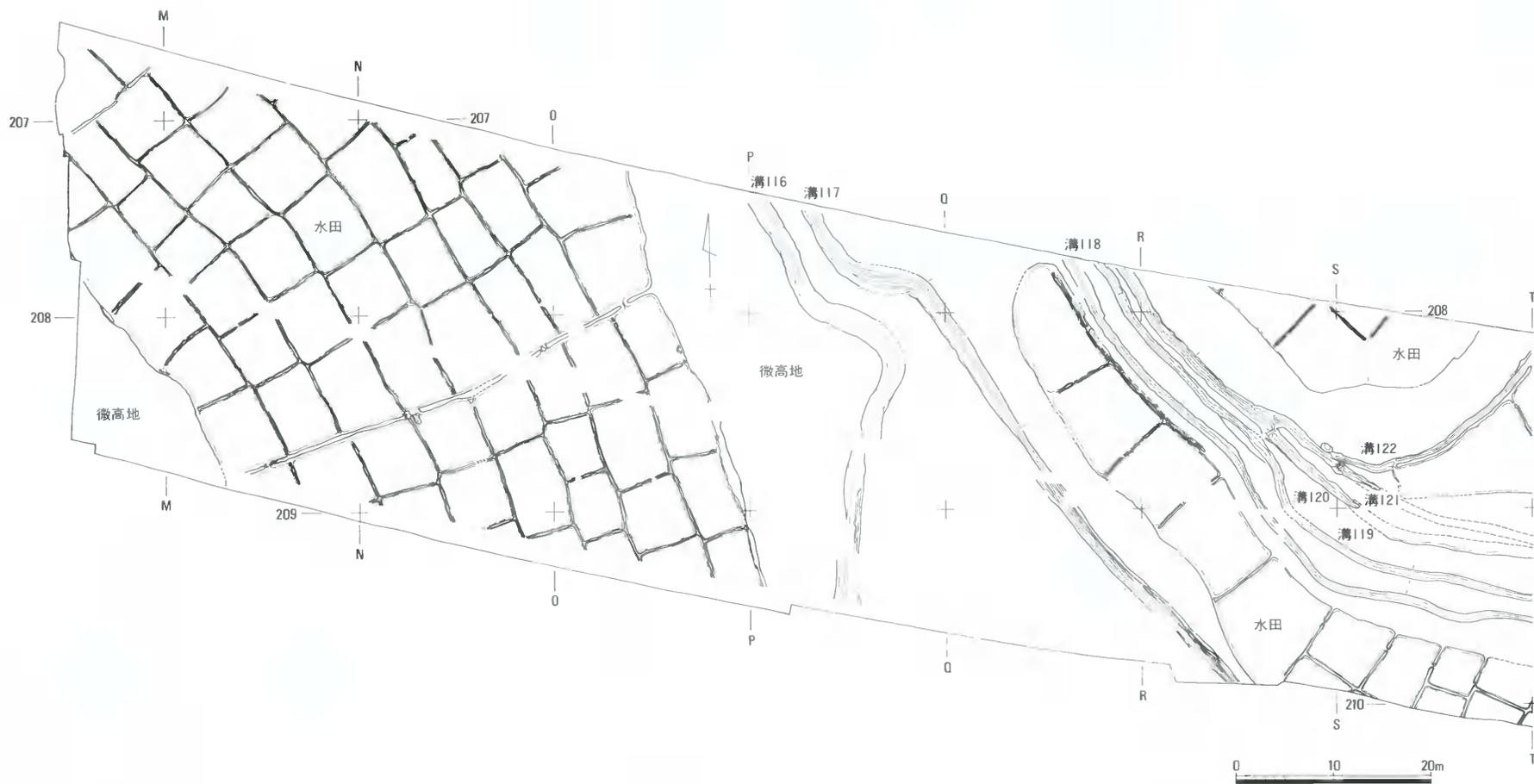
なお杭の使用木材についてはネズミサシ・アベマキ・アラカン・ニガキの使用が鑑定されている。いずれもこの地方で普遍的に自生する雑木である。ネズミサシが針葉樹である他はいずれも落葉樹である。ネズミサシは板状に割って杭として加工しており、他のものは8分の1か



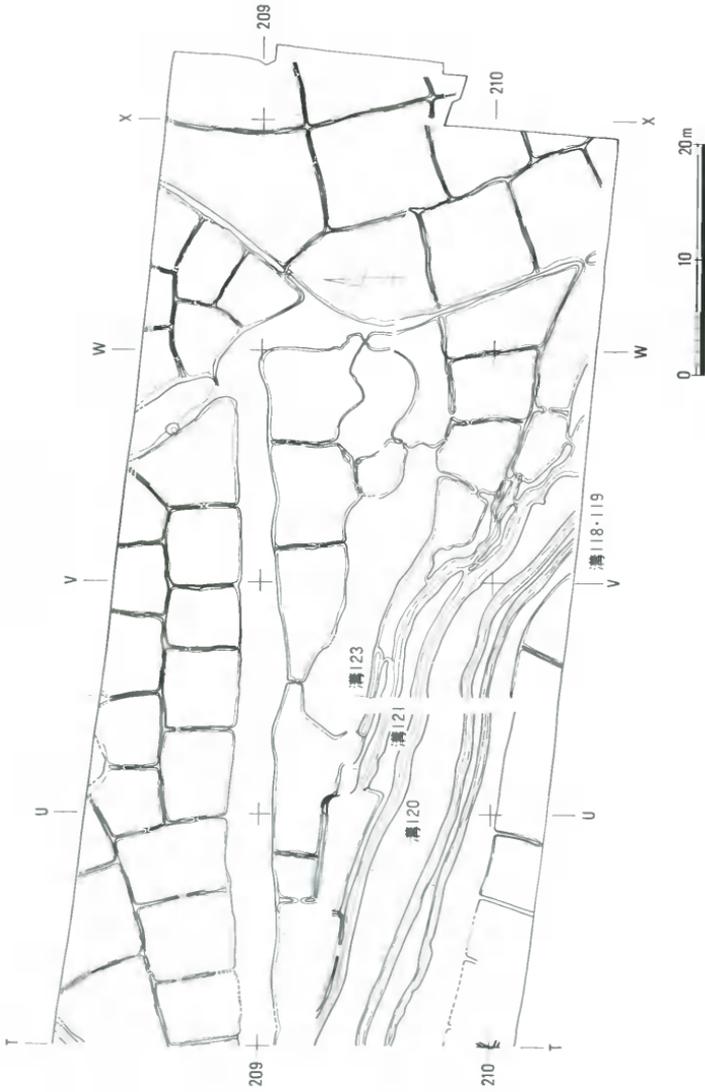
第328図 高縄手B調査区の弥生時代後期遺構全体図(1) (S=1/500)



第329図 高縄手B調査区の弥生時代後期遺構全体図(2) (S=1,500)



第330図 高縄手B調査区の弥生時代後期洪水砂埋没遺構全体図(1) (S=1/500)



第331図 高縄手日調査区の弥生時代後期洪水砂埋没遺構全体図(2) (S=1/500)

ら4分の1に蜜柑割りをして先を加工してあり、樹種によって加工法を使い分けている。

池の底面より土器、サヌカイトの打製石包丁、サヌカイト材が出土したが量的には少ない。土器の示す時期は百・中・Ⅲである。(阿部)

## 5. 弥生時代後期の遺構・遺物

### (1) 水田

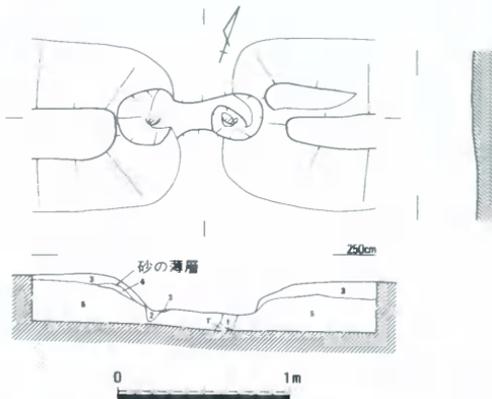
#### 旧河道の水田 (第330～340図、図版62～65)

L～O区の旧河道部分では弥生時代後期の水田が全面にわたり展開している。旧河道の幅は約50mあり、北西から南へ向かって緩やかに湾曲している。調査区の北端では旧河道の東岸が少し東へ振り、河道幅がやや広がる気配を見せている。

水田は大畦と小畦によってかなり規則的に区画されている。大畦は40mの距離をおいて2本検出された。旧河道をはほぼ直線的に横断している。小畦は、兩岸と平行する方向のものはおおむね連続して伸びているが、河道を横断する方向のものはかなり不連続で、ジグザグしている。これは水田を区画する際に、西岸に直交するように大畦を設けたために大区画が扇形になり、次に兩岸と平行する小畦で区画していった時に、東岸側の区画が広くなりすぎたために半割した結果生じたと考えられる。このことは、水田の面積について、ある一定の基準があったことを示している。ちなみに、もっとも広い区画は11m×6mあり、狭いものは5m×5mしかなく、面積比は2.6：1となる。また、大畦を挟んで、兩岸と平行する方向の小畦が食い違っ

ていることも先の推定の根拠となる。特に北側の大畦では大きな違いが認められる。

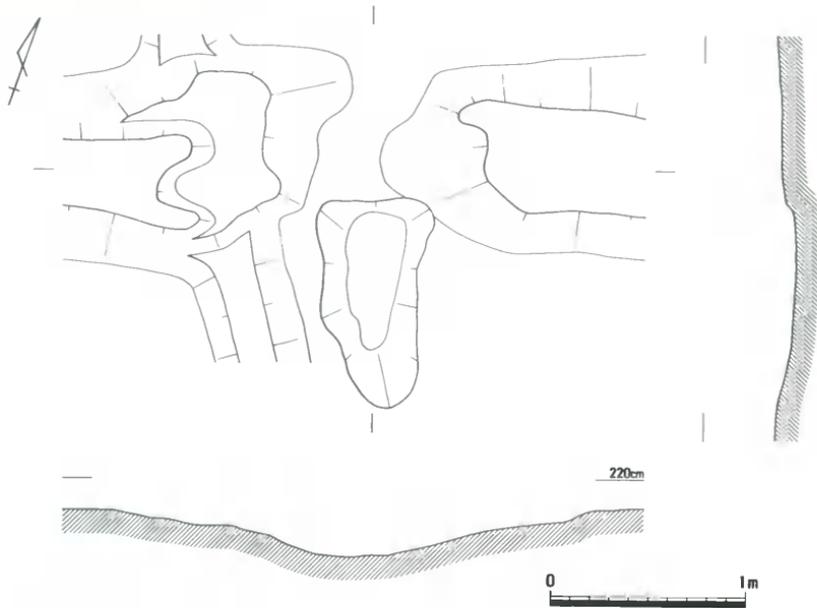
水田は旧河道部上にあるため、調査時では、兩岸側の水田区画と中央部の水田区画との田面の高さには約30～40cmの差があった。この水田は兩岸と平行する小畦によ



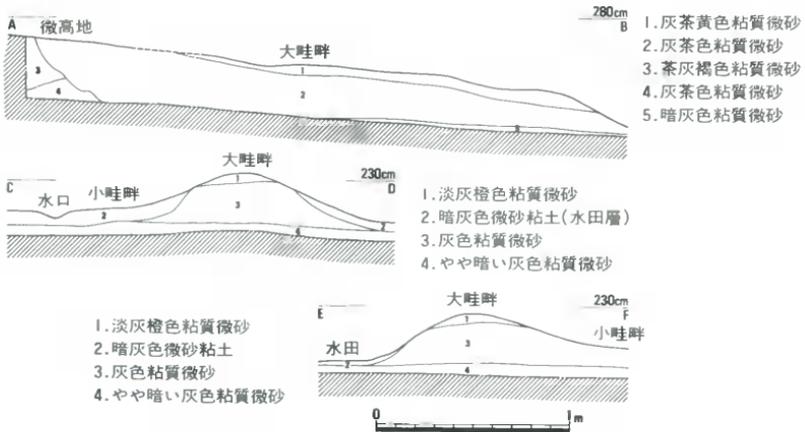
- |                |                        |
|----------------|------------------------|
| 1. 灰色粘土混淡灰褐色砂  | 3. 灰色粘土(砂の小ブロック・薄層を含む) |
| 1. 暗灰色粘土(含炭)   | 4. 暗灰色粘土               |
| 2. 淡灰褐色砂斑暗灰色粘土 | 5. 暗灰色粘土               |

第332図 弥生時代後期水田(旧河道)大畦水口(1)

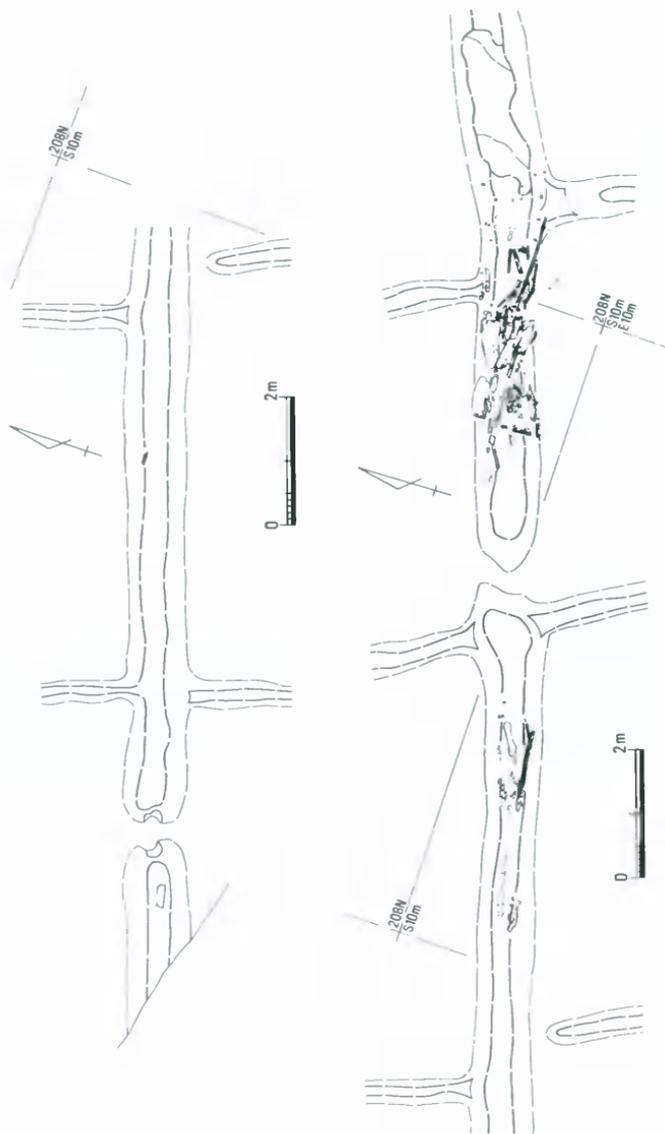
て幅4.5～6mの8段に区画されているため、単純に計算すれば1段で



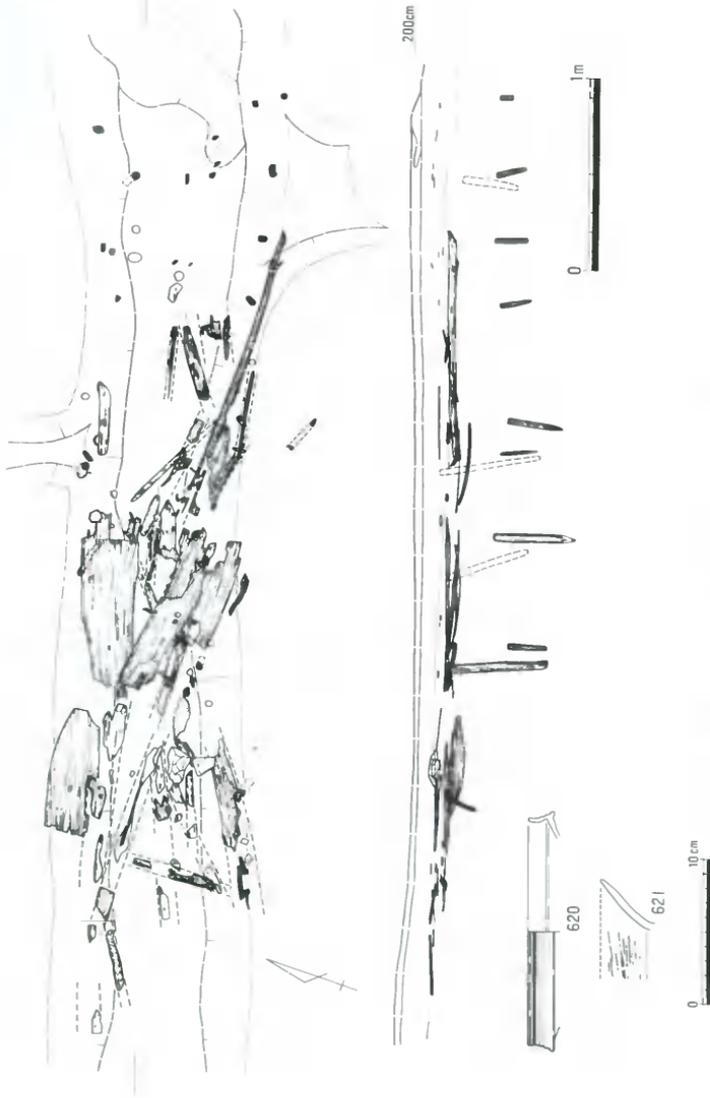
第333図 弥生時代後期水田(旧河道) 大畦水口(2)



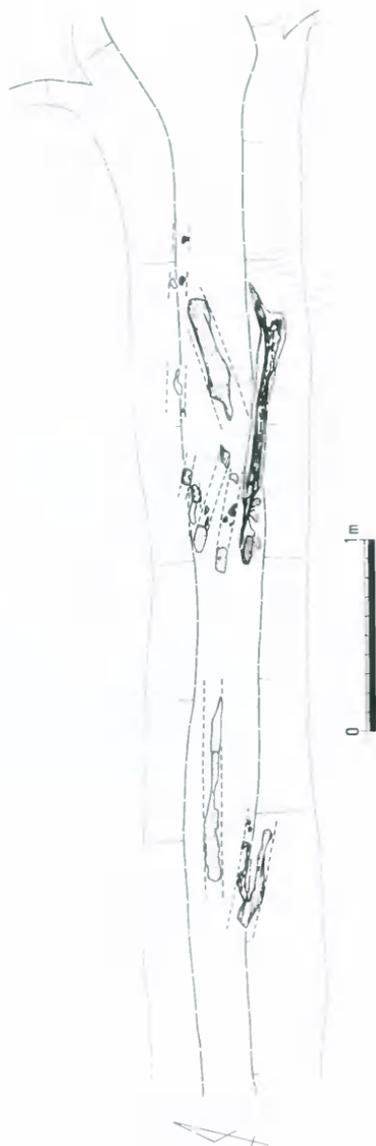
第334図 207-Oの大畦断面図(上は縦断、中・下は横断)



第335図 弥生時代後期水田(旧河道) 大柱下木質杭残存状態(1) (S=1/90)



第336図 弥生時代後期水田(旧河道)大畦下木質・杭残存状態(2)・出土遺物

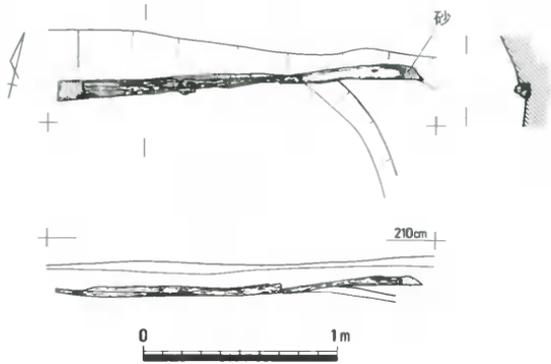


第337図 弥生時代後期水田(旧河道)大畦下木質・杭残存状態(3)

7.5~10cmの高度差が生じることになる。しかし、実際には、兩岸側の水田区画と、それに隣接する1段内側の水田区画との間で、すでに20~30cmの高度差が生じている。ただ、これについては、その後の長年月にわたる堆積層の土圧による旧河道部の陥没を考慮する必要がある。小畦は幅35~45cmで、高さは5~9cmを測る。小畦の高さも土圧による収縮を受けていると推測されるが、先の段差の計算値に近似していることは注意される。おそらく水田経営時には、小畦の高さで1面の水田に水をまんべんなく張ることができたと考えられる。これは、横田調査区の旧河道上にある弥生時代後期の水田でも確認されたことである。

この水田では水口が少ないことも、横田調査区とまた同様に注意される。とくに、兩岸と平行する小畦を切る水口はほとんどみられず、多くは、微高地端に取り付く小畦の先端部分と、広くなりすぎて分割された区画間の小畦に集中している。このことは、水田の灌漑方法が上段から畦を越えて下段に水を落としていく方法によっていたことを示している。そして、その上段の水は、北西方向から小畦と微高地端との間に設けられていた水口を通して、南東から南へ順次流れて行ったものと考えられる。こう考える上で注目されるのは、208M区から207O区にわたる大畦に設けられた3ヶ所の水口である。2ヶ所の水口はもっとも上段の水田区画内にあり、1ヶ所の水口はもっとも下段の水田区画内に位置している。前者は上段を流れる水を通すためであり、後者は下段まで落ちた水をまた南東から南へ流すためである。上段の水口のうち

西側のものでは、第332図にあるように水口の両側に杭をうったような痕跡が認められ、流水の調整に樋として板をたてていたことが想像される。また下段の水口では、水口のすぐ南側で長さ108cm、幅61cm、深さ9cmの凹部（第333図）が確認され、水口を出る流水によって抉られた痕跡の可能性が強く、流量や流速の大きかったことが推測される。



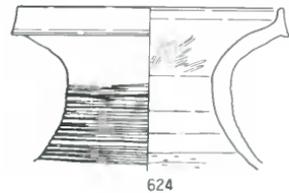
第338図 弥生時代後期水田(旧河道)大畦横木検出状況

今回のこの水田の調査で得られた新事実として大畦に関するものがある。大畦は幅100cm、高さ16～25cmあり、第332図や第334図で観察されたように、2層ないし3層の土からなり、その境には砂の薄層がみられたりもする。また、小畦や水田層とは分離することが可能である（第334図）。これらの事実は前述の横田調査区の弥生時代後期の水田や『百間川原尾島遺跡2』でも報告されているが、大畦が毎年作られるのではなく、ある期間修復を加えられながらも存続していたことを示している。これに関して、今回の調査において大畦の下端から横木が検出され、また大畦の下底から板材や枝材、それに杭列が出土したという新事実が加わった。

第338図に示したように、横木は前述の下段の水口から少し東へよった小畦との連結部分で発見された。長さ170cm、直径8cmの木がちょうど大畦の下端に沿うように出土し、一部は小畦に載っていた。木には節の突起やねじれがあり、周辺に腐食部分を示す砂のかたまりがあり、おそらくは樹皮のついたままであったと考えられる。横木を固定するような杭は検出面では確認できなかったが、かなり下



第339図 弥生時代後期水田層出土遺物



第340図 弥生時代後期洪水砂層出土遺物



第341図 207・208-Q水田と溝118～120断面図 (S=1/80)

方から後述する杭列の検出があり、大畦の崩壊を防ぐための施設の一部である可能性が強い。横木の材質はアカガン亜属である。

大畦を水田面まで除去すると、板材や木の枝が出土しだした(第335図)。また、杭の頭や、杭が腐食した痕跡と思われる空洞も周辺からみつき、なかにはその空洞に砂がつまったものもいくらか認められた。とくに、下段の水口を挟んだ両側部分に集中していたため、前述のように、この部分でかなりの流水があるので、大畦の流失を防止するためにこの部分のみに設けられたものかと考えたが、他の部分でもごくわずかに木質の残存が確認されたため、下段の水口付近は低いために地下水位内には入り、保存状況が悪かったものと判断された。第336図はもっとも保存状態の良い部分を図示したものである。これを見ると板材が目立つが、その間には丸木も多くみられ、枝のついたものや樹皮の残るものもあった。また、炭化した材も所々に散見された。板材の幅はもっとも広いもので29cmを測り、丸木は直径4～6cmのものが多く、長さでは125cmのものがみられた。さらに、礫や土器片も同じレベルで何点かが出土し、土器では百・後・N期の甕の口縁部片が認められた。これらの板材や丸木は10cm程の巾でほぼ同じ高さに位置していて、その高さは水田面と等しい。板材や丸木の方向をみると、おおまかには大畦の方向と等しいが、きわめて不規則で、適当に敷き並べられたようである。これらのことから考えると、水田の造成にあたっては、旧河道部を平坦にして田面を整え、大畦を設定する部分に板材や丸木を敷き並べて基

礎固めをし、その上に粘土を盛って大畦を造ったようである。したがって、これらの板材や丸木は大畦が沈んだり、ズレたり、変形しないために置かれたものである。このような状況はすでに、『百間川原尾島遺跡2』の三ノ坪調査区の弥生時代後期の水田について、「大畦畔、小畦畔の下位に黒色有機土が確認されており、下部に板材、草木等を敷いた痕跡とも考えられる。」という指摘があり、弥生時代後期水田のかなり一般的な状況である可能性が高い。

板材や丸木の間を精査していると杭頭がいくらか検出された。このため、周辺をさらに掘り下げると数本の杭が新たに発見され、とくに、大畦の南辺側では30~40cmの間隔で6本が直線的に並んでいるのが確認された。これらの杭はいずれも大畦の中央にはなく、縁辺に位置していた。杭の太さは直径3~4cmで、長さは50cm程度はあったと推測される。これらの杭は、位置や長さから考えると、敷き並べられた板材や丸木が動かないように固定したり、大畦の下端に置かれた横木を支えたりするためのものであったとみられる。

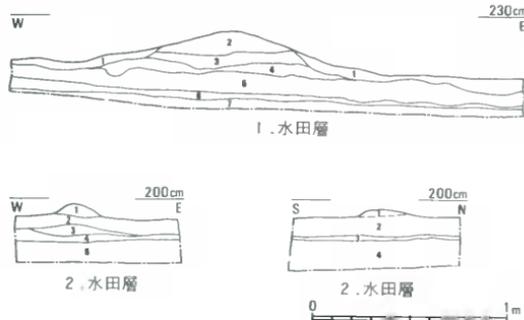
以上の板材や丸木・杭のいくらかは材質鑑定を受けていて、その結果によると、板材はクスノキ、丸木にはマツ属・アカガシ亜属・コナラ節があり、杭はコナラ節・ヒサカキ・モッコク・クスギ節である。

水田層から出土した土器を2点図示している(第339図)。この土器の年代は百・後・ⅡまたはⅢと考えられるが、先の板材や丸木の集積部分からは百・後・Ⅳの土器片が出土しているため、この水田の時期は後者を中心にあったと考えられる。(岡本)

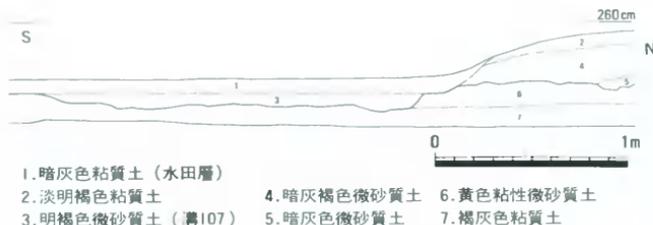
#### 微高地縁辺の水田(第341~346図、図版65~68)

この調査区のQ区~X区には、微高地あるいは島状高まりの周辺に、厚さ10~40cmの黄色洪水砂に覆われて廃絶した水田の広がりが見出された。水田区画のまとまりは、この調査区の中では比較的複雑に展開し、立地あるいは地形利用の仕方であれば、以下の6つにわけられる。

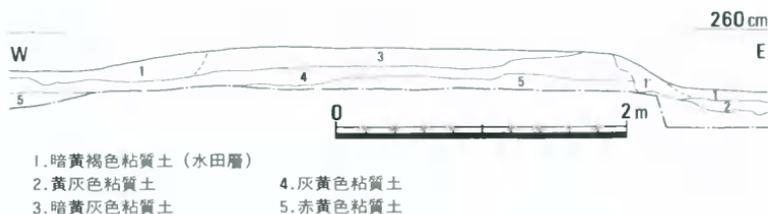
- ① 微高地の一部に低位部から入り込んだ、谷状の窪みの頭部に展開するもので、207Q区から210T・U区に検出された水田である。水田区画は、微高地に挟まれた部分の5区画が約55~77mと比較的広いのに対し、それより南東の部分は約15~35mと小区画を示す。なお上端の水田に直接注ぎ込む溝は検出されておらず、これらの水田には東側の微高地端部に沿う溝88から



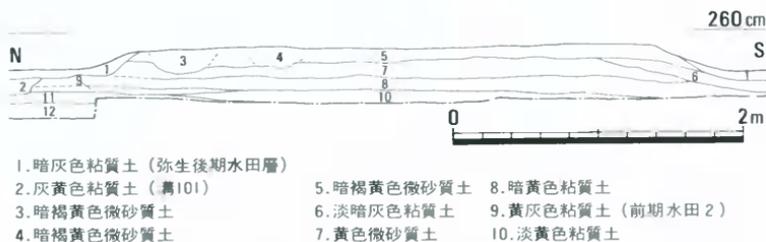
第342図 大畦・畦断面



第343図 溝107 および鳥状高まり断面



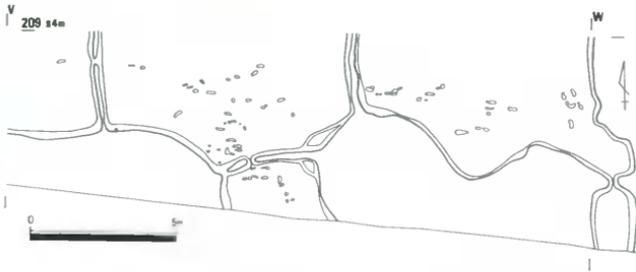
第344図 鳥状高まり断面 (S=1/40)



第345図 鳥状高まり南北断面 (S=1/40)

掛け流して配水されていたと思われる。

- ② 微高地上の窪み部を利用して開田されたもので、207～8 P～S区に検出された水田5区画分(海抜2.6m)である。この水田域の大半は調査区外に広がりをもつと思われ、水田区画の特徴はもう一つははっきりしない。①の水田面より約10cm高く、乾田の様相を呈している。
- ③ 微高地と鳥状高まりに挟まれて、208S～Vに検出されたもので、17区画の水田からなる。上端の水田(海抜2.34)には溝122からの取水口が検出されている。また、この区画の



第346図 微高地縁辺部水田の足跡状痕跡 (S=1/200)

水田面の標高は、②の水田区画より30cm以上低い。水田の形状は、方形または長方形で比較的整然としているが、島状高まりに区画される端部では、台形または五角形を呈するものもある。田面一区画の面積は約30～85㎡であるが、平均的には40㎡前後が多い。

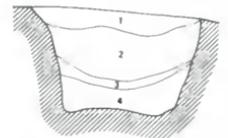
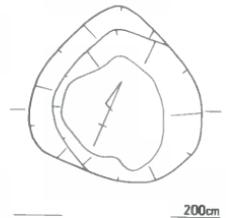
- ④ 島状高まりの間に展開する水田で、209・210T～W区に検出された。田面は16区画を数えるが、溝の両側を拡張した区画があるなど、その形状は不整形のものが多い。また、この区画では用水路（溝120、121、123）から田面への配水の関係が捉えられている。基本的には、溝121が209T区で水田に取水され、ほぼこの区画全域に配水される仕組みになっているが、209V区では溝120と2ヶ所で合流させるなど、配水調節ができる機能をもたせている。

- ⑤ 微高地端部の島状高まりと大畦畔に囲まれ、208・209V・W区に検出された6区画の水田からなる。これらは、地形に規制されて田面の形状が不整形を呈している。③の区画とは15cm以上のレベル差があり、西に接する島状高まりの一部に、③から水が流下したような窪んだ痕跡が認められるが、常時水口の機能があったとは考えられない。

- ⑥ 大畦畔と島状高まりの一部で区画され、東側の低位部に広がる水田である。208・210W・Xで検出されている。この区画の水田面の高さは、④の区画の水田より約20cm、⑤より30cm近くも低い。田面一区画の面積は60～100㎡前後と比較的広い。この区画への配水は、大畦畔の2ヶ所にある水口が機能している。

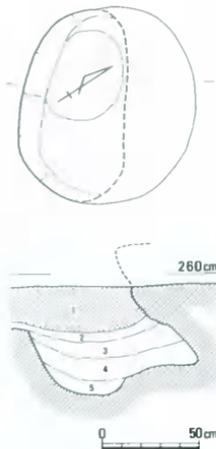
また、209V区の水田面の一部に足跡状の痕跡（約60ヶ所）を検出した（第346図）が、20数cmの長さの痕跡が多い。

（柳瀬・浅倉）



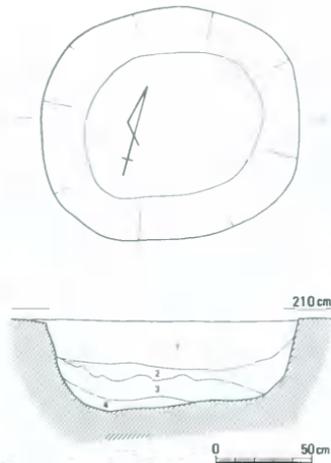
1. 淡青灰色粘土
2. 暗灰褐色粘土
3. 灰黒色粘土
4. 淡暗灰色粘土(炭含む)

第347図 土壌111



1. 洪水砂
2. 暗灰色粘質土(炭粒含)
3. 茶灰色粘質土
4. 青灰褐色粘土
5. 淡青灰褐色粘土

第348図 土壇112



1. 灰色微砂質土
2. 黒褐色粘質土
3. 灰色粘性微砂質土(下面から種子出土)
4. 黒灰色粘質土

第349図 土壇114

(2) 土壇

土壇111 (第347図)

207L区の北端東寄りに検出された土壇である。平面形は径87cm前後の円形を呈し、深さは50cmを測る。底は中央が少し高くなっており、壁は垂直に近い状態で立上る。遺物は土器がわずかに出土した。時期は後期と考えられる。(平井勝)

土壇112 (第348図)

208Q区の南西隅に検出された土壇である。溝121に併設し、溝122が分岐する地点のやや上流に位置する。平面形は長さ100cm、幅50cmの楕円形を呈し、深さは55cmを測る。また、底部東側は袋状に広がり、最大幅75cmを測る。

出土遺物はなく、その具体的な性格は不明であるが、溝121との位置関係や埋積状況から、溝121と同時代前後する時期に掘削されて機能し、洪水時にはその機能を停止していたものと考えられる。(高田)

土壌113

209Tの島状高まりを若干掘り下げて検出した長円形の土壌で、溝103、104に切られている。長径105cmを測り、深さ2cmと浅く、埋土は暗灰色土である。遺物は出土していないが、土層関係から弥生後期と考えられる。(宇垣)

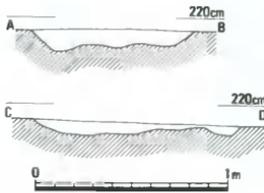
土壌114 (第349図)

微高地東縁の208Wにおいて検出した、径130cm、深さ50cmの大形の土壌である。3層の下面からはウリないしヒョウタンの種子が多量に出土した。土器の出土量は少ないが、後期と考えられる。この土壌1の周辺および東側の低位部においては小規模なピットが散在するが、建物等にまとまるものではない。(宇垣)

(3) 溝

溝70 (第350図)

207L区の微高地端部にそって検出された溝である。溝は北西から南東方向に流走し、南東部は途切れる。幅は0.7~1m前後で、深さは10cm前後と浅い。底は凹凸が著しい。埋土は灰褐色粘質土である。遺物は土器と石器が出土している。土器はいずれも細片で、中期後半のものも混在している。石器は石包丁が1点出土している。時期は後期と考えられる。(平井勝)



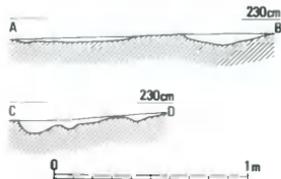
第350図 溝70



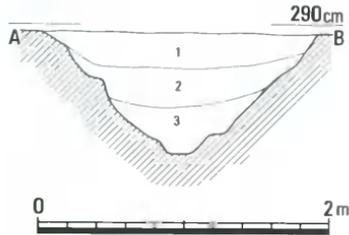
第351図 溝71出土遺物

溝71・72 (第351図)

前述の溝70と同様の溝で、やはり微高地の縁辺と平行している。207L区から208M区にかけて位置する。検出した部分の半分以上で各々2条の溝に枝分かれしているため、それぞれ2条

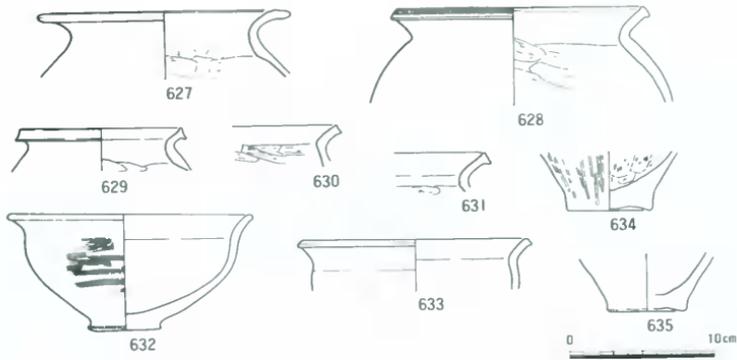


第352図 溝73



1. 茶灰色砂質土 2. 淡灰茶色砂質土  
3. 灰色微砂質 粘土

第353図 溝74



第354図 溝74出土遺物

の溝が部分的に重複しているとみることもできる。1条の部分では、溝71が幅135cm、溝72は115cmあり、深さは5cmと9cmできわめて浅い。溝の肩部の線は不規則に屈曲し、溝の低部も凹凸がはげしく、溝としての機能は考えにくい。これらの溝も、弥生時代後期水田の微高地縁辺付近で、水田層の下で検出された開墾痕跡の溝状遺構と同様のものであろう。水田層と同じ埋土の中から百・後・Ⅱの土器片が出土している。(岡本)

溝73 (第352図)

208・209〇区の微高地端部にそって検出された溝である。北西から南東方向に流走する溝で、幅は一定せず、南側では2条に分かれている。深さも6cm前後と浅く、底も凹凸がある。埋土は灰褐色粘質土である。遺物は土器が出土している。土器はいずれも細片で、縄文晩期・中期後半・後期前半に属するものが混在している。溝の時期は後期と考えられる。(平井勝)

溝74 (第353・354図)

調査区のはぼ中央付近に位置し、207〇区から209P区の間で検出した。北側部分は北西から南東方向に、南側部分は東に湾曲しながら南方向に流走している。断面形態はV字形を呈する。堆積土はいずれも凸レンズ状の堆積状況を呈している。

図示できる遺物は、627から635までの土器が出土している。時期は、百・後・Ⅱに属する。

(占谷野)

溝75 (第355～357図、図版72)

207～9P区において検出された、微高地中央部を流走する溝である。207P区では北西から南東方向に流れ、208P区で逆「く」の字状に大きく湾曲した後、南流する。規模は、幅185～285cm、深さ80cm前後を測る。溝の上部には、後期末の洪水砂で埋没した溝116がほぼ同一流路で存在していた。

時期は、出土遺物から百・後・Ⅰと考えられる。  
(高田)

溝76 (第358図)

208・209P区で検出されたほぼ南北に流走する溝である。幅は90cm前後、深さは20cm前後を測る。溝内は2段に掘り込まれており、2段目は幅25cm、深さ5cmである。埋土は黄褐灰色土である。遺物は土器が少量と石器が出土している。石器は石鎌が1点である。時期は土器の細片と検出面から後期と考えられる。  
(平井勝)

溝77 (第355・359・360図、図版69・72)

207～9P・Q区において検出され、微高地上を北西から南東に向かって直線的に流走する溝である。溝80とは207P区で交差している。溝の規模は、幅170～335cm、深さ100cm前後を測り、断面形状はV字形を呈する。レンズ状に堆積した埋土の最上層には、後期末の洪水砂が浅く認められるが、溝としての機能は考え難い。

出土遺物は、概ね百・後・Ⅰの時期を示しているが、若干百・後・Ⅱに属するものも含まれる。また、埋土の上層から出土した655・658は、洪水砂の時期のものであり、混入の可能性が高い。

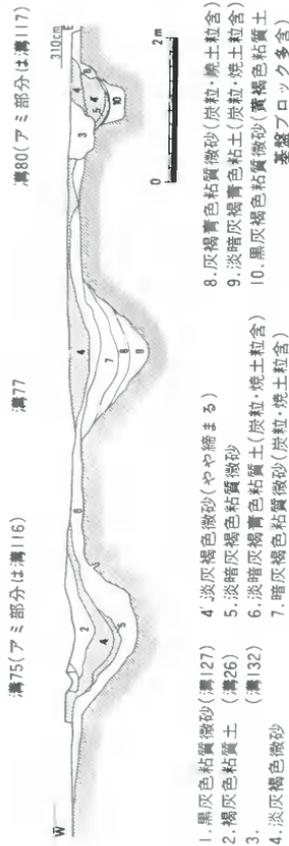
以上により溝は、百・後・Ⅰ・Ⅱの時期に機能したものと考えられる。  
(高田)

溝78 (第359図)

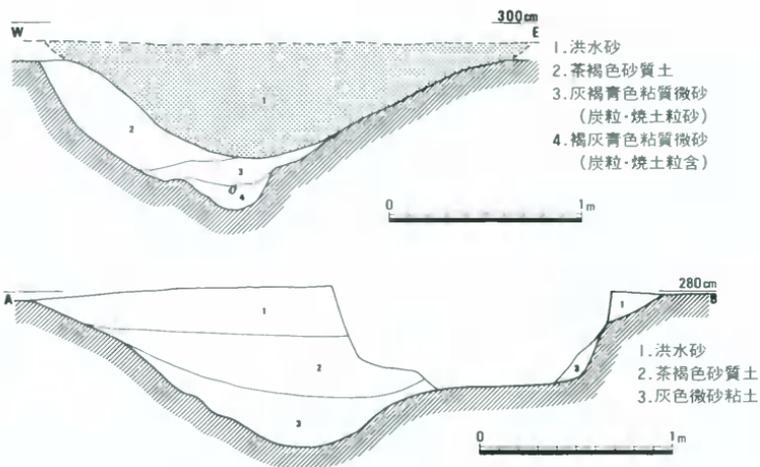
209Q区の西端で検出されたほぼ南北に流走する溝である。北端は溝77で切られている。幅は25～40cmで、深さは10cmを測る。遺物は石鎌が1点出土した。時期は検出面および埋土から後期と考えられる。  
(平井勝)

溝79 (第361図)

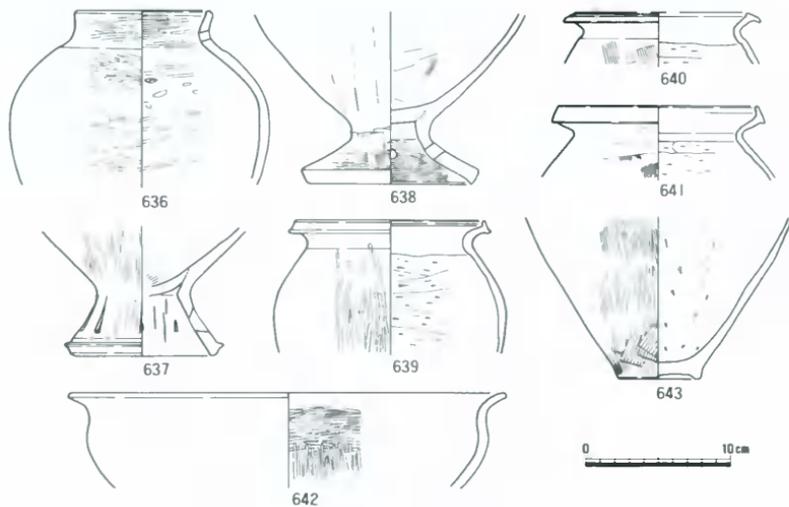
209Q区の中央南寄り検出された南北方向の溝である。幅は30cm、深さ5cmを測る。埋土は黄茶灰色土である。遺物は出土していないが、検出面から後期と考えられる。  
(平井勝)



第355図 溝75・77・80 (S=1/80)



第356図 溝75



第357図 溝75出土遺物

## 溝80 (第362・363図)

溝74の東側に位置し、207P区から209R区の間で検出した。溝117と重複しており上部は削平されている。北側部分で西から東に向かってゆるやかにS字状に屈曲した後、北西から南東方向に流走している。断面形は逆台形状を呈する。検出時の規模は、幅40cmから45cm、深さ20cmである。

溝80は溝81・84・85を切り、溝113に切られている。この切り合い関係と出土した土器から、時期は弥生時代後期と考えられる。(古谷野)

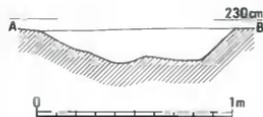
## 溝81

207P区の南東隅において検出された溝で、溝77に平行する。208Q区では溝80と同時に掘り上げたため未確認だが、その下流において溝82と同一の溝となる可能性がある。検出時の規模は、長さ700cm、幅55cm、深さ10cmを測る。埋土は淡黄灰褐色質土で、出土遺物はない。

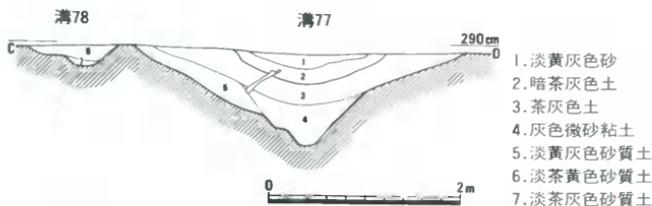
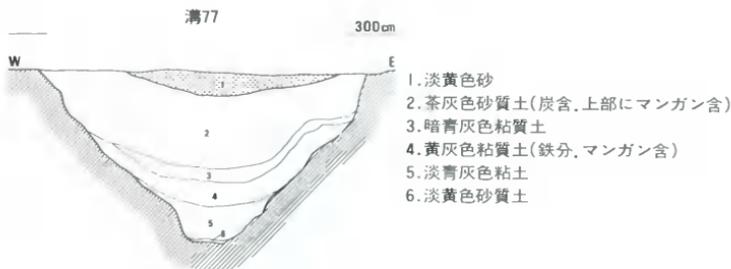
時期は、検出状況等から後期と考えられる。(高田)

## 溝82 (図版69)

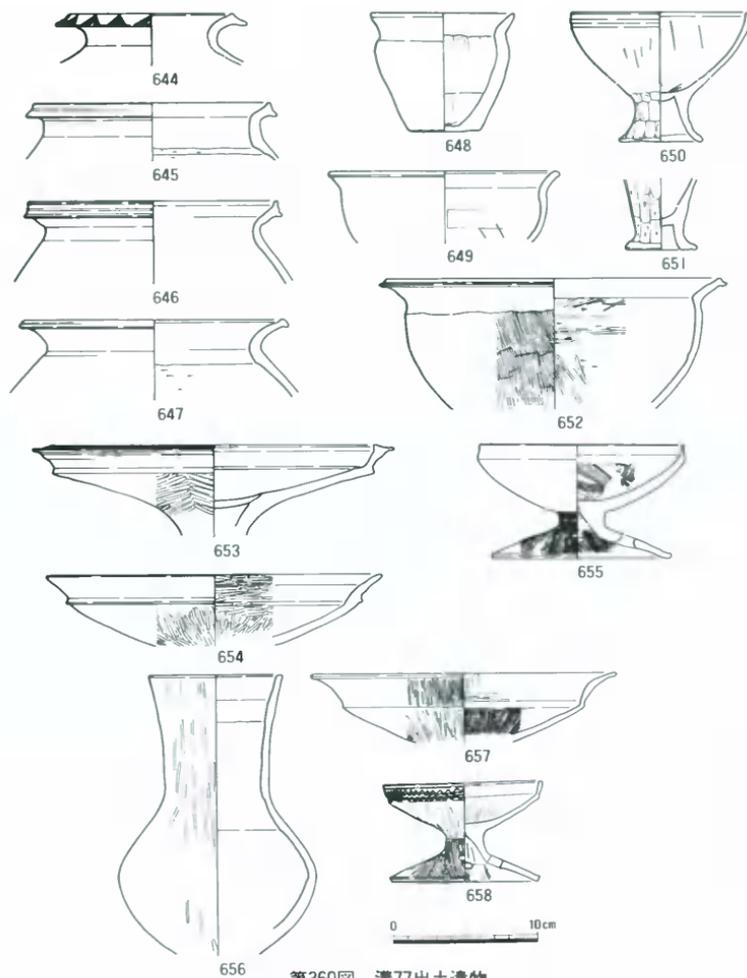
208・209Q区をほぼ南北に流走する溝である。北端は溝80・88に重なりあって切られる。しかし、途中は不明である



第358図 溝76

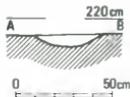


第359図 溝77・78 (S=1/60)

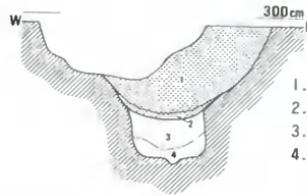


が207P区で溝80・88が強く折れ曲がる場所から検出され、北に直進する溝81につながる可能性が高い。溝の幅は1.2m前後、深さは25cm前後を測る。埋土は黄灰茶色微砂である。

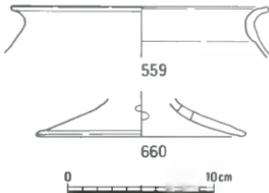
遺物は土器と石器が出土した。土器は少量で、突帯文土器や前期に属するものが多い。石器



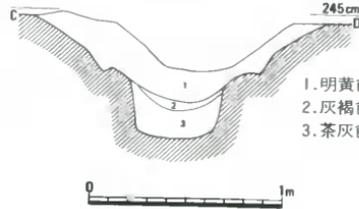
第361図 溝79



1. 淡黄灰色砂
2. 淡黄灰色粘性砂
3. 褐灰色粘質土
4. 灰褐色粘質土

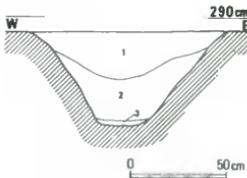


第362図 溝80出土遺物



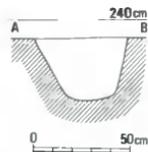
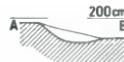
1. 明黄色砂
2. 灰褐色粘土
3. 茶灰色粘土

第363図 溝80・117

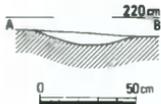


1. 褐灰色粘質土
2. 灰褐色粘質土
3. 灰色粘質土

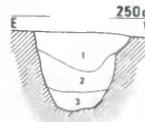
第364図 溝83



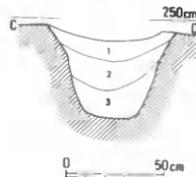
第365図 溝84



第366図 溝85

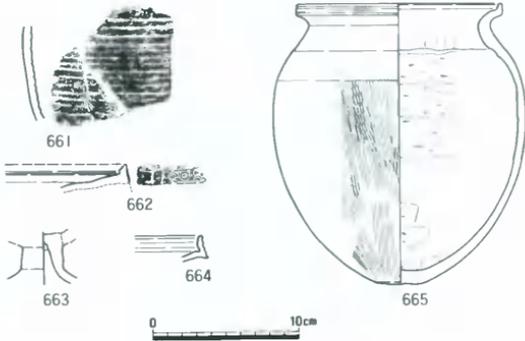
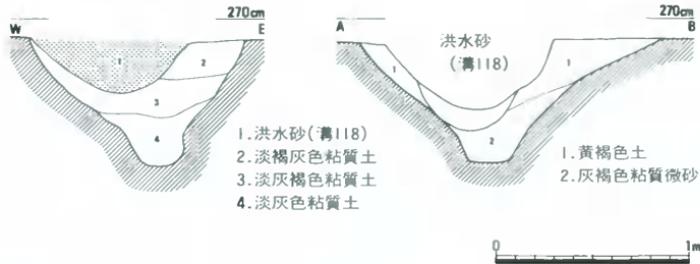


1. 灰褐色土
2. 淡暗灰褐色土
3. 暗灰褐色粘土



1. 暗灰褐色土
2. 灰褐色土
3. 灰青色粘土

第367図 溝87



第368図 溝88・118・溝88出土遺物

は楔形石器が3点ある。溝の時期は検出面から後期と考えられる。(平井勝)

溝83 (第364図)

溝80・117の東側にあり207Q区から209R区の間で検出した。北西から南東方向にやや蛇行しながら流走する。断面形態は浅い皿状を呈する。検出時の規模は、幅25cmから幅35cm、深さ6cmである。

遺物は含まれていないが埋土の状況から、時期は弥生時代後期と考えられる。(古谷野)

溝84 (第365図)

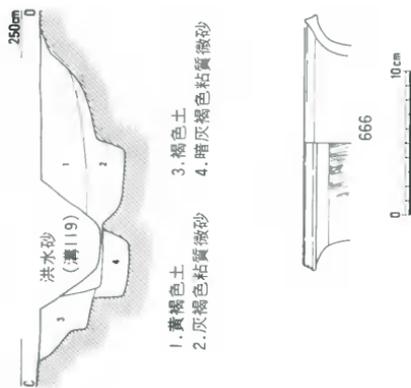
209Q区の北東寄りで検出された北東から南西方向に流走する溝である。溝は北東端を後期の水田によって切れ、南西側も途中を溝80・88や溝82に切られている。幅は40~50cm、深さ30~40cmを測り、断面はU字形を呈する。埋土は淡黄色砂質土である。遺物は土器と石器が出土している。土器は細片が少量で、前期に属するものが多い。石器は石鏃が2点認められる。溝の時期は検出面から後期と考えられる。(平井勝)

溝85 (第366図)

209R区の南端近くで検出された溝である。北東から南西方向に流走する溝で、北東側は幅が66cmと広く、南西側は32cmと狭くなる。深さは5cm前後と浅く、底は丸みをもち壁は緩やかに立上る。埋土は淡黄灰色砂質土である。

遺物は突帯文土器や前期の土器が少量出土している。溝の時期は検出面から後期と考えられる。

(平井勝)

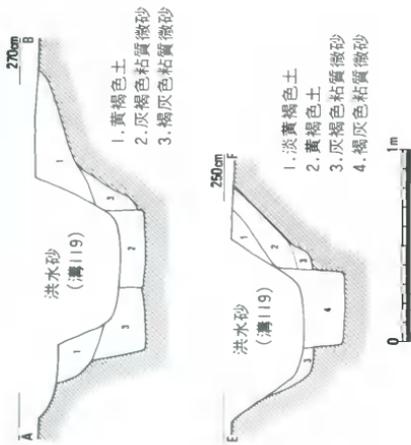


溝86 (図版69)

後期水田耕土の除去後に検出された溝である。207～9Q～S区に位置し、北西から南東方向に流走するが、一部の検出をし得ていない。また、207Q区で溝87との切り合い関係があり、溝87に先出することを確認している。溝の規模は、幅50cm、深さ5cmを測る。埋土は黄茶褐色土で、出土遺物は少量の土器片のみである。

時期は、検出状況等から後期と考えられる。

(高田)



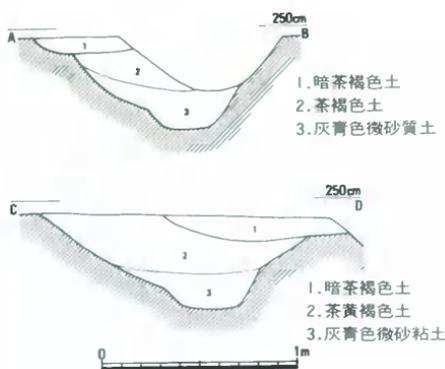
溝87 (第367図、図版69)

溝83の東側にあり207Q区から209S区の間で検出した。北西方向から南東方向に少し蛇行しながら流走する。断面形態は、逆台形状を呈する。規模は最もよく残存している部分で測ると、幅60cmから65cm、深さ45cmである。堆積土は、いずれも凸レンズ状の堆積を示している。遺物は含まれていないが埋土の状況から、時期は弥生時代後期と考えられる。

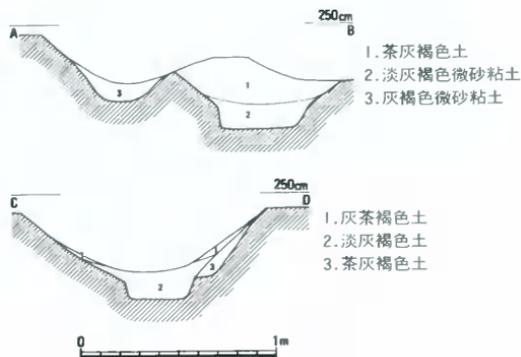
(古谷野)

溝88～92 (第368～373図、図版69・72)

207P南東端部から209R・209Tを経て210Vに至る溝群である。この溝群は3区分して調査



第370図 溝90



第371図 溝91

しており、上流と下流では1本に数えたり、2本として実測したものもある。しかし概ね溝118～123の下層に位置するものである。平均幅14mの細長い微高地上に平行に検出できた。当報告書で扱う部分の溝の長さは最長115m（溝88）、最短7m（溝92）を測る。溝の検出幅は最大80cm、最小10cmを測る。検出の深さは最大40cm、最小10cmを測る。埋積土はほとんど灰色粘土である。上層の溝の埋積土は灰褐色砂質土、下層にある溝は黒色粘土になる傾向がある。時期差を示すようである。出土遺物については、わずか3点しかない。溝88から高杯の脚部、溝89から甕、溝91からは甕がある。これらの土器からこの溝群の時期は弥生後期後半に比定できる。（浅倉）

溝93・97（第374・377図、図版72）

207・8R・S区で検出され、北西から北東方向へ弧を描いて流走する溝である。溝

の規模は、幅110cm、深さ60cmを測り、出土遺物には少量の土器片がある。208S区では南半が後期水田の開田で掘削されており、溝の流走方向と水田の形状が一致する。

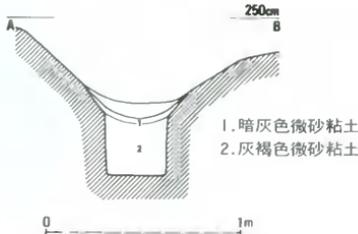
以上の検出状況等から、後期水田の開田直前まで機能した溝と推測される。

なお、溝97は同一の溝である。

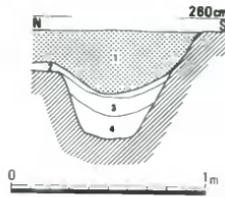
（高田）

溝94（第375図、図版72）

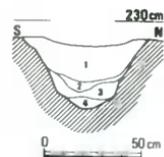
208R・S区で検出された溝で、溝93に平行する。208R区において溝92から分岐するものと考えられるが、埋土等には差異が見られる。よって、溝92先行して埋没し、機能を停止したも



第372図 溝92



1. 洪水砂
2. 暗灰色粘質土
3. 青茶灰色粘土
4. 暗青灰色粘土



1. 灰色粘質土
2. 黒灰色粘質土
3. 淡灰色粘質土
4. 灰色粘性微砂質土

のと推定される。溝の規模は、幅110～150cm、深さ65cmを測り、出土物には少量の土器片がある。(高田)

時期は、後期と考えられる。

溝95 (図版72)

後期水田耕土を除去したのちに検出された溝で、208S区に位置する。規模は、幅60cm、深さ6～8cmを測る。時期は、検出状況等から後期と考えられる。(高田)

溝96 (第376図、図版72)

溝95と同様、後期水田耕土を除去したのちに検出された溝で、溝95に平行する。規模は、幅60cm、深さ10cmを測る。時期は、溝95と同様に後期と考えられる。(高田)

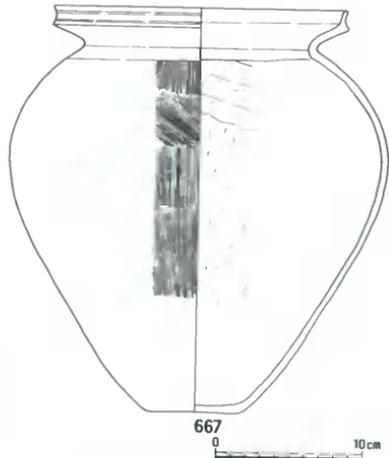
溝98・99・100・101 (第378図、図版72)

後期水田耕土を除去したのちに検出された遺

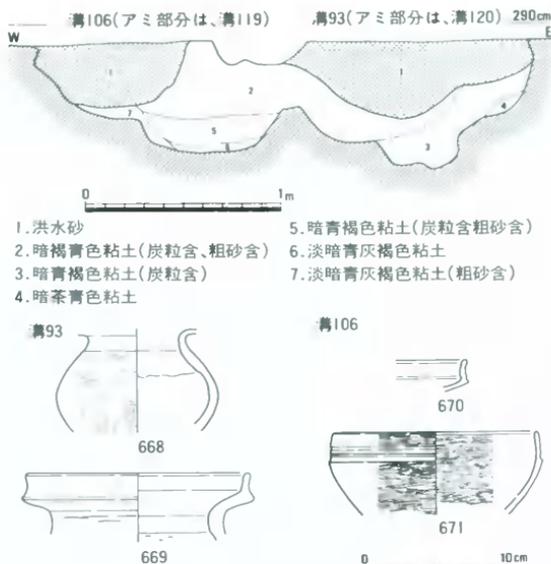
構で、208S・T区に位置する。208S区では底の凹凸の激しい浅い溝状を呈するが、東に向かうにつれて深くなり、208T区では幅310cm、深さ30cmの土壇となる。これは、208S区から東にのびる鳥状高まりに沿って位置することから、鳥状高まりを構築する際の採土壇と考えられる。

出土遺物には、後期の土器片に混じり672の甕がある。これは、多条の篋描き沈線文を施すもので、百・前・Ⅲに属するものである。下層には、208T区以東に展開する前期水田が存在していたことから、本来この水田に伴っていた遺物と考えられる。(高田)

溝102

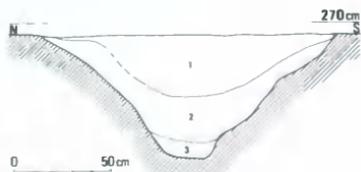


第373図 溝92・出土遺物



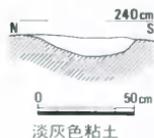
1. 洪水砂
2. 暗褐色粘土(炭粒含、粗砂含)
3. 暗青色粘土(炭粒含)
4. 暗茶青色粘土
5. 暗青褐色粘土(炭粒含粗砂含)
6. 淡暗青灰褐色粘土
7. 淡暗青灰褐色粘土(粗砂含)

第374図 溝93・106出土遺物



1. 淡灰黄褐色砂質土(茶褐色土ブロック含)
2. 淡灰黄色粘質微砂(茶褐色土ブロック含)
3. 淡暗灰黄色粘土(淡灰綠色粘土ブロック含)

第375図 溝94



淡灰色粘土  
第376図 溝96

40cm、深さ5cm前後を測る。埋土は暗灰茶褐色土である。遺物は出土していないが、検出前から後期と考えられる。(平井勝)

溝103・104 (第329図)

209ライン上の東西方向に延びる鳥状高まり中に、それと並行する方向の2本の浅い溝が検

出された。前者は幅35cm、深さ約10cm、後者は幅約20cm、深さ約5cm前後を測る。

遺物は出土していないが、土層的には後期の範疇と思われる。(柳瀬)

溝105・106 (第329図)

溝103・104と同様に、鳥状高まり中に検出された小規模な溝である。溝105は幅約12cm、長さ約2m、溝106は幅約20cm、長さ約4mで、深さはいずれも3～5cmの浅いものである。

遺物は溝105から少量の後期土器片が出土しているのみであるが、土層的には溝103・104と同様に後期と考えてよい。(柳瀬)

溝107 (第329図)

208U区に検出された弧状を呈する幅120～230cm、深さ約15cmの溝である。この溝は、小円形を呈する鳥状高まりの一部の縁辺部に位置し、土層的には後期水田の下層にあたる。埋土は灰黄色の粘質土で、209ライン状の鳥状高まりの北側に沿って検出された溝101と酷似している。

遺物は出土していないが、鳥状高まりの整形過程で生じた窪みの性格が考えられるので水田化された後期の時期の範疇で捉えられる。(柳瀬)

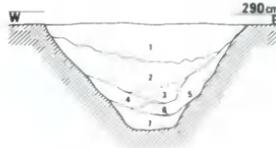
溝108 (第329図)

209R～210Wで断続して西北西から東南東に走行して検出した溝である。総延長34m、最大幅20cm、最大の深さは20cmある。細長い微高地の上から後期水田の下層まで伸びる溝である。黒色粘土で埋設している。土層から遺物は出土していないが、この溝の廃絶時期は百・後・Ⅱか。(浅倉)

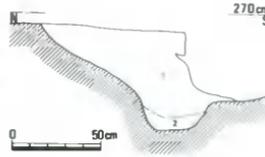
溝109 (第329図)

209R～210Wで断続して西北西から東南東に走行して検出した溝である。溝108と3m離れてほぼ平行関係にある。総延長41m、最大幅20cm、最大の深さ20cmある。細長い微高地の上から後期带状水田の下層まで伸びる溝である。黒色粘土で埋設している。土層から遺物は出土していないが、この溝の廃絶時期は百・後・Ⅱか。(浅倉)

溝110 (第329図)

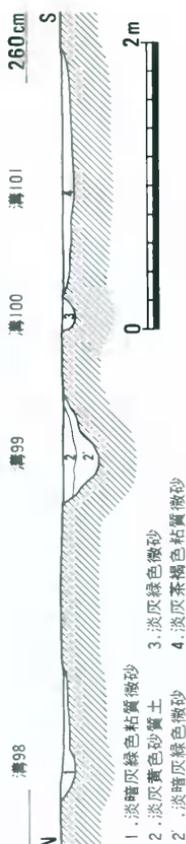


1. 黄茶褐色砂質土(焼土粒含)
2. 黄灰茶褐色砂質土(焼土粒含)
3. 灰褐色砂質土
4. 淡暗灰褐色粘質土
5. 淡暗灰茶褐色砂質土
6. 暗青灰色粘土
7. 暗褐褐色灰色粘土



1. 灰茶褐色砂質土
2. 暗褐色灰色粘土

第377図 溝97



第378図 溝98・99・100・101 (S=1/40)・出土遺物

210V～210Wで西北西から東南東に走行して検出した溝である。溝89から分流して溝91・92・109と交差する。総延長31m、最大幅60cm、最大の深さ40cmある。細長い微高地の上から後期帯状水田の下層まで伸びる溝である。黒色粘土で埋没している。土層から遺物は出土していないが、この溝の廃絶時期は百・後・Ⅱか。(浅倉)

溝111 (第329図)

210Vの東部で東西に走行して検出した溝である。溝92と溝110と交差する。総延長9 m、最大幅40cm、最大の深さ40cmある。後期水田の下層溝である。黒色粘土で埋没している。土層から遺物は出土していないが、この溝の廃絶時期は百・後・Ⅱか。(浅倉)

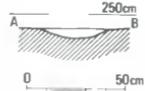
溝112・113・114 (図版70)

208のWライン付近に検出された、溝状の痕跡をとどめる遺構である。いずれも幅15cm前後、深さ5cm程で、208V区の島状高まりの東側縁辺に併行して水田層の下部で検出されている。

(柳瀬)

溝115 (第329図)

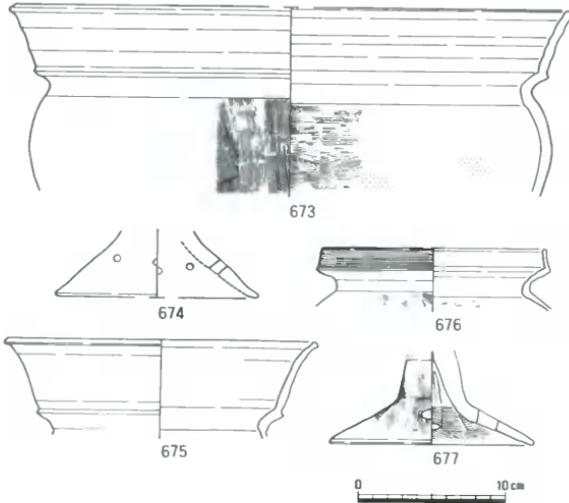
溝86から210Vで分流し、他の溝と交差して東北東方向に伸び、210Wから北東方向に、そして209ラインからはほぼ北方向に伸びる溝である。この付近の溝のなかでは溝69に続いて古相である。総延長40m、最大幅30cm、最大の深さ30cmある。微高地北東の水田に配水する溝である。黒色粘土で埋没している。遺物は出土していないが、この溝の廃絶時期は百・後・I



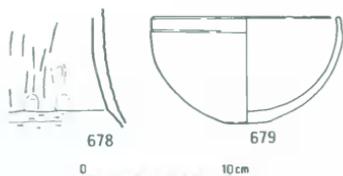
第379図  
溝102



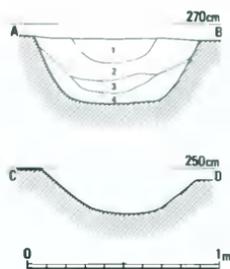
第380図 溝112・113・114 (S=1/60)



第381図 溝116出土遺物

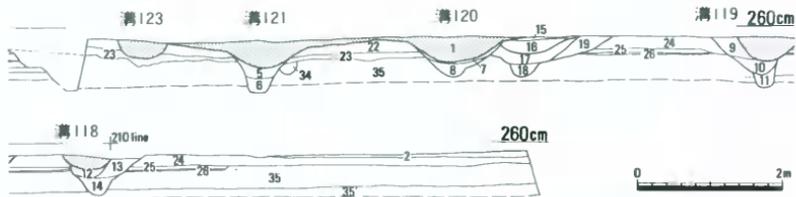


第382図 溝117出土遺物

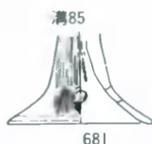
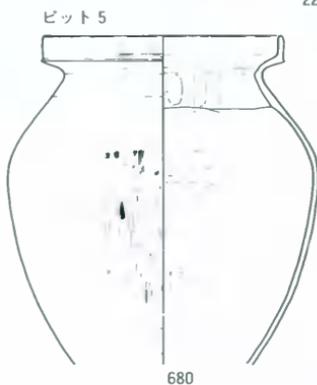


1. 茶褐色砂(洪水砂)
2. 茶灰褐色砂(洪水砂)
3. 淡黄茶色砂(洪水砂)
4. 黄灰色砂(洪水砂)

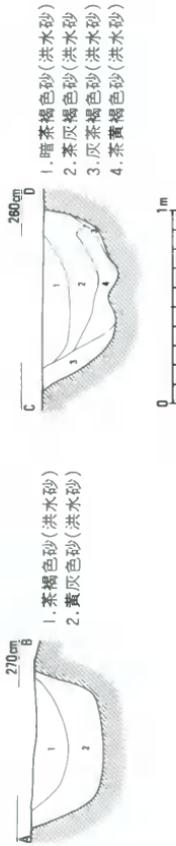
第383図 溝118



1. 灰褐色砂(洪水砂)
2. 茶褐色粘質土
3. 淡茶黄褐色砂質土
4. 黄褐色砂質土
5. 暗灰色粘土(溝89)
6. 灰色粘土(溝89)
7. 暗茶褐色粘質土
8. 灰色粘土(溝88)
9. 灰褐色粘質土(溝86)
10. 灰色粘土(溝86)
11. 暗灰色粘土(溝86)
12. 暗灰色粘土(溝85)
13. 灰褐色粘質土(溝85)
14. 灰色粘土(溝85)
15. 暗茶褐色砂質土
16. 茶褐色砂質土(溝87)
17. 灰褐色粘質土(溝87)
18. 灰色粘土(溝87)
19. 茶黄褐色砂質土(溝87)
20. 茶褐色粘質土
21. 淡茶黄褐色砂質土
22. 黄褐色砂質土
23. 淡茶黄褐色砂質土
24. 黄褐色砂質土
25. 淡灰褐色粘質土(下層水田)
26. 赤黄褐色砂質土
27. 黒色粘土(溝)
28. 暗茶褐色砂質土
29. 黄褐色砂質土



第384図 209・210-Uの溝断面図・209・210-U~W 出土遺物



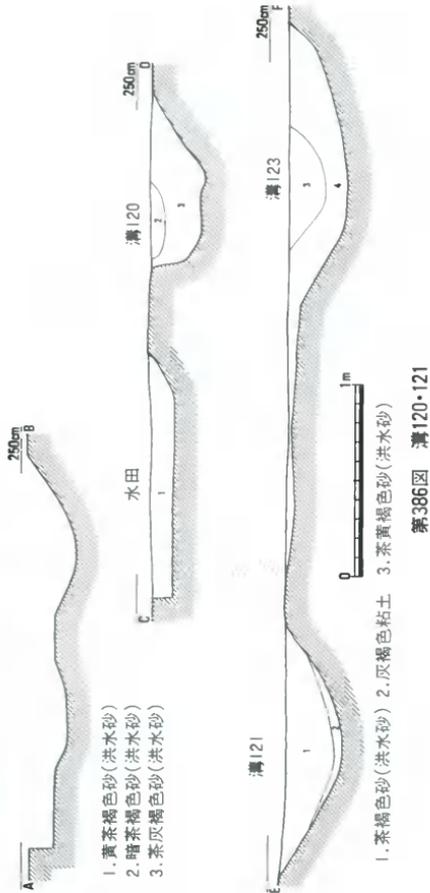
第385図 溝119

かもしれない。(浅倉)

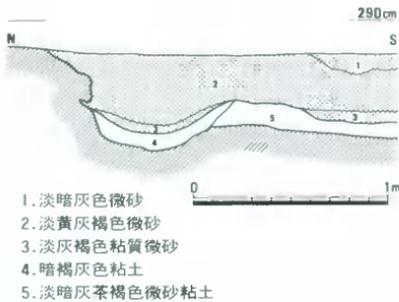
溝116 (第381図、図版69)

207~209P区に検出された一部で蛇行する溝である。洪水砂で埋没した溝で、幅2~2.5m、深さ50~60cmを測るU字溝である。この溝の下部には、ほぼ同じ位置に後期の溝75があり、改修されて機能していたことがわかる。埋土の洪水砂は、広く水田を覆った洪水砂と同じもので、溝の位置や規模からして南の下流域を潤すための幹線水路として機能していたことは疑いない。

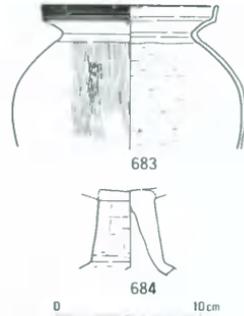
遺物は洪水砂中から10数片の後期土器片、上層部から土師器片が出土しているが、この溝の上部には百・古・1の溝126があり、混入した可能性がある。



第386図 溝120・121



第387図 溝122



第388図  
溝120～122出土遺物

溝の埋まった時期は、百・後・Nと考えられる。

(柳瀬)

溝117 (第363・382図)

溝80の流路をそのまま踏襲し、幅を拡張している。断面形態はU字形を呈する。検出時の規模は、幅130cmから160cm、深さ45cmから50cmを測る。埋積土は、凸レンズ状の堆積状況を呈している。

遺物は土器が少量出土しており、時期は弥生時代後期と考えられる。

(古谷野)

溝118・119 (第383～385図、図版69)

この2本の溝は0～5m離れたり接したりしながら、ほぼ平行して207Pから209Rまで南東に、そこから210Vまで東南東に、そして前回報告の212Xまで南東方向に伸びる溝である。細長い微高地上をその形状のままに伸びて、さらに下流の水田に水を供給するために人工的に掘り込まれた主要な水路である。今回報告する範囲での総延長は115m、最大幅80cm、最大の深さ60cmある。前回の長さも合計すると180mにも達する。水田を埋めている洪水砂と同様の砂礫で一気に埋没している。このことからこの溝は後期水田と同時に存在し、廃絶時期は百・後・Nであると言える。

(浅倉)

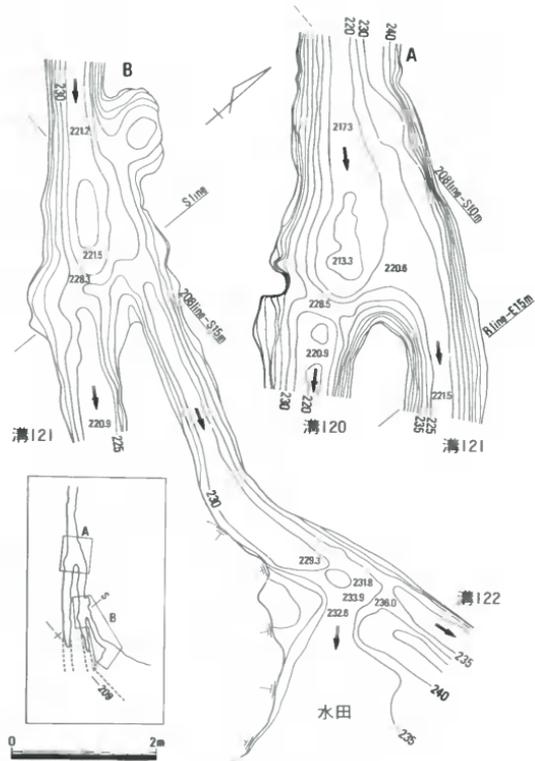
溝120 (第386図、図版69)

溝119の平均北東5m離れて、ほぼ平行して207P～210Vで検出した溝である。208Rまでは溝116と1mしか離れていない。210Vにおいて溝の低部が次第に浅くなり、やがて前回報告したように帯状水田化してしまうのである。溝の総延長110m、最大幅80cm、最大の深さ60cmある。この溝も水田を埋めている洪水砂と同様の砂で一気に埋没しているので水田と同時に存在し、廃絶時期は百・後・Nと考えられる。

(浅倉)

溝121 (第386図)

溝120から208Rと北に分  
流し、平均2m離れて、ほぼ  
平行して210Vのグリット杭  
まで検出した溝である。この  
溝210Vから10m程の間は  
溝117と2カ所での間の上手が  
切れている。洪水によるもの  
か、意識的に切ったものか判  
断しがたい。この溝の209T  
杭から東には水田が展開して  
いるが、この水田にも給水し  
ていたものと考えられる。先  
端部分は溝120と同様に、帯  
状水田に連結している。溝  
120の帯状水田ではなくその  
北に展開する水田である。溝  
の総延長80m、最大幅80cm、  
最大の深さ60cmある。水田を  
埋めている洪水砂と同様の砂  
で一気に埋没しているので水  
田と同時に存在し、廃絶時期  
は百・後・Nである。(浅倉)



第389図 溝120～122分岐点 (S=1/80)

#### 溝122 (第387・389図)

208R東部では溝120・溝121と同一であり、208R西部で溝121から分流し、大きくカーブして北東方向に伸びていく。大きくカーブする細長い島状高まりの南東端部を巡る溝である。この溝の東に展開する水田にも給水しているはずである。溝の総延長30m、最大幅80cm、最大の深さ60cmある。水田を埋めている洪水砂と同様の砂礫で一気に埋没しているので水田と同時に存在し、廃絶時期は百・後・Nである。(浅倉)

#### 溝123

209Uの南東部分で検出した延長20m、最大幅150m、深さ60cmある。西方の水田から幅50cm、長さ10m、深さ60cmの溝を掘り、残りの溝は幅150m、深さ30cmしかない。この浅くて幅の広い部分は水田にされているようである。さらに東には低い畦畔があり、溝121の東水田より

も北の水田に給水する仕組みになっている。つまり、溝123は209T水田と210V水田を連結するための溝とすることができる。(浅倉)

## 6. 古墳時代の遺構・遺物

### (1) 水田

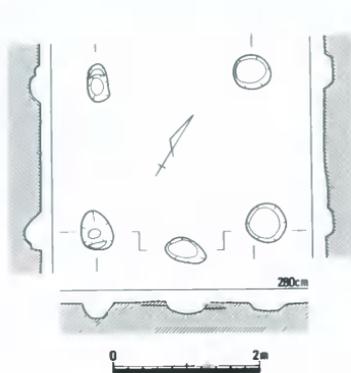
209R区の西寄りで、水田層と考えられる灰色粘質土の広がりが確認された。この水田層の西端は、溝134の西側1.5m付近を溝と平行しており、厚さは10cm前後を測る。北ないし東側への広がりは、溝134から1～2mのところまで削平されているため、定かではない。なお畦畔は検出されなかった。水田層からの遺物は認められなかったが、検出面から古墳時代の後期と考えられるが、古代まで下る可能性もある。(平井勝)

### (2) 竪穴住居

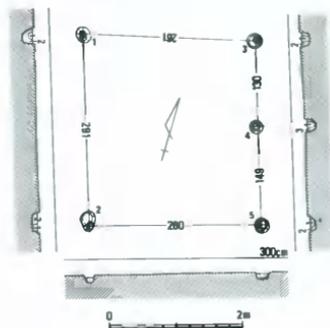
#### 竪穴住居21 (第390図)

208M区の西端に位置する。4個の柱穴がほぼ等間隔で方形をつくるように配置され、一辺の中央よりやや南で小土壇が1基検出された。その位置関係から判断して、4個の柱穴は竪穴住居の主柱穴で、小土壇は古墳時代前半の竪穴住居でしばしば認められる南壁側の土壇と考えられる。柱穴の深さから推測すると、この住居跡は後世にかなりの削平を受けているとみられる。一辺の柱穴間は205～230cmである。

柱穴は直径52～57cm、深さ12～21cmを測る。東辺の柱穴は円形だが、西辺は楕円形で、底面が二段になっている。埋土は、東辺の柱穴では灰褐色粘土斑淡灰褐色砂で、北西柱穴は暗灰褐

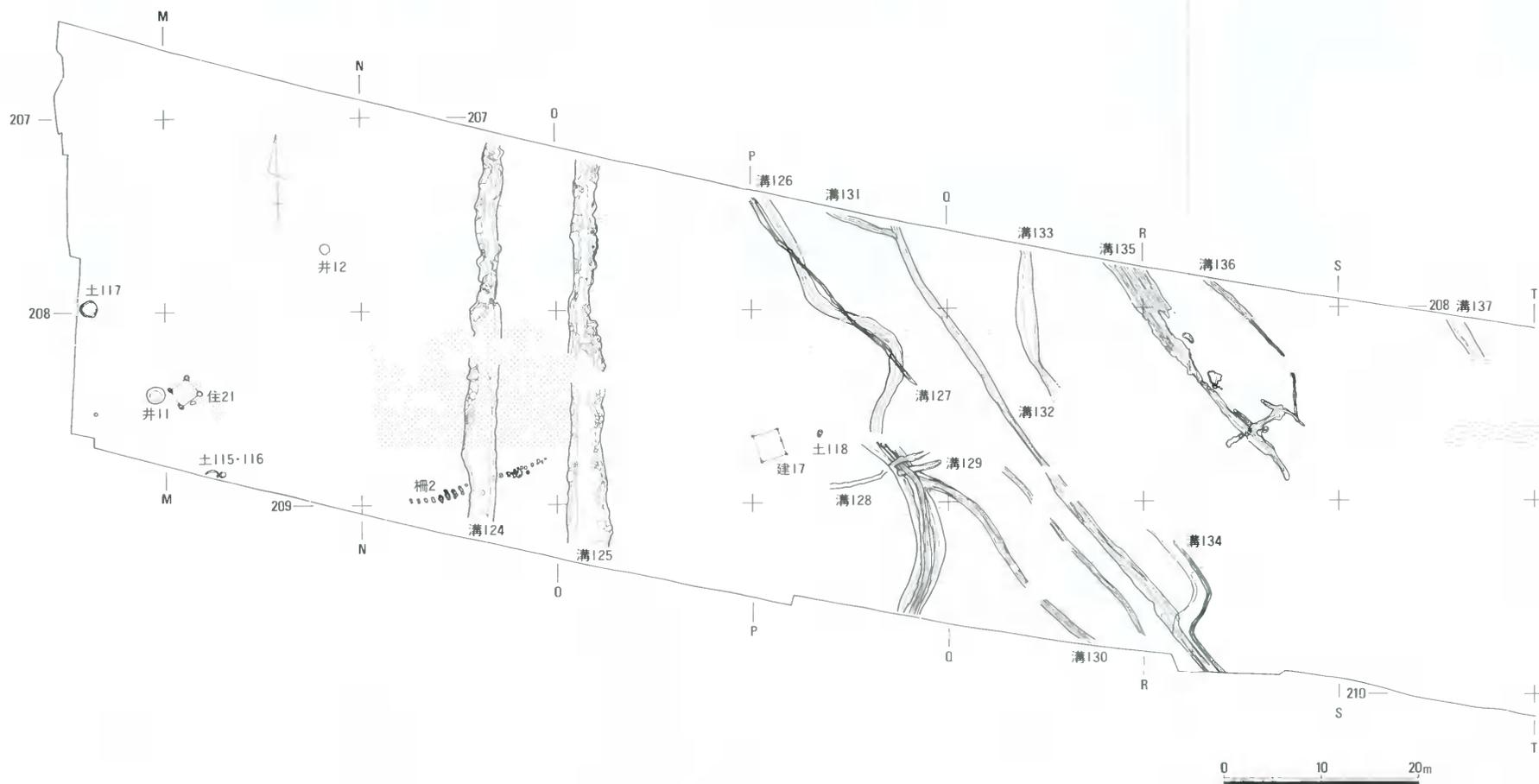


第390図 竪穴住居21

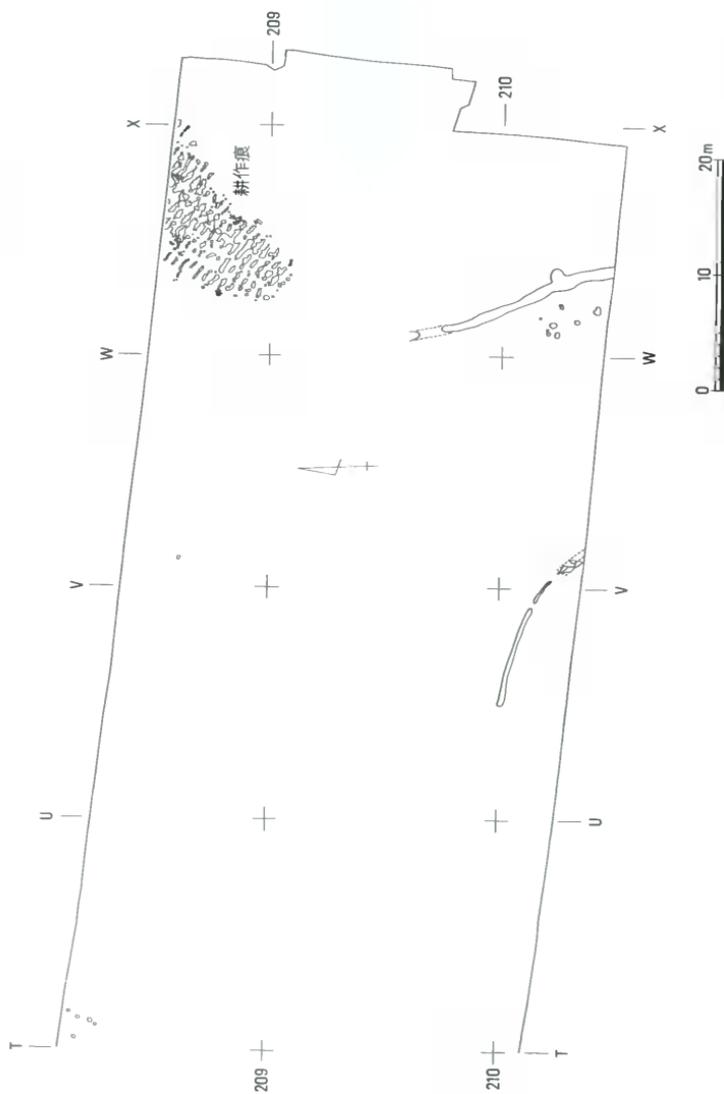


1. 淡灰褐色砂  
2. 黄褐色砂斑灰褐色粘質土  
3. 明褐色粘質土

第391図 建物17



第392図 高縄手B調査区の高墳時代遺構全体図(1) (S=1/500)



第393図 高橋手B調査区の古墳時代遺構全体図(2) (S=1/500)

色土、南西柱穴は暗灰褐色土斑灰褐色粘性土となり、西辺の埋土も砂質に近い。小土壇は長径57cm、短径33cm、深さは6cmで、不整形な楕円形を呈している。埋土は焼土混じりの黄褐色土斑暗褐色土と、柱穴の埋土とは少し違っている。

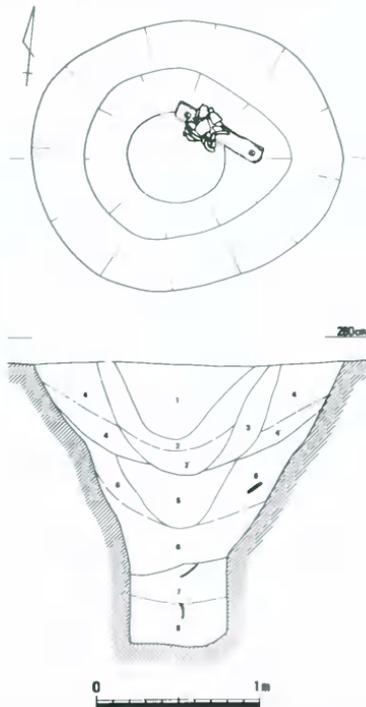
遺物としては古墳時代初頭とみられる土器片が若干出土している。 (岡本)

(3) 建物

建物17 (第391図、図版74)

208P区の西端で検出された2間×1間の掘立柱建物である。東側桁行は2間だが、西側桁行では中央の柱穴が確認されず、残存状況の悪さから考えると存在していた可能性も否定できない。建物の平面形をみると、柱穴1が北へ少しはずれているために長方形とはならない。桁行の全長も、東側が279cmであるのに、西側は291cmと12cm長い。また、東辺の中央にある柱穴4も中点から10cm程北へ寄っている。このように、建物の規格性はいささかあいまいである。

柱穴は直径20~31cm、深さ11~18cmを測り、柱穴2以外はほぼ円形をしている。いずれの柱穴でも柱痕が確認され、その直径は12~15cmであった。柱痕には淡灰褐色砂が入っていた。遺物は出土していないが、埋土等から判断して古墳時代の遺構と推定される。 (岡本)



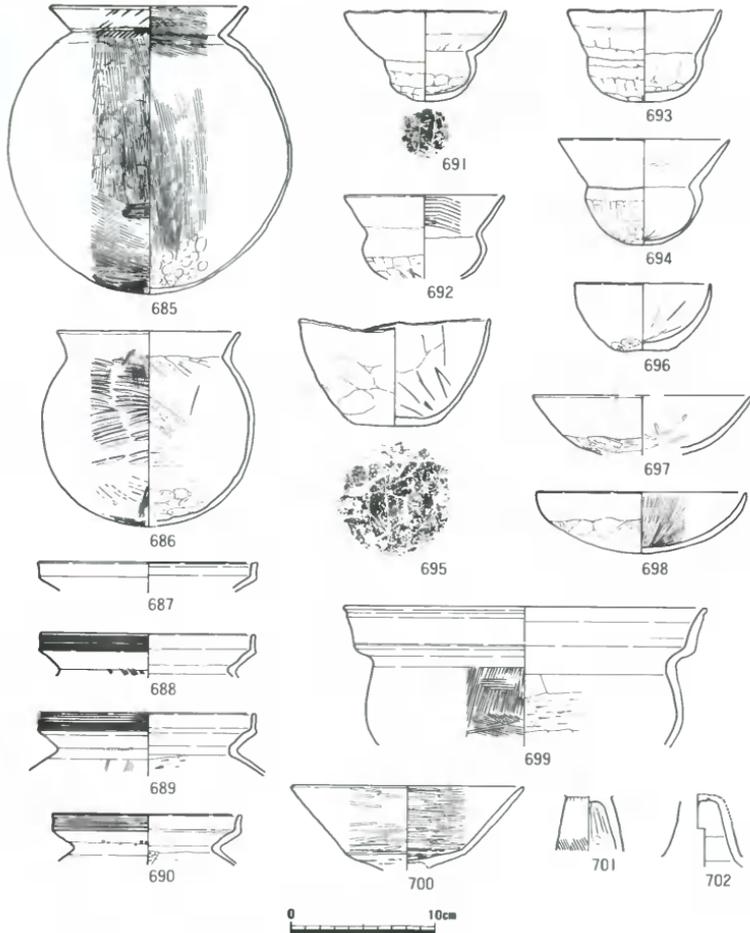
(4) 井戸

井戸11 (第394図、図版74・126)

208L区と208M区の境界にあり、堅穴住居21と重複するような関係にある。検出面で長径190cm、短径170cmを測り、深さは175cmに達する。住居跡の残存状況

- |              |             |
|--------------|-------------|
| 1. 黒褐色砂質土    | 4. 灰黄褐色粘性微砂 |
| 2. 褐色砂質土     | 5. 含炭灰色粘性微砂 |
| 2. 含炭黄褐色砂質土斑 | 6. 淡灰色粘性微砂  |
| 暗灰色粘性砂質土     | 6. 淡灰色粘性微砂  |
| 3. 黄褐色微砂     | 7. 腐蝕植物層    |
| 4. 淡褐色微砂     | 8. 灰色粘性微砂   |

第394図 井戸11



第395図 井戸11出土遺物(1)

から判断すれば、本来はさらに50cm以上深かったものと推測される。底部付近は円筒形をなしているが、途中からラップ状に大きく上方へ開口していく。埋土は複雑に細分され、断面観察によれば自然的な順序良い堆積を示さず、かなり人為性の強い様相をしている。2'層と5層と6'層には炭が大量に含まれ、6'層では大形の土器片も含まれている。また、1層の下半でも炭粒や土器片が多く出土し、骨片もみられた。これらの層は、井戸が廃絶後にゴミ穴とし

て利用されたために生じたと考えられる。おそらく、1~2'層や5層は、ゴミを埋めるために掘った穴が断面に現れたものであろう。このことから埋土を大別することができる。1~4'層までが上層、5~6'層を中層、7~8層を下層と三分する。

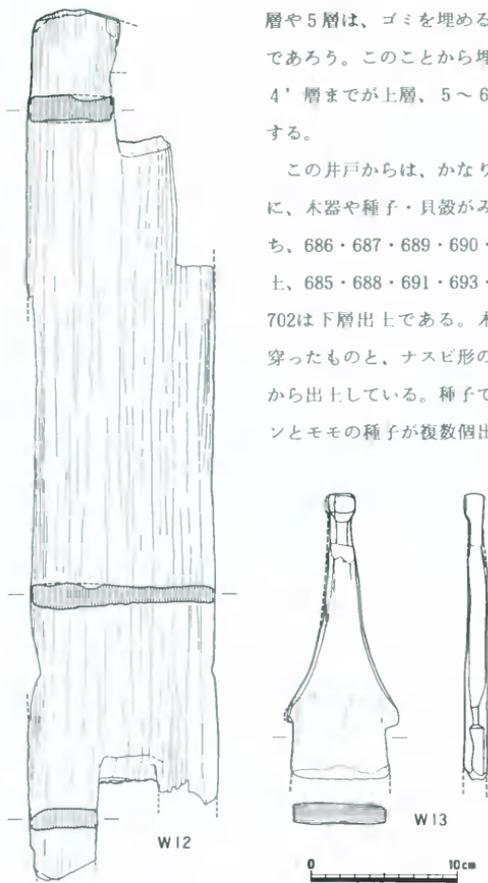
この井戸からは、かなりの遺物が出土している。土器の他に、木器や種子・貝殻がみられる。土器は図示したもののうち、686・687・689・690・692・696・699・700・701が上層出土、685・688・691・693・694・697が中層出土、695・698・702は下層出土である。木器には、板材の両側に方形の孔を穿ったものと、ナスビ形の鋤先の破片があった。いずれも中層から出土している。種子では中層から下層にかけて、ヒョウタンとモモの種子が複数個出土している。貝殻は二枚貝のもの

で、貝の表面が剝離したようなものが数十の単位で中層と下層の境あたりから出土している。これらの自然遺物もゴミ穴の証明となろう。

出土した土器から判断して、この井戸の時期は百・占・Ⅱと考えられる。(岡本)

井戸12(第397・398図、図版75・125)

207M区の南東寄りに検出された井戸である。径1mあまりの円形を呈する井戸で、深さは



第396図 井戸11出土遺物(2)

1mを測る。底は平坦で、壁はほぼ垂直に立上る。埋土は大きく4層に分けられ、遺物の多くは2層に含まれていた。遺物は土器とともに未加工の枝木が多くみられた。土器はすべて土器で、壺・甕・小形丸底埴・小形器台・高杯がある。703は壺で、球形の胴部に外反ぎみに長く立上る二重口縁をもつ。704~708は甕で、708は肩に2個の刺突が施されている。小形丸底埴は底部がへら削りてやや粗雑なもの(709)と、全体を丁寧な篋磨きで仕上げるもの(710)とがある。711は杯部と脚部の境界でく字状に外反する小形器台である。712は高杯の脚柱部であ

る。時期は百・古・Ⅱと考えられる。(平井勝)

### (5) 土壌

#### 土壌115 (第399図、図版75)

208M区の南西部に位置する。調査区の南端にあって、一部は調査できなかった。平面形は長楕円形で、長径132cm、深さ16cmを測る。断面形は皿形に近い。底面は中央部が凹んでいる。埋土は2層に分けたが、本質的な相違は認められず、上層では焼土塊が多く、下層では炭粒が多いという差にすぎない。界線の不自然さから考えれば、同一層内でのブロックの存在によるものかと思われる。遺物は出土しなかった。(岡本)

#### 土壌116 (第399図、図版75)

土壌115の東に近接して位置する。その距離は6cmにすぎない。検出面では長径66cm、短径61cm、深さ18cmを測るが、西壁は途中に肩をもち、その部分での平面形は楕円形となる。底面は認められず、断面形は碗形を呈する。埋土は暗褐色粘質土1層で、他の古墳時代の遺構の埋土が多く砂質であるのと異なっている。遺物としては、鉢の完形品があり、百・後・Ⅳから百・古・Ⅰにかけてのものと考えられる。

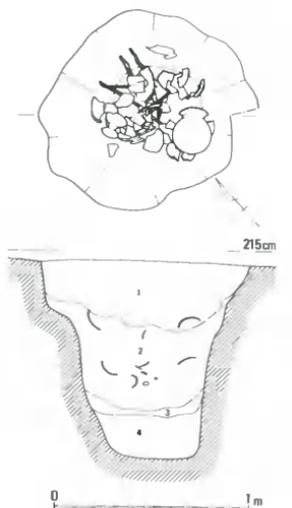
発掘調査時は土壌115を竪穴住居の中央穴、土壌116を柱穴と考え、この2基の土壌で2本柱の竪穴住居を想定していたが、土壌116は柱穴としては浅く、大幅な後世の削平を考慮すると、土壌115は中央穴としては深くなる。

先の遺物もあるが、付近の微高地上に弥生時代後期の遺構はなく、ここでは古墳時代初頭の遺構と考えておく。(岡本)

#### 土壌117 (第400～412図、図版76・126～133)

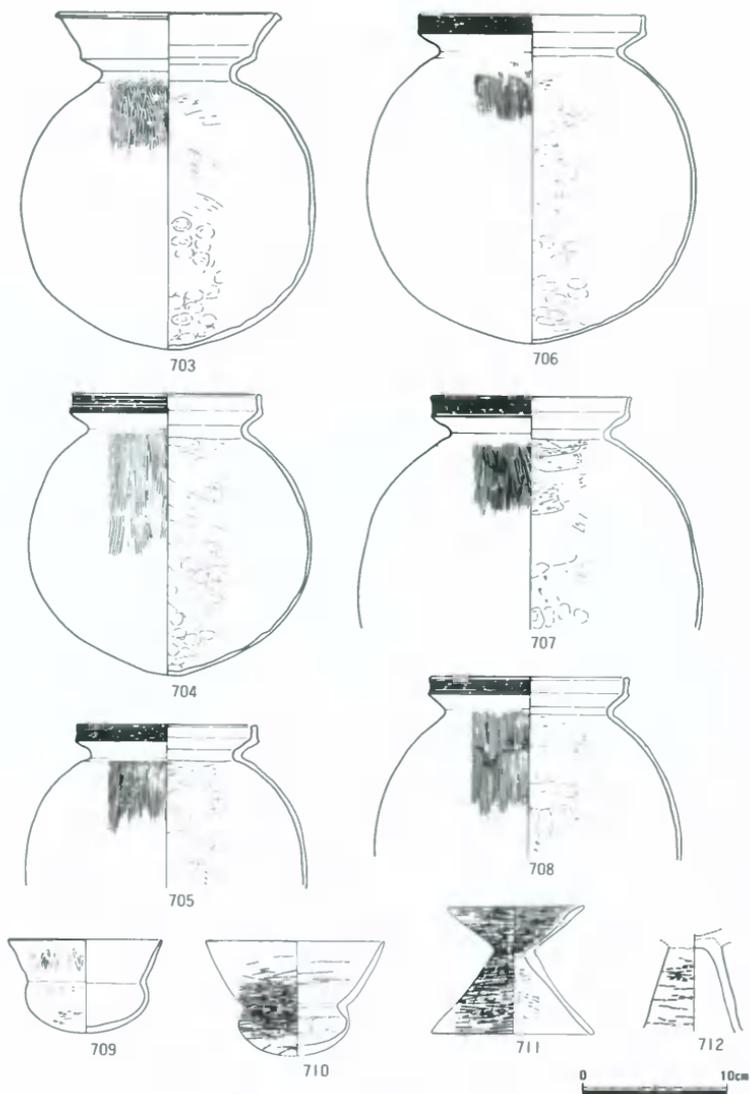
L区の208ライン上に検出した、不整隅丸方形の大型土壌である。検出面では長辺約1.7m、短辺1.5mを測るが、一部南東辺のはほぼ中央部が約20cm程外方に広がり、ややいびつになっている。土壌の壁はほぼ垂直に立ち上がる掘り方をもち、深さは約1.4mを測る。底部はほぼ平面を呈し、底面にとくに落ち込み等は認められない。

土壌中の堆積土は11層に細別されるが、そのうち上層の第2層中(PL 2)と第7層中の上

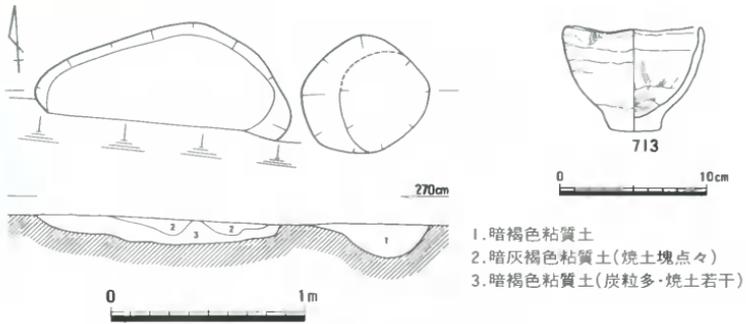


1. 暗青灰色砂質粘土 2. 暗青灰色砂質土  
3. 暗青灰色砂質土 4. 暗灰色粘質土

第397図 井戸12

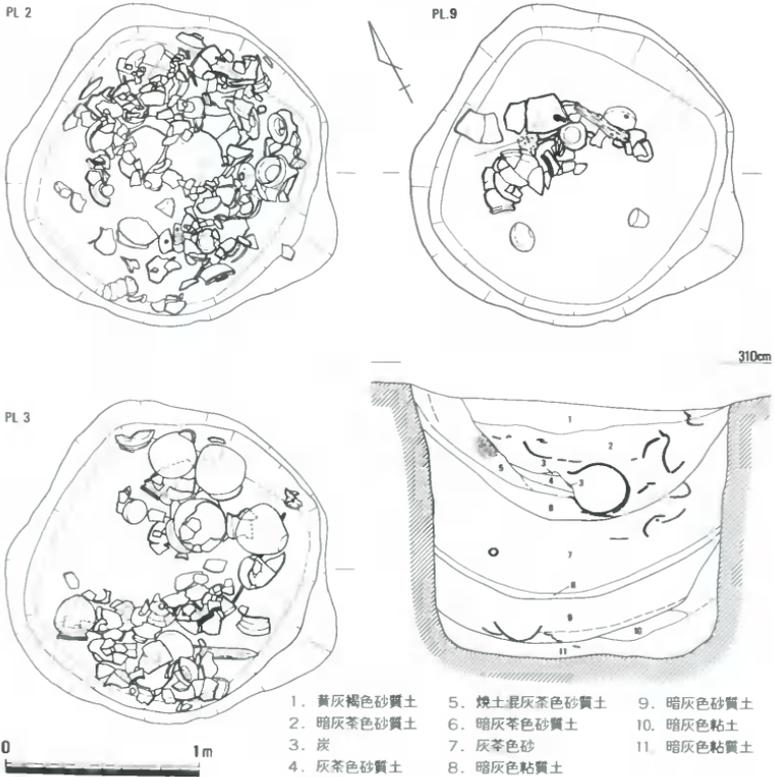


第398図 井戸12出土遺物



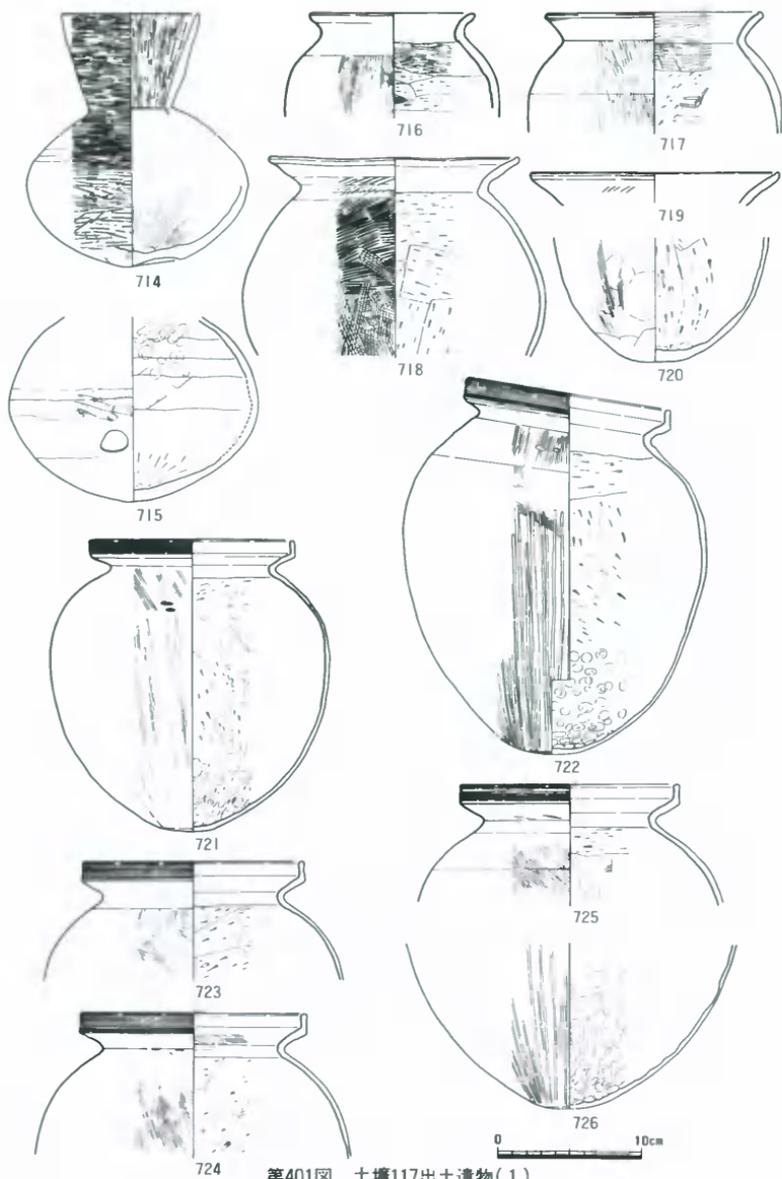
1. 暗褐色粘質土
2. 暗灰褐色粘質土(焼土塊点々)
3. 暗褐色粘質土(炭粒多・焼土若干)

第399図 土壙115(左)・土壙116(右)・出土遺物

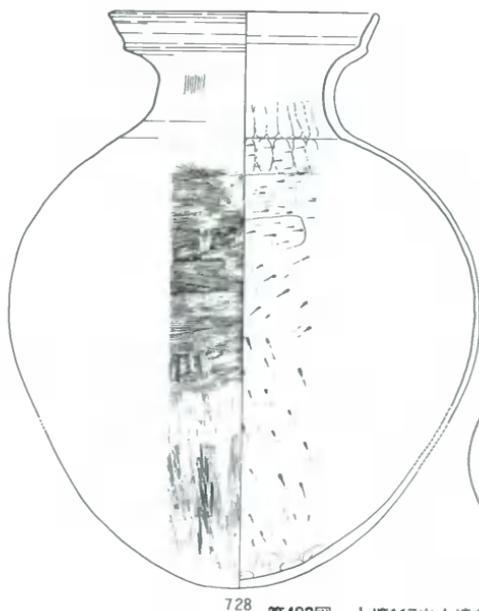
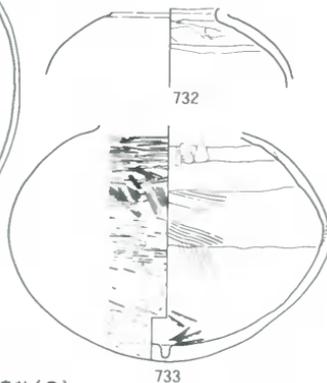
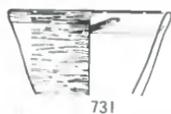
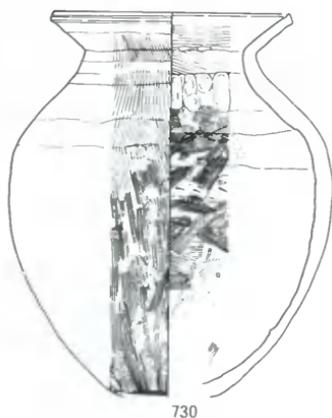
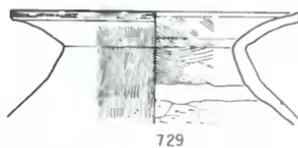
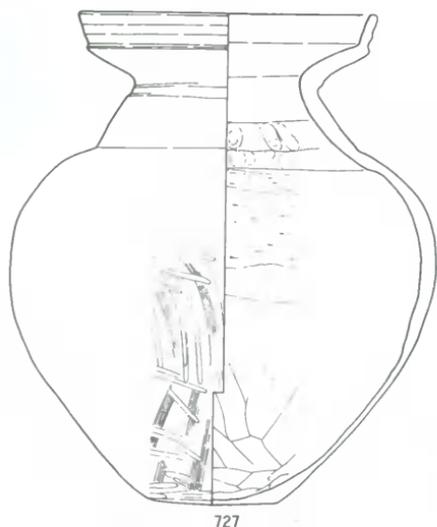


- |            |              |            |
|------------|--------------|------------|
| 1. 黄灰褐色砂質土 | 5. 焼土混灰茶色砂質土 | 9. 暗灰色砂質土  |
| 2. 暗灰茶色砂質土 | 6. 暗灰茶色砂質土   | 10. 暗灰色粘土  |
| 3. 炭       | 7. 灰茶色砂      | 11. 暗灰色粘質土 |
| 4. 灰茶色砂質土  | 8. 暗灰色粘質土    |            |

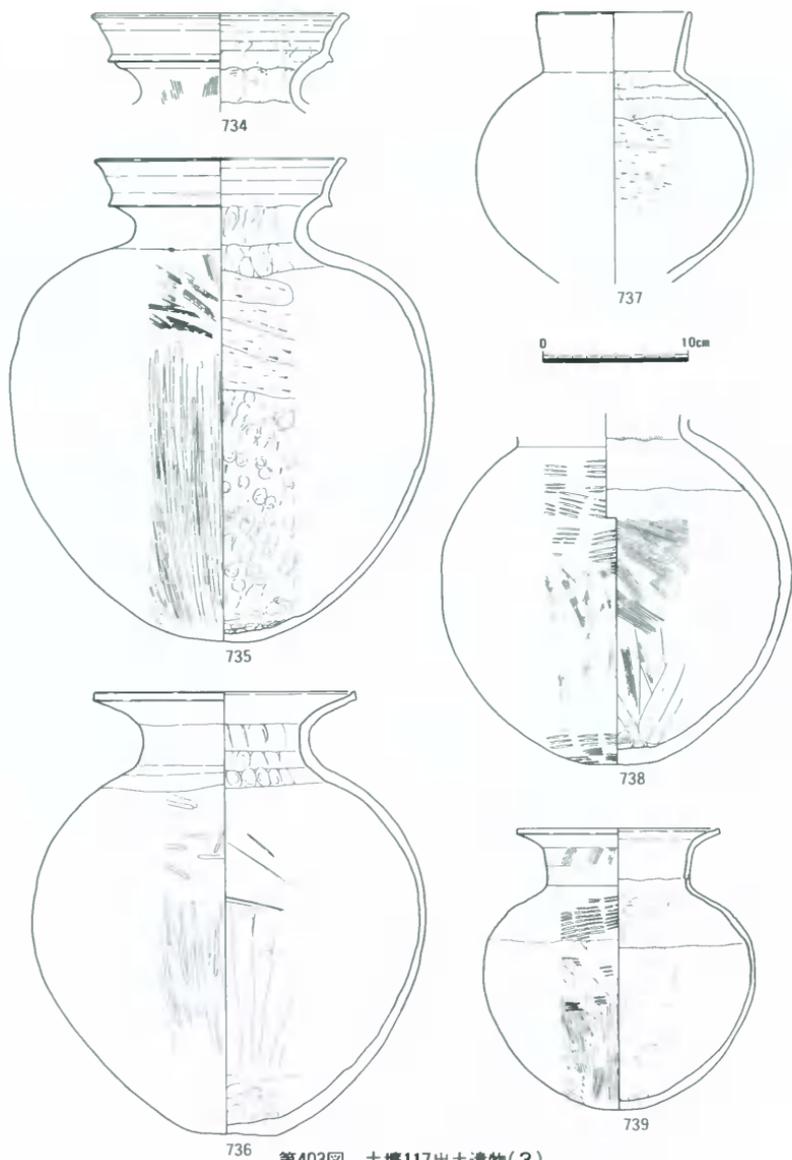
第400図 土壙 117



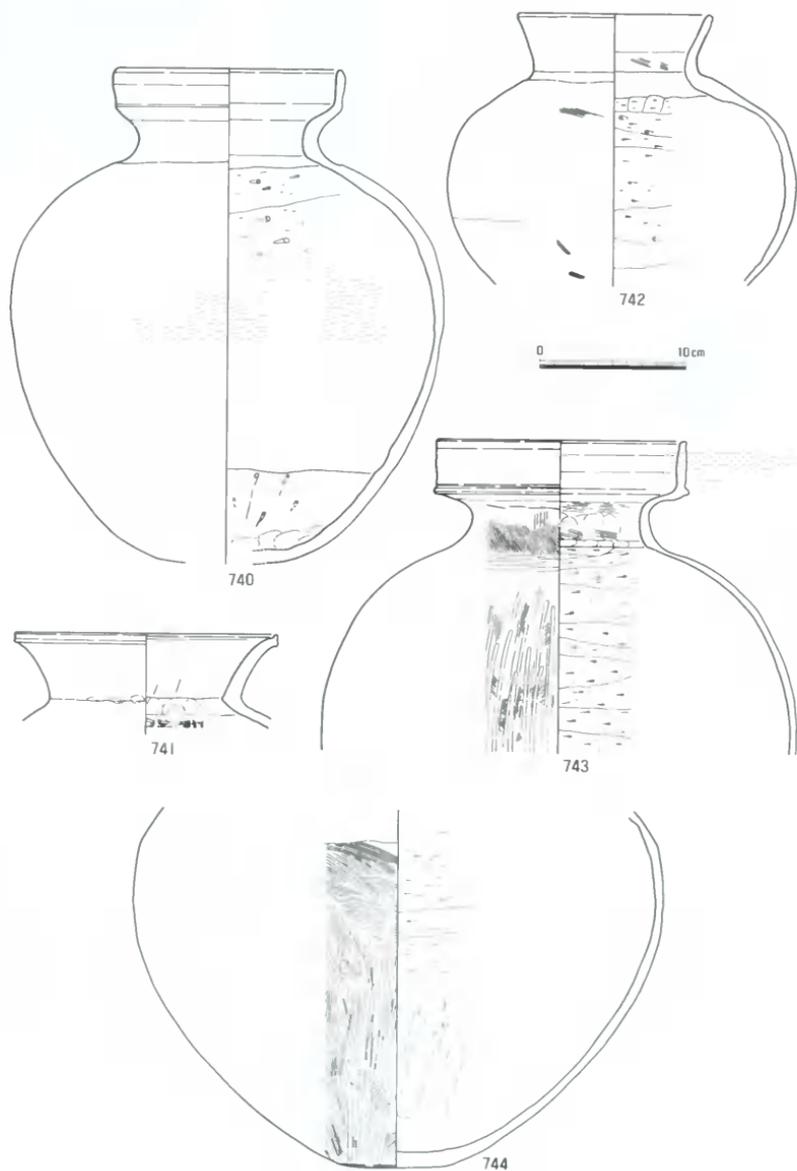
第401図 土壙117出土遺物(1)



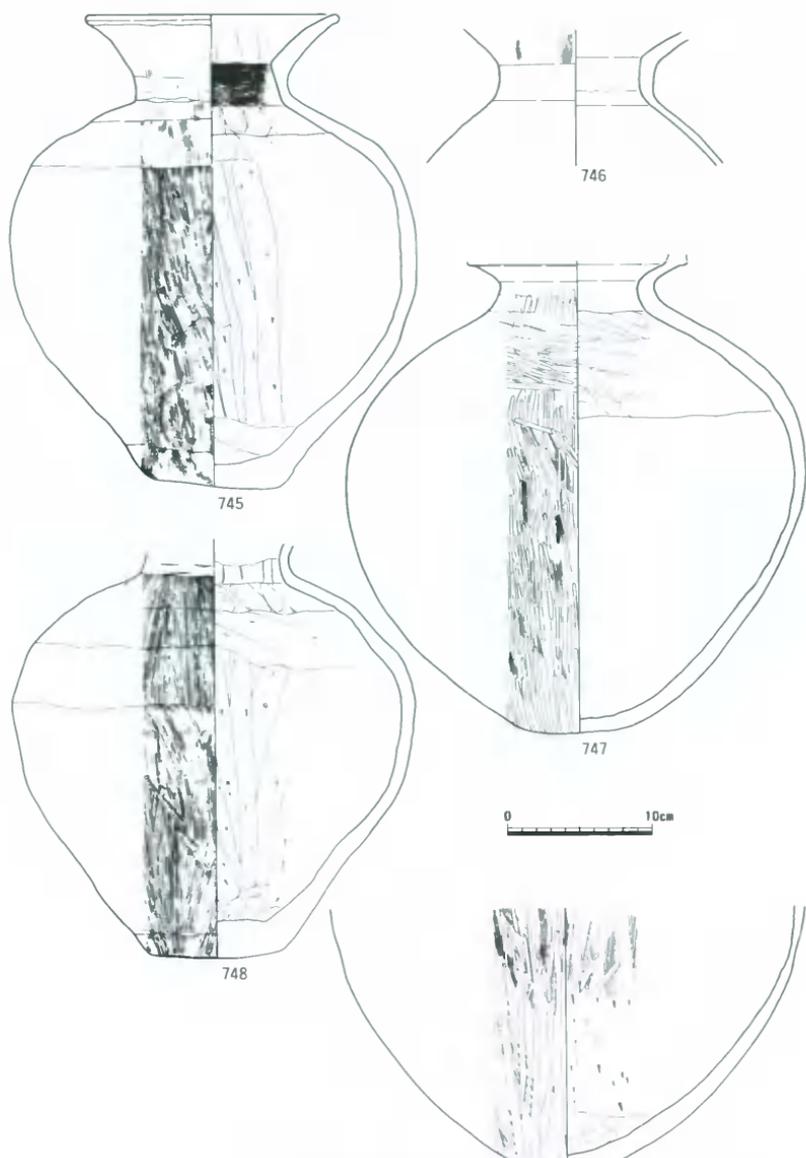
第402図 土壙117出土遺物(2)



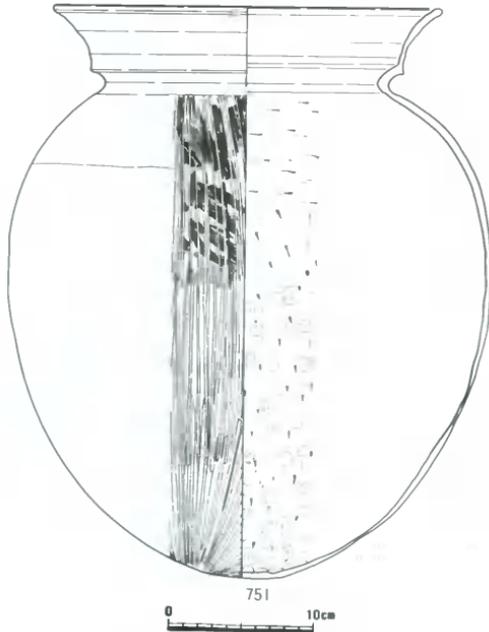
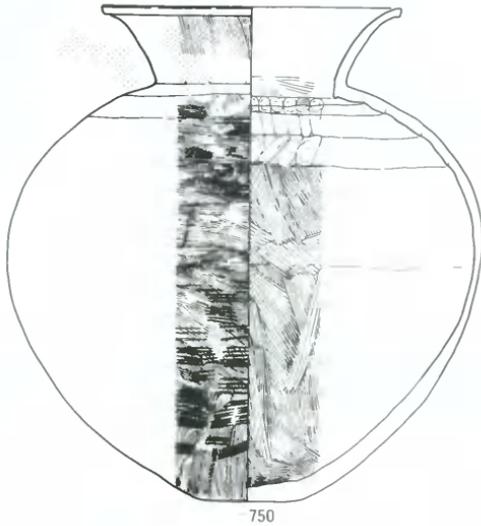
第403図 土壙117出土遺物(3)



第404図 土壙117出土遺物(4)

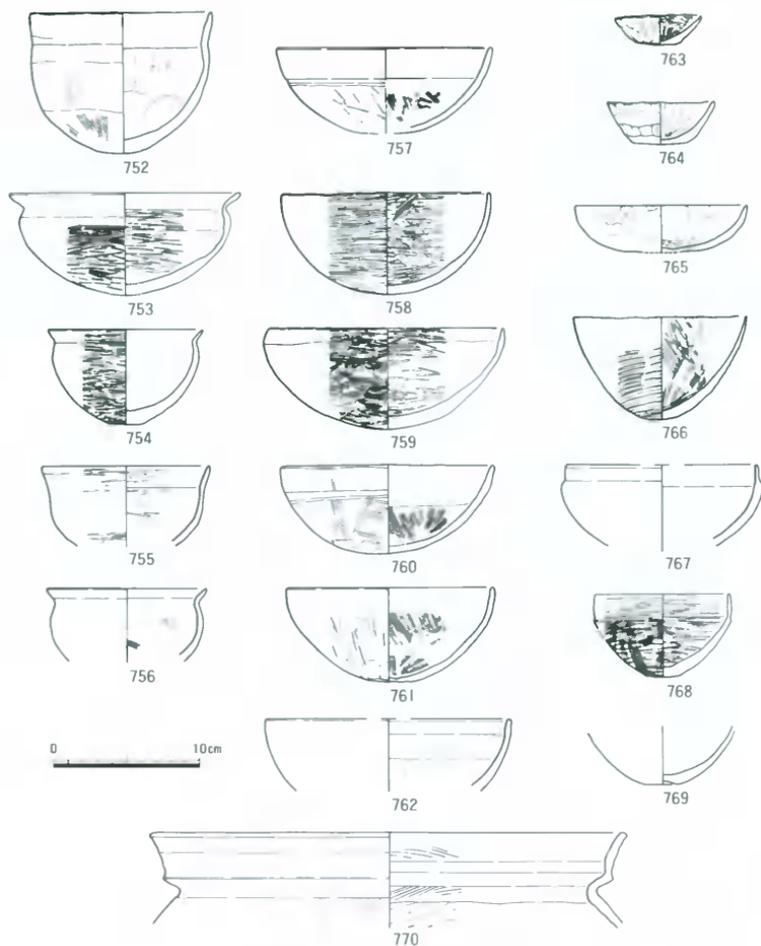


第405図 土壙117出土遺物(5) 749



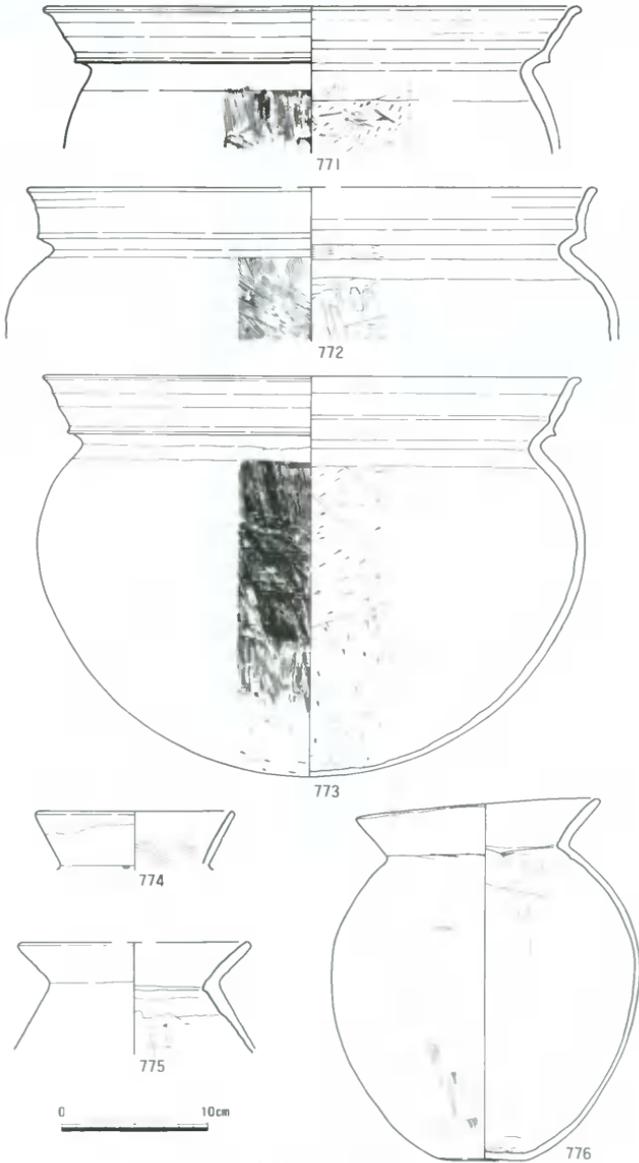
0 751 10cm

第406図 土壙117出土遺物(6)

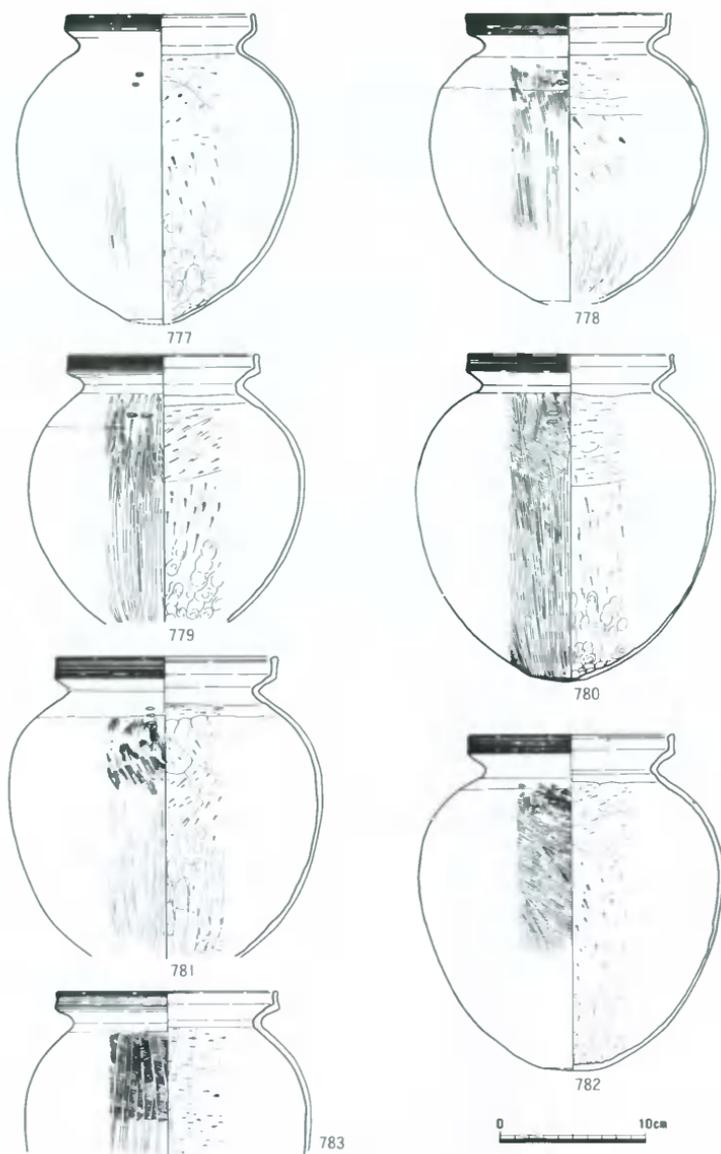


第407図 土壙117出土遺物(7)

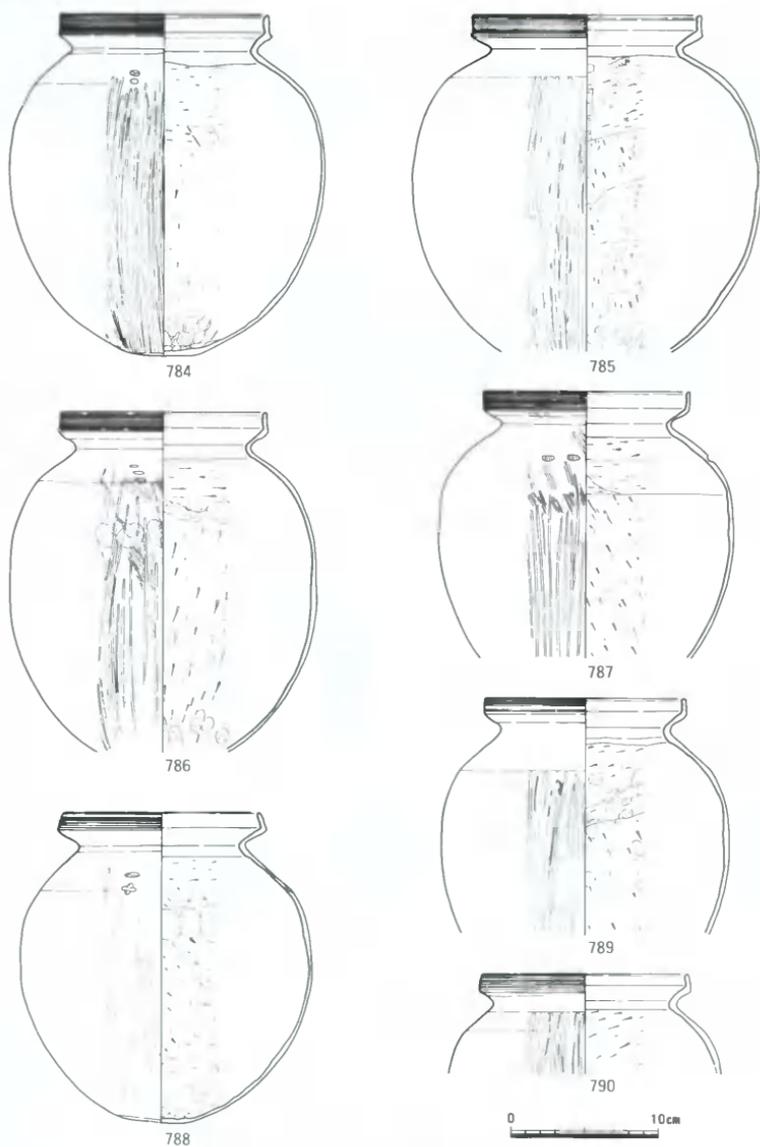
部 (PL 3)、および下層の第9層中 (PL 9) に土器溜りが形成されていた。遺物整理の過程で PL 2 と PL 3 の土器は接合関係が認められているので、同一土器溜まりの上面・下面と解釈される。この上層の土器溜まりの土器類は、ほぼ完形に復元されるものも多く、壺・甕・高杯・直口壺・鉢・小形鉢・小形器台・鼓形器台等この時期にみられるほとんどの器種を含んでいる。下層の土器溜まり (第401図) は直口壺と甕が主で、比較的土器の小片が多い傾向が認め



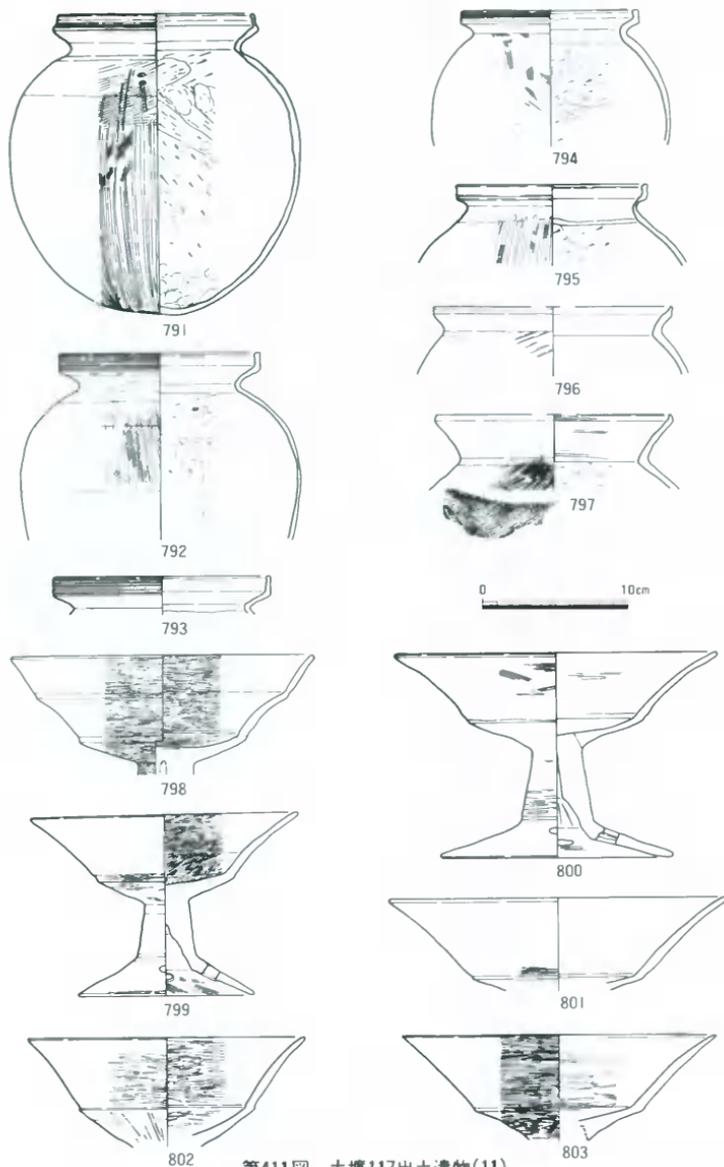
第408図 土壙117出土遺物(8)



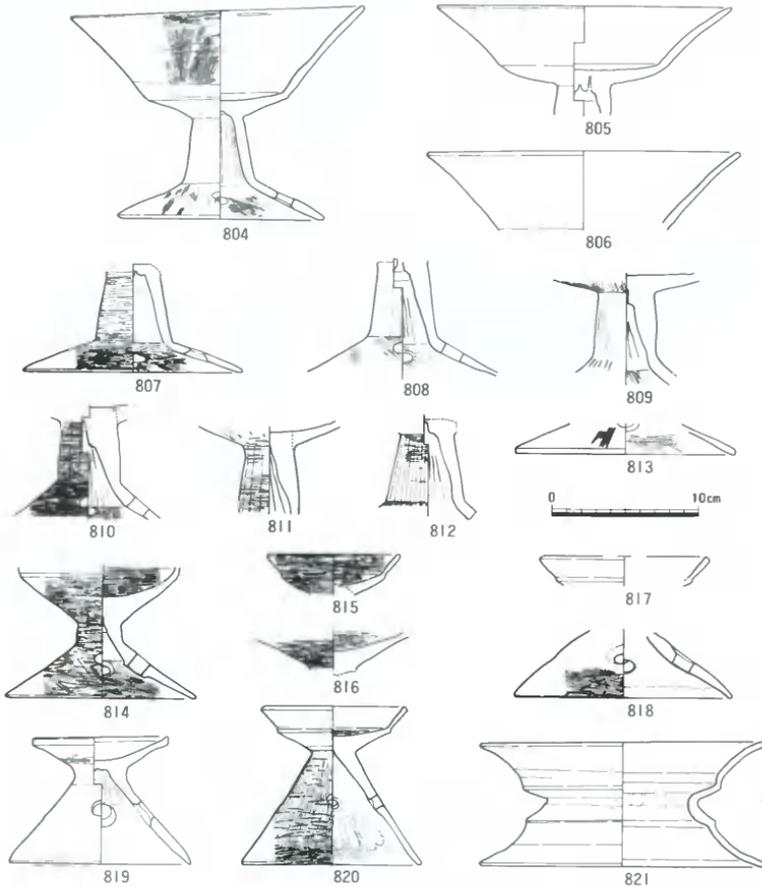
第409図 土壌117出土遺物(9)



第410図 土壙117出土遺物(10)



第411図 土壙117出土遺物(11)



第412図 土壙117出土遺物(12)

られた。最下層には数片の甕片しか認められていない。

この土壙は、微高地端部に近い地点の比較的安定した黄色基盤層を掘り込んで造られているが、ほぼ方形の掘り方をもち比較的浅いことから井戸の機能はなかったと思われる。土器の出土状態からすれば、この土壙が本来の機能を失ってのちの土器の廃棄穴になった可能性が強いが、当初の機能が何であったか不明である。

遺物のうち上層出土の壺は、短頸、無頸、二重口縁、くの字口縁等の形態的要素が多岐に渡

り認められ、明らかに酒津式の特徴をとどめる727や平底を残す745・748はこの一群の中では古い要素を残すものであり、口縁部が外反して長く立ち上がる735や750は後出のものであって、両者には多少の時期差が認められる。また、二重口縁の751は山陰系、球形の胴部にタタキをもつ738、739は畿内系の壺である。甕はほぼ垂直に立ち上がる口縁拡張部の外面に5～7条の櫛描沈線を施し、球形化の進む胴部をもつものが約9割を占め、くの字口縁は数点であった。前者には、そのほとんどの肩部に1～3個の刺突痕が認められる。下層出土の甕は、多少大ぶりで球形化があまり進んでいない比較的古い要素をもつ722のほかは、上層の一群との間にとくに時期差はない。これらの出土遺物から、この土壌の廃絶の時期は百・古・1と思われる。

なお、この土壌からキカラスウリの種子がかなりまとまって出土している。 (柳瀬)

#### 土壌118 (第413図)

208P区の中央付近で検出された柱穴状の土壌である。長径78cm、短径45cm、深さは76cmを測る。平面形は不整形形で、北半が円形、南半は方形をしている。壙壁は垂直に近く、底面は階段状となり、北端に近く直径10cmの柱痕らしい凹みが認められた。埋土は1層で、淡灰褐色砂が充填され、底になるほど粘性が強くなっていた。

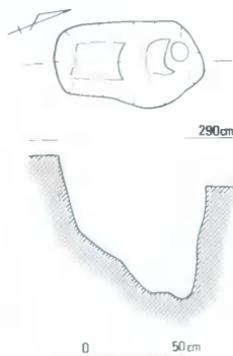
形態の不整形さから判断すると、方形の柱抜き取り穴をもつ柱穴と考えられそうだが、上層観察ではそれを証明するものは確認できなかった。また、周辺で建物の可能性を追求したが、確実なものとは認めえなかった。遺物は出土していないが、埋土から古墳時代の遺構と判断される。 (岡本)

#### (6) 槽

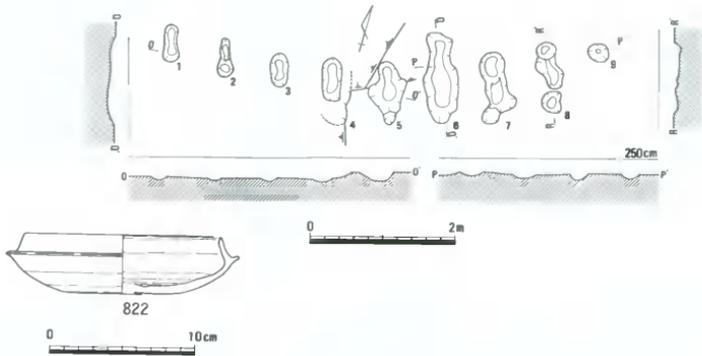
##### 槽 2 (第414図、図版77)

208N区の南端付近で柱穴列を検出した。溝124の東側と西側にまたがっているが、溝124とはほぼ同じ埋土(暗灰色微砂質粘土)であったため、溝との切り合い関係は明確にできなかった。検出面は弥生後期洪水砂層の上面であったが、洪水砂層上方の包含層と遺構の埋土が類似していたため、この面でしか検出できなかったもので、出土遺物から判断してもより上方から掘り込まれた遺構であったと考えられる。柱穴列は西南西から東北東方向に並ぶが、いくらか南へ湾曲している。東西両端の柱穴間の距離は直線で14.5mを測る。

図示したのは溝124の西側部分である。この部分の残存状況



第413図 土壌118



第414図 柵2 (S=1/80)・出土遺物

は東側部分にくらべて比較的良好であるため、遺構がより理解しやすいと思われる。柱穴1～4は一段下げてからの検出であるために一部の残存と考えられるが、柱穴5～8は底部の大部分が残存しているとみられる。柱穴6は長径127cm、短径48cmあり、深さは11cmを測る。底面は両端に丸く膨らみ、この部分が少し凹んでいる。柱穴7や8でも両端に深い部分があり、このことから、それぞれの柱穴には2本の柱が立ち、2本の根を結んで横木がくくりつけてあったことが想定される。かなりの柱穴で横に倒れた木片の残存が認められ、樹種鑑定の結果、柱穴4・5出土のものは散孔材、柱穴6はクスノキ科、柱穴7はタブノキ類似種、柱穴15はヒノキ属であることが判明した。

遺物が5柱穴から出土しているが、図示したような須恵器が含まれることから、この遺構の時期は古墳時代後期、それも6世紀中頃から後半にかけてと考えられる。

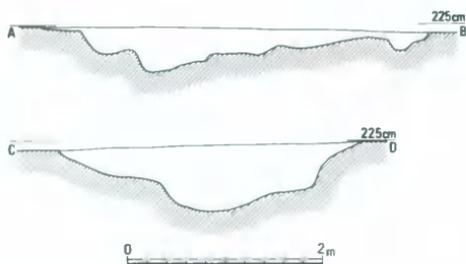
なお、この柵は本来さらに東西に続いていたと推測されるが、旧河道の地形にあわせて柱穴が掘られているため、このもっとも陥没して低い部分のみ検出したと考えられる。このような遺構は『百間川原尾島遺跡2』の三ノ坪調査区で報告された柱穴列とよく類似していて、同じ構造の施設である可能性が高い。(岡本)

## (7) 溝

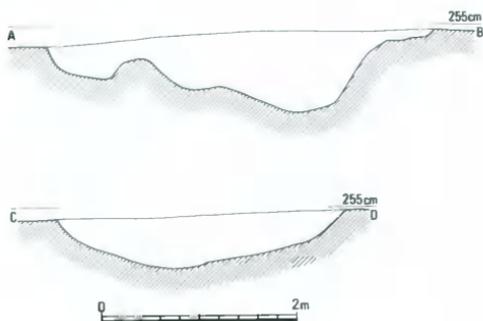
## 溝124・125 (第415～417図、図版77)

ラインを挟み、ほぼ南北方向で直線的に延びる2条の溝である。『沢田2』の溝161・162の延長にあたる。2条の溝は平行していて、中心間の距離は11mを測る。2条の溝は規模・形態ともに等しく、同時に対として掘られたものと考えられる。

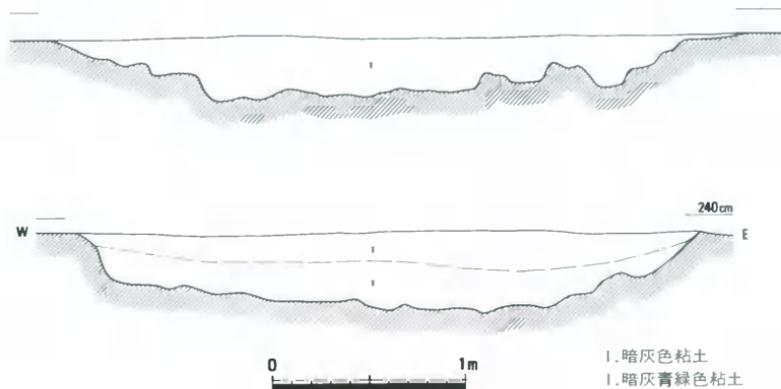
溝124は幅3.6m、深さ45cmで、埋土は暗灰色微砂質粘土である。上層は色調が緑がかってい



第415図 溝124 (S=1/60)



第416図 溝125 (S=1/60)



第417図 溝124(下)・125(上)

るが、その変化は漸移的なもので、基本的には1層と判断される。溝底や溝壁は弥生時代後期の洪水砂層にあたるため凹凸が激しく、まるで滞水時に多勢の人が踏み歩いたようである。ただ大きく見れば、底面は幅広く、ほぼ平坦に近い。

溝125は幅4.6m、深さ36cmを測り、その他の様相は埋土も含め、溝124とはほぼ等しい。

これらの溝は弥生時代後期の洪水砂層上面で検出されたが、洪水砂層上方の包含層とこれらの溝との峻別はかならずしも容易ではない。溝からは若干の遺物が出土し、その中には6世紀中頃から後半の須恵器蓋杯が認められる。しかし、これについては先述したように、柵2との切り合い関係が不

明なため、柵2の遺物が混じり込んでいる可能性も考えられ、時期を確定するのは困難である。また、後述するように、洪水砂層上方の包含層の上半から、そのさらに上方の層にかけて奈良時代の遺物も出土していることから、その時代まで降る可能性も否定できない。(岡本)

#### 溝126 (第418～420図、図版78)

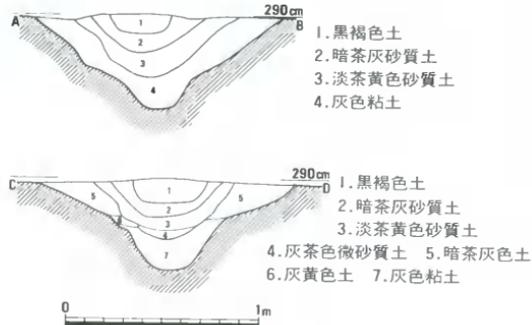
207～209O区を大きく蛇行しながらは南北に流走する溝である。溝は3条がほぼ重なっており、一番新しい溝は幅35cm前後、深さ10cm前後を測り、埋土は黒褐色土である。その下に暗茶灰色ないし淡茶黄色の砂質土で埋没した幅80cm前後、深さ30cm前後の溝が、そしてさらに下には幅1～1.3m、深さ50cm前後の溝が掘削されている。一番古い溝の断面は、中央の底がU字形に深くなり、その上端から

ロート状の緩やかな立上りとなる。この3条の溝は、最下層の溝の埋没の一過程を示す可能性もあるが、平面での流路は、最下層の溝の幅内ではあるが、古い溝を踏襲することなく流走している場所があることから、それぞれを独立した溝と考えた。なお、遺物は最上層の溝に多く、それ以下ではわずかであったが、時期差は認められない。

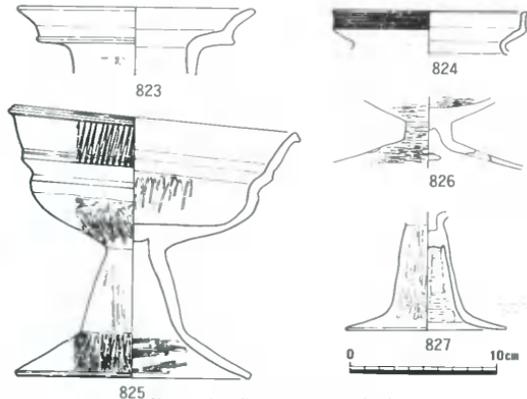
遺物は土器と石器が出土している。823・828は二重口縁の壺、824・829～831は甕、832は鉢、826・827・833・834は高杯である。835は双口の手捏ねである。石器は投弾が一点出土している。時期は百・古・ⅠからⅡと考えられる。(平井勝)

#### 溝127 (第421図、図版78)

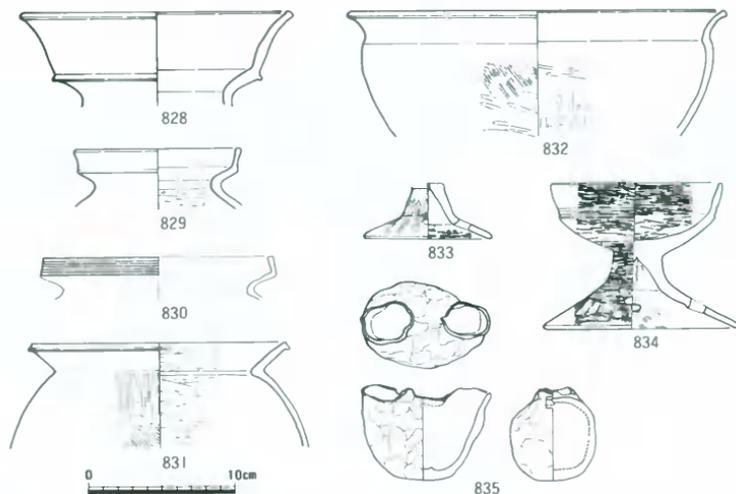
207Pから208Qにかけて



第418図 溝126



第419図 溝126出土遺物(1)



第420図 溝126出土遺物(2)

検出された、幅35～40cm、深さ10～15cmの溝である。ほぼ直線的に北西から南東方向に流下する溝で、一部で溝126を切って存在する。埋土は淡灰(白)色の粘質土を呈し、遺物はほとんど含まない。

出土遺物は土器の細片がわずかにあり。百・古・Iの時期が与えられる。(柳瀬)

溝128 (第422図)

208P区の南端寄りで検出された溝である。ほぼ東西に流走する溝で、溝126を切っている。幅50cm前後、深さ10cm前後を測る。埋土は暗灰褐色粘質土である。遺物は土器がわずかに出土しているが、詳細な時期は不明である。(平井勝)

溝129 (第423図)

209P区の南東端寄りで検出された溝である。ほぼ東西方向に流走する溝で、溝126の上層溝



1. 淡灰白色粘質土  
2. 淡灰色粘質土

第422図 溝128

第421図 溝127・出土遺物

6. 古墳時代の遺構・遺物

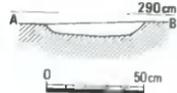
に切られているが、中・下層の溝を切っている。幅は50cm、深さ10cmを測り、底は平坦である。埋土は暗灰黄色土である。遺物は土器が少量出土しており、時期は百・古・Ⅱと考えられる。(平井勝)

溝130 (第424・425図)

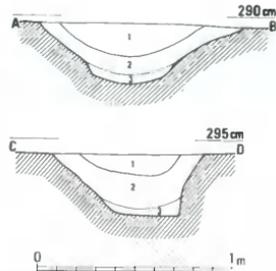
209P区の南東端寄りで見出された溝である。溝は北西から南東方向に流走するが、北西端は溝126の中・下層溝に取り付く。幅0.7~1m、深さ30cm前後を測る。遺物は土器が出土している。いずれも土師器で、837は壺、838と839は甕、840は小形丸底甕である。841と842は台付鉢であるが、841は底部外面をつまみ出した低い台である。843と844は高杯である。時期は百・古・Ⅱと考えられる。(平井勝)

溝131・132 (第426図、図版78)

溝132は、207Pから208Pにかけて、ほぼ直線的に見出された。溝131は、207P区で溝132に注ぎ込む状態で見出された。溝131は、幅約75cm、深さ30cmを測る。溝132は、幅約80cm、深さ25~30cmを測り、溝117のほとんどの部分が踏襲されている。埋土は3~4層に分層されるが、い

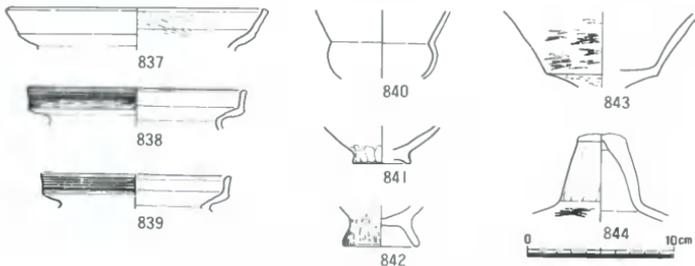


第423図 溝129



1. 暗灰茶色砂質土 2. 灰茶褐色砂質土  
3. 灰茶褐色粘質土

第424図 溝130



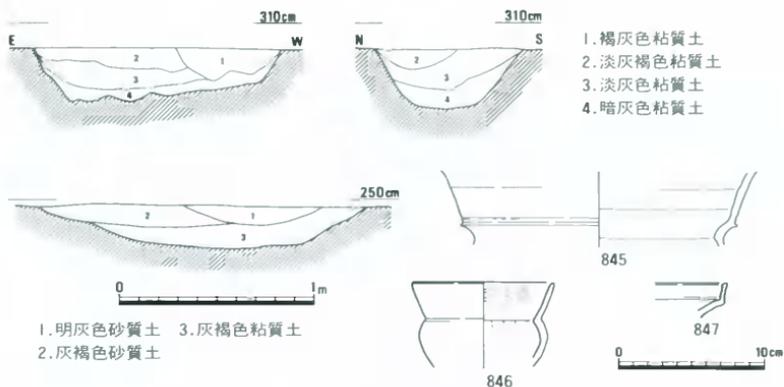
第425図 溝130出土遺物

れも灰色系の粘質土である。

遺物は、二重口縁の壺や甕と埴が出土しているが、いずれも小片である。百・古・Ⅰ~Ⅱの時期と思われる。(柳瀬)

溝133 (第427図)

207Pから208Qに見出された浅い窪み状の溝である。幅1~2m、深さ約20cmを測る。208



第426図 溝131・132・出土遺物

Qの南側で溝が途切れるが、208Rの溝134と同じ可能性がある。

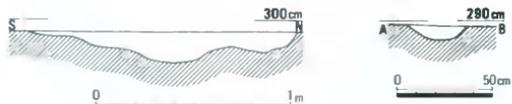
出土遺物はないが、土層的に古墳時代初めと思われる。

(柳瀬)

溝134 (第428図)

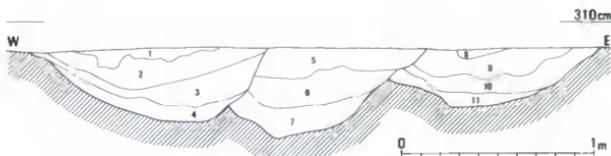
209R区の西端寄りで見出された溝で、古墳時代後期と考えられる水田の西端と平行して流

走している。水田層を除去した面で見出され、幅30cm、深さ10cmを測る。埋土は茶灰褐色土である。遺物は土器がわずかに出土した。いずれも細片であるが、古墳時代後期の須恵器も認



第427図 溝133

第428図 溝134



- |            |            |            |
|------------|------------|------------|
| 1. 灰褐色微砂   | 5. 灰褐色微砂   | 9. 青灰褐粘質微砂 |
| 2. 灰褐色粘質微砂 | 6. 灰褐色粘質微砂 | 10. 青灰褐色粘土 |
| 3. 青灰褐色粘土  | 7. 暗青灰色粘土  | 11. 青灰色粘土  |
| 4. 暗青灰色粘土  | 8. 淡暗灰褐色微砂 |            |

第429図 溝135

められ、検出面から考えても、後期に属する。

(平井勝)

溝135 (第429図)

207Q・Rから208Rにかけて検出された3条の溝の集合である。溝119および118の上層部分にあたり、弥生後期の用水路が埋まった後に、踏襲されて使用されたものと思われる。溝の上部を後世に削平を受けており、南にいくに従ってほとんどの部分が溝の底および底の痕跡のみを残すに過ぎない。比較的、残りのよい調査区北端部の断面(第429図)では、幅1.2mほどの溝が東から西へ、位置をかえて改修されていったことがわかる。

埋土は灰色～暗灰色を呈し、いずれも土師器片を少量含む。

時期は、百・古・I～IIと思われる。

(柳瀬)

溝136 (第430図)

207～8R区に検出された、溝135とはほぼ併行する溝である。幅約75cm、深さ約30cmを測るが、溝135と同様に後世の削平によって長さ10数mしか残存していない。一部で、底部の痕跡が溝135に合流する形で接していることから、同時期に機能していた可能性もある。遺物は、わずかに土師器片が出土した。時期は溝135とはほぼ同じとみてよい。

(柳瀬)

溝137 (第431図)

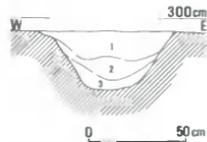
208S区に検出された幅1.5m、深さ20～25cmの溝である。調査区内では長さ5mのみ確認されたが、その南側は削平により失われている。埋土は2層に大別され、下層は粘質が強い。

遺物は土師器と須恵器の小片がわずかに出上しているにすぎないが、時期は杯身片から7世紀初め頃と思われる。

(柳瀬)

(8) 耕作痕

208区において、古墳時代後期の包含層の除去後、弥生後期水田を覆う洪水砂堆積の上面で検出した。不整形なピットが連続して連っており、さらにその列が平行して並んでいる(図版79)。



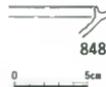
1. 灰褐色粘質微砂
2. 暗灰色粘質微砂
3. 淡暗青灰色粘質微砂

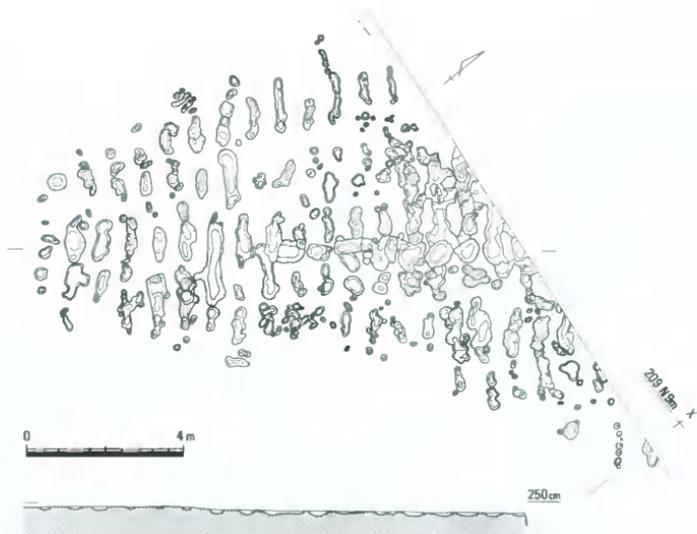
第430図 溝136



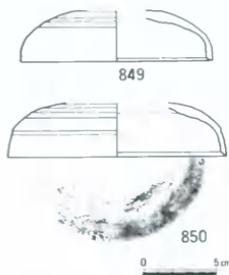
1. 淡灰黄色粘質土
2. 暗灰色粘土

第431図 溝137・出土遺物





第432図 古墳時代耕作痕 (S=1/150)



第433図  
古墳時代耕作痕出土遺物

列の軸線はそろっており、北56°西をとる。個々のピットは長径50～150cm、深さ20cm以内で、包含層と同じ黄灰色の微砂質土が入っている。

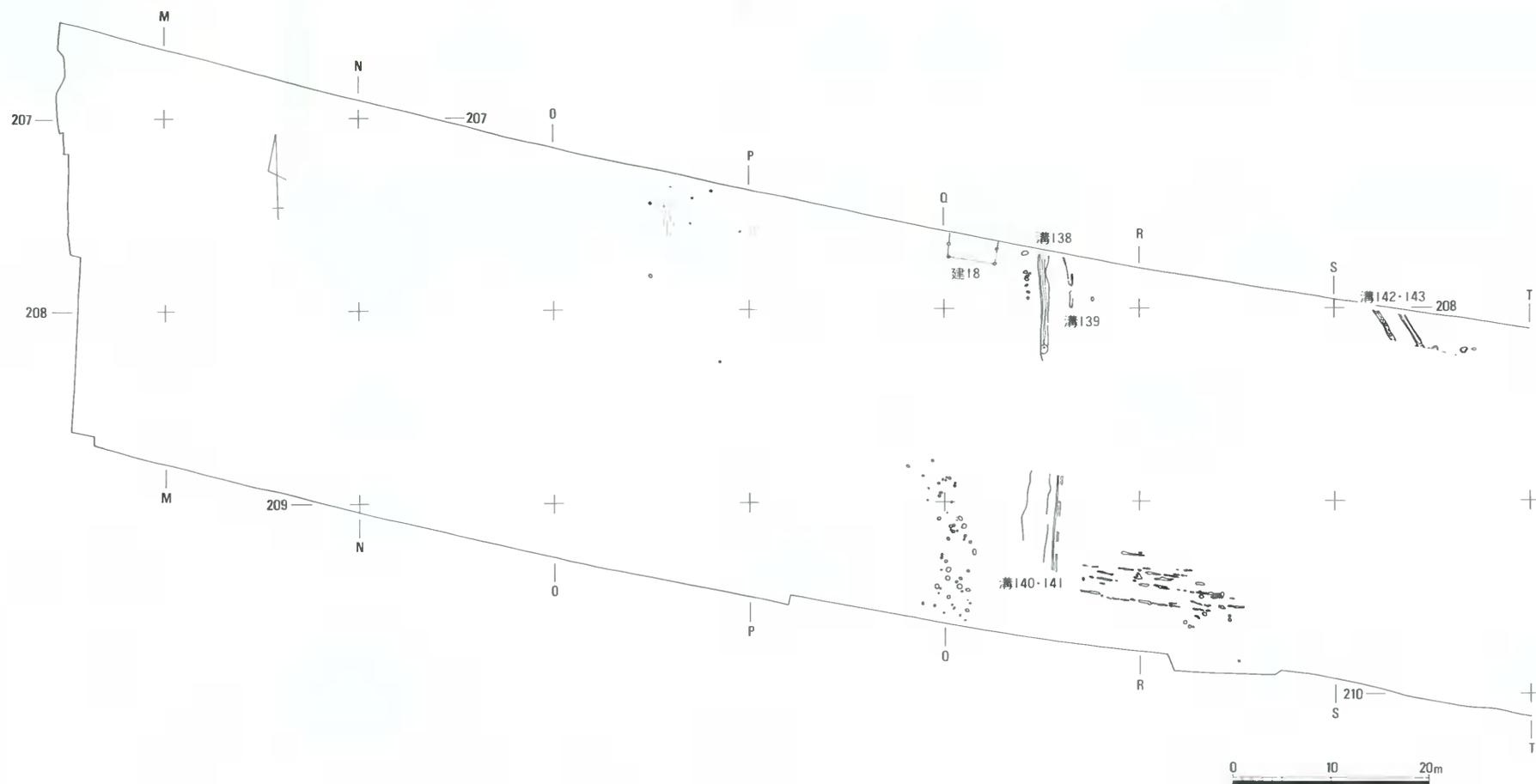
柱などを設置した状況は認められず、それぞれの列の方向がそろっていることから、スキ等による耕作の痕跡である可能性が考えられる。埋土中には6世紀中葉前後の須恵器破片が含まれているが、耕作によって古墳時代後期包含層が攪乱され遺構埋土中に入っているとも考えられ、その場合には遺構の時期は古墳時代後期中葉よりも新しいものとなる。

(宇垣)

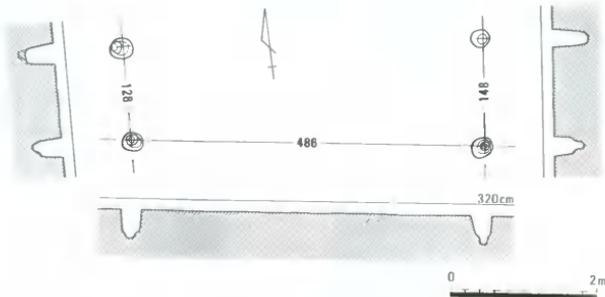
## 7. 古代・中世の遺構・遺物

### (1) 建物

建物18 (第435図)



第434図 高縄手B調査区の古代～中世遺構全体図 (S=1/500)



第435図 建物18

207Q区に検出された1×1間の建物である。北西の柱穴が多少西にふれて存在するが、周辺に同種の柱穴がないため建物と断定した。ただ、調査区外に柱穴が延びて規模が大きくなる可能性もある。柱穴の径は25cm前後、深さ40～45cmを測り、径15cm前後の柱痕跡が確認されている。掘り方の埋土は黄灰色、柱痕跡は暗茶灰色を呈す。

柱穴から遺物は出土していないが、土層的には中世の建物と考えられる。(柳瀬)

## (2) 溝

## 溝138

207～8Q区に検出されたほぼ南北方向の溝である。幅75～100cm、深さは西肩から約20cm、東肩から3～5cmを測り、地形的にはこの溝を境にして段差をもつ。埋土は灰黄色の粘土であるが、遺物の出土はない。

土層的には中世の溝と思われる。(柳瀬)

## 溝139

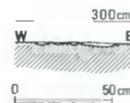
溝138から東に約2.5m離れた位置に、同溝とはほぼ併行して検出され、近・現代の野壺の一部を削平されている。幅30～50cm、深さ約3cmを測る浅い溝である。埋土は溝138と同様であり、これら2本の溝はその方向性や位置関係などから、条里の坪境に関連する溝かもしれない。

遺物は、土師器と須恵器片が比較的多く出土しているが、土層的には中世と思われる。

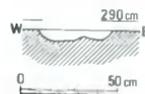
(柳瀬)

## 溝140

208・209Q区で検出された南北方向に流走する溝である。幅2.6m、深さ30cm前後を測る。



第436図 溝142



第437図 溝143

遺物は土器が出土している。土器は弥生土器、土師器や須恵器の細片で、弥生時代から中世にいたる各時期のものを含む。また円筒埴輪片も認められる。溝の時期は中世と考えられ、さらに近世まで踏襲して使用している。(平井勝)

溝141

208・209Q区で検出された南北方向の溝で、溝140の東側を平行して流走する。幅は40cm、深さ5cm前後を測る。遺物は出土しなかった。(平井勝)

溝142 (第436図)

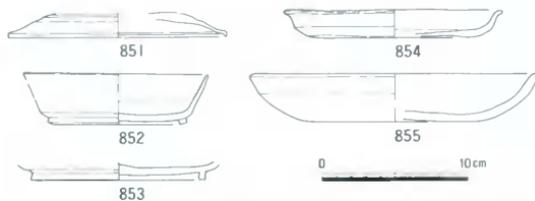
208S区に検出された北西-南東方向の溝である。幅45cmを測るが、ほとんど上部を削平されていて底部の凹凸のみ確認された。深さは深いところで2~3cmを測る。埋土は黄灰色粘土で、時期不明の須恵器が数片出土しているが、土層的には中世と思われる。(柳瀬)

溝143 (第437図)

溝142の東側に2mほど離れて、同溝とはほぼ併行して存在する溝である。幅約35cm、深さ5~6cmを測る。埋土は暗黄灰色粘土の単一層を示すが、底は2ヶ所に窪みがあり2本の溝の可能性もある。

遺物に7世紀代の須恵器片等が含まれるが、溝142と同様に中世と考えられる。(柳瀬)

(3) 包含層の遺物



第438図 207~209-L~P 包含層出土遺物

第438図に示した土器は207~9 L~P区の調査区から出土したものである。出土した層位は弥生時代後期の洪水砂層の上方にある暗灰色粘性微砂質土の上半から、さらに上層の灰色粘質土層である。

左列は須恵器、右列は土師器であり、854の内面は丹塗りにされている。いずれも奈良時代のもと考えられる。(岡本)

## 第4節 堅石調査区

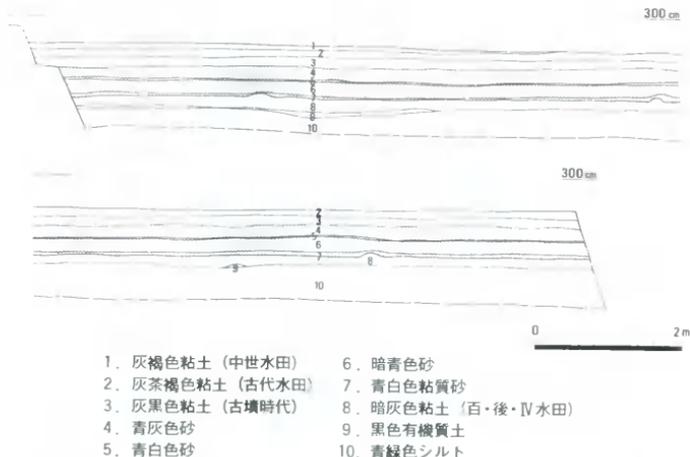
### 1. 堅石調査区の概要

堅石調査区は高縄手調査区の南、流田・開ノ山下調査区の西に位置する。今回報告するのは右岸用水の排水機場（通称沢田ポンプ場）と原尾島樋門高水敷護岸に係る地区である。

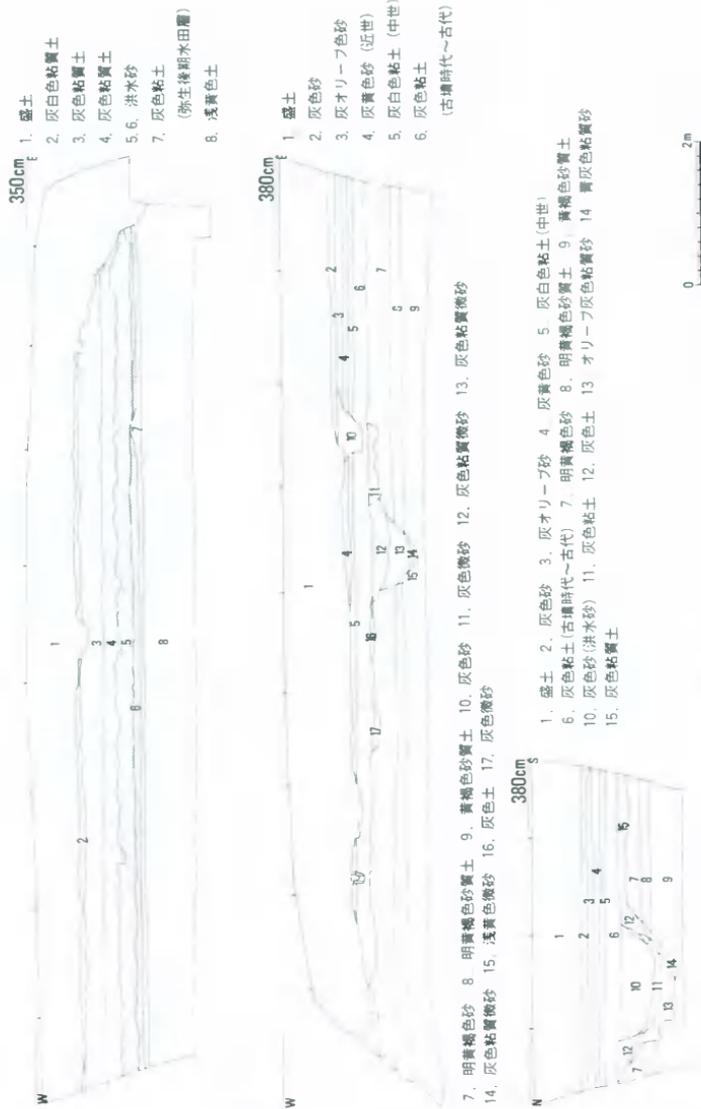
前者は1982年度に面積360㎡の倒L字形の調査区を発掘した。この調査区はP・N・S区の3小区に分割して発掘した。これは幅が狭く、しかも深くなることが予想されたため、調査中の安全と排土の都合上やむを得ずとった処置である。建設省側と隣接土地地権者双方の幅杭の位置の件で若干のトラブルが起こったのはこの調査区である。長年の懸案となっていたことをわが県教委が十分把握していなかったことが第一の原因である。遺構としては弥生終末期の水田と小畦畔が検出され、遺物は中世の少量の土器片が出土している。狭い調査区なので水田より下層の調査は上層確認のトレンチによった。

後者は前者の北に位置し、1989年度に調査した。面積は140㎡あって、東西2ヶ所7m間隔を開けて対置している。間の7mは原尾島樋門調査区で、既に報告書が刊行され、溝と水田が報告されている。ここでは溝が4本と水田畦畔が検出されている。

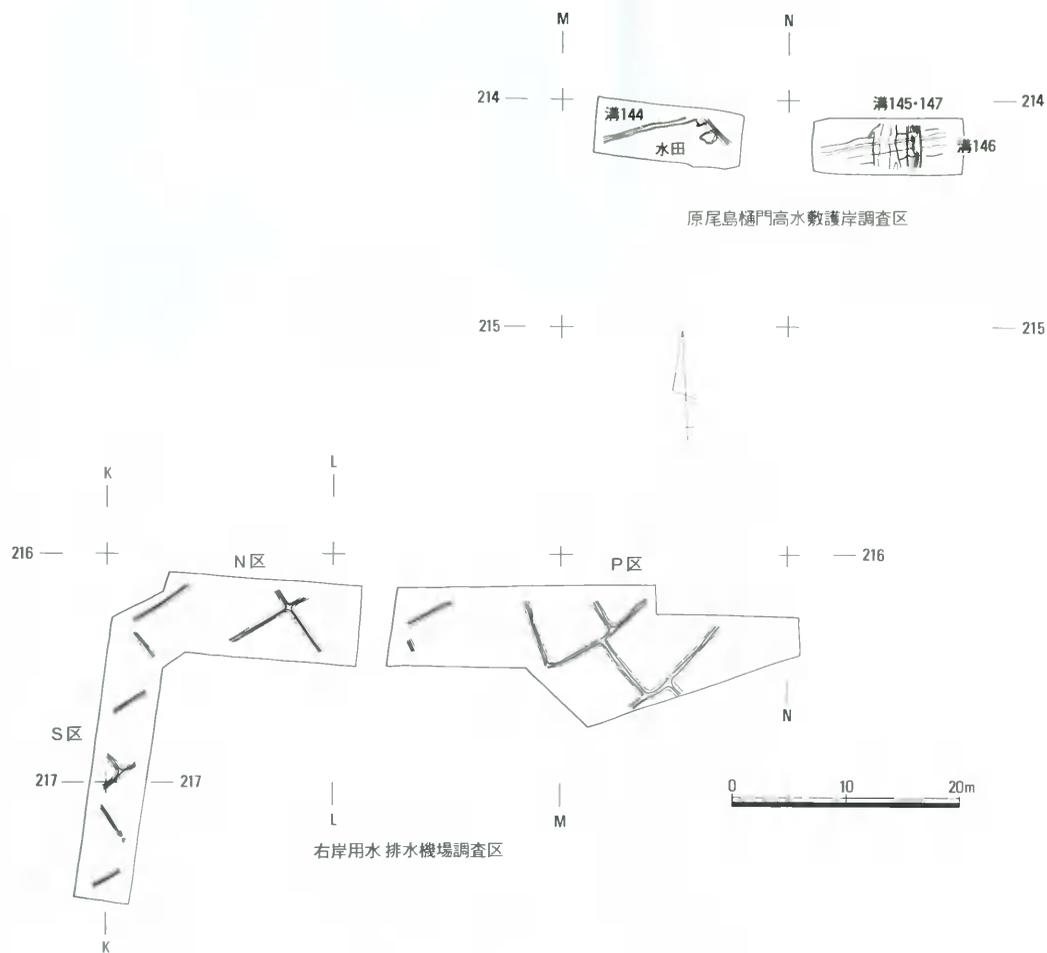
（浅倉）



第439図 堅石調査区土層断面図〈右岸用水排水機場調査区〉（S=1/80）



第440図 214-M・N<原尾島樋門高水敷護岸調査区>の北壁<上・中>と東壁<下>土層断面図 (S=1/80)



第441図 豎石調査区の遺構全体図 (S=1/500)

## 2. 遺構・遺物

## (1) 水田

排水機場検出の水田は、右岸用水で検出した水田と同時期である。右岸用水よりも若干調査幅が広いと、畦畔はX字形とハ字形に検出できた。畦畔の幅はP区がS区より少し広く25～30cmある。高さも5～10cmと高く残存している。一枚の水田の面積が推定できるほどの大きさのものがN区にあって、それは長方形を呈し、長辺が10m、短辺が5m、面積50㎡を測る。畦畔の方向は東西—南北線から45度ずれている。水田面の海拔は195～185cmである。

原尾島樋門高水敷護岸調査区の水田は、西側調査区で検出できた。洪水砂に覆われている。したがって同時期の水田である。 (浅倉)

## (2) 溝

## 溝144

214M区の北端寄り検出した東西方向の溝である。検出面は弥生後期水田層下の浅黄色土層上面で、埋土はオリーブ色砂質土である。幅は40cm前後、深さは5cmを測る。遺物は出土しなかったが、検出面から後期と考えられる。 (平井勝)

## 溝145

214N区の北寄り検出された南北方向の溝である。検出面は古墳時代から古代の遺物を含む灰色粘土層を除去した明黄褐色砂層上面である。幅は2m前後で、深さは50cmを測る。埋土は基本的に粘質の微砂である。遺物は後期の土器を含むものの、溝146を切っている事などから、溝の時期は古墳時代と考えられる。 (平井勝)

## 溝146

214N区の北寄り検出された東西方向の溝である。幅2.2m、深さ70cm前後の溝で、ほぼ平坦な底から、緩やかに壁が立上がる。埋土は上層に厚く洪水砂が堆積しており、その下は、粘質土ないし粘土となる。遺物は土器が少量出土している。時期は後期と考えられる。 (平井勝)

## 溝147

214N区の北寄り検出された南北方向の溝である。検出面は明黄褐色砂層上面で、埋土は灰色微砂である。溝の幅は1.3m前後、深さは25cmを測るが、底は凹凸が著しい。遺物は土器がわずかに出土した。時期は検出面から古墳時代と推定される。 (平井勝)

## 第5節 足洗調査区

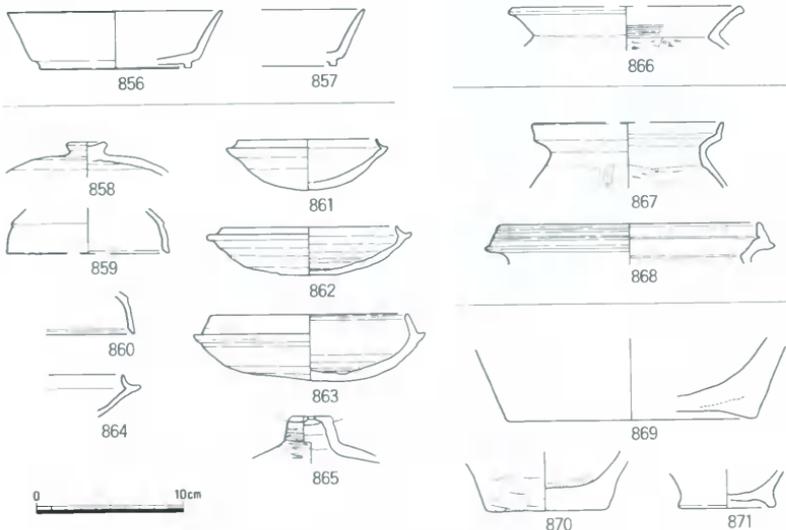
### 1. 足洗調査区の概要

足洗調査区は、沢田遺跡としては下流側（東側）あたる。このうち幅約200mの河川敷の中軸線から少し南側寄りに幅40mの低水路がすでに掘削されており、その南側の幅約20m、長さ約300mと、高縄手と足洗の小字境を南北に通じていた市道幅多9号線に接して残された幅30m、長さ約40mが今回報告する調査範囲である。

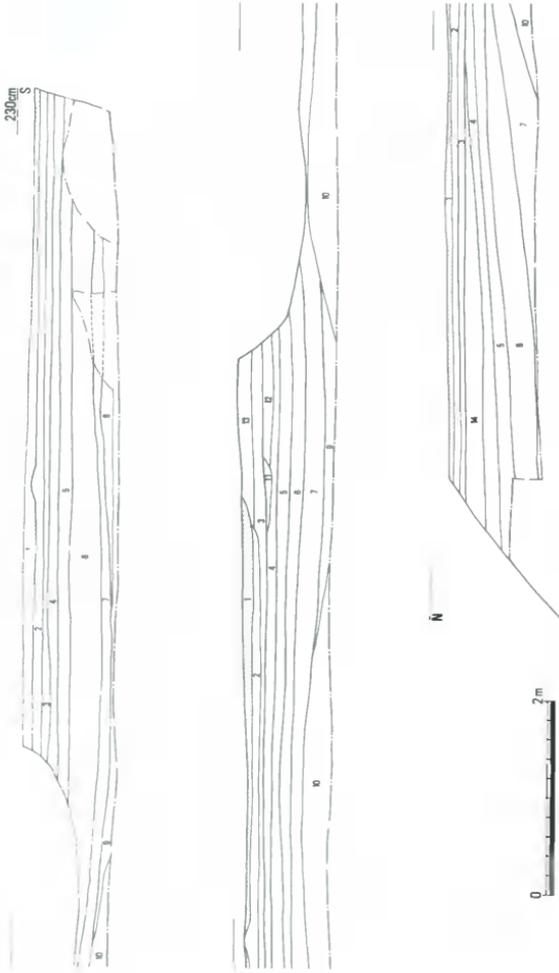
本調査区の大部分は低位部であるが、東側に接する四元調査区との境界付近では、南側から採山山塊の支丘陵が延びてきており、その先端が調査区に係り、周辺には微高地が形成されている。

調査区の基本的な層序は、表土（盛土）の下に旧耕作土、近世の洪水による粗砂などが続き、さらに下に向かって古代から中世の遺物を含む灰色微砂粘土、古墳時代の遺物を含む淡灰茶色微砂粘質土、弥生後期末の洪水で堆積した淡灰黄白色砂、弥生後期水田耕土と続く。

遺構・遺物は沢田遺跡の上流部（西側）に比較すると少ないが、縄文時代晩期から中世まで



第442図 CC・DD区包含層出土遺物



第443図 足洗調査区KKラインから西へ3mの南北土層断面図 (S=1/60)

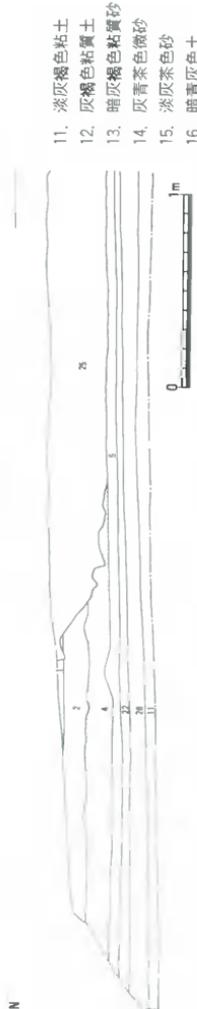


第444図 213-LL 南壁断面図 (S=1/80)

認められる。晩期に属する遺構はないが、土器は209・210BB・CC区と213・PP区から少量出土している。弥生時代前期の遺構はすべて溝で、212CC区や213QQ区で確認された。中期の遺構も溝であるが、いずれも幅が8m前後の大きなものである。後期の遺構は洪水砂で埋没した水田と、水田の下で検出された溝がある。水田は調査区のほぼ全域に広がっており、比較的整然と区画されている。

古墳時代の遺構も多くは溝で、それに土壌群が認めらるにすぎず、居住域でないことは明らかである。213QQの山塊をめぐる溝は少なくとも3回以上は掘削されており、長期間の使用がうかがわれる。古代から中世の遺構も溝が多い。このうち212・213GG区と212・213LL・MM区を南北に流走する溝は、間隔が約100mであり、周辺に広がる条里と関係する遺構と推定される。(平井勝)

なお第442図は211・212C～DD区の包含層から出土した遺物である。この地区では全面で弥生時代後期の水田が検出された。層序について述べると、まず上面に現代の耕土層があり、その下は黄色系の粗砂層となる。おそらく近世の堆積層であろう。それから下は粘土層になり、まず灰色粘土が10～15cmの厚さで認められる。その次は青灰色粘土で、色調は深くなるほど暗色となる。この層は40～50cmの厚さがあり、色調から3層に細分される。この下に弥生時代末の洪水砂層が10～15cmの厚さで堆積し、弥生時代後期の水田層の上面を覆っている。水田層の厚さは、北東から南西方向へ傾斜した地形を平坦にするためか、10～25cmと幅がある。水田層下はまた粘土層の堆積で、青灰色系の粘土が、濃淡の色調の帯となり、地形に沿って傾



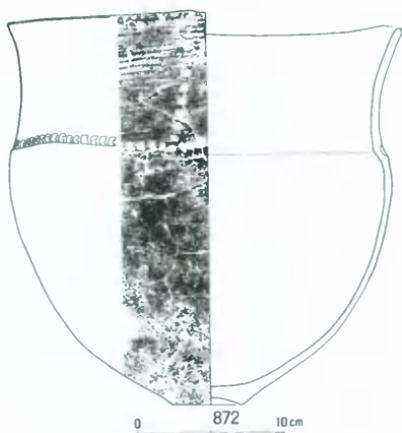
- 17. 淡灰青色微砂粘質土
- 18. 黄青灰色砂質土
- 19. 黄青灰色粗砂
- 20. 灰色微砂粘質土
- 21. 灰青色粘質土
- 22. 暗青灰色微砂粘土
- 23. 灰青色粘土
- 24. 攪乱土
- 25. 攪乱土
- 26. 淡灰青色微砂粘質土

第445図 足洗調査区212・213-NNの南西から北東方向土層断面図 (S=1/60)

斜した状態で堆積していた。水田層の下から淡・濃・淡・濃となっている。

さて、図示した土器であるが、左列の上段は灰色粘土層出土、下段はその下の青灰色粘土層出土である。青灰色粘土層では、当然ながら、下方ほどより古い遺物が出土するようである。右列の上段は洪水砂層出土、中段は後期水田層出土、下段是水田層下第2層の灰黒色粘土層から出土している。ただ869は水田の「島状高まり」の端部出土である。(岡本)

## 2. 縄文時代の遺構・遺物



第446図 213-PP 出土遺物

本調査区では209・210BB・CC区と213PP区から晩期の土器が出土したが、いずれも遺構に伴うものではない。前者は少量であるが、口縁部に刻目突帯をめぐらすもので、沢田式と考えられる。後者は包含層から一団体分まとまって出土した(872)。深鉢は、口縁部の4ヶ所をわずかに突起させ、そこから爪形文を垂下させ、頸部と胴部境を横位にめぐらす爪形文に連結させている。調整は頸部外面を二枚貝条痕、胴部はヘラ削りで仕上げている。時期は谷尻式と考えられる。(平井勝)

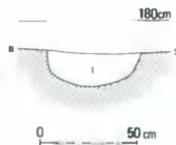
## 3. 弥生時代前期の遺構・遺物

### (1) 溝

溝148 (第447図、図版83)

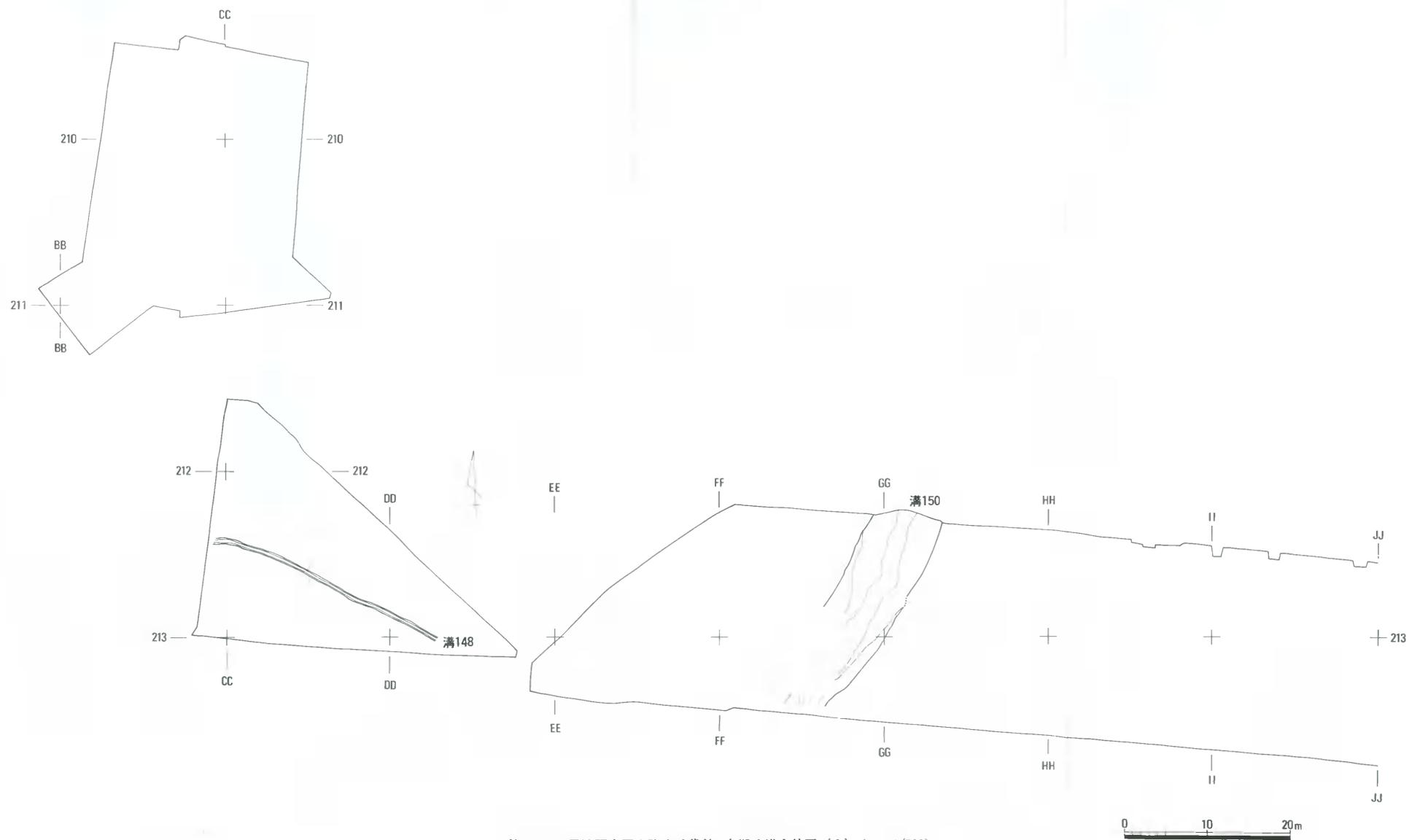
212CC区の中央付近から212DD区の南西隅に延びている。軸65cm、深さ22cmを測る。

溝壁の傾斜は急で、底部は中央部分が凹み、断面形ではU字形となっている。埋土は灰黒色粘土1層で、炭の小粒や微砂を含んでいた。この溝の走行は西北西から南東方向をとるが、この方向は弥生時代後期水田の畦方向とはほぼ平行し、地形に沿ったもので、等高線と平行している。遺物は出土しなかったが、この溝の検出面より上方に位置する包含層からは弥生時代前期の土器片が出土していることから、この溝の年代も弥生時代前期と考えられる。(岡本)

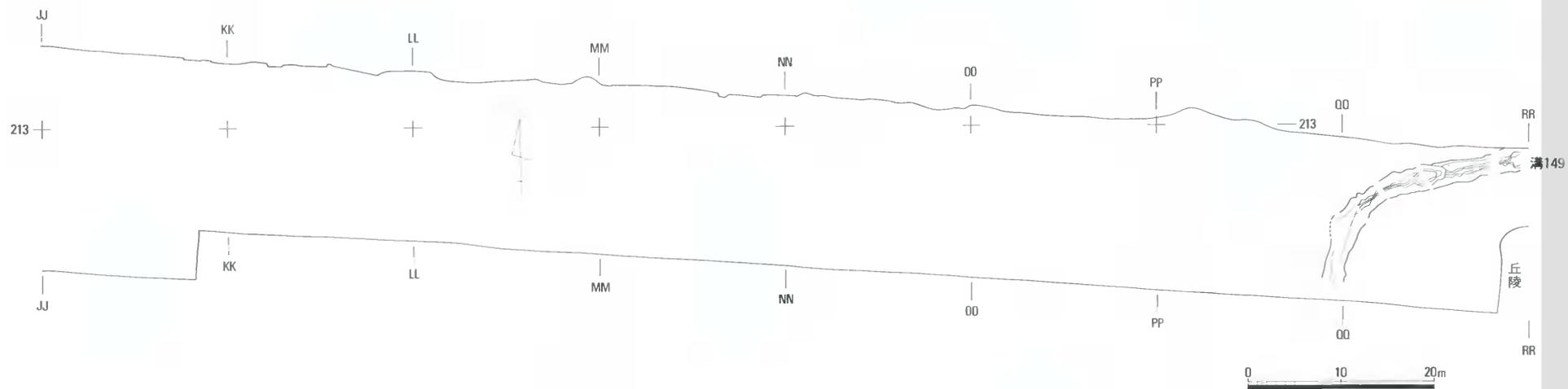


1. 灰黒色粘土

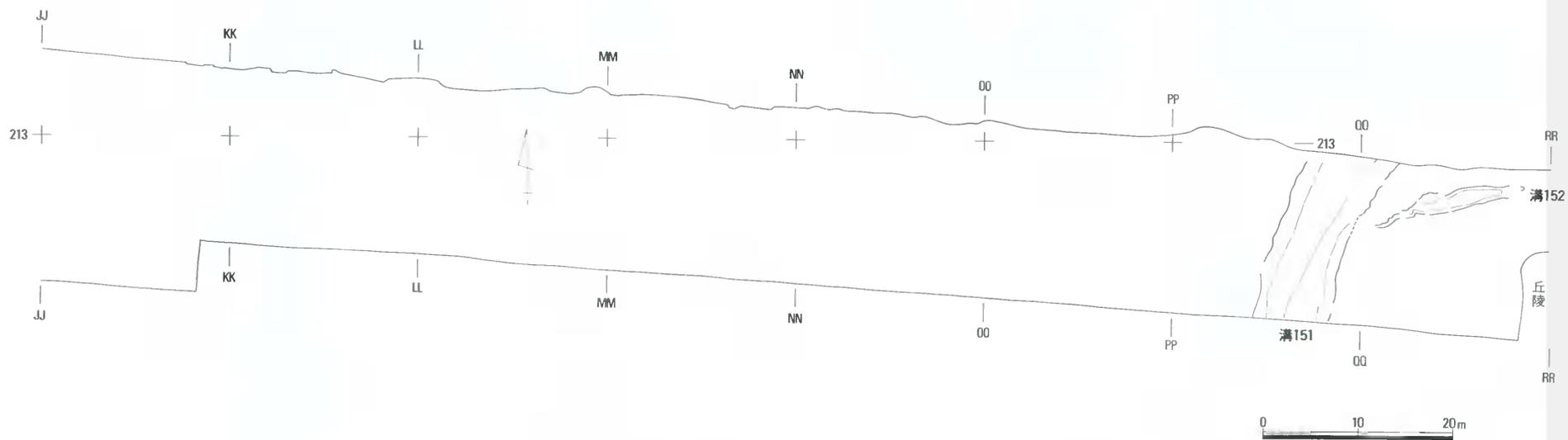
第447図 溝148



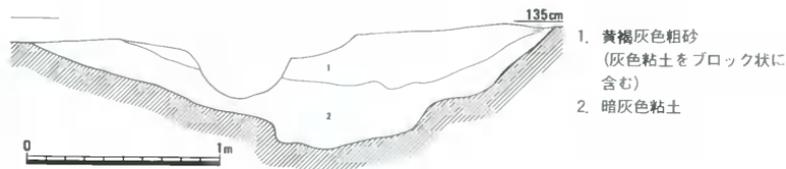
第448図 足洗調査区の弥生時代前・中期遺構全体図(1) (S=1/500)



第449図 足洗調査区の弥生時代前・中期遺構全体図(2) (S=1/500)



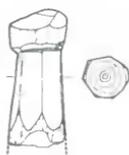
第450図 足洗調査区の弥生時代中期遺構全体図 (S=1/500)



第451図 溝149

溝149 (第451図、図版83)

213Q区で検出された山裾をめぐる溝である。中・後期ないし古墳時代以降の溝が重複しているため、残存状況はよくない。幅2.5m、深さ50cm前後を測る。底は凹凸が著しく、壁は緩やかに立上る。遺物は土器と木器が出土している。土器は少量であるが、胎土などから前期と考えられる。木器は断面円形の棒の両端近くを削り込み、両端は削り残すことによって頭部を作りだしている。(平井勝)



## 4. 弥生時代中期の遺構・遺物

## (1) 溝

溝150 (第453図、図版84)

212・13FF区と212・13GG区の境界付近で検出された大形の溝である。幅8.75m、深さ75cmを測る。溝壁の傾斜は緩やかで、断面形は皿状を呈する。底面は平坦で、幅2m前後である。部分的に溝壁の途中に肩をもち、傾斜が変化している。

上層断面を観察すると、埋土は4層に分けられるが、上2層は粘土、下2層は粘性砂質上で、大きく二分される。下層の2層には粘土の薄層が挟まれ、流水の変化に伴う砂層と粘土層の互層が形成されたことを示している。このことから溝としての機能に疑問はない。ただ、上層の粘土層の堆積時には溝の機能は停止していたと考えられる。このことに関連して、第453図にみられるような分層の不明瞭さがある。図の西岸側では分層線が途中までしか明瞭でなく、溝壁の立ち上がりも判然としなかった。これに対して、調査区南壁の土層観察では、逆に東岸側での溝壁が明瞭でなく、上層はそのまま包含層として東へ続いているように見てとれた。このようなことから、あるいは、上層は溝の埋土ではなく、上層の包含層である可能性も否定しきれない。その場合には、溝の規模は1～2m程度狭いものになる。

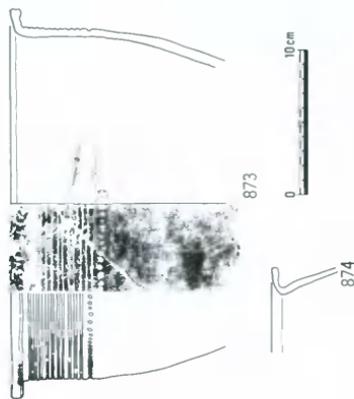
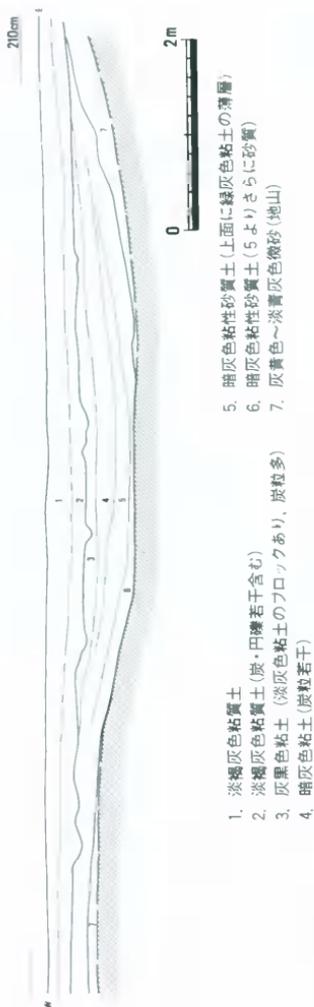
第452図 溝149  
出土遺物

出土遺物は少ないが、2点の土器を図示した。873は下層から出土したもので、百・前・Ⅲ期に属する。874は百・中・Ⅰ期であろう。この溝の上方にある包含層からは百・中・Ⅱ期の土器が出土していて、溝150が弥生時代前期末～中期前葉にかけての遺構であることが知られる。

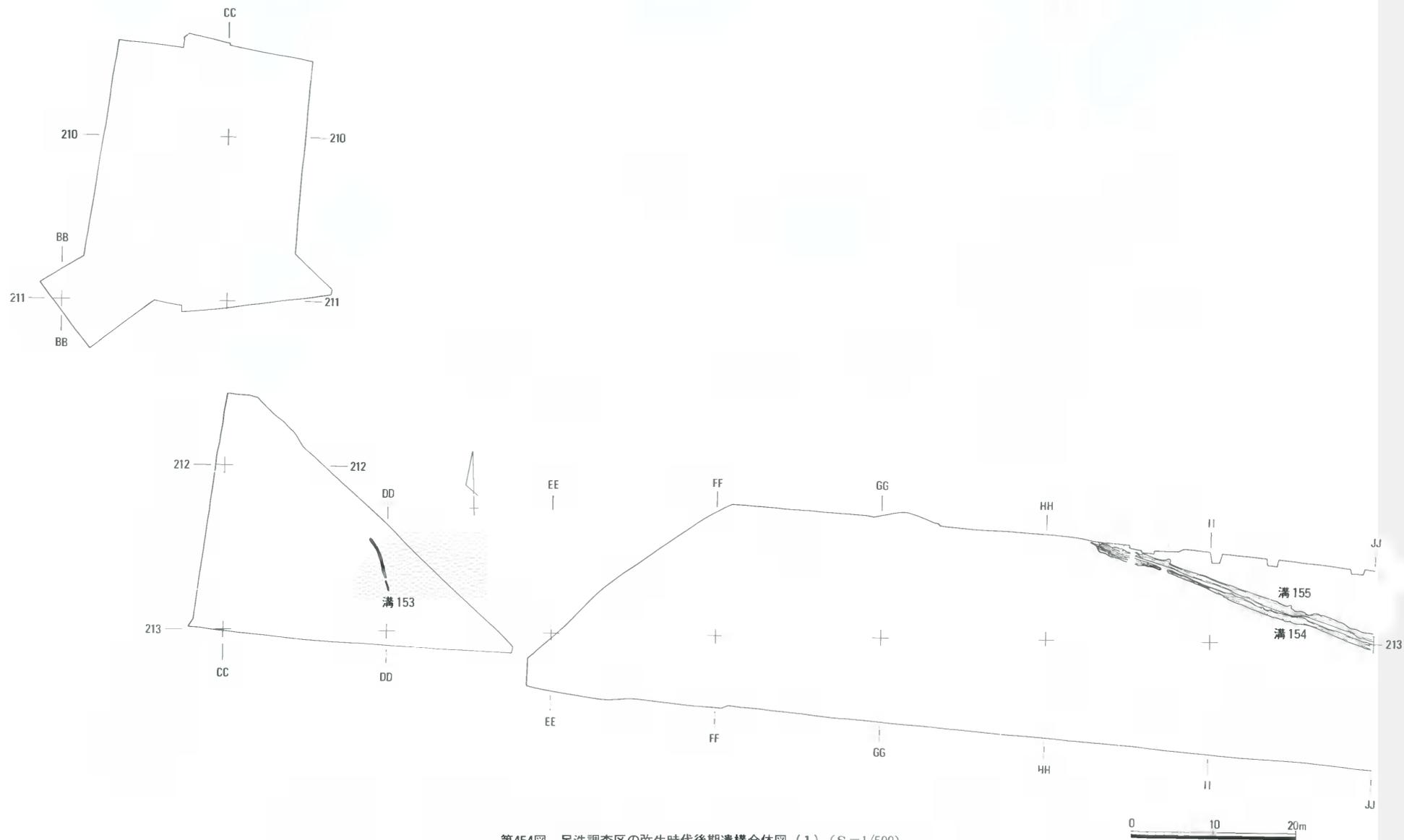
ただ、874の出土層が上層か下層か明確でないため、あるいは前述のような分層の不明瞭さを考慮に入れると、溝150の年代は百・前・Ⅲに限定されることも考えられる。 (岡本)

溝151 (図版84)

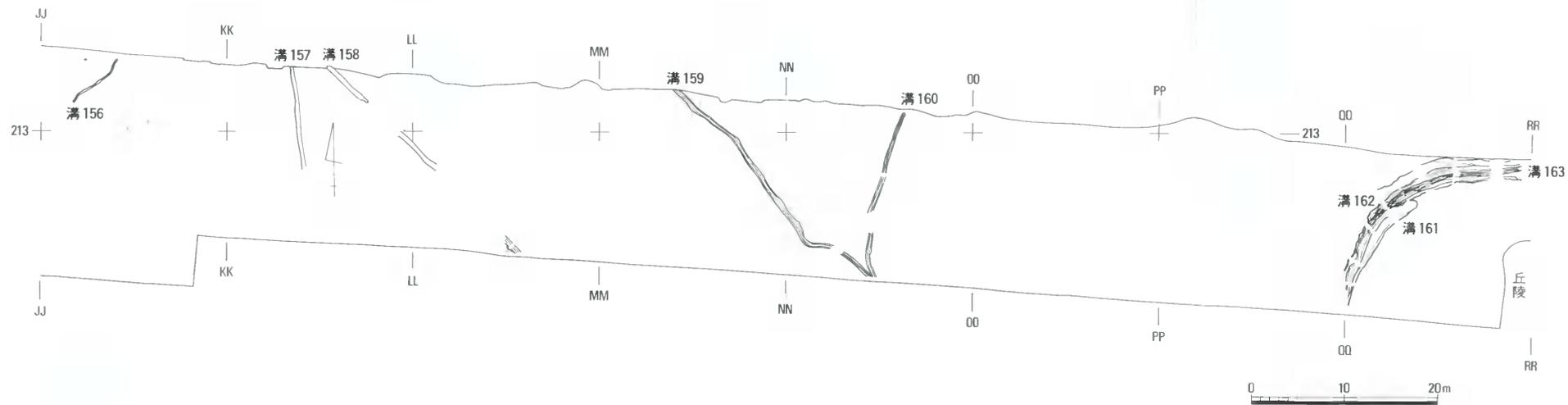
213PP区で検出された溝で、おそらく山裾にそって流走すると考えられる。後期の水田層を除去して検出され、埋土は上から暗褐色粗砂混り土、褐色粗砂混り土、灰青色砂混り土、暗灰色微砂粘質土である。このうち最下層には中期の土器がふくまれていた。溝の幅は7.5m前後であるが、深さは約50cmと浅い。底は中央が最も深く、壁は非常に緩やかに立上る。遺物はすべて土器で、直口壺および甕などが認められる。直口壺は底部が台のように張り出し、タマネギ状の胴部には刺突分が2段めぐる。甕は逆L字状に外反する口縁をもつ。時期は百・中・



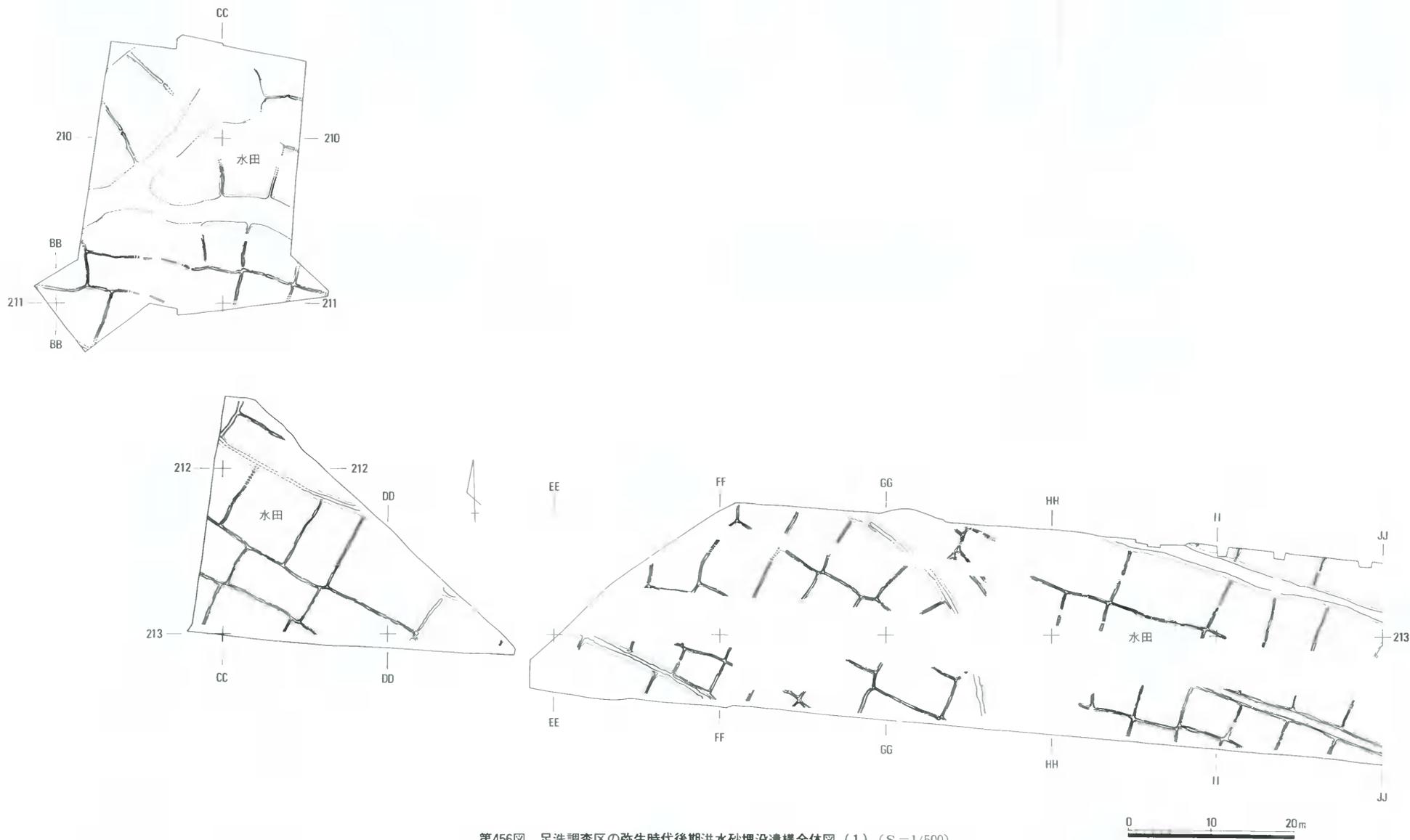
第453図 溝150・出土遺物



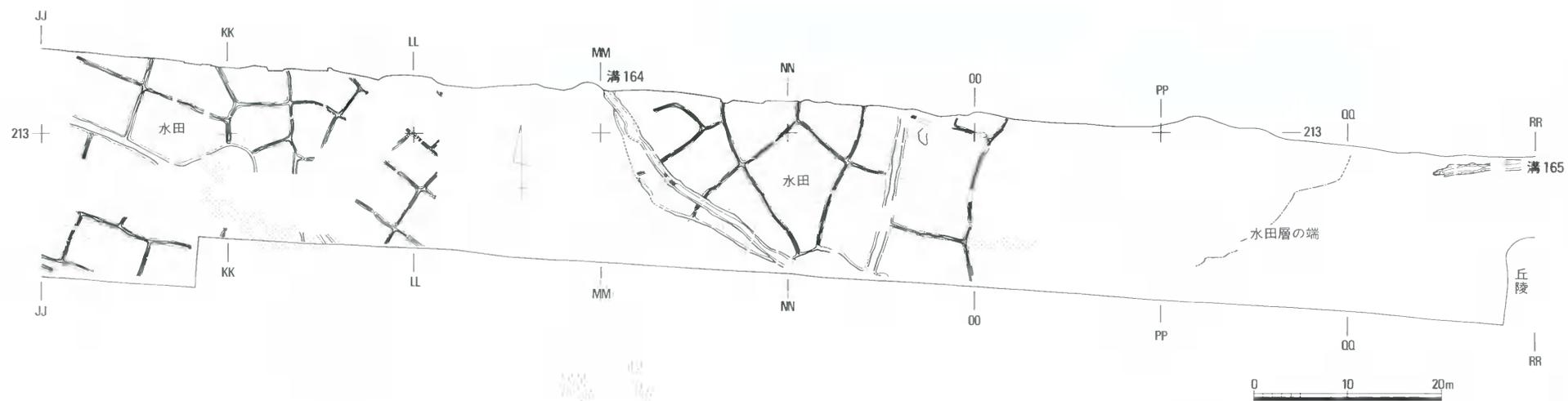
第454図 足洗調査区の弥生時代後期遺構全体図(1) (S=1/500)



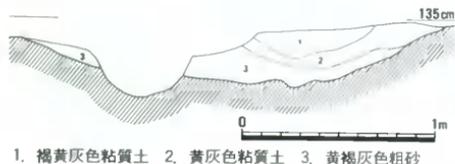
第455図 足洗調査区の弥生時代後期遺構全体図(2) (S=1/500)



第456図 足洗調査区の弥生時代後期洪水砂埋没遺構全体図(1) (S=1/500)



第457図 足洗調査区の弥生時代後期洪水砂埋没遺構全体図(2) (S=1/500)



1. 褐黄灰色粘質土 2. 黄灰色粘質土 3. 黄褐色灰色粗砂

第458図 溝152

深さ30cmを測る。底は凹凸があり、壁は緩やかに立上がる。遺物は土器の小破片がわずかに出土した。時期は中期と考えられる。

(平井勝)

Ⅱと考えられる。(平井勝)

#### 溝152 (第458図)

213Q Q区の北端で検出された溝で、山裾にそって流走すると考えられる。弥生時代後期以降の溝が重複しているため、上半部は削平されている。溝の幅は約2m、

## 5. 弥生時代後期の遺構・遺物

### (1) 水田

#### BB～LL区の水田

この地区の水田は、「島状高まり」や大畦・小畦が複雑に組み合い、旧河道のような低位部上に形成された規則的な区画の水田とは様相を異にしている。これは当然に、地形の複雑さから導かれたものである。このことについては『沢田2』の開山下調査区の水田の項でもかつて述べたが、全体的には、操山丘陵の裾が緩やかに傾斜して、やがて旧河道のような低位部に落ち込み、今度は北に向かってじょじょに高まっていく地形と捉えることができる。この調査区の50m程南にあたる沢田第4調査区(『旭川放水路(百間川)改修工事に伴う発掘調査Ⅱ』百間川沢田遺跡1 1981年11月)では「島状高まり」が検出され、また、隣接する前述の開山下調査区でも25m南で「島状高まり」がみつき、このあたりが微高地であったことを示している。次に、209・210BB・CC区でも「島状高まり」が検出されたことから、この付近も微高地であったと考えられ、この二つの微高地の間が旧河道にあたっていたとみられる。

209・210BB・CC区では北西隅と中央部で「島状高まり」が検出された。中央部のものは東へ向かって二股に分かれ、一つは北東方向へ、一つは東から南東へ湾曲して延びていくようである。ただ、北東方向のものは丸くなって終わる可能性もある。西端での幅は約4m、東へ延びているものも幅約4mを測る。北西隅の「島状高まり」と北東方向へ延びる「島状高まり」で挟まれた水田は、中央に水口をもつ、幅30cm、高さ7cmの小畦によって区画され、『沢田2』高縄手B調査区の带状水田と類似している。水田1区画の面積は推定70㎡で、水田面高は海拔215～221cmを測る。二股に分かれた「島状高まり」に挟まれた水田は田面高海拔219～220cm

### 第3章 第5節 足洗調査区

で、水田の1区画面積は50㎡と推定される。この水田では2ヶ所の水口が確認され、その施設率の高さを推測させる。

211～213CC～LL区の水田は、東西方向の大畦と土手状の「島状高まり」によって、大きく四つの区画に分けられる。それぞれの区画は大畦、あるいは「島状高まり」を挟んで少しずつ田面高を変化させていて、段差の低い階段状をしている。南から北へ向かって高さを増し、それぞれ3～7cm、3～5cm、2～4cmの差が認められる。212HH区から213JJ区にかけて検出された土手状の「島状高まり」は最大幅が約2.5mであるが、209・210BB・CC区の東から南東へ伸びていた「島状高まり」とつながる可能性が高く、212FF区の北東部から213GG区へ大きく湾曲している大畦は、この土手状の「島状高まり」から派生していると推測される。したがって、209・210BB・CC区の「島状高まり」より南の水田は、前述の四つの大区画のうち、南から二番目の区画と連続するものと考えられる。

先の四大区画のうち、もっとも南の区画では、211CC区から213EE区へほぼ直線的に伸びる大畦と平行、ないしは直交するように大畦・小畦が設けられ、1枚の水田は方形を呈している。大畦と平行する方向、つまり等高線と平行する方向の小畦が直線的に伸びているのに対し、直交する方向の小畦が、平行する小畦を越えて直線的に伸びていかないのは、先の横田調査区や高縄手B調査区の旧河道の水田でも観察されたことであり、水田造営の原則と考えられる。もっとも広い1枚の水田区画は105㎡、狭いものは44㎡と計測される。大畦は幅1～1.3m、高さ20cm前後あり、小畦は幅35～50cm、高さは4～7cmを測る。212DD区で、大畦と直交する大畦が検出され、その幅は1.15m、高さは23cmを測る。この大畦との直交部分では東西方向の大畦が南へ大きく張り出して、あるいは「島状高まり」がここに存在している可能性が考えられる。また、211BB区の調査区南端でも大畦の存在が壁面観察で確認され、東西方向の大畦がさらに西へ伸びていたことが推測される。このもっとも南の大区画では小畦には水口が認められず、直交する大畦のみにみられた。このことも旧河道の水田に共通する状況である。

南から二番目の大区画は、210BB区の土手状の「島状高まり」から212・213GG区の大畦へかけて、大きな弧状の区画線が存在する。小畦は区画線に直交して取りつくことが一般的なため、この大区画内の水田は一部に多角形の変形区画が生じている。水田1区画の面積も26㎡から52㎡まで幅がある。大畦が弧状を描くことについては、おそらく旧河道の流路との関係があるものと考えられる。210BB区での水田面の高度は海拔209～215cmを測るが、213GG区では海拔200cmとなり、南東部へ向かって下がっているため、旧河道も西から東へ流れていた可能性が高い。弧を描く大畦は幅1.4m、高さ25cmを測る。この大区画内での水田では水口がかなり

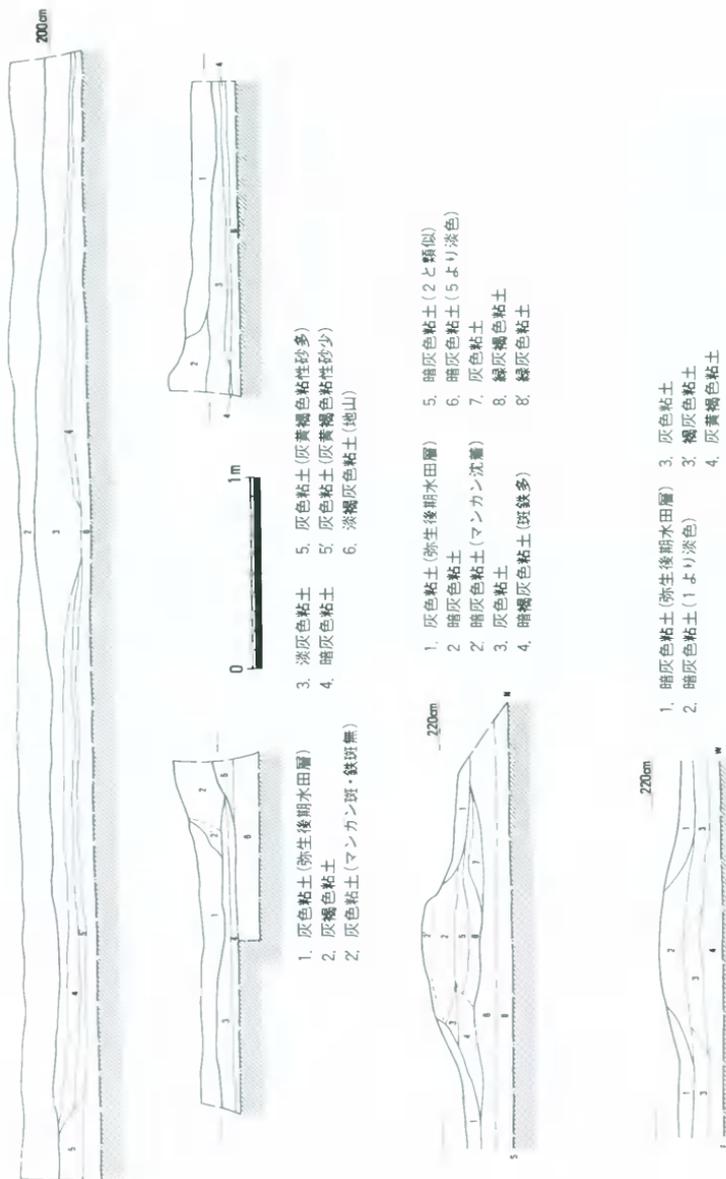
確認され、南側の大区画内の水田とばかん漑方法が異なっていたと考えられる。水口を通して配水する微高地上水田型とみられる。

さらに北側の大区画は、西北西から東南東に伸びる土手状の「島状高まり」と、前述の南東から南へ大きく湾曲する大畦に挟まれた部分にあたり、扇形を呈する。この大区画内の水田では、2条の小畦を平行して走らせた水路が検出され注意される。扇形に開く地形から推測される、南東方向の調査区外に広がるであろう多くの水田区画に水を供給するためには、水口を通じてのかん漑だけでは非効率なため、下の水田に水を直接供給する水路を設けたものであろう。2条の小畦は幅40～60cm、高さは5cm前後で、他の小畦とは大きく異ならず、わずかに幅がある程度にすぎない。2条の間隔は下端で50～75cmを測る。この水路は212GG区では南の大畦と平行し、213II区あたりからは北の「島状高まり」と平行するようになる。水路のはじまりは212GG区の北西にある1枚の水田の東南辺に設けられた水口であり、そのすぐ北に隣接して、水路の北側に位置する水田区画へ水を供給する水口が開けられている。水路の北側の水田区画は、水路と直交あるいは、平行する小畦によって形成され、南北方向の小畦の中央付近に水口が認められる。水路南側の水田区画も同様であるために、水路の水口の南にも水路南側の水田区画に水を供給したであろう水口が、おそらく存在したと推測される。このような水路は『沢田2』高縄手B調査区のR～V水田でも検出されたことがあり、やはり扇形の大区画内にあったことが想起される。

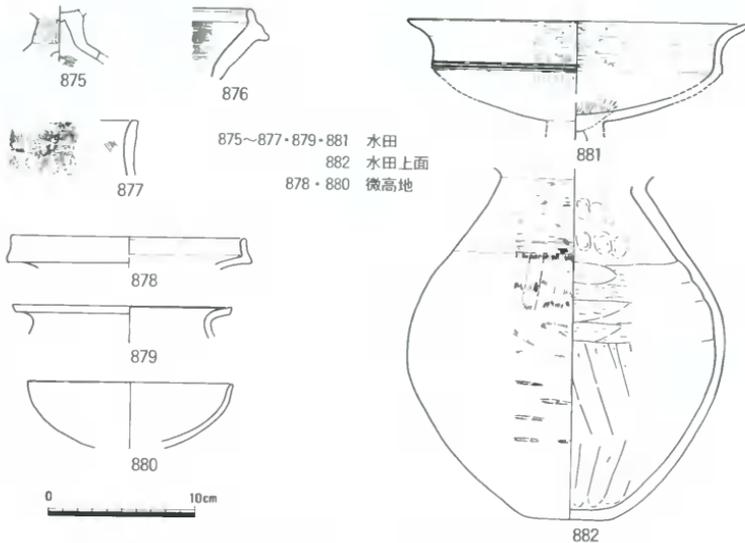
ただこの場合は、今回の報告分の調査によって明らかになったことであるが、水路の水口は、微高地を貫通してきた溝117と直結していて、1枚の水田の一辺に複数の水口を設けて水を分配するものではない。しかし、多量の水が必要なことは確かであるため、扇形区画のかなめ、つまり、弧状の大畦と土手状の「島状高まり」の交点付近で、北西方向からの溝が開口していることが十分に推定される。なお、212GG区の水田面の高度は海拔212cm、213JJ区での水田面高度は海拔206cmを測る。

もっとも北の大区画は、土手状の「島状高まり」と直交して小畦があり、212II区あたりの水田は長辺が約14.5mと長く、1枚の水田面積は推定で80㎡と広い。しかし、213JJ区と213KK区の境界付近では、大畦状に細くなった「島状高まり」が急に円形に変化するため、これに小畦を直交させることから水田区画が大きく乱れ、1枚の面積も縮小する。この大区画内の小畦にも水口がほとんどで認められ、微高地上水田型を呈している。

第459図は大畦の土層断面図である。上二段は、もっとも南の大区画の北端大畦で、上が縦断、下が横断面である。また、下二段は大きな弧状を描く大畦の横断面である。これらを見ると、大畦が削り出しによるものではなく、盛り土によって形成されたことがわかる。各層とも



第459図 弥生時代後期水田大畦土層断面図



875～877・879・881 水田  
882 水田上面  
878・880 微高地

第460図 209～213-BB～LLの水田および島状高まり出土遺物

粘土層で、なかには水田層と判別の困難な層もあった。しかし、下から二番目の図のように、複雑な土層関係を示すものがあり、大畦が修復されながらも、長期間使用されたことを考えさせる資料もみられた。また、第464図は212HH区西端での土手状「島状高まり」の断面であるが、溝154の上方に土が盛りされているのが明らかであり、この「島状高まり」も盛り土によるものであることがわかる。これらのことから、この地区の水田は、一度微高地を削平して田面を調整した後、「島状高まり」や大畦を設け、その後に、小畦で細分画していったものと推測される。

この地区の水田の時期を示す資料は少ないが、第460図に関係土器を図示している。875～877は水田層から出土したもので、百・後・Ⅱ～百・後・Ⅳに当たる。882は口縁が欠けた壺で、210CC区の水田面直上から転んだ状態で出土した。また、878と880は210CC区の「島状高まり」の上層部から出土したもので、いずれも百・後・Ⅳ期に属すると考えられる。このような土器の出土状況から判断すると、この地区の水田は弥生時代後期の後半～末を中心に経営されていたとみられる。

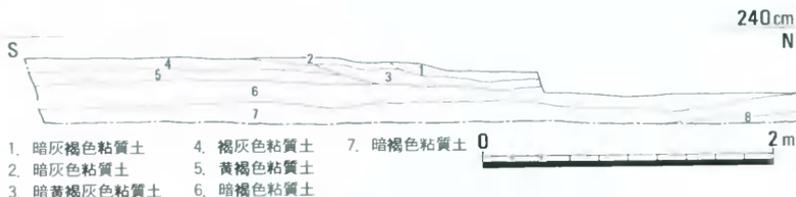
(岡本・浅倉)

#### MM～〇〇の水田

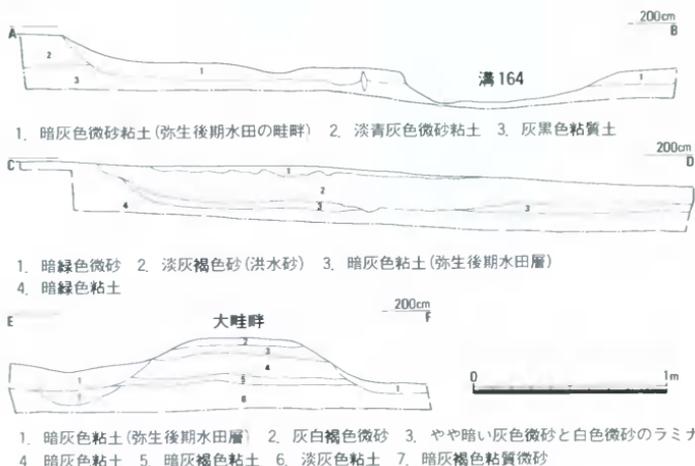
MMラインから東側に広がる水田は、MMラインから南東に延びる島状高まりによって、西

側に広がる水田と画されている。この島状高まりがどのような形状であったのかは、すでに水路が掘削されていたため明確でないが、帯状を呈していた可能性が強く、N-Nラインの東側でコブ状に膨れている。ここから北に向かって大畦畔がほぼ直線的につくられており、島状高まりとの間をさらに小畦畔によって区画している。

南北方向の大畦畔の東側にも水田は広がるものの、O-Oラインの小畦畔から東側では畦畔と考えられるものは検出されなかった。しかし、水田層と考えられる灰黒色粘土層が、213P区の一点破線まで認められることから、この範囲までを水田とした。ただO-Oラインから東側の



第461図 島状高まり土層断面図 (S=1/40)



第462図 弥生時代後期水田土層断面図

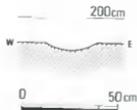
田面は、畦畔がみられる田面に比べて凹凸が著しい。

水田面の標高は213MM区で1.6~1.7mを測るが、〇〇ラインでは1.2m、東端では1mと、東に向かってしだいに低くなっている。しかし最も段差が著しいのは213N区の南北方向の大畦畔の西側と東側であり、その比高差は25cmを測る。

なお、MMラインの東側を島状高まりから一旦水田部を通り、再び島状高まりに入る溝164は、畦畔を切っており、確実に水田より後出であるが、水田を覆う洪水砂が埋土となっていた。溝が掘削されたときには水田の機能は停止していたのであろうか。(平井勝)

(2) 溝

溝153 (第463図)



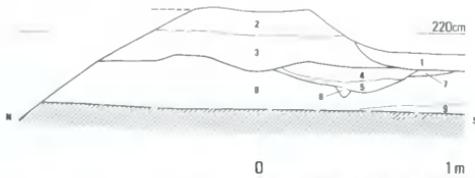
第463図 溝153

212C C区と212D D区の境で検出した溝状遺構である。幅29cm、深さ4cmで、全長は6.8mを測る。弥生時代後期の水田層を除去した段階で検出され、埋土は水田層と同じ暗青灰色粘土である。溝としての機能は考えにくく、あるいは耕作痕かとみられるが、水田区画とは平行しない。出土遺

物はないが、土層から弥生時代後期の遺構と考えられる。

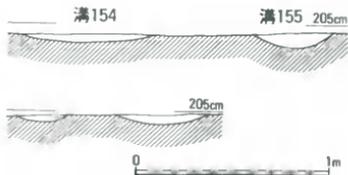
(岡本)

溝154・155 (第464・465図)



- |                   |                |           |
|-------------------|----------------|-----------|
| 1. 灰色粘質土(弥生後期水田層) | 4. 暗灰色粘質土(炭粒多) | 7. 緑灰色粘質土 |
| 2. 暗褐色粘質土         | 5. 緑灰色粘質土      | 8. 黄色斑緑灰  |
| 3. 褐色粘質土 } (水田大畦) | 6. 灰色粘質土       | 9. 暗灰色粘質土 |
|                   |                |           |

第464図 溝154



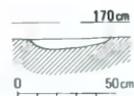
第465図 溝154・155

212HH・II区の南寄り

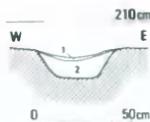
で検出された北西から南東方向に流走する溝である。2条の溝は20~50cmの間隔を保ちながら平行して流走する。この溝は、後期水田の細長い島状高まりの南側にそって掘られているが、幅、深さともに一定せず、一部途切れる場所もある。埋土は暗灰褐色粘質微砂である。遺物は出土しなかったが、検出面から後期と考えられる。(平井勝)

溝156 (第466図)

212J J区の南西寄りで検出された溝である。

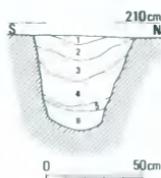


第466図 溝156

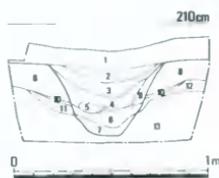


第467図 溝157

溝は北東から南西方向にわずかに蛇行しながら流走する。幅40cm、深さ5～10cmを測り、断面は浅い皿形を呈する。埋土は暗灰褐色微砂粘土である。遺物は出土しなかったが、検出面から後期と推定される。(平井勝)



1. 灰色粘質土(水田層沈下)
2. 淡灰色微砂質土
3. 暗灰色粘質土
4. 黒灰色粘質土
5. 黒色粘質土
6. 黒褐色粘質土



1. 暗灰色微砂粘土(弥生後期水田層) 2. 灰茶褐色粘質土
3. 灰茶褐色粘質土 4. 暗灰茶褐色粘質土 5. 暗茶色粘土
6. 暗灰色粘土 7. 茶灰色粘土 8. 灰黄綠色粘質土
9. 黄褐色粘質土 10. 灰黒色粘土 11. 灰茶褐色粘質土
12. 茶色土 13. 暗茶色粘土

第468図 溝158

溝157 (第467図、図版91)

212・213K K区に検出された、ほぼ南北方向の溝である。弥生後期水田層の直下に存在し、幅40cm、深さ10～15cmを測る。溝内の堆積土は2層に大別されるが、その上部は後期水田層がわずかに陥没した形を呈している。遺物は弥生後期土器片が少量出土しているにすぎない。

(柳瀬)

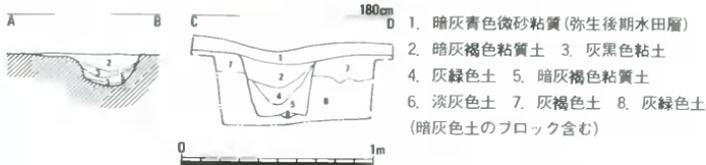
溝158 (第468図、図版91)

212・213K K・L L区に検出された幅約50cm、深さ40～50cmの溝で、底のレベルは南東側が低い。溝157と同様に後期水田層下に存在する。調査区内の2ヶ所を、近現代用水などで削平されている。堆積土は5～6層にわかれ、自然堆積を示す。

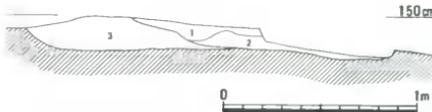
遺物は弥生前期土器片など少量含むが、層的には後期の可能性が強い。(柳瀬)

溝159 (第469図)

212・213MM・N N区に検出された北西から南東方向に流走する溝である。溝は多少蛇行しており、南東端で溝160と接する。幅は35cm前後、深さ15～30cmを測る。断面は底が平坦なU字形を呈する。検出面は後期の水田層を除去した灰褐色土上面で、溝内上層には暗灰褐色粘質土

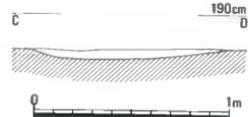


第469図 溝159



1. 暗灰褐色微砂 2. 灰黄褐色粗砂 3. 暗灰褐色粘質土  
1・2. 溝163 3. 溝161

第470図 溝161・163



第471図 溝164

が堆積している。遺物は出土しなかったが、検出面から後期と考えられる。

(平井勝)

溝160

212・213NN区で検出されたほぼ南北に流走する溝である。溝は後期の水田層を除去した灰褐色土上面で検出され、北端は途切れるが、南端は少し東向きを変えて溝159と接する。幅は40cm前後、深さ9cm前後を測り、断面は底が丸みをもち壁は緩やかに立上る。埋土は炭を多く含む暗灰緑色微砂粘土である。

遺物は出土しなかったが、検出面から後期と考えられる。

(平井勝)

溝161・162・163 (第470図)

213QQ区で検出された山裾をめぐる溝である。3条の溝が重なりあっていてと考えられるが、古墳時代以降の溝も重複していることから、その形状については正確さに欠ける。3条の溝は溝163が一番新しく、その下に溝161、さらに下に溝162が掘り込まれていた。

遺物は土器の小破片が出土しているが、どの溝の土器も後期という程度のことしか知ることができない。

(平井勝)

溝164 (第471図)

212・213MM区で検出された北西から南東方向に流走する溝である。この溝は洪水砂を除去し、水田とともに検出されたが、明らかに畦畔を切断している。溝の両端は鳥状高まりの中にあり、水田が機能していたとすればそのまま鳥状高まりの中を流走してよいと考えられる。で

あるとすれば、埋没は同時でも、溝164が掘削された時には水田は廃棄されていたことが推定される。幅は95cm、深さ10～15cmを測る。遺物は出土していないが、洪水砂で埋没していることから、後期末と考えられる。(平井勝)

溝165

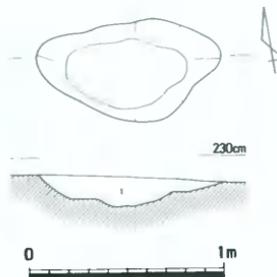
213Q Q区で検出された山裾をめぐる溝である。古墳時代以降の溝が重複しており、底に近い部分がおわずかに残っていた。遺物は出土していないが、埋土が洪水砂であることから、後期に属すると考えられる。(平井勝)

6. 古墳時代の遺構・遺物

(1) 土墳

土墳119 (第472図)

212F F区の西半に位置する。長径94cm、短径54cmを測り、隅丸の三角形を呈する。深さは17cmである。底面は平坦ではなく、中央部が凹んでいる。埋土は一層だが、底部中央の凹みでは砂粒混じりの細砂がたまっていた。出土遺物はなかったが、埋土や土層関係から古墳時代の遺構と考えられる。(岡本)



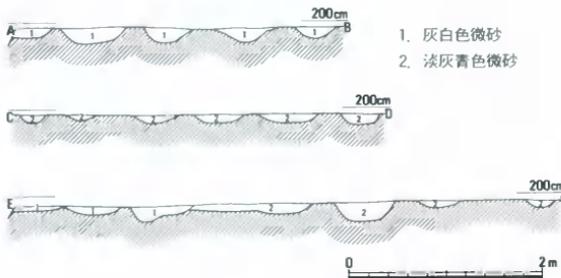
1. 灰色粘性砂質土

第472図 土墳119

(2) 土墳群

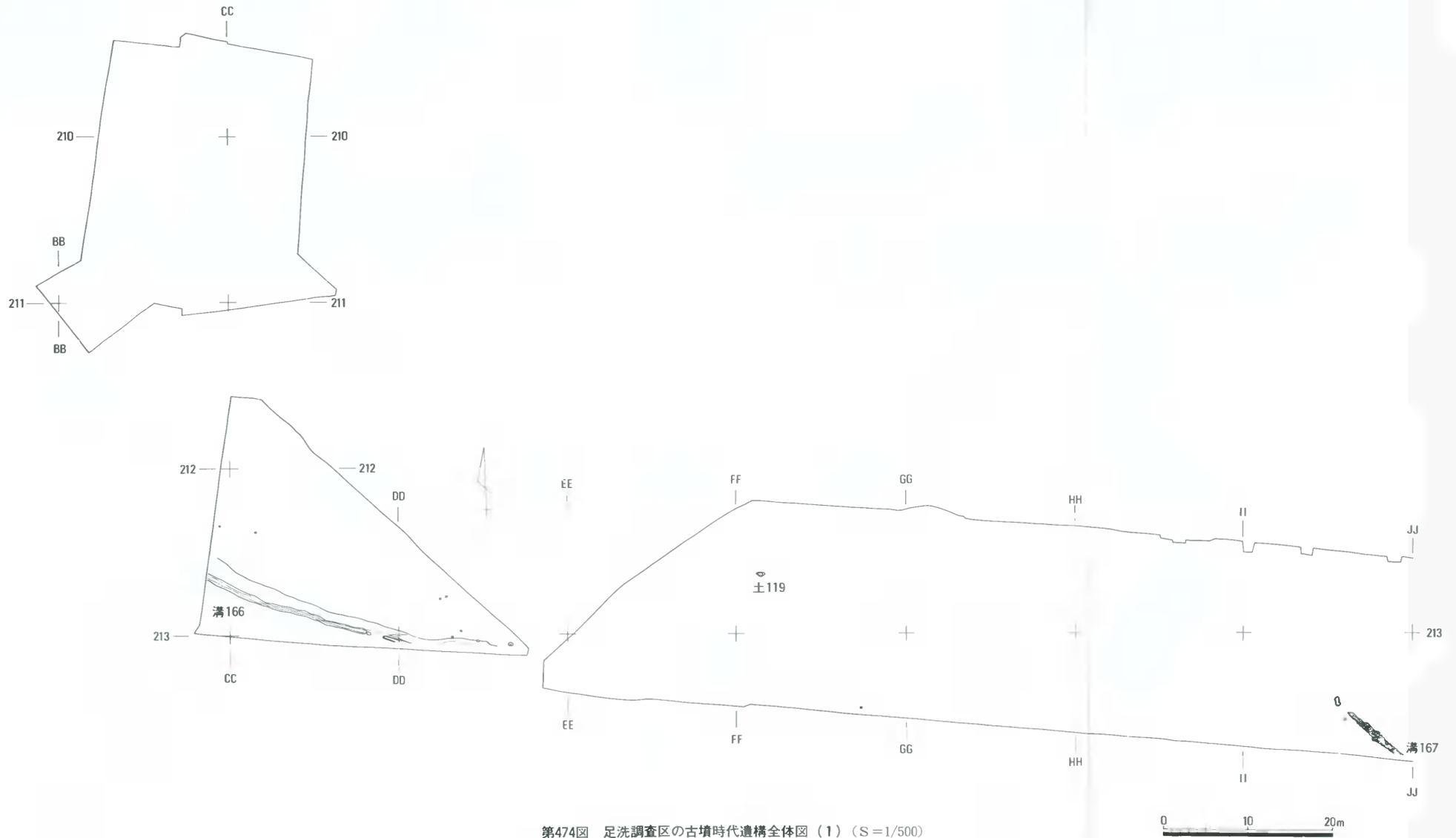
土墳群1 (第473図)

212・213L L区で検出された土墳群である。土墳群は、北西から南東方向の細長い土墳の西側に、長軸を直交するように配列されており、さらに北側にも列をなしている。細長い土墳は幅1.3m前後、深さ15cm前後を測る。土墳の底には細い木の枝が多く堆積しており、須恵器の小破片も認められた。

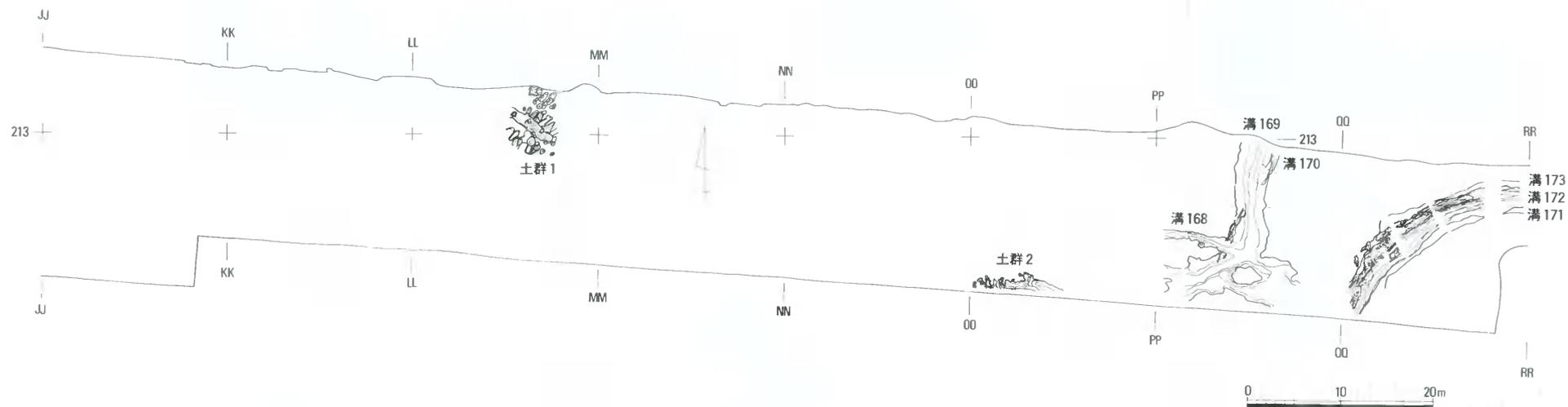


第473図 土墳群1

細長い土墳の両側に配列された土墳は、不定形であるが、おおむね細長い形状で、深さは5～



第474図 足洗調査区の古墳時代遺構全体図(1) (S=1/500)



第475図 足洗調査区の古墳時代遺構全体図(2) (S=1/500)

20cmと一定しない。北端の土壌列も細長い形状を呈しており、深さも5～20cmと一定しない。これらの土壌群は、暗青灰色粘土層上面で検出し、埋土は灰白色微砂であった。遺物は須恵器と土師器の小破片が少量出土しており、6世紀の後半と考えられる。(平井勝)

### 土壌群2

2130 O区の南西寄りで検出された土壌群である。ほぼ東西に不定形な土壌が列をなし、一番東側の細長い土壌群は南東方向に向く。溝とも考えられるが、調査区外へ伸びているため正確なことは不明である。深さは概して浅く、3～15cm前後を測るが、東端の細長い土壌は少し深く30cmである。遺物はないが、埋土から古墳時代の前半と推定される。(平井勝)

### (3) 溝

#### 溝166 (第476図)

212C C区の南辺で段状の落ち込みが検出された。これは、弥生時代後期の洪水砂層の上面に堆積していた青灰色～暗青灰色粘土が、この部分のみは厚くなっていたもので、洪水以前の地形を反映しているものと考えられる。溝166はこの段の下端裾部に位置している。213D D付近で一部途切れているが、この部分での検出面が低かったため、本来つながっていたものと推定される。溝の幅は85cm、深さは18cmを測る。埋土は上下2層に分けられるが、下層には基盤となっている洪水砂層のブロックが侵食されて混入している。溝底面の高さは大きく変化せず、ほぼ平坦に近いが、わずかに西端部が低い。出土遺物は少ないが、古墳時代前期の土器がみられる。

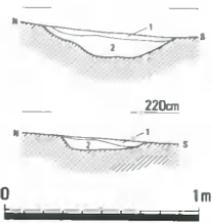
(岡本)

#### 溝167 (第477図)

213I I区の東寄りで検出された溝である。溝は北西から南東方向に流走するが、北西端は途切れ、南東端は調査区外へ延びる。幅60cm、深さ10cm前後を測る。底は小穴が多数穿たれているが、あまり深い穴はない。埋土は灰褐色粘土である。遺物はないが、検出面から古墳時代と考えられる。(平井勝)

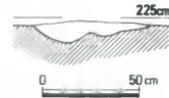
#### 溝168・169 (第478・479図、図版91・92)

213P P区で検出された2条の溝である。溝168はほぼ東西に流走するが、ほぼ南北に流走する溝169と合流する。合流地点の南側には島状に高い部分があり、ここから南西と南東に分流する。



1. 青黒色粘土
2. 灰色細砂・青灰色微砂斑  
青黒色粘土

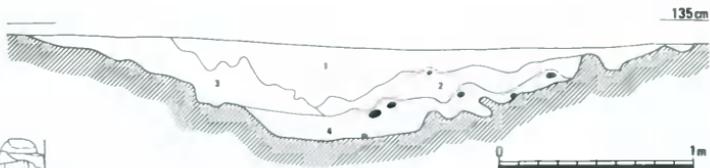
第476図 溝166



第477図 溝167断面図



第478図 溝168



1. 暗灰茶色微砂粘質 2. 暗灰褐色粘質土 3. 青灰色粘質微砂  
4. 暗灰青色粘質土

溝169は幅3.2m、深さ45cmを測るが、北端より合流地点が20cm程度深くなる。溝168は幅90cm、深さ10cmを測る。

溝内には木片や礫が認められたが、特に島の北側には自然木片が集中しており、その中には櫛状木器なども含まれていた。

遺物は土器と木器が出土した。土器は須恵器や土師器の小破片であるが、古墳時代後期と考えられる。木器は櫛状を呈するもので柄は欠損している。樹種はアラカンである。その他加工材や杭、さらに自然木が多数出土しており、その樹種はスギ、アラカン、ネズミサシ、クロガネモチ、アカマツ、アベマキ、コナラ、ムクノキ、イチイガン、ヒノキである。

(平井勝)

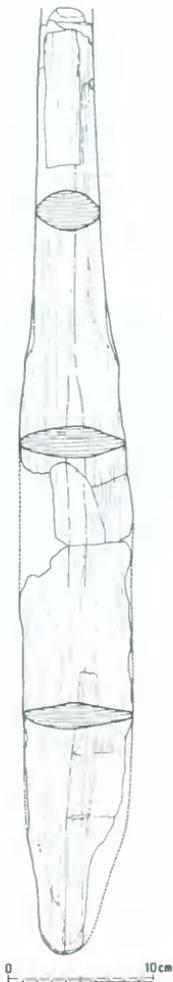
#### 溝170

213P P区で検出されたほぼ南北に流走する溝である。溝170は溝168・169に切られており、幅50cm、深さ5cm前後を測る。埋土は褐灰色粘質土である。遺物は出土しなかったが、古墳時代と考えられる。

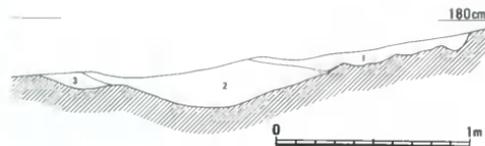
(平井勝)

#### 溝171・172・173 (第480図)

213Q Q区で検出された山裾をめぐる溝群である。3条の溝が確認できるが、各時代の溝が重複しているため、条数や形状については明確さに欠ける。3条の溝は、溝173が最も古く、この溝の山側を切って溝172が掘られ、さらに山側を切って溝171が掘り込まれている。最も山側に掘られている溝171は、溝172の壁の立上りの延長上にあり、しかも明確な底がみられないことから、溝172の一部とも考えられた。しかし、溝172の埋土を明確に切っており、溝171の底と考えられる場所のみ凹凸が著しいことから、独立した溝と考え



第479図 溝169・出土遺物



1. 暗灰色粘性微砂 2. 青緑色微砂 3. 灰色粘性微砂

第480図 溝171・172・173

た。

遺物は上器の小破片が少量出土しているが、時期を確定できるものはなく、検出面から古墳時代に属すると思われる。(平井勝)

## 7. 古代・中世の遺構・遺物

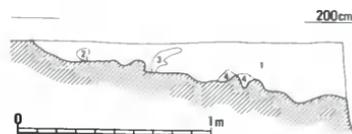
### (1) 土壇

#### 土壇120

213MM区の北西寄りで検出された土壇である。土壇は長さ3.1m、幅80cmの細長い形状を呈し、深さは8cmを測る。埋土は2層に分かれ、上層が淡灰褐色微砂、下層が暗灰褐色粘質微砂である。遺物はなかったが、検出面および埋土から時期は中世と考えられる。(平井勝)

#### 土壇121 (第481図)

213N N区の西端で検出された土壇である。土壇の半分は調査区外にあるため、全体の形状については明確でないが、定形的な平面形ではない。内部も不定

1. 淡灰茶色粘質砂  
2. 淡灰黄砂  
3. 青灰黄色粘質砂  
4. 灰青黄色粘質砂

第481図 土壇121

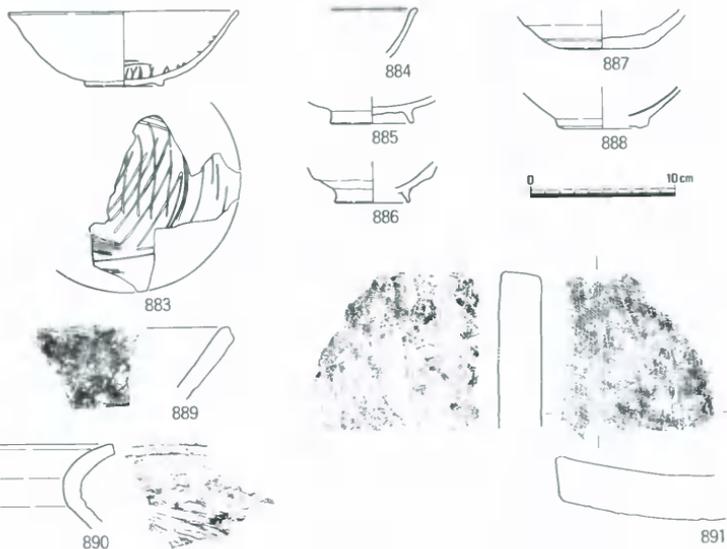
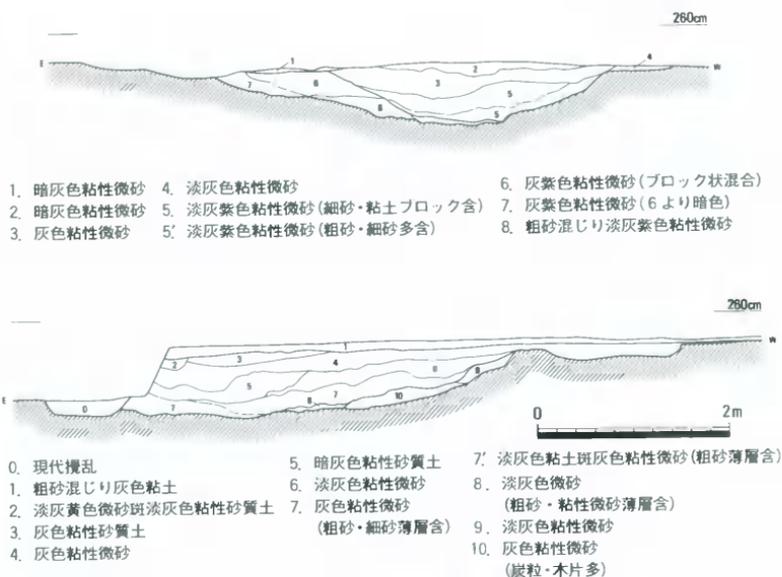
形な穴が多数穿たれているが、全体としては中央が深くなる。埋土は淡灰黄色砂や青灰黄色粘質砂のブロックを含む淡灰茶色粘質砂である。

遺物は弥生土器や須恵器を含むが、中世の上器器も出土しており、時期については検出面とも合わせて考えれば中世に属する。(平井勝)

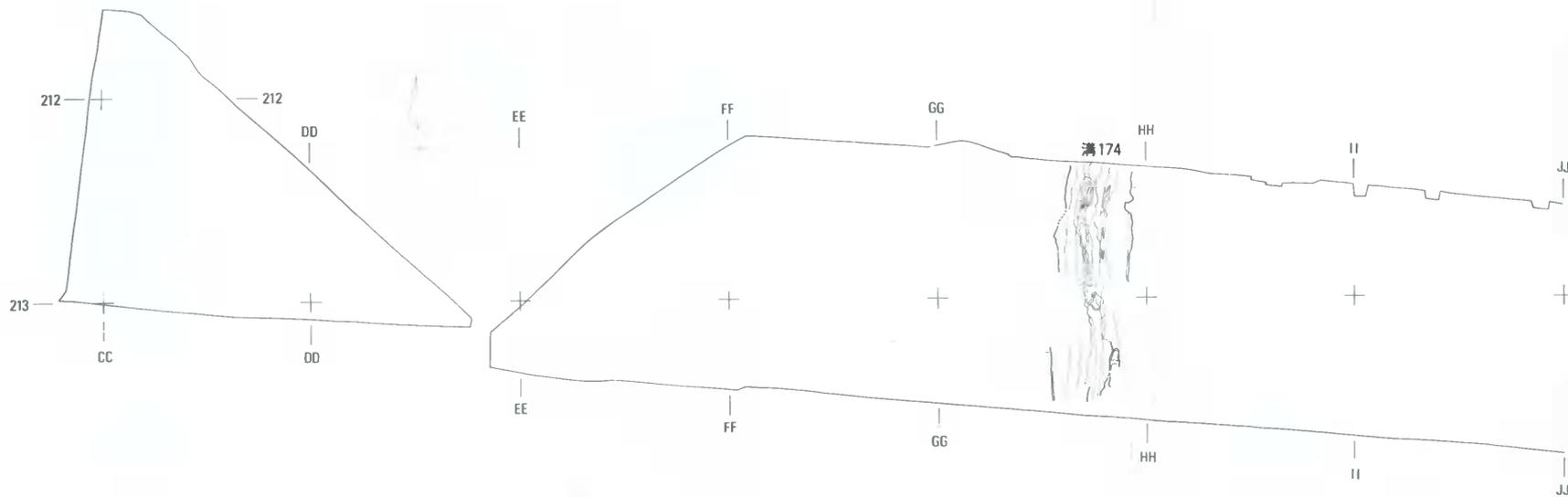
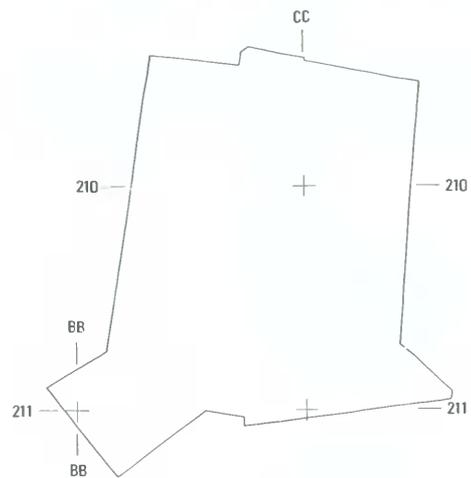
### (2) 溝

#### 溝174 (第482図、図版92)

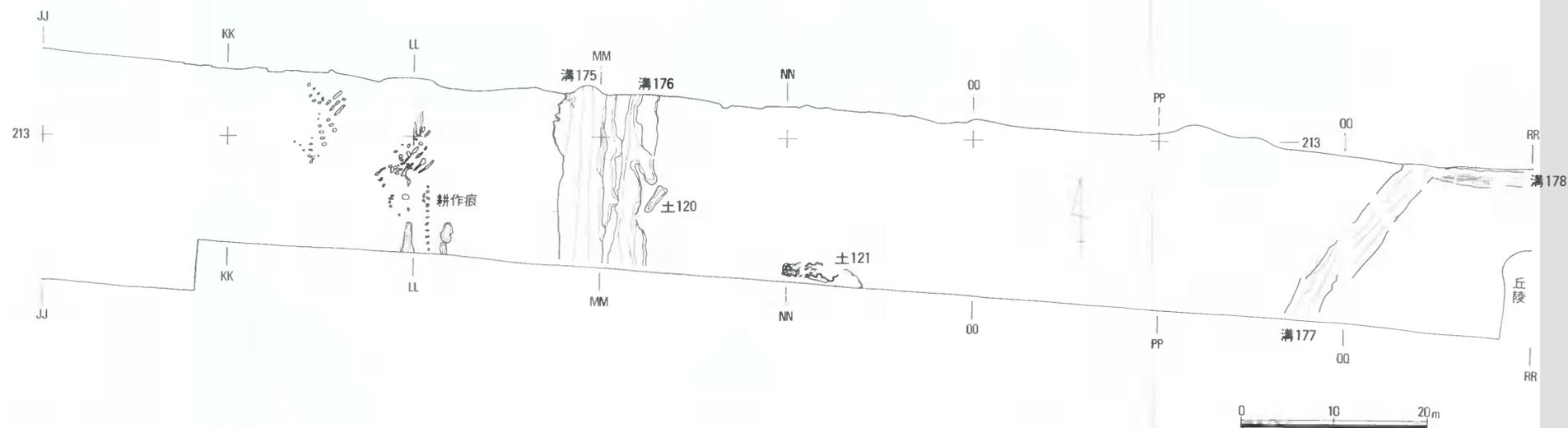
212GG区と213GG区の東半に位置し、南北方向に直線的に伸びる大溝である。溝の規模は幅6.35m、深さ79cmを測る。埋土は複雑で、幾層にも細分が可能であり、各層とも砂質土か微砂からなっていることから、盛んな流水が想像される。第483図の上段は北側、下段は南側での断面であるが、きれいには対応せず、流水の激しかった水路内堆積の複雑さを表わしている。



第482図 溝174 (S=1.60)・出土遺物



第483図 足洗調査区の古代～中世遺構全体図(1) (S=1/500)



第484図 足洗調査区の古代～中世遺構全体図(2) (S=1/500)

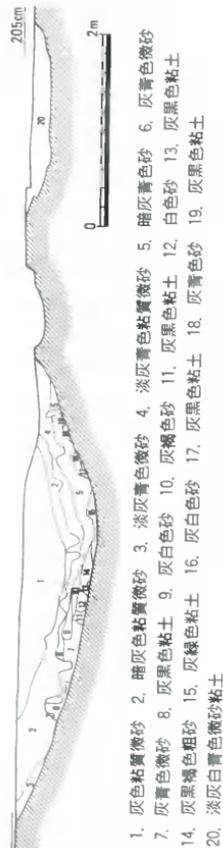
また、上段では東側、下段では西側で土層の破断線が認められ、この溝が一度掘り直されたのではないかと推測される。埋土の下半では各層に粗砂や粘性微砂の薄層が何層も含まれ、盛んな流水を示すとともに、流量の変化が小刻みにあったのではないかと思わせる。溝底にはかなり凹凸がみられ、大きな礫もころがっていた。溝内からは、かなりの量の土器片の他、木片や鉄片・滓、ウマカウシとみられる大形獣の獣骨、それにモモの種子十数粒などの多種の遺物が出土し、生活と密着した水路であったことを示唆している。

図示した土器類のうち、883～885・887は下半の層から出土したもので、平安時代末期～鎌倉時代初頭のものと考えられる。891の平瓦は第483図上段の3層、その他は同4層出土である。百間川米田遺跡では、平瓦が一般に出土するのは室町時代の石組み井戸からのようであり、この平瓦もその時代のものである可能性が高い。これらのことから、この溝は平安時代末期から鎌倉時代を通じて利用され、室町時代にも存続していたと考えられる。

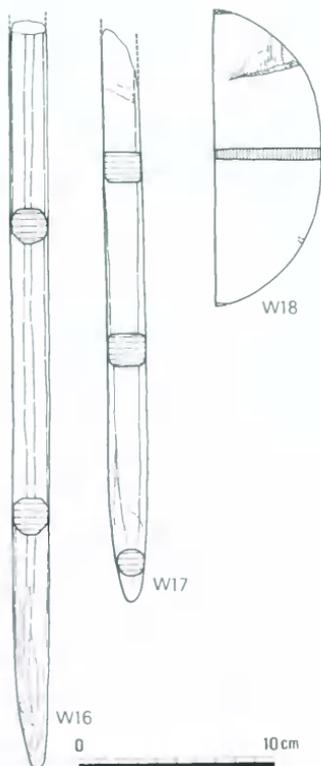
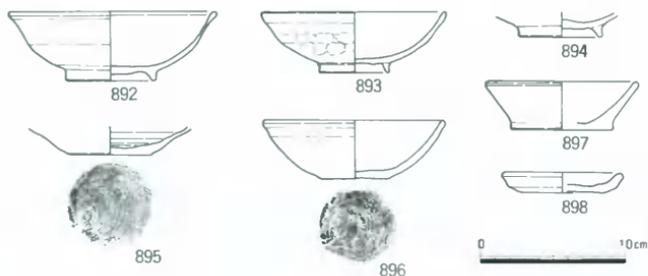
なお、足洗調査区では、この溝から約100m東にも同時代で、同規模の溝175が、やはり南北方向をとって検出されていることから、これらの溝は当時の地割りと密接な関係をもっていたことが考えられる。ちなみに、この溝174の約100m西はかつて市道幡多9号線が南北に走っていた場所にあたる。この1町四方を単位とする地割りは、現在も条里制遺構として旭東平野一帯で広く認識されているものであり、その起源が平安時代までは溯ることが知られるのである。(岡本)

#### 溝175・176 (第485・486図、図版93)

212・213LL区とMM区の境界で検出された2条の溝である。2条の溝は南北方向に平行して流走する。西側に位置する溝175は幅4.8m、深さ75cmを測る大きな溝である。埋土は上層と



第485図 溝175・176



第486図 溝175出土遺物

下層に大きく分かれるが、下層はブロック状の複雑な堆積が認められる。

遺物は溝175から土器と木器が出土している。土器は少量であるが7点が図示し得た。892～894は土師器の碗で、いずれも高台がつく。895と896も土師器の碗であるが、高台はつかず、底部に糸切り痕が残る。897・898は土師器の小皿である。木器には加工材(W16・W17)と曲物(W18)の底板がある。加工材は先端を尖らせており、杭として転用されたのであろう。(平井勝) 溝177(第487図)

213P・P・Q区で検出された北東から南西方向に流走する溝である。幅は2.2mもあるが、深さは14cmと浅い。底は全体的に西側に傾いているが、幅が広く、両側に短く立る壁は緩やかである。溝内には礫が含まれているが、南側ではこぶし大から人頭大の礫が集中していた。埋上は黒灰色微砂粘土と粗砂の互層である。

遺物は土器の細片が少量出土しており、時期は古代と推定される。(平井勝)

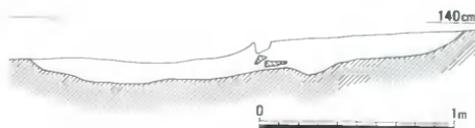
溝178(第488図)

213Q区で検出された東西方向に流走する溝

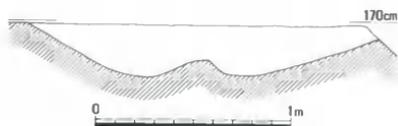
である。溝の幅は1.8m、深さ40cmを測る。底は断面中央部が溝を二分するように高くなっており、両側の壁は緩やかに立上る。溝の中にはこぶし大から人頭大の礫が認められたが、特に配列された状況ではなかった。埋土は灰褐色粘質土である。

時期については遺物が出土していないため明確でないが、検出面から中世と考えられる。

(平井勝)



第487図 溝177



第488図 溝178

### (3) 耕作痕

212・213KK・LL区では、近世、中世堆積層の除去後、弥生後期末の洪水堆積層の上面において、耕作痕跡と水田区画と思われる土壌列を検出した。

耕作痕跡とおもわれるものは暗褐色粘質土が入る幅30cm、長さ1m内外の細長い土壌の列が複数平行するものであり、北35°東に軸線をとる。遺物は少ないが、土師質高台付き碗の破片を含んでおり、中世のものと思われる。また、これらとは別に長径約50cm、深さ4cmの小土壌が4個程度連なる遺構が認められたが、性格については不明である。

水田区画の痕跡と考えているのはLLラインの南北両端で検出した二つの土壌と、その東側で検出した接続する二つの土壌である。これらがどのような関係にあるのか不明であるが、LLラインの二つの土壌の軸線は溝175に平行し真北方向をとっており、条里地割りに関係するものと考えられる。また、この2列の土壌の間には11個のピットが連なっているが、軸線が若干ずれており、土壌と関係するものかどうか不明である。上記の土壌列と同様、土師質高台付き碗破片が出土している。

(宇垣)



第489図 中世耕作痕

## 第6節 四元調査区

### 1. 四元調査区の概要

四元調査区は沢田遺跡の最下流部にあたる。このうち今回報告するのは、右岸側の幅18m、長さ49mの範囲である。西側は足洗調査区と接しており、その部分には南側から操山山塊の一支丘が張り出している。したがって本調査区は山裾から、山裾に接して形成された微高地にあたる。

縄文時代後期の遺構が認められる微高地は、213SS区の調査区北端が最も高くなっており、ここから南側の山裾に向かって徐々に低くなる。そして山裾から再び丘陵に向かって高くなる。この微高地を形成するのは灰黄色粘質砂や暗青灰色粘質土で、その上に縄文土器を多量に含む暗青灰色粘質砂や青灰緑色粘質砂が堆積している。

微高地を形成する土の下には淡灰白色微砂ないし灰白色砂の遺物を含まない薄い層が山裾まで水平に堆積しており、この下に植物遺体を多量に含む暗灰茶色粘土あるいは灰黒色粘土が認められた。この層を除去するとドングリ貯蔵穴が検出された。したがって微高地上の遺構と、ドングリ貯蔵穴とは時期が異なるが、ドングリ貯蔵穴の時期を示す遺物は出土しなかった。

微高地上の縄文時代後期の遺構にはヤマトンジミを主体とする貝塚、土壇、炉などが検出されているが、住居跡は認められなかった。

弥生時代の遺構としては、西側の足洗調査区から続いてくる、山裾をめぐる溝群と北東端の水田がある。このうち溝群は、古墳時代以降の溝群と重複している。

遺物は縄文時代後期から弥生時代の各時期、古墳時代、古代、そして中世の土器や石器が出土しているが、縄文時代後期を除けばいずれもわずかであることから、縄文後期には居住域であったが、弥生時代以降は居住域として利用されることはなかったと考えられる。

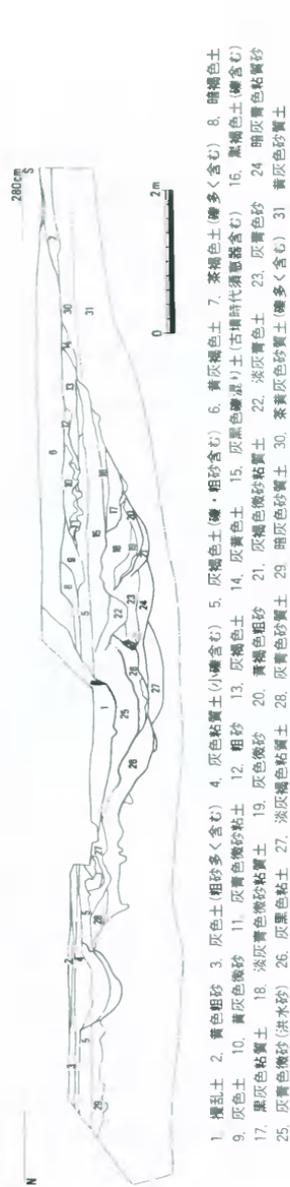
(平井勝)

### 2. 縄文時代の遺構・遺物

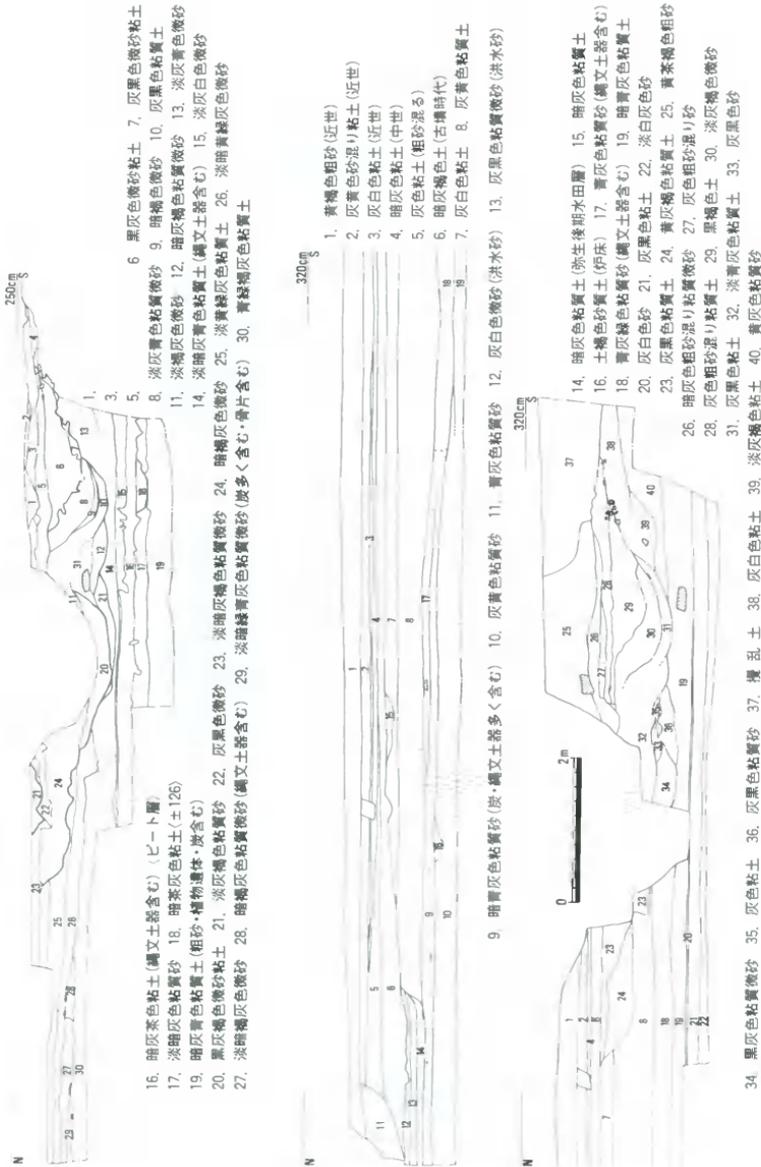
#### (1) 土壇

##### 土壇122 (第493図)

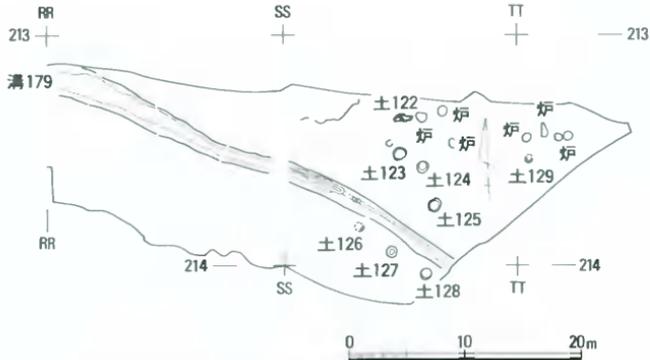
213SS区で検出された不定形の土壇である。二つの土壇が切りあっていると考えられるが、埋土は明確に分離することができなかった。西側の小さな土壇は深く掘られており20cmを測るが、東側の土壇は10cmである。埋土は淡緑灰黄色土である。時期は、遺物が出土していないた



第490図 足洗調査区土層断面図 くははQQラインの西一北、中はRRラインの西一北、下はSSラインの南一北 (S = 1/80)



第491図 足洗調査区土層断面図(上はSSから東へ10mの南一北、下は調査区東端の南西一北東)(S=1/80)

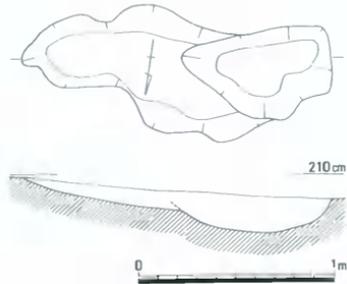


第492図 四元調査区の縄文時代～弥生時代前期遺構全体図  
 〈溝179以外は縄文後期の遺構〉(S=1/500)

め明確でないが、検出面から後期と考えられる。  
 (平井勝)

土壙123 (第494図、図版96)

213SSの中央近くで検出された土壙である。平面形は径1mのほぼ円形を呈し、深さは45cmを測る。底は平坦で、壁はほぼ垂直に立上る。埋土中には炭を多く含むほか、骨片なども認められた。遺物は土器が出土している。899～906は深鉢であるが無文と有文とがある。899と900は無文でやや粗雑なつくりである。



第493図 土壙122

901は波状口縁で、口縁部外面に縄文がめぐる。902は口縁部外面に縄文がめぐる。903と904は口縁部外面を肥厚させ、そこに縄文を施す。905と906は縄文を施さないが、口縁部外面を肥厚させている。907は注口土器の口縁部で、概して丁寧なつくりである。

(平井勝)

土壙124 (第495・496図、図版96)

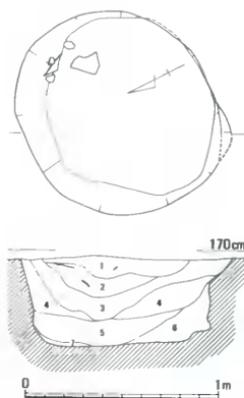
213SS区の中央で検出された土壙である。平面形は径95cmの円形を呈し、深さは40cmを測る。底は平坦で、壁は急斜に立上る。埋土には炭を多く含むほか骨片も認められる。

遺物は土器が少量出土している。いずれも無文の深鉢である。

(平井勝)

## 土壌125 (第497図、図版97)

213SS区の南東寄りで見出された土壌である。平面形は長軸1.2m、短軸1mのやや楕円形を呈する。底は平坦で、壁はほぼ垂直に立上る。埋土は2層に分かれ、いずれにも炭を含んでいた。



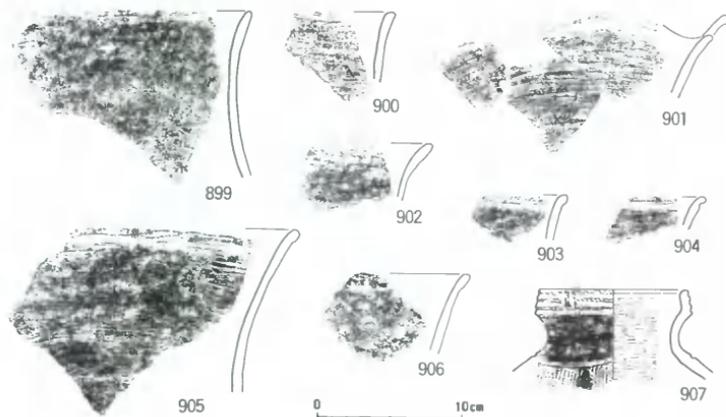
1. 淡暗灰黄緑色砂質土  
(炭含む)
2. 暗緑灰色粘質砂  
(炭・骨片含む)
3. 淡灰緑色粘質砂  
(炭含む)
4. 暗緑灰色粘質砂  
(炭多く含む)
5. 暗緑灰黄色粘質砂  
(炭多く含む・骨片含む)
6. 暗緑灰色粘質砂  
(炭・骨片含む)
7. 淡灰緑色粘質砂

遺物は土器が少量出土した。910は波状口縁で、口縁外面に幅広く縄文を施し、さらに沈線を加えている。911は口縁端部外面に縄文を、912は口縁端部外面をやや肥厚さす。913は頸部と胴部の境界を沈線で画し、胴部に縄文を施している。914と915は浅鉢である。

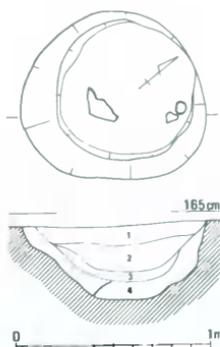
(平井勝)

## 土壌126 (第498図)

213SS区の南西寄りで見出された土壌である。溝179から南側で見出された3基の土壌は、溝から北側で見出された微高地上の遺構より、



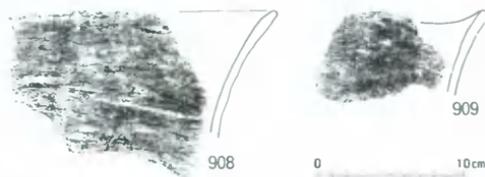
第494図 土壌123・出土遺物



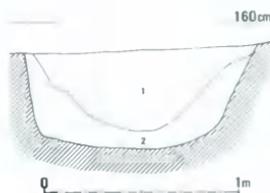
1. 緑灰黄色粘質砂(炭含む)
2. 緑灰黒色粘質砂  
(炭多く含む)
3. 淡緑灰色粘質砂
4. 緑灰黒色粘質砂  
(炭多く含む・骨片含む)

第495図 土壙124

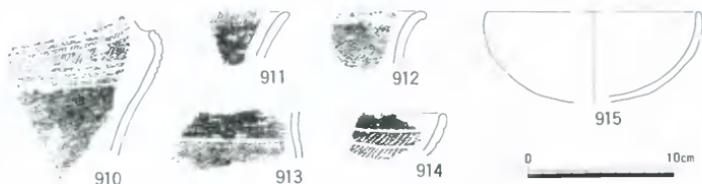
層位的には古いが、その時期を決める遺物は出土していない。これら土壙群発見の契機は、微高地と山裾間の低地にドングリ貯蔵穴が存在する可能性が高いことから、南北のトレンチを設定して確認したところ、土壙126が断面で検出されたことによる。こうした遺構が広い範囲に認められることも考えられたが、調査期間等の制約もあり、溝179の南側を、土壙126を検出したトレンチから東に向かって



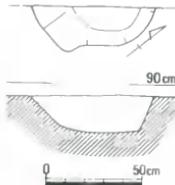
第496図 土壙124出土遺物



1. 淡灰青色砂(炭を多く含む)
2. 灰白青色砂(炭含む)



第497図 土壙125・出土遺物

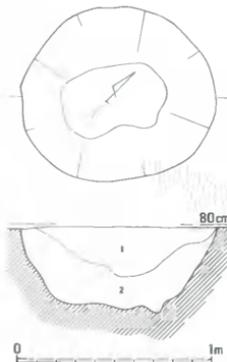


第498図 土壌126

調査区東端まで拡張した。土壌126はトレンチに係ったことから半分しか残存していないが、径60cm前後の円形を呈すると考えられる。底はほぼ平坦で、壁は急斜に立上る。埋土は暗茶灰色粘土で、底部近くには少量であるがドングリが認められた。このことから、土壌はドングリの貯蔵穴と推定される。（平井勝）

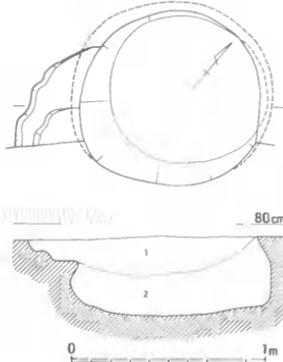
土壌127（第499図）

213SS区の南端中央近くで検出された土壌である。平面形は



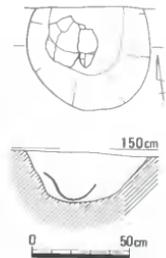
1. 暗褐色黒色粘質土
2. 暗褐色黒色粘質土

第499図 土壌127



1. 茶黒色粘土（ドングリ含む）
2. 茶黒色粘土（ドングリ含む）

第500図 土壌128



第501図 土壌129

径1mの円形を呈し、深さは40cmを測る。底は多少凹凸があり、壁は急斜に立上る。埋土は2層に大別されるが、ほとんど同じ色調である。埋土中にわずかにドングリを含むことから、ドングリ貯蔵穴と考えられる。（平井勝）

土壌128（第500図、図版98・99）

214SS区の北端中央寄りで検出された土壌である。平面径は径1m前後の円形を呈し、深さは40cmを測る。断面形を見ると、上端より底が少し広がる袋状を呈している。埋土は2層に大別されるが、上層と下層の間には木葉や細い木の枝などが薄い層になって一面認められた。またドングリは上・下層ともに含まれていたが、量は下層の方が多かった。この土壌もドングリ貯蔵穴と考えられる。（平井勝）

土壌129 (第501・503図916)

213T T区西端中央寄りで検出された土壌である。土壌は北側をトレンチによって切られているが、径65cm前後のやや楕円形を呈する。底は少し丸みをもち、壁は急斜に立上る。底には深鉢の大きな破片が認められた。埋土は炭化物を多く含む暗灰青色砂である。遺物は土器が一個体出土した。土器は深鉢で口縁部と底部を欠損するが、頸部から胴部はほぼ残存する。口縁部の文様帯は、沈線文間を縄文で充填した文様がめぐると思われる。胴部にも沈線を半巻き込み状に描き、その間を縄文で充填する文様がめぐる。(平井勝)

(2) 炉床

213S S・T T区の微高地上から8ヶ所の炉床が検出された。これらの炉床はいずれも赤褐色によく焼けている。平面形は径80cm前後の円形ないし楕円形で、被熱部は厚さ10cmにおよぶ。炉床の断面を観察したが、特に掘り込み等は認められず、微高地を形成する灰黄色粘質砂層上面で直接火を使用したものと考えられる。また住居址の中とは考えられないことから、屋外炉と推定される。(平井勝)

(3) 貝塚

213S S区の調査区北端近く、微高地の一番高い場所に小さな貝塚が認められた。貝層は微高地を形成する灰黄色粘質砂層の上に厚さ約10cm前後で東西3m、南北1.7mの範囲にみられた。貝はほとんどがヤマトシジミである。貝塚の周辺には骨片や炭が多く認められた。貝層内からは遺物が出土せず、周辺にも土器は少なかった。(平井勝)

(4) 包含層の遺物

213・214S S・T T区から多くの縄文時代後期の遺物が出土した。遺物を包含する層は、弥生時代の基盤となる灰黄色粘質土の下で、厚さ約30cm前後である。この包含層を取り去ると縄文後期の遺構が掘りこまれる灰黄色粘質砂になる。後期の基盤となる灰黄色粘質砂は北側が高く、南側の丘陵裾に向かって低くなっており、遺物はその全面に認められるが、どちらかといえば、高い場所より、斜面部に多かった。

a 土器 (第503～518図、図版134～142)

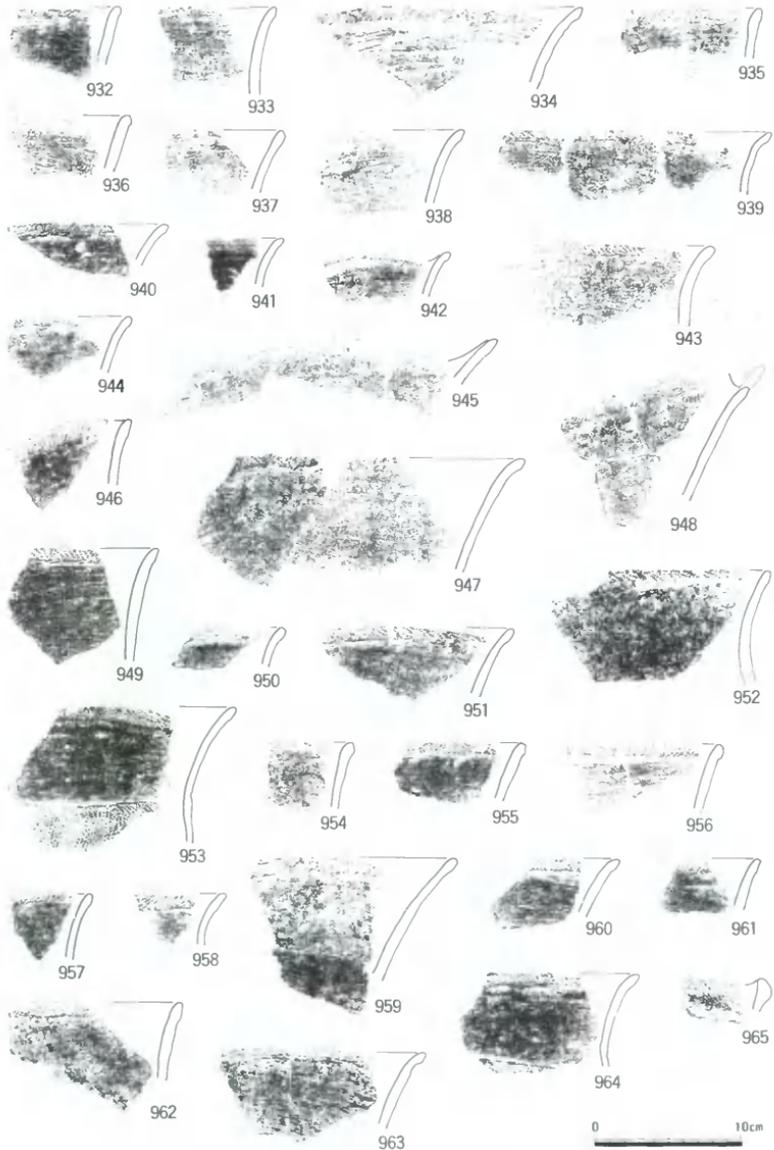
土器には深鉢形土器、鉢形土器、浅鉢形土器、注口土器が認められるが、いずれも全体の形状がうかがえるものは少なく、多くは小破片である。このため口縁部の形状および文様を中心に分類を行ったが、明確に弁別できないものも多い。



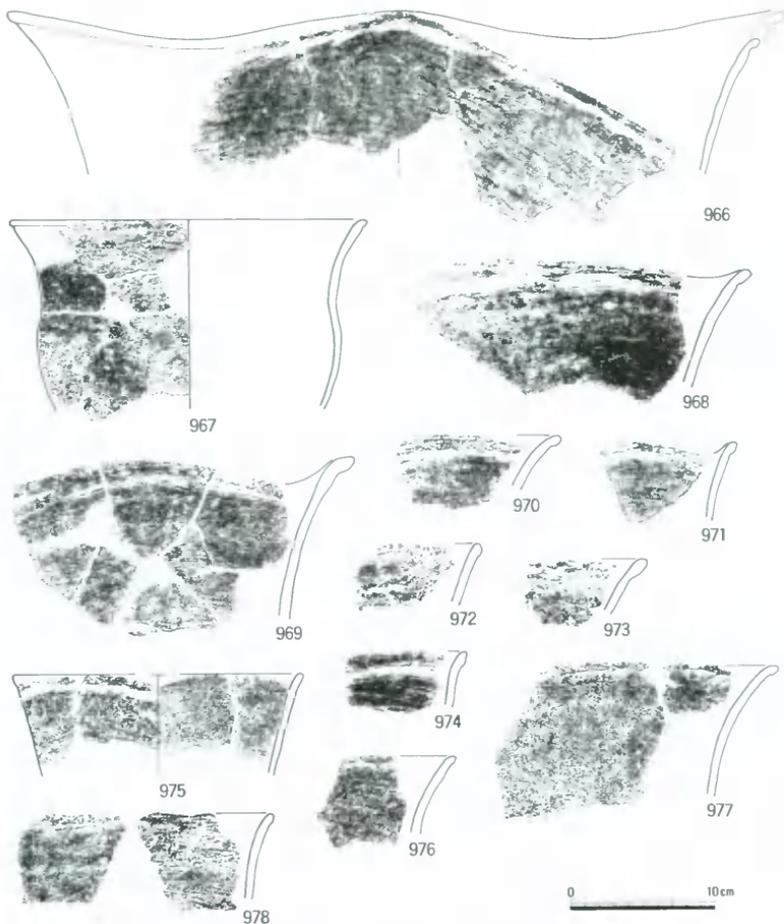
第502図 四元調査区213-SS・TTの縄文土器分布図 (S=1/150)



第503図 213-SS~TT出土の縄文土器(1) (916は土城129出土)



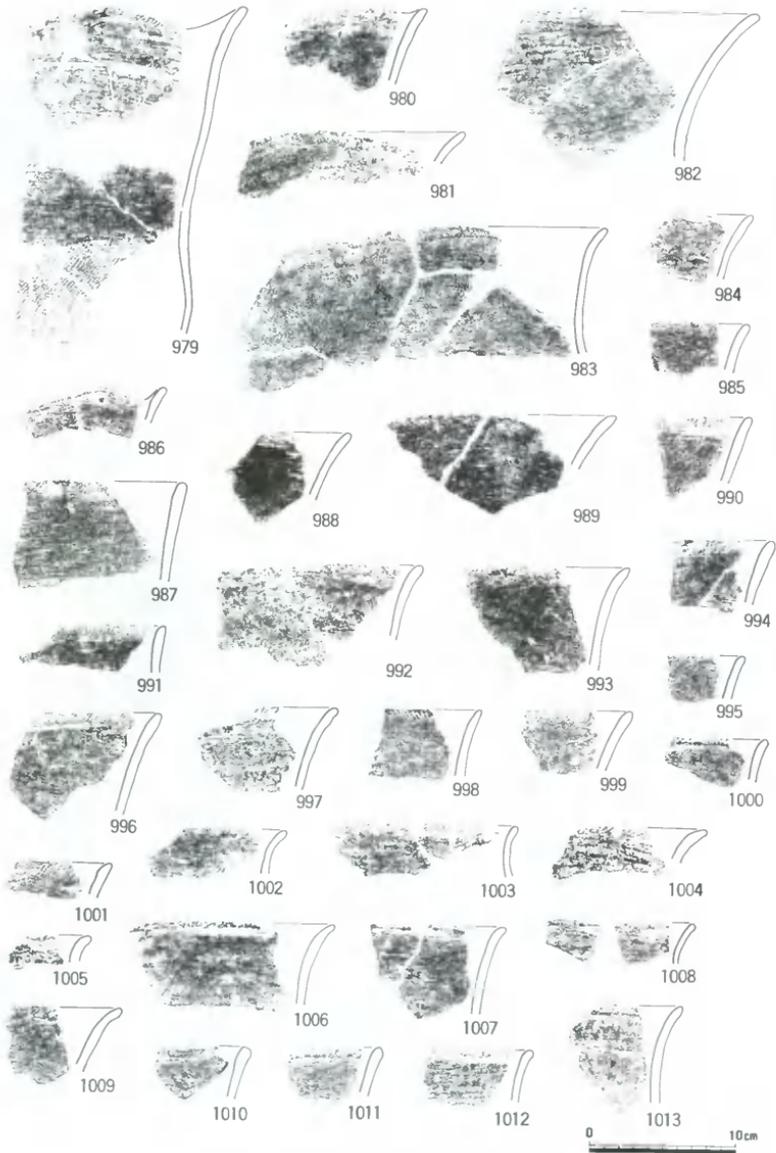
第504図 213-SS~TT 出土の縄文土器 (2)



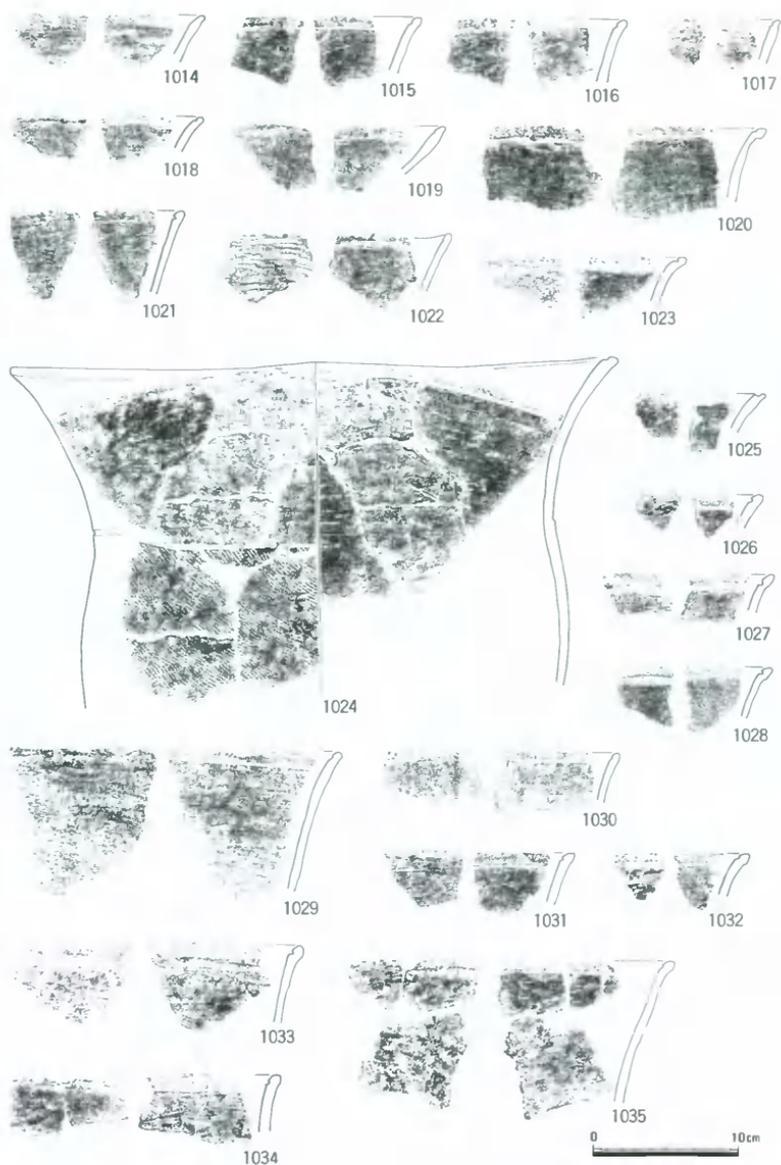
第505図 213-SS~TT 出土の縄文土器 (3)

深鉢形土器 (第503~513図)

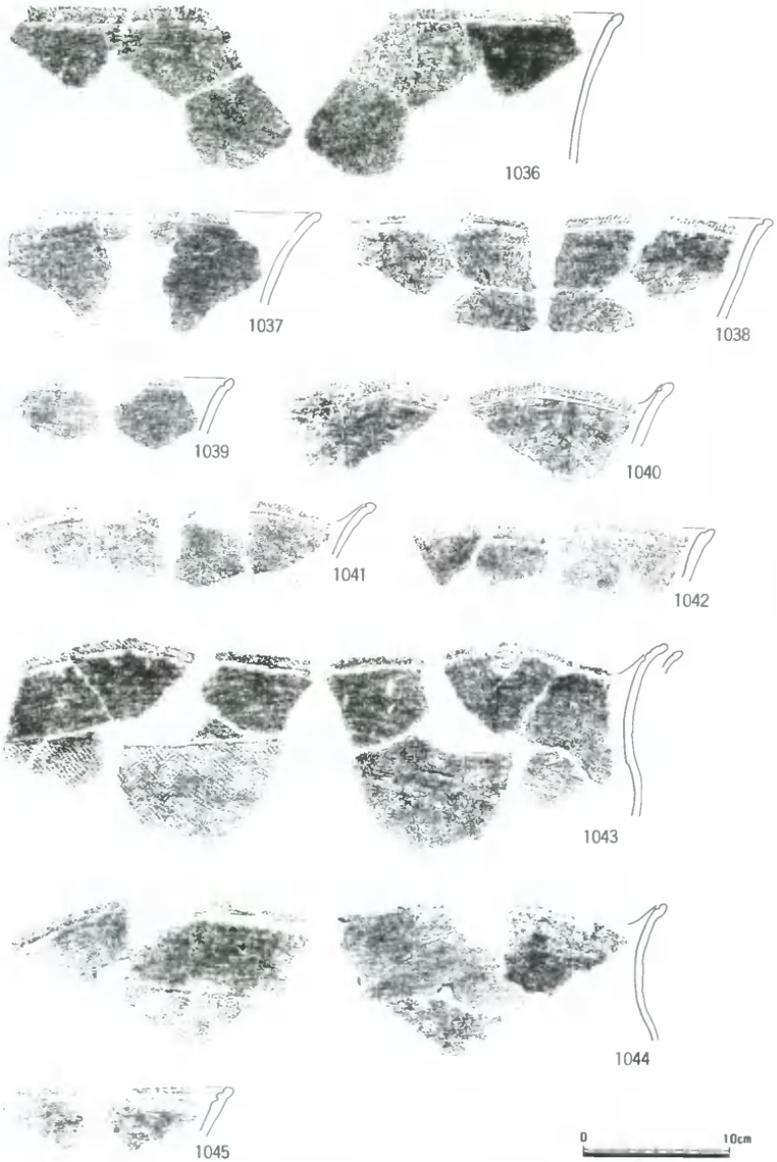
深鉢は最も量が多く、全体の80%あまりを占め、これを有文と無文のものに大別すれば、無文が70%前後を占める。深鉢は器形と文様から三類に分けることができる。A類は頸部と胴部の境がくびれ、口縁部は内弯ぎみに立上るもので、第503図917~923・927~931を典型とするが、口縁部の文様によってさらにa・bに分かれる。A a類は口縁部に磨消縄文ないし縄文地



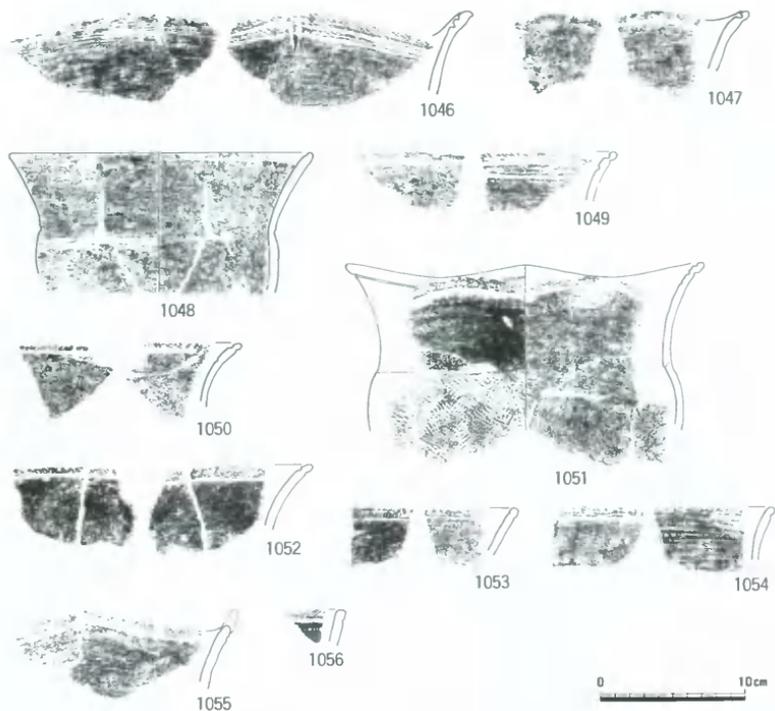
第506図 213-SS~TT 出土の縄文土器 (4)



第507図 213-SS~TT 出土の縄文土器 (5)



第508図 213-SS~TT 出土の縄文土器 (6)



第509図 213-SS~TT出土の縄文土器(7)

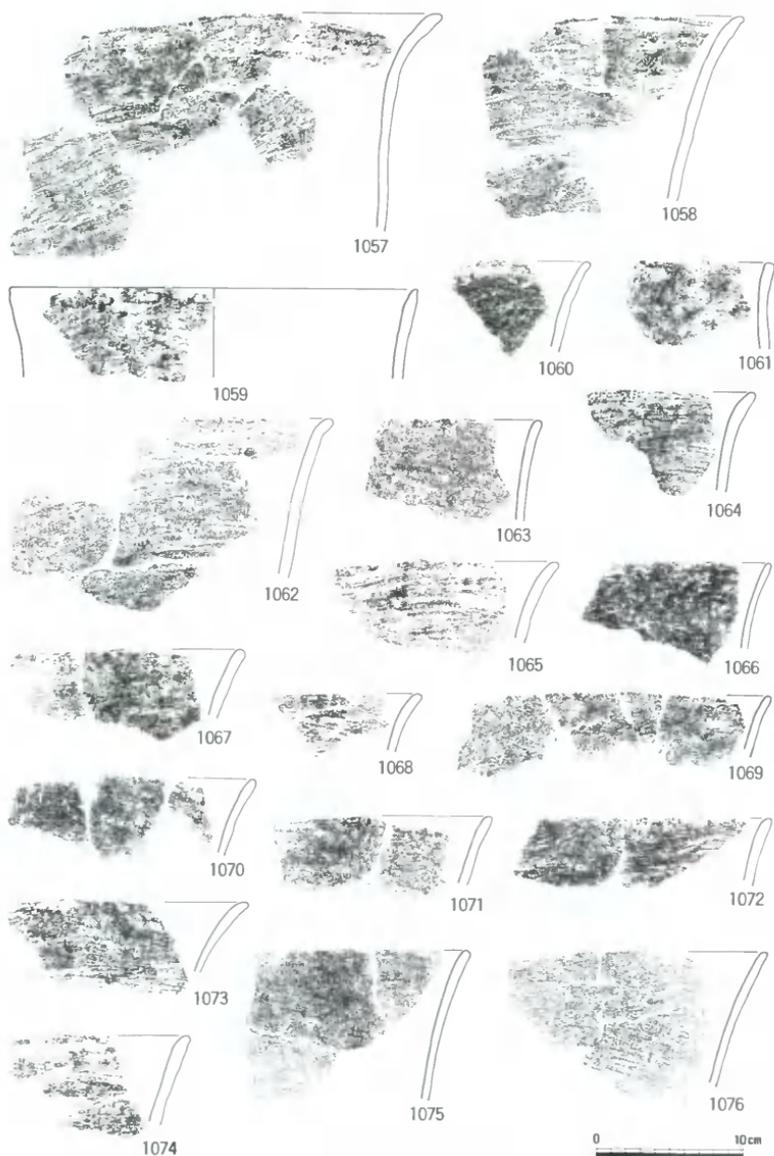
に沈線を横走させる。そしてA b類は口縁部に幅広の縄文帯がめぐるものである。

B類は第504~509図のように、胴部と頸部の境がくびれ、口縁部は胴部より大きく開く器形で、文様は口縁部と胴部に分かれる。なお、口縁部の文様は口縁部の外面に加え内面にも施されるものが多い。本類も口縁部の文様によってさらに細分される。

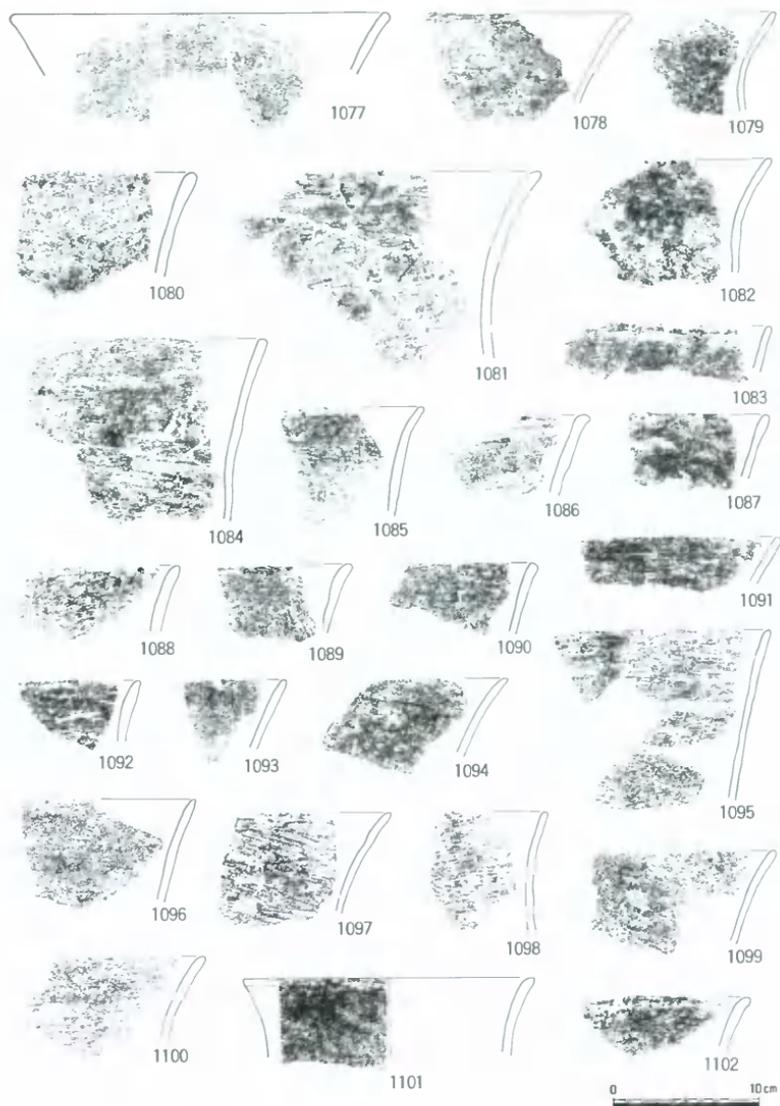
B a類は口縁端部外面をわずかに肥厚させ、そこに縄文を施すものである。縄文帯の幅は広くても1 cmをこえるものはない。(第504図)

B b類も口縁端部外面をわずかに肥厚させるが、縄文はない。波状口縁と平口縁のものがある。967は胴部も無文である。(第505図)

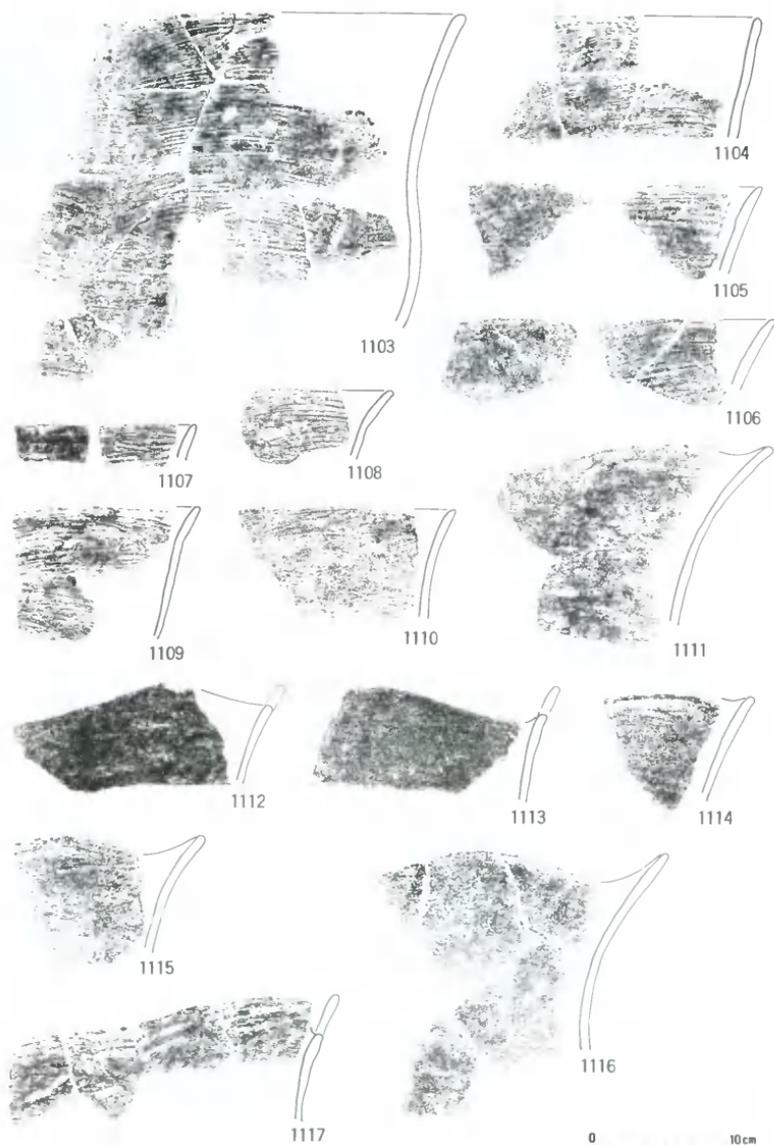
B c類は口縁端部を丸く収め、その外面に幅の狭い縄文帯を施すものである。982は胴部と頸部の境界に沈線をめぐらせ、その下には全面縄文を施しており、この類の典型ともいえるが、979のように長くてあまり開かない口頸部をもち、頸部と胴部の境界も文様がなければ明



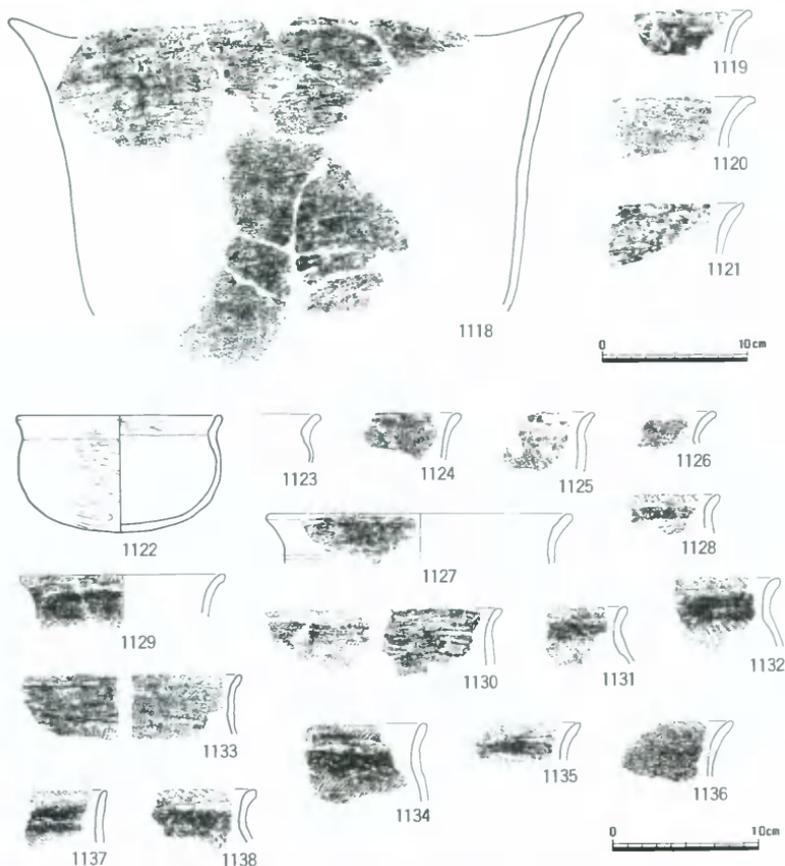
第510図 213-SS~TT 出土の縄文土器 (8)



第511図 213-SS~TT 出土の縄文土器 (9)



第512図 213-SS~TT 出土の縄文土器 (10)

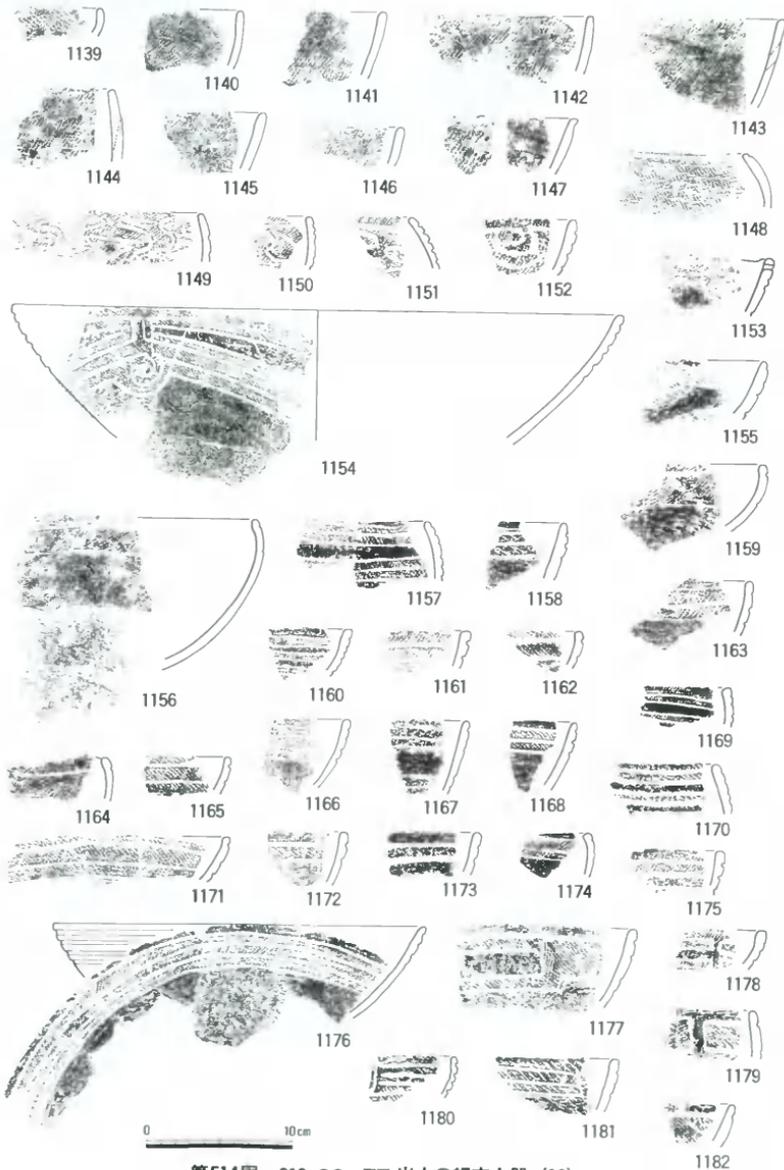


第513図 213-SS~TT 出土の縄文土器 (11)

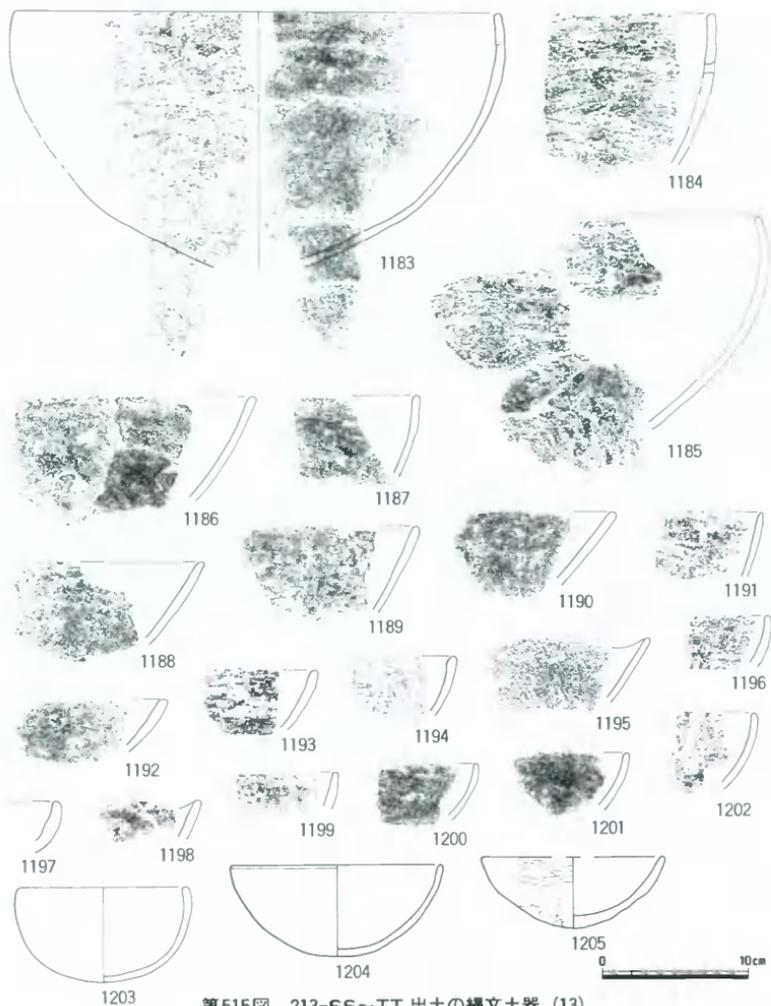
瞭でないものもある。(第506図)

B d 類は口縁端部外面をわずかに肥厚させ、その内外面に文様が施されるものである。1020や1035は肥厚した外端面に縄文を施し、内面には口縁端部に接して縄文をめぐらせ、その下端を沈線によって画しており、この種の典型である。(第507図)

B e 類は口縁端部を丸く収め、その内外面または内面のみに文様を施すものである。前者の典型は1030・1036で、口縁外端面には幅の狭い縄文、内面には幅の狭い縄文とそれを画する沈線をめぐらしている。後者の典型は1018で、口縁内面は縄文とそれを画する沈線をめぐらせる

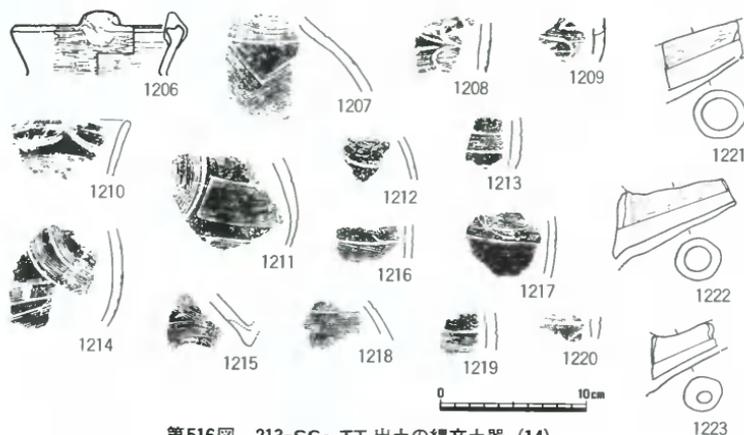


第514図 213-SS~TT 出土の縄文土器 (12)



第515図 213-SS~TT 出土の縄文土器 (13)

が、外面は無文である。なお1043~1044・1051のように内面に渦文ないしの字状文をもつものがあり、これをついにまとめることも可能であるが、B d・B e類の一部は渦文に続く部分である可能性もあり、ここではあえて分離しないでおく。(第508・509図)



第516図 213-SS~TT 出土の縄文土器 (14)

B f 類は口縁端部の内外面に縄文とその下端を画す沈線がめぐるものである。1052はこの典型であるが、内面には結節縄文が施されている。(第509図)

B g 類は縄文とそれを画する沈線を口縁部外面のみに施すものである。(第509図)

C 類は無文のものである。器形は胴部と頸部の境がくびれ、口縁部は大きく開いて胴部最大径を上まわるものが基本であるが、1118のように胴部と頸部の境があまりくびれないもの、あるいは1081と1111のように長い口頸部が弧を描くように強く外反するもの、また、1062や1095のように口頸部がほぼ直線的に外反するものなどがある。無文のものは概して粗雑で、外面の調整は条痕ないし荒いナデのものが多い。(第510~513図)

#### 鉢形土器 (第513図)

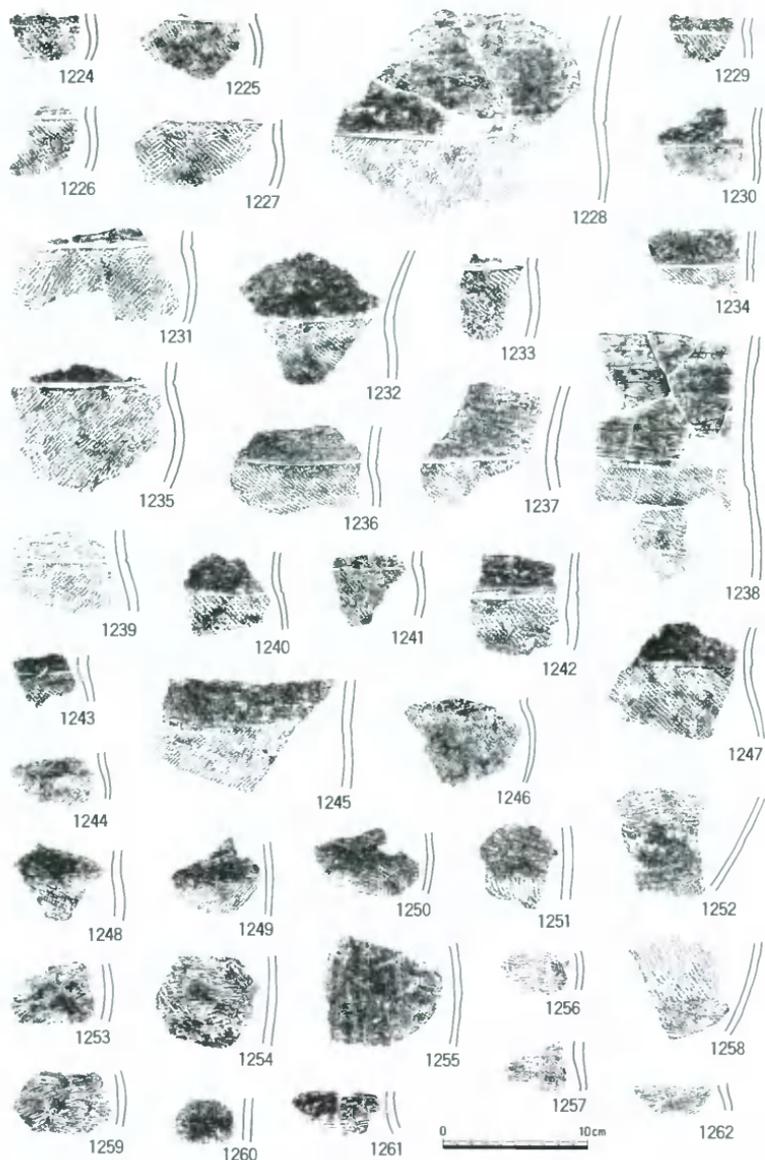
鉢は浅めの胴部に短く立上る頸部と少し外反する口縁部をもつもので、有文のものをA類、無文のものをB類とする。

A 類は胴部に外反きみの短い口頸部がつくもので、口縁部の文様によってさらに細分される。A a 類はわずかに肥厚ないし丸く収めた口縁端部外面に文様を施すものである。A b 類は口縁端部の内外面に文様を施すものである。1133は口縁端部をわずかに肥厚させ、その内外面に縄文帯をめぐらせている。また胴部にも縄文が施される。

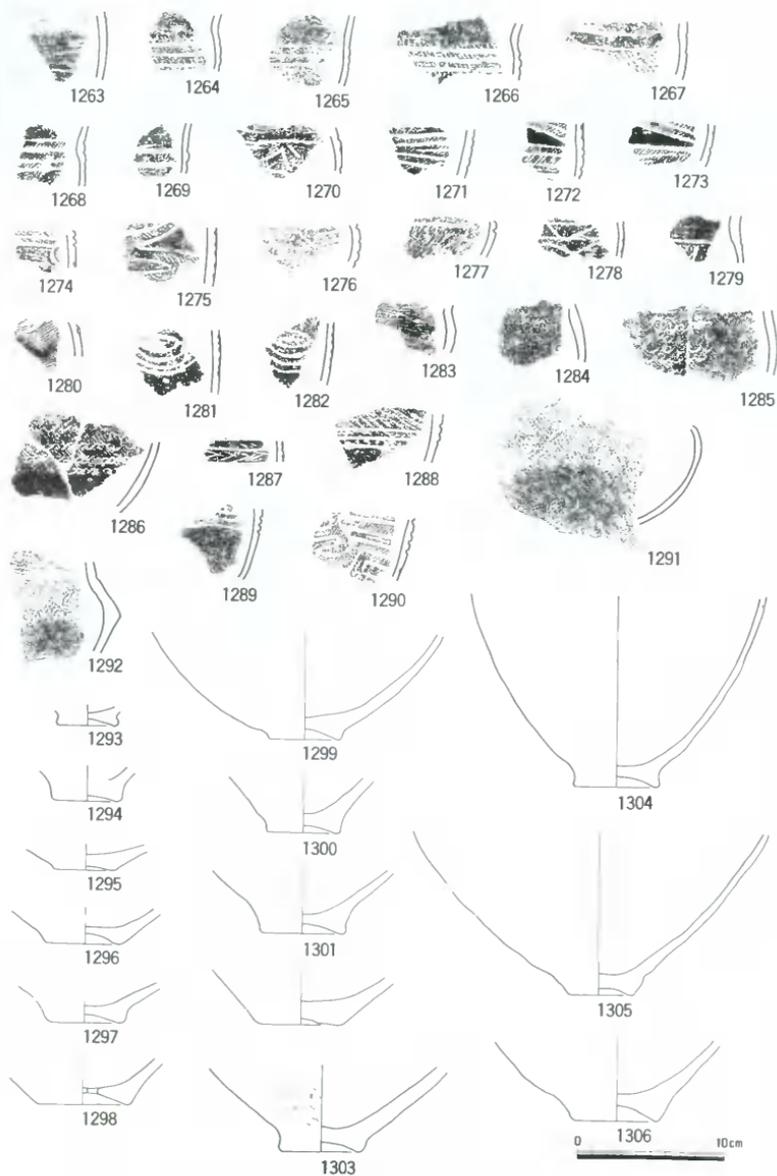
B 類は胴部に外反きみの短い口縁部がつくもので、口縁部、胴部とも無文である。

#### 浅鉢形土器 (第514・515図)

浅鉢は器形と文様から、口縁部が内湾しながら立上り文様を有するものをA類、同じく有文

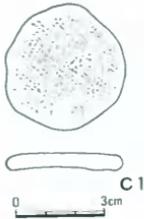


第517図 213-SS~TT 出土の縄文土器 (15)



第518図 213-SS~TT 出土の縄文土器 (16)

であるが底部から斜めに立上るものをB類、A類と同じ器形で無文のものをC類、B類と同じ器形で無文のものをD類とする。



第519図  
213-SS~TT出土の土製品

A類は縄文を幅広くめぐらすA a類と、縄文を沈線で区画するA b類がある。1149~1151は縄文地に蛇行する沈線を施している。

B a類は口縁部から幅広に縄文が施されるものである。B b類は縄文を沈線で画すものや、縄文地に沈線をめぐらすもの、また単位文として半巻き込み状文を施すものなどがある。

C類は無文で、口縁部が内湾するものである。これには1183のような大形のもの、1203のような小形のものがある。

D類も無文であるが、口縁部は斜め上方に立上るものである。1186のような大形のもの、1204のような小形のものがある。これら無文のC・D類は調整が粗雑である。

#### 注口土器 (第516図)

1206と1210は口縁部で、1206は口縁端部に刻目、1210は櫛状工具で条線を施している。1207~1209・1211~1220は同一個体と考えられ、沈線で区画された中を条線で埋めている。

#### 胴部 (第517・518図)

1224~1292は各器種の胴部破片である。1225と1260は垂下する条線、1256・1257・1261は縦横に条線が施されている。1284~1286は結節縄文、1287は横走る沈線をはさんで矢羽根状の刻みが施されている。

#### 底部 (第518図)

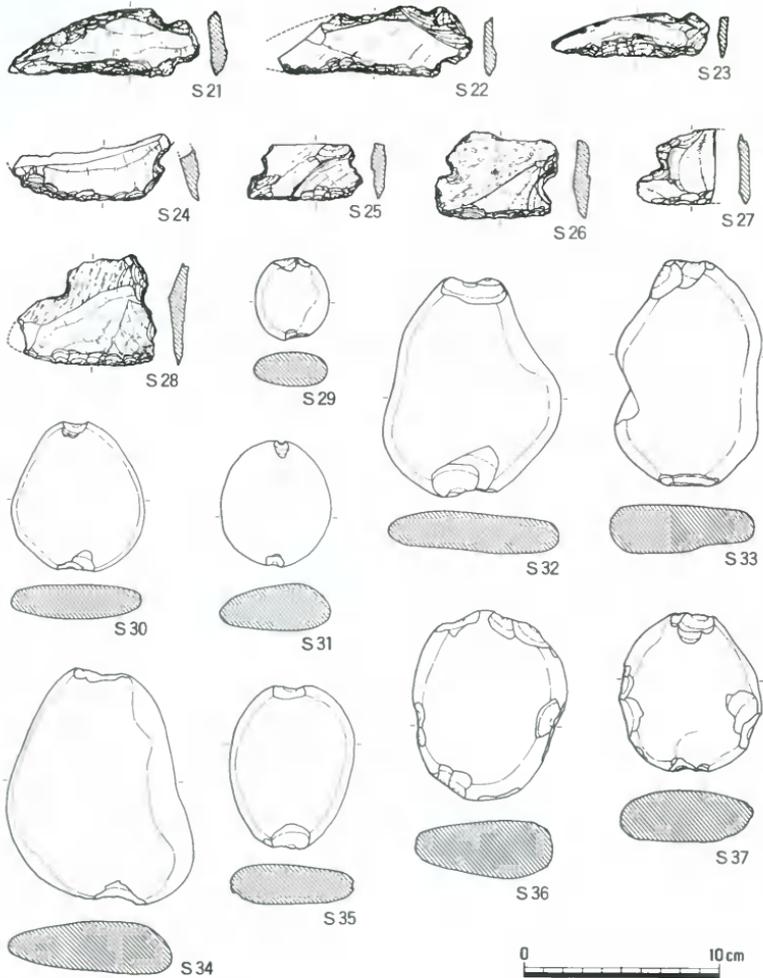
底部はいずれも凹み底であるが、胴部下半から斜めに底にいたるもの(1302など)と、一旦垂直ないし外反ぎみに開いて底部にいたるもの(1304など)とがみられる。

#### b. 土製品 (第519図)

一点であるが土器片を利用した土製円板が出土した。表面には羽状縄文が認められる。

#### c. 石器 (第520図)

石器は石鏃33点、削器8点、石庖丁状削器4点、石鎌状削器8点、楔形石器3点、石錘40点、石皿1点、敲石4点が出土している。石鏃はすべてサヌカイト製でその多くは凹基であるが、平基もみられる。削器は不定形な剝片の一辺に刃部をもつもので、すべてサヌカイト製である。石庖丁状削器(S25~S28)は弥生時代の打製石庖丁に類似するもので、長辺の一侧縁を刃部とし、他の一側辺は手を加えず背部としている。短辺の両側縁には抉りをもつ。すべてサヌカイト製である。石鎌状削器(S21~S24)は縦形の石匙に類似する。体部は先端を尖らせ、刃部側は直線的に、背部側は弧を描きながら基部側にいたり、両側縁からの抉りによって



第520図 213-SS~TT 出土の縄文時代石器

基部を作出している。石錘は平たい円礫を用い、その長軸の両端を打ち欠くものであるが、加えて短軸の両端を打ち欠くもの（S36・S37）もある。

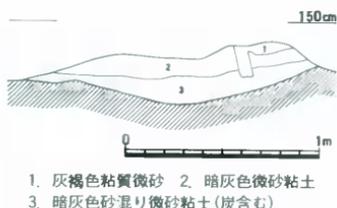
（平井勝）

### 3. 弥生時代前期の遺構・遺物

#### (1) 溝

溝179 (第521図、図版101・102)

213RR・SS区を丘陵の裾にそって西から南東方向に流走する溝である。弥生時代中期以後の溝と重複しているため、底部しか残存していない。埋土中からわずかに土器の細片が出土しており、前期と推定される。(平井勝)



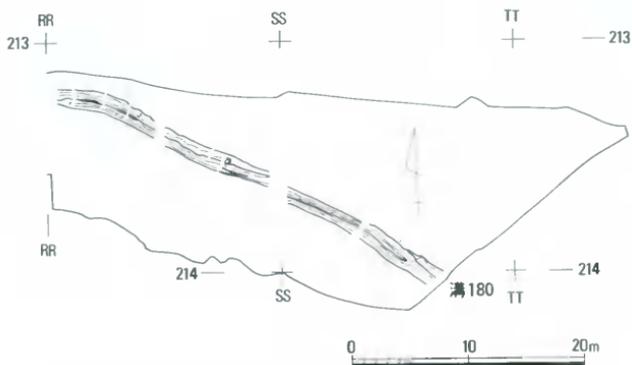
第521図 溝179

### 4. 弥生時代中期の遺構・遺物

#### (1) 溝

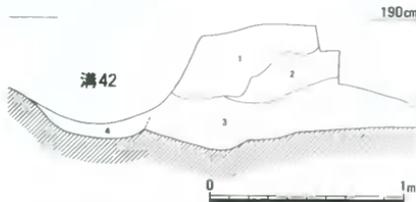
溝180 (第523・524図、図版102)

213RR・SS区を西から南東方向に流走する溝である。弥生時代後期以後の溝と重複しているため底部しか残存していない。埋土には炭や植物遺体を含んでいた。遺物は土器の破片がわずかに出土した。1307は甕の口縁部である。1308は蓋で、篋描の格子目文様が施され、小孔が2個穿たれている。時期は百・中・Ⅱと考えられる。(平井勝)



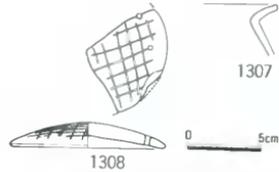
第522図 四元調査区の弥生時代中期遺構全体図 (S=1/500)

5. 弥生時代後期の遺構・遺物



1. 灰黒青色粘質土(小礫含む)
2. 灰色粘性砂
3. 灰黒色粘質砂(炭・植物遺体含む)
4. 灰黒色粘質土

第523図 溝180



第524図 溝180 出土遺物

5. 弥生時代後期の遺構・遺物

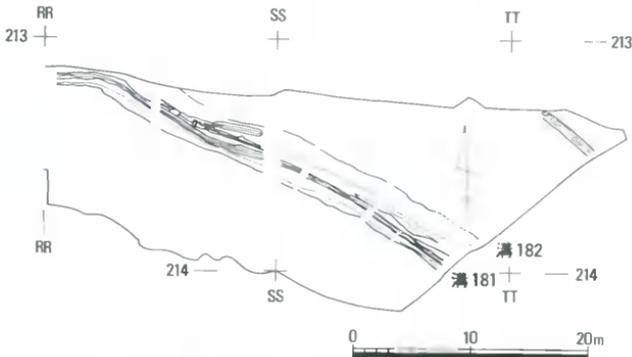
(1) 水田

213TT区で洪水砂で埋没した水田がわずかに検出された。微高地の縁辺を削平して水田化したもので、微高地と田面との比高は20cmを測る。水田耕土は厚さ6cmの暗灰色粘質土である。なお畦畔は調査区内では検出されなかった(図版100・101)。(平井勝)

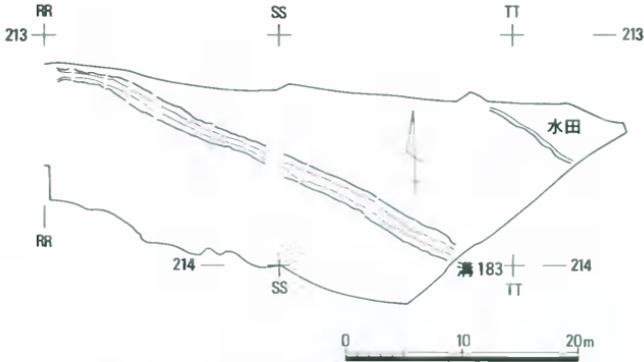
(2) 溝

溝181・182(第527図、図版102・103)

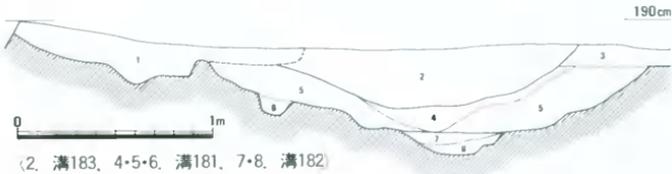
213RR・SS区の丘陵裾を西から南東方向に流走する溝である。2条の溝はほぼ平行しており、溝181が南側、溝182が北側になる。両者の切合関係は明瞭でないが、溝182の南側の壁が



第525図 四元調査区の弥生時代後期遺構全体図(S=1/500)

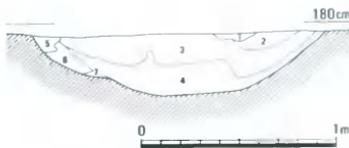


第526図 四元調査区の弥生時代後期洪水砂埋没遺構全体図 (S=1/500)



- (2. 溝183, 4・5・6. 溝181, 7・8. 溝182)
1. 淡褐灰黄色砂質土
  2. 淡灰黄色微砂
  3. 淡黄灰青色砂質土
  4. 褐灰色粘質土
  5. 褐灰色粘性砂質土
  6. 淡褐黄砂質土
  7. 灰褐色砂質土
  8. 暗褐灰色粘質土

第527図 溝181



1. 暗灰褐色粘質微砂
2. 淡灰褐色微砂
3. 灰褐色粘質微砂
4. 暗灰色微砂
5. 灰黑色微砂
6. 淡灰色微砂
7. 淡灰褐色微砂

第528図 溝183

立上りきった付近が境界と考えられる。溝181は丘陵側に掘られ、幅1m前後、深さ10cm前後を測る。溝182は溝183と重複しており、幅2.2m、深さ40cm前後を測る。遺物は土器の破片がわずかに出土しており、後期と考えられる。(平井勝)

溝183 (第528図、図版102)

213RR・SS区の丘陵裾を西から南東方向に流走する溝で、溝182と重複している。溝の幅は1.4m、深さ30cmを測る。埋上は砂

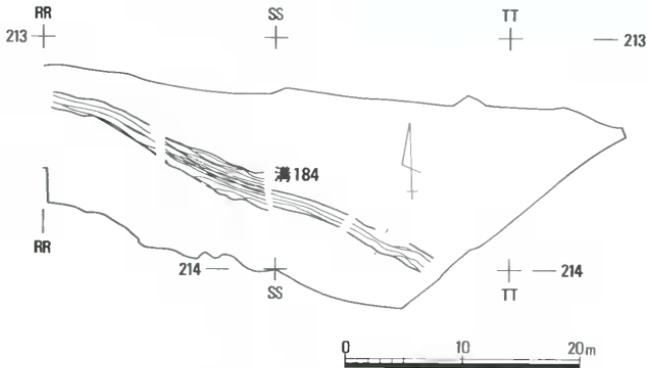
である。遺物は出土しなかったが、後期の水田を覆う洪水砂で埋没していることから、後期に属するものであろう。(平井勝)

## 6. 古墳時代の遺構・遺物

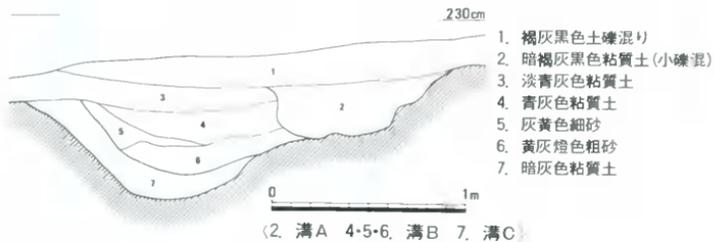
## (1) 溝

溝184 (第530・531図、図版101)

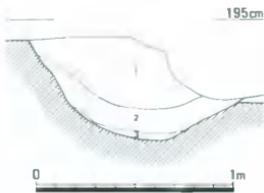
213RR・SS区を丘陵裾を西から南東方向へ流走する溝である。多い場所では3条程度の溝が重複しており、丘陵側のをA溝、その北側の2条のうち、新しいものを溝B、溝Bの下に重なるものを溝Cとする。溝Aは溝Bを切っており、幅1m、深さ25cmを測る。溝Bは溝



第529図 四元調査区の古墳時代遺構全体図 (S=1/500)



第530図 溝184



第531図 溝184

1. 灰青色粘性細砂
2. 灰色粘性細砂
3. 灰白色粗砂

Cを切っており、幅1.1m以上、深さ30cmを測る。溝Cは最初に掘削された溝で、幅1.1m以上、深さ90cmを測る。3条の溝の時期は、遺物が出土しなかったため明確でないが、すべて古墳時代と推定される。(平井勝)

## 7. 古代・中世の遺構・遺物

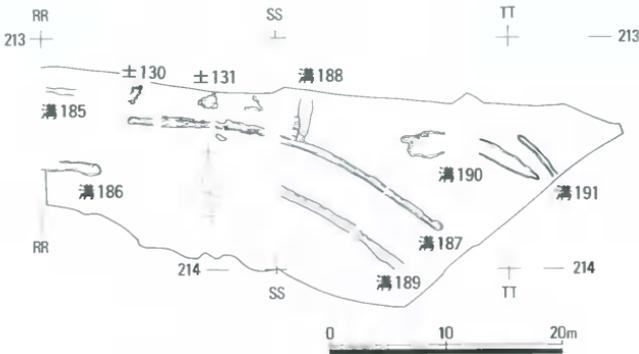
### (1) 土壌

#### 土壌130

213RR区で検出された土壌である。平面形はアメーバー状を呈し、最も長い部分で1.7mを測る。深さは15cmである。埋土は褐灰色粘質微砂である。遺物が出土しなかったため時期は不明であるが、検出面および埋土から古代～中世と考えられる。(平井勝)

#### 土壌131

213RR区で検出された土壌で、土壌130の東に位置する。平面形はアメーバー状を呈し、最も長い部分で1.7mを測る。深さは10cmと浅く、埋土は褐灰色粘質微砂を呈する。時期は古代から中世の中に収まるであろう。(平井勝)



第532図 四元調査区の古代～中世遺構全体図 (S=1/500)

## (2) 溝

## 溝185

213RR区で検出された東西方向に流走する溝である。上部を近世の溝によって切られているため一部しか残存していない。幅50cm、深さ20cmを測る。埋土は褐色粗砂である。遺物は須恵器と土師器の細片が出土しており、古代と考えられる。

(平井勝)

## 溝186 (番533図)

213RR区で検出された東西方向の溝である。一部が検出されただけで、幅70cm、深さ10cmを測る。埋土は灰黒色土で、土器がわずかに出土しており、中世と考えられる。

(平井勝)

## 溝187 (第534図、図版103)

213RR・SS区で検出された溝で、西から南東方向に流走する。溝は幅60cm、深さ25cmを測る。溝の底は平坦で、壁はほぼ垂直に立上る。埋土は3層に分けられる。遺物は土器がわずかに出土しており、中世と考えられる。

(平井勝)

## 溝188 (第535図、図版103)

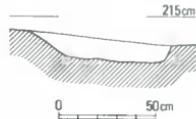
213SS区で検出された南北方向に流走する溝である。幅1.1m、深さ40cmの溝に、幅60cmで深さ15cmの浅い溝が南側、そして幅50cm、深さ10cmの溝が西側に取り付く。いずれも溝の一部を検出したのみであり、性格などについては不明である。遺物は出土しなかったが、検出面および埋土から中世と考えられる。

(平井勝)

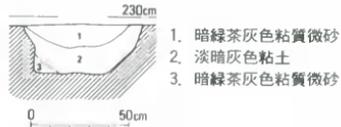
## 溝189 (第536図)

213SS区で検出された溝で、西から南東方向に流走する。丘陵裾をめぐる溝と考えられるが、その一部を検出したのみである。溝の幅は70cm、深さ20cmを測る。遺物は出土しなかったが、埋土から中世と推定される。

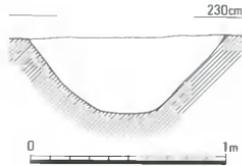
(平井勝)



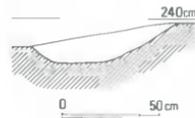
第533図 溝186



第534図 溝187



第535図 溝188



第536図 溝189



第537図 溝190

溝190 (第537図)

213SS・TT区で検出された東西方向の溝である。溝の幅は1.3mであるが、深さは浅く、5cmにすぎない。遺物は出土しなかったが、検出面から中世と推定される。

(平井勝)

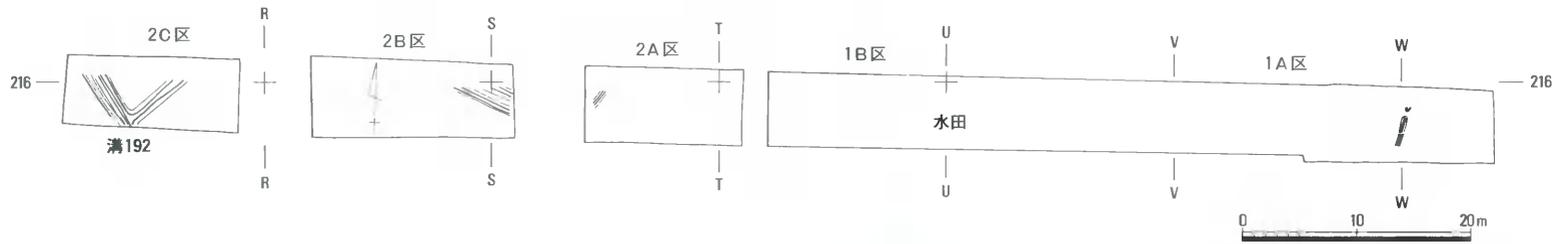


第538図 溝191

溝191 (第538図)

213TT区で検出された北西から南東方向に流走する溝である。溝の幅は35cm、深さ5cmを測る。埋土は淡灰色粘土である。遺物は古墳時代の須恵器を含むが、中世の土師器も出土しており、埋土と合せて考えれば中世に属すると考えられる。

(平井勝)



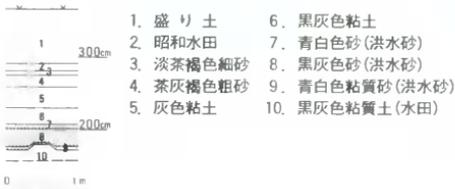
第539図 流田・開ノ山下調査区の遺構全体図 (S=1/500)

## 第7節 流田・開ノ山下調査区

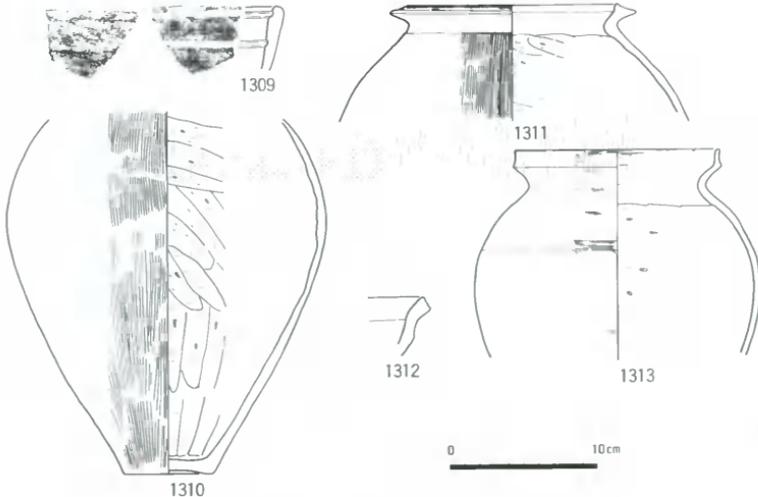
### 1. 流田・開ノ山下調査区の概要

流田調査区は堅石調査区の東、高縄手調査区の南に位置する。ここで報告するのは1982年度に調査した右岸用水調査区である。全長100m、幅5.5m、面積550㎡ある。東西に長い調査区で、東から1A・1B・2A・2B・2C・3区と小区分して発掘した。1B区は水田層上面まで掘り、これから畦畔を検出しようとしていた時に、用地外に滞っていた大量の水の圧力と

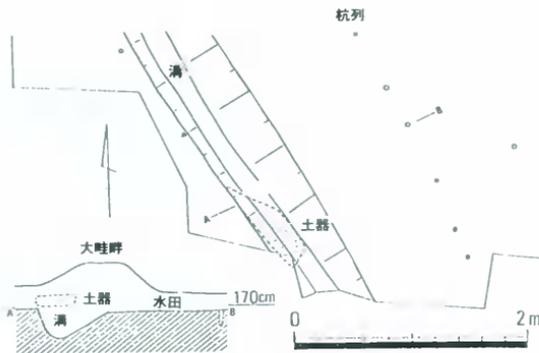
地盤の弱さによって、南壁が大崩壊を起こし、調査不能の状態になった。このことがあったので、調査区をさらに小刻みにして崩壊を防いだ。そのため、水田の下層については十分な調査ができて



第540図 流田・開ノ山下調査区土層柱状図 (S=1/80)



第541図 流田・開ノ山下調査区出土遺物



第542図 溝188・土器溜り・杭列 (S=1/50)

いない。3区については現用水に接しているということで水田層まで掘り下げることができていない。遺構としては水田畦畔6本、溝1条、杭列1列、土器溜り1ヶ所がある。遺物としては2C区だけで出ている。縄文晩期の条痕文土器、弥生後期の甕及び鉢、弥生時代の石鏃が1点。(浅倉)

## 2. 遺構・遺物

### (1) 水田

#### 水田

洪水砂によって埋没した水田である。1A区では中央部で1本の小畦畔がほぼ南北に検出でき、水口も見つかった。水田面の海拔は170cmである。1B区は水田畦畔を検出する直前に崩壊してしまった。2A区では西北端で1本小畦畔を見つけた。北東から南西方向に延びる。2B区では東北端で2本平行した中畦畔を検出した。間に溝を挟む畦畔である。2A区の畦畔とそれは直交する。ここの水田面の海拔は165cmで、右岸用水調査区中一番低い。2C区では西寄りV字形に大畦畔を検出した。その幅は天場40cm、下場110cm、水田面からの高さは西のものが23cm、東のものが18cmを測る。水田面の海拔は東のものが175cm、西のものが180cmである。遺物は2C区の水田層から甕と鉢、東大畦畔の中から甕が出土している。これにより水田層の時期は百・後・Ⅱ～百・後・Ⅳに比定できる。(浅倉)

### (2) 溝

#### 溝192

2C区の西大畦畔の下層で検出した溝で、畦畔と同一方向に伸びている。検出長270cm、幅60cm、深さ25cmを測る。溝の上層には長さ90cm、幅25cmの範囲に土器溜りが認められた。口縁端面に3条の沈線をもつ甕1311で、百・後・Ⅰに属する。なお溝から100cm離れて平行して杭列が検出された。水田に伴うか溝に関連するものか不明だが、弥生後期の時期であろう。

(浅倉)

## 第4章 まとめ

本報告によって、沢田遺跡の低水路調査区は未発掘部を除いて約80%が明らかにされ、全体の様相がかなり明確になってきたといえる。

沢田遺跡はその西側に広がる原尾島遺跡、そして東側に広がる兼基・今谷遺跡と区分されるものではないが、およそ北西から南東方向に延びる微高地を核として、その周辺に広がる低位部とから成っている。微高地の形成は、縄文時代中期後半以前にあることが、里木Ⅱ式土器の出土からうかがわれ、以後、主に居住域として利用されている。また微高地の周辺に広がる低位部は、弥生時代の前期から主に水田として利用されており、生活の場と生産の場が一体的にとらえられる。

沢田遺跡における最も古い遺物は、縄文時代中期の里木Ⅱ式の土器である。わずか1片ではあるが、新しく形成された微高地での最初の生活を物語る。次いで後期の津雲A式、彦崎K1式の土器が出土するものの、いずれもわずかであり、実態は明確でない。

続く彦崎K2式の時期には四元調査区で大量の遺物とともに、遺構も発見された。多量の縄文土器包含層の下部で検出されたヤマトツジミを主体とする貝塚から、海から少し奥まった所に位置していたと考えられ、多量の石錘から魚撈活動も活発であったことがうかがわれる。しかしその一方で、ドングリ貯蔵穴もあり、狩猟・漁撈・植物質食料の採集を複合的に展開していたと考えられる。これに加えて重要なことは、石包丁状削器、石鎌状削器の出現である。後期になると出現するこの石器は、沖積地への進出と重なり合うことから、新たな食料獲得活動に関わるものとして注目される。

晩期になると遺物出土地点は拡大し、その後半には量も増加する。特に本遺跡出土土器を標式とする沢田式段階になると、土器とともに土壙なども発見されている。沢田式段階で注目されるのは、旧河道西岸で出土した太型蛤刃石斧と、旧河道内の沢田式相当層における稲科の花粉およびプラントオパール出現である。前者は水稻農耕とともに伝来した工具である。また後者の結果は、なお出現率が弥生前期相当層に比較して少ないとはいえ無視されるべきものではない。石器集積土壙1出土の石包丁状石器の刃部にみられた珪酸付着による光沢、太型蛤刃石斧の存在などを合わせて考えるならば、水田こそ検出されないものの、水稻農耕を行っていた可能性は強いと考えられる。

弥生時代前期になると、微高地には環濠集落や墓、低位部には水田が形成される。環濠集落は西側を溝36、東側を溝44で画されており、全体を推定すると東西85m、南北100mの楕円形にめぐむようである。環濠の内側には5軒の住居跡が確認されているが、それに加えて円形周

#### 第4章 まとめ

溝も2基検出された。住居跡は柱穴によって存在が確認された2基を除けば、いずれも円形を呈しており、その中には石鏃が多くみられるものもあり、防禦の目的で掘られた環濠と合わせて注目される。

環濠の外側には主に前期Ⅲの時期の遺構が広がっているが、環濠東側の旧河道東岸には土壌墓ないし土壌が集中的に認められる。長方形を呈する土壌の中には木棺痕跡をもつものもあり、供献された土器は集落から出土するものとは異なり、文様で飾られたものが多い。

旧河道の東側の微高地は、旧河道東岸に接する土壌墓群を除けば、遺構は極めて少ない。この微高地は東ないし東南に向かって低くなるが、その縁辺の凹地に前期の水田が形成されている。前期の水田は上・下2面確認されており、いずれも等高線にそって長方形の区画がなされている。

前期の水田が形成された低位部には、さらに中期から後期にいたる水田が認められる。中期の水田は畦畔の一部が検出されたのみで、その様相は明確でないが、一区画の面積は前期より広がっている。洪水砂で埋没した後期の水田は、飛躍的に拡大しており、低位部をはじめ旧河道、さらに前期の環濠集落があった微高地においても南側から開田が進んでいる。このうち東側から南東に広がる低位部の水田は、微高地上を走る用水路からの給水の様相が明確にされた。後期水田の飛躍的拡大は、人口の増加、すなわち集落の拡大にも係わることであるが、同時期の集落は発見されていない。

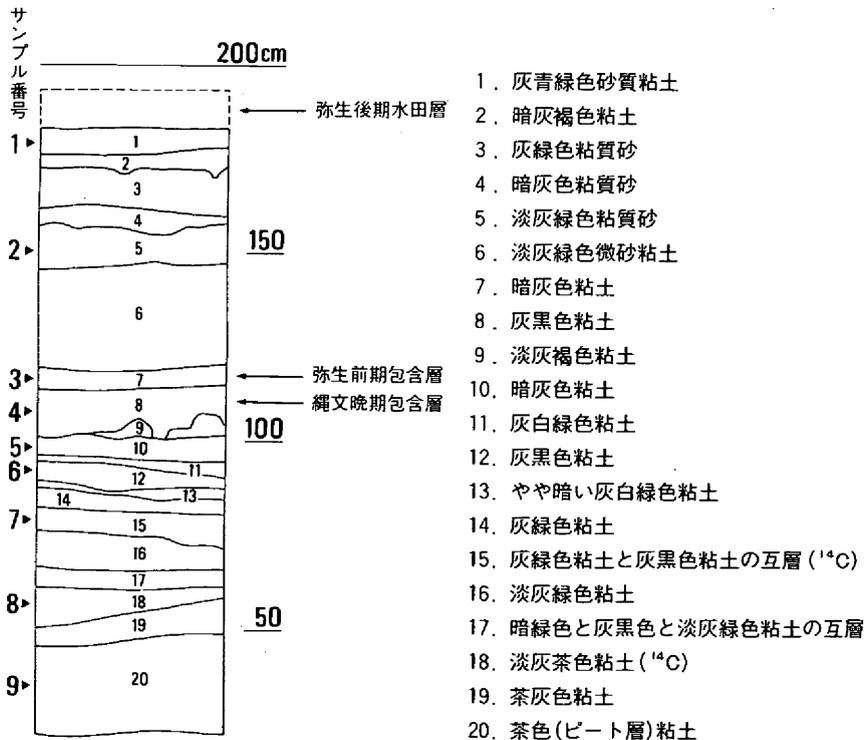
古墳時代の集落は西側の微高地上と、旧河道の東側微高地上に認められる。竪穴住居はいずれも方形で、掘立柱建物と混在している。古代から中世の遺構は少なく、西側の微高地上で井戸と掘立柱建物が3棟まとまっている以外は、溝や土壌があるにすぎない。足洗調査区を南北に走る中世の溝は、その間隔が100mあり、条里に係わるものと考えられる。 (平井勝)

# 付載 1 植物化石分析報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

## 1. 試料および目的

岡山市百間川流域の沖積地上に立地する沢田遺跡の207-M中央トレンチ北壁断面に認められた堆積物は、出土遺物から縄文時代晩期以前から弥生時代後期までわたるとされている。土壌試料はこのトレンチから採取されたNo.1～9までの9点である(図1)。最上部のNo.1試料は弥生後期の水田層とされ、No.3試料が弥生前期包含層、No.4試料が縄文時代晩期包含層とされている。No.5～9試料は縄文時代晩期以前とされるが、詳細は不明である。これらの試料について、花粉分析(No.1～9)とプラント・オパール分析(No.1～7)を行い、No.9からNo.1試料に至るまでの植生の変遷を明らかにするとともに、水田による稲作の消長について検討した。



第1図 高縄手B調査区207-Mの中央トレンチ土壌サンプル採集部  
土層断面図

2. 花粉分析

2-1 分析方法および結果の表示法

花粉・孢子化石の抽出方法は、試料を15g前後秤量し、フッ化水素(HF)処理により試料中の珪酸質の溶解と試料の泥化を行う。次に重液(ZnBr<sub>2</sub> 比重2.2)を用いて鉱物質と有機物を分離させ、有機物を濃集する。その有機物残渣について、アセトリンス処理を行い植物遺体中のセルロースを加水分解し、最後にKOH処理により腐植酸の溶解を行う。処理後の残渣は、よく攪拌しマイクロピペットで適量を取り、グリセリンで封入する。

検鏡においてはプレパラート全面を走査し、その間に出現した全ての種類(Taxa)について同定・計数した(表1)。

古植物および古環境の検討を行うために、計数の結果にもとづいて花粉化石群集変遷図を作成した(図2)。出現率は、樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉とシダ類孢子は総花粉孢子数から不明花粉数を除いた数を、それぞれ基数として百分率で算出した。

表1 百間川沢田遺跡 207-M 中央トレンチ北壁面試料 花粉分析結果

種類 (Taxa)	試料番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9
植木花粉										
マキ属		—	—	1	5	1	5	1	1	—
モミ属		2	10	13	14	7	14	13	18	4
ツガ属		2	5	9	5	2	7	5	4	1
マツ属復雑管束亜属		33	14	9	10	6	3	5	16	10
マツ属(不明)		10	2	3	4	10	10	12	4	1
コウヤマキ属		3	3	6	6	6	4	10	4	3
スギ属		33	16	22	29	13	11	37	13	11
イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科		5	7	8	6	4	2	6	21	11
ヤナギ属		—	2	—	—	—	—	7	1	—
ヤマモモ属		3	2	—	—	—	—	—	—	—
サワグルミ属		—	—	—	—	—	—	1	—	—
クルミ属		1	—	—	1	2	—	2	4	1
クマシデ属—アサダ属		8	10	5	11	4	5	7	9	7
ハンバミ属		—	1	—	—	—	—	—	2	—
ハンバミ属		—	1	—	—	—	—	—	2	—
カバノキ属		—	1	—	1	2	—	1	2	1
ハンノキ属		1	1	1	2	7	2	3	2	—
イヌブナ		3	1	2	1	3	4	—	5	1
ブナ		1	4	1	2	5	5	1	8	2
コナラ亜属		29	18	16	26	24	9	23	51	53
アカガシ亜属		79	125	109	123	63	70	102	143	416
クリ属近似種		1	4	4	5	8	1	35	1	—
シイノキ属		15	26	12	19	4	4	22	5	14
ニレ属—ケヤキ属		3	2	2	7	4	5	5	6	3
エノキ属—ムクノキ属		4	9	13	7	9	2	1	49	54
バラ科		—	—	—	—	—	—	—	1	—
ミカン科近似種		—	—	—	—	—	—	—	—	1
センダン属近似種		—	—	—	—	—	—	—	1	—
アカメガシワ属		—	—	—	—	—	—	—	4	—
モチノキ属		1	—	—	—	—	1	—	—	—
ニシキギ属		—	—	—	—	—	—	—	1	—
カエデ属		—	—	—	—	—	2	1	—	1
トチノキ属		—	2	3	—	3	1	6	3	1
クロウメモドキ		—	—	—	—	—	—	—	3	—
ブドウ属		—	—	1	1	—	—	—	—	—
ツタ属		—	—	—	1	—	—	—	—	—
グミ属		—	—	—	—	—	—	—	—	2

ウコギ科	—	1	—	—	—	—	—	2	1
ミズキ属	—	—	—	—	—	—	—	3	1
ツツジ科	—	—	—	—	—	—	1	—	—
ハイノキ属	—	—	—	—	1	—	—	—	—
エコノキ属	—	1	—	—	—	—	—	—	—
トネリコ属	—	—	—	—	—	—	—	2	—
-----									
草木花粉									
ガマ属	—	—	1	7	—	2	4	—	1
ミクリ属	—	—	1	—	—	—	—	—	—
サジオモダカ属	—	—	1	3	3	—	—	—	—
オモダカ属	6	4	2	—	—	—	—	—	—
イネ科	397	226	240	163	63	13	12	48	20
カヤツリグサ科	24	3	35	68	30	149	237	11	6
イボクサ属	—	—	1	—	—	—	—	6	4
ミスアオイ属	12	6	13	20	8	—	—	—	1
ユリ科	—	—	—	—	—	1	—	—	—
クワ科	—	—	1	1	1	1	—	—	1
ギンギン属	—	—	—	1	1	—	—	—	—
サナエタデ節-ウナギツカミ節	3	2	5	11	4	14	7	6	2
アカザ科	—	7	1	—	—	3	5	—	—
ナデンコ科	2	2	3	2	—	—	—	—	—
カラマツソウ属	—	—	1	—	—	—	—	—	—
キンボウゲ科	1	—	—	—	—	—	—	—	—
バラ科	—	—	—	—	—	—	—	—	1
マメ科	—	1	—	—	1	—	—	—	—
キカングサ属	—	—	1	—	—	—	—	—	—
ミズユキノシタ属近似種	1	—	—	—	—	—	—	—	—
セリ科	1	1	—	1	1	1	—	—	—
ネナンカズラ属	—	—	—	—	1	—	—	—	—
ゴキツル属	—	—	—	—	—	—	—	3	—
ヨモギ属	37	12	16	17	17	14	8	4	7
他のキク亜科	1	5	1	1	1	6	2	1	—
タンポポ亜科	3	1	—	—	—	1	—	—	—
-----									
不明花粉	21	29	32	31	58	44	36	14	11
-----									
シダ類孢子									
ヒカゲノカズラ属	1	—	—	—	1	4	2	—	—
ハナヤスリ属	4	1	—	—	—	2	—	—	—
ゼンマイ属	1	1	—	—	23	5	—	—	1
イノモトソウ属	—	2	1	1	—	8	1	—	—
サンショウモ	10	1	—	—	—	4	1	—	—
デンジソウ属近似種	1	—	—	—	—	—	—	—	—
他のシダ類孢子	15	51	17	34	277	294	68	9	1
-----									
Botryococcus	46	2	5	1	1	—	—	—	—
-----									
合計									
樹木花粉	236	267	240	286	188	203	307	389	600
草木花粉	488	270	323	295	131	205	275	79	43
不明花粉	21	29	32	31	58	44	36	14	11
シダ類孢子	32	56	18	35	301	317	72	9	2
総花粉・孢子	777	622	613	647	678	769	690	491	656

## 2-2 結果

全般的に、花粉化石の保存状態は比較的良好で、花粉化石の産出も比較的多かった。とくに、Na 9 と 8 試料は花粉化石の保存状態・産出共に非常に良かった。また、Na 7 ~ 4 試料については、花粉化石以外の黒褐色から黒色を帯びた炭化した植物遺体が多く認められた。

樹木花粉が42種類・草木花粉が26種類・シダ類孢子が7種類、全試料を通じて検出された。花粉・孢子化石の構成比は、下部のNa 9 と 8 試料では樹木花粉が60~70%を占め草木花粉とシダ類孢子が少なく、Na 7 ~ 1 試料では樹木花粉が20~30%に低下し草木花粉+シダ類孢子が

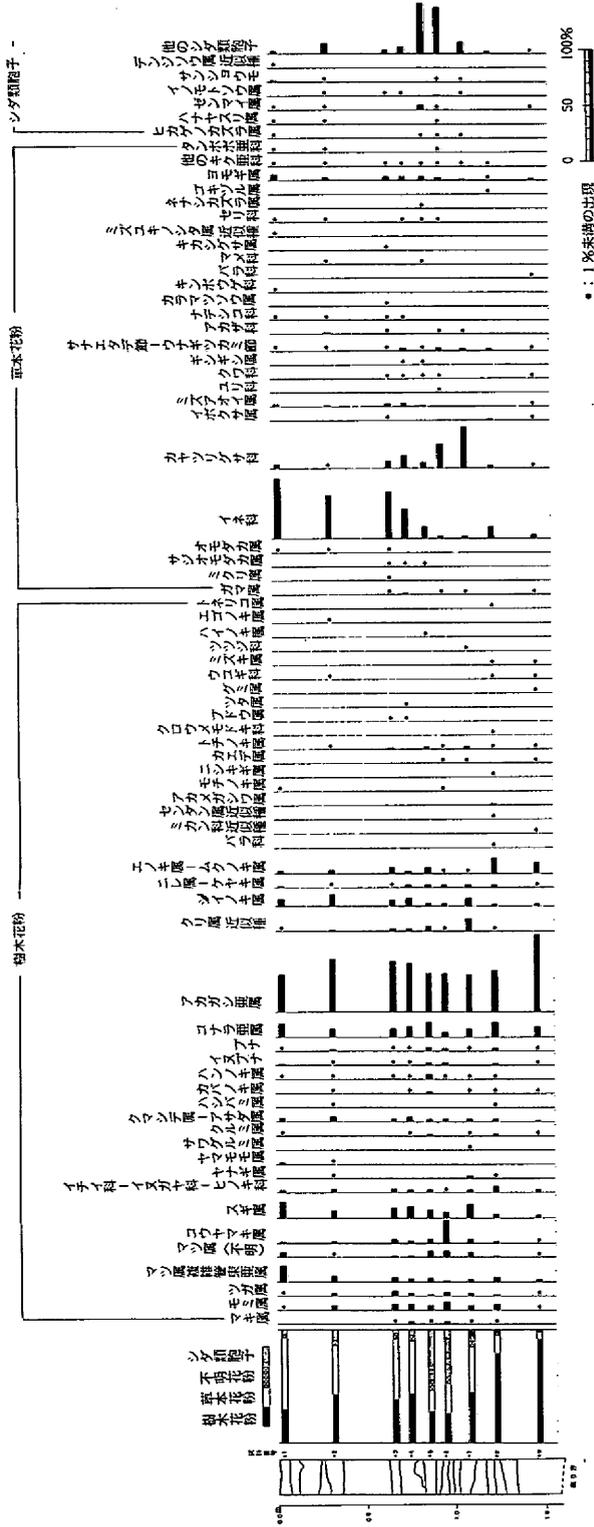


図 2 百間川沢田遺跡 207-M 中央トレンチ北壁面試料花粉化石群集変遷

50～70%の割合を占める。樹木花粉では全試料を通じてアカガシ亜属が約40%以上の高い出現率を示し、とくに最下部のNo.9試料では約70%に達する。そのほかにエノキ属—ムクノキ属がNo.9と8試料で、スギ属とシノキ属がNo.7～1試料で、マツ属復維管束亜属が最上部のNo.1試料で、コナラ亜属が全試料で、それぞれ10%前後出現しており、やや多い。また、No.8～2試料ではモミ属が約5%前後出現し、No.8～3試料ではマキ属が低率ながら連続して出現する。草本花粉とシダ類孢子では、No.9と8試料でイネ科、カヤツリグサ科イボクサ属、ミズアオイ属などが僅かに出現するに過ぎない。No.7～5試料では、7試料でカヤツリグサ科が約35%の高い出現率を示し、上方に向かって減少する。それに替わってNo.5試料でシダ類孢子が約50%に増加する。この間のイネ科の出現率は10%以下と低率であるが、No.5試料でやや増加する。抽水植物のガマ属と浮水植物のサンショウモがNo.7と6試料に僅かに出現し、No.5試料になるといわゆる水田雑草とされるサジオモダカ属とミズアオイ属が出現するようになる。No.4～1試料ではイネ科が約30%以上の高い出現率を示す。とくに、弥生後期水田層とされているNo.1試料では、イネ科の出現率が50%以上に達する。また、抽水植物のサジオモダカ属、オモダカ属、ミズアオイ属などが低率ながら出現する。

### 2-3 考察

#### 古植生・古環境について

No.9～1試料までカン類を主とする照葉樹林が極相林として分布していたと推定される。No.9～8試料では草本花粉とシダ類孢子が非常に少なく大部分が樹木花粉であることから、No.9～8試料の堆積した頃は、照葉樹林が低地から丘陵まで覆っていたと推定される。この頃の照葉樹林にはエノキ属—ムクノキ属やナラ類などが混ざって生育し、草本植物は抽水植物のミズアオイ属やイボクサ属などが水域周辺または森林の小草として生育していたと考えられる。No.7試料以降になると現地性の高い草本花粉とシダ類孢子的出現率が高くなることから、低地では草本植物が優占するような開けた空間が存在するようになったと考えられる。低地において草本植物が優占するようになった原因としては、次の2点が考えられる。まず、No.9試料からNo.8試料にかけて堆積物が泥炭から粘土に変わっていることから、上流からの堆積物の供給が増加したことが考えられる。これによって、低地には草本植物が優占されるような開けた空間が広がったのではなかろうか。次に、No.7試料から炭化した植物遺体が多くみられるようになる。植物遺体は自然堆積物中で炭化するには数百万年～数千万年かかり、数千年の単位で炭化することはないとされることから、この炭化した植物遺体は火などの高熱に起因して生じた可能性が高い。したがって、低地の森林が燃えて部分的に消失した可能性が考えられ（但し、人為的かどうかについては現時点では不明である）、そこに草本植物が優占して分布するようになったのかもしれない。

Na 7 試料以降では照葉樹林のエノキ属—ムクノキ属が減少し、それに替わってスギが混入するようになる。Na 1 試料が堆積する頃になって、マツ（ニヨウマツ類）が混入するようになったと考えられる。低地ではNa 7 試料の堆積した頃カヤツリグサ科が優占し、Na 6～5 試料の堆積した頃になるとツダ類が繁茂するようになる。そして、Na 5 試料からイネ科が増加し、Na 4 試料以降になるとイネ科が優占するようになったと考えられる。

水田耕作について

弥生時代後期水田層は最上部のNa 1 試料である。Na 9 試料からNa 6 試料まではイネ科花粉の出現率が低率であり、生物顕微鏡による観察においてもイネ属に似たイネ科花粉が見られなかった。Na 5 試料からイネ科花粉の増加が見られ、その中にイネ属に類似した花粉化石が見られた。そこで、Na 5～1 試料についてノマルスキー微分干渉装置の光学顕微鏡を用いてイネ属の同定を行った（表 2）。その結果、Na 5 試料ではイネ科花粉が少なかったものの50個体同定したうちの32%がイネ属であった。Na 4～1 試料では100個体のイネ科花粉を同定した結果、Na 4 試料で18%、Na 3 試料で34%、Na 2 試料で40%、Na 1 試料で47%がイネ属花粉であった。

表 2 百間川沢田遺跡におけるイネ科花粉に締めるイネ属花粉の割合（%）

試料番号	イネ属	他のイネ科	不明	固定個体数
1	47	44	9	100
2	40	49	11	100
3	34	56	10	100
4	18	58	24	100
5	36	48	16	50

註：不明はイネ属と他のイネ科花粉との区別が明確にできなかったもの

イネ科花粉のうち、イネ属の割合が30%以上を示すと、現在のような集約的稲作が近傍でおこなわれていたとされている。（鈴木・中村、1977）これにしたがえば、Na 3、2、1 試料の同定結果は近傍で現在のような集約的稲作が行われていたといえる。花粉は堆積物中で下方に向かって垂直移動することが明らかになっており、（鈴木・中村、1977）少なくとも20～25cm下まで移動する可能性があるためNa 5 試料についても稲作が行われていた可能性があるものの、総花粉・孢子化石に占めるイネ科花粉の割合が低いこと、同定個体数が50個体と少なかったことから、検討の余地があると思われる。Na 4 試料においても近傍で稲作が行われていたかもしれないが、行われていたにしても弥生後期水田層のような集約的なものでなかったと思われる。また、いわゆる水田雑草といわれる種類を含む抽水植物のオモダカ属、サジオモダカ属、ミズアオイ属などがNa 5 試料から上で連続的に出現することから、稲作が行われていたとすれば水田であった可能性が考えられる。なお、プラント・オパールの分析結果においても花粉分析と

調和的な結果が得られている。

このように、弥生時代後期の水田とされるNo.1試料の分析結果は水田稲作を示唆しており、考古学的所見と調和した。そして、明確に水田遺構が確認されたNo.1試料より下位の試料については、No.2および弥生前期包含層とされるNo.3試料においてもNo.1試料と同じ結果がえられ、水田稲作が行われていたことが示唆されている。一方、縄文晩期包含層とされるNo.4試料とそれ以前のNo.5試料では、イネ属比率等から水田稲作の可能性が示唆されるものの、その比率にバラつきもあり今後検討の余地がある。これらの時期にたとえ稲作が行われていたにしても、弥生時代ほど集約的でなかったと考えられる。

#### 引用文献

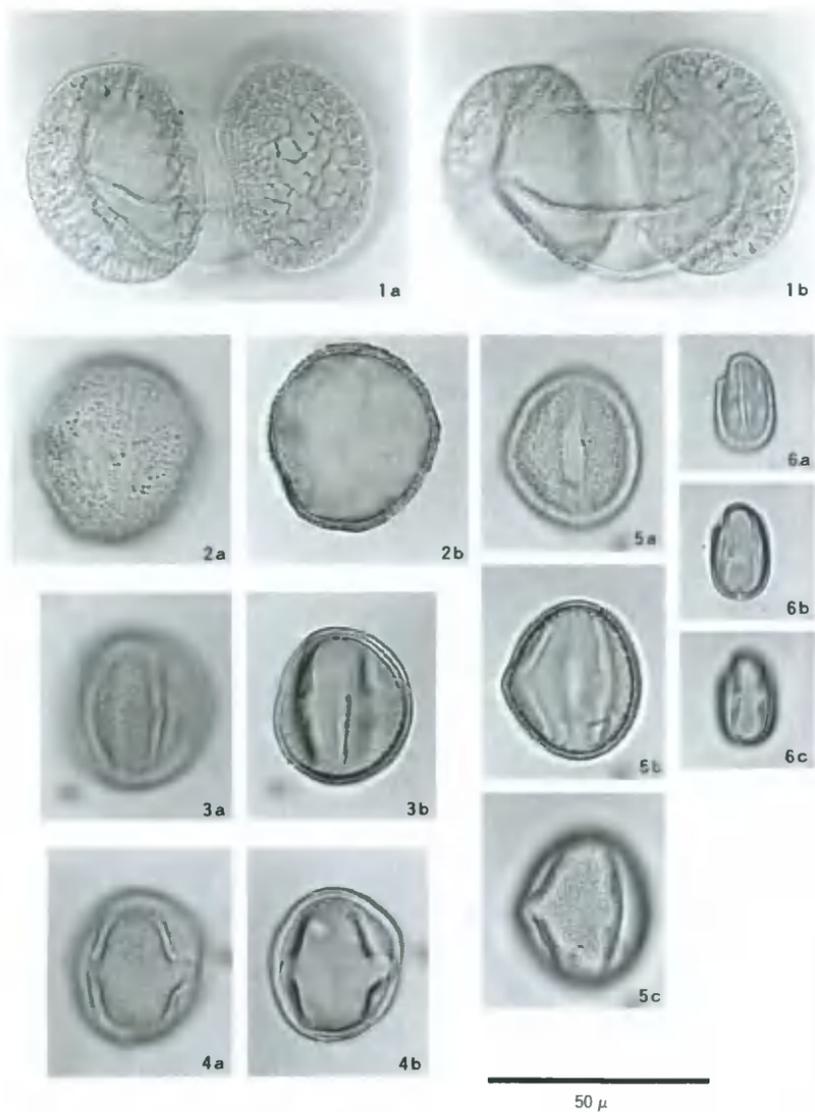
鈴木功夫・中村 純 (1977) : 文部省科研費特定研究「古文化財」 「稲作の起源と伝播に関する研究—中間報告」、中村 純 編、P.2~30

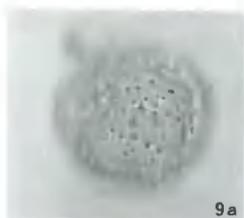
#### 花粉化石図版説明

写真番号	花粉化石名	試料番号	単体標本番号
図版 1			
1 a, b	マツ属複維管束亜属	1	923
2 a, b	コナラ亜属	1	924
3 a, b	アカガシ亜属	9	931
4 a, b	アカガシ亜属	9	932
5 a, b, c	アカガシ亜属	9	933
6 a, b, c	シイノキ属	3	928
図版 2			
7 a, b	エノキ属—ムクノキ属	8	930
8	ミズキ属	8	929
9 a, b	オモダカ属	2	926
10	イネ科	2	925
11 a, b	ミズアオイ属	3	927

\* 「単体標本番号」は、当社にて保存している単体標本番号である。

图版 1





50  $\mu$

## プラント・オパール分析

### 3-1 分析方法

- ① 試料を10g秤量して500cc用トールビーカーに入れる。試料中の有機物を除去するため過酸化水素水10ccを加え、反応を促進させるため電熱器でしばらく加熱する。次に鉄分を除去するため塩酸10cc加えさらに加熱する。反応が穏やかになったところで蒸留水を加え、しばらく放置して上澄み液を捨てる。
- ② プラント・オパールを濃集するため100メッシュ(0.149mm目)の篩で篩別する。その後、再び蒸留水を加え、しばらく放置して浮遊する粘土分とともに上澄み液を捨てる。上澄み液が透明に近くなるまでこの操作を繰り返す。
- ③ 比重2.3に調整した重液(臭化亜鉛)を試料に加え、遠心機にかけて浮上してきたプラント・オパールを集め、洗浄のため蒸留水を加えて再び遠心機にかける。
- ④ 試料をスライドガラスに展開しグリセリンで封入する。検鏡の際は生物顕微鏡を用い400倍にてプレパラートを走査し、出現したイネ科植物の分類群について現生標本をもとに同定・計数する。

なお、同定の対象としたプラント・オパールは、イネ科植物の亜鈴型細胞で形成された植物珪酸体に由来したものである。亜鈴型細胞はイネ科植物葉部(葉身と葉鞘)の表皮組織に特有なものであり、形態が属レベルで異なるため、古イネ科植物相を推定するうえでよい指標となる。

(大越、1982)

### 3-2 結果と考察

産出した分類群のすべてとその産出率を表3に示す。産出率は各試料の総産出個数を基数として算出した。さらに、産出割合をみるため図3を作成した。図3では、分類群を「栽培植物」、「湿生植物」、「乾地性植物(比較的乾いた土地に多く生育する植物)」、「その他」の4つの項目にまとめ、項目ごとの産出率をグラフに示した。そして、各々の分類群の産出率も併せてグラフに示した。また、写真図版を作成した。

全試料を通じて産出個数は多く、200個を越える。産出した分類群(Taxa)では、タケ亜科の産出率が全試料を通じてかなり高い。また、計上はしていないがタケ亜科については表面に溶食を受けたものがかかりみられる。これは、タケ亜科の多くが異地性(生育地以外の場所から運搬され堆積したこと)である可能性が高いことを示す。そして、タケ亜科が比較的乾いた土地に生育することから、その生育地としては、遺跡を挟む微高地の斜面が考えられる。以上のことから、全試料にみられるタケ亜科の高い産出率はタケ亜科のプラント・オパールが遺跡内に流入したことを反映すると考える。

タケ亜科以外では湿性植物、とくにヨシ属の産出率が高い。また、溶食を受けたものがあまりみられず、珪化の弱いものもみられる。これは、タケ亜科以外のものが現地性（生育場所で堆積したこと）である可能性が高いことを示す。したがって、207-M中央トレンチ北壁付近は縄文時代晩期以前から弥生時代晩期にかけて湿地的環境であったと考える。このことは、花粉分析において抽水植物などの水生植物が検出されていることと調和的である。

No. 6 試料を除いたすべての試料でイネ属が産出し、とくに弥生時代後期とされるNo. 1 試料と弥生時代前期包含層とされるNo. 3 試料では、ほかの試料に比べ高い産出率を示す。また、花粉分析の結果では、No. 5 試料より上位の試料で稲作の存在が示唆されている。さらに、No. 1 試料を採取した土層では、弥生後期の水田遺構が確認されている。以上のことから、No. 1 試料以外の試料で稲作が営まれていた可能性は、No. 3 試料でもっとも高い。また、No. 2 試料、No. 4 試料（縄文前期包含層）、No. 5 試料でもイネ属が産出しているが、その産出率は低く、プラント・オパール分析結果から判断すれば稲作の可能性は低い。しかし、これらの試料でもイネ属花粉が産出していることから、遺跡の近傍での稲作を完全に否定するものではない。今後、同様の遺跡で花粉、プラント・オパール分析を重ねるとともに、珪藻分析により堆積環境等の検討を加えることで、稲作の出自が弥生時代前期以前に遡るか否かが明かとなる。

No. 7 試料でのイネ属の産出率は、ほかの試料に比べ極端に低く、花粉分析の結果でもイネ属花粉は産出していない。したがって、この時期に遺跡内での稲作の存在は考えられない。No. 7 試料でイネ属のプラント・オパールが産出したことについては、上流部からの流れ込みや上位層からの落込みの可能性が考えられる。

また、イネ属の増減は、ヨシ属と相反する傾向がみられる。現在でも、開田まもない水田や粗放経営の水田ではヨシ属が雑草としてみられる（宮脇、1984）ことから、水田雑草としてヨシ属が繁茂していたのだろう。

なお、ヒエ属、キビ属、オオムギ属については、栽培種と野生種の判別はつけられなかった。

#### 引用文献

大越昌子（1982）：プラント・オパール、寿能泥炭層遺跡調査報告書—自然遺物編—P 239～254、埼玉県教育委員会。

宮脇 昭（1984）：日本の植生 宮脇 昭編、P116～121。

表 3 百間川沢田遺跡 207-M 中央トレンチ北壁面試料プラント・オパール分析結果 (%)

分類群	試料番号						
	1	2	3	4	5	6	7
イネ属	7.6	7.6	7.6	7.6	7.6	7.6	7.6
マコモ属	—	—	2.2	1.0	—	1.4	—
ヨシ属	15.3	21.5	28.0	45.6	19.1	42.7	30.2
コブナグサ属	4.0	2.4	3.3	1.0	0.9	0.5	—
ケタ亜科	55.1	58.0	46.9	32.9	72.7	48.0	62.5
チガヤ属	2.5	1.8	2.7	1.7	2.6	1.4	1.8
ススキ属	1.1	0.6	1.1	1.0	—	—	—
キビ属	—	—	—	1.4	—	—	—
ヒエ属	—	—	0.3	—	—	—	—
オオムギ族	3.6	5.6	1.1	1.4	—	2.8	0.9
オンノケグサ族	2.9	2.1	0.5	1.4	1.3	0.9	1.4
不明	7.9	6.2	6.0	11.6	1.7	2.3	2.7
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
総産出個数 (個)	275	339	368	292	235	213	222

不明：イネ科植物の葉身垂鈴型細胞由来のプラント・オパールであるが、起源となった植物の分類群がわからなかったもの

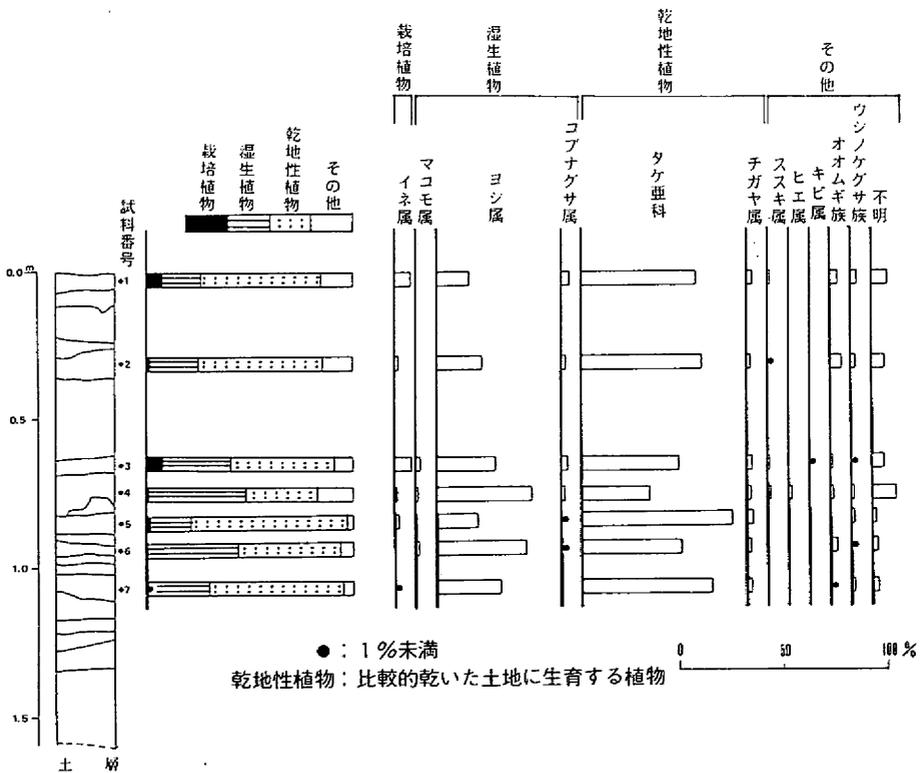


図 3 百間川沢田遺跡 207-M 中央トレンチ北壁面試料プラント・オパール産出割合



イネ属 (No. 1)



コブナグサ属  
(No. 1)



オオムギ族 (No. 1)



ウシノケグサ族 (No. 1)



タケ亜族 (No. 2)



ヒエ属 (No. 3)



ススキ属灰像 (No. 4)



キビ属 (No. 4)



タケ亜科 (No. 5)



オオムギ属 (No. 6)



ヨシ属 (No. 6)



マコモ属  
(No. 6)



タケ亜科  
(No. 7)



( ) 内は試料番号

## 付載 2 自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

### はじめに

百間川は江戸時代の寛永年間に旭川の洪水を防ぐために構築された人口河川である。今回、発掘調査が行われた百間川沢田遺跡は、百間川の河床下より確認され、縄文時代後期から中・近世に属する遺構・遺物が検出された。中でも遺跡の立地する微高地縁辺には、弥生時代～古墳時代の水田址が検出されている。また、本遺跡の周辺の微高地には、百間川原尾島遺跡、百間川兼基遺跡などで弥生時代から平安時代にわたる集落などが確認されている。

今回の自然科学分析調査では、本遺跡周辺地域の古環境、とくに縄文時代から古墳時代の古植生を推定するために花粉分析を行った。また、溝や井戸址など縄文時代から古墳時代の各時代の遺構から種子が検出されている。これらの出土した種子の種類を知ることにより、当時の周辺植生や植物質食料の利用に関する検討資料が得られると期待されたため、種子同定を行った。

### 1. 試料

試料は、岡山県古代吉備文化センターにより採取・選択された。そのうち、花粉分析試料として、213-00東西トレンチ断面、213-SS、209-W中央トレンチの3箇所から縄文時代後期から弥生時代中期に相当するとされる土壌試料が採取された。また、種子は表3に示すよう

表1 花粉分析試料一覧表

地 点	試料 番号	時 代	土 質
足洗213-00 東西トレンチ 断面	5	弥生時代前期～中期	灰オリーブ色シルト質砂
	7	弥生時代前期	にぶい黄褐色シルト質砂
	13	縄文時代晩期～弥生時代前期	灰黄褐色シルト質砂
	15	〃	灰黄褐色シルト
	16	縄文時代晩期	褐灰色シルト
四元 213-SS	1	縄文時代後期（貝層）	黄色砂
高縄邦 209-W 中央トレンチ	1	縄文時代晩期	灰白色砂質シルト（48層）
	2	弥生時代前期	黄灰色砂質シルト（29層）

\*なお、土質は当社にて記載を行ったものを用いた。

に各時代にあたる遺構内から出土した種子について、採取・選択されたものである。いずれも、試料採取位置の断面図などが報文作成時まで提供されていないため、層序関係や標高などの詳細は不明である。また、試料採取位置の柱状図などを示すことはできなかった。

各分析項目の分析点数は花粉分析試料が計 8 点（213-〇〇東西トレンチ断面：試料番号 5・7・13・15・16、213-SS：試料番号 1、209-W中央トレンチ：試料番号 1・2）、種実遺体同定試料が計 8 点（1式）である。（表 1・3）。

なお、試料番号は岡山県古代吉備文化センターにより付されたものを用いた。

## 2. 分析方法

### (1) 花粉分析

試料を約 10 g について、フッ化水素処理による試料の泥化、重液分離（臭化亜鉛：比重 2.2）による有機物の濃集、アセトリンス処理（無水酢酸：氷酢酸 = 9 : 1）によるセルロースの分解、水酸化カリウム処理による腐食酸の溶解の順に行い、堆積物中から花粉化石を濃集した。

処理後の残渣の一部についてグリセリンで封入してプレパラートを作製し、その中に出現した全ての種類（Taxa）について同定・計数した。

分析結果については、木本花粉は木本花粉総数、草木花粉・シダ類孢子は総花粉・孢子数から不明花粉数を除いた数を基数とした百分率で出現率を算出し、花粉化石分布図を作成した。図表中で複数の種類をハイフオンで結んだものは、種類間の区別が困難なものである。また、木本花粉総数が 100 個体未満のものは、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるので、出現した種類を + で表示するにとどめた。

### (2) 種子同定

肉眼あるいは双眼実体鏡を用いて形態特徴から種類を同定した。

## 3. 分析結果

### (1) 花粉分析

花粉分析結果を表 3、図 1 に示す。今回の分析試料は、全試料ともほぼ同様な花粉化石の出現傾向を示す。木本花粉では、コナラ属アカガン亜属が多く、ほかにはコナラ属コナラ亜属、マツ属、クリ属—シノキ属などを伴う。草本花粉は、全体的に出現率は低いのが、213-〇〇東西トレンチ断面の試料番号 5 では稲科が、209-W中央トレンチの試料番号 1 では、イネ科およびヨモギ属が比較的多く出現する。

### (2) 種子同定

同定結果を表 2 に示す。今回同定された種類は、メロン仲間・モモ・ハクウンボク・アカガ

シ亜属・カヤである。以下に同定された種子の形態的特徴を記す。

・カヤ *Torreya nucifera* (Linn.) Sieb. et Zucc. イチイ科

種子が検出された。黒褐色で長卵形を呈し、縦軸が17mm・横軸9mm程度である。種皮は堅く表面に顆粒状の隆起があり、縦方向に多数の筋がみられる。

・アカガシ亜属 *Quercus Cyclobalanopsis* sp. ブナ科

完形の果実が検出された。黒褐色で球状楕円形を呈し、縦軸17mm、横軸11mm程度である。上部は無毛で、先端部には不明瞭な輪状紋がありやや突出する。花柱は摩滅し残っていない。果皮は薄く堅い。

・モモ *Prunus persica*バラ科

核（内果皮）が検出された。褐色で縦軸約25mm、横軸約17mmを測る。核の形は楕円形で、やや扁平である。下端には、丸く大きな臍点があり凹んでいるが、上端は尖っている。一方の側面のみ縦に走る溝が顕著に見られる。これは縫合線とよばれるもので、心皮の縫合による溝と考えられている。もう一方の側面に縫合線が見られないのは、モモの果実はひとつの心皮よりなっているためである。表面には不規則な線状の窪みがあり、全体として粗い皺状に見える。

・ハクウンボク *Styrax obassia* Sieb. et Zucc. エゴノキ科

核が検出された。暗褐色で側面観は卵型を呈する。大きさは縦軸10mm、横軸6mm程度である。基部には大きなへそがあり、先端部はやや尖る。果皮は厚く、表面には縦方向に3本の溝が走る。

・メロンの仲間 *Cucumis melo* L. ウリ科

表2 種子同定結果

試料番号	地区	遺構名	種類	部位	個体数	時代
1	203C	P-11	メロン仲間	種子	完形6	弥生時代後期
2	207I	No.13(井戸)	モモ	核	完形2	弥生時代～古墳時代初期
3	213-SS	溝43(主に下層)	ハクウンボク	核	完形2	弥生時代
8	209P	溝古6	ハクウンボク	核	完形2	古墳時代
10	209P	溝古6下層	モモ	核	破片1	古墳時代
19	213-SS	溝43	アカガシ亜族	果実	完形7	弥生時代
22	213-QQ	溝20	カヤ	種子	完形1	弥生時代
25	213-SS	縄文土墳	モモ	核	破片15	縄文時代

※遺構名は旧遺構名である。

種子が発見された。大きさは縦軸10mm、横軸6mmを測る。側面観は楕円形で、上面観はやや扁平な楕円形である。表面は比較的平滑である。

#### 4. 考察

##### (1) 周辺地域の古植生について

縄文時代晩期～弥生時代における周辺の森林植生は、カン類を主体とし、シイ類などを伴う暖温帯性の森林であったと推定される。また、ナラ類やマツ属などは肥沃の悪い土地や海岸沿いなどに生育していた可能性がある。また、モミ属は後背山地などに生育していたとみられ、ツガ属などとともに温帯性の針葉樹林（いわゆる中間温帯林）を形成していた可能性がある。中間温帯林とは、暖温帯林と冷温帯林との間に存在し、主としてモミ・ツガなどの針葉樹からなる。

縄文時代晩期～古墳時代にかけてモミ属・ツガ属などの花粉化石が増加する傾向は、関西地方で一般的にみられる。（財団法人 大阪文化財センター、1980）。中間温帯林が山地を中心に形成された理由については、降水量の増加や気候の冷涼化などが指摘されている（那須，1989）。このように、縄文時代晩期～古墳時代にかけての後背山地などにおける中間温帯林の増加については、近畿～山陽地方の広い範囲に分布した可能性がある。

##### (2) 種実遺体からみた当時の可食植物について

今回検出された種実遺体のうち、食用となるのは、カヤ・メロン仲間・モモ・アカガン亜属であり、当時食料として利用されていた可能性もある。中でもメロン仲間とモモは、栽培が考えられるものであるが、時代・出土状況が不明な点があるので積極的には言えない。また、カヤとアカガン亜属は周囲の山林に由来するとみられる。とくにアカガン亜属を食料として利用するためには「あくぬき」を必要とすることから、当時の植物の利用形態、特に調理技術などを考える上で興味深い結果と言える。

#### 引用文献

- 建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会編（1982）「百間川兼基遺跡1，百間川今谷遺跡1－旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査Ⅲ－」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書51。
- 粉川昭平（1983）縄文時代の主な植物食料 「縄文文化の研究 2. 生業」，P42-48.，雄山閣。
- 那須孝悌（1989）活動の舞台 概論 「弥生文化の研究 1. 弥生人とその環境」，P119-130.，雄山閣。
- 財団法人 大阪文化財センター（1980）「亀井・城山」寝屋川市南部流域下水道事業長吉ポンプ場築造工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書。

表3 花粉分析結果

種類 (Taxa)	地 点 試料番号	213-00東西トレンチ断面					213-SS	209-W 中央トレンチ	
		5	7	13	15	16	1	1	2
<b>木 本 花 粉</b>									
マキ属		—	1	1	—	2	—	—	—
モミ属		6	18	16	6	21	—	2	—
ツガ属		2	1	1	2	3	—	3	—
マツ属		5	3	22	12	15	—	23	—
コウヤマキ属		—	—	1	3	2	—	1	—
スギ属		18	9	6	8	1	1	13	—
イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科		4	1	2	5	16	—	3	—
ヤナギ属		—	1	1	10	4	—	1	—
ヤマモモ属		—	—	—	2	1	—	—	—
クルミ属		2	1	—	—	—	—	4	—
クマシデ属—アサダ属		5	3	5	6	9	—	3	—
ハシバミ属		2	—	—	—	—	—	—	—
カバノキ属		8	—	—	—	—	—	—	—
ハンノキ属		6	4	2	1	6	—	—	—
ブナ属		4	4	4	5	—	—	2	—
コナラ属—コナラ亜属		24	21	23	50	39	—	44	1
コナラ属—アカガシ亜属		116	95	68	103	94	—	59	1
クリ属—シノキ属		6	8	15	14	9	—	21	—
ニレ属—ケヤキ属		4	5	13	7	3	—	8	—
エノキ属—ムクノキ属		6	12	6	12	10	—	6	—
ヤドリギ属		—	—	—	—	1	—	—	—
キハダ属		1	1	1	—	—	—	—	—
モチノキ属		1	—	—	—	2	—	—	—
ニシキギ属		—	5	2	2	—	—	—	—
カエデ属		—	2	4	—	1	—	—	—
ノチノキ属		5	9	10	3	3	—	2	—
クロウメモドキ科		5	—	—	—	—	—	—	—
ブドウ属		2	2	—	1	—	—	—	—
ツタ属		—	3	—	—	1	—	—	—
ノブドウ属		—	—	—	—	—	—	1	—
ウコギ科		2	—	—	—	—	—	—	—
ミズキ属		—	—	—	—	1	—	—	—
エゴノキ属		1	—	—	1	—	—	—	—
イボタノキ属		—	2	—	—	—	—	—	—
トリネコ属		1	1	—	—	—	—	—	—
<b>草 本 花 粉</b>									
ガマ属		—	—	1	—	—	—	—	—
ミクリ属		1	1	—	—	—	—	—	—
イネ科		110	12	8	18	18	2	42	—
カヤツリグサ科		3	1	—	15	14	—	12	—
クワ科		—	—	—	4	1	—	—	—
ギンギン属		—	—	—	—	1	—	—	—
サナエタデ節—ウナギツカミ節		1	1	—	—	1	—	—	—
アカザ科		—	—	—	1	—	—	—	—
ナデシコ科		—	1	—	—	—	—	1	—
キンポウゲ属		—	—	—	—	—	—	—	1
キンポウゲ科		3	—	—	—	—	—	—	—
アブラナ科		—	2	—	—	—	—	—	—
ユキノシタ科		—	1	—	—	10	—	—	—
バラ科		1	—	—	—	—	—	—	—
マメ科		2	—	—	1	—	—	—	—
ネナンカズラ科		2	—	—	—	—	—	—	—
ヨモギ属		20	3	14	29	12	—	58	—
他のキク亜科		—	—	—	2	—	—	—	1
<b>不明花粉</b>									
		2	11	2	1	5	—	—	1
<b>シダ類 胞子</b>									
サンショウモ		—	2	—	—	—	—	2	—
他のシダ類胞子		168	119	261	88	62	—	—	25
<b>合計</b>									
木本花粉		236	212	203	253	244	1	196	2
草本花粉		143	22	23	70	57	2	113	2
不明花粉		2	11	2	1	5	0	0	1
シダ類胞子		168	121	261	88	62	0	2	25
総花粉・胞子		549	366	489	412	368	3	311	30

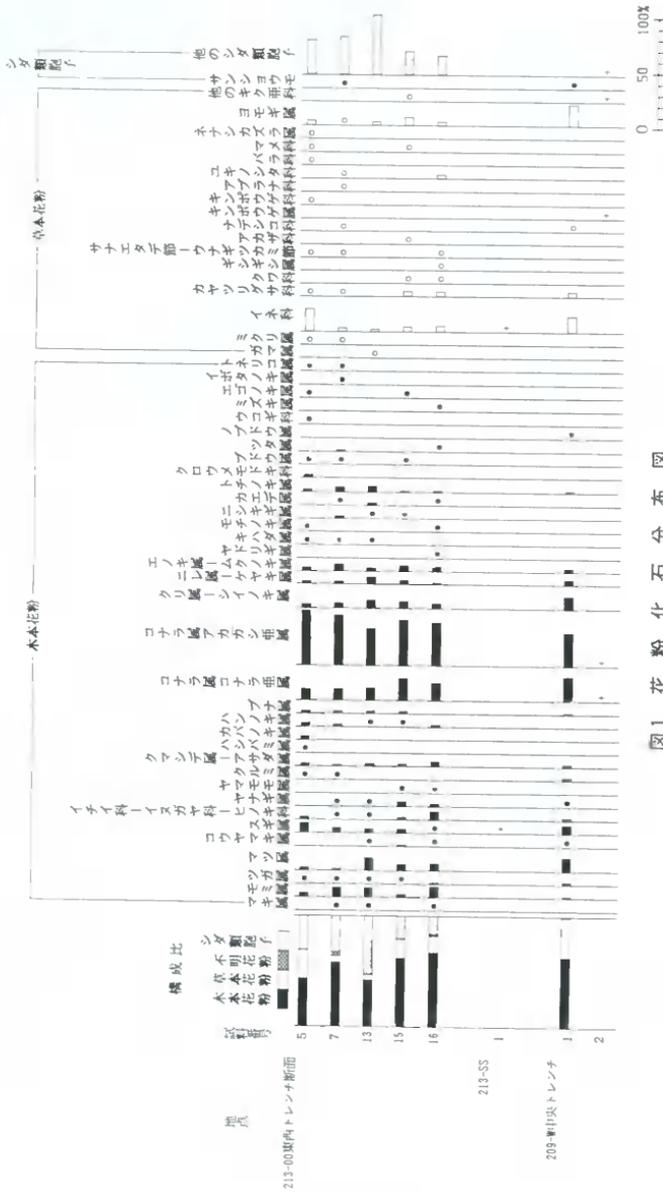
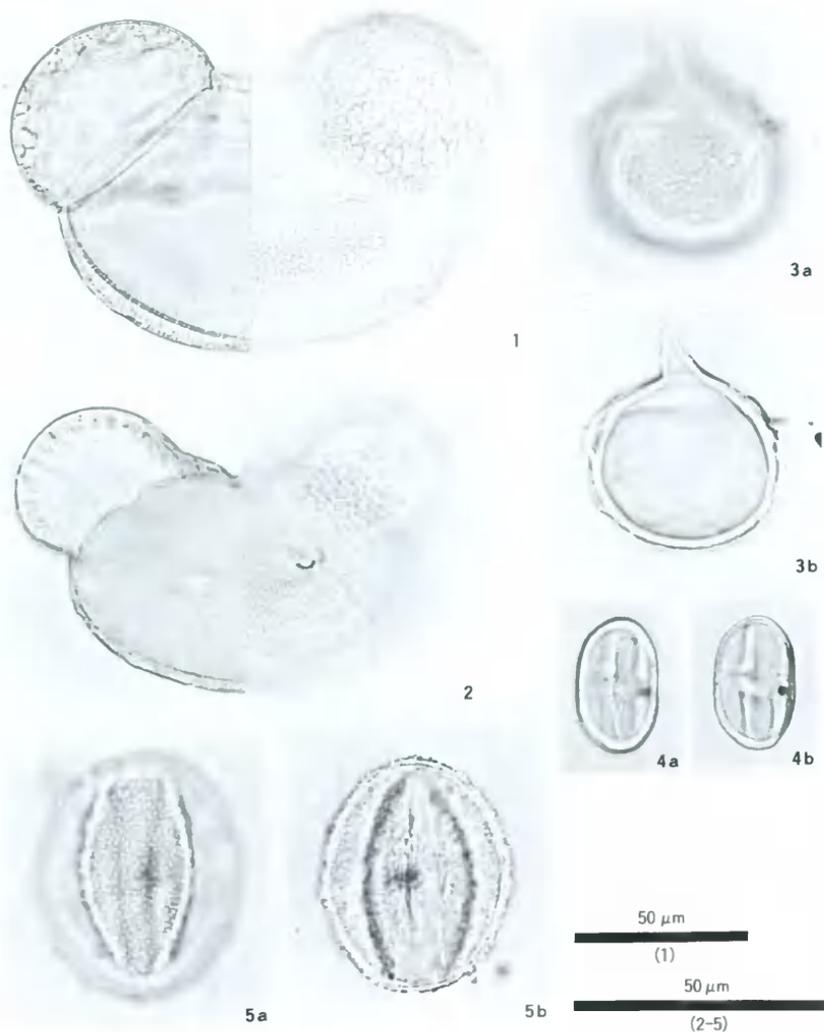


図1 花粉化石分布図

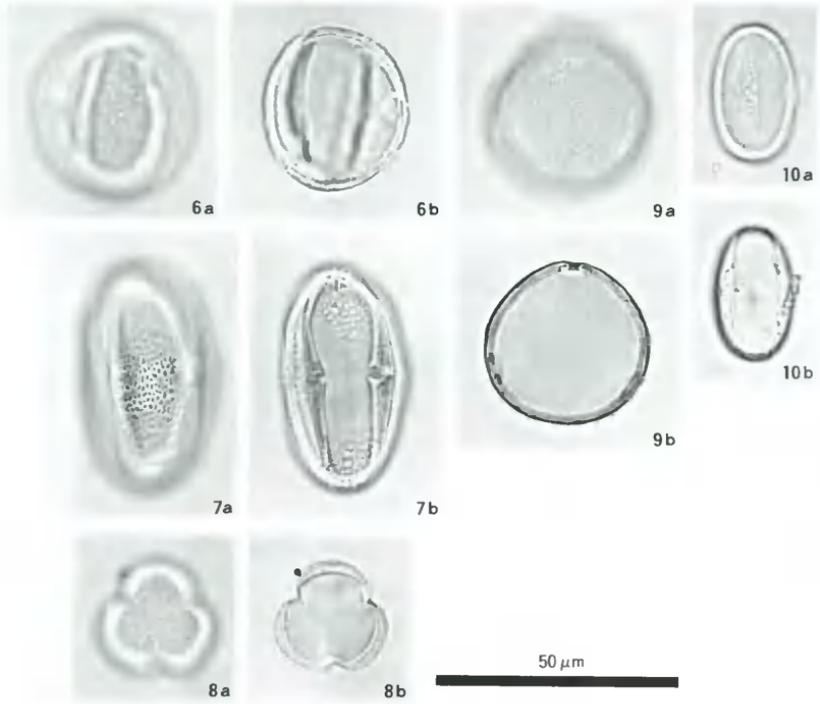
出現率は、木本花粉はその総数、その他のものは総花粉・胎子数から不明花粉をのぞいた数を基数として百分率で算出した。  
なお、○●は1%未満、+は木本花粉総数が100個未満の試料において出現した種類を示す

図版1 花粉化石



1. モミ属 (213-00 東西トレンチ断面: 16)      2. マツ属 (213-00 東西トレンチ断面: 16)  
 3. スギ属 (213-00 東西トレンチ断面: 16)      4. クリ属-シノキ属 (213-00 東西トレンチ断面: 16)  
 5. コナラ属コナラ亜属 (213-00 東西トレンチ断面: 16)

図版 2 花粉化石



6. コナラ属アカガシ亜属 (213-00 東西トレンチ断面;16)    7. ツタ属 (213-00 東西トレンチ断面;16)  
 8. ヨモギ属 (213-00 東西トレンチ断面;16)    9. エノキ属—ムクノキ属 (213-00 東西トレンチ断面;16)  
 10. トチノキ属 (213-00 東西トレンチ断面,16)

図版3 種実遺体



1. カヤ・種子 (試料番号:22)

3. アカカシ亞属・果実 (試料番号:25)

5. メロン仲間・種子 (試料番号:1)

2. モモ・核 (試料番号:10)

4. ハクウンホク・核 (試料番号:3)

## 付載3 サヌカイト製石器の産地について

白石 純

### I. はじめに

本報では百間川沢田遺跡出土の縄文、弥生時代のサヌカイト製石器の産地を推定する。

推定方法は蛍光X線分析法と岩石学的方法（偏光顕微鏡による観察）の複数の分析法で検討した。

また、兵庫県淡路島岩屋のサヌカイト原産地の原石を採取したので、ここで新たに原産地を加えて報告する。

### II. 蛍光X線分析法による産地の推定

分析方法、試料調整、測定装置などは現在まで筆者が行っている方法である<sup>1)</sup>。

まず、今回新しく兵庫県岩屋の原産地原石を追加して産地間の差異について述べる。

第1表からTiO<sub>2</sub>、Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>、K<sub>2</sub>O、MgO、CaOの元素に顕著な差が見られる。そこで、これらの元素を使って第1～4図までの散布図を作成し、各原産地間の差異について検討した。

なお、各元素比から原産地推定を試みたのは全部の元素を用いて推定するのが望ましいと考えられるからである。

第1図のK<sub>2</sub>O/Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-TiO<sub>2</sub>/Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>散布図から原産地は金山地域グループ、岩屋の一部（岩屋Ⅰ）のグループ、白峰・国分寺・連光寺と岩屋の一部（岩屋Ⅱ）のグループ、青峰、城山、神谷、冠山、冠山東の各グループの合計8つに分れる。（以後本文中では、岩屋Ⅰおよび岩屋Ⅱを用いる。）

第2図のK<sub>2</sub>O/Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-CaO/Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>散布図では金山地域グループ、岩屋Ⅰのグループ、白峰・国分寺・連光寺と岩屋Ⅱのグループ、青峰、城山、神谷、冠山・冠山東のグループの合計7つのグループに分れる。

第3図のTiO<sub>2</sub>/Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-CaO/Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>の各散布図ではなお、金山地域のグループ、岩屋Ⅰのグループ、白峰・国分寺・連光寺のグループ、岩屋Ⅱ・青峰・城山のグループ、神谷グループ、冠山・冠山東グループの合計6つに分れる。

なお、金山地域と岩屋Ⅰは一部分が重なる程度である。

第4図K<sub>2</sub>O/Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-MgO/Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>散布図では岩屋が3つのグループに分れる。（新しいグループを岩屋Ⅲと呼ぶ。）そして、この散布図では金山地域のグループ、青峰グループ、岩屋Ⅰグ

グループ、岩屋Ⅱ・白峰・国分寺・連光寺群・冠東グループ、岩屋Ⅲグループ、冠山グループ、城山グループ、神谷グループの8つに分れる。

以上のように、原産地の中には散布図により、グループの分れかたが少し異なる産地もあるが、ほぼ同じような分れかたをする。

次に、百間川沢田遺跡出土のサヌカイト製石器6点を分析し、第5・6・7・8図の原産地散布図にプロットした。この結果、沢田遺跡出土のサヌカイト製石器6点とも金山地域に入り、蛍光X線分析ではすべて金山地域の原石を使用していると推定される。

### Ⅲ. 偏光顕微鏡観察による産地同定

現在までに筆者は偏光顕微鏡観察により、輝石類、長石類、橄欖石などの大きさ、有無またはその他鉱物の有無により、各原産地間に差があるかどうか検討し、産地同定を試みてきた<sup>2)</sup>。

今回、岩屋の原産地を加えて各原産地の観察表を作成した。(第3・4・5表)。この結果、蛍光X線分析では金山地域グループと岩屋Ⅰグループが接近しているし、白峰・国分寺・連光寺と岩屋Ⅱグループは部分的に重なっている。

そこで、これらの各原産地の間で違いがあるかどうか検討した。この結果、偏光顕微鏡観察では、岩屋Ⅰの古銅輝石が金山地域に比べ少し大きい傾向にある。

また、白峰・国分寺・連光寺と岩屋Ⅱでは斜長石類が岩屋Ⅱのほうが大きく、多く見られるし、岩屋Ⅱには柱状(0.05~0.1mm)の古銅輝石、斜方輝石が多く見られることで、原産地間での識別は可能である。ただ、岩屋ⅠのNo.3(写真番号10)は金山東と組織構造がよく似ているし、岩屋ⅡのNo.2(写真番号20)も国分寺の組織構造と特徴が似ており、これら2点は識別が難しいことがわかった。

このように岩屋原産地の原石は顕微鏡観察で、大きく6種類の組織構造に分れる。

次に、百間川沢田遺跡出土のサヌカイト製石器6点を観察した結果(第3表)、いずれも古銅輝石の大きさやその他の鉱物の有無、全体の組織構造の特徴から金山地域か国分寺に同定できるし、岩屋Ⅰ、Ⅱになる可能性もある。

### Ⅳ. まとめ

今回、兵庫県淡路島岩屋の原産地原石を新たに加えて産地推定を試みた。この結果、岩屋原産地の原石は蛍光X線分析では原産地間で一部重なるグループもあるがほぼすべての原産地で識別が可能である。また、偏光顕微鏡観察でも各原産地の間で鉱物の大きさ、有無が少しずつことなり、識別が可能であった。しかし、中には岩屋No.2、3のように非常によく似た原石も見られ偏光顕微鏡観察では識別できないものもあった。

また、百間川沢田遺跡出土のサヌカイト製石器6点は、蛍光X線分析法では金山地域の範囲内に入り、偏光顕微鏡観察ではほぼ金山地域か国分寺に同定できた。ただ、岩屋地域にも似たものがあり、偏光顕微鏡観察だけでは識別は難しい。

藁科哲男氏、東村武信氏の研究でも、岩屋原産地のなかに金山、国分寺地域に似たものがあることがわかっている<sup>9)</sup>。

以上のことから、百間川沢田遺跡出土の剥片6点はすべて金山地域の原石を使用していると推定される。

この小稿をなすにあたり、鎌木義昌先生、亀田修一先生にはご教示、ご指導いただいた。末筆ながら記して謝意を表します。

#### 註

- (1) 白石 純 「蛍光X線による考古学遺物(石器・土器)の化学分析(Ⅰ)」『岡山理科大学蒜山研究所研究報告』 第10号 1984  
白石 純 「蛍光X線による考古学遺物(石器・土器)の化学分析(Ⅱ)」『岡山理科大学蒜山研究所研究報告』 第12号 1986  
白石 純 「蛍光X線による考古学遺物(石器・土器)の化学分析(Ⅲ)」『岡山理科大学蒜山研究所研究報告』 第15号 1989
- (2) 白石 純 「天満遺跡出土のサヌカイト製石器の原産地推定」『天満遺跡発掘調査報告書』山手村埋蔵文化財発掘調査報告書1 印刷中
- (3) 藁科哲男・東村武信「石器原材の産地分析」『鎌木義昌先生古稀記念論集 考古学と関連科学』1988

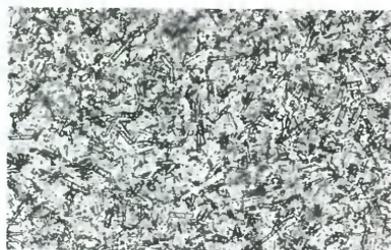
第1表 サヌカイト原産地原石の化学組成の平均値と標準偏差(%)

原産地名	個数	SiO <sub>2</sub>	TiO <sub>2</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	MgO	CaO	K <sub>2</sub> O
香川	金山	62.90±0.49	0.49±0.02	17.88±0.44	5.25±0.12	1.51±0.17	4.29±0.21	2.76±0.05
	白峰	64.75±0.80	0.50±0.01	16.99±0.32	3.93±0.07	1.58±0.11	3.76±0.07	2.94±0.04
	国分寺	63.42±0.41	0.54±0.03	16.86±0.31	4.20±0.15	1.81±0.17	4.10±0.23	2.81±0.05
	連光寺	63.87±0.33	0.57±0.01	16.75±0.27	4.33±0.09	1.84±0.14	4.29±0.11	2.84±0.03
	青峰	60.58±0.47	0.60±0.01	18.03±0.45	5.38±0.03	2.04±0.32	4.82±0.03	2.57±0.03
兵庫県	城山	58.41±1.10	0.70±0.06	17.52±0.34	5.87±0.36	2.26±0.22	5.68±0.25	1.50±0.06
	神谷*	70.52±1.17	0.11±0.01	14.82±0.35	1.87±0.12	0.54±0.08	2.27±0.10	2.69±0.03
	冠山	64.40±0.77	0.97±0.02	14.35±0.60	4.78±0.09	2.64±0.35	4.13±0.04	3.29±0.06
兵庫県	冠東	61.37±0.94	0.93±0.02	16.55±0.55	4.94±0.09	2.27±0.14	4.98±0.24	1.97±0.37
	岩屋Ⅰ	62.01±0.53	0.54±0.02	18.38±0.37	5.23±0.10	1.96±0.11	4.54±0.02	2.63±0.02
	岩屋Ⅱ	64.98±1.27	0.52±0.03	17.46±0.32	4.11±0.27	2.06±0.41	3.97±0.33	2.76±0.07
兵庫県	岩屋Ⅲ	66.15±1.14	0.52±0.15	17.55±0.43	4.21±0.32	1.26±0.21	3.62±0.38	3.19±0.08

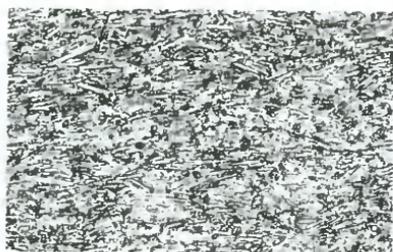
\*この原産地原石は、旧石器時代の細石核・細石刃の石材として使用されているようである。

第2表 百間川沢田遺跡出土サヌカイト製石器の分析値(%)

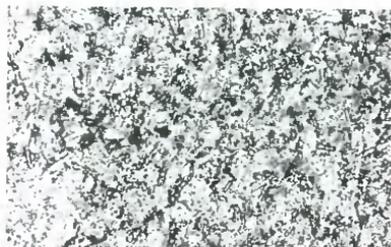
番号	遺跡名	出土地点	K <sub>2</sub> O	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	SiO <sub>2</sub>	TiO <sub>2</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	CaO	MgO	備考
1	百間川沢田209-R	暗茶褐色土層	2.74	5.35	64.25	0.50	18.47	4.51	1.44	剥片 表面波状の風化面になっている。
2	百間川沢田209-R	暗茶褐色土層	2.77	5.03	63.38	0.45	18.81	4.12	1.28	剥片
3	百間川沢田209-Q	暗茶褐色土層	2.91	5.05	64.61	0.44	18.64	4.04	1.27	剥片 表面白く風化している。
4	百間川沢田209-R	晩期溜り	2.77	5.09	63.36	0.45	18.28	4.17	1.26	剥片
5	百間川沢田213-SS-TT	縄文包含層	2.74	5.12	61.16	0.45	18.20	4.13	1.55	剥片
6	百間川沢田213-SS-TT	縄文包含層	2.75	5.23	63.33	0.45	18.57	4.19	1.49	剥片 表面波状の風化面になっている。



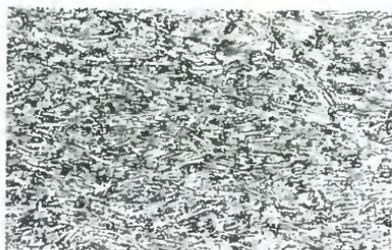
1-1 金山東 1 (平行)



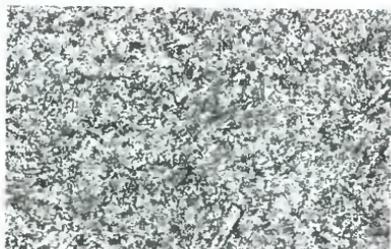
1-2 金山東 1 (垂直)



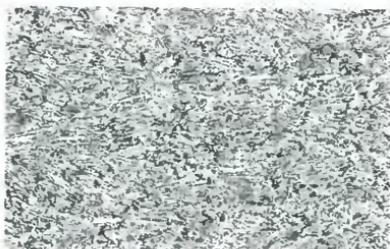
2-1 金山東 2 (平行)



2-2 金山東 2 (垂直)



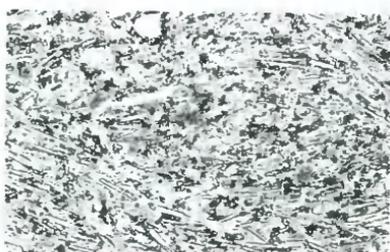
3-1 金山西 1 (平行)



3-2 金山西 1 (垂直)



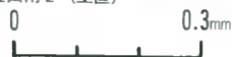
4-1 金山南 2 (平行)



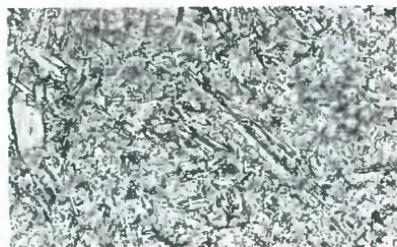
4-2 金山南 2 (垂直)

すべて下方ホーラのみ。カッコ内は流理面に平行、垂直を表す。

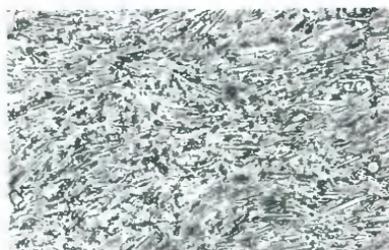
サヌカイト原産地原石の偏光顕微鏡写真



図版 2



5-1 白峰 1 (平行)



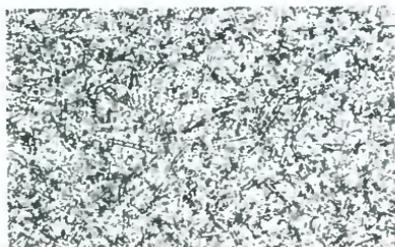
5-2 白峰 1 (垂直)



6-1 白峰 6 (平行)



6-2 白峰 6 (垂直)



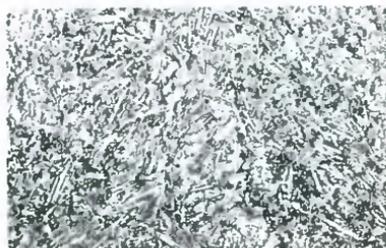
7-1 国分寺 1 (平行)



7-2 国分寺 1 (垂直)



8 連光寺 1 (平行)

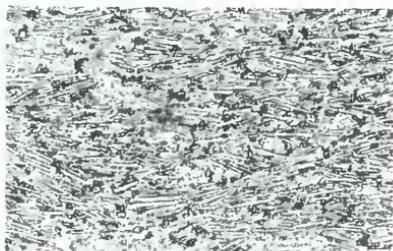


9 青峰 (垂直)

すべて下方ポーラのみ。カノコ内は流理面に平行、垂直を表す。

サヌカイト原産地原石の偏光顕微鏡写真

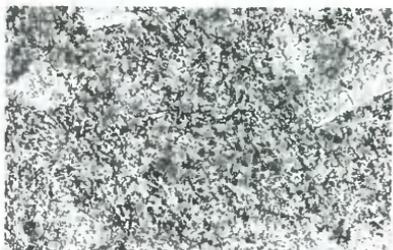




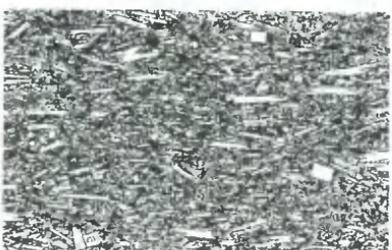
10 岩屋 No. 3 (垂直) 岩屋Ⅰグループ



11 岩屋 No. 13 (垂直) 岩屋Ⅰグループ



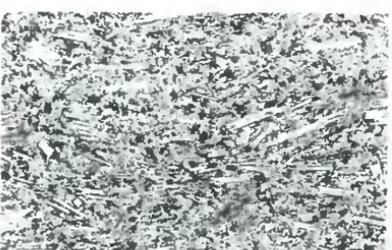
12 岩屋 No. 9 (平行) 岩屋Ⅲグループ



13 岩屋 No. 10 (垂直) 岩屋Ⅰグループ



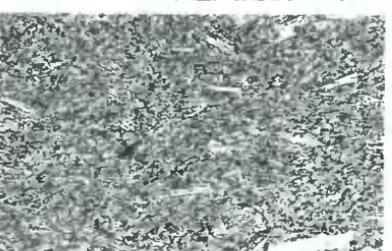
14-1 岩屋 No. 1 (平行) 岩屋Ⅲグループ



14-2 岩屋 No. 1 (垂直) 岩屋Ⅲグループ



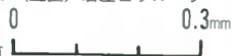
15 岩屋 No. 4 (垂直) 岩屋Ⅲグループ



16 岩屋 No. 5 (垂直) 岩屋Ⅲグループ

すべて下方ポーラのみ。カッコ内は流理面に平行、垂直を表す。

サヌカイト原産地原石の偏光顕微鏡写真



図版 4



17 岩屋 No. 6 (垂直) 岩屋Ⅲグループ



18 岩屋 No. 9 (垂直) 岩屋Ⅲグループ



19-1 岩屋 No. 7 (平行) 岩屋Ⅲグループ



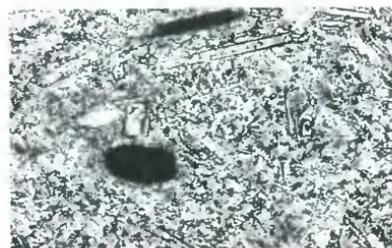
19-2 岩屋 No. 7 (垂直) 岩屋Ⅲグループ



20 岩屋 No. 2 (垂直) 岩屋Ⅱ



21 岩屋 No. 8 (垂直) 岩屋Ⅱ



22 岩屋 No. 11 (垂直) 岩屋Ⅱ



23 岩屋 No. 14 (垂直) 岩屋Ⅱ

すべて下方ポーラのみ、カッコ内は流理面に平行、垂直を表す。

サヌカイト原産地原石の偏光顕微鏡写真

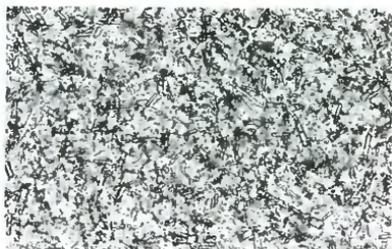




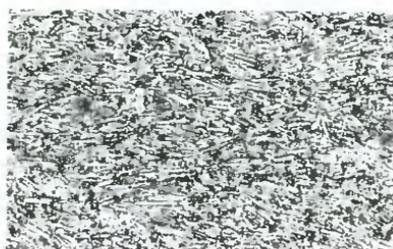
24-1 百間川沢田遺跡 No. 1 (平行)



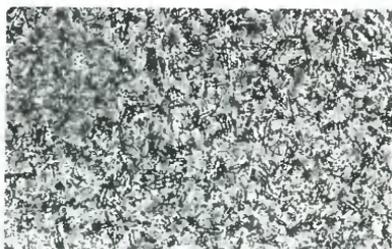
24-2 百間川沢田遺跡 No. 1 (垂直)



25-1 百間川沢田遺跡 No. 2 (平行)



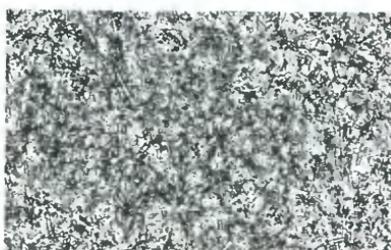
25-2 百間川沢田遺跡 No. 2 (垂直)



26-1 百間川沢田遺跡 No. 3 (平行)



26-2 百間川沢田遺跡 No. 3 (垂直)



27-1 百間川沢田遺跡 No. 4 (平行)



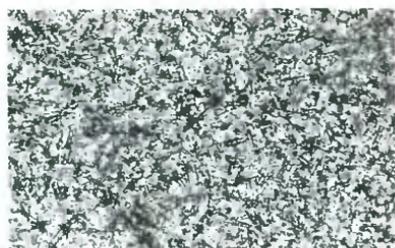
27-2 百間川沢田遺跡 No. 4 (垂直)

すべて下方ポーラのみ。カッコ内は流理面に平行、垂直を表す。

0 0.3mm

百間川沢田遺跡出土サヌカイト製石器の偏光顕微鏡写真

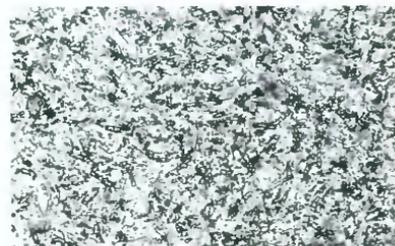
図版 6



28-1 百間川沢田遺跡 No.5 (平行)



28-2 百間川沢田遺跡 No.5 (垂直)



29-1 百間川沢田遺跡 No.6 (平行)



29-2 百間川沢田遺跡 No.6 (垂直)

すべて下方ポーラのみ。カッコ内は流理面に平行、垂直を表す。



百間川沢田遺跡出土サヌカイト製石器の偏光顕微鏡写真

第3表 サヌカイト原産地原石の偏光顕微鏡観察表

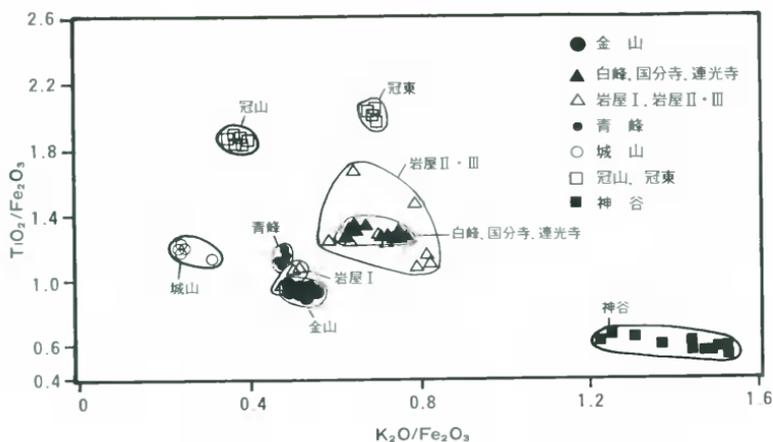
試料名 (写真番号)	斑 晶 (微 斑 晶) 鉱 物				石 基	備 考
	古 銅 輝 石	斜 長 石	微 隕 石	角 閃 石		
金山東 1 1-1	自形・半自形の針状 0.02~0.05mm80%		自形で反応線をもつ 0.2mm前後1%以下		ガラス、粒状の不 透明鉱物が多い。	流理面に平行な薄 片
金山東 1 1-1	自形・半自形の針状 0.02~0.05mm80%		自形で反応線をもつ 0.2mm前後1%以下		ガラス、粒状の不 透明鉱物が多い。	流理面に垂直な薄 片、流状配列が著 しい
金山東 2 2-1	自形・半自形の針状 0.01~0.05mm80% 0.2~0.8mm1%	自形の短冊状 0.6mm前後1%以下			ガラス、粒状の不 透明鉱物など	流理面に平行な薄 片
金山東 2 2-2	自形・半自形の針状 0.01~0.05mm80% 0.2~0.8mm1%				ガラス、粒状の不 透明鉱物など	流理面に平行な薄 片、流状配列が著 しい
金山西 1 3-1	自形・半自形の針状 0.02~0.03mm80%		半自形で反応線をもつ 0.25~0.4mm1%以下		ガラス、粒状の不 透明鉱物など	流理面に平行な薄 片
金山西 1 3-2	自形・半自形の針状 0.02~0.03mm80%		半自形で反応線をもつ 0.25~0.4mm1%以下		ガラス、粒状の不 透明鉱物など	流理面に垂直な薄 片、流状配列が著 しい
金山南 2 4-1	自形・半自形の針状 0.03~0.05mm80% 0.1~0.25mm1%以下	自形・半自形の短冊状 0.1~0.3mm1%			ガラス、粒状の不 透明鉱物など	流理面に平行な薄 片
金山南 2 4-2	自形・半自形の針状 0.03~0.05mm80%	自形・半自形の短冊状 0.1~0.3mm2%			ガラス、粒状の不 透明鉱物など	流理面に垂直な薄 片、流状配列が著 しい
白 峰 1 5-1	自形・半自形の針状 0.02~0.1 mm80% 0.1~0.5mm1%	自形・半自形の短冊状 0.2~0.3mm1%以下			流状の不透明鉱物 ガラスなど	流理面に平行な薄 片
白 峰 1 5-2	自形・半自形の針状 0.02~0.1 mm80% 0.1~0.5mm1%	自形・半自形の短冊状 0.2~0.3mm1%以下			流状の不透明鉱物 ガラスなど	流理面に垂直な薄 片、流状配列が著 しい
白 峰 6 6-1	自形・半自形の針状 0.02~0.1 mm80% 0.2~0.5mm1%	自形・半自形の短冊状 0.2~0.3mm1%以下			流状の不透明鉱物 ガラスなど	流理面に平行な薄 片
白 峰 6 6-2	自形・半自形の針状 0.02~0.1 mm80% 0.1~0.5mm1%	自形・半自形の短冊状 0.2~0.3mm1%以下			流状の不透明鉱物 ガラスなど	流理面に垂直な薄 片、流状配列が著 しい
岡分寺 1 7-1	自形・半自形の針状 0.04~0.07mm80%		自形で反応線をもつ 0.6~0.8mm1%以下		ガラス、粒状の不 透明鉱物など	流理面に平行な薄 片
岡分寺 1 7-2	自形・半自形の針状 0.04~0.07mm80%		自形で反応線をもつ 0.6~0.8mm1%以下		ガラス、粒状の不 透明鉱物など	流理面に垂直な薄 片、流状配列が著 しい
連光寺 1 8	自形・半自形の針状 0.04~0.07mm80%	半自形の短冊状 0.1~0.8mm1%以下	自形で反応線をもつ 0.6~0.8mm1%以下		ガラス、粒状の不 透明鉱物など	流理面に平行な薄 片
連光寺 1	自形・半自形の針状 0.01~0.04mm80%	半自形の短冊状 0.1~0.8mm1%以下	自形で反応線をもつ 0.6~0.8mm1%以下		ガラス、粒状の不 透明鉱物など	流理面に垂直な薄 片、流状配列が著 しい

第4表 サマカイト原産地原石の偏光顕微鏡観察表

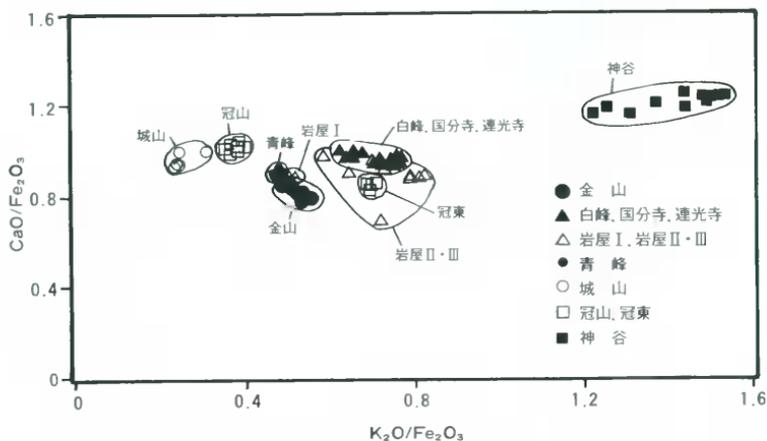
試料名 (写真番号)	斑 晶 (微 斑 晶) 鉱 物				石 基	備 考
	古 銅 錫 石	斜 長 石	微 纒 石	角閃石		
青 峰	自形・半自形の針状 0.03~0.06mm50%	自形の柱状 0.05~0.1mm30%			粒状の不透明鉱物 ガラスなど	流理に平行な薄片
青 峰 9	自形・半自形の針状 0.03~0.06mm70%	自形の柱状 0.05~0.1mm10%			粒状の不透明鉱物 ガラスなど	流理に垂直な薄片 流状配列
城山 No. 1	自形・半自形の針状 0.02~0.05mm80%	半自形の短冊状 0.1mm前後1%			粒状の不透明鉱物 ガラスなど	流理に平行な薄片
城山 No. 1	自形・半自形の針状 0.02~0.05mm80%	半自形の短冊状 0.1mm前後1%			粒状の不透明鉱物 ガラスなど	流理に垂直な薄片 流状配列が著しい
岩屋 No. 13 10	自形・半自形の針状 0.05~0.1mm80% 粒状0.1~1mm 1%以下				粒状の不透明鉱物 ガラスなど	流理に垂直な薄片 流状配列が著しい 岩屋 I
岩屋 No. 13 11	自形・半自形の針状 0.05~0.1mm80% 0.1~0.25mm 1%以下				"	" 岩屋 I
岩屋 No. 13 13	自形・半自形の針状 0.02~0.1mm60% 0.1~0.3mm 1%以下				"	" 岩屋 I
岩屋 No. 9 12	自形・半自形の針状 0.05~0.1mm80%	半自形の短冊状 0.1~0.3mm 5%			"	流理に平行な薄片 岩屋 VI
岩屋 No. 1 14-1	自形・半自形の針状 0.05~0.1mm70%	半自形の短冊状 0.1~0.3mm 1%			"	" 岩屋 III
岩屋 No. 1 14-2	自形・半自形の針状 0.05~0.1mm70%	半自形の短冊状 0.1~0.3mm 1%			"	流理に垂直な薄片 流状配列が著しい 岩屋 II
岩屋 No. 4 15	自形・半自形の針状 0.05~0.1mm30%	半自形の短冊状 0.05~0.15mm30%			"	" 岩屋 II
岩屋 No. 5 16	自形・半自形の針状 0.02~0.05mm70%	半自形の短冊状 0.1~0.2mm15%			"	" 岩屋 II
岩屋 No. 6 17	自形・半自形の針状 0.02~0.1mm70%	半自形の短冊状 0.05~0.2mm10%			"	" 岩屋 III
岩屋 No. 9 18	自形・半自形の針状 0.05~0.1mm80%	半自形の短冊状 0.1~0.3mm50%			"	" 岩屋 III
岩屋 No. 7 19-1	自形・半自形の針状 0.05mm前後50%	半自形の短冊状 0.1~0.8mm 5%			"	流理に平行な薄片 岩屋 IV
岩屋 No. 7 19-2	自形・半自形の針状 0.05~0.1mm50%	半自形の短冊状 0.1~0.8mm 5%			"	流理に垂直な薄片 流状配列 岩屋 II
岩屋 No. 2 20	自形・半自形の針状 0.03~0.05mm80% 柱状0.05~0.1mm 1%	半自形の短冊状	半自形で反応縁をもつ 0.3~0.5mm 1%以下		"	流状配列 岩屋 II

第5表 サヌカイト原産地原石および百間川、沢田遺跡石器の偏光顕微鏡観察表

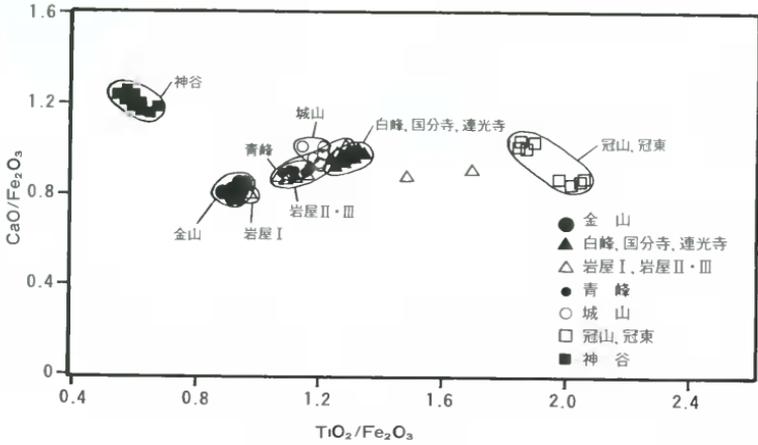
試料名 (写真番号)	斑 晶 (微 斑 晶) 鉱 物				石 基	備 考
	古 銅 輝 石	斜 長 石	微 隕 石	角 閃 石		
岩屋 No 8 21	自形・半自形の針状 0.05~0.1mm70% 柱状0.05~0.2mm 5%	自形の短冊状 0.1~0.2mm 5%			粒状の不透明鉱物 ガラスなど	流状配列 岩屋Ⅱ
岩屋 No 11 22	自形・半自形の針状 0.05~0.1mm70% 0.1~0.2mm 5%	自形の短冊状 0.1~0.2mm 5%			"	" 岩屋Ⅱ
岩屋 No 14 23	自形・半自形の針状 0.02~0.05mm80%	自形の短冊状 0.1前後mm 1%			"	流状配列 岩屋Ⅱ
百間川沢田 No 1 24-1	自形・半自形の針状 0.03~0.05mm80%		半自形の反応線をもつ 0.2~0.3mm 1%以下		ガラス、粒状の不 透明鉱物など	流状に平行な薄片
" No 1 24-2	"		"		"	流理に垂直な薄片 流理に垂直な薄片
" No 2 25-1	"		半自形の反応線をもつ 0.5~0.7mm 1%以下		"	" 平行 "
" No 1 25-2	"		"		"	" 垂直 " "
" No 3 26-1	"				"	" 平行 "
" No 3 26-2	"				"	" 垂直 " "
" No 4 27-1	"				"	" 平行 "
" No 4 26-2	"				"	" 垂直 " "
" No 5 28-1	"				"	" 平行 "
" No 5 28-2	"				"	" 垂直 " "
" No 6 29-1	"				"	" 平行 "
" No 6 29-2	"				"	" 垂直 " "



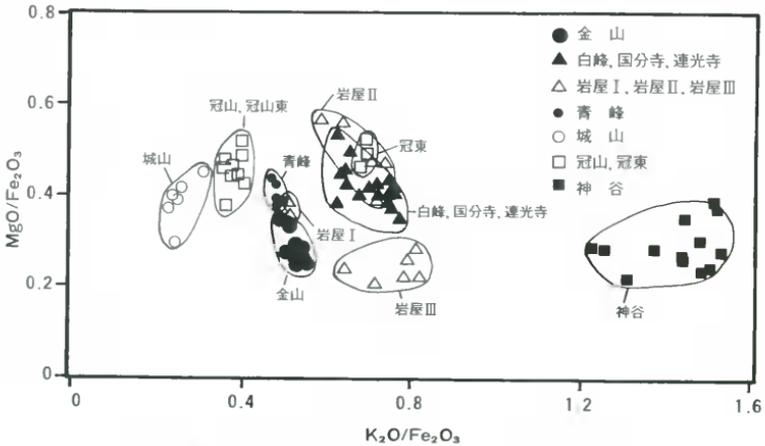
第1図 サヌカイト原産地  $K_2O/Fe_2O_3$ - $TiO_2/Fe_2O_3$  散布図



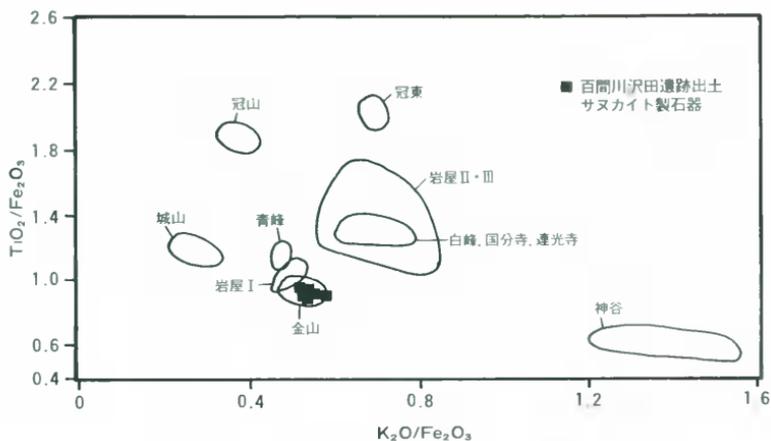
第2図 サヌカイト原産地  $K_2O/Fe_2O_3$ - $CaO/Fe_2O_3$  散布図



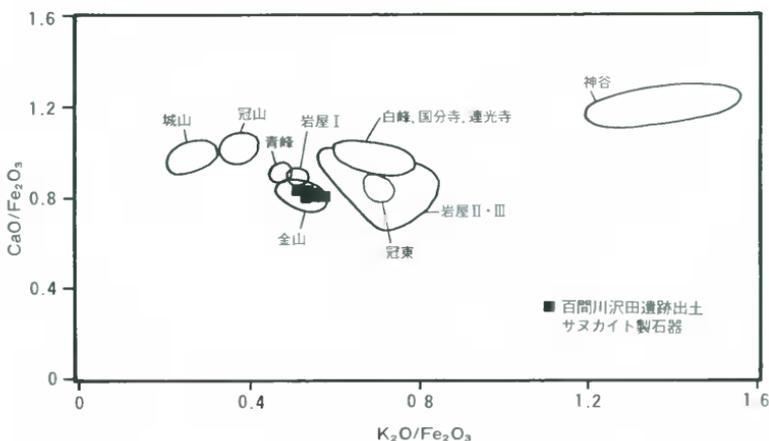
第3図 サヌカイト原産地 TiO<sub>2</sub>/Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-CaO/Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub> 散布図



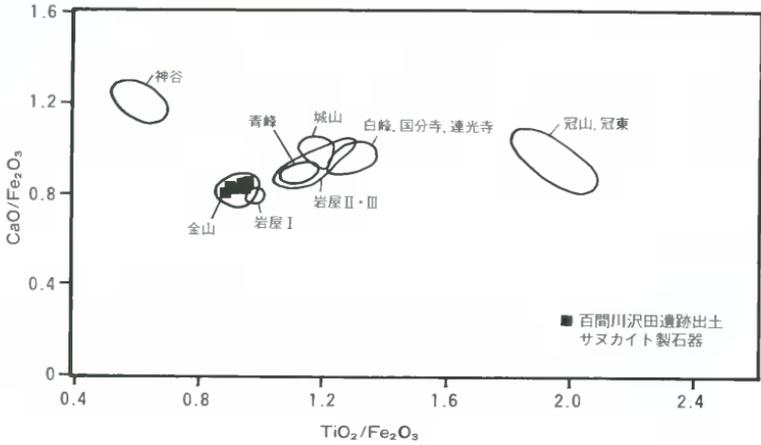
第4図 サヌカイト原産地 K<sub>2</sub>O/Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-MgO/Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub> 散布図



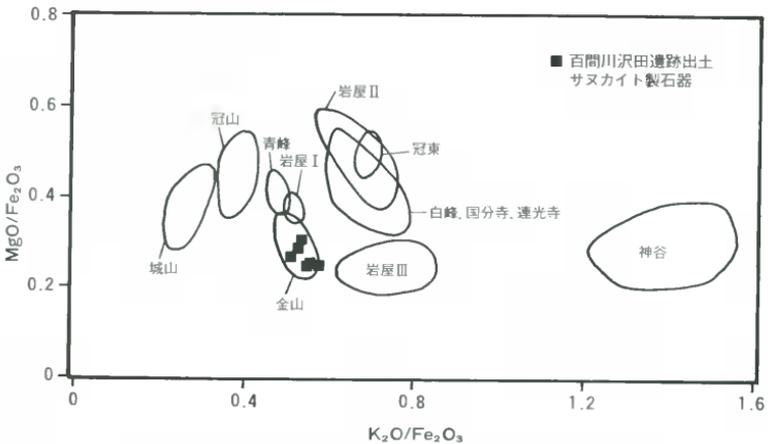
第 5 図 サヌカイト原産地と百間川沢田遺跡出土石器の対比  
 $K_2O/Fe_2O_3$ - $TiO_2/Fe_2O_3$  散布図



第 6 図 サヌカイト原産地と百間川沢田遺跡出土石器の対比  
 $K_2O/Fe_2O_3$ - $CaO/Fe_2O_3$  散布図



第7図 サヌカイト原産地と百間川沢田遺跡出土石器の対比  
TiO<sub>2</sub>/Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-CaO/Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub> 散布図



第8図 サヌカイト原産地と百間川沢田遺跡出土石器の対比  
K<sub>2</sub>O/Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-MgO/Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub> 散布図

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告84

百間川沢田遺跡 3

旭川放水路(百間川)改修  
工事に伴う発掘調査 VIII

(本文)

1993年3月20日 印刷

1993年3月20日 発行

編集 岡山県古代吉備文化財センター

岡山市西花尻1325-3

発行 建設省岡山河川工事事務所

岡山市鹿田町2-4-36

岡山県教育委員会

岡山市内山下2-4-6

印刷 友野印刷株式会社

岡山市高柳西町1-23

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 84

# 百間川沢田遺跡 3

旭川放水路(百間川)改修  
工事に伴う発掘調査 VIII  
(表・図版)

1993

建設省岡山河川工事事務所  
岡山県教育委員会

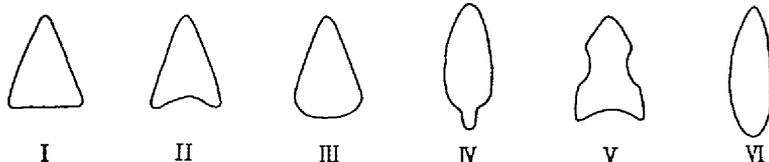
## 百間川沢田遺跡出土遺物一覽（觀察）表

1. 縄文後期土器觀察表
2. 土器觀察表
3. 土製品一覽表
4. 石製品一覽表
5. 金屬器一覽表
6. 木製品一覽表
7. 玉類一覽表
8. 種子一覽表
9. 新旧遺構名称对照表

## 凡 例

1. 各一覧（観察）表の時代・時期は遺構の時期を示しており、必ずしもその遺物の時期を示すものではない。
2. 土器（縄文後期含む）観察表の掲載番号は、本報告書掲載図の土器番号にあたる。
3. 土製品、石製品、金属器、木製品、玉類一覧表の番号は整理番号であり、掲載番号が本報告書掲載図の番号にあたる。
4. 遺溝名の欄は特に記さないかぎり新（報告書作成時）遺構名である。
5. 石製品の形式は、石鏃についてのみ以下の分類を行なっている。

I. 平基式 II. 凹基式 III. 凸基Ⅰ式 IV. 有茎式 V. 抉り入り式 VI. 凸基Ⅱ式



6. 土製品の形式は、土錘についてのみ以下の分類で行なっている。

- |                    |                         |
|--------------------|-------------------------|
| A. ずん胴で穴が中央を貫通     | I 長80mm以上、幅30mm以上、若干不正形 |
|                    | II ① Iよりも細目、長80mm近い     |
|                    | II ② 長70mm程、幅30mm未満、中型  |
|                    | II ③ 長70mm未満、幅30mm未満、小型 |
|                    | III 長60mm未満、幅30～35mm、長丸 |
|                    | IV 長60mm程、幅50mm程        |
| B. 上下の口部分が細い中太の紡錘形 | I 中太で長い大形品              |
|                    | II 先細で長い                |
|                    | III 中太で短い               |
|                    | IV 先細で中位の長さ             |
|                    | V 先細で短い                 |

C. 楕円球、長軸にそって溝がある

D. 球形で溝と穴がある

E. 両端に穴のある腕骨形

F. 新旧遺構名称対照表の新名称は報告書作成時に付したもので、旧名称は発掘調査時のものである。

縄文後期土器観察表

縄文後期土器観察表

掲載番号	遺構・土層名	器種	施文位置と文様			備考
			口縁部内面	口縁部外面	胴部外面	
899	土壇123	深鉢	無文	無文		
900	土壇123	深鉢	無文	無文		
901	土壇123	深鉢	無文	端部を肥厚させLR		波状口縁
902	土壇123	深鉢	無文	端部にRL		
903	土壇123	深鉢	無文	端部を肥厚させLR		
904	土壇123	深鉢	無文	端部にRLと沈線		
905	土壇123	深鉢	無文	端部を肥厚		
906	土壇123	深鉢	無文	端部を肥厚		
907	土壇123	注口	無文	RLと沈線	沈線・RL	口径9.7cm
908	土壇124	深鉢	無文	無文		内傾接合
909	土壇124	深鉢	無文	無文		波状口縁
910	土壇125	深鉢	無文	磨消縄文LR		波状口縁
911	土壇125	深鉢	無文	端部にLR		
912	土壇125	深鉢	無文	端部にLR		
913	土壇125	深鉢			沈線・LR	
914	土壇125	浅鉢	無文	磨消縄文LR		
915	土壇125	浅鉢	無文	無文	無文	
916	土壇129	深鉢	?	磨消縄文LR	磨消縄文LR	
917	縄文包含層	深鉢	無文	多条沈線・LR		波状口縁
918	"	深鉢	無文	磨消縄文LR		
919	"	深鉢	無文	多条沈線・LR		波状口縁
920	"	深鉢	無文	磨消縄文LR		波状口縁
921	"	深鉢	無文	多条沈線・LR		波状口縁
922	"	深鉢	無文	多条沈線・縄文		
923	"	深鉢	無文	磨消縄文LR		波状口縁
924	"	深鉢?	無文	磨消縄文LR		
925	"	深鉢?	無文	磨消縄文LR		
926	"	浅鉢?	端部に沈線・RL	端部に沈線・RL		
927	"	深鉢	無文	RL		
928	"	深鉢	無文	LR		
929	"	深鉢	無文	LR		
930	"	深鉢	無文	RL		
931	"	深鉢	無文	RL		波状口縁
932	"	深鉢	無文	端部にLR		
933	"	深鉢	無文	端部にRL		
934	"	深鉢	無文	端部に縄文?		
935	"	深鉢	無文	端部にLR		
936	"	深鉢	無文	端部にLR		
937	"	深鉢	無文	端部にLR		

百間川沢田遺跡 3

掲載番号	遺構・土層名	器 種	施 文 位 置 と 文 様			備 考
			口縁部内面	口縁部外面	胴部外面	
938	縄文包含層	深鉢	無文	端部にRL		
939	"	深鉢	無文	端部にRL		
940	"	深鉢	無文	端部にRL		
941	"	深鉢	無文	端部を肥厚させLR		
942	"	深鉢	無文	端部を肥厚させLR		波状口縁
943	"	深鉢	無文	端部にRL		
944	"	深鉢	無文	端部を肥厚させLR		
945	"	深鉢	無文	端部にLR		波状口縁
946	"	深鉢	無文	端部を肥厚させLR		波状口縁
947	"	深鉢	無文	端部を肥厚させLR		
948	"	深鉢	無文	端部にLR		波状口縁
949	"	深鉢	無文	端部にLR		
950	"	深鉢	無文	端部を肥厚させRL		
951	"	深鉢	無文	端部を肥厚させRL		
952	"	深鉢	無文	端部にRL		
953	"	深鉢	無文	端部にRL	沈線より下にRL	
954	"	深鉢	無文	端部を肥厚させLR		
955	"	深鉢	無文	端部にLR		
956	"	深鉢	無文	端部を肥厚させLR		
957	"	深鉢	無文	端部にLR		
958	"	深鉢	無文	端部にLR		
959	"	深鉢	無文	端部を肥厚させLR		
960	"	深鉢	無文	端部を肥厚させLR		
961	"	深鉢	無文	端部にLR		
962	"	深鉢	無文	端部を肥厚させLR		
963	"	深鉢	無	端部を肥厚させLR		
964	"	深鉢	無文	端部を肥厚させRL	沈線より下にRL	
965	"	深鉢	無文	端部を肥厚させRL		波状口縁
966	"	深鉢	無文	端部を肥厚		波状口縁
967	"	深鉢	無文	無文	無文	
968	"	深鉢	無文	端部に沈線		波状口縁
969	"	深鉢	無文	端部を肥厚		波状口縁
970	"	深鉢	無文	端部を肥厚、縄文?		
971	"	深鉢	無文	端部を肥厚		波状口縁
972	"	深鉢	無文	端部を肥厚		
973	"	深鉢	無文	端部を肥厚		
974	"	深鉢	無文	端部を肥厚		
975	"	深鉢	無文	端部を肥厚		
976	"	深鉢	無文	端部を肥厚		
977	"	深鉢	無文	端部を肥厚		

縄文後期土器観察表

掲載番号	遺構・土層名	器種	施文位置と文様			備考
			口縁部内面	口縁部外面	胴部外面	
978	縄文包含層	深鉢	無文	端部に縄文?		内面条痕
979	"	深鉢	無文	端部にLR	LR	波状口縁
980	"	深鉢	無文	端部にLR		波状口縁
981	"	深鉢	無文	端部にLR		波状口縁?
982	"	深鉢	無文	端部にRL	沈線より下にRL	
983	"	深鉢	無文	端部にRL		
984	"	深鉢	無文	端部上面にLR		
985	"	深鉢	無文	端部にLR		
986	"	深鉢	波頂部の下に刺突	端部にRL		波状口縁
987	"	深鉢	無文	端部にLR		
988	"	深鉢	無文	端部にRL		
989	"	深鉢	無文	端部にRL		
990	"	深鉢	無文	端部にLR		
991	"	深鉢	無文	端部にLR		
992	"	深鉢	無文	端部にRL		
993	"	深鉢	無文	端部にLR		
994	"	深鉢	無文	端部にLR		
995	"	深鉢	無文	端部にLR		
996	"	深鉢	無文	端部にLR		
997	"	深鉢	無文	端部にLR		長石多く含む
998	"	深鉢	無文	端部にRL		
999	"	深鉢	無文	端部にLR		
1000	"	深鉢	無文	端部上面にLR		
1001	"	深鉢	無文	端部にLR		
1002	"	深鉢?	無文	端部にLR		
1003	"	深鉢?	無文	端部にLR		
1004	"	鉢?	無文	端部にLR		
1005	"	鉢?	無文	端部にLR		砂粒多く含む
1006	"	深鉢	無文	端部に縄文?		
1007	"	深鉢	無文	端部にRL?		
1008	"	深鉢	端部にLR	端部を肥厚		
1009	"	深鉢	無文	端部にLR		
1010	"	深鉢	無文	端部にLR		
1011	"	深鉢	無文	端部にLR		1010と同一個体
1012	"	深鉢	無文	端部を肥厚させLR		
1013	"	深鉢	無文	端部にRL		
1014	"	深鉢	端部にRL	端部にRL		
1015	"	深鉢	端部にLR・沈線	無文		
1016	"	深鉢	端部にLR・沈線	無文		
1017	"	深鉢	端部にRL・沈線	無文?		

百間川沢田遺跡 3

掲載番号	遺構・土層名	器種	施文位置と文様			備考
			口縁部内面	口縁部外面	胴部外面	
1018	縄文包含層	深鉢	端部にLR・沈線	無文		
1019	"	浅鉢?	端部にLR・沈線	無文		
1020	"	深鉢	端部に縄文?・沈線	端部を肥厚させRL		
1021	"	深鉢	端部に沈線	端部にRL		
1022	"	深鉢	端部に沈線	無文		外面条痕
1023	"	深鉢	端部にRL・沈線	端部にRL		
1024	"	深鉢	沈線	端部上面RL	沈線以下にRL	波状口縁
1025	"	深鉢	端部上面に沈線・RL	端部にRL		
1026	"	深鉢	端部にLR・沈線	端部にLR		
1027	"	深鉢	端部にRL・沈線	端部を肥厚させRL		
1028	"	深鉢	端部にRL・沈線	端部を肥厚させRL		
1029	"	深鉢	端部にLR・沈線	端部上面にLR		
1030	"	深鉢	端部にRL・沈線	端部にRL		
1031	"	深鉢	端部にLR・沈線	端部にLR		
1032	"	深鉢	端部にLR・沈線	端部を肥厚させLR		
1033	"	深鉢	端部にRL・沈線	端部を肥厚させRL		
1034	"	深鉢	端部にLR・沈線	端部にLR		
1035	"	深鉢	端部にLR・沈線	端部を肥厚させLR		
1036	"	深鉢	端部に沈線・RL	端部を肥厚させRL		
1037	"	深鉢	端部にRL・沈線	端部を肥厚させRL		
1038	"	深鉢	端部にLR・沈線	端部上面にLR		
1039	"	深鉢	端部にRL・沈線	端部を肥厚させRL		
1040	"	深鉢	端部にLR・沈線	端部にLR		波状口縁
1041	"	深鉢	端部にLR・沈線	端部を肥厚させLR		波状口縁
1042	"	深鉢	波頂部下に沈線とRLの渦文	端部にRL		波状口縁?
1043	"	深鉢	端部に沈線、波頂部下に沈線と縄文?の半巻き込み状	端部にRL	沈線以下に羽状縄文	波状口縁
1044	"	深鉢	波頂部下に沈線と縄文?の半巻き込み状	端部を肥厚させRL	沈線以下にRL	波状口縁?
1045	"	深鉢	端部に縄文?・沈線2条	端部を肥厚させ縄文?		
1046	"	深鉢	端部にRL・沈線2条、波頂部下に縦の短沈線2条	無文		波状口縁、内外面条痕後ミガキ
1047	"	深鉢	端部に縄文?・沈線	無文		波状口縁
1048	"	深鉢	端部に沈線	無文	沈線以下は無文	口径20.4cm、胴部外面ケズリ
1049	"	深鉢	端部に沈線2条とRL	端部に沈線		
1050	"	深鉢	沈線による半月形の単位文	端部に沈線		
1051	"	深鉢	端部にRL・沈線、波頂部下に沈線と縄文の渦文	端部を肥厚させRL、沈線	羽状縄文	波状口縁
1052	"	深鉢	端部に結節縄文・沈線	端部にRL・沈線		
1053	"	深鉢	端部にRL・沈線	端部に縄文?・沈線		
1054	"	深鉢	沈線とRLの単位文	端部にRL		内面条痕
1055	"	深鉢	無文	端部に沈線・L		波状口縁
1056	"	深鉢?	無文	端部に沈線・LR		
1057	"	深鉢	無文	無文		外面ナデ

縄文後期土器観察表

掲載番号	遺構・土層名	器種	施文位置と文様			備考
			口縁部内面	口縁部外面	胴部外面	
1058	縄文包含層	深鉢	無文	無文		
1059	"	深鉢	無文	無文		内面条痕、外面削り後ナデ
1060	"	深鉢	無文	無文		
1061	"	深鉢	無文	無文		
1062	"	深鉢	無文	無文		外面条痕
1063	"	深鉢	無文	無文		内外面ナデ
1064	"	深鉢	無文	無文		内面条痕
1065	"	深鉢	無文	無文		外面条痕
1066	"	深鉢	無文	無文		内面条痕、外面ナデ
1067	"	深鉢	無文	無文		
1068	"	深鉢	無文	無文		
1069	"	深鉢	無文	無文		
1070	"	深鉢	無文	無文		
1071	"	深鉢	無文	無文		
1072	"	深鉢	無文	無文		内外面条痕後ミガキ
1073	"	深鉢	無文	無文		
1074	"	深鉢	無文	無文		外面条痕
1075	"	深鉢	無文	無文		内外面ナデ
1076	"	深鉢	無文	無文		粘土帯幅1.8cm、内面ナデ
1077	"	深鉢	無文	無文		
1078	"	深鉢	無文	無文		
1079	"	深鉢	無文	無文		
1080	"	深鉢	無文	無文		
1081	"	深鉢	無文	無文		
1082	"	深鉢	無文	無文		
1083	"	深鉢	無文	無文		
1084	"	深鉢	無文	無文		内面ナデ、外面削り後ナデ
1085	"	深鉢	無文	無文		
1086	"	深鉢	無文	無文		
1087	"	深鉢	無文	無文		
1088	"	深鉢	無文	無文?		
1089	"	深鉢	無文	無文		外面ナデ
1090	"	深鉢	無文	無文		
1091	"	深鉢	無文	無文		
1092	"	深鉢	無文	無文		外面ナデ
1093	"	深鉢	無文	無文		
1094	"	深鉢	無文	無文		
1095	"	深鉢	無文	無文		外面削り
1096	"	深鉢	無文	無文		
1097	"	深鉢	無文	無文		

百間川沢田遺跡 3

掲載番号	遺構・土層名	器 種	施 文 位 置 と 文 様			備 考
			口縁部内面	口縁部外面	胴部外面	
1098	縄文包含層	深鉢	無文	無文		外面条痕
1099	"	深鉢	無文	無文		外面削り後ナデ
1100	"	深鉢	無文	無文		
1101	"	深鉢	無文	無文		
1102	"	深鉢	無文	無文		
1103	"	深鉢	無文	無文	無文	内外面条痕
1104	"	深鉢	無文	無文		内面ナデ、外面削り
1105	"	深鉢	無文	無文		内面条痕、外面ナデ
1106	"	深鉢	無文	無文		内面条痕後ミガキ
1107	"	深鉢	無文	無文		内面条痕後ミガキ
1108	"	深鉢	無文	無文		外面条痕
1109	"	深鉢	無文	無文		内面ナデ、外面条痕
1110	"	深鉢	無文	無文		内外面条痕後ミガキ
1111	"	深鉢	無文	無文		波状口縁
1112	"	深鉢	無文	無文		波状口縁
1113	"	深鉢	無文	無文		波状口縁、外面削り後ミガキ
1114	"	深鉢	無文	無文		波状口縁?
1115	"	深鉢	無文	無文		波状口縁、外面削り後ミガキ
1116	"	深鉢	無文	無文		波状口縁、内面ナデ
1117	"	深鉢	無文	無文		波状口縁、外面削り後ミガキ
1118	"	深鉢	無文	無文	無文	波状口縁
1119	"	深鉢	無文	無文		
1120	"	深鉢	無文	無文		砂粒多く含む
1121	"	深鉢?	無文	無文		
1122	"	鉢	無文	無文	無文	口径13.2cm器高8.1cm
1123	"	鉢	無文	無文	無文	
1124	"	鉢?	無文	無文		
1125	"	鉢	無文	無文		外面ナデ
1126	"	鉢	無文	端部にLR		
1127	"	鉢	無文	無文	沈線	
1128	"	鉢	無文	端部にRL		
1129	"	鉢	無文	端部を肥厚させLR	LR	
1130	"	鉢	無文	端部にLR	LR	内面条痕後ミガキ
1131	"	鉢	無文	端部にRL	RL	
1132	"	鉢	無文	端部にRL	RL	
1133	"	鉢	端部にLR	端部にLR	LR	
1134	"	鉢	無文	端部にLR	LR	
1135	"	鉢	無文	端部にRL		
1136	"	鉢?	無文	端部RL		
1137	"	鉢	無文	端部にRL	RL	

縄文後期土器観察表

掲載番号	遺構・土層名	器 種	施 文 位 置 と 文 様			備 考
			口縁部内面	口縁部外面	胴部外面	
1138	縄文包含層	鉢	無文	端部を肥厚させRL	RL	
1139	"	浅鉢?	無文	RL		
1140	"	浅鉢?	無文	附加条縄文		波状口縁?
1141	"	浅鉢?	無文	LR		
1142	"	浅鉢?	無文	附加条縄文		
1143	"	浅鉢?	無文	LR		内面条痕後ミガキ
1144	"	浅鉢?	無文	附加条縄文		
1145	"	浅鉢?	無文	附加条縄文		
1146	"	浅鉢?	無文	附加条縄文		内面条痕後ミガキ
1147	"	浅鉢?	端部に縄文?	L?		
1148	"	浅鉢	無文	沈線・結節縄文RL		
1149	"	浅鉢	無文	LR地に沈線		
1150	"	浅鉢	無文	LR地に沈線		
1151	"	浅鉢	無文	LR地に沈線		
1152	"	浅鉢?	無文	LRと沈線の渦文		
1153	"	浅鉢?	無文	磨消縄文?による渦文		
1154	"	浅鉢	無文	磨消縄文RL		
1155	"	浅鉢?	無文	磨消縄文RL		口縁端部に小円孔
1156	"	浅鉢	無文	磨消縄文LR		
1157	"	浅鉢	無文	磨消縄文RL		
1158	"	浅鉢?	無文	磨消縄文RL		
1159	"	浅鉢	無文	磨消縄文LR		
1160	"	浅鉢	無文	磨消縄文LR		
1161	"	浅鉢	無文	磨消縄文LR		
1162	"	浅鉢?	無文	磨消縄文RL		
1163	"	浅鉢?	無文	磨消縄文LR		
1164	"	浅鉢?	無文	磨消縄文LR		波状口縁
1165	"	浅鉢	無文	磨消縄文RL		
1166	"	浅鉢	無文	磨消縄文LR		
1167	"	浅鉢	無文	磨消縄文RL?		
1168	"	浅鉢	無文	磨消縄文RL		
1169	"	浅鉢	無文	磨消縄文LR		
1170	"	浅鉢	無文	磨消縄文RL		
1171	"	浅鉢	無文	磨消縄文RL		
1172	"	浅鉢	無文	磨消縄文RL		
1173	"	浅鉢	無文	磨消縄文RL		
1174	"	浅鉢	無文	磨消縄文LR		
1175	"	浅鉢	無文	磨消縄文LR		
1176	"	浅鉢	無文	磨消縄文LR		
1177	"	浅鉢	無文	磨消縄文RL		

百間川沢田遺跡 3

掲載番号	遺構・土層名	器種	施文位置と文様			備考
			口縁部内面	口縁部外面	胴部外面	
1178	縄文包含層	浅鉢?	無文	磨消縄文LR		
1179	"	浅鉢?	無文	磨消縄文RL		
1180	"	浅鉢?	無文	磨消縄文RL		
1181	"	浅鉢?	無文	磨消縄文RL		
1182	"	浅鉢?	無文	磨消縄文RL		
1183	"	浅鉢	無文	無文		粘土帯幅2cm、外面削り
1184	"	浅鉢	無文	無文		補修孔、内面ナデ、外面削り後ナデ
1185	"	浅鉢	無文	無文		
1186	"	浅鉢	無文	無文		
1187	"	浅鉢?	無文	無文		
1188	"	浅鉢	無文	無文		
1189	"	浅鉢	無文	無文		
1190	"	浅鉢	無文	無文		
1191	"	浅鉢?	無文	無文		外面ナデ
1192	"	浅鉢	無文	無文		
1193	"	浅鉢	無文	無文		外面削り後ナデ
1194	"	浅鉢	無文	無文		
1195	"	浅鉢?	無文	無文		波状口縁
1196	"	浅鉢	無文	無文		外面削り後ナデ
1197	"	浅鉢	無文	無文		手捏
1198	"	浅鉢?	無文	無文		波状口縁
1199	"	浅鉢?	無文	無文		
1200	"	浅鉢	無文	無文		
1201	"	浅鉢	無文	無文		波状口縁?
1202	"	浅鉢	無文	無文		
1203	"	浅鉢	無文	無文		
1204	"	浅鉢	無文	無文		外面ナデ
1205	"	浅鉢	無文	無文		
1206	"	注口	無文	端部上面に沈線と刻目		こぶ状突起
1207	"	注口			沈線区画内に条線	内面ナデ
1208	"	注口			沈線区画内に条線	内面ナデ
1209	"	注口			沈線区画内に条線	内面ナデ
1210	"	注口	無文	条線		
1211	"	注口			沈線区画内に条線	
1212	"	注口			沈線区画内に条線	
1213	"	注口			沈線区画内に条線	
1214	"	注口			沈線区画内に条線	
1215	"	注口			条線	
1216	"	注口			沈線区画内に条線	内面ナデ
1217	"	注口			沈線区画内に条線	

縄文後期土器観察表

掲載番号	遺構・土層名	器種	施文位置と文様			備考
			口縁部内面	口縁部外面	胴部外面	
1218	縄文包含層	注口			沈線区画内に条線	
1219	"	注口			沈線区画内に条線	
1220	"	注口			条線	
1221	"	注口				
1222	"	注口				
1223	"	注口				
1224	"	深鉢?			RL	
1225	"	深鉢			沈線以下にRL	
1226	"	深鉢			RL	
1227	"	深鉢			沈線以下に羽状縄文	
1228	"	深鉢			沈線以下にLR	
1229	"	深鉢			RL	
1230	"	深鉢			沈線以下にLR	
1231	"	深鉢			沈線以下にLR	
1232	"	深鉢			沈線以下にRL	
1233	"	深鉢			沈線以下にRL	
1234	"	深鉢			沈線以下にRL	
1235	"	深鉢			沈線以下にLR	
1236	"	深鉢			沈線以下にRL	
1237	"	深鉢			沈線以下にRL	
1238	"	深鉢			RL	粘土帯幅2cm、内面条痕後ミガキ
1239	"	深鉢			沈線以下にLR	
1240	"	深鉢			沈線以下にRL	
1241	"	深鉢			RL	
1242	"	深鉢			沈線以下にRL	内外面条痕後ミガキ
1243	"	深鉢			RL	
1244	"	深鉢?			LR	
1245	"	深鉢			LR	
1246	"	深鉢?			RL	
1247	"	深鉢			RL	
1248	"	深鉢			RL	
1249	"	深鉢			LR	
1250	"	深鉢			RL	
1251	"	深鉢			RL	
1252	"	深鉢			RL	
1253	"	深鉢			L	
1254	"	深鉢			L	
1255	"	深鉢			条線	
1256	"	深鉢			条線	内面ナデ
1257	"	深鉢			条線	内面条痕後ミガキ

百間川沢田遺跡3

掲載番号	遺構・土層名	器 種	施 文 位 置 と 文 様			備 考
			口縁部内面	口縁部外面	胴部外面	
1258	縄文包含層	深鉢			RL	
1259	"	深鉢			附加条縄文	
1260	"	深鉢			条線	
1261	"	深鉢			条線	
1262	"	深鉢			条線	内面条痕後ミガキ
1263	"	深鉢			沈線・RL	
1264	"	深鉢			磨消縄文RL	
1265	"	深鉢			磨消縄文RL	
1266	"	深鉢			磨消縄文RL	
1267	"	深鉢			磨消縄文RL	
1268	"	深鉢			磨消縄文LR	
1269	"	深鉢			沈線	
1270	"	深鉢			磨消縄文LR	
1271	"	深鉢?			磨消縄文LR	
1272	"	深鉢?			磨消縄文LR	
1273	"	深鉢?			磨消縄文LR	
1274	"	深鉢			磨消縄文RL	
1275	"	深鉢			磨消縄文LR	
1276	"	深鉢			磨消縄文LR	
1277	"	深鉢?			磨消縄文L	
1278	"	深鉢			磨消縄文LR	
1279	"	深鉢			沈線	
1280	"	注口?			磨消縄文LR	
1281	"	深鉢			磨消縄文RL	
1282	"	深鉢			磨消縄文LR?	
1283	"	鉢?			無文	外面ナデ
1284	"	深鉢			結節縄文	
1285	"	深鉢			結節縄文	
1286	"	深鉢			結節縄文	
1287	"	深鉢?			沈線間に矢羽根状刻目	
1288	"	深鉢			RL地に沈線	
1289	"	浅鉢?			磨消縄文?	
1290	"	深鉢?			磨消縄文LR	
1291	"	浅鉢			RL	
1292	"	鉢			沈線の下にLR	
1293	"	深鉢?				
1294	"	深鉢?				
1295	"	深鉢?				
1296	"	深鉢				外面ナデ
1297	"	深鉢				

縄文後期土器観察表

掲載番号	遺構・土層名	器種	施文位置と文様			備考
			口縁部内面	口縁部外面	胴部外面	
1298	縄文包含層	深鉢				底部穿孔
1299	"	深鉢				内外面削り
1300	"	深鉢				外面削り後ミガキ
1301	"	深鉢				外面削り後ミガキ
1302	"	深鉢				
1303	"	深鉢				外面削り後ミガキ
1304	"	深鉢				
1305	"	深鉢				内面条痕後ミガキ、外面削り後ミガキ
1306	"	深鉢				内面ナデ、外面削り

- 器面調整は内外面ともに横方向のミガキを基本とするが、それ以外の調整で、判明したものは備考欄に記している。
- 胎土は石英、長石の砂粒を比較的多く含み、これに雲母が加わるものであるが、特に異なるものについては備考欄に記す。

百間川沢田遺跡 3

土器観察表

掲載 番号	遺構・土層名	種 別	器 種	法量 (cm)			特 徴	備 考
				口 径	底 径	器 高		
1	弥生後期洪水砂層上面	土師器	壺	18.2	—	—		
2	弥生後期洪水砂層上面	土師器	壺	22.0	—	—		石英多。
3	弥生後期洪水砂層上面	土師器	高杯	21.2	—	—		水こし粘土。
4	弥生後期洪水砂層上面	土師器	甕	13.1	2.5	20.8	被熱による赤色変化。外底部有機物付着。	雲母多。
5	弥生後期洪水砂層上面	土師器	甕	16.0	4.4	27.2	肩部に刺突文。縦に3点。底部ヘラミガキ。	
6	ピット	弥生土器	甕	21.1	—	—	口縁端に刻目。	長石・石英多。
7	弥生時代前期包含層	弥生土器	壺	38.9	—	—	頸部沈線上に貼付突帯。	
8	土壌 1	弥生土器	甕	47.0	—	—	口縁端に刺突文。	石英多。
9	土壌 1	弥生土器	甕	20.2	—	—	口縁端に刺突文。	長石・石英多。
10	土壌 1	弥生土器	甕	—	—	—	ヘラ描き沈線文。	
11	土壌 1	弥生土器	甕	—	—	—	口縁端に刻目。	石英多。
12	土壌 1	弥生土器	甕	—	—	—	ヘラ描き沈線文。口縁端に刻目。	
13	土壌 1	弥生土器	甕	—	7.4	—	底面ヘラミガキ。底部穿孔。	
14	土壌 2	弥生土器	甕	19.3	—	—	口縁端に刺突文。	長石・石英多。
15	土壌 8	弥生土器	壺	—	7.0	—	上げ底。	4～5mm石粒多。
16	溝 1	弥生土器	壺	—	—	—	口縁部に穿孔（紐孔）。半截竹管文。	
17	溝 1	弥生土器	甕	—	—	—	ヘラ描き沈線文。刺突文。	
18	溝 2	弥生土器	壺	—	—	—	外面横方向のヘラミガキ。	
19	溝 2	弥生土器	壺	—	—	—	貼り付け突帯。	
20	溝 2	弥生土器	甕	—	—	—	口縁端に刻目。	
21	溝 2	弥生土器	甕	—	—	—	内外面ナデ。	
22	溝 2	弥生土器	甕	—	—	—	ヘラ描き沈線。	
23	溝 6	弥生土器	壺	—	—	—	口縁端面沈線1条。	
24	溝 6	弥生土器	壺	—	—	—	肩部に貼り付け突帯。	石英多。
25	溝 6	弥生土器	壺か	—	6.8	—	底面ヘラミガキ。	
26	溝 7	弥生土器	壺	—	4.4	—	頸部削り出し突帯風。胴部ヘラ描き沈線。	
27	溝 9	弥生土器	甕	—	—	—	頸部外面ヘラ描き沈線。	
28	溝10	弥生土器		—	7.5	—	底部押圧のみで未調整。	
29	溝11	弥生土器	壺	—	—	—	肩部削り出し突帯上に沈線。	
30	溝11	弥生土器	壺	—	—	—	重弧文。	
31	溝11	弥生土器	壺	—	—	—	頸部にヘラ描き沈線。	
32	溝11	弥生土器	甕	—	—	—	口縁端に刻目。ヘラ描き沈線。	長石多。
33	溝11	縄文土器	深鉢	—	—	—	口縁端と貼付突帯上に指頭押圧。	長石・石英多。
34	中期水田上層	弥生土器	壺	—	—	—	櫛描き直線文。貝殻刺突文。	
35	灰色粘質土層	弥生土器	壺	—	—	—	半截竹管文。	長石多。
36	中期水田上層	弥生土器	壺	—	—	—	櫛描き直線文・波状文。	細砂粒。
37	中期水田上層	弥生土器	壺	—	—	—	櫛描き直線文・波状文。	
38	中期水田層	弥生土器	壺	—	—	—	ヘラ描き沈線文。刺突文。	
39	中期水田層	弥生土器	甕	—	—	—	ヘラ描き沈線文。	

土器観察表

掲載 番号	遺構・土層名	種 別	器 種	法 量 (cm)			特 徴	備 考
				口 径	底 径	器 高		
40	中期水田層	弥生土器	鉢	—	—	—	内外面ナデ。	
41	中期水田直下層	弥生土器	甕	—	—	—	櫛描き沈線文。	
42	中期水田下砂層	弥生土器	甕	—	—	—	ヘラ描き沈線文。	
43	中期水田下第3層	弥生土器	壺	6.45	5.5	11.8	ヘラ描き沈線文・刺突文・鋸歯文。	長石・角閃石多。
44	土城9	弥生土器	甕	—	5.4	—	胴部下内面ヘラケズリ。	微砂粒。金雲母。
45	溝12	弥生土器	壺	—	—	—		
46	竪穴住居1	土師器	鉢	3.3	—	3.3	内外面指頭圧痕。	手捏。
47	竪穴住居1	土師器	壺	—	—	—	内面胴部下内面ヘラケズリか。	水こし粘土か。
48	竪穴住居1	土師器	壺	9.6	—	—		水こし粘土か。
49	竪穴住居1	土師器	甕	12.6	—	—		
50	竪穴住居1	土師器	甕	17.4	—	—		雲母多。角閃石多。
51	竪穴住居1	土師器	甕	18.2	—	—		
52	竪穴住居1床面直下	土師器	甕	18.1	—	—	胴部内面ハケ。	
53	竪穴住居1	土師器	高杯	17.9	—	—		水こし粘土か。
54	竪穴住居1	土師器	高杯	—	10.1	—	内面横方向のヘラケズリ。	水こし粘土か。
55	竪穴住居1	土師器	高杯	—	10.9	—		水こし粘土か。
56	竪穴住居2床面	土師器	壺	9.2	—	—		水こし粘土。
57	竪穴住居2床面	土師器	壺	11.2	—	14.4		
58	竪穴住居2	土師器	鉢	17.3	—	—	口縁部下端凹線状。	ち密。
59	竪穴住居2床面	土師器	高杯	15.7	—	—	杯部外面ハケ目。	水こし粘土。雲母多。
60	竪穴住居2床面	土師器	甕	17.0	—	—	タタキの後にハケ。	
61	竪穴住居2	土師器	甕	13.9	—	—		
62	竪穴住居2床面	土師器	甕	15.5	—	—	肩部刺突文2点。	褐色粒多。金雲母。
63	竪穴住居4	土師器	壺	—	—	—		水こし粘土か。
64	竪穴住居4	土師器	鉢	5.2	—	3.8		
65	竪穴住居4床面	土師器	壺	5.0	1.9	5.8		水こし粘土か。
66	竪穴住居4床面	土師器	壺	10.1	—	—		水こし粘土。
67	竪穴住居4床面直上層	土師器	壺	8.25	—	8.1	胴部内面強いナデ。	角閃石多。
68	竪穴住居4	土師器	甕	14.6	—	—		雲母多。
69	竪穴住居4	土師器	甕	16.55	—	—		
70	竪穴住居4	土師器	甕	16.8	—	—		雲母多。
71	竪穴住居4	土師器	甕	—	—	—		
72	竪穴住居4床面直上	土師器	甕	16.4	—	—		角閃石多。
73	竪穴住居4床面直上層	土師器	甕	17.3	—	—		雲母・角閃石多。
74	竪穴住居4	土師器	高杯	19.3	—	—	杯底部面取り状ヘラケズリ。	水こし粘土か。
75	竪穴住居4床面直上層	土師器	高杯	—	12.4	—		水こし粘土。
76	竪穴住居4	土師器	高杯	17.4	—	—	杯底部面取り状ヘラケズリ。	水こし粘土か。
77	竪穴住居4壁側土城	土師器	高杯	22.2	—	—	杯底部ハケ。	
78	竪穴住居4床面	土師器	高杯	—	11.0	—	柱状部内面横方向ヘラケズリ。	水こし粘土。
79	竪穴住居4	土師器	器台	11.9	—	—		水こし粘土。

百間川沢田遺跡 3

掲載番号	遺構・土層名	種別	器種	法量 (cm)			特 徴	備 考
				口 径	底 径	器 高		
80	竪穴住居 4	土師器	高杯	-	7.0	-		
81	井戸 2 底部	土師器	甕	14.3	-	24.2	肩部刺突文 1 点。底部穿孔。	雲母・角閃石多。
82	井戸 2 底部	土師器	甕	14.2	-	24.8	肩部刺突文 3 点横 1 列。内底部炭化物。	
83	井戸 2 底部	土師器	甕	14.3	-	23.4		
84	井戸 2 底部	土師器	甕	16.0	-	28.3	外面へラミガキがジグザグ。	
85	井戸 2 底部	土師器	壺	-	-	-		
86	土層 18	土師器	壺	11.9	-	-		
87	土層 18	土師器	甕	-	-	-	口縁部縮描。	雲母多。
88	土層 18	土師器	高杯	-	14.6	-		水こし粘土か。
89	土層 18	土師器	高杯	-	18.6	-		水こし粘土か。微砂。
90	土層 18	土師器	高杯	-	-	-	外面ナデ。杯内面へラミガキ。	水こし粘土。
91	土層 18	土師器	器台	-	-	-	外面は面取り状へラミガキ。	水こし粘土か。
92	溝 22	須恵器	杯	-	-	-	口縁端内面沈線状。	
93	溝 23	須恵器	杯	13.2	-	-	口縁端部内面沈線状。	
94	溝 25	土師器	鉢	9.0	2.1	6.0	口縁部強いヨコナデ。	水こし粘土。
95	溝 25	土師器	鉢	15.0	5.0	7.0	底部付近かき取り風。	
96	溝 25	土師器	甕	19.7	-	-	口縁端わずかに内湾。	小石多。
97	溝 26	須恵器	杯	-	-	-		
98	溝 26	須恵器	杯	-	-	-		
99	溝 29 上層	須恵器	蓋	13.4	-	5.1	断面中央部灰赤色。口縁部屈折的。	
100	溝 29 上層	須恵器	杯	-	-	-		
101	土層 23	土師器	碗	11.3	5.1	4.0	体部に線状の凹凸あり。	ち密。
102	灰褐色粘土斑黄褐色粘土	細文土器	浅鉢	17.1	-	-	沈線内に赤色顔料残存。	1mm 前後の砂粒。
103	竪穴住居 6 中央穴	弥生土器	甕	21.5	-	-	肩部沈線は半截竹管による。	長石・石英多。
104	竪穴住居 6 床面	弥生土器	甕	-	-	-	口縁端刻目。肩部沈線 2 条。	
105	竪穴住居 6	弥生土器	甕	-	-	-	口縁端刻目。肩部沈線 2 条。	
106	竪穴住居 6	弥生土器	甕	-	-	-	口縁端刻目。外面ヨコナデ。	金雲母。
107	竪穴住居 6	弥生土器	甕	-	-	-	口縁端刻目。	金雲母。
108	竪穴住居 6 中央穴	弥生土器	壺	-	9.0	-	内外面・底面へラミガキ。	ち密。金雲母。
109	竪穴住居 6 中央穴	弥生土器	壺?	-	6.0	-	外面へラミガキか。工具の当たり痕。	
110	竪穴住居 7	弥生土器	甕	24.8	-	-	沈線は半截竹管によるか。	
111	竪穴住居 7	弥生土器	壺	-	-	-	外面かすかにへラミガキ残存。	長石多。
112	竪穴住居 7	弥生土器	壺	-	-	-		長石・石英多。
113	竪穴住居 7	弥生土器	壺?	-	7.8	-	内面へラミガキ。	長石・石英多。
114	竪穴住居 8 中央穴	弥生土器	壺	-	-	-	肩部沈線 2 条。その下に木葉文。	
115	竪穴住居 8 中央穴	弥生土器	壺	-	8.2	-	内面不定方向へラミガキ。	
116	竪穴住居 8	弥生土器	壺	-	13.1	-	外面底部付近粘土相接合痕。	
117	竪穴住居 8	弥生土器	鉢	20.3	-	-	内面体部上端押汗痕。	金雲母。
118	竪穴住居 8	弥生土器	甕	16.2	-	-		長石・石英多。
119	竪穴住居 8	弥生土器	鉢	18.6	-	-		

土器観察表

掲載番号	遺構・土層名	種別	器種	法量 (cm)			特徴	備考
				口径	底径	器高		
120	竪穴住居 8	弥生土器	甕?	-	8.8	-	底部穿孔	
121	土城27	弥生土器	壺	35.1	-	-	外面ハケの後にヘラミガキ。頸部沈線1条。	長石多。
122	土城27	弥生土器	壺	-	5.2	-	外面ヘラミガキ。内面オサユ。	長石・石英多。
123	土城27	弥生土器	甕	-	-	-	外面ヘラミガキ。	
124	土城27	弥生土器		-	7.1	-		
125	土城27	弥生土器	鉢	-	-	-	ヘラミガキか。	
126	土城29	弥生土器	壺	-	6.0	-	内面ヘラミガキか。	
127	土城29	弥生土器	壺	-	7.4	-	体部下端ヨコナデか。	
128	土城29	弥生土器	壺	-	8.4	-	底面押圧痕。	
129	土城30	弥生土器	甕	21.9	-	-	肩部に段あり。段の上に沈線。	
130	土城30	弥生土器	甕	-	-	-	口縁部内湾。	
131	土城30	弥生土器	甕	-	-	-	口縁端刻目。肩部沈線2条。	
132	土城31	弥生土器	壺	15.0	-	-	頸部沈線1条。	
133	土城31	弥生土器	壺	-	-	-		長石・石英多。
134	土城31	弥生土器	高杯?	-	-	-	内外面ヘラミガキ。	長石・石英多。
135	土城31	弥生土器	甕	-	-	-	口縁端刻目。	
136	土城31	弥生土器	甕	-	-	-	口縁端刻目。肩部ヘラ描き沈線2条。	石英多。
137	土城31	弥生土器	甕	-	-	-	口縁端刻目か。	
138	土城31	弥生土器	甕	23.6	-	-	外面ヘラミガキか。	
139	土城31	弥生土器	甕	-	7.7	-	外面板状工具調整。	
140	土城33	弥生土器	壺	14.0	-	-	頸部沈線2条。外面ヘラミガキ。	
141	土城33	弥生土器	壺	-	-	-	肩部沈線2条と斜線文。	ち密。
142	土城33	弥生土器	甕	-	-	-	口縁端刻目。肩部沈線1条。	金雲母多。
143	土城35	弥生土器	甕?	-	-	-	口縁端刻目。肩部無文。	
144	土城37	弥生土器	甕	-	-	-	口縁端刻目。肩部無文。	
145	土城38	弥生土器	壺	13.8	-	-	頸部沈線2条。	長石・石英多。
146	土城38	弥生土器	壺	-	-	-	外面ハケ。内面ヘラミガキ。	石英多。
147	土城38	弥生土器	甕	-	-	-	肩部沈線2条。	
148	土城39	弥生土器	壺	-	-	-	肩部沈線1条。	長石・石英多。金雲母。
149	土城39	弥生土器	壺	-	-	-	貼付け突帯の上下に沈線文。	
150	土城39	弥生土器	壺	-	-	-	肩部に削出しの段。	
151	土城39	弥生土器	甕	-	-	-	口縁端刻目。肩部沈線1条と列点文。	
152	土城39	弥生土器	甕	-	-	-	口縁端刻目。沈線1条。	
153	土城39	弥生土器	甕	-	-	-	口縁端刻目。	
154	土城39	弥生土器	甕	-	-	-	口縁端刻目。	
155	土城39	弥生土器	甕	-	-	-	肩部沈線3条。	
156	土城39	弥生土器	甕	-	7.9	-		被熱剝落。
157	土城39	弥生土器	壺?	-	9.4	-		砂粒非常に多。
158	土城39	弥生土器	甕	-	7.1	-	内底部ナデ上げる。	長石多。
159	土城41	弥生土器	壺	-	-	-	内面ヘラミガキ。	

百間川沢田遺跡 3

掘取 番号	遺構・土層名	種 別	器 種	法 量 (cm)			特 徴	備 考
				口 径	底 径	器 高		
160	土城41	弥生土器	鉢	16.5	—	—	口縁端刻目。頸部外面押圧痕。	ち密。
161	土城41	弥生土器	鉢	18.5	7.7	13.9	底面一定方向ヘラミガキ。	石英多。金曇母。
162	土城41	弥生土器	蓋	—	11.1	—	周縁に貼付け突起。	
163	土城41	弥生土器	甕	14.2	—	—	口縁端部に刻目。	
164	土城41	弥生土器	甕	22.0	—	—	口縁端部刻目5〜7個単位で間隔あり。	
165	土城41	弥生土器	甕	—	8.5	—	底面に接合痕らしき円環。	砂粒非常に多。
166	土城44	弥生土器	甕	26.0	—	—		長石・石英多。
167	土城44	弥生土器	蓋	—	—	—	内面ヘラミガキか。	
168	土城46	弥生土器	壺	14.6	—	—	削り出し突帯。	砂粒多く含む。
169	土城46	弥生土器	蓋	—	—	—	内外面とも横ヘラミガキ。	砂粒多く含む。
170	土城49	弥生土器	壺	12.6	8.9	26.8	頸部と胴部の境に沈線1条。	砂粒多く含む。
171	土城49	弥生土器	壺	—	9.9	—	胴部に沈線3条。	砂粒多く含む。
172	土城50	弥生土器	甕	—	—	—	口縁端部に刻目。内外面ともナデか。	砂粒多く含む。
173	土城50	弥生土器	甕	—	7.0	—		砂粒多く含む。
174	土城51	弥生土器	壺	—	6.7	—	胴部に沈線2条。	砂粒多く含む。
175	土城51	弥生土器	甕	21.6	8.5	21.0	胴部中央から下半にかけてスス付着。	茶褐色粒含む。
176	土城63	弥生土器	壺	17.5	—	—		砂粒多く含む。
177	土城63	弥生土器	壺	21.2	—	—	外面ヘラミガキ。	砂粒多く含む。
178	土城63	弥生土器	甕	—	—	—	内面横ヘラミガキ。	砂粒多く含む。
179	土城63	弥生土器	甕	—	—	—	外面多条沈線。	砂粒多く含む。
180	土城63	弥生土器	甕	—	—	—	内面押圧ナデ。外面横ナデ。	砂粒多く含む。
181	溝36下層	弥生土器	壺	13.6	9.8	25.3	内面体部上半一部ヘラミガキ。	長石・石英・角閃石多。
182	溝36中層	弥生土器	壺	5.6	3.6	9.2	外面ナデとミガキ。	長石・石英・角閃石多。
183	溝36下層	弥生土器	壺	7.0	5.1	9.6	体部内面オサエ・ナデ。	金曇母。
184	溝36中層	弥生土器	壺	13.6	—	—		長石・石英多。
185	溝36上〜中層	弥生土器	壺	—	—	—	口縁部下端に明瞭な段。	長石・石英・角閃石多。
186	溝36中層	弥生土器	壺	—	—	—	外面ナデ。	長石・石英多。
187	溝36中層	弥生土器	壺	—	—	—	頸部に沈線。その下に無軸木葉文。	長石多。
188	溝36上〜中層	弥生土器	壺	—	—	—	無軸木葉文。	長石多。
189	溝36上〜中層	弥生土器	壺	—	—	—	無軸木葉文。	長石・石英多。
190	溝36下層	弥生土器	壺	—	—	—	頸部と肩部にヘラ描き沈線2条。	長石・石英多。
191	溝36上〜中層	弥生土器	壺	—	—	—	肩部に軽い段。沈線2条。	長石・石英多。
192	溝36下層	弥生土器	甕	—	—	—	内面工具による調整か。	長石・石英多。
193	溝36上〜中層	弥生土器	鉢	—	—	—	内外面ヘラミガキ。無文。	角閃石・長石・石英多。
194	溝36	弥生土器	甕	—	—	—		
195	溝36上層	弥生土器	甕	—	—	—	口縁端に刻目なし。	長石・石英多。
196	溝36	弥生土器	甕	—	—	—		長石・石英多。
197	溝38	弥生土器	壺	17.5	—	—	突帯上に沈線2条。	
198	溝38	弥生土器	壺	—	—	—	削り出し突帯上に2条の沈線。	長石・石英多。
199	溝38	弥生土器	鉢	13.8	7.0	17.1	内面オサエ・ナデ。	被熱変色。

土器観察表

掲載 番号	遺構・土層名	種 別	器 種	法量 (cm)			特 徴	備 考
				口 径	底 径	器 高		
200	溝38	弥生土器	甕	-	6.8	-	外面ヘラミガキ。	長石・石英多。
201	溝38	弥生土器	甕	-	5.6	-	外面ハケの後にヘラミガキか。	
202	溝38	弥生土器	甕	-	-	-	外面ヘラ描き沈線文。	霰母多。
203	溝38	弥生土器	甕	-	-	-	胴部ヘラ描き沈線文と刺突列点文。	石英多。
204	溝38	弥生土器	甕	-	-	-	刺突列点文とヘラ描き沈線文。	
205	溝38	弥生土器	甕	-	-	-	ヘラ描き沈線文帯の下端に刺突列点文。	長石多。
206	溝39	弥生土器	甕	-	-	-	口縁端に刻目。	金雲母。
207	溝39	弥生土器	甕	-	-	-	口縁端に刻目。	長石多。
208	溝39床直上	弥生土器	壺?	-	6.6	-	外面ヘラミガキ。	
209	溝44	弥生土器	壺	9.1	-	-	胴部上半に2・4・4条の沈線。	
210	溝44	弥生土器	壺	-	4.0	-	胴部上半に2・2条の沈線。	
211	溝44	弥生土器	壺	-	-	-	胴部上半に2条の沈線。	
212	溝44	弥生土器	壺	12.4	-	-	内外面ヘラ磨き。	
213	溝44	弥生土器	壺	-	-	-	3条の沈線。内外面ヘラ磨き。	
214	溝44	弥生土器	壺	14.0	-	-		
215	溝44	弥生土器	壺	16.4	-	-	削り出し突帯。	
216	溝44	弥生土器	壺	-	-	-	有軸木葉文。	
217	溝44	弥生土器	壺	-	-	-	胴部に2条の沈線。胴上半にヘラ描き。	
218	溝44	弥生土器	壺	-	-	-	胴部に3条の沈線。	
219	溝44	弥生土器	壺	-	8.5	-		結晶片岩多含。
220	溝44	弥生土器	壺	-	8.1	-		
221	溝44	弥生土器	壺	-	7.7	-	内外面ヘラ磨き。	
222	溝44	弥生土器	壺	-	8.6	-	内外面ヘラ磨き。	
223	溝44	弥生土器	甕	31.5	-	-	内外面ヘラ磨き。	
224	溝44	弥生土器	甕	21.4	-	-	口縁端部に刻目。内外面ナデ。	
225	溝44	弥生土器	甕	-	-	-	口縁端部に刻目。内外面ナデ。	結晶片岩含む。
226	溝44	弥生土器	甕	-	-	-	口縁端部に刻目。口縁下1条の沈線。	長石粒多含。
227	溝44	弥生土器	甕	18.8	-	-	口縁端部に刻目。胴部に2条の沈線。	
228	溝44	弥生土器	甕	-	-	-	口縁端部に刻目。胴部に2条の沈線。	長石粒多含。
229	溝44	弥生土器	甕	-	-	-	口縁端部に刻目。胴部2条の沈線に刺突。	長石粒多含。
230	溝44	弥生土器	甕	20.6	-	-	口縁端部に刻目。胴部に3条1組の沈線。	
231	溝44	弥生土器	甕	-	-	-	口縁端部に刻目。3条の沈線。	石英粒多含。
232	溝44	弥生土器	甕	-	5.6	-	内外面ナデ?。	長石粒多含。
233	弥生時代前期柱穴	弥生土器	壺	17.0	-	-	内外面ヘラミガキ。	長石多。
234	弥生時代前期柱穴	弥生土器	壺?	-	-	-	外面ヨコナデ。	
235	弥生時代前期土壇	弥生土器	蓋	24.9	5.4	7.9	天井面一定方向のヘラミガキ。	
236	弥生時代前期土壇	弥生土器	蓋	-	-	-	外面ヘラミガキ。	長石・石英多。
237	弥生時代前期柱穴	弥生土器	鉢	-	-	-	外面ヘラミガキ。内面ナデ。	
238	弥生時代前期柱穴	弥生土器	甕	-	-	-	口縁端刻目。	
239	弥生時代前期柱穴	弥生土器	甕	-	-	-	口縁端刻目。	

百間川沢田遺跡3

掘壕 番号	遺構・土層名	種別	器種	法量 (cm)			特 徴	備 考
				口 径	底 径	器 高		
240	弥生時代前期土壌	弥生土器	甕	—	—	—	口縁端刻目。	金雲母。
241	弥生時代前期柱穴	弥生土器	甕	18.1	—	—	肩部に段あり。	長石・石英多。
242	弥生時代前期柱穴	弥生土器	甕	—	6.1	—	体部下端押圧痕。	
243	弥生時代前期柱穴	弥生土器	甕	—	8.0	—	底面ヘラミガキ。	橙褐色砂粒多。
244	弥生時代前期柱穴	弥生土器	壺	—	—	—	頸部に沈線1条。	長石・石英多。
245	弥生時代前期柱穴	弥生土器	壺	—	—	—	肩部に沈線1条。	長石・赤色粒多。
246	弥生時代前期柱穴	弥生土器	壺	—	—	—	沈線の上下に重弧文。	長石・石英多。
247	弥生時代前期柱穴	弥生土器	壺	—	8.6	—		長石・石英多。
248	弥生時代前期柱穴	縄文土器	深鉢	—	—	—	口縁端に刻目。	金雲母。
249	弥生時代前期土壌	縄文土器	浅鉢	—	—	—	内面ミガキ。	ち密。
250	竪穴住居9床直上	土師器	壺	22.2	—	—	口縁部外面ヨコナデ。	長石・石英多。
251	竪穴住居9	土師器	壺	18.1	—	—		長石・石英・雲母多。
252	竪穴住居9床直上	土師器	壺	—	—	—	二重口縁か。	長石多。
253	竪穴住居9床直上	土師器	鉢	7.8	—	—	頸部外面に爪跡。	水こし粘土。
254	竪穴住居9	土師器	鉢	9.8	—	—		水こし粘土。
255	竪穴住居9	土師器	鉢	12.6	—	5.9	体部内外面ヘラミガキ。	赤色粒多。
256	竪穴住居9	土師器	鉢	10.9	—	5.9	底部付近外面ヘラ削り。	水こし粘土。
257	竪穴住居9	土師器	鉢	14.0	—	—		長石多。
258	竪穴住居9床直上	土師器	鉢	14.0	—	5.3		赤色粒多。
259	竪穴住居9床直上	土師器	鉢	37.2	—	—	内面ヘラケズリの後ハケ。	長石・石英・角閃石多。
260	竪穴住居9土壌内	土師器	鉢	39.2	—	—	口縁端は面をなす。	長石・石英・角閃石多。
261	竪穴住居9床直上	土師器	甕	16.2	—	—		長石・雲母多。
262	竪穴住居9	土師器	甕	15.3	—	—	肩部に刺突文1点。	長石・石英・雲母多。
263	竪穴住居9床直上	土師器	高杯	23.9	—	—	外面に軽い指頭圧痕。	水こし粘土。
264	竪穴住居9	土師器	器台	—	17.6	—	内面ヘラケズリか。	長石・石英多。
265	竪穴住居9	土師器	高杯	13.6	—	—		赤色粒多。
266	竪穴住居10	土師器	甕	15.0	—	21.1	体部内面上半強いナデ。	
267	竪穴住居10	土師器	甕	12.5	—	—	口縁部外面粘土継接合痕。	長石・角閃石多。
268	竪穴住居10上層	土師器	壺	12.4	—	—		橙色砂粒多。
269	竪穴住居10	土師器	壺	10.0	—	—		水こし粘土。
270	竪穴住居10床面	土師器	壺	—	—	—		ち密。
271	竪穴住居10	土師器	甕	14.1	—	—		
272	竪穴住居10上層	土師器	甕	15.6	—	—		ち密。
273	竪穴住居10	土師器	甕	14.4	—	—	口縁端に内横面。	長石・石英多。
274	竪穴住居10	土師器	甕	—	—	—	口縁端に内横面。体部内面オサエ・ナデ。	長石・角閃石多。
275	竪穴住居10	土師器	甕	15.4	—	—	体部外面ナデの後に粗くヘラミガキ。	
276	竪穴住居10	土師器	鉢	—	—	—	外底面は面取り状のヘラケズリ。	水こし粘土。
277	竪穴住居10	土師器	鉢	3.9	—	2.9		手捏。
278	竪穴住居10	土師器	鉢	3.6	—	3.4		水こし粘土。手捏。
279	竪穴住居10	土師器	鉢	4.5	—	3.8		水こし粘土。手捏。

土器観察表

掲載 番号	遺構・土層名	種 別	器 種	法量 (cm)			特 徴	備 考
				口 径	底 径	器 高		
280	竪穴住居10	土師器	鉢	3.6	-	3.8		水こし粘土。手捏。
281	竪穴住居10	土師器	鉢	4.4	-	4.0		水こし粘土。手捏。
282	竪穴住居10	土師器	鉢	4.8	4.5	5.1		水こし粘土。手捏。
283	竪穴住居10上層	土師器	鉢	-	5.4	-	内外面ナデ。	製塩土器。
284	竪穴住居10	土師器	鉢	16.8	-	-	内面ヨコナデ。	長石多。
285	竪穴住居10	土師器	高杯	-	12.9	-	杯部・裾部との境に指頭圧痕。	長石・赤色粒多。
286	竪穴住居10	土師器	高杯	-	-	-	杯部のへそ残存。	水こし粘土か。
287	竪穴住居10上層	土師器	高杯	-	-	-	外面ナデ。	長石多。
288	竪穴住居10上層	土師器	高杯	16.0	-	-	外面杯底部面取り状ヘラケズリ。	
289	竪穴住居10	土師器	高杯	18.6	-	-		
290	竪穴住居10	土師器	高杯	23.5	-	-		長石・石英多。
291	竪穴住居10	土師器	器台	15.9	-	-		水こし粘土。
292	竪穴住居11	土師器	甕	13.6	-	-	肩部刺突文3点。	砂粒多。
293	竪穴住居11	土師器	高杯	21.5	-	-	ハケの後にヘラミガキ。	水こし粘土。
294	竪穴住居11	土師器	高杯	-	15.7	-	杯底部穿孔。	
295	竪穴住居12	土師器	甕	-	-	-		
296	竪穴住居12	土師器	高杯	15.4	-	-		水こし粘土。
297	竪穴住居12	土師器	器台	-	11.6	-	杯底部穿孔。	水こし粘土。
298	竪穴住居14	土師器	壺	-	-	-		水こし粘土。
299	竪穴住居14土城内	土師器	壺	-	-	-	内面ハケとナデ。	水こし粘土。
300	竪穴住居14土城内	土師器	甕	-	-	-		長石多。
301	竪穴住居14	土師器	高杯	20.3	-	-		ち密。金雲母。
302	竪穴住居14	土師器	高杯	-	-	-		水こし粘土。
303	竪穴住居14	土師器	高杯	-	-	-		水こし粘土。
304	竪穴住居14	土師器	高杯	14.3	-	-	内面ハケの後にヘラミガキ。	ち密。
305	竪穴住居14	土師器	高杯	-	-	-	外面横方向のヘラミガキ。	水こし粘土。
306	竪穴住居14	土師器	高杯	-	15.6	-		ち密。
307	竪穴住居15柱穴内	土師器	壺	2.7	-	3.6		手捏。
308	竪穴住居15	土師器	鉢	8.9	-	-	口縁内外面ハケ。	長石多。
309	竪穴住居15	土師器	鉢	9.3	-	-		
310	竪穴住居15柱穴内	土師器	鉢	10.0	-	-	体部内面強いナデ。	金雲母。
311	竪穴住居15	土師器	甕	11.1	-	-		
312	竪穴住居15	土師器	甕	12.2	-	-		
313	竪穴住居15	土師器	甕	12.0	-	-		
314	竪穴住居15	土師器	甕	13.8	-	-		ち密。
315	竪穴住居15	土師器	甕	14.9	-	-	口縁端内面肥厚。	
316	竪穴住居15	土師器	高杯	13.8	-	-	底部ナデ。体部内面かすかにハケ目。	ち密。
317	竪穴住居15	土師器	高杯	18.6	-	-		水こし粘土か。
318	竪穴住居15	土師器	高杯	18.0	-	-		
319	竪穴住居15柱穴内	土師器	高杯	12.2	-	-	口縁部立ちあがりなし。	精製粘土。

百間川沢田遺跡 3

掲載 番号	遺構・土層名	種 別	器 種	法量 (cm)			特 徴	備 考
				口 径	底 径	器 高		
320	竪穴住居15	土師器	高杯	-	-	-		水こし粘土。
321	竪穴住居15	土師器	高杯	-	-	-		
322	竪穴住居15	土師器	高杯	-	-	-	内面絞り痕。	水こし粘土。
323	竪穴住居15	土師器	高杯	-	8.0	-		水こし粘土。
324	竪穴住居15	土師器	高杯	-	-	-	内面オサエ。絞り痕。	金雲母。
325	竪穴住居15	土師器	高杯	-	-	-		ち密。
326	竪穴住居15	土師器	高杯	-	11.0	-		水こし粘土。
327	竪穴住居15	土師器	高杯	-	11.8	-		
328	竪穴住居17	土師器	壺	-	-	-	内外面破ナデ。	
329	竪穴住居17	土師器	甕	-	-	-	口縁外面櫛描沈線。	茶褐色粒含む。
330	竪穴住居17	土師器	甕	-	-	-	口縁外面櫛描沈線。	
331	竪穴住居18	土師器	甕	14.0	-	-	胴外面ハケ後タテヘラミガキ。	
332	竪穴住居18	土師器	甕	-	-	-	口縁外面櫛描沈線。	茶褐色粒含む。
333	竪穴住居18	土師器	甕	14.6	-	-	口縁外面櫛描沈線。	
334	竪穴住居18	土師器	甕	-	-	-		
335	竪穴住居19	土師器	甕	14.4	-	-	口縁外面櫛描沈線。	
336	竪穴住居20	土師器	甕	14.4	-	-	胴外面タタキ。	砂粒多く含む。
337	竪穴住居20	土師器	鉢	30.0	-	-	胴外面タテハケメ。	
338	竪穴住居20	土師器	高杯	-	-	-	内外面横ヘラミガキ。	水こし粘土。
339	竪穴住居20	土師器	高杯	-	10.0	-		砂粒わずかに含む。
340	建物 5 南西柱穴	土師器	鉢	14.4	-	-	口縁部ヨコナデの後ヘラミガキ。	長石・雲母多。
341	建物 8	土師器?	高杯	-	15.0	-	外面ヘラミガキカ。	水こし粘土。
342	井戸 3 2層	土師器	壺	23.2	-	-	口頸部ヨコナデ。	長石・石英多。
343	井戸 3 3層	土師器	壺	19.6	-	-	口縁部内側へ肥厚。	長石・石英・雲母多。
344	井戸 3 2層	土師器	壺	16.7	-	-		石英多。
345	井戸 3	土師器	鉢	11.6	-	-	内面工具の当たり痕。	鬚母・赤色粒多。
346	井戸 3	土師器	甕	12.8	-	19.5	肩部に刺突文。横並びに3点。	長石・石英多。
347	井戸 3 4~6層	土師器	甕	13.6	-	23.3	肩部に刺突文1点。	長石・石英・雲母多。
348	井戸 3 6層	土師器	甕	16.8	-	-	口縁端部内面に肥厚。	角閃石多。
349	井戸 3 5層	土師器	甕	-	-	-	口縁端部内面へかすかに肥厚。	長石・石英・雲母多。
350	井戸 3 2層	土師器	鉢	-	-	-	口縁端部内面に肥厚。	長石・角閃石・雲母多。
351	井戸 3 2層	土師器	鉢	-	-	-	体部外面ハケ。	長石・石英・雲母多。
352	井戸 3 2層	土師器	鉢	-	-	-		長石・雲母多。
353	井戸 3 上部	土師器	高杯	-	-	-		長石・雲母多。
354	井戸 3 3層	土師器	高杯	-	-	-	外面裾部との境に爪跡。	石英・赤色粒多。
355	井戸 4 第1層	土師器	甕	13.3	-	17.7		金雲母。
356	井戸 4 第3層	土師器	甕	12.6	-	18.7	縦ハケの後横ハケ。	褐色砂粒多。
357	井戸 4 第3層	土師器	甕	14.0	-	-	肩部に刺突文。横に2点。	
358	井戸 4 第3層	土師器	甕	13.7	-	-		
359	井戸 4 第1層	土師器	甕	-	-	-	口縁端内面肥厚。	金雲母多。

土器観察表

掲載 番号	遺構・土層名	種 別	器 種	法 尺 (cm)			特 徴	備 考
				口 径	底 径	器 高		
360	井戸4第1層	土師器	甕	-	-	-	内面に工具の当たり痕。	長石・石英多。
361	井戸4第3層	土師器	鉢	14.3	-	-	外面縦方向のひび割れ多。	長石多。
362	井戸4第3層	土師器	鉢	10.3	-	7.0	体部内面オサエ・ナデ。	雲母多。
363	井戸4第3層	土師器	鉢	11.7	-	7.5		
364	井戸4第1層	土師器	高杯	15.9	-	-	外面に粘土紐の接ぎ目。	水こし粘土。
365	井戸4第1層	土師器	高杯	-	12.0	-	内外面ヨコナデ。	金雲母。
366	井戸4第3層	土師器	器台	8.2	-	-		水こし粘土。
367	井戸4第1層	土師器	器台	-	-	-		水こし粘土。
368	井戸4第3層	土師器	器台	8.7	-	-	杯底部穿孔。	
369	井戸4第1層	土師器	器台	-	11.3	-	脚端面明瞭。	金雲母。
370	井戸5第4b層	土師器	壺	-	-	-		
371	井戸5第1・2層	土師器	鉢	-	-	-		水こし粘土。
372	井戸5第4b層	土師器	壺	-	-	-	内面ヨコナデの後にヘラミガキ。	
373	井戸5第4b層	土師器	高杯	14.2	-	-	杯底部接合部にへそ。	水こし粘土。
374	井戸5第1・2層	土師器	高杯	-	-	-	外面面取り状ヘラミガキ。	水こし粘土。
375	井戸5	土師器	高杯	-	-	-	外面ナデ。	水こし粘土。
376	井戸5第1・2層	土師器	器台	-	9.7	-		ち密。
377	井戸5第2層底	土師器	甕	12.7	-	23.1	体部下外面ナデ。肩部に刺突文1点。	
378	井戸5第1・2層	土師器	甕	12.5	-	-	体部下外面ナデ。	
379	井戸5第4層	土師器	甕	12.8	-	-	頸部に工具の当たり痕。	
380	井戸5第1・2層	土師器	甕	12.2	-	-		
381	井戸5第5層底	土師器	甕	13.3	-	21.7		金雲母。
382	井戸5第2層底	土師器	甕	14.3	-	-		
383	井戸5第4b層	土師器	甕	11.8	-	20.0	体部内面下半ヘラケズリの後にナデ。	長石多。
384	井戸5第1・2層	土師器	甕	-	-	-	口縁外面に波状文か。	水こし粘土。
385	井戸5	土師器	甕	-	-	-		ち密。
386	井戸5第1・2層	土師器	鉢	42.2	-	-	体部内面ヘラミガキ。	
387	井戸6第7b層	土師器	甕	12.7	-	19.6	煤多量に付着。	金雲母。雲母多。
388	井戸6第7b層	土師器	甕	14.1	-	25.4	肩部にタタキ目らしい痕跡あり。	金雲母。角閃石多。
389	井戸6第7b層	土師器	甕	13.6	-	25.7	口縁外面ハケ状工具調整。	ち密。
390	井戸6第7b層	土師器	甕	13.9	-	23.1	肩部刺突文1点。	
391	井戸6第7b層	土師器	甕	13.8	-	-		長石多。
392	井戸6第7b層	土師器	甕	13.9	-	25.0	体部内面ヘラケズリ。	ち密。
393	井戸6第1・2層	土師器	壺	-	-	-		金雲母。
394	井戸6第2層	土師器	壺	-	-	-	頸部突帯上櫛状工具の刺突文。	
395	井戸6第2層	土師器	壺	-	-	-		ち密。
396	井戸6第3層	土師器	壺	-	-	-		
397	井戸6第2層	土師器	壺	-	-	-	外面ナデか。	雲母多。金雲母。
398	井戸6第2層	土師器	鉢	-	-	-	ハケの後にヘラミガキ。	
399	井戸6第2層	土師器	壺	-	-	-		金雲母。

百間川沢田遺跡3

掲載 番号	遺構・土層名	種別	器種	法量 (cm)			特 徴	備 考
				口 径	底 径	器 高		
400	井戸6第3層	土師器	鉢	-	3.6	-	底面にヘラ傷。	
401	井戸6第1・2層	土師器	鉢	-	3.7	-		製塩土器。
402	井戸6	土師器	鉢	-	4.0	-		長石・石英多。製塩土器。
403	井戸6第2層	土師器	鉢	40.1	-	-	口縁内外面暗文風ヘラミガキ。	雲母・角閃石多。
404	井戸6第4層	土師器	壺	-	-	-		ち密。
405	井戸6第4層	土師器	高杯	18.2	-	-		ち密。
406	井戸6第2層	土師器	高杯	17.0	-	-		水こし粘土か。
407	井戸6第3層	土師器	高杯	-	-	-	杯底部小穿孔。	ち密。
408	井戸6第2層	土師器	高杯	-	-	-		水こし粘土。
409	井戸6第2層	土師器	甕	11.8	-	14.1	体部外面上半ハケ。下半ヘラミガキ。	
410	井戸6第3層	土師器	甕	-	-	-	体部内面ヘラケズリ。	金雲母多。
411	井戸6第1・2層	土師器	脚	-	9.4	-		ち密。
412	井戸6第2層	土師器	壺	24.0	-	-	ハケ粗細2種あり。	金雲母多。
413	井戸8	土師器	甕	13.4	-	-	胴外面下半はナデ。	
414	井戸8	土師器	甕	11.8	-	17.6	胴下半外面タテヘラミガキ。	茶褐色粒含む。
415	井戸8	土師器	鉢	-	-	-		角閃石含む。
416	井戸9	土師器	壺	19.4	-	-	内外面とも横ナデ。	
417	土壌65 6～9層	土師器	壺	16.0	-	-		長石・石英多。
418	土壌65 灰炭層	土師器	鉢	11.3	-	-	内面ナデ。	長石・角閃石多。
419	土壌65 7層	土師器	鉢	-	-	-	外面体部上半ハケの後ヘラミガキ。	
420	土壌65 7層	土師器	鉢	15.0	3.7	7.8	体部外面ヘラケズリの後ヘラミガキ。	長石・石英多。
421	土壌65 7層	土師器	甕	10.6	-	12.9	肩部に鋸歯文状の文様。	長石・角閃石多。
422	土壌65 7層	土師器	甕	14.1	-	-		金雲母。
423	土壌65 7層	土師器	甕	14.8	-	-	肩部に刺突文3点。	長石・石英・角閃石多。
424	土壌65 5～7層	土師器	甕	14.4	-	-		長石・石英多。
425	土壌65 7層	土師器	甕	18.7	7.9	34.6	体部内面ヘラケズリの後オサエ・ナデ。	長石・石英・角閃石多。
426	土壌65 5～7層	土師器	高杯	19.1	16.0	13.9	口縁部内外面ヨコナデ。	長石・石粒多。
427	土壌70	土師器	甕	13.4	-	-	口縁端つまみ上げ。	茶褐色砂粒多。
428	建物14柱穴	土師器	杯	-	-	-	口縁内面下端に段。	水こし粘土。雲母多。
429	建物16柱穴	須恵器	杯	-	10.8	-	底部内面仕上げナデ。	ち密。
430	井戸10	土師器	甕	11.7	-	15.9	胴外面ハケ後横ヘラミガキ。	
431	井戸10	土師器	甕	17.6	-	-		砂粒多く含む。
432	井戸10	土師器	甕	16.6	-	-	胴部内面ヘラミガキ。	
433	井戸10	土師器	杯	14.3	-	-	内外面とも丹塗り。	
434	井戸10	土師器	杯	12.8	-	-	内外面丹塗り。	
435	井戸10	土師器	杯	13.0	10.7	2.9	内外面横ナデ。丹塗り。	赤褐色粒含む。
436	井戸10	土師器	杯	12.7	9.6	3.2	内外面丹塗り。	
437	井戸10	土師器	杯	16.1	12.3	3.3	内外面丹塗り。	赤褐色粒含む。
438	井戸10	土師器	皿	14.6	14.0	1.7	内外面丹塗り。	
439	井戸10	土師器	杯	-	9.4	-	内外面丹塗り。	

土器観察表

掲載 番号	遺構・土層名	種 別	器 種	法量 (cm)			特 徴	備 考
				口 径	底 径	器 高		
440	井戸10	須恵器	甕	20.3	—	—		
441	井戸10	須恵器	鉢	—	—	—		
442	井戸10	須恵器	杯	13.0	9.1	4.0	体部内外面横ナデ。	
443	井戸10	須恵器	杯	12.8	7.8	3.0	体部内外面横ナデ。	
444	井戸10	須恵器	杯	10.0	—	—		
445	井戸10	須恵器	杯	18.2	14.2	7.3	体部内外面横ナデ。	
446	土壌71	土師器	小皿	7.8	5.2	1.3	底面板目圧痕。	精製粘土。
447	土壌71	土師器	碗	—	—	—	内黒土器 (内面黒褐色)。	砂粒を含む。
448	土壌74	土師器	碗	12.1	—	—		砂粒を含む。
449	土壌74	土師器	碗	12.9	5.9	4.5		砂粒を含む。
450	土壌75	土師器	碗	12.5	5.8	4.0		砂粒を含む。
451	土壌76	土師器	碗	11.9	5.7	4.0		砂粒を含む。
452	土壌77	土師器	碗	11.4	5.7	3.3		砂粒を含む。
453	土壌77	土師器	碗	11.6	5.0	3.8		砂粒を含む。
454	土壌77	土師器	碗	12.0	5.1	3.9		精製粘土。
455	土壌77	土師器	碗	12.3	5.3	4.2	体部外面押圧痕。	砂粒を含む。
456	土壌77	土師器	碗	—	5.7	—		砂粒を含む。
457	土壌78	土師器	碗	11.9	7.0	4.0	口縁部と体部境に段。	精製粘土。
458	土壌78	土師器	碗	11.8	5.2	3.7		砂粒を含む。
459	土壌85	縄文土器	深鉢	28.0	—	—	刻目突帯。	
460	土壌85	縄文土器	深鉢	—	—	—	刻目突帯。	茶褐色粒含む。
461	土壌85	縄文土器	深鉢	—	—	—	刻目突帯。	砂粒多く含む。
462	土壌85	縄文土器	深鉢	—	—	—	頸部にヘラ描文。頸部と胴部の境に沈線。	砂粒多く含む。
463	土壌85	縄文土器	浅鉢	—	—	—	内面ミガキ。外面ナデ。	砂粒多く含む。
464	旧河道西岸微高地斜面	縄文土器	深鉢	—	—	—	口縁端面押圧文。内面ヘラミガキ。	
465	旧河道西岸微高地斜面	縄文土器	深鉢	—	—	—	口縁端面刻目文。貼り付け突帯指頭押圧文。	金雲母他。
466	旧河道西岸微高地斜面	縄文土器	深鉢	—	—	—	外面下半ヘラケズリ。内面下半ヘラミガキ。	石英他。
467	206~208-L・M灰黒色粘土層	縄文土器	深鉢	—	—	—	刻目突帯。	
468	206~208-L・M灰黒色粘土層	縄文土器	深鉢	—	—	—	口縁端部に刻目。刻目突帯。	内傾接合。
469	206~208-L・M灰黒色粘土層	縄文土器	深鉢	—	—	—	刻目突帯。	内傾接合。
470	206~208-L・M灰黒色粘土層	縄文土器	深鉢	—	—	—	刻目突帯。頸部にヘラ描文。	
471	206~208-L・M灰黒色粘土層	縄文土器	深鉢	—	—	—	刻目突帯。頸部にヘラ描文。	角閃石含む。
472	206~208-L・M灰黒色粘土層	縄文土器	深鉢	—	—	—	刻目突帯。頸部にヘラ描文。	
473	206~208-L・M灰黒色粘土層	縄文土器	壺?	—	—	—	頸部下端に段。	
474	206~208-L・M灰黒色粘土層	縄文土器	深鉢	—	—	—	刻目突帯。胴外面ケズリ。	
475	206~208-L・M灰黒色粘土層	縄文土器	深鉢	—	—	—	口縁端部に刻目。刻目突帯。	
476	206~208-L・M灰黒色粘土層	弥生土器	壺	—	—	—	口縁端部刻目。口縁下に3条の沈線。	
477	207~208-L・M灰黒色粘土層	縄文土器	深鉢	—	—	—	波状に縁。口縁端部内面刻目。	
478	207~208-L・M灰黒色粘土層	縄文土器	深鉢	—	—	—	波状口縁。刻目突帯。頸部にはヘラ描文。	
479	207~208-L・M灰黒色粘土層	縄文土器	深鉢	—	—	—	口縁端部刻目。刻目突帯。頸部にはヘラ描文。	

百間川沢田遺跡 3

地畝 番号	遺構・土層名	種 別	器 種	法量 (cm)			特 徴	備 考
				口 径	底 径	器 高		
480	207~208-L・M灰黒色 粘土層	縄文土器	深鉢	-	-	-	口縁端部刻目。刻目突帯。頸部には ヘラ描文。	
481	207~208-L・M灰黒色 粘土層	縄文土器	深鉢	-	-	-	口縁端部刻目。刻目突帯。頸部にヘ ラ描文。	
482	207~208-L・M灰黒色 粘土層	縄文土器	深鉢	-	-	-	刻目突帯。口縁部内面に沈線。	
483	207~208-L・M灰黒色 粘土層	縄文土器	深鉢	-	-	-	刻目突帯。	
484	207~208-L・M灰黒色 粘土層	縄文土器	深鉢	-	-	-	刻目突帯。頸部にヘラ描文。	
485	207~208-L・M灰黒色 粘土層	縄文土器	深鉢	-	-	-	刻目突帯。頸部にヘラ描文。	砂粒多く含む。
486	207~208-L・M灰黒色 粘土層	縄文土器	深鉢	-	-	-	刻目突帯。頸部にヘラ描文。	砂粒多く含む。
487	207~208-L・M灰黒色 粘土層	縄文土器	深鉢	-	-	-	刻目突帯。頸部沈線。	
488	207~208-L・M灰黒色 粘土層	縄文土器	深鉢	-	-	-	頸部にヘラ描文。	突帯剝離。
489	207~208-L・M灰黒色 粘土層	縄文土器	深鉢	-	-	-	口縁端部に刻目。刻目突帯。	砂粒多く含む。
490	207~208-L・M灰黒色 粘土層	縄文土器	深鉢	-	-	-	刻目突帯。頸部と胴部の境に沈線。	
491	207~208-L・M灰黒色 粘土層	縄文土器	深鉢	-	-	-	刻目突帯。頸部と胴部の境に沈線。	
492	207~208-L・M灰黒色 粘土層	縄文土器	深鉢	-	-	-	刻目突帯。口縁内面沈線。	
493	207~208-L・M灰黒色 粘土層	縄文土器	深鉢	-	-	-	刻目突帯。	
494	207~208-L・M灰黒色 粘土層	縄文土器	深鉢	-	-	-	刻目突帯。	
495	207~208-L・M灰黒色 粘土層	縄文土器	深鉢	-	-	-	刻目突帯。	
496	207~208-L・M灰黒色 粘土層	縄文土器	深鉢	-	-	-	刻目突帯。	
497	207~208-L・M灰黒色 粘土層	縄文土器	深鉢	-	-	-	刻目突帯。	
498	207~208-L・M灰黒色 粘土層	縄文土器	深鉢	-	-	-	刻目突帯。	
499	207~208-L・M灰黒色 粘土層	縄文土器	深鉢	-	-	-	刻目突帯。	赤褐色粒含む。
500	207~208-L・M灰黒色 粘土層	縄文土器	深鉢	-	-	-	刻目突帯。	
501	207~208-L・M灰黒色 粘土層	縄文土器	深鉢	-	-	-	刻目突帯。	茶褐色粒含む。
502	207~208-L・M灰黒色 粘土層	縄文土器	深鉢	-	-	-	口縁端部刻目。刻目突帯。	
503	207~208-L・M灰黒色 粘土層	縄文土器	深鉢	-	-	-	刻目突帯。	
504	207~208-L・M灰黒色 粘土層	縄文土器	深鉢	-	-	-	刻目突帯。	
505	207~208-L・M灰黒色 粘土層	縄文土器	深鉢	-	-	-	刻目突帯。	
506	207~208-L・M灰黒色 粘土層	縄文土器	深鉢	-	-	-	刻目突帯。	砂粒多く含む。
507	207~208-L・M灰黒色 粘土層	縄文土器	深鉢	-	-	-	刻目突帯。	
508	207~208-L・M灰黒色 粘土層	縄文土器	深鉢	-	-	-	刻目突帯。	
509	207~208-L・M灰黒色 粘土層	縄文土器	深鉢	-	-	-	刻目突帯。	
510	207~208-L・M灰黒色 粘土層	縄文土器	深鉢	-	-	-	刻目突帯。	砂粒多く含む。
511	207~208-L・M灰黒色 粘土層	縄文土器	深鉢	-	-	-	刻目突帯。	
512	207~208-L・M灰黒色 粘土層	縄文土器	深鉢	-	-	-	刻目突帯。	砂粒多く含む。
513	207~208-L・M灰黒色 粘土層	縄文土器	深鉢	-	-	-	刻目突帯。	
514	207~208-L・M灰黒色 粘土層	縄文土器	深鉢	-	-	-	刻目突帯。	砂粒多く含む。
515	207~208-L・M灰黒色 粘土層	縄文土器	深鉢	-	-	-	刻目突帯。	
516	207~208-L・M灰黒色 粘土層	縄文土器	深鉢	-	-	-	刻目突帯。	
517	207~208-L・M灰黒色 粘土層	縄文土器	深鉢	-	-	-	刻目突帯。	砂粒多く含む。
518	207~208-L・M灰黒色 粘土層	縄文土器	深鉢	-	-	-	刻目突帯。	
519	207~208-L・M灰黒色 粘土層	縄文土器	深鉢	-	-	-	刻目突帯。	

土器観察表

掲載番号	遺構・土層名	種別	器種	法量 (cm)			特徴	備考
				口径	底径	器高		
520	207~208-L・M灰黒色粘土層	縄文土器	深鉢	-	-	-	刻目突帯。外面ケズリ。	砂粒多く含む。
521	207~208-L・M灰黒色粘土層	縄文土器	深鉢	-	-	-	刻目突帯。	砂粒多く含む。
522	207~208-L・M灰黒色粘土層	縄文土器	深鉢	-	-	-		内傾接合。砂粒多く含む。
523	207~208-L・M灰黒色粘土層	縄文土器	深鉢	-	-	-	口縁部刻目突帯。頸部へラ描文。	砂粒多く含む。
524	207~208-L・M灰黒色粘土層	縄文土器	深鉢	-	-	-	口縁部刻目突帯。頸部へラ描文。	
525	207~208-L・M灰黒色粘土層	縄文土器	深鉢	-	-	-	頸部にへラ描文。	
526	207~208-L・M灰黒色粘土層	縄文土器	深鉢	-	-	-	頸部にへラ描文。	砂粒多く含む。
527	207~208-L・M灰黒色粘土層	縄文土器	深鉢	-	-	-	頸部にへラ描文。	砂粒多く含む。
528	207~208-L・M灰黒色粘土層	縄文土器	深鉢	-	-	-	頸部にへラ描文。頸部と胴部の境に沈線。	砂粒多く含む。
529	207~208-L・M灰黒色粘土層	縄文土器	深鉢	-	-	-	頸部にへラ描文。頸部と胴部の境に沈線。	
530	207~208-L・M灰黒色粘土層	縄文土器	深鉢	-	-	-	頸部にへラ描文。頸部と胴部の境に沈線。	
531	207~208-L・M灰黒色粘土層	縄文土器	深鉢	-	-	-	頸部と胴部の境に沈線。	
532	207~208-L・M灰黒色粘土層	縄文土器	深鉢	-	-	-	頸部と胴部の境に沈線。	砂粒多く含む。
533	207~208-L・M灰黒色粘土層	弥生土器	壺?	-	-	-	貼付突帯2条。	赤褐色粒含む。
534	207~208-L・M灰黒色粘土層	縄文土器	壺	-	-	-		
535	207~208-L・M灰黒色粘土層	縄文土器	壺	-	-	-	内外面ミガキ。	
536	207~208-L・M灰黒色粘土層	縄文土器	壺	-	-	-	内外面ミガキ。	
537	207~208-L・M灰黒色粘土層	縄文土器	壺	-	-	-	内外面ミガキ。	
538	207~208-L・M灰黒色粘土層	縄文土器	壺	-	-	-	内外面ミガキ?。	
539	207~208-L・M灰黒色粘土層	縄文土器	壺	-	-	-		
540	207~208-L・M灰黒色粘土層	縄文土器	壺	-	-	-		砂粒少ない。
541	207~208-L・M灰黒色粘土層	縄文土器	壺	-	-	-		
542	207~208-L・M灰黒色粘土層	縄文土器	壺	-	-	-		
543	207~208-L・M灰黒色粘土層	縄文土器	壺	-	-	-	頸部下端に段。	
544	207~208-L・M灰黒色粘土層	縄文土器	浅鉢	-	-	-	内外面ミガキ。	
545	207~208-L・M灰黒色粘土層	縄文土器	浅鉢	-	-	-	外面ナデ。内面ミガキ。	
546	207~208-L・M灰黒色粘土層	縄文土器	浅鉢	-	-	-	内外面ミガキ。	
547	207~208-L・M灰黒色粘土層	縄文土器	浅鉢	-	-	-	頸部下端に沈線。	
548	207~208-L・M灰黒色粘土層	縄文土器	浅鉢	-	-	-	外面ミガキ。	
549	207~208-L・M灰黒色粘土層	縄文土器	浅鉢	-	-	-	口縁部内面に沈線2条。	砂粒多く含む。
550	207~208-L・M灰黒色粘土層	縄文土器	浅鉢	-	-	-	口縁部内面に沈線2条。	
551	207~208-L・M灰黒色粘土層	縄文土器	浅鉢	14.6	-	4.2	内外面ミガキ。	
552	207~208-L・M灰黒色粘土層	縄文土器	浅鉢	16.5	-	-		内傾接合。
553	207~208-L・M灰黒色粘土層	縄文土器	浅鉢	-	-	-	外面ミガキ。内面ナデ。	
554	207~208-L・M灰黒色粘土層	縄文土器	浅鉢	-	-	-	内外面ナデ。	砂粒多く含む。
555	207~208-L・M灰黒色粘土層	縄文土器	浅鉢	-	-	-	内外面ミガキ。	
556	207~208-L・M灰黒色粘土層	縄文土器	深鉢?	-	6.8	-		
557	207~208-L・M灰黒色粘土層	縄文土器	深鉢?	-	11.2	-		
558	207・8-0暗灰色粘土	縄文土器	深鉢	-	-	-	刻目突帯。	
559	207・8-0暗灰色粘土	縄文土器	深鉢	-	-	-	刻目突帯。頸部にへラ描文。	

百間川沢田遺跡 3

掘削 番号	遺構・土層名	種 別	器 種	法 量 (cm)			特 徴	備 考
				口 径	底 径	器 高		
560	207・8-0 暗灰色粘土	縄文土器	深鉢	-	-	-	刻目突帯。頸部にヘラ描文。	
561	207・8-0 暗灰色粘土	縄文土器	深鉢	-	-	-	頸部にヘラ描文。	
562	207・8-0 暗灰色粘土	縄文土器	深鉢	-	-	-	頸部にヘラ描文。	
563	207・8-0 暗灰色粘土	縄文土器	深鉢	-	-	-	胴部に刻目突帯。	
564	207・8-0 暗灰色粘土	縄文土器	壺	13.6	-	-		
565	207・8-0 暗灰色粘土	弥生土器	壺	-	-	-	胴部に3条の沈線。	
566	207・8-0 暗灰色粘土	縄文土器	壺	-	-	-		砂粒多く含む。
567	207・8-0 暗灰色粘土	弥生土器	壺	-	-	-	重弧文。	
568	208・9-W・X包含層	縄文土器	深鉢	-	-	-	口縁端に浅い刻目。	砂粒多い。
569	208・9-W・X包含層	縄文土器	深鉢	-	-	-	口縁端に刻目。内面ミガキ。内面ナデ。	
570	208・9-W・X包含層	縄文土器	深鉢	-	-	-	内外面ミガキ。外面ヘラ描文。	
571	208・9-W・X包含層	縄文土器	浅鉢	-	-	-	端部ナデ。内外面ミガキ。	
572	208・9-W・X包含層	縄文土器	深鉢	35.4	-	-	口縁部内外面ナデ。胴部内面ナデ。	
573	208・9-W・X包含層	弥生土器	壺	-	8.8	-	内外面ヘラミガキ。	砂粒多く含む。
574	前期水田1 覆土	弥生土器	甕	-	-	-	口縁端に刻目。	
575	前期水田1	弥生土器	壺	-	-	-	重弧文。上半ヘラミガキ。	
576	前期水田1	弥生土器	壺	19.0	-	-	2条の沈線の下側に弱い段。	砂粒多く含む。
577	土壌92	弥生土器	無頸壺	8.2	8.0	17.9	口縁部に2個一対の穴。	
578	土壌97	弥生土器	鉢	14.3	6.8	19.1	口縁端部外面に耳状の把手がつく。	砂粒多く含む。
579	土壌99	縄文土器	深鉢	-	-	-	斜行沈線。内外面ナデ。	長石・石英他。
580	土壌99	縄文土器	深鉢	-	-	-	内外面ナデ。	長石・石英・角閃石多。
581	土壌101	弥生土器	壺	21.7	8.5	34.6	頸・肩・腹に刺突列点文とヘラ描き沈線文の文様帯。	金雲母。
582	土壌103	弥生土器	壺	-	-	-	肩部に沈線2条。内外面ナデ。	ち密。金雲母。
583	土壌墓3	弥生土器	壺	-	7.5	-	頸部に沈線6条。	赤褐色粒含む。
584	土壌墓5	弥生土器	壺	13.7	7.9	34.9		
585	土壌墓6	弥生土器	壺	-	6.8	-		砂粒多く含む。
586	土壌墓7	弥生土器		-	-	35.1	多条沈線と円形刺突が交互にめぐ	砂粒多く含む。
587	土壌墓9	弥生土器	壺	15.3	7.3	30.3	外面タテミガキ。底部外面ミガキ。	
588	土壌墓9	弥生土器	蓋と無頸壺	8.1 7.9	- 9.1	4.7 24.9	無頸壺に台がつく。	
589	土壌墓9	弥生土器	壺	8.9	6.6	22.6	外面タテミガキ。	
590	土壌墓9	弥生土器	鉢	14.2	5.7	14.0	外面タテミガキ。	茶褐色粒含む。
591	土壌墓12	弥生土器	壺	-	-	-	外面ヘラミガキ。内面工具による調整。	長石・石英多。
592	溝58	縄文土器	深鉢	-	-	-	刻目突帯。	
593	溝58	縄文土器	深鉢	-	-	-	刻目突帯。	
594	溝58	縄文土器	深鉢	-	-	-	刻目突帯。頸部にヘラ描文。	
595	溝58	縄文土器	深鉢	-	-	-	刻目突帯。頸部にヘラ描文。	
596	溝58	縄文土器	深鉢?	-	-	-	外面ケズリ。	
597	溝58	弥生土器	甕	-	-	-	口縁端部刻目。口縁部下に3条の沈線。	砂粒多く含む。
598	溝58	弥生土器	甕	-	-	-	口縁端部刻目。口縁部下に沈線。	茶褐色粒含む。
599	溝58	縄文土器	壺	-	-	-	外面ヘラミガキ。内面ナデ。	ち密。

土器観察表

掲載番号	遺構・土層名	種別	器種	法量 (cm)			特徴	備考
				口径	底径	器高		
600	中期水田覆土	弥生土器	蓋	9.0	-	2.7	穿孔2個一対。	
601	溝62	縄文土器	深鉢	-	-	-	口縁端部に刻目。刻目突帯。	
602	溝62	縄文土器	深鉢	-	-	-	刻目突帯。頸部にはへら描文。	砂粒多く含む。
603	溝62	弥生土器	甕	16.6	-	-	口縁端部刻目。口縁部下に3条の沈線。	砂粒多く含む。
604	溝62	弥生土器	甕	20.4	-	-	口縁端部刻目。口縁部下に2条の沈線。	角閃石多く含む。
605	溝62	弥生土器	壺	-	-	-	胴部上半に櫛描波状文。	
606	溝62	弥生土器	無頸壺	-	-	-	内外面ナデ。	
607	溝62	弥生土器	無頸壺	8.0	-	-	穿孔2個一対で2方向。外面刺突列点文。	金雲母。
608	溝62	弥生土器	鉢	-	-	-	口縁端部外面に刻目。	砂粒多く含む。
609	溝65	縄文土器	浅鉢	-	-	-	口縁端部に刻目。	砂粒多く含む。
610	溝65	縄文土器	浅鉢	-	-	-	口縁端部を肥厚。	砂粒多く含む。
611	溝65	縄文土器	浅鉢	-	-	-	口縁内面に沈線1条。	砂粒多く含む。
612	溝65	弥生土器	甕	26.8	-	-	口縁端部に刻目。口縁下に沈線2条。	砂粒多く含む。
613	溝65	弥生土器	甕	-	-	-		
614	溝66	弥生土器	甕	14.0	-	-	口縁端部上方へつまむ。	
615	溝66	弥生土器	甕	17.8	-	-	内面へらミガキ。	細砂含む。
616	池状遺構2	弥生土器	甕	16.7	-	-	体部外面ハケの後へらミガキ。	長石・石英多。
617	池状遺構2	弥生土器	甕	-	-	-	体部外面へらミガキか。	金雲母。
618	池状遺構2	弥生土器	甕	-	-	-		長石・石英多。
619	池状遺構2	弥生土器	壺	-	8.5	-	内面工具による調整。	長石・石英多。
620	弥生後期水田大畦下	弥生土器	甕	15.4	-	-	口縁部外面へら描き沈線。	
621	弥生後期水田大畦下	弥生土器	高杯	-	-	-	ヨコナデの後へらミガキ。	水こし粘土。
622	弥生時代後期水田層	弥生土器	高杯	-	-	-	外面へらミガキ。	
623	弥生時代後期水田層	弥生土器	甕	-	-	-		
624	弥生後期洪水砂層	弥生土器	壺	17.9	-	-	頸部内面粘土紐接合痕。口縁内面へらミガキ。	長石・石英多。
625	弥生後期洪水砂層	土師器	壺	-	-	-	体部内面ナデか。	長石・石英多。
626	溝71	弥生土器	甕	-	-	-		
627	溝74	弥生土器	甕	15.4	-	-	口縁内面に浅い凹線2条。	茶褐色粒含む。
628	溝74	弥生土器	甕	17.8	-	-	口縁端に沈線。	
629	溝74	弥生土器	甕	11.0	-	-		
630	溝74	弥生土器	甕	-	-	-	口縁端部に沈線2条。	角閃石含む。
631	溝74	弥生土器	甕	-	-	-	口縁端部に沈線2条。	角閃石含む。
632	溝74	弥生土器	鉢	16.5	5.0	8.1		赤褐色粒含む。
633	溝74	弥生土器	鉢	15.2	-	-		
634	溝74	弥生土器	甕	-	-	-		
635	溝74	弥生土器	甕	-	5.1	-		
636	溝75	弥生土器	壺	8.9	-	-	頸部穿孔2個1対か。	長石・石英多。
637	溝75	弥生土器	台付鉢?	-	9.3	-	外面へらミガキ。脚内面絞り痕。	長石・石英多。
638	溝75	弥生土器	台付壺	-	11.1	-	体部外面縦方向の稜線。	長石・石英多。
639	溝75	弥生土器	甕	12.9	-	-	口縁部折り返し状。	長石・石英多。

百間川沢田遺跡 3

掲載 番号	遺構・土層名	種 別	器 種	法量 (cm)			特 徴	備 考
				口 径	底 径	器 高		
640	溝75	弥生土器	甕	11.9	-	-	口縁端面に沈線 2 条。	長石・石英多。
641	溝75	弥生土器	甕	13.6	-	-	体部外面細かいハケ。	長石・石英多。
642	溝75	弥生土器	鉢	29.8	-	-		長石・石英多。
643	溝75	弥生土器	甕	-	5.3	-	底面未調整。	長石・石英多。
644	溝77	弥生土器	壺	11.0	-	-		長石・石英多。
645	溝77	弥生土器	甕	16.0	-	-	体部内面ヘラケズリ。	長石・石英多。
646	溝77	弥生土器	甕	16.9	-	-	口縁部凹線 2 条。	長石・石英多。
647	溝77	弥生土器	甕	17.6	-	-	口縁端内外に拡張し、沈線 1 条。	長石・石英多。
648	溝77	弥生土器	鉢	9.8	4.9	8.2	体部内外面ナデ。	長石・石英多。
649	溝77	弥生土器	鉢	15.5	-	-	体部内面工具による調整。	長石・石英多。
650	溝77	弥生土器	台付鉢	12.2	5.5	-	脚外面オサエ。体部外面ひび割れ。	長石・石英多。
651	溝77	弥生土器	鉢	-	4.8	-	内面ナデ。	長石・石英多。
652	溝77	弥生土器	鉢	23.1	-	-	体部内面ヘラケズリの後ヘラミガキ。	長石・石英多。
653	溝77	弥生土器	高杯	22.2	-	-	口縁部ヨコナデ。杯部内面ヘラミガキか。	長石・石英多。
654	溝77	弥生土器	高杯	22.6	-	-	口縁部外面ヨコナデ。	長石・石英多。
655	溝77	弥生土器	高杯	14.0	12.2	7.9	口縁部ヨコナデ。	長石・石英多。
656	溝77	弥生土器	壺	9.0	-	-	口縁端ヨコナデ。頸部内面に粘土紐接合痕。	長石・石英多。
657	溝77	弥生土器	高杯	20.8	-	-	口縁部ヨコナデの後ヘラミガキ。	長石・石英多。
658	溝77	弥生土器	高杯	10.8	10.0	6.9	脚部内外面ハケ。	長石・石英多。
659	溝80	弥生土器	甕	17.4	-	-		長石・石英多。
660	溝80	弥生土器	高杯	-	13.7	-		水こし粘土。
661	溝88	弥生土器	壺	-	-	-	外面ハケの後にヘラ描き沈線。	長石・石英多。
662	溝88	弥生土器	高杯	-	-	-	端面棒状浮文と竹管文。	長石・石英多。
663	溝88	弥生土器	高杯	-	-	-	柱状部天井に小孔。	長石・石英多。
664	溝88	弥生土器	甕	-	-	-	口縁部外面ヘラ描き沈線。	長石・石英多。
665	溝88	弥生土器	甕	14.0	3.45	19.5	体部内面下半工具による調整。	長石・石英多。
666	溝89	弥生土器	壺	16.9	-	-		長石・石英多。
667	溝92	弥生土器	甕	20.0	6.0	28.0	口縁部ヨコナデ。	外面下半にスス。内面下部に炭化物。
668	溝93	弥生土器	壺	-	-	-	体部内面ナデ。	赤色粒多。
669	溝93	弥生土器	壺	15.0	-	-	頸部外面タタキ痕跡。	長石・石英多。
670	溝106	弥生土器	甕	-	-	-	口縁外面ヘラ描き沈線。	長石・石英多。
671	溝106	弥生土器	鉢	14.0	-	-	口縁部と体部の境に沈線。	水こし粘土か。
672	溝101	弥生土器	甕	23.0	-	-	沈線 11 条、竹管文 2 列。	粗砂含む。
673	溝116	土師器	鉢	-	-	-	体部内面ヘラケズリの後工具による調整。	長石・石英多。
674	溝116	土師器	器台	-	-	-		長石・石英多。
675	溝116	土師器	壺	21.1	-	-	体部内面ヘラケズリ。	長石・石英多。
676	溝116	土師器	甕	15.1	-	-		長石・石英多。
677	溝116	土師器	高杯	-	13.7	-	脚端ヨコナデ。柱状部内面絞り痕。	長石・石英多。
678	溝117	弥生土器	壺	-	-	-	外面ハケの後にヘラ描き沈線。内面絞り痕。	長石・石英多。
679	溝117	弥生土器	鉢	12.5	3.2	7.4	口縁部ヨコナデ。体部外面ヘラミガキか。	長石・石英多。

土器観察表

掲載 番号	遺構・土層名	種 別	器 種	法量 (cm)			特 徴	備 考
				口 径	底 径	器 高		
680	ビット 5	弥生土器	甕	-	-	-		
681	溝85	弥生土器	高杯	-	10.0	-		
682	溝88	弥生土器	甕	12.0	-	-		角閃石含む。
683	溝120~122	土師器	甕	12.0	-	-		長石・石英多。
684	溝120~122	土師器	高杯	-	-	-	柱状部外面縦方向に稜線。	長石・石英多。
685	井戸11 6層	土師器	甕	13.3	-	20.0	口縁部から体部上端外面にタタキ痕。	
686	井戸11 6層	土師器	甕	12.4	-	13.6	体部内面ヘラケズリの後ナデ。	ち密。
687	井戸11 6層	土師器	甕	14.8	-	-	口縁部外面無文。	ち密。
688	井戸11 6・7層	土師器	甕	14.6	-	-		微砂粒多。
689	井戸11 7・8層	土師器	甕	14.8	-	-		ち密。
690	井戸11	土師器	甕	10.8	-	-	頸部上方の刺突は文様風。	ち密。
691	井戸11	土師器	鉢	10.8	-	6.3	底部外面未調整。内面仕上げナデ。	ち密。石英多。
692	井戸11	土師器	鉢	11.0	-	-	口縁部内面ハケの後にヨコナデ。	水こし粘土。
693	井戸11 6'・7層	土師器	鉢	10.4	-	6.5	体部内外面オサエ。口縁部ナデ。	長石大粒あり。
694	井戸11 6'・7層	土師器	鉢	11.7	-	7.3	体部外面ヘラケズリの後ナデか。	水こし粘土。
695	井戸11 7・8層	土師器	鉢	12.8	5.5	7.5	外面未調整。ひび割れ。	
696	井戸11	土師器	鉢	9.2	2.8	4.8	外面ナデ。縦方向のひび割れ。	
697	井戸11 6'・7層	土師器	鉢	14.9	-	-	口縁部ヨコナデ。	水こし粘土。
698	井戸11 7・8層	土師器	鉢	13.9	-	4.3	体部下半ヘラケズリの後ナデ。	金雲母。
699	井戸11	土師器	鉢	24.7	-	-	体部内面下半はナデか。	石英多。
700	井戸11	土師器	高杯	15.8	-	-	口縁部と底部境沈線状。	ち密。
701	井戸11	土師器	高杯	-	-	-	内面絞り痕。	水こし粘土。
702	井戸11 7・8層	土師器	高杯	-	-	-	頸部内面小孔。	ち密。
703	井戸12	土師器	壺	14.7	-	23.5		角閃石。茶褐色粒含む。
704	井戸12	土師器	甕	12.7	-	19.6	口縁部外面に櫛沈。	角閃石。茶褐色粒含む。
705	井戸12	土師器	甕	12.2	-	-	口縁部外面に櫛沈。	
706	井戸12	土師器	甕	15.1	-	22.9	口縁部外面に櫛沈。	茶褐色粒含む。
707	井戸12	土師器	甕	13.7	-	-	口縁部外面に櫛沈。	
708	井戸12	土師器	甕	13.4	-	-	肩部に2個の刺突。口縁外面に櫛沈。	
709	井戸12	土師器	小形丸底甘	10.3	-	6.5	底部外面ヘラケズリ。	
710	井戸12	土師器	小形丸底甘	12.2	-	8.0	外面ミガキ。	茶褐色粒多く含む。
711	井戸12	土師器	小形器台	9.4	10.9	8.9	外面ヘラミガキ。	水こし粘土。
712	井戸12	土師器	高杯	-	-	-		赤褐色粒含む。
713	土壇116	土師器	鉢	9.0	3.5	7.3	外面未調整。内面ハケの後ナデ。	
714	土壇117	土師器	壺	9.2	4.1	17.6	口縁部外面ヘラミガキの下にハケ。	ち密。
715	土壇117	土師器	壺	-	-	-	内面オサエ・ナデ。体部穿孔。	粗い。
716	土壇117	土師器	甕	11.5	-	-	内面体部上端ヘラミガキ。	長石多。
717	土壇117	土師器	甕	14.5	-	-	口縁部内面ハケ。	ち密。
718	土壇117	土師器	甕	17.0	-	-	体部外面下半細かいタタキの後ハケ。	金雲母。
719	土壇117	土師器	甕	16.9	-	-	外面ヨコナデの下にタタキ痕跡。	ち密。長石多。

百間川沢田遺跡 3

掲載 番号	遺構・土層名	種別	器種	法量 (cm)			特 徴	備 考
				口 径	底 径	器 高		
720	土壌117	土師器	甕	—	—	—	外面タタキの痕跡。	被熱変色。
721	土壌117	土師器	甕	13.8	3.5	20.3	肩部刺突文縦2点。	雲母多。
722	土壌117	土師器	甕	14.4	4.0	25.0	底面ヘラミガキ。肩部刺突文。	ち密。
723	土壌117	土師器	甕	15.0	—	—		
724	土壌117	土師器	甕	15.4	—	—	頸部内面ハケ。	長石多。
725	土壌117	土師器	甕	15.0	—	—	体部内面ヘラケズリの後ナデ。	
726	土壌117	土師器	甕	—	3.5	—	外面ナデの後ヘラミガキ。	
727	土壌117	土師器	壺	20.2	8.8	34.0	外面口頸部から肩部にかけてヨコナデ。	
728	土壌117	土師器	壺	17.2	—	39.7	口頸部ヨコナデ。	
729	土壌117	土師器	壺	19.3	—	—	口頸部ハケの後ヨコナデ。	
730	土壌117	土師器	壺	15.9	7.5	—	体部内面ヘラケズリの後ハケ。	粗。長石・石英多。
731	土壌117 上面	土師器	壺	10.8	—	—	内面ヨコナデ。ハケ若干。	ち密。
732	土壌117	土師器	壺	—	—	—	頸部内面ヘラケズリ。	水こし粘土。
733	土壌117	土師器	壺	—	—	—	底部内面に工具の差しこみ孔。	水こし粘土。
734	土壌117	土師器	壺	16.6	—	—	頸部外面ハケの後ナデ。	雲母多。
735	土壌117	土師器	壺	16.4	—	35.5	肩部外面ハケの後ナデ。平底の痕跡。	
736	土壌117	土師器	壺	16.8	5.8	30.4	内面体部下半強いナデ。上半工具当たり痕。	雲母多。
737	土壌117	土師器	壺	10.4	—	—	体部内面上端粘土継接合痕明瞭。	ち密。
738	土壌117	土師器	壺	—	5.0	—	内面体部下半ケズリ風のハケ。	長石多。
739	土壌117	土師器	壺	13.8	—	19.4	体部外面下半タタキの後ハケ。	
740	土壌117	土師器	壺	15.2	—	—	体部外面下半ナデ、若干ハケ。	砂礫多。
741	土壌117	土師器	壺	18.0	—	—	口縁部ヨコナデ。体部外面ナデ。	
742	土壌117	土師器	壺	12.9	—	—	外面工具による調整か。	粗い。
743	土壌117	土師器	壺	16.7	—	—	頸部外面上端ハケ工具の当たり痕。	
744	土壌117	土師器	壺	—	8.2	—	底部付近ハケの後ヘラミガキ。	雲母多。
745	土壌117	土師器	壺	16.8	8.5	32.5	体部内面強いヘラケズリ。	雲母多。
746	土壌117	土師器	壺	—	—	—		水こし粘土。
747	土壌117	土師器	壺	—	7.6	—	内面体部上半強いナデ。	雲母多。
748	土壌117	土師器	壺	—	9.0	—	体部内面強いヘラケズリ。	雲母多。
749	土壌117	土師器	壺	—	7.0	—	内面体部上半ハケの後ナデ。	ち密。石英多。
750	土壌117	土師器	壺	20.4	6.6	34.1	体部外面タタキの後ハケ。	粗粒。長石・石英多。
751	土壌117	土師器	甕	26.1	5.7	39.3	体部外面上半ハケの後ヘラミガキ。	
752	土壌117	土師器	鉢	12.3	3.4	9.8	内底面ナデ。	水こし粘土か。
753	土壌117	土師器	鉢	15.6	—	—	体部外面ハケの後ヘラミガキ。	ち密。微砂粒。
754	土壌117	土師器	鉢	10.6	2.5	6.6	内面ナデ。	水こし粘土。
755	土壌117	土師器	鉢	11.3	—	—	口縁部ヨコナデの後ヘラミガキ。	水こし粘土。
756	土壌117	土師器	鉢	10.9	—	—	体部内面ハケ。	
757	土壌117	土師器	鉢	14.6	—	6.0	外面ケズリの後工具による調整。	水こし粘土か。
758	土壌117	土師器	鉢	13.9	—	7.1	内面ヘラケズリの後ヘラミガキ。	
759	土壌117	土師器	鉢	16.0	—	7.1	外面ハケの後ヘラミガキ。	ち密。微砂粒多。

土器観察表

掲載 番号	遺構・土層名	種 別	器 種	法量 (cm)			特 徴	備 考
				口 径	底 径	器 高		
760	土壇117	土師器	鉢	14.4	—	6.2	体部外面ハケの後ナデ。	水こし粘土。
761	土壇117	土師器	鉢	14.2	3.6	6.6	外面ハケの後ヘラミガキ、ひび割れ。	水こし粘土。
762	土壇117	土師器	鉢	—	—	—	口縁部内面ヨコナデ、他はナデ。	ち密。
763	土壇117	土師器	鉢	5.8	2.7	2.1	内面クモの巣状ハケ。	水こし粘土か。
764	土壇117	土師器	鉢	7.4	3.8	3.0	内面ハケか。外面ひび割れ。	水こし粘土か。
765	土壇117	土師器	鉢	11.9	—	—	内面オサエの後ヘラミガキ。	水こし粘土。
766	土壇117	土師器	鉢	10.9	—	7.2	底部ヘラケズリにより成形。	
767	土壇117	土師器	鉢	—	—	—		水こし粘土。
768	土壇117	土師器	鉢	9.1	2.3	5.8	体部内外面ハケの後にヘラミガキ。	水こし粘土。
769	土壇117	土師器	鉢	—	2.0	—	外面ヘラミガキか。	水こし粘土。
770	土壇117	土師器	鉢	32.2	—	—	口縁部内面ハケの後ヨコナデ。	ち密。
771	土壇117	土師器	鉢	36.0	—	—	体部内面ヘラケズリの後粗いヘラミガキ。	ち密。
772	土壇117	土師器	鉢	38.4	—	—	体部内面ヘラケズリの後ナデ。	ち密。
773	土壇117	土師器	鉢	36.1	—	27.6	底部外面ヘラケズリ。	
774	土壇117 上面	土師器	甕	13.3	—	—	外面粘土紐接合痕。	
775	土壇117	土師器	甕	—	—	—	外面ナデ。	ち密。
776	土壇117	土師器	甕	16.0	6.1	24.2	頸部にタタキ痕跡。体部外面ハケの後ヘラミガキか。	水こし粘土。
777	土壇117	土師器	甕	12.6	—	—	肩部に刺突文、縦に2点。	
778	土壇117	土師器	甕	13.8	—	—	肩部刺突文、横に2点。	雲母多。
779	土壇117	土師器	甕	12.8	—	—	肩部に刺突文、横に2点。	
780	土壇117	土師器	甕	14.0	4.0	22.7	肩部に刺突文、縦に2点。	ち密。
781	土壇117	土師器	甕	14.8	—	—	肩部ハケ状工具の刺突文、縦に3点。	
782	土壇117	土師器	甕	14.0	—	23.4	肩部刺突文1点。体部外面下半ナデ。	褐色粒多。
783	土壇117	土師器	甕	14.9	—	—	肩部刺突文縦に2点。	
784	土壇117	土師器	甕	14.2	4.8	23.6	肩部刺突文縦に2点。	
785	土壇117	土師器	甕	15.4	—	—	口縁端内面へ肥厚。	ち密。
786	土壇117	土師器	甕	14.0	—	—	肩部に刺突文、縦に3点。	ち密。
787	土壇117	土師器	甕	14.0	—	—	肩部刺突文横に3点、木目あり。	
788	土壇117	土師器	甕	13.3	—	21.4	肩部刺突文縦2点。	
789	土壇117	土師器	甕	13.4	—	—	体部内面上半ヘラケズリの後粗いナデ。	ち密。
790	土壇117	土師器	甕	13.9	—	—		雲母・角閃石多。
791	土壇117	土師器	甕	13.1	4.6	20.9	肩部外面粗いハケの後ヘラミガキ。肩部刺突文2点。	
792	土壇117	土師器	甕	13.5	—	—		
793	土壇117	土師器	甕	14.6	—	—		雲母多。
794	土壇117	土師器	甕	11.8	—	—	体部外面ハケの後ナデ。	
795	土壇117	土師器	甕	13.0	—	—	体部外面ハケの後ヘラミガキ。	
796	土壇117	土師器	甕	—	—	—	体部外面タタキ痕跡。	金雲母。
797	土壇117	土師器	甕	—	—	—	口縁部内面ハケ。体部外面細タタキ。	ち密。
798	土壇117	土師器	高杯	20.5	—	—	柱状部横方向ヘラミガキ。	微砂粒少量。
799	土壇117	土師器	高杯	18.1	11.6	12.7	杯の口縁部・底部境凹縁状。	微砂粒少量。

百間川沢田遺跡 3

掲載番号	遺構・土層名	種別	器種	法量 (cm)			特 徴	備 考
				口 径	底 径	器 高		
800	土壌117	土師器	高杯	21.9	16.0	14.2	最終調整はヘラミガキ。	水こし粘土。
801	土壌117	土師器	高杯	23.5	-	-	外面ヘラミガキ残存。	水こし粘土。
802	土壌117	土師器	高杯	13.9	-	-		ち密。
803	土壌117	土師器	高杯	21.4	-	-	外面ハケの後にヘラミガキ。	水こし粘土。
804	土壌117	土師器	高杯	20.0	13.7	19.8	外面杯底部から柱状部にかけヘラケズリ。	水こし粘土。
805	土壌117	土師器	高杯	19.9	-	-	杯底部に工具差しこみ孔。	水こし粘土。
806	土壌117	土師器	高杯	21.0	-	-	調整ヨコナデの後ヘラミガキか。	水こし粘土か。
807	土壌117	土師器	高杯	-	15.0	-	柱状部内面ナデ。	水こし粘土か。丹塗り。
808	土壌117	土師器	高杯	-	-	-	柱状部外面縦方向の稜線あり。	水こし粘土。
809	土壌117	土師器	高杯	-	-	-	柱状部外面ハケの後ヘラミガキか。	水こし粘土。
810	土壌117	土師器	高杯	-	-	-	柱状部外面縦方向の稜線かすかにあり。	水こし粘土。
811	土壌117	土師器	高杯	-	-	-	柱状部外面縦方向の稜線あり。	水こし粘土。
812	土壌117	土師器	高杯	-	-	-	柱状部外面ヘラミガキ。縦方向の稜線あり。	水こし粘土。
813	土壌117	土師器	高杯	-	14.8	-	脚端面凹面。	ち密。
814	土壌117	土師器	高杯	-	13.0	-	杯部内面ハケ。底部はヘラミガキ。	水こし粘土。
815	土壌117	土師器	器台	9.0	-	-		水こし粘土。丹塗り。
816	土壌117	土師器	器台	-	-	-		水こし粘土。
817	土壌117	土師器	器台	11.1	-	-		ち密。
818	土壌117	土師器	器台	-	14.5	-		ち密。
819	土壌117	土師器	器台	9.1	12.3	8.9	脚の天井部内面に刺突。	水こし粘土。
820	土壌117	土師器	器台	9.6	12.2	10.9	脚部外面縦方向のヘラミガキの後横方向ミガキ。	ち密。
821	土壌117	土師器	器台	19.3	19.1	8.6	口縁部・脚部ヨコナデ。	ち密。全面丹塗り。
822	柵 2 柱穴 5・6・8	須恵器	杯	13.4	6.9	4.0	ロクロ右回り。	精製粘土。
823	溝126	土師器	壺	16.2	-	-		
824	溝126	土師器	甕	13.0	-	-	口縁外面に櫛沈。	角閃石含む。
825	溝126	土師器	高杯	19.3	15.9	18.6	杯部と脚部外面に暗文風ヘラミガキ。	
826	溝126	土師器	高杯	-	-	-		水こし粘土。
827	溝126	土師器	高杯	-	10.9	-		
828	溝126	土師器	壺	17.9	-	-	内外面横ナデ。	
829	溝126	土師器	甕	10.8	-	-		
830	溝126	土師器	甕	-	-	-	口縁外面に櫛沈。	
831	溝126	土師器	甕	17.2	-	-	口縁部内面横ハケメ。	
832	溝126	土師器	鉢	-	-	-		
833	溝126	土師器	高杯	-	8.2	-		水こし粘土。
834	溝126	土師器	高杯	11.5	13.1	10.2		
835	溝126	土師器	双口壺	-	-	-	手捏ね。	
836	溝127	土師器	甕	-	-	-	口縁外面櫛描き沈線。	金雲母。
837	溝130	土師器	甕	17.6	-	-		
838	溝130	土師器	甕	14.9	-	-	口縁部外面に櫛沈。	角閃石含む。
839	溝130	土師器	甕	12.8	-	-	口縁部外面に櫛沈。	

土器観察表

掘番号	遺構・土層名	種別	器種	法量 (cm)			特 徴	備 考
				口 径	底 径	器 高		
840	溝130	土師器	小形丸底甘	-	-	-	内外面ナデ。	角閃石含む。
841	溝130	土師器	鉢?	-	-	-		
842	溝130	土師器	鉢?	-	-	-		茶褐色粒含む。
843	溝130	土師器	高杯	-	-	-		
844	溝130	土師器	高杯	-	-	-		角閃石含む。
845	溝132	土師器	甕	-	-	-		長石・石英多。
846	溝132	土師器	鉢	9.7	-	-		長石・石英多。
847	溝132	土師器	甕	-	-	-	口縁部外面櫛描き沈線。	長石・石英多。
848	溝137	須恵器	杯	-	-	-	内面口縁部と体部の境沈線風。	長石・石英多。
849	耕作痕	須恵器	杯	13.1	-	3.5	口縁端、面をなす。	
850	耕作痕	須恵器	杯	15.0	-	-	外面口縁部と体部の境沈線風。	
851	灰色粘土	須恵器	蓋	14.8	-	-	天井内面仕上げナデ。	精製粘土。
852	灰色粘土	須恵器	杯	12.6	8.5	3.5	底面ヘラケズリ。	精製粘土。
853	灰色粘土	須恵器	杯	-	11.1	-	内底面仕上げナデ。	精製粘土。
854	暗灰褐色粘性土	土師器	皿	14.8	10.0	1.9	底面ナデか。	ち密。内面丹塗り。
855	灰色粘土	土師器	皿	19.2	10.8	3.4	内底面ナデ。	
856	灰色粘土	須恵器	杯	14.6	10.4	4.0	底面ヘラケズリ。	精製。
857	灰色粘土	須恵器	杯	-	-	-		ち密。
858	青黒色粘土	須恵器	蓋	-	-	-	天井内面仕上げナデ。	精製。
859	青黒色粘土	須恵器	蓋	-	-	-		精製。
860	青灰色粘土	須恵器	蓋	-	-	-		ち密。
861	青灰色粘土	須恵器	杯	9.4	-	3.5	内外面ヨコナデ。	ち密。
862	青灰色粘土	須恵器	杯	11.8	-	3.3		粗。長石多。
863	青灰色～青黒色粘土	須恵器	杯	13.2	-	4.6	内底面仕上げナデ。	ち密。
864	青灰色～青黒色粘土	須恵器	杯	-	-	-		精製。
865	青灰色～青黒色粘土	弥生土器	高杯	-	-	-	杯底部穿孔。	ち密。
866	弥生時代後期洪水砂	土師器	甕	15.6	-	-	口縁部内面ハケの後ヨコナデ。	
867	弥生時代後期水田層	弥生土器	甕	-	-	-	体部外面ヘラミガキか。	褐色粒多。
868	弥生時代後期水田層	弥生土器	甕	17.7	-	-	口縁部凹線3条。	金雲母。
869	島状高まり	弥生土器	壺	-	16.7	-		
870	灰黒色粘土	弥生土器	壺?	-	8.3	-	底面ヘラミガキ。	長石多。
871	灰黒色粘土	弥生土器	甕?	-	5.9	-	底部周縁ヨコナデ。	長石・石英多。
872	東側溝灰茶色土	縄文土器	深鉢	26.6	4.6	27.1	頸部外面2枚貝条痕。胴部外面ケズリ。	
873	溝150	弥生土器	甕	26.8	-	-	ヘラ描き沈線10条、下端に刺突列点文。	長石・石英多。
874	溝150	弥生土器	甕	-	-	-	内面ナデ、外面ハケか。	ち密。
875	水田	弥生土器	高杯	-	-	-		
876	水田	弥生土器	壺	-	-	-		
877	水田							
878	微高地	弥生土器	甕	16.0	-	-		
879	水田	弥生土器	甕	15.0	-	-		

百間川沢田遺跡 3

掲載 番号	遺構・土層名	種 別	器 種	法量 (cm)			特 徴	備 考
				口 径	底 径	器 高		
880	微高地	弥生土器	高杯	14.0	-	-		
881	水田	弥生土器	高杯	23.0	-	-		
882	水田上面	弥生土器	登	-	6.0	-		
883	溝174 溝底	瓦器	碗	15.6	5.3	5.2	内底面の暗文斜格子。	ち密。
884	溝174 最下層	土師器	碗	-	-	-		ち密。
885	溝174 下層	土師器	碗	-	5.4	-	内底面仕上げナデ。	ち密。
886	溝174	土師器	碗	-	5.0	-	高台部ヨコナデ。他はナデ。	精製粘土。
887	溝174 溝底	土師器	杯	-	6.0	-	内外ヨコナデ。	ち密。
888	溝174	磁器	碗	-	5.3	-	白磁。削り出し高台。外面底部露胎。	
889	溝174	瓦器	鉢	-	-	-	内面にヘラ描き文あり。	ち密。
890	溝174	亀山焼	甕	-	-	-	体部外面タタキ。	
891	溝174 上層	瓦	平瓦	-	-	-	凸面細目の粗い斜格子目タタキ。	
892	溝175	土師器	碗	14.4	5.6	4.8		
893	溝175	土師器	碗	12.5	4.4	4.2	体部内外面横ナデ。	角閃石多く含む。
894	溝175	土師器	碗	-	5.0	-		
895	溝175	須恵器	碗	-	5.8	-		
896	溝175	土師器	碗	12.3	4.8	4.1	口縁部に黒色帯。	
897	溝175	土師器	杯	10.3	6.8	3.4	体部内外面横ナデ。	
898	溝175	土師器	皿	7.9	5.6	1.4	体部内外面横ナデ。	茶褐色粒含む。
1307	溝180	弥生土器	甕	-	-	-	胴外面タテハケメ。内面横ヘラミガキ。	
1308	溝180	弥生土器	蓋	10.6	-	-		
1309	流田・開ノ山下	縄文土器	浅鉢	-	-	-	内面に2本の沈線がめぐる。	
1310	水田層	弥生土器	甕	-	6.0	-	外面タテハケメ。内面ヘラケズリ。	
1311	西土器溜り	弥生土器	甕	14.0	-	-		スス付着。
1312	水田層	弥生土器	鉢	-	-	-		
1313	東大畦	弥生土器	甕	14.0	-	-		スス付着。

## 土製品一覧表

## 土製品一覧表

番号	掲載番号	出土地区	遺構・土層名	時代・時期	器種	形式	計測最大値(mm)			重量(g)	残存	備考
							長	幅(径)	厚			
1		高B 208・209-0	溝125	古墳	土錘	A-Ⅲ	52	36		82.8	完	
2		高B 208-0	灰色粘土層		土錘	B-V	38	10		37.8	完	
3		足 212・213-F F・G G	溝150	弥生中期	土錘	B-V	29	14		52.5	欠	
4		高B 208・209-0	暗灰褐色粘性砂質		土錘	A-Ⅳ	59	40		97	完	
5		高B 208・209-0	暗灰褐色粘性砂質		土錘	A-Ⅲ	52	37		76.1	完	
6		高B 208・209-0	暗灰褐色粘性砂質		土錘	A-Ⅲ	52	36		83.2	完	
7		高B 209-P	溝126	古墳	蓋形		18	48			欠	キノコ形
8		高B 209-S	溝102	弥生後期	紡錘車			41	22		欠	線刻あり
9		高B 209-R	溝127	古墳	土錘	A-Ⅱ②	71	25		38.3	欠	
10		高B 209-O	溝89	弥生後期	紡錘車			67	8		完	土器片利用
11		高B 209-O			土錘	A-Ⅲ	53	36		79.8	完	
12		高B 209-P	溝126	古墳	土錘	A-Ⅲ	51	33		63.9	完	
13		足 204・205-F F	北側溝		土錘	B-V	41	9		37.4	欠	
14		横 204-C・D	灰黒色粘性砂質土		紡錘車		45	44		11.7	欠	
15		横 204-B	淡青灰色粘土半微砂		紡錘車		40	33		16.5	欠	
16		足 213-Q Q	溝161	弥生後期	土錘	B-Ⅲ	41	34		42.1	完	
17		四 213-S S	溝183	弥生後期	紡錘車			57	5		欠	土器片利用
18		高A 207-K	中世層	中世	土錘	B-V	41	11		49.7	完	
19		高A 207-J	淡茶灰色砂		土錘	A-Ⅱ②	71	26		46.5	欠	
20	C 1	四 213-RR~TT	縄文包含層	縄文後期	円板						完	土器片利用

○出土地区欄の横は横田調査区、高Aは高縄手A調査区、高Bは高縄手B調査区、足は足洗調査区、四は四元調査区の略である。

百間川沢田遺跡 3

石製品一覧表

番号	插图 番号	出土地区	遺構・土層名	時代・時期	器種	形式	計測最大幅 (mm)			重量 (g)	材質	残存
							長	幅(径)	厚			
1		四213-SS	土壌9(旧)	弥生?	楔形石器		30	32	11	10.9	サヌカイト	完
2		四213-SS	土壌9(旧)	弥生?	楔形石器		24	16	7	3.2	サヌカイト	欠
3		四213-SS-TT	縄文包含層	縄文 後期	打製石斧?		83	33	13	17.6	結晶片岩	欠
4		四213-SS-TT	縄文包含層	"	削器		41	35	8	16.7	サヌカイト	欠
5		四213-SS-TT	縄文包含層	"	石鏃	I	17	18	3	0.9	サヌカイト	欠
6		四213-SS-TT	縄文包含層	"	楔形石器		34	28	8	7.5	サヌカイト	完
7		四213-SS-TT	縄文包含層	"	石鏃状削器		29	16	5	2.8	サヌカイト	欠
8	S28	四213-SS-TT	縄文包含層	"	石包丁状		70	57	9	33.2	サヌカイト	完
9		四213-SS-TT	縄文包含層	"	削器		26	22	6	3.8	サヌカイト	欠
10		四213-SS-TT	縄文包含層	"	楔形石器		35	15	7	5.6	サヌカイト	欠
11		四213-SS-TT	縄文包含層	"	石鏃状石器		36	22	6	4.4	サヌカイト	欠
12		四213-SS-TT	縄文包含層	"	削器		30	36	5	6.5	サヌカイト	欠
13		四213-SS-TT	縄文包含層	"	石鏃	II	19	21	5	1.8	サヌカイト	欠
14		四213-SS	土壌125	"	削器		50	18	6	6.8	サヌカイト	欠
15		四213-SS-TT	縄文包含層	"	石鏃	II	18	13	2	0.3	サヌカイト	欠
16		四213-SS-TT	縄文包含層	"	石鏃	II	21	17	3	0.8	サヌカイト	完
17		四213-SS-TT	縄文包含層	"	石鏃	II	19	16	3	0.7	サヌカイト	完
18		四213-SS-TT	縄文包含層	"	削器		58	36	7	16.8	サヌカイト	完
19		四213-SS-TT	縄文包含層	"	石鏃	I	25	19	5	1.7	サヌカイト	欠
20		四213-SS-TT	縄文包含層	"	削器		27	20	9	7.3	サヌカイト	欠
21		四213-SS-TT	縄文包含層	"	削器		29	16	7	2.7	サヌカイト	欠
22		四213-SS-TT	縄文包含層	"	石鏃		18	17	4	1.2	サヌカイト	欠
23		足213-QQ	溝171	"	削器		43	37	11	10.0	サヌカイト	欠
24		四213-SS-TT	縄文包含層	"	石鏃	II	25	19	3	1.0	サヌカイト	欠
25		四213-SS-TT	縄文包含層	"	石鏃状削器		68	47	10	35.3	サヌカイト	欠
26		四213-SS-TT	縄文包含層	"	石鏃状削器		49	18	5	5.5	サヌカイト	欠
27		四213-SS-TT	縄文包含層	"	楔形石器		27	19	8	5.1	サヌカイト	完
28	S21	四213-SS-TT	縄文包含層	"	石鏃状削器		96	36	10	35.0	サヌカイト	完
29	S27	四213-SS-TT	縄文包含層	"	石包丁状		40	39	6	11.9	サヌカイト	欠
30		四213-SS-TT	縄文包含層	"	石鏃	I	22	17	9	0.5	サヌカイト	欠
31	S23	四213-SS-TT	縄文包含層	"	石鏃状削器		81	23	5	11.2	サヌカイト	欠
32		四213-SS-TT	縄文包含層	"	石鏃	III	20	24	4	2.1	サヌカイト	欠
33		四213-SS-TT	縄文包含層	"	石鏃	I	22	14	3	0.7	サヌカイト	完
34		四213-SS-TT	縄文包含層	"	石鏃	II?	22	15	5	1.6	サヌカイト	欠
35		四213-SS-TT	縄文包含層	"	石鏃		49	12	6	4.0	サヌカイト	欠
36		四213-SS-TT	縄文包含層	"	石鏃	II	26	17	5	1.4	サヌカイト	完
37		四213-SS	土壌125	"	石鏃	II	13	12	2	0.3	サヌカイト	欠
38	S25	四213-SS-TT	縄文包含層	"	石包丁状		59	29	7	14.6	サヌカイト	完
39		四213-SS-TT	縄文包含層	"	石鏃	I	21	18	5	1.3	サヌカイト	完
40		四213-SS-TT	縄文包含層	"	石鏃	II	22	13	2	0.3	サヌカイト	完
41		四213-SS-TT	縄文包含層	"	石鏃	II	24	13	2	0.5	サヌカイト	完
42		四213-SS-TT	縄文包含層	"	石鏃	II	28	17	9	1.0	サヌカイト	完
43		四213-SS-TT	縄文包含層	"	石鏃	I	24	15	4	1.1	サヌカイト	完
44	S22	四213-SS-TT	縄文包含層	"	石鏃状削器		100	36	8	26.5	サヌカイト	欠
45	S24	四213-SS-TT	縄文包含層	"	石鏃状削器		82	32	9	23.1	サヌカイト	欠
46		四213-SS-TT	縄文包含層	"	削器		50	19	8	7.1	サヌカイト	欠
47	S26	四213-SS-TT	縄文包含層	"	石包丁状		46	60	8	29.1	サヌカイト	完
48		四213-SS-TT	縄文包含層	"	石鏃	II	21	20	6	1.8	サヌカイト	完
49		四213-SS-TT	縄文包含層	"	削器		27	38	5	4.6	サヌカイト	欠
50		四213-SS-TT	縄文包含層	"	石鏃	I	18	17	5	1.3	サヌカイト	欠
51	S32	四213-SS-TT	縄文包含層	"	石鏃		114	91	23	313	花崗岩	完
52		四213-SS-TT	縄文包含層	"	蔽石		88	62	23	194	花崗岩?	完
53		四213-SS-TT	縄文包含層	"	石鏃	III?	25	17	3	0.1	サヌカイト	欠
54	S36	四213-SS-TT	縄文包含層	"	石鏃		98	78	32	248		完
55	S33	四213-SS-TT	縄文包含層	"	石鏃		117	74	29	363	花崗岩?	完
56	S35	四213-SS-TT	縄文包含層	"	石鏃		84	63	21	158	花崗岩	完
57		四213-SS-TT	縄文包含層	"	石鏃	打ち欠き	80	75	32	261	花崗岩	完

石製品一覽表

番号	插图番号	出土地区	遺構・土層名	時代・時期	器種	形式	計測最大幅 (mm)			重量 (g)	材質	残存
							長	幅(径)	厚			
58		四213-SS・TT	縄文包含層	縄文 後期	石鏢	打ち欠き	86	75	27	254	花崗岩?	完
59		四213-SS・TT	縄文包含層	"	石鏢	打ち欠き	84	62	18	152	安山岩	完
60		四213-SS・TT	縄文包含層	"	石鏢	打ち欠き	88	66	19	158	流紋岩	完
61		四213-SS・TT	縄文包含層	"	蔽石		110	75	49	612	玢岩	完
62		四213-SS・TT	縄文包含層	"	石鏢	打ち欠き	122	84	23	355	花崗岩	完
63		四213-SS・TT	縄文包含層	"	石鏢	打ち欠き	90	75	29	273		完
64		四213-SS・TT	縄文包含層	"	石鏢	打ち欠き	88	89	38	419	花崗岩	完
65		四213-SS・TT	縄文包含層	"	石鏢	打ち欠き	81	83	31	285		完
66		四213-SS・TT	縄文包含層	"	石鏢	打ち欠き	81	77	38	352	花崗岩	完
67		四213-SS・TT	縄文包含層	"	石鏢	打ち欠き	104	93	30	345	花崗岩	完
68		四213-SS	土塙125	"	石鏢	打ち欠き	92	85	38	368	花崗岩	欠
69		四213-SS・TT	縄文包含層	"	石鏢	打ち欠き	90	71	16	139	細粒閃緑岩	完
70		四213-SS・TT	縄文包含層	"	石鏢	打ち欠き	93	79	25	293	花崗岩	完
71		四213-SS・TT	縄文包含層	"	石鏢	打ち欠き	73	71	18	142	細粒閃緑岩	完
72		四213-SS・TT	縄文包含層	"	石鏢	打ち欠き	80	72	20	163		欠
73		四213-SS・TT	縄文包含層	"	石鏢	打ち欠き	97	74	21	232	花崗岩	完
74		四213-SS・TT	縄文包含層	"	蔽石		79	58	25	198		完
75		四213-SS・TT	縄文包含層	"	石鏢	打ち欠き	110	89	22	373		完
76		四213-SS・TT	縄文包含層	"	石鏢	打ち欠き	92	79	33	387		完
77		四213-SS・TT	縄文包含層	"	石皿		136	150	53	1637	粗粒砂岩	欠
78		四213-SS・TT	縄文包含層	"	石鏢	打ち欠き	99	80	31	302	細粒閃緑岩	完
79		四213-SS・TT	縄文包含層	"	石鏢	打ち欠き	48	45	16	42		完
80		四213-SS	土塙125	"	石鏢	打ち欠き	99	92	40	429	花崗岩	欠
81		四213-SS	土塙125	"	石鏢	打ち欠き	64	80	39	230	花崗岩	欠
82		四213-SS・TT	縄文包含層	"	石鏢	打ち欠き	51	40	23	60		完
83		四213-SS・TT	縄文包含層	"	石鏢	打ち欠き	103	89	23	271	流紋岩	完
84		四213-SS・TT	縄文包含層	"	石鏢	打ち欠き	62	64	17	93	流紋岩	完
85	S34	四213-SS・TT	縄文包含層	"	石鏢	打ち欠き	123	95	29	452		完
86		四213-SS・TT	縄文包含層	"	石鏢	打ち欠き	106	73	29	336		完
87		四213-SS・TT	縄文包含層	"	石鏢	打ち欠き	71	59	16	123		完
88		四213-SS・TT	土塙124	"	石鏢	打ち欠き	81	66	24	194		完
89		四213-SS・TT	縄文包含層	"	蔽石		108	50	55	460		完
90		四213-SS・TT	縄文包含層	"	石鏢	打ち欠き	98	80	26	295		完
91		四213-SS・TT	縄文包含層	"	石鏢	打ち欠き	84	78	36	717	花崗岩	完
92		四213-SS・TT	縄文包含層	"	石鏢	打ち欠き	63	65	21	94		欠
93		四213-SS・TT	縄文包含層	"	石鏢	打ち欠き	44	40	13	38	安山岩	完
94		四213-SS・TT	縄文包含層	"	石鏢	打ち欠き	75	75	27	200	安山岩	完
95		四213-SS・TT	縄文包含層	"	石鏢	打ち欠き	63	56	19	84		完
96		四213-SS・TT	縄文包含層	"	石鏢	打ち欠き	77	67	18	130		完
97	S37	四213-SS・TT	縄文包含層	"	石鏢	打ち欠き	81	72	29	220		完
98		四213-SS・TT	西トレンチ	縄文?	石鏢	打ち欠き	87	87	34	350		完
99		四213-SS・TT	縄文包含層	縄文 後期	石鏢	打ち欠き	51	76	31	101		欠
100		四213-SS・TT	縄文包含層	"	石鏢	打ち欠き	65	57	25	121		完
101	S29	四213-SS・TT	縄文包含層	"	石鏢	打ち欠き	43	38	19	42		完
102		足213-PP・QQ	溝149	弥生前期?	円板			56	6	11.2	結晶片岩	欠
103		四213-RR・SS	溝181	弥生 後期	削器		43	78	9	26.7	サヌカイト	完
104		足213-PP・QQ	溝151南Tr	弥生?	削器		99	58	13	89.3	サヌカイト	完
105		四213-SS	溝46(旧)		楔形石器		39	36	11	18.8	サヌカイト	完
106		四213-RR・SS	溝180	弥生 中期	削器		71	41	12	36.7	サヌカイト	欠
107		足213-QQ	暗褐色砂	弥生?	削器		63	78	9	37.9	サヌカイト	完
108		足213-NN	水田耕作層	弥生 後期	石鏢	Ⅱ	19	12	2	0.6	サヌカイト	欠
109		足213-QQ	溝172	古墳	石鏢		32	12	4	1.1	サヌカイト	欠
110		四213-RR・SS	溝180	弥生 中期	石鏢	Ⅱ	24	22	3	1.6	サヌカイト	完
111		四213-SS	水田	弥生 後期	石鏢	I	32	21	7	4.3	サヌカイト	完
112		四213-SS	水田	弥生 後期	石鏢	V	27	16	5	1.3	サヌカイト	完
113		四213-RR・SS	溝180	弥生 中期	環状石斧			84	25	104		欠
114		四213-RR	礫混暗灰色粘質土		石鏢	Ⅱ	26	19	3	0.8	サヌカイト	完
115		足213-QQ	溝173	古墳	石鏢	Ⅱ	21	20	5	1.3	サヌカイト	完
116		四213-SS	土塙9(旧)	弥生?	石鏢	I	15	13	3	0.6	サヌカイト	欠

百間川沢田遺跡 3

番号	插图 番号	出土地区	遺構・土層名	時代・時期	器種	形式	計測最大幅 (mm)			重量 (g)	材質	残存
							長	幅(径)	厚			
117		四213-SS・TT	縄文包含層	縄文 後期	石鏃	Ⅱ	15	15	3	0.5	サヌカイト	完
118		四213-SS・TT	縄文包含層	"	石鏃	Ⅱ	24	16	3	0.6	サヌカイト	完
119		四213-SS・TT	縄文包含層	"	石鏃	Ⅱ	22	13	3	0.7	サヌカイト	完
120		四213-SS・TT	縄文包含層	"	石鏃	Ⅱ	21	14	2	0.7	サヌカイト	欠
121		四213-SS・TT	縄文包含層	"	石鏃	Ⅱ	18	18	3	0.9	サヌカイト	欠
122		四213-SS・TT	縄文包含層	"	石鏃	Ⅱ	15	15	3	0.9	サヌカイト	欠
123		四213-SS	縄文包含層	"	石鏃	Ⅱ	17	13	2	0.9	サヌカイト	完
124		足213-PP・QQ	溝151	弥生 中期	石鏃	Ⅱ	21	17	2	0.8	サヌカイト	欠
125		四213-SS・TT	縄文包含層	縄文 後期	石鏃	Ⅲ	27	19	7	2.5	サヌカイト	完
126		四213-SS・TT	縄文包含層	"	石鏃	Ⅲ	25	24	5	2.5	サヌカイト	欠
127		四213-SS・TT	縄文包含層	"	石鏃	Ⅲ	31	21	7	4.3	サヌカイト	完
128		四213-SS・TT	溝180	弥生 中期	石鏃状削器		123	47	11	56.9	サヌカイト	完
129		四213-SS・TT	淡灰緑色粘質土		石鏃	I	21	16	3	1.0	サヌカイト	完
130		四213-SS・TT	縄文包含層	縄文 後期	石鏃	Ⅱ	25	17	4	1.2	サヌカイト	完
131		足213-OO	淡灰色粘土層		石鏃	Ⅳ	35	15	4	2.3	サヌカイト	完
132		四213-RR・SS	溝179	弥生 前期	石鏃	打ち欠き	70	69	21	140		完
133		四213-SS	淡緑黄灰色砂		石鏃	打ち欠き	132	136	31	648	花崗岩	完
134		四213-RR・SS	溝180	弥生 中期	磨製石斧		133	64	54	783	細粒閃緑岩	欠
135		足213-OO	南北 Tr 砂層中		投弾		50	49	37	131		完
136		四213-RR・SS	溝180	弥生 中期	石鏃	打ち欠き	70	63	20	114		欠
137		四213-RR・SS	溝180	弥生 中期	石鏃	打ち欠き	74	73	24	177	流紋岩	完
138		足213-PP・QQ	溝149	弥生 前期	石鏃	打ち欠き	81	65	19	146	花崗岩	完
139		四213-SS	溝179	弥生 前期	石鏃	打ち欠き	94	72	27	255	花崗岩	完
140		四213-RR・SS	溝183	弥生 後期	礫石		110	76	31	435		完
141		四213-SS	灰色粘土 (3層)		磨製石斧		121	68	48	650	流紋岩	欠
142		高A207-8-J	茶灰色土		削器		49	36	7	14.9	サヌカイト	欠
143		高A207-8-J	茶灰色土		石鏃	Ⅱ	20	12	3	0.8	サヌカイト	完
144		高A207-8-J	茶灰色土		石鏃	Ⅱ	9	15	3	0.4	サヌカイト	欠
145		高A207-J	土壌54	弥生 前期	石鏃		38	8	5	1.3	サヌカイト	完
146		高A207-J	土壌54	弥生 前期	石鏃	I	19	12	3	0.6	サヌカイト	完
147		高A207-K	溝52	古代	石鏃	I	28	20	5	2.8	サヌカイト	完
148		高A207-8K	堅穴住居20	古墳	石鏃	I	22	18	3	1.2	サヌカイト	完
149		高A207-J	溝42	弥生 前期	石鏃	V	19	16	3	0.6	サヌカイト	完
150		高A207-J	P-11 (旧)		石鏃	V	29	19	5	1.8	サヌカイト	完
151		高A207-J	土壌55	弥生 前期	石鏃	Ⅱ	19	15	3	0.7	サヌカイト	完
152		高A207-J	P-32 (旧)		石鏃	Ⅱ	19	14	3	0.5	サヌカイト	完
153		高A207-8-J	茶灰色土		石鏃		27	11	5	1.0	サヌカイト	完
154		高A207-8-J	茶灰色土		石鏃	I?	21	15	4	0.8	サヌカイト	欠
155		高A207-8-J	茶灰色土		石鏃	I	15	14	2	0.4	サヌカイト	完
156		高A207-J	P-49 (旧)		石鏃	I	16	12	3	0.5	サヌカイト	完
157		高A207-J	土壌50	弥生 前期	石鏃	Ⅱ	20	15	3	0.6	サヌカイト	完
158		高A207-8-K	溝55	弥生 前期	石鏃	I	19	14	3	0.8	サヌカイト	完
159		高A207-J・K	溝46, 47	弥生 後期	石鏃	Ⅱ	16	13	3	0.5	サヌカイト	欠
160		高A207-8-J	黄色土上面	弥生	石鏃		40	20	5	2.3	サヌカイト	完
161		高A207-J	土壌53	弥生 前期	石鏃	Ⅱ	20	19	4	1.4	サヌカイト	完
162		高A207-8-J	茶灰色土		石鏃	V	21	10	4	1.0	サヌカイト	完
163		高B208-O	水田耕作土中	弥生 後期	石鏃	I	16	12	3	0.5	サヌカイト	完
164		高B207-8-O	東嶺高地斜面	弥生?	石鏃	Ⅱ	18	19	4	0.8	サヌカイト	欠
165		高B207-O	茶灰色土中		石鏃	I	22	15	3	1.3	サヌカイト	完
166		高B207-8-O	暗灰色微砂粘土		石鏃	Ⅲ	28	13	6	1.8	サヌカイト	完
167		高B207-8-O	暗灰色微砂粘土		石鏃	I	16	17	3	0.9	サヌカイト	欠
168		高B207-8-O	茶灰色粘質微砂		石鏃	Ⅱ	19	12	2	0.5	サヌカイト	完
169		高B207~9-O・P	溝58下層	弥生 前期	石鏃	Ⅱ	20	13	3	0.7	サヌカイト	完
170		高B207-8-O	斜面淡灰青色粘土	弥生	石鏃	Ⅱ	18	14	3	0.6	サヌカイト	完
171		高B207-8-O	斜面上・中層	弥生	石鏃	Ⅲ	21	13	3	0.6	サヌカイト	完
172		高B207-8-O	斜面上・中層	弥生	石鏃		23	16	5	1.2	サヌカイト	完
173		高B208-O	灰色粘土		石鏃	I	16	15	3	0.5	サヌカイト	完
174		高B207-8-O	斜面上・中層	弥生	石鏃		32	14	5	1.9	サヌカイト	欠
175		高B207-8-O	斜面淡灰青色粘土	弥生	石鏃		21	29	5	4.0	サヌカイト	欠

石製品一覽表

番号	插圖 番号	出土地区	遺構・土層名	時代・時期	器種	形式	計測最大幅 (mm)			重量 (g)	材質	残存
							長	幅(径)	厚			
176		高B207-8-O	微高地灰茶色土		石鏃	Ⅱ	25	19	5	1.9	サヌカイト	完
177		高B207-8-O	灰黒色粘土		石鏃	Ⅱ	24	18	4	1.2	サヌカイト	完
178		高B207-O	暗黒色粘土		石鏃	Ⅲ	31	13	4	1.5	サヌカイト	完
179		高B207-O	土壌92	弥生 前期	石鏃		21	13	3	0.7	サヌカイト	完
180		高B207-O	土壌97	弥生 前期	石鏃	I	17	16	3	0.6	サヌカイト	完
181		高B207-O	土壌97	弥生 前期	石鏃	I	30	17	7	2.4	サヌカイト	完
182		高B207-8-O	斜面上・中層	弥生	削器		97	52	14	74.1	サヌカイト	完
183		高B208-S・T	溝98	弥生 後期	石鏃	Ⅱ	21	16	4	1.1	サヌカイト	完
184		高B208-R	溝27, 28 (旧)		石鏃	V	30	16	3	1.1	サヌカイト	完
185		高B208-P	溝33 (旧)		石鏃	V	23	13	4	0.8	サヌカイト	完
186		高B207~9-P・Q	溝62 下層	弥生 中期	石鏃		41	18	6	4.8	サヌカイト	完
187		高B207~9-P・Q	溝62 下層	弥生 中期	石鏃	I	20	12	3	0.6	サヌカイト	完
188		高B207~9-P~R	溝117	弥生 後期	石鏃	Ⅱ	19	14	2	0.5	サヌカイト	完
189		高B208-S	溝122	弥生 後期	石鏃	Ⅱ	19	15	2	0.6	サヌカイト	完
190		高B208-Q・R	池状遺構2	弥生 中期	石鏃		27	14	3	1.2	サヌカイト	完
191		高B208-S・T	溝99	弥生 後期	石鏃	I	33	21	5	3.4	サヌカイト	欠
192		高B207-8-P	茶褐色土包含層		石鏃		17	12	4	0.7	サヌカイト	欠
193		高B207-8-P	茶褐色土包含層		石鏃	I	15	14	3	0.5	サヌカイト	欠
194		高B207-8-P	茶褐色土包含層		石鏃	V	20	11	3	0.5	サヌカイト	欠
195		高B207-8-P	茶褐色土包含層		石鏃	I	19	16	4	1.3	サヌカイト	欠
196		高B207~10-Q~V	溝88	弥生 後期	石鏃	I	23	17	3	0.9	サヌカイト	完
197		高B207~10-Q	溝118	古墳	石鏃	I	17	12	3	0.7	サヌカイト	完
198		高B207~9-P~S	前期包含層	弥生 前期	石鏃	Ⅱ	12	15	2	0.4	サヌカイト	欠
199		高B208-P	灰褐色土		石鏃	Ⅱ	21	19	4	1.2	サヌカイト	完
200		高B208-P	灰褐色土		石鏃	Ⅱ	11	14	3	0.4	サヌカイト	欠
201		高B208-P	灰褐色土		石鏃		36	15	7	3.4	サヌカイト	欠
202		高B208-P	灰褐色土		石鏃?		23	15	4	1.1	サヌカイト	欠
203		高B207~9-O・P	溝74	弥生 後期	石鏃	Ⅱ	18	17	3	0.7	サヌカイト	欠
204		高B208-Q	水田層	弥生 後期	石鏃	Ⅱ	28	14	4	1.1	サヌカイト	完
205		高B208-S			石鏃	I	19	14	4	1.0	サヌカイト	完
206		高B207~10-Q~V	溝120	弥生 後期	石鏃	I	25	11	4	1.2	サヌカイト	完
207		高B208-P	茶褐色土		石鏃	V	19	12	3	0.6	サヌカイト	完
208		高B208-P	土壌101	弥生 前期	石鏃	I	22	16	2	0.8	サヌカイト	完
209		高B208-P	土壌101	弥生 前期	石鏃		17	15	3	0.8	サヌカイト	欠
210		高B208-P	土壌101	弥生 前期	石鏃		23	12	5	1.1	サヌカイト	欠
211		高B207~9-P・Q	溝62 上層	弥生 中期	石鏃	Ⅱ	19	13	4	0.9	サヌカイト	完
212		高B207~9-O・Q	溝62 上層	弥生 中期	石鏃	Ⅱ	13	21	5	1.0	サヌカイト	欠
213		高B207~9-P	溝75	弥生 後期	石鏃	Ⅱ	26	27	5	3.8	サヌカイト	欠
214		高B208-P	灰褐色土		石鏃	I	19	19	3	0.8	サヌカイト	完
215		高B208-Q・R	池状遺構2	弥生 中期	石鏃		35	18	7	3.7	サヌカイト	完
216		高B207~9-P・Q	溝62	弥生 中期	石鏃	I	23	19	5	2.2	サヌカイト	完
217		高B208-P	黄灰色砂質土		石鏃	Ⅱ	22	18	3	0.9	サヌカイト	完
218		高B208-P	黄灰色砂質土		石鏃	V	23	14	3	1.0	サヌカイト	欠
219		高B207~9-P	溝116	弥生 後期	石鏃	I	16	18	3	0.8	サヌカイト	欠
220		高B207~9-P・Q	溝62 上層	弥生 中期	磨製石包丁		66	41	10	28.1	結晶片岩	欠
221		高B207~9-P・Q	溝62 下層	弥生 中期	打製石包丁		61	48	10	36.3	サヌカイト	欠
222		高B207~9-O・P	溝74	弥生 後期	石鏃	Ⅱ	18	13	2	0.4	サヌカイト	完
223		高B207~9-P~R	溝80	弥生 後期	石鏃		23	18	4	1.6	サヌカイト	欠
224		高B208-R	溝108	弥生 後期	石鏃	Ⅱ	26	18	4	1.5	サヌカイト	完
225		高B208-R	溝108	弥生 後期	石鏃	Ⅱ	24	18	3	1.0	サヌカイト	完
226		高B208-P	灰褐色土		石鏃		20	25	6	2.1	サヌカイト	欠
227		高B208-P	灰褐色土		石鏃	Ⅱ	24	16	4	1.0	サヌカイト	欠
228		高B208-P	灰褐色土		石鏃		15	14	4	0.8	サヌカイト	欠
229		高B208-S	溝96	弥生 後期	石鏃	I	22	13	3	0.8	サヌカイト	完
230		高B208-S	溝96	弥生 後期	石鏃	I	32	30	6	4.7	サヌカイト	完
231		高B208-Q・R	池状遺構2	弥生 中期	石鏃		27	10	3	0.8	サヌカイト	欠
232		高B207~9-P	溝75	弥生 後期	石鏃	Ⅱ	19	14	3	0.5	サヌカイト	完
233		高B207~9-P	溝75	弥生 後期	石鏃	Ⅱ	22	17	3	1.1	サヌカイト	欠
234		高B207~9-O・P	溝74 下層	弥生 後期	石鏃		31	17	5	2.5	サヌカイト	欠

百間川沢田遺跡 3

番号	插图番号	出土地区	遺構・土層名	時代・時期	器種	形式	計測最大幅 (mm)			重量 (g)	材質	残存
							長	幅(径)	厚			
235		高B207~9-P・Q	溝62 上層	弥生 中期	削器		63	41	7	25.8	サヌカイト	欠
236		高A206-G	P-88 (旧)		石鏃	I	16	12	3	0.5	サヌカイト	完
237		高A206-G	P-88 (旧)		石鏃	II	21	14	3	0.5	サヌカイト	欠
238		高A206-7-F~I	溝11	弥生 後期	石鏃	IV	27	14	3	1.0	サヌカイト	完
239		高B207-8-P	茶褐色土包含層		石鏃		25	8	3	0.6	サヌカイト	完
240		高B207-8-P	茶褐色土包含層		石鏃?		14	16	2	0.5	サヌカイト	欠
241		高A205-6-F・G	溝36 中層	弥生 前期	石鏃	I	11	14	3	0.6	サヌカイト	欠
242		高A206-G	前期包含層	弥生 前期	石鏃		18	18	5	1.5	サヌカイト	完
243		高B207~9-O・P	溝74 上層	弥生 後期	石鏃	IV	27	14	3	1.2	サヌカイト	完
244		高B207~9-O・P	溝74 上層	弥生 後期	石鏃	II	22	15	4	1.0	サヌカイト	欠
245		高A206-7-G~J	溝38 上層	弥生 前期	石鏃	II	29	19	5	1.2	サヌカイト	完
246		高A206-G	暗灰色弥生包含層	弥生	石鏃	I	13	15	4	0.9	サヌカイト	欠
247		高A205-6-G	暗灰褐色粘質土		石鏃	II	16	12	3	0.5	サヌカイト	欠
248		高A206-G	竪住9床直	古墳	石鏃	II	15	15	2	0.4	サヌカイト	完
249		高B208-P	溝33 (旧)		石鏃	II	11	16	3	0.5	サヌカイト	欠
250		高B207~9-P	溝75	弥生 後期	石鏃	II	14	20	4	1.0	サヌカイト	欠
251		高B207-P	黄灰色砂質土		石鏃	I	17	18	3	0.9	サヌカイト	欠
252		高B208-Q・R	池状遺構2	弥生 中期	削器		51	26	5	6.6	サヌカイト	完
253		高B208-Q・R	池状遺構2	弥生 中期	石鏃	IV	18	10	1	0.3	サヌカイト	完
254		高B208-Q・R	池状遺構2	弥生 中期	打製石包丁		103	42	14	71	サヌカイト	完
255		高B207~9-P・Q	溝62 下層	弥生 中期	石鏃		22	20	4	1.4	サヌカイト	欠
256		高A206-G	土壌16 (旧)		石鏃		211	89	28	428	サヌカイト	完
257		高B207~9-P・Q	溝62 上層	弥生 中期	石棒		145	65			結晶片岩	欠
258		高B207~9-P・Q	溝62 上層	弥生 中期	石棒		100	63			結晶片岩	欠
259		高B207~9-P・Q	溝62 下層	弥生 中期	敲石		121	88	61	723		欠
260		高A205-6-F・G	溝36上, 中層	弥生 前期	敲石		83	92	37	445	礫岩	欠
261		高A206-7-G~J	溝38	弥生 前期	石鏃	II	14	19	4	0.9	サヌカイト	欠
262		高A206-H	竪住6	弥生 前期	石鏃	V	28	18	3	0.9	サヌカイト	完
263		高A206-I	P-157 (旧)		石鏃	II	18	13	4	0.7	サヌカイト	完
264		高A206-H	竪住6	弥生 前期	石鏃	V	21	16	2	0.4	サヌカイト	完
265	S 5	高A207-I	竪住7	弥生 前期	石鏃		20	12	5	0.6	サヌカイト	欠
266	S 6	高A207-I	竪住7	弥生 前期	石鏃	V	24	16	3	0.8	サヌカイト	欠
267		高A207-H	暗褐色土層		石鏃	II	29	17	4	1.4	サヌカイト	完
268		高A207-H	暗褐色土層		石鏃	II	23	23	4	2.4	サヌカイト	欠
269		高A207-H	暗褐色土層		石鏃	I	18	15	4	1.2	サヌカイト	欠
270		高A206-H	P-117 (旧)		石鏃	II	19	14	3	0.6	サヌカイト	完
271		高A206-7-H	暗灰褐色土		石鏃	II	16	13	4	0.8	サヌカイト	欠
272		高A206-7-H	暗灰褐色土		石鏃		29	12	5	1.7	サヌカイト	完
273		高A206-7-H	暗褐色土		石鏃		15	9	4	0.5	サヌカイト	欠
274		高A206-7-I	P-155 (旧)		石鏃		19	20	3	1.1	サヌカイト	欠
275		高A206-7-H・I	暗褐色土		石鏃		22	26	5	2.4	サヌカイト	欠
276		高A206-7-H・I	暗褐色土		石鏃		36	22	4	2.6	サヌカイト	完
277		高A206-7-H・I	暗褐色土		石鏃		22	18	2	0.6	サヌカイト	欠
278		高A206-7-H・I	暗褐色土		石鏃		17	13	3	0.5	サヌカイト	欠
279		高A206-7-H	暗灰褐色土		石鏃	II	26	20	4	1.3	サヌカイト	欠
280		高A206-7-H	暗褐色土		削器		30	35	8	8.5	サヌカイト	欠
281		高A207-I	竪住10	古墳	石鏃	II	13	16	4	0.8	サヌカイト	欠
282		高A206-H	暗褐色粘土		石鏃	II	17	13	4	0.7	サヌカイト	欠
283		高A206-7-H・I	側溝		石鏃	II	21	15	3	0.7	サヌカイト	完
284		高A206-7-H	暗褐色土		石鏃	II	29	17	3	1.2	サヌカイト	欠
285		高A207-I	竪住10	古墳	石鏃	II	19	13	2	0.4	サヌカイト	欠
286		高A206-H	土壌31	弥生 前期	石鏃	III	29	18	6	2.9	サヌカイト	完
287		高A207-H	溝11	弥生 前期	石鏃	V	29	16	3	1.0	サヌカイト	完
288		高A207-H	溝11	弥生 前期	石鏃	I	14	13	3	0.6	サヌカイト	完
289		高A207-H	溝11	弥生 前期	石鏃	II	21	14	3	0.7	サヌカイト	完
290		高A207-I	竪住8	弥生 前期	石鏃	III	20	15	3	1.0	サヌカイト	欠
291		高A206-7-I	暗褐色土		石鏃	I	21	16	5	1.9	サヌカイト	欠
292		高A206-7-H	竪住10	古墳	石鏃	I	17	14	2	0.4	サヌカイト	欠
293		高A206-H	暗灰褐色土		石鏃	V	22	24	4	1.5	サヌカイト	欠

石製品一覽表

番号	插图 番号	出土地区	遺構・土層名	時代・時期	器種	形式	計測最大幅 (mm)			重量 (g)	材質	残存
							長	幅(径)	厚			
294	S 3	高A206-7-H	竪住10	古墳	石鏃	I	30	25	5	4.1	サヌカイト	完
295		高A207-I	土塚41	弥生 前期	石鏃	I	22	15	3	1.0	サヌカイト	完
296	S 2	高A206-H	竪住6	弥生 前期	石鏃	V	23	16	3	0.7	サヌカイト	完
297	S 1	高A206-H	竪住6	弥生 前期	石鏃	V	27	16	2	0.5	サヌカイト	完
298		高A207-H	竪住15	古墳	石鏃	II	19	12	2	0.4	サヌカイト	完
299	S 4	高A206-H	竪住6	弥生 前期	石鏃	II	21	19	4	1.1	サヌカイト	欠
300		高A206-H	土塚30	弥生 前期	石鏃		35	11	6	2.6	サヌカイト	完
301		高A206-7-I	暗褐色土		磨製石包丁		33	51	7	12	結晶片岩	欠
302		高A206-7-H・I	暗褐色土		磨製石斧		37	61	37	93		欠
303		横205-F	暗褐色粘土		石鏃	II	14	18	3	1.0	サヌカイト	欠
304		横204~6-D~F	淡灰黄色細砂		石鏃	III	22	13	4	1.2	サヌカイト	完
305		横206-F	暗褐色粘土		石鏃	I	12	10	2	0.3	サヌカイト	完
306		横204-C	後期水田層直下		石鏃	II	13	14	3	0.5	サヌカイト	欠
307		横205-E	暗褐色粘土		石鏃	II	27	17	3	1.0	サヌカイト	欠
308		横205-E	暗灰褐色粘土		石鏃	I	14	10	3	0.3	サヌカイト	欠
309		横205-E	暗灰褐色粘土		石鏃	I	10	11	3	0.4	サヌカイト	欠
310		横203-C	暗灰色粘土		石鏃	II	22	14	4	1.0	サヌカイト	完
311		横203B・C	溝14	弥生 後期	石鏃	V	20	13	3	0.6	サヌカイト	完
312		横203C	土塚1	弥生 前期	削器		42	53	8	16.1	サヌカイト	欠
313		横204-E	北側側溝		石鏃		29	8	4	0.8	サヌカイト	完
314		横204-B	淡青灰色粘土斑微砂		石鏃	V	21	15	3	0.7	サヌカイト	完
315		横203-C	褐色粘土層		石鏃	I	23	15	4	1.2	サヌカイト	完
316		横203-C	褐色粘土層		石鏃		28	10	3	0.8	サヌカイト	欠
317		横203-C	暗灰褐色粘土		石鏃	II	16	14	5	0.7	サヌカイト	完
318		横203-C	暗灰褐色粘質土		石鏃	II	18	13	3	0.6	サヌカイト	完
319		横205-F	暗褐色粘土		石鏃	I	17	16	3	1.0	サヌカイト	欠
320		横206-F	暗灰褐色粘土		石鏃		27	13	3	1.1	サヌカイト	欠
321		高A205-6-G	溝36	弥生 前期	石鏃		28	15	3	0.9	サヌカイト	欠
322		横204-B	暗灰褐色土		石鏃	I	21	19	4	1.1	サヌカイト	欠
323		横203-C	暗灰褐色粘質土		石鏃		35	14	4	1.9	サヌカイト	完
324		横204-D	後期水田層直下		石鏃		58	37	5	13.2	結晶片岩	完
325		横205-6-F	暗褐色粘土		石鏃		113	44	18	97	サヌカイト	完
326		足212-3-FF-GG	溝150A-A断面	弥生 中期	石鏃	II	29	19	4	1.6	サヌカイト	完
327		足213-EE	水田層	弥生 後期	石鏃	III	24	12	2	0.8	サヌカイト	完
328		足213-EE	水田下30cm	弥生	石鏃	I	29	16	4	1.8	サヌカイト	完
329		足212-3GG	溝174		石鏃		27	14	4	1.4	サヌカイト	欠
330		足212-3GG	溝174	中世	石鏃	II	30	17	3	1.5	サヌカイト	完
331		高B209-Q	暗茶褐色土層	縄文 晩期	円板		73	7	69		結晶片岩	完
332		高B209-R	暗茶褐色土層	縄文 晩期	石棒		104	66			黒雲母片岩	欠
333		高B209-R	土塚87	縄文 晩期	石鏃	V	23	15	6	1.6	サヌカイト	完
334		高B209-R	土塚87	縄文 晩期	石鏃		14	8	3	0.3	サヌカイト	欠
335		高B207~9-P	溝126	古墳	投擲		37	37	35	69.2		完
336		高B207~10-Q~V	溝118	弥生 後期	石鏃		28	21	3	1.3	サヌカイト	欠
337		高B207~10-Q~W	溝118	弥生 後期	石鏃	I	18	18	4	1.3	サヌカイト	欠
338		高B207~10-Q~V	溝118	弥生 後期	石鏃	II	12	16	3	0.4	サヌカイト	欠
339		高B209-P	P-6 (旧)		石鏃	V	23	17	3	0.8	サヌカイト	完
340		高B208-9-P・Q	溝130	古墳	石鏃	I	17	14	3	0.6	サヌカイト	完
341		高B208-9-P・Q	溝130	古墳	石鏃	II	20	15	3	0.6	サヌカイト	完
342		高B207~10-Q~W	溝89	弥生 後期	石鏃	II	19	16	4	1.0	サヌカイト	完
343		高B207~10-Q~W	溝89	弥生 後期	石鏃		16	13	2	0.5	サヌカイト	欠
344		高B207~10-Q~W	溝89	弥生 後期	石鏃	II	20	15	3	0.6	サヌカイト	欠
345		高B209-R	暗茶褐色土層		磨製石斧		91	48	25	155	流紋岩	完
346		高B209-S	前期包含層	弥生 前期	磨製石包丁		182	62	10	164	礫岩片岩	完
347		高B209-R	暗茶褐色土層		石鏃		28	18	4	1.5	サヌカイト	完
348		高B207~10-Q~V	溝118	弥生 後期	打製石包丁		48	38	6	15	サヌカイト	欠
349		高B208~10-R~V	溝121	弥生 後期	石鏃	I	21	22	3	1.1	サヌカイト	欠
350		高B209-S	欄列1 (旧)	弥生 前期	石鏃	II	19	13	3	0.6	サヌカイト	欠
351		高B209-S	欄列1 (旧)	弥生 前期	石鏃	I	11	13	3	0.3	サヌカイト	欠
352		高B208-9-P・Q	溝130	古墳	石鏃	V	22	16	3	1.0	サヌカイト	欠

百間川沢田遺跡 3

番号	插图番号	出土地区	遺構・土層名	時代・時期	器種	形式	計測最大幅 (mm)			重量 (g)	材質	残存
							長	幅(径)	厚			
353		高B207~10-Q~V	溝119	弥生 後期	石鏃	I	23	11	4	1.4	サヌカイト	完
354		高B207~10-Q~V	溝119	弥生 後期	石鏃	II	22	19	4	1.5	サヌカイト	欠
355		高B207~10-Q~V	溝119	弥生 後期	石鏃	II	23	16	4	1.0	サヌカイト	欠
356		高B207~10-Q~V	溝119	弥生 後期	石鏃		19	16	3	0.9	サヌカイト	欠
357		高B207~10-Q~V	溝119	弥生 後期	石鏃		39	33	18	13	サヌカイト	欠
358		高B208-T	溝104	弥生 後期	石鏃	II	23	18	9	1.4	サヌカイト	完
359		高B208-T	溝104	弥生 後期	削器		54	53	14	33.9	サヌカイト	完
360		高B209-R	側溝		石鏃		126	102	26	480		完
361		高B209-R	暗茶褐色土層		石鏃	II	14	18	3	0.6	サヌカイト	欠
362		高B209-R	暗茶褐色土層		石鏃	I	31	16	4	1.1	サヌカイト	欠
363		高B208-W	暗褐色粘質土		打製石包丁		43	48	8	19	サヌカイト	欠
364		高B208-W	明褐色砂質土		磨製石包丁		33	48	8	17	結晶片岩	欠
365		高B208-9-T	前部下層水田覆土	弥生 前期	石鏃	II	24	17	4	1.2	サヌカイト	欠
366		高B208-U	前部下層水田覆土	弥生 前期	石鏃	V	25	16	3	1.0	サヌカイト	完
367		高A208-9-X	溝68	弥生 中期	石鏃	II	23	16	3	0.8	サヌカイト	完
368		高B208-U	前部下層水田層	弥生 前期	石鏃	V	22	16	3	0.8	サヌカイト	完
369		高B208-T	前部下層水田覆土	弥生 前期	削器		51	35	7	11.1	サヌカイト	完
370		高B208-T	前部下層水田覆土	弥生 前期	石鏃	V	21	17	3	0.7	サヌカイト	完
371		高B208-9-W-X	第2層上部		石鏃		36	17	5	3.1	サヌカイト	欠
372		高B208-V	島状高まり上面	弥生?	石鏃	I	25	19	4	1.9	サヌカイト	完
373		高B208-V	弥生後期水田上面	弥生?	石鏃	II	33	20	5	2.7	サヌカイト	完
374		高B208-V	第2層		砥石		79	34	29	110	サヌカイト	欠
375		高B209-U	島状高まり内	弥生	石鏃	I	24	15	3	1.1	サヌカイト	完
376		高B207~10-Q~W	溝90	弥生 後期	石鏃	II	23	22	4	2.0	サヌカイト	欠
377		高B207~10-K~V	溝89その他	弥生 後期	石鏃	II	17	18	3	0.6	サヌカイト	欠
378		足210-BB-CC	西大畔下層土器溜り	弥生	石鏃	VI	50	27	5	5.8	サヌカイト	欠
379		高B209-10-U~W	溝7-3 (旧)		石鏃	I	24	21	5	1.8	サヌカイト	完
380		高B209-D	暗灰褐色粘性砂質土		石鏃	II	16	14	2	0.4	サヌカイト	完
381		高B209-O	暗灰褐色粘性砂質土		石鏃	II	18	17	5	0.9	サヌカイト	完
382		高B209-Q	暗褐色土		石鏃	I	24	16	5	1.5	サヌカイト	完
383		高B208-O	中央東西 Tr 上層		石鏃?		26	15	3	1.0	サヌカイト	欠
384		高B208-N・O	黒灰色粘土		石鏃	II	20	21	3	0.9	サヌカイト	欠
385		高B208-O	暗灰褐色粘性砂質土		石鏃		16	13	4	0.8	サヌカイト	欠
386		高B209-M	青灰色粘性砂質土		打製石包丁		38	54	8	22	サヌカイト	欠
387		高B209-M	暗灰色粘性砂質土		石鏃?		22	19	2	1.1	サヌカイト	完
388		高B208-9-O・P	黄褐色粘性土		削器		39	27	8	8.2	サヌカイト	欠
389		高B208-9-O	灰色粘性砂質土		石鏃	V	25	17	4	1.3	サヌカイト	欠
390		高B208-9-O・P	溝58	弥生 前期	削器		65	27	8	18.2	サヌカイト	欠
391		高B209-R	暗茶褐色土層		打製石包丁		104	35	12	63	サヌカイト	完
392		高B208-L	灰黄褐色砂質土		石鏃		56	46	35	150	斑岩	完
393		高B208-O	灰色粘質土まで		石鏃	I	21	20	3	1.1	サヌカイト	完
394		高B208-O	灰色粘質土まで		石鏃	II	16	15	3	0.7	サヌカイト	欠
395		高B208-N	灰色粘性砂質土		石鏃	I	23	17	4	1.2	サヌカイト	完
396		高B207~9-O	溝50	古墳	削器		43	33	11	18.5	サヌカイト	欠
397		高B209-O	微下がり灰色粘質土	弥生	石鏃	I	14	11	2	0.3	サヌカイト	欠
398		高B209-O	微下がり灰色粘質土	弥生	石鏃	II	19	16	3	0.9	サヌカイト	完
399		高B209-O	微下がり灰色粘質土	弥生	石鏃	I	24	22	4	1.8	サヌカイト	欠
400		高B209-O	微下がり灰色粘質土	弥生	石鏃	II	21	13	3	0.5	サヌカイト	欠
401		高B209-R	暗茶褐色土層		石鏃	II	25	15	4	1.4	サヌカイト	完
402		高B209-R	暗褐色土層		石鏃	II	18	15	3	0.5	サヌカイト	完
403		高B209-R	暗茶褐色土層		石鏃	II	10	17	2	0.4	サヌカイト	欠
404		高B209-R	暗茶褐色土層		石鏃		24	22	4	1.7	サヌカイト	完
405		高B208-O	暗灰褐色粘性砂質土		石鏃		20	17	2	0.8	サヌカイト	欠
406		高B208-O	暗灰褐色粘性砂質土		石鏃	V	24	18	4	1.4	サヌカイト	欠
407		高B208-O	暗灰褐色粘性砂質土		石鏃	II	25	12	5	1.2	サヌカイト	欠
408		高B208-O	暗灰褐色粘性砂質土		石鏃	II	16	16	3	0.5	サヌカイト	欠
409		高B208-O	暗灰褐色粘性砂質土		石鏃		15	5	3	0.3	サヌカイト	欠
410		高B207~9-O	溝58	弥生 前期	石鏃	II	21	17	3	0.7	サヌカイト	完
411		高B207~9-O	溝58	弥生 前期	石鏃	II	24	14	2	0.7	サヌカイト	欠

石製品一覽表

番号	挿図 番号	出土地区	遺構・土層名	時代・時期	器種	形式	計測最大幅(mm)			重量 (g)	材質	残存
							長	幅(径)	厚			
412		高B208-9-N・O	灰色粘土層		石鏃		13	11	3	0.3	サヌカイト	欠
413		高B208-9-M~O	表面		石鏃	Ⅱ	16	18	2	0.8	サヌカイト	欠
414		高B208-9-M~O	表面		石鏃		22	21	6	3.1	サヌカイト	欠
415		高B208-9-M~O	水田層	弥生 後期	石鏃	Ⅱ	32	24	4	1.9	サヌカイト	欠
416		高B209-P	灰褐色粘性土		石鏃	I	15	13	3	0.4	サヌカイト	完
417		高B208-9-M~O	旧河道東岸表採		石鏃	Ⅱ	23	20	4	1.3	サヌカイト	欠
418		高B208-N	暗灰色粘土層		石鏃		51	20	7	7.3	サヌカイト	欠
419		高B209-O	微下がり黒色帯上面		石鏃	Ⅱ	18	16	3	0.7	サヌカイト	完
420		高B209-O	微下がり黒色帯上面		石鏃	I	26	18	3	1.0	サヌカイト	完
421		高B209-O	微下がり黒色帯上面		石鏃		37	20	5	2.1	サヌカイト	完
422		高B209-O	微下がり黒色帯上面		石鏃		38	17	6	2.8	サヌカイト	欠
423		高B208-9-M~O	暗青灰色粘性土		打製石包丁		52	47	7	16.6	サヌカイト	欠
424		高B208-9-O	暗灰色粘土層		石鏃	Ⅲ	28	23	5	3.3	サヌカイト	完
425		高B207-L	土壌117	古墳	礫石		79	67	43	331	細粒花崗岩	完
426		高B209-P	灰褐色粘性土		石鏃	Ⅱ	20	20	3	1.0	サヌカイト	欠
427		高B208-O	淡青灰色粘土層		石鏃	Ⅱ	26	18	4	1.2	サヌカイト	完
428		高B208-N	大畔下横木局辺	弥生	石鏃		30	7	3	0.7	サヌカイト	欠
429		高B208-M	溝		楔形石器		31	31	12	12.9	サヌカイト	完
430		高B209-P	土壌105	弥生 前期	石鏃	Ⅱ	22	20	5	2.2	サヌカイト	完
431		高B209-N・O	南側溝		石鏃	I	30	25	4	2.5	サヌカイト	欠
432		高B208-O	中央東西 Tr 上層		楔形石器		47	28	18	20.8	サヌカイト	完
433		高B208-L	灰色粘土層		石鏃		28	10	4	1.2	サヌカイト	欠
434		高B209-P	黒色帯		石鏃	I	14	11	2	0.4	サヌカイト	欠
435		高B209-P・Q	遺構検出中		石鏃		28	21	4	1.5	サヌカイト	完
436		高B208-P	土壌103	弥生 前期	石鏃	I	16	13	2	0.5	サヌカイト	完
437		高B209R	石器集積土壌2	縄文 晩期	石核		137	119	439	518	サヌカイト	完
438		高B209-R	石器集積土壌2	"	石核		125	111	28	399	サヌカイト	完
439		高B209-R	石器集積土壌2	"	剝片		85	64	8	46.7	サヌカイト	完
440		高B209-R	石器集積土壌2	"	石核		236	120	34	1024	サヌカイト	完
441		高B209-R	石器集積土壌2	"	石核		209	165	36	822	サヌカイト	完
442		高B209-R	石器集積土壌2	"	石鏃		222	208	29	764	サヌカイト	完
443		高B209-R	石器集積土壌1	"	石核		183	150	29	659	サヌカイト	完
444		高B209-R	石器集積土壌1	"	削器		157	107	21	298.0	サヌカイト	完
445		高B209-R	石器集積土壌1	"	剝片		76	39	6	15.8	サヌカイト	完
446		高B209-R	石器集積土壌1	"	石包丁状						サヌカイト	完
447	S 7	高B	包含層	縄文 晩期	石鏃		218	134	30	857	サヌカイト	完
448		高B207-8-L・M	溝70	弥生 後期	打製石包丁		78	34	10	37	サヌカイト	完
449		高B206-7-L	水田耕土中	弥生 後期	削器		57	64	11	46.2	サヌカイト	完
450		高B207-8-O	斜面上層		楔形石器		23	25	9	5.1	サヌカイト	完
451		高B207-8-O	斜面上層		削器		38	26	10	12.1	サヌカイト	完
452		横203-4C・D	溝2	弥生 前期	礫石		81	74	47	383	凝灰質流紋岩	完
453		足213-PP	弥生水田層	弥生 後期	石鏃	Ⅱ	37	32	4	4.0	サヌカイト	完
454		足213-PP	弥生水田層	弥生 後期	石鏃	Ⅳ	37	20	6	3.3	サヌカイト	完
455		足213-PP	弥生水田層	弥生 後期	蛤刃石斧		87	62	32	323	珉瑋岩	欠
456		足213-PP	溝151	弥生 後期	蛤刃石斧		60	75	35	197	安山岩	欠
457		足213-QQ	溝172	古墳	蛤刃石斧		83	56	37	243	網粒珉瑋岩	欠
458		高B207-8-O	灰黒色粘土		石皿		153	112	30	759	安山岩	欠
459		高B207-8-O	暗灰色微砂粘土		有溝礫石		46	46	32		砂岩	欠
460		高B207-8-O	灰黒色粘土		楔形石器		58	28	18	30.1	サヌカイト	完
461		高B207-8-O	灰茶色土		石棒		62	46			結晶片岩	欠
462		高B208-O	溝58上層	弥生 前期	磨製石斧?		29	56	53	128		欠
463		高B207-8-O	暗灰色粘土		石鏃	I ?	38	23	5	3.3	サヌカイト	欠
464		高B207-8-O	暗灰色粘土		楔形石器		50	25	11	13.4	サヌカイト	完
465		高B207-8-O	暗灰色粘土		楔形石器		22	18	7	3.4	サヌカイト	完
466A		高B207-8-O	灰黒色粘土	縄文 晩期	石棒		106	64			結晶片岩	欠
466B		高B207-8-O	灰黒色粘土	縄文 晩期	石棒		96	55			結晶片岩	欠
467		高B207-8-O	暗灰色微砂粘土		楔形石器	I	27	18	12	8.2	サヌカイト	完
468		高B207-8-O	暗灰色微砂粘土		楔形石器		27	29	9	7.2	サヌカイト	完
469		高B208-O	溝58 上層	弥生 前期	楔形石器		75	32	18	40.2	サヌカイト	完

百間川沢田遺跡 3

番号	挿図 番号	出土地区	遺構・土層名	時代・時期	器種	形式	計測最大幅 (mm)			重量 (g)	材質	残存
							長	幅(径)	厚			
470		高B208-O	木田耕土	弥生 後期	石鏃	V	29	15	4	1.7	サヌカイト	欠
471		高B207-8-O	灰茶色土		石鏃	II	18	22	4	1.5	サヌカイト	欠
472		高B207-8-O	灰茶色土		楔形石器		36	17	10	8.1	サヌカイト	完
473		高B207-8-O	灰茶色土		楔形石器		29	17	7	4.3	サヌカイト	完
474		高B207-O	黄褐色砂層		石鏃		21	20	4	1.6	サヌカイト	欠
475		高B207-8-O	斜面上・中層	弥生	削器		26	32	9	6.5	サヌカイト	完
476		高B207-8-O	斜面上・中層	弥生	楔形石器		31	20	7	6.1	サヌカイト	完
477		高B207-8-O	斜面上・中層	弥生	楔形石器		29	15	7	3.1	サヌカイト	完
478		高B207-8-O	灰茶色粘質微砂		楔形石器		29	16	7	3.9	サヌカイト	完
479		高B207~10-Q~V	溝118	弥生 後期	石鏃	III	24	23	5	2.8	サヌカイト	完
480		高B207~10-Q~V	溝118	弥生 後期	石鏃	II	24	15	3	0.7	サヌカイト	欠
481		高B207~10-Q~V	溝118	弥生 後期	石鏃	II	17	15	2	0.5	サヌカイト	完
482		高B209U	溝123	弥生 後期	石片		27	17	11	3.8	磁石?	欠
483		高B208-9-P-Q	土城4 (旧)		石鏃	II	18	13	3	0.5	サヌカイト	完
484		高B207~10-Q~V	溝119	弥生 後期	石鏃	I	24	20	6	2.6	サヌカイト	完
485		高B207~10-Q~W	溝91	弥生 後期	磨製石包丁		45	36	7	14.1	結晶片岩	
486		高B207~10-Q~W	溝91	弥生 後期	削器		43	34	7	13.0	サヌカイト	
487		高B207~10-Q~W	溝91	弥生 後期	削器		68	51	8	25.9	サヌカイト	
488		高B207~10-Q~W	溝91	弥生 後期	削器		37	37	8	12.1	サヌカイト	
489		高B207~10-Q~W	溝91	弥生 後期	削器		27	26	3	2.3	サヌカイト	
490		高B207~10-Q~V	溝118	弥生 後期	打製石包丁		43	38	8	17.8	サヌカイト	
491		高B207~10-Q~V	溝118	弥生 後期	削器		22	20	6	2.8	サヌカイト	
492		高B209-R	暗茶褐色土		削器		31	69	6	10.5	サヌカイト	完
493		高B209-R	暗茶褐色土		削器		46	24	10	8.1	サヌカイト	
494		高B207~10-Q~V	溝118	弥生 後期	石鏃	I	26	19	4	1.7	サヌカイト	欠
495		高B207~10-Q~V	溝118	弥生 後期	石鏃	II	19	18	3	1.0	サヌカイト	完
496		高B207~10-Q~V	溝118	弥生 後期	石鏃		20	17	3	0.9	サヌカイト	欠
497		高B207~10-Q~V	溝118	弥生 後期	石鏃		17	12	3	0.7	サヌカイト	欠
498		高B207~10-Q~V	溝118	弥生 後期	石鏃		30	25	4	3.4	サヌカイト	
499		高B209-R	水田上の砂	弥生	楔形石器		30	20	8	5.0	サヌカイト	完
500		高B207~9-P-Q	溝77	弥生 後期	石鏃	V	20	17	4	1.0	サヌカイト	欠
501		高B207~9-P-Q	溝77	弥生 後期	石鏃		22	12	4	0.9	サヌカイト	欠
502		高B207~9-Q~S	溝87	弥生 後期	石鏃	II	28	19	4	1.4	サヌカイト	欠
503		高B207~10-Q~V	溝120	弥生 後期	石鏃	I	20	16	3	0.8	サヌカイト	完
504		高B207~10-Q~V	溝120	弥生 後期	石鏃	I	19	17	3	1.2	サヌカイト	欠
505		高B207~10-Q~V	溝120	弥生 後期	石鏃	II	19	15	3	0.5	サヌカイト	欠
506		高B207~10-Q~V	溝120	弥生 後期	楔形石器		32	24	9	6.6	サヌカイト	完
507		高B207~9-P-Q	溝77	弥生 後期	削器		33	19	6	4.2	サヌカイト	
508		高B207~9-P-Q	溝77	弥生 後期	石鏃	II	15	11	2	0.3	サヌカイト	完
509		高B209-Q	茶褐色土		磨石		60	54	36	182		完
510		高B209-Q-R	茶黄色土		磨石		83	64	35	332		完
511		高B209U	溝123	弥生 後期	石鏃	II	21	14	3	0.5	サヌカイト	完
512		高B209U	溝123	弥生 後期	楔形石器		39	21	8	8.2	サヌカイト	完
513		高B207~10-Q~W	溝89	弥生 後期	磨石		59	58	51	240		完
514		高B207~10-Q~W	溝89	弥生 後期	削器	I	39	25	6	6.9	サヌカイト	完
515		高B209-R	晩期溜り	縄文 晩期	石鏃		15	13	3	0.5	サヌカイト	完
516		高B209-R	晩期溜り	縄文 晩期	石鏃	I	18	12	4	0.6	サヌカイト	完
517		高B209-R	晩期溜り	縄文 晩期	石鏃	I	22	19	4	1.6	サヌカイト	完
518		高B207~9-P-Q	溝77	弥生 後期	楔形石器		22	22	12	5.9	サヌカイト	完
519		高B207~9-P-Q	溝77	弥生 後期	楔形石器		30	29	11	10.7	サヌカイト	完
520		高B207~9-P-Q	溝77	弥生 後期	石鏃		57	22	13	10.4	サヌカイト	完
521		高B207~9-P-Q	溝77	弥生 後期	石鏃		33	20	6	3.7	サヌカイト	完
522		高B207~9-P-Q	溝77	弥生 後期	石鏃		24	17	3	1.1	サヌカイト	欠
523		高B207~9-P-Q	溝77	弥生 後期	削器		24	37	9	9.4	サヌカイト	
524		高B207~9-P-Q	溝77	弥生 後期	石鏃		29	12	5	1.4	サヌカイト	完
525		高B207~9-P-Q	溝77	弥生 後期	楔形石器		25	24	8	4.8	サヌカイト	完
526		高B207~9-P-R	溝132	古墳	石鏃	II	17	16	3	0.8	サヌカイト	欠
527		高B207~10-Q~W	溝89	弥生 後期	石鏃		13	14	3	0.7	サヌカイト	欠
528		高B207~10-Q~W	溝89	弥生 後期	石鏃	II	22	16	3	1.1	サヌカイト	欠

石製品一覽表

番号	插图 番号	出土地区	遺構・土層名	時代・時期	器種	形式	計測最大幅 (mm)			重量 (g)	材質	残存
							長	幅(径)	厚			
529		高B207~10-P~W	溝89	弥生 後期	石錐		35	25	6	4.4	サヌカイト	
530		高B207~9-Q~W	溝89	弥生 後期	石錐		15	6	3	0.3	サヌカイト	
531		高B207~9-Q~W	溝89	弥生 後期	石鎌		24	13	2	0.7	サヌカイト	欠
532		高B207~9-Q~W	溝89	弥生 後期	石鎌	I	14	10	2	0.2	サヌカイト	完
533		高B207~9-Q~W	溝89	弥生 後期	石鎌	II	18	15	3	0.8	サヌカイト	完
534		高B207~9-Q~W	溝89	弥生 後期	石鎌	II	18	11	2	0.3	サヌカイト	完
535		高B207~9-Q~W	溝89	弥生 後期	石鎌	II	22	17	3	0.9	サヌカイト	欠
536		高B209-Q	暗茶褐色土		石鎌	II	14	15	4	0.7	サヌカイト	欠
537		高B209-Q・R	暗茶褐色土		石鎌	III	16	15	5	1.0	サヌカイト	完
538		高B209-Q・R	暗茶褐色土		削器		18	16	5	1.6	サヌカイト	
539		高B209-R	微高地斜面	弥生	削器		30	25	8	7.4	サヌカイト	
540		高B209-R	微高地斜面	弥生	石鎌	II	17	12	3	0.5	サヌカイト	欠
541		高B207~10-Q~W	溝89	弥生 後期	石鎌	II	22	14	3	1.2	サヌカイト	完
542		高B207~10-Q~W	溝89	弥生 後期	石鎌		26	19	3	1.1	サヌカイト	欠
543		高B207~10-Q~W	溝89	弥生 後期	削器		57	39	9	18.9	サヌカイト	完
544		高B207~10-Q~W	溝89	弥生 後期	削器		42	28	8	12.4	サヌカイト	完
545		高B207~10-Q~W	溝89	弥生 後期	石鎌	II	26	17	4	1.2	サヌカイト	完
546		高B207~10-Q~W	溝89	弥生 後期	石鎌	II	23	15	4	0.8	サヌカイト	完
547		高B207~10-Q~W	溝89	弥生 後期	石鎌		26	15	4	1.2	サヌカイト	欠
548		高B207~10-Q~W	溝89	弥生 後期	石鎌	II	14	16	3	0.7	サヌカイト	欠
549		高B207~9-Q~W	溝89	弥生 後期	石鎌	I	12	13	3	0.5	サヌカイト	欠
550		高B207~9-Q~W	溝89	弥生 後期	石鎌		26	13	3	0.8	サヌカイト	欠
551		高B207~9-Q~W	溝89	弥生 後期	楔形石器		39	24	7	7.1	サヌカイト	完
552		高B207~9-Q~W	溝89	弥生 後期	楔形石器		24	29	12	9.3	サヌカイト	完
553		高B207~9-Q~W	溝89	弥生 後期	削器		21	20	6	3.0	サヌカイト	完
554		高B207~9-Q~W	溝89	弥生 後期	削器		48	44	9	17.7	サヌカイト	完
555		高B207~9-Q~W	溝89	弥生 後期	削器		34	29	5	4.8	サヌカイト	完
556		高B207~9-Q~W	溝89	弥生 後期	削器		26	24	6	3.8	サヌカイト	完
557		高B207~9-Q~W	溝89	弥生 後期	削器		88	53	8	40.1	サヌカイト	
558		高B207~9-Q~W	溝89	弥生 後期	削器		30	25	5	4.1	サヌカイト	
559		高B207~9-Q~W	溝89	弥生 後期	削器		25	23	7	4.0	サヌカイト	
560		高B207~9-Q~W	溝89	弥生 後期	石鎌	III	25	22	4	2.0	サヌカイト	欠
561		高B207~9-Q~W	溝89	弥生 後期	石鎌	II	16	14	3	0.5	サヌカイト	完
562		高B207~9-Q~W	溝89	弥生 後期	石鎌	II	22	17	4	1.1	サヌカイト	欠
563		高B207~9-Q~W	溝89	弥生 後期	石錐		31	10	6	1.8	サヌカイト	
564		高B207~9-Q~W	溝89	弥生 後期	楔形石器		39	33	12	16.8	サヌカイト	完
565		高B207~9-Q~W	溝89	弥生 後期	楔形石器		25	24	6	4.3	サヌカイト	完
566		高B207~9-Q~W	溝89	弥生 後期	石鎌	II	20	12	3	0.5	サヌカイト	欠
567		高B207~9-Q~W	溝89	弥生 後期	石鎌	II	12	14	3	0.5	サヌカイト	完
568		高B207~9-Q~W	溝89	弥生 後期	石鎌	I	17	13	2	0.5	サヌカイト	完
569		高B207~9-Q~W	溝89	弥生 後期	石鎌	II	25	19	5	1.4	サヌカイト	完
570		高B207~9-Q~W	溝89	弥生 後期	石鎌		15	16	4	1.2	サヌカイト	欠
571		高B207~9-Q~W	溝89	弥生 後期	楔形石器		22	24	7	4.3	サヌカイト	完
572		高B209-10-R	灰色粘土		石鎌	I	13	11	2	0.3	サヌカイト	完
573		高B207~9-Q~W	溝89	弥生 後期	石鎌	II	16	13	3	0.4	サヌカイト	完
574		高B207~10-Q~W	溝90	弥生 後期	石錐		23	14	3	0.8	サヌカイト	完
575		高B207~10-Q~W	溝90	弥生 後期	石鎌		14	20	4	1.0	サヌカイト	欠
576		高B207~10-Q~W	溝90	弥生 後期	打製石包丁		69	42	8	28.7	サヌカイト	
577		高B209R	溝85	弥生 後期	石鎌	I	18	18	5	1.2	サヌカイト	欠
578		高B209R	溝85	弥生 後期	削器		26	27	5	3.9	サヌカイト	
579		高B207~10-Q~W	溝90	弥生 後期	石鎌	II	23	15	3	0.7	サヌカイト	完
580		高B207~10-Q~W	溝90	弥生 後期	石鎌	II	23	14	4	1.3	サヌカイト	欠
581		高B207~10-Q~W	溝90	弥生 後期	石錐		29	19	4	2.2	サヌカイト	完
582		高B209-R	微高地斜面	弥生	削器		44	38	6	10.0	サヌカイト	
583		高B209-R	暗茶褐色土		石鎌	I	18	13	3	0.7	サヌカイト	完
584		高B209-R	暗茶褐色土		楔形石器		42	28	8	11.9	サヌカイト	完
585		高B209-R	暗茶褐色土層		石鎌	II	27	17	3	1.0	サヌカイト	完
586		高B209-R	暗茶褐色土層		石鎌	II	32	20	5	2.2	サヌカイト	完
587		高B209-R	暗茶褐色土層		石鎌	I	29	21	5	2.0	サヌカイト	完

百間川沢田遺跡 3

番号	插图 番号	出土地区	遺構・土層名	時代・時期	器種	形式	計測最大幅 (mm)			重量 (g)	材質	残存
							長	幅(径)	厚			
588		高B209-R	暗茶褐色土層		石鏃	I	17	20	3	1.0	サヌカイト	欠
589		高B209-R	暗茶褐色土層		石鏃	I	20	20	4	1.5	サヌカイト	欠
590		高B209-R	暗茶褐色土層		石鏃		17	20	4	1.2	サヌカイト	欠
591		高B209-R	暗茶褐色土層		石鏃	I?	16	17	4	1.0	サヌカイト	欠
592		高B209-R	暗茶褐色土層		石鏃		16	10	2	0.3	サヌカイト	欠
593		高B209-R	暗茶褐色土層		石鏃		31	13	6	2.4	サヌカイト	完
594		高B209-R	暗茶褐色土層		石鏃		21	14	4	1.0	サヌカイト	完
595		高B209-Q・R	茶黄色土		削器		29	24	10	6.8	サヌカイト	完
596		高B209-Q・R	茶黄色土		石鏃	IV	41	14	7	3.1	サヌカイト	完
597		高B209-Q・R	茶黄色土		石鏃		24	16	4	0.8	サヌカイト	完
598		高B209-Q・R	茶黄色土		削器		42	26	7	6.3	サヌカイト	完
599		高B209-Q・R	暗茶褐色土		石鏃	I?	19	14	3	0.4	サヌカイト	欠
600		高B209-R	暗茶褐色土		石鏃	I	19	13	4	0.7	サヌカイト	完
601		高B209-R	暗茶褐色土		石鏃	I	18	12	3	0.6	サヌカイト	完
602		高B209-R	暗茶褐色土窪地		楔形石器		31	16	17	4.1	サヌカイト	完
603		高B209-R	暗茶褐色土窪地		楔形石器		20	25	7	4.1	サヌカイト	完
604		高B208-9-P	溝119	弥生 後期	石鏃		46	33			結晶片岩	欠
605		高B209-Q	暗茶褐色土		石鏃		45	14	4	1.6	サヌカイト	欠
606		高B209-Q	暗茶褐色土		石鏃?		29	22	5	3.9	サヌカイト	完
607		高B209-Q	暗茶褐色土		石鏃		18	14	2	0.8	サヌカイト	
608		高B207~10-Q~W	溝89	弥生 後期	楔形石器		37	21	10	7.9	サヌカイト	完
609		高B207~10Q~W	溝89	弥生 後期	楔形石器		32	18	6	4.2	サヌカイト	完
610		高B207~10Q~W	溝89	弥生 後期	石鏃	II	19	11	4	0.8	サヌカイト	完
611		高B207~10Q~W	溝89	弥生 後期	石鏃	II	19	15	3	1.0	サヌカイト	欠
612		高B207~10Q~W	溝89	弥生 後期	石鏃	I?	20	15	4	1.0	サヌカイト	欠
613		高B209-R	暗茶褐色土層		石鏃	II	23	14	3	0.8	サヌカイト	欠
614		高B209-R	暗茶褐色土層		石鏃		21	17	4	1.2	サヌカイト	完
615		高B209-R	暗茶褐色土層		石鏃		25	13	5	1.6	サヌカイト	
616		高B209-R	暗茶褐色土層		石鏃		29	19	3	1.3	サヌカイト	
617		高B209-R	暗茶褐色土層		楔形石器		35	41	15	19.5	サヌカイト	完
618		高B209-R	暗茶褐色土層		楔形石器		25	21	6	3.8	サヌカイト	完
619		高B209-R	暗茶褐色土層		楔形石器		21	22	6	3.7	サヌカイト	完
620		高B207~10-Q	溝89	弥生 後期	磨石		120	56	57	567		
621		高B207~10-Q	溝118	弥生 後期	磨石		111	88	57	859		完

○出土地区欄の横は横田調査区、高Aは高縄手A調査区、高Bは高縄手B調査区、足は足洗調査区、四は四元調査区の略である。

金属器一覧表

金属器一覧表

番号	掲載番号	出土地区	遺構・土層名	時代・時期	器種	計測最大値 (mm)			重量 (g)	材質	残存	備考
						長	幅(径)	厚				
1		高B 209-P	溝126	古墳	鉄片	12.5	5			鉄	欠	
2		高B 209-Q	池状遺構1上部	弥生	古銭		24	1.5		銅	完	寛永通寶
3		足 212-FF	灰黄色粘土		鉄片	36	20	2		鉄	欠	
4		横 205-F	No.3溝(旧)		古銭		23	1.5		銅	完	朝鮮通寶
5		横 206-F	No.18土坑(旧)		古銭		24	1		銅	完	寛永通寶
6		足 212-GG	溝174		鉄片	20	17	1.5		鉄	欠	
7		横 204・205-D・E	灰色粘土上層		鉄片	29	24.5	10		鉄	欠	
8		高A 207-I	堅穴住居14	古墳	鉄鏃	32	16	5		鉄	欠	
9		四 213-RR	溝29(旧)		銅鏃	38	14	4	5.4	銅	完	
10		四 213-TT	二層		古銭	24	24	1		銅	完	咸平元寶
11		四 213-SS	二層		古銭	23	23	1		銅	完	寛永通寶
12		高B 209-P	溝126	古墳前期	鉄鏃	51	23	5		鉄	欠	
13		高B 209-P	溝古126	古墳前期	鉄鏃?	43.5	10	6		鉄	欠	茎か
14		高B 209-Q	溝130	古墳前期	鉄鏃	48	20	6		鉄	欠	
15		高B 208-L	土坑117	古墳	鉄片	28.5	14.5	5		鉄	欠	
16		高B 209-O	溝(旧)	弥生	鉄片	28	17.5	6		鉄	欠	
17		高A 207-L	洪水砂層上面		鉄鏃?	29.5	16.5	4.5		鉄	欠	
18		足 209・210-CC	水田上面		鉄片	42.5	21	9.5		鉄	欠	
19		高B 209-P	P-6(旧)		鉄片	48	26	13.2		鉄	欠	
20		高B 208-L	井戸11	古墳	鉄片	22	8.5	3		鉄	欠	
21		高B 209-U	溝90	弥生後期	鉄片	39.5	17.5	4		鉄	欠	
22		高B 207-L	土坑117	古墳	鉄片	14	12.5	9		鉄	欠	
23		高B 209-P	溝126	古墳前期	鉄片	34.5	20.5	5		鉄	欠	
24		足 213-MM	淡灰色粘土層	古代	帯金具	28	32.5	2.5		銅	欠	
25		高A 207-J	淡茶灰色砂		鉄片	40.5	12.5	9		鉄	欠	
26		高A 207-J	中世層	中世	刀	123	27	16		鉄	欠	
27		高A 207-K	中世層	中世	鉄片	315	27	4.5		鉄	欠	
28	I I	高A 208-K	井戸8	古墳前期	鋤鏃先	70	105	3		鉄	欠	
29		四 213-TT	二層		鉄片	36	35.5	11.5		鉄	欠	
30	B I	横 205-F	土坑18	古墳前期	銅鏡		29.0	1.5		銅	欠	

○出土地区欄の横は横田調査区、高Aは高繩手A調査区、高Bは高繩手B調査区、足は足洗調査区、四は四元調査区の略である。

## 百間川沢田遺跡 3

## 木製品一覧表

番号	掲歌 番号	出土地区	遺構・土層名	時代	器種	計測最大値 (mm)			樹種	残存率	備考
						長	幅(径)	厚			
1	W2	高A207-J	井戸10下層	奈良	斎串	180	20	5		ほぼ完形	
2	W3	高A207-J	井戸10下層	奈良	斎串	165	20	3		ほぼ完形	
3	W4	高A207-J	井戸10下層	奈良	斎串	160	22	2		3分の2	
4	W10	高A207-J	井戸10下層	奈良	馬形	171	26	4		ほぼ完形	
5	W5	高A207-J	井戸10下層	奈良	斎串	64	16	3		2分の1	
6	W8	高A207-J	井戸10下層	奈良	斎串	41	8	2		4分の1	
7	W7	高A207-J	井戸10下層	奈良	斎串	89	14	2		2分の1	
8	W6	高A207-J	井戸10下層	奈良	斎串	46	8	3		4分の1	
9	W11	高A207-J	井戸10下層	奈良	鎌柄	264	37	24		ほぼ完形	
10	W9	高A207-J	井戸10下層	奈良	錘	153	49			ほぼ完形	
11		高B210-V~W	溝69	弥生中期	杭				ヌルデ		
12		流216-Q~W	溝192		杭				コナラ		
13		流216-Q~W	溝192		杭				ネズミサシ		
14		高B208-L	井戸11	古墳前期	自然木				アラカン		
15		高B208-L	井戸11	古墳前期	自然木				アベマキ		
16		高B208-L	井戸11	古墳前期	自然木				ニワトコ		
17		高B208-L	井戸11	古墳前期	自然木				ニガキ		
18		高B208-L	井戸11	古墳前期	板材						
19		高B208-L	井戸11	古墳前期	加工材				アベマキ		
20		高B208-L	井戸11	古墳前期	加工材				アラカン		
21		高B208-L	井戸11	古墳前期	加工材				ヤブツバキ		
22		高A207-H	Na11井戸(旧)		加工材?				ネズミサシ		
23		高A207-H	Na11井戸(旧)		加工材?				ヒノキ		
24		高B208-N	水田大畦下	弥生後期	縦杭				コナラ節		バリノサーベNo.4
25		高B208-N	水田大畦下	弥生後期	縦杭				コナラ節		バリノサーベNo.6
26		高B208-N	水田大畦下	弥生後期	縦杭				ヒサカキ		バリノサーベNo.2
27		高B208-N	水田大畦下	弥生後期	縦杭				モッコク		バリノサーベNo.1
28		高B208-N	水田大畦下	弥生後期	縦杭				クヌギ節		バリノサーベNo.8
29		高B208-N	水田大畦下	弥生後期	横木				マツ属		バリノサーベNo.8
30		高B208-N	水田大畦下	弥生後期	横木				アカガシ亜属		バリノサーベNo.9
31		高B208-N	水田大畦下	弥生後期	横木				アカガシ亜属		バリノサーベNo.1
32		高B208-N	水田大畦下	弥生後期	横木				クスノキ		バリノサーベNo.4
33		高B208-N	水田大畦下	弥生後期	横木				アカガシ亜属		バリノサーベNo.2
34		高B208-N	水田大畦下	弥生後期	横木				コナラ節		バリノサーベNo.3
35		高B208・209-X	溝68下部	弥生中期	杭				コバノトネリコ		
36		高B208・209-X	溝68下部	弥生中期	杭				エゴノキ		
37		高B208・209-X	溝68下部	弥生中期	杭				クスノキ		
38		足212・213 -L.L.MM	溝158	中世	曲物底板	152	54	6	ヒノキ	2分の1	
39		足212・213 -L.L.MM	溝158	中世	加工材	387	19	19	ネズミサシ	欠損	

木製品一覧表

番号	掲載番号	出土地区	遺構・土層名	時代	器種	計測最大値 (mm)			樹種	残存率	備考
						長	幅(径)	厚			
40		足212・213 -LL・MM	溝158	中世	加工材	297	20	17	ヒノキ	欠損	
41		足212・213 -LL・MM	溝158	中世	加工材				ヤブツバキ		
42		横205-F	竪穴住居4 西柱穴	古墳	柱				アラカン		
43		横205-F	竪穴住居4 西柱穴	古墳	板材				針葉樹		
44		足213-NN	微高地斜面	弥生?	自然木				モッコク		
45		足213-NN	微高地斜面	弥生?	自然木				イヌンデ		
46		足213-NN	微高地斜面	弥生?	自然木				コナラ		
47		足213-NN	微高地斜面	弥生?	自然木				アラカン		
48		足213-PP	溝151	弥生中期	自然木				ネズミサシ		
49		足213-PP	溝151	弥生中期	自然木				アベマキ		
50		足213-PP	溝168・169	古墳	自然木				スギ		
51		足213-PP	溝168・169	古墳	自然木				アラカン		
52		足213-PP	溝168・169	古墳	自然木				ネズミサシ		
53		足213-PP	溝168・169	古墳	自然木				クロガネモチ		
54		足213-PP	溝168・169	古墳	自然木				アカマツ		
55		足213-PP	溝168・169	古墳	自然木				アベマキ		
56		足213-PP	溝168・169	古墳	加工材・杭				コナラ		
57		足213-PP	溝168・169	古墳	加工材・杭				ムクノキ		
58		足213-PP	溝168・169	古墳	加工材・杭				イチイガン		
59		足213-PP	溝168・169	古墳	加工材・杭				ヒノキ		
60		足213-PP	溝168・169	古墳	襦袢木製品	655	77	27	アラカン	欠損	
61		高B208-Q	池状遺構2	弥生中期	杭				ネズミサシ		
62		高B208-Q	池状遺構2	弥生中期	杭				アベマキ		
63		高B208-Q	池状遺構2	弥生中期	杭				ネズミサシ		
64		高B208-Q	池状遺構2	弥生中期	杭				アベマキ		
65		高B208-Q	池状遺構2	弥生中期	杭				アラカン		
66		高B208-Q	池状遺構2	弥生中期	杭				ニガキ		
67		高B207~209 -L・P	№4 溝近(旧)		板材				スギ		
68		高A207-I	井戸6の8層	古墳	自然木				クサギ		
69		高B208-W	微高地斜面堆積	弥生前期	自然木				ヒノキ		
70		足213-NN	微高地斜面	弥生?	杭				アベマキ		
71		足213-PP	溝177	中世	加工材				タカノツメ		
72		足213-PP	弥生水田層	弥生後期	加工材				アラカン		
73		足213-QQ	溝149	弥生前期	有頭棒	200	34		イヌツゲ	欠損	
74		四213-SS	溝183	弥生後期	自然木				ヒノキ		
75	W1	高A207-I	竪穴住居15柱穴	古墳	櫛					欠損	
76		高B208-W	暗灰色粘質土		自然木				ネズミサシ		
77		高B208-W	暗灰色粘質土		板材				コナラ		

○ 出土地区欄の横は横田調査区、高Aは高縄手A調査区、高Bは高縄手B調査区、足は足洗調査区、四は四元調査区の略である。

百間川沢田遺跡 3

玉類一覧表

番号	掲載番号	出土地区	遺構・土層名	時代・時期	種類	計測最大値 (mm)			重量 (g)	材質	残存
						長	幅(径)	厚			
1		高B 208-O	暗灰褐色粘性砂質土		白玉		4.5	4.5		滑石	完
2		横 205-E	竪穴住居 2	古墳	小玉		4.0	4.5		ガラス	完
3		高B 208-W	洪水砂上スキ跡内	古墳	白玉		4.6	1.2		滑石	完
4		足 213-J J	洪水砂	弥生	管玉					グリーンタフ	欠

○出土地区欄の横は横田調査区、高Bは高縄手B調査区、足は足洗調査区の略である。

種子一覧表

種子一覧表

番号	出土地区	遺構・土層名	時代・時期	個数と残存状況	種名	備考
1	横 203-C	P-11 (旧)	弥生 後期	完形 6	メロン仲間	バリノ
2	高A 207-I	井戸 6	古墳 前期	完形 2	モモ	バリノ
3	四 213-SS	溝 181	弥生 後期	完形 2	ハクウンボク	バリノ
4	足 213-PP	溝 168・169	古墳		モモ	
5	高B 208-L	井戸11	古墳			
6	高B 207-8-L	土壇 117	古墳			
7	高B 208-L	井戸11	古墳			
8	高B 209-P	溝 126	古墳 前期	完形 2	ハクウンボク	バリノ
9	高B 207-L	土壇117	古墳			
10	高B 209-P	溝 126	古墳 前期	破片 1	モモ	バリノ
11	高B 208-L	井戸11	古墳		モモ	
12	高B 208-L	井戸11	古墳			
13	高B 208-L	井戸11	古墳			
14	足 212-3-NN	水田耕土層	弥生 後期		モモ	
15	四 213-RR	溝 184	古墳		モモ	
16	足 213-PP	溝 168	古墳		モモ	
17	足 213-PP	溝 151	弥生 中期		モモ	
18	足 213-MM	土 120	中世		モモ	
19	四 213-SS	溝 181	弥生 後期	完形 7	アカガン亜族	バリノ
20	足 213-PP	溝 177	中世		モモ	
21	足 213-QQ	溝 152	弥生 中期			
22	足 213-QQ	溝 149	弥生 前期	完形 1	カヤ	バリノ
23	足 213-QQ	溝 4 (旧)			モモ	
24	四 213-RR	溝 185	中世		モモ	
25	四 213-SS	土壇 125	縄文 後期	破片15	モモ	バリノ
26	足 213-QQ	溝 171	古墳		モモ	
27	四 213-SS	土壇 127	縄文 後期		マンカサ・ドングリ	
28	四 213-SS	土壇 126	縄文 後期		マンカサ・ドングリ	

○出土地区欄の横は横田調査区、高Aは高縄手A調査区、高Bは高縄手B調査区、足は足洗調査区、四は四元調査区の略である。

百間川沢田遺跡 3

新旧遺構名称対照表

報告書遺構名	調査時遺構名	調査区	担当者	年度	報告書遺構名	調査時遺構名	調査区	担当者	年度
土壌 1	Na22	横203 C	O・a	1986	竪穴住居 4	Na36	横205 F	O・a	1986
土壌 2	Na20	横203 B	O・a	1986	建物 1	Na45	横205 E・F	O・a	1986
土壌 3	Na21	横203 B	O・a	1986	建物 2	Na46	横205 E・F	O・a	1986
土壌 4	Na62	横205 E	O・a	1986	建物 3	Na37	横205 F	O・a	1986
土壌 5	Na75	横205 E	O・a	1986	井戸 1	Na39	横205 E	O・a	1986
土壌 6	Na74	横205 E	O・a	1986	井戸 2	Na38	横205 F	O・a	1986
土壌 7	Na64	横205 F	O・a	1986	土壌13	Na12	横203 C	O・a	1986
土壌 8	Na71	横206 F	O・a	1986	土壌14	Na10	横203 C	O・a	1986
土壌基 1	Na68	横206 F	O・a	1986	土壌15	Na11	横204 C	O・a	1986
溝 1	Na19	横203 C	O・a	1986	土壌16	Na31	横205 F	O・a	1986
溝 2	Na23	横203・4C・D	O・a	1986	土壌17	Na59	横205 F	O・a	1986
溝 3	Na25	横203・4C・D	O・a	1986	土壌18	Na44	横205 F	O・a	1986
溝 4	Na24	横205 D	O・a	1986	土壌墓 2	Na61	横206 F	O・a	1986
溝 5	Na56	横205 D・E	O・a	1986	溝22	Na 9	横203 C	O・a	1986
溝 6	Na55	横205 D～F	O・a	1986	溝23	Na 8	横203 B・C	O・a	1986
溝 7	Na60	横205・6E・F	O・a	1986	溝24	Na34	横205 D・E	O・a	1986
溝 8	Na69	横206 F	O・a	1986	溝25	Na33	横205 D・E	O・a	1986
溝 9	Na65	横206 F	O・a	1986	溝26	Na32	横205 D・E	O・a	1986
溝10	Na73	横206 F	O・a	1986	溝27	Na49	横205・6 F	O・a	1986
溝11	Na72・溝 3・Na29	横・高 A206・7 F～I	O・a・Y・ T・I	1985 1987	溝28	Na53	横206 F	O・a	1986
土壌 9	Na67	横206 F	O・a	1986	溝29	Na29	横205 F	O・a	1986
土壌10	Na66	横206 F	O・a	1986	溝30	Na40	横205 F	O・a	1986
土壌11	Na29	横203 C	O・a	1986	溝31	Na41	横205 F	O・a	1986
土壌12	P 11	横204 C	O・a	1986	溝32	Na42	横205 F	O・a	1986
溝12	Na18	横203 C	O・a	1986	土壌19	Na 4	横203 C	O・a	1986
溝13	Na15	横203 B・C	O・a	1986	土壌20	Na17	横205 F	O・a	1986
溝14	Na16	横203 B・C	O・a	1986	土壌21	Na12	横205 F	O・a	1986
溝15	Na14	横203 C	O・a	1986	土壌22	Na14	横205 F	O・a	1986
溝16	Na13	横204 C・D	O・a	1986	土壌23	Na15	横205 F	O・a	1986
溝17	Na57・58	横204 E	O・a	1986	土壌24	Na13	横206 F	O・a	1986
溝18	Na17	横205 D	O・a	1986	柵 1	Na 7	横205 E・F	O・a	1986
溝19	Na52	横204・5D・E	O・a	1986	溝33	Na 5	横203・4 B	O・a	1986
溝20	Na51	横205 D・E	O・a	1986	溝34	Na 8	横205 E・F	O・a	1986
溝21	Na50	横205 D・E	O・a	1986	溝35	Na 9	横205 E・F	O・a	1986
柱穴群 1	Na26	横204 C	O・a	1986	竪穴住居 5	住 3	高 A206 G・H	Y・T・a・ I・O	1985 1987
柱穴群 2	Na27	横204 D	O・a	1986	竪穴住居 6	Na43	高 A206 H	I・O	1985
竪穴住居 1	Na35	横205 E	O・a	1986	竪穴住居 7	Na44	高 A207 I	I・O	1985
竪穴住居 2	Na30	横205 E・F	O・a	1986	竪穴住居 8	Na45	高 A207 I	I・O	1985
竪穴住居 3	Na43	横205 F	O・a	1986	土壌25	土14	高 A206 G	Y・T・a	1987

新旧遺構名称对照表

報告書遺構名	調査時遺構名	調査区	担当者	年度	報告書遺構名	調査時遺構名	調査区	担当者	年度
土壌26	土13	高A206 G	Y・T・a	1987	溝36	環濠	高A205・6 G	Y・T・a	1987
土壌27	№42	高A207 H	I・O	1985	溝37	溝2	高A206 G	Y・T・a	1987
土壌28	P184	高A206 H	I・O	1985	溝38	溝1・№30・溝19	高A206・7 G ~J	Y・T・a I・O・H・E	1985 1987
土壌29	№37	高A206 H	I・O	1985	溝39	№31・溝21	高A206・7 I・J	I・O H・E	1985
土壌30	№36	高A206 H	I・O	1985	溝40	№35・溝13	高A206・7 I J	I・O H・E	1985
土壌31	№38	高A206 H	I・O	1985	溝41	№34	高A207 I	I・O	1985
土壌32	№56	高A206 H	I・O	1985	溝42	溝12	高A207 J	H・E	1985
土壌33	№40	高A206 H	I・O	1985	溝43	溝18	高A207 J	H・E	1985
土壌34	№55	高A207 H	I・O	1985	溝44	溝15	高A207・8 K	H・E	1985
土壌35	№50	高A207 I	I・O	1985	溝45	溝20	高A207・8 K	H・E	1985
土壌36	№61	高A207 I	I・O	1985	溝46	溝11	高A207 J・K	H・E	1985
土壌37	№62	高A207 I	I・O	1985	溝47	溝10	高A207 J	H・E	1985
土壌38	№51	高A206 I	I・O	1985	溝48	溝14・16・17	高A207・8 J・K	H・E	1985
土壌39	№60	高A206 I	I・O	1985	竪穴住居9	住1	高A206 G	Y・T・a	1987
土壌40	P150	高A206 I	I・O	1985	竪穴住居10	住2・№6	高A206・7 G・H	I・O Y・T・a	1985 1987
土壌41	№33	高A207 I	I・O	1985	竪穴住居11	№5	高A206 H	I・O	1985
土壌42	№39	高A207 I	I・O	1985	竪穴住居12	№10	高A206 H	I・O	1985
土壌43	№47	高A207 I	I・O	1985	竪穴住居13	№24	高A206 I	I・O	1985
土壌44	№46	高A207 I	I・O	1985	竪穴住居14	№15	高A207 I	I・O	1985
土壌45	土19	高A207 J	H・E	1985	竪穴住居15	№20	高A207 I	I・O	1985
土壌46	土21	高A207 J	H・E	1985	竪穴住居16	№14	高A207 I	I・O	1985
土壌47	土15	高A207 J	H・E	1985	竪穴住居17	住2	高A207 J	H・E	1985
土壌48	土18	高A207 J	H・E	1985	竪穴住居18	住1	高A207 J	H・E	1985
土壌49	土8	高A207 J	H・E	1985	竪穴住居19	住4	高A207 K	H・E	1985
土壌50	土9	高A207 J	H・E	1985	竪穴住居20	住3	高A207・8 K	H・E	1985
土壌51	土10	高A207 J	H・E	1985	建物4	建1	高A205 G	Y・T・a	1987
土壌52	土5	高A207 J	H・E	1985	建物5	建2・№23	高A206 G・ H	Y・T・a I・O	1985 1987
土壌53	土6	高A207 J	H・E	1985	建物6	№27	高A206 H	I・O	1985
土壌54	土16	高A207 J	H・E	1985	建物7	№26	高A206 H	I・O	1985
土壌55	土7	高A207 J	H・E	1985	建物8	№17	高A206 H	I・O	1985
土壌56	土24	高A207 J	H・E	1985	建物9	№16	高A207 I	I・O	1985
土壌57	土17	高A207 J	H・E	1985	建物10	建1	高A206・7 J	H・E	1985
土壌58	土12	高A207 K	H・E	1985	建物11	建3	高A207 J	H・E	1985
土壌59	土23	高A207 K	H・E	1985	建物12	建2	高A207 J	H・E	1985
土壌60	土20	高A207 K	H・E	1985	建物13	建4	高A207 J	H・E	1985
土壌61	土22	高A207 K	H・E	1985	井戸3	井1	高A206 G	Y・T・a	1987
土壌62	土25	高A208 K	H・E	1985	井戸4	№4	高A206 I	I・O	1985
土壌63	土13	高A208 K	H・E	1985	井戸5	№12	高A207 I	I・O	1985
円形周溝1	№41	高A206H・I	I・O	1985	井戸6	№13	高A207 I	I・O	1985
円形周溝2	№32	高A206 I	I・O	1985	井戸7	井2	高A207 J	H・E	1985

百間川沢田遺跡 3

報告書遺構名	調査時遺構名	調査区	担当者	年度	報告書遺構名	調査時遺構名	調査区	担当者	年度
井戸 8	井 4	高A208 K	H・E	1985	溝57	溝11	高B207 N	H・T	1986
井戸 9	井 1	高A207 K	H・E	1985	水田 1	前期上層水田	高B208-9 T ~V	Y・U	1986
土壌64	土12	高A206 G	Y・T・a	1987	水田 2	前期下層水田	高B208-9 T ~V	Y・U	1986
土壌65	土11	高A206 G	Y・T・a	1987	土壌88	土 2	高B207 M	Y・O	1982
土壌66	土10	高A206 G	Y・T・a	1987	土壌89	土21	高B207 O	H・T	1986
土壌67	Na 9	高A206 H	I・O	1985	土壌90	土28	高B207 O	H・T	1986
土壌68	Na 8	高A206-7 H	I・O	1985	土壌91	土22	高B207 O	H・T	1986
土壌69	Na 2	高A206 H	I・O	1985	土壌92	土18	高B207 O	H・T	1986
土壌70	Na18	高A207 I	I・O	1985	土壌93	土16	高B207 O	H・T	1986
溝49	Na21	高A207 H	I・O	1985	土壌94	土40	高B207 O	H・T	1986
溝50	Na22	高A207 H	I・O	1985	土壌95	土12	高B207 O	H・T	1986
溝51	溝22	高A207-8 K	H・E	1985	土壌96	土11	高B207 O	H・T	1986
建物14	Na19	高A206 I	I・O	1985	土壌97	土 6	高B208 O	H・T	1986
建物15	Na11	高A207 I	I・O	1985	土壌98	土 7	高B208 O	H・T	1986
建物16	Na 7	高A207 I	I・O	1985	土壌99	土 1	高B208 O・P	H・T	1986
井戸10	井 3	高A207 J	H・E	1985	土壌100	土 6	高B208 P	Y・T・a	1987
溝52	溝 7	高A207 K	H・E	1985	土壌101	土 4	高B208 P	Y・T・a	1987
土壌71	土 7	高A205 G	Y・T・a	1987	土壌102	土 5	高B208 P	Y・T・a	1987
土壌72	土 6	高A205 G	Y・T・a	1987	土壌103	Na13	高B208 P	Y・O	1982
土壌73	土 9	高A206 G	Y・T・a	1987	土壌104	Na14	高B208 P	Y・O	1982
土壌74	土 4	高A205-6 G	Y・T・a	1987	土壌105	Na15	高B209 P	Y・O	1982
土壌75	土 5	高A205-6 G	Y・T・a	1987	土壌106	Na12	高B208 P	Y・O	1982
土壌76	土 8	高A205-6 G	Y・T・a	1987	土壌墓 3	土15	高B207 O	H・T	1986
土壌77	土 3	高A206 G	Y・T・a	1987	土壌墓 4	土14	高B207 O	H・T	1986
土壌78	土 2	高A206 G	Y・T・a	1987	土壌墓 5	土20	高B207 O	H・T	1986
土壌79	土 1	高A205-6 G	Y・T・a	1987	土壌墓 6	土27	高B207 O	H・T	1986
土壌80	土 3	高A207 J	H・E	1985	土壌墓 7	土13	高B207 O	H・T	1986
土壌81	土 1	高A207 J	H・E	1985	土壌墓 8	土32	高B207 O	H・T	1986
土壌82	土 4	高A207 J	H・E	1985	土壌墓 9	土 8	高B207 O	H・T	1986
溝53	Na 1	高A207H・I	I・O	1985	土壌墓10	土 5	高B207 O	H・T	1986
溝54	溝 8	高A207 I・J	I・O H・E	1985	土壌墓11	土 4	高B207 O	H・T	1986
溝55	溝 2・3・4・5 6	高A207-8 K・I	H・E	1985	土壌墓12	土 3	高B208 O・P	Y・T・a	1987
土壌83	土42	高B207 O	H・T	1986	土壌墓13	土 2	高B207 P	Y・T・a	1987
土壌84	土41	高B208 O	H・T	1986	溝58	溝10・Na22	高B207~9 O ・P	H・T・Y・ O	1982 1986
土壌85	土 1	高B209 Q	H・K	1982	溝59	溝41	高B207-8 P	Y・T・a・ H・K	1982 1987
土壌86	土 7	高B209 R	H・K	1982	溝60	溝38	高B207 P・Q Q	Y・T・a	1987
土壌87	土 5	高B209 R	H・K	1982	溝61	溝18	高B208 T	Y・U	1986
石器集積土壌 1	石器集積 2	高B209 R	H・K	1982	土壌107	土 5	高B208 T	Y・U	1986
石器集積土壌 2	石器集積 1	高B209 R	H・K	1982	土壌108	土 4	高B209 U	Y・U	1986
溝56	溝 4	高B206 L	H・T	1986	土壌109	土 3	高B209 U	Y・U	1986

新旧遺構名称対照表

報告書遺構名	調査時遺構名	調査区	担当者	年度	報告書遺構名	調査時遺構名	調査区	担当者	年度
土壌110	土6	高B209 U	Y・U	1986	溝95	溝15-1・溝16	高B208 R~T	Y・T・a・U	1986 1987
溝62	溝32・溝弥2・13	高B207~9P	Y・T・a H・K	1982 1987	溝96	溝15・16・23	高B208 S・T	Y・T・a・U	1986 1987
溝63	溝36	高B207 Q	Y・T・a	1987	溝97	溝21・溝15	高B207-8 R ~T	Y・T・a・U	1986 1987
溝64	溝37	高B207-8 Q	Y・T・a	1987	溝98	溝20-1・溝9	高B208 S・T	Y・T・a・U	1986 1987
溝65	溝26・溝弥14・溝弥31	高B207~9Q ~S	Y・T・a H・K	1982 1987	溝99	溝20-2・溝9	高B208 S・T	Y・T・a・U	1986 1987
溝66	溝20	高B209 T	Y・U	1986	溝100	溝20-3・溝9	高B208 S・T	Y・T・a・U	1986 1987
溝67	溝21	高B209 U	Y・U・H・K	1982 1986	溝101	溝20-4・溝8	高B208 S~V	Y・T・a・U	1986 1987
溝68	溝3	高B208-9 X	Y・U	1986	溝102	溝弥9	高B209-10T	H・K	1982
溝69	溝2・溝28	高B209-10V ~X	Y・U・H・K	1982 1986	溝103	溝11	高B208 T	Y・U	1986
池状遺構1	池状遺構	高B208-9 Q	H・K	1982	溝104	溝12	高B208 T	Y・U	1986
池状遺構2	池状遺構	高B208Q・R	Y・T・a	1987	溝105	溝13	高B208 T	Y・U	1986
土壌111	土1	高B207 L	H・T	1986	溝106	溝14	高B209 T	Y・U	1986
土壌112	溝15横土壌	高B208 R	Y・T・a	1987	溝107	溝10	高B208 U	Y・U	1986
土壌113	土2	高B208 T	Y・U	1986	溝108	溝25	高B209 U~W	I・A	1982
土壌114	土1	高B208 W	Y・U	1986	溝109	溝24	高B209-10U ~W	I・A	1982
溝70	溝3・No26	高B207 L	H・T・Y・O	1982 1986	溝110	溝18	高B210 V・W	I・A	1982
溝71	No25	高B207-8 L M	Y・O	1982	溝111	溝26	高B210 V・W	I・A	1982
溝72	No24	高B207-8 L M	Y・O	1982	溝112	溝19	高B208 V	Y・U	1986
溝73	溝5・6	高B207-8 O	H・T	1986	溝113	溝18	高B208 V・W	Y・U	1986
溝74	溝9・溝31・溝弥9	高B207~9O ・P	H・T・Y・a・K	1982 1987	溝114	溝17	高B208 W	Y・U	1986
溝75	溝19・溝弥1	高B207~9P	Y・T・a H・K	1982 1987	溝115	溝21	高B209~11 V~X	Y・U・I・A	1982 1986
溝76	溝弥8	高B208-9 P	H・K	1982	溝116	溝19・溝弥1	高B207~9P	Y・T・a H・K	1982 1987
溝77	溝18・溝弥4・6	高B207~9P ・Q	Y・T・a H・K	1982 1987	溝117	溝17・溝弥10	高B207~9P ~R	Y・T・a H・K	1982 1987
溝78	溝弥5	高B209 Q	H・K	1982	溝118	溝13・溝弥1・溝1	高B207~10 Q~V	Y・T・a H・K・I・A	1982 1987
溝79	溝弥18	高B209 Q	H・K	1982	溝119	溝14・溝弥2・溝2	高B207~10 Q~V	Y・T・a H・K・I・A	1982 1987
溝80	溝17・溝弥11	高B207~9P ~R	Y・T・a H・K	1982 1987	溝120	溝15-1・溝弥3・溝3	高B207~10 Q~W	Y・T・a H・K・I・A	1982 1987
溝81	溝34	高B207 P	Y・T・a	1987	溝121	溝15-2・溝弥5・溝4	高B208~10 R~V	Y・T・a H・K・I・A	1982 1987
溝82	溝弥3	高B208-9 Q	H・K	1982	溝122	溝15-3	高B208 R~T	Y・T・a・U	1986 1987
溝83	溝35・溝弥17	高B207~9Q ・R	Y・T・a H・K	1982 1987	溝123	溝弥6・溝5	高B209 U	H・K・I・A	1982
溝84	溝弥12	高B209Q・R	H・K	1982	竪穴住居21	No 2	高B208 M	Y・O	1982
溝85	溝弥20	高B209 R	H・K	1982	建物17	No 8	高B208 P	Y・O	1982
溝86	溝30・溝弥7	高B207-8 Q R	Y・T・a	1987	井戸11	No 1	高B208 L	Y・O	1982
溝87	溝24・溝弥19・溝弥8	高B207~9Q ~S	Y・T・a H・K	1982 1987	井戸12	井1	高B207 M	H・T	1986
溝88	溝13・溝弥10・11 溝10・11	高B207~10 Q~V	Y・T・a H・K	1982 1987	土壌115	No 4	高B208 M	Y・O	1982
溝89	溝29・溝弥12・13 溝12・13	高B207~10 Q~W	Y・T・a H・K	1982 1987	土壌116	No 3	高B208 M	Y・O	1982
溝90	溝29・溝弥3・17 14・15・16・溝16・17	高B207~10 Q~W	Y・T・a H・K	1982 1987	土壌117	No11	高B207-8 L	Y・O	1982
溝91	溝15-1・溝5-6-7 溝弥14-15・溝14-15	高B207~10 Q~W	Y・T・a H・K	1982 1987	土壌118	No10	高B208 P	Y・O	1982
溝92	溝15-2・溝4・溝弥18-19・溝19・20	高B207~10 Q~W	Y・T・a H・K	1982 1987	槽2	No 7	高B208 N	Y・O	1982
溝93	溝15・16・21	高B208 S・T	Y・T・a・U	1986 1987	溝124	溝1・No 5	高B207~9N	H・T Y・O	1982 1986
溝94	溝16・22	高B208 R・S	Y・T・a	1987	溝125	溝2・No 6	高B207~9O	H・T Y・O	1982 1986

百間川沢田遺跡 3

報告書遺構名	調査時遺構名	調査区	担当者	年度	報告書遺構名	調査時遺構名	調査区	担当者	年度
溝126	溝8・溝古2・5・6	高B207~9P	Y・T・a H・K	1982 1987	溝165	溝14	足213 QQ	H・T・a	1987
溝127	溝9・溝古10	高B207~9P Q	Y・T・a H・K	1982 1987	土壇119	№1	足212 FF	O・a	1986
溝128	溝古1	高B208 P	H・K	1982	土壇群1	溝3	足212・13LL	H・T	1986
溝129	溝古3	高B208 P	H・K	1982	土壇群2	溝1	足213 OO	H・T・a	1987
溝130	溝古4・7	高B208・9 P Q	H・K	1982	溝166	№5	足212・13BB ~DD	Y・O	1982
溝131	溝10	高B207 P	Y・T・a	1987	溝167	溝1	足213 II	H・T	1986
溝132	溝7・溝古9	高B207~9P ~R	Y・T・a H・K	1982 1987	溝168	溝6・7	足213 PP	H・T・a	1987
溝133	溝11	高B207・8 Q	Y・T・a	1987	溝169	溝5	足213 PP	H・T・a	1987
溝134	溝古8	高B209 R	H・K	1982	溝170	溝8	足213 PP	H・T・a	1987
溝135	溝5	高B207・8 Q R	Y・T・a	1987	溝171	溝11	足213 QQ	H・T・a	1987
溝136	溝6	高B207・8 R	Y・T・a	1987	溝172	溝12	足213 QQ	H・T・a	1987
溝137	溝3	高B208 S	Y・T・a	1987	溝173	溝18	足213 QQ	H・T・a	1987
建物18	建1	高B207 Q	Y・T・a	1987	土壇120	土1	足213 MM	H・T	1986
溝138	溝12	高B207・8 Q	Y・T・a	1987	土壇121	土1・2	足213 NN	H・T・a	1987
溝139	溝4	高B207 Q	Y・T・a	1987	溝174	№2	足212・13GG	O・a	1986
溝140	中世溝	高B208・9 Q	H・K	1982	溝175	溝1	足212・13LL ・MM	H・T	1986
溝141		高B208・9 Q	H・K	1982	溝176	溝2	足212・13MM	H・T	1986
溝142	溝2	高B208 S	Y・T・a	1987	溝177	溝9	足213 PP・ QQ	H・T・a	1987
溝143	溝1	高B208 S	Y・T・a	1987	溝178	溝10	足213 QQ	H・T・a	1987
溝144	溝4	竪214 M	H・F・T	1989	土壇122	土10	四213 SS	H・T・a	1987
溝145	溝3	竪214 N	H・F・T	1989	土壇123	土3	四213 SS	H・T・a	1987
溝146	溝2	竪214 N	H・F・T	1989	土壇124	土4	四213 SS	H・T・a	1987
溝147	溝1	竪214 N	H・F・T	1989	土壇125	土7	四213 SS	H・T・a	1987
溝148	№6	足212 BB~ ~DD	Y・O	1982	土壇126	土5	四213 SS	H・T・a	1987
溝149	溝20	足213 PP・ QQ	H・Y・a	1987	土壇127	土6	四213 SS	H・T・a	1987
溝150	№4	足212・13FF ・GG	O・a	1986	土壇128	土8	四214 SS	H・T・a	1987
溝151	溝13	足213 PP・ QQ	H・T・a	1987	土壇129	土2	四213 TT	H・T・a	1987
溝152	溝19	足213 QQ	H・T・a	1987	溝179	溝34	四213 RR・ SS	H・T・a	1987
溝153	№7	足212 CC	Y・O	1982	溝180	溝33・32・44	四213 RR・ SS	H・T・a	1987
溝154	№3・溝3	足212・13HH ・II	O・a H・T	1986	溝181	溝15・30・31・43 45	四213 RR・ SS	H・T・a	1987
溝155	溝4	足212 HH・ II	H・T	1986	溝182	溝47	四213 TT	H・T・a	1987
溝156	溝2	足212 JJ	H・T	1986	溝183	溝27・38	四213 RR・ SS	H・T・a	1987
溝157	溝2	足212・13KK	Y・U	1986	溝184	溝24・25・26・42	四213 RR・ SS	H・T・a	1987
溝158	溝1	足212・13KK ・LL	Y・U	1986	土壇130	土6	四213 RR	H・T・a	1987
溝159	溝5・溝3	足212・13MM ・NN	H・T・a	1987	土壇131	土3	四213 RR	H・T・a	1987
溝160	溝6・溝2	足212・13NN	H・T・a	1987	溝185	溝23	四213 RR	H・T・a	1987
溝161	溝16	足213 QQ	H・T・a	1987	溝186	溝22	四213 RR	H・T・a	1987
溝162	溝17	足213 QQ	H・T・a	1987	溝187	溝21・36	四213 RR・ SS	H・T・a	1987
溝163	溝15	足213 QQ	H・T・a	1987	溝188	溝35	四213 SS	H・T・a	1987
溝164	溝4	足212・13MM	H・T	1986	溝189	溝37	四213 SS	H・T・a	1987

新旧遺構名称対照表

報告書遺構名	調査時遺構名	調査区	担当者	年度	報告書遺構名	調査時遺構名	調査区	担当者	年度
溝190	溝39	四213 SS TT	H・T・a	1987					
溝191	溝40	四213 TT	H・T・a	1987					
溝192	溝	流216 Q	I・A	1982					

○調査区欄の横＝横田調査区、高A＝高縄手A調査区、高B＝高縄手B調査区、足＝足洗調査区、四＝四元調査区、流＝流田・開ノ山下調査区、竪＝竪石調査区の略である。

○担当者欄のI＝井上、Y＝柳瀬、A＝浅倉、H＝平井勝、K＝古谷野、F＝藤田、E＝江見、U＝宇垣、T＝高田、a＝阿部の略である。



1. 百間川沢田遺跡航空写真（北から）



2. 百間川沢田遺跡遠景〈足洗・四元調査区付近〉（西から）

図版 2



1. 横田 作業風景（北西から）



2. 高縄手A 作業風景（北東から）



1. 高縄手B 作業風景（北東から）



2. 四元 作業風景（南西から）



1. 横田 205-E・F区弥生時代前期遺構全景（南東から）



2. 横田 土壇 1（北東から）



1. 横田 土壙 4 (北から)



2. 横田 土壙 6 (北から)



1. 横田 土壇 7 (南東から)



2. 横田 土壇墓 1 (北から)



1. 横田 溝 4 (北東から)



2. 横田 溝 5・6 (北東から)



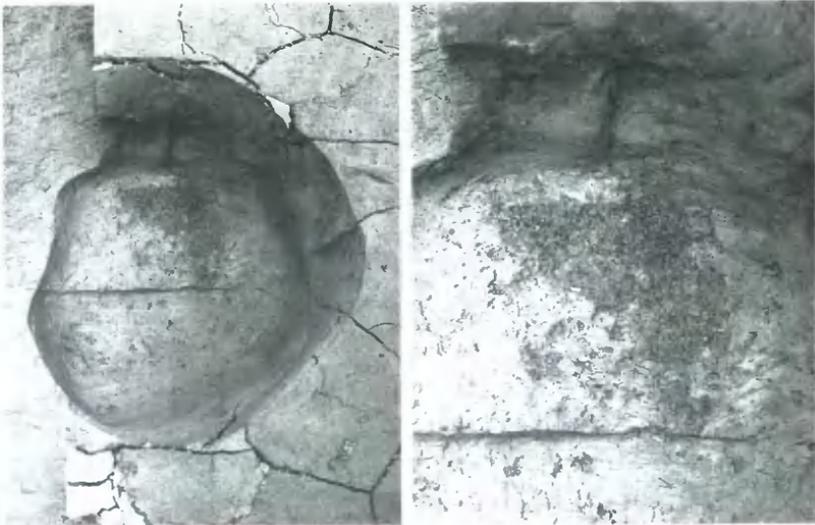
1. 横田 溝7 (北東から)



2. 横田 弥生時代中期水田<203~205-B~D区>〔南東から〕



1. 横田 弥生時代後期水田〈203~205-B~E区〉(南東から)



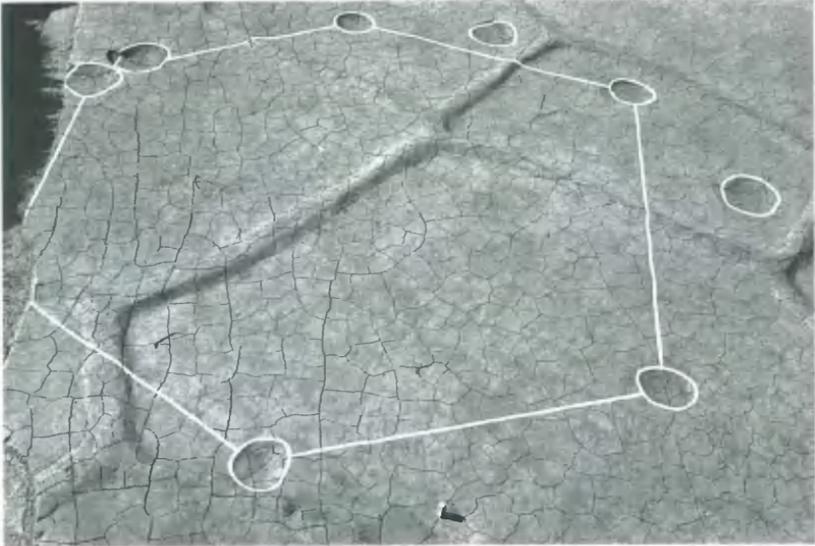
2. 横田 土壌12〈左〉 同種子出土状況〈右〉(北西から)



1. 横田 溝16 (南西から)



2. 横田 溝19・20・21 (北東から)



1. 横田 柱穴群1 (南東から)



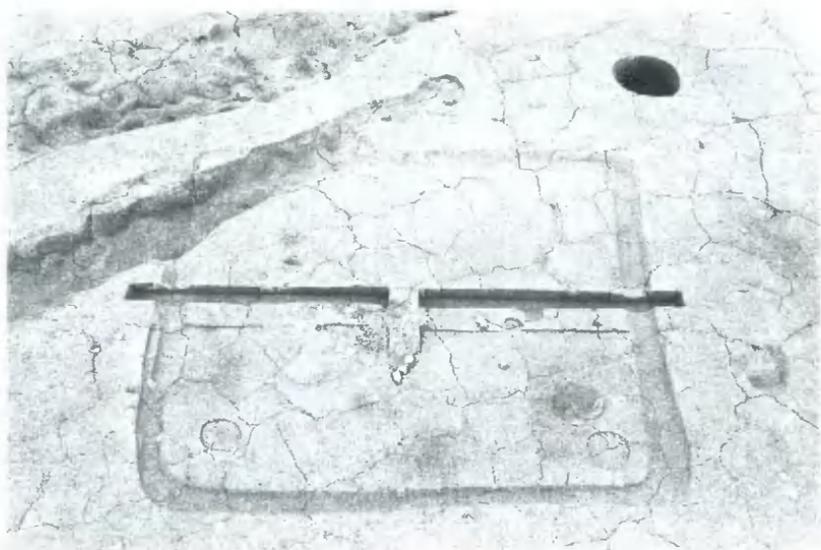
2. 横田 柱穴群2 (北東から)



1. 横田 204-B区古墳時代微高地斜面土器散布状況（北東から）



2. 横田 205-E区古墳時代微高地斜面土器散布状況（西から）



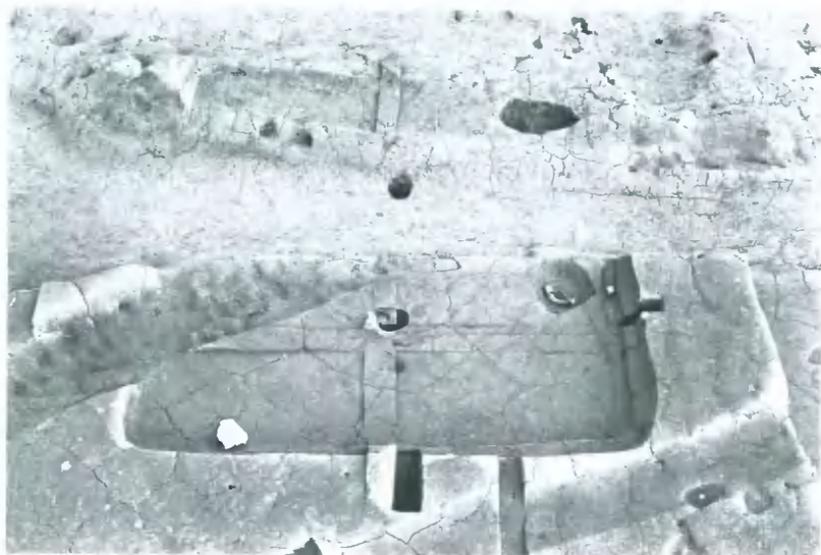
1. 横田 竪穴住居1 (南西から)



2. 横田 竪穴住居2 (北から)



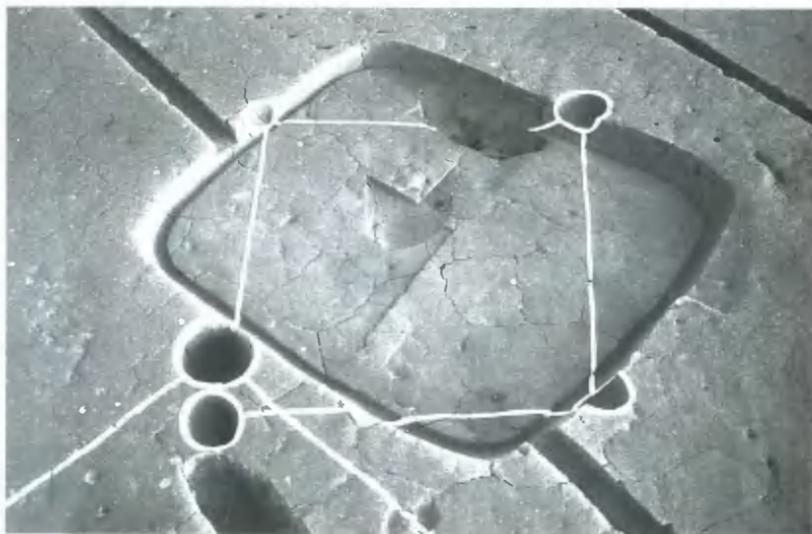
1. 横田 竪穴住居 3・建物 3・溝 29 (西から)



2. 横田 竪穴住居 4 (西から)



1. 横田 建物1 (西から)



2. 横田 建物2 (北西から)



1. 横田 井戸1 (南から)



2. 横田 井戸2 (西から)



1. 横田 土壙14 (北西から)



2. 横田 土壙15 (東から)



1. 横田 土壇18<左>(東から)・同鏡出土状態<右>



2. 横田 土壇墓2(北から)



1. 横田 205・206-E・F区中世遺構全景（南西から）



2. 横田 土壇23（東から）



1. 横田 柵 1 (東から)



2. 横田 溝 34 (北から)



1. 高縄手 A 205・206-G区弥生時代前期以前小穴群・西側環濠〈溝36〉（北から）



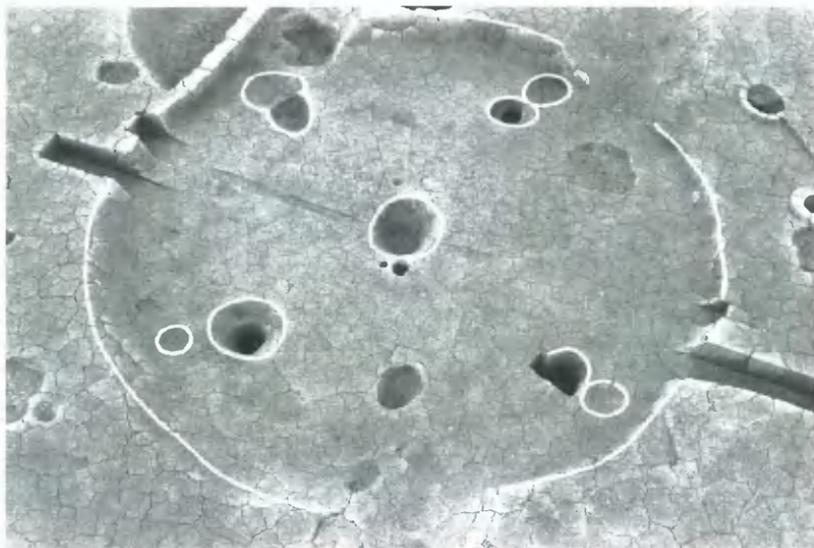
2. 高縄手 A 弥生時代前期環濠内竪穴住居跡群（西から）



1. 高縄手A 206~208-J・K区弥生時代前期の遺構 (西から)



2. 高縄手A 竪穴住居5 (南東から)



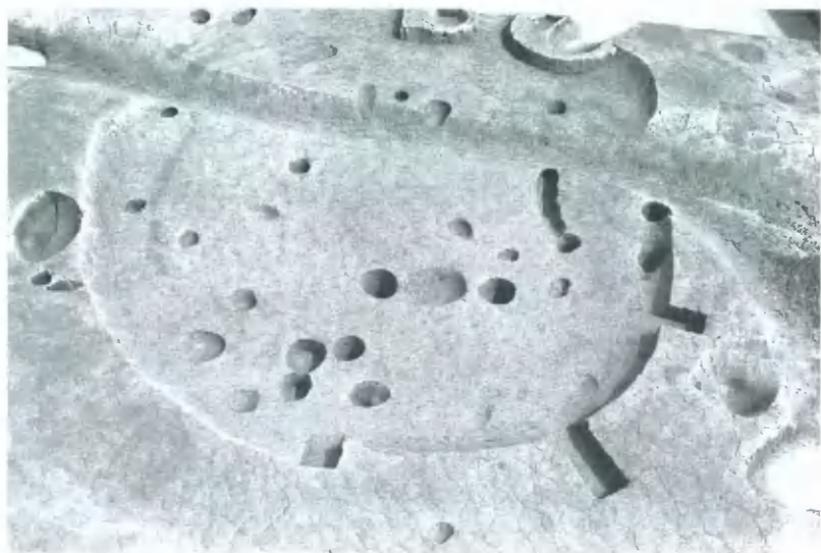
1. 高縄手A 竪穴住居6 (南東から)



2. 高縄手A 竪穴住居6の中央穴<左> 同石鏃出土状態<右>



1. 高縄手A 竪穴住居7 (北西から)



2. 高縄手A 竪穴住居8 (南から)



1. 高縄手A 土壇26 (北東から)



2. 高縄手A 土壇31 (南西から)



1. 高縄手A 土壙37 (北から)



2. 高縄手A 土壙41 (北東から)



1. 高縄手A 円形周溝1 (南から)



2. 高縄手A 円形周溝2〈上〉(南から)・同木棺小口板穴状遺構〈下〉



1. 高縄手A 溝36土層断面



2. 高縄手A 溝38 (西から)



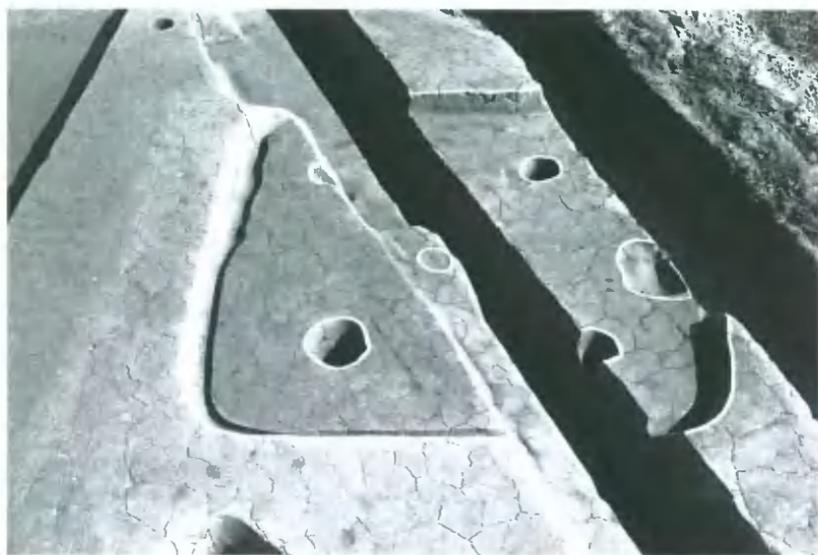
1. 高縄手A 溝44 (北から)



2. 高縄手A 206・207-H・I区古墳～奈良時代遺構 (南西から)



1. 高縄手 A 206~208-J・K 区古墳時代の遺構 (西から)



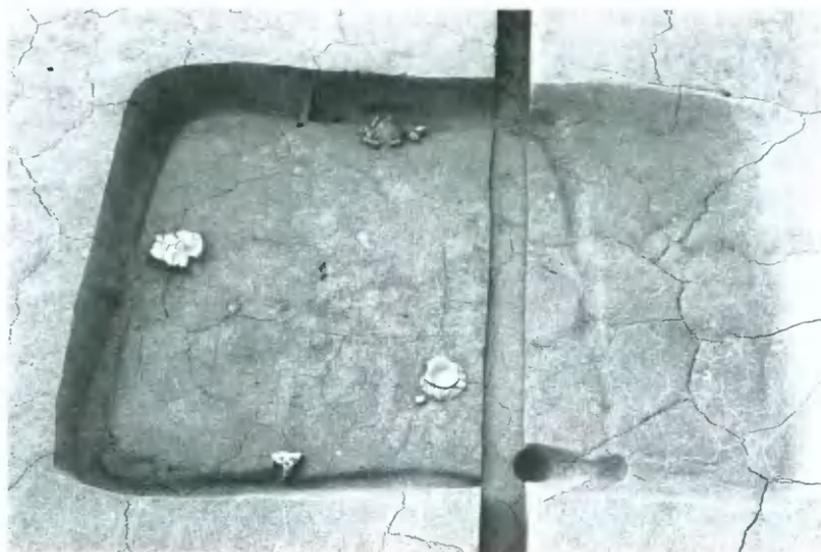
2. 高縄手 A 竪穴住居 9 (西から)



1. 高縄手A 竪穴住居10 (西から)



2. 高縄手A 竪穴住居10の炉跡<上>(西から) 同断面<下>(東から)



1. 高縄手A 竪穴住居11 (東から)



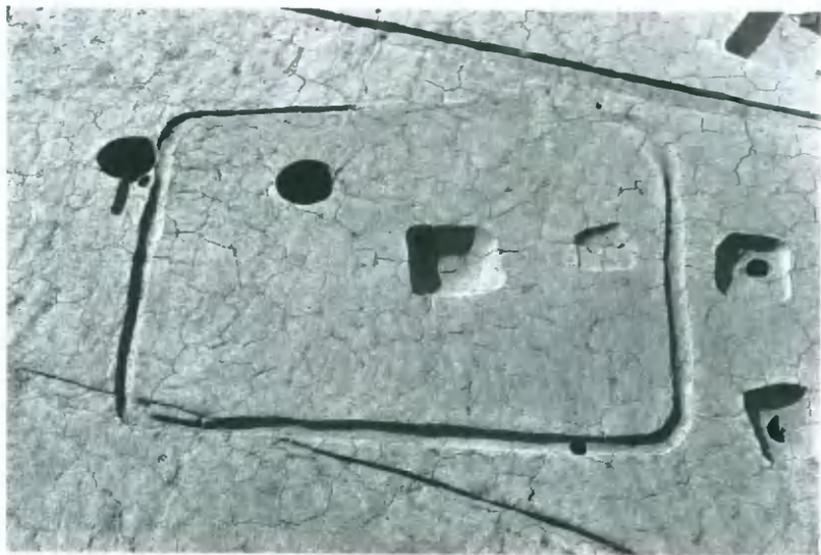
2. 高縄手A 竪穴住居12 (東から)



1. 高縄手A 竪穴住居14 (南東から)



2. 高縄手A 竪穴住居15 (北東から)



1. 高縄手A 竪穴住居16 (北から)



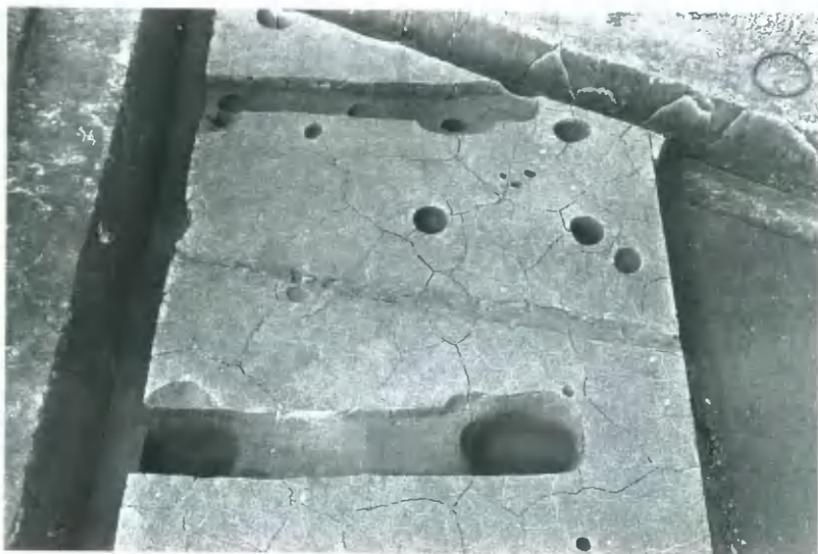
2. 高縄手A 竪穴住居17・18 (東から)



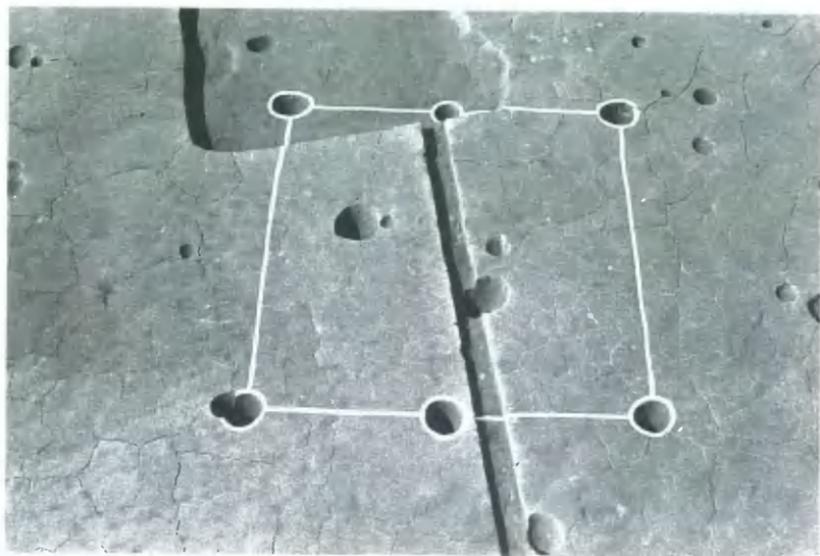
1. 高縄手A 竪穴住居19 (西から)



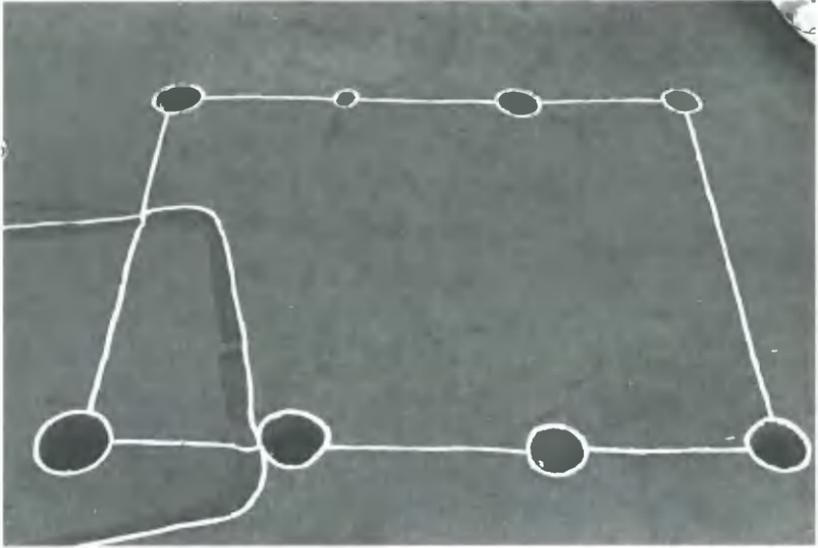
2. 高縄手A 竪穴住居20 (北西から)



1. 高縄手A 建物5 (南から)



2. 高縄手A 建物6 (東から)



1. 高縄手A 建物9 (南から)



2. 高縄手A 井戸3 (南東から)



1. 高縄手 A 井戸 4 (東から)



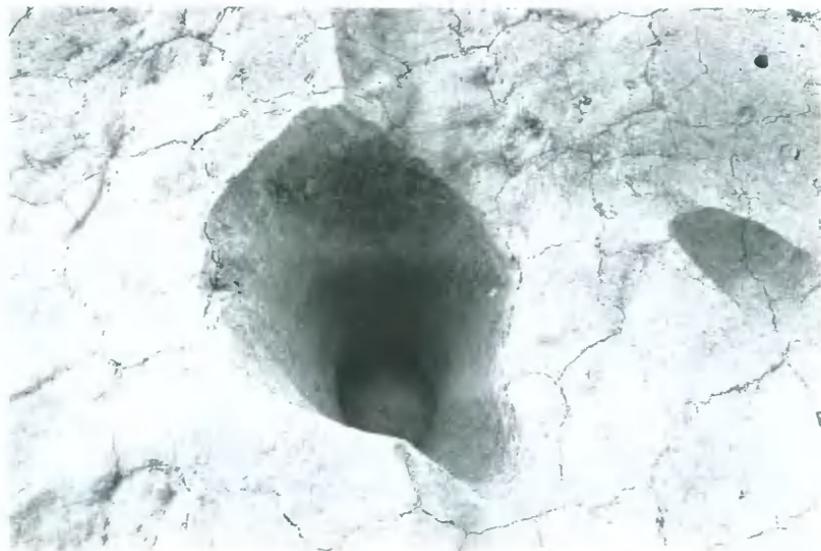
2. 高縄手 A 井戸 5 (西から)



1. 高縄手A 井戸6 (北から)



2. 高縄手A 井戸6 遺物出土状態上層<左>〔北から〕・同底部<右>〔南から〕



1. 高縄手A 井戸9 (北から)



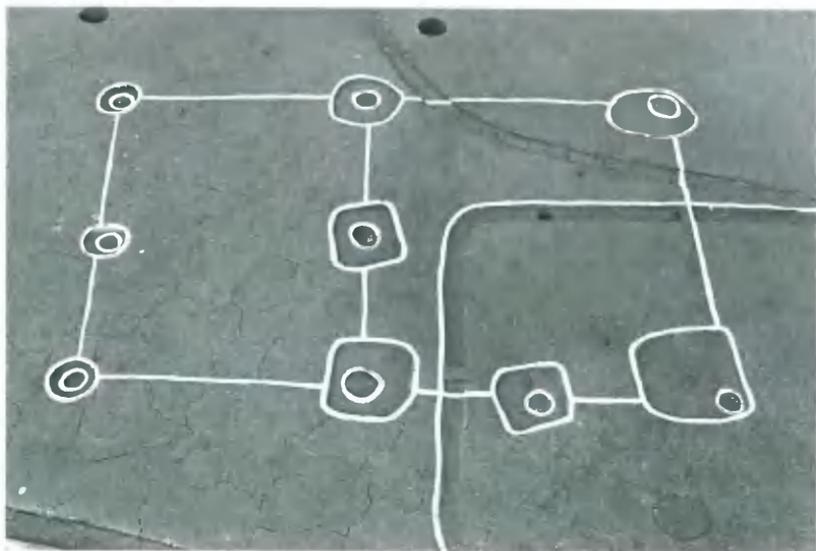
2. 高縄手A 土壙65 (北東から)



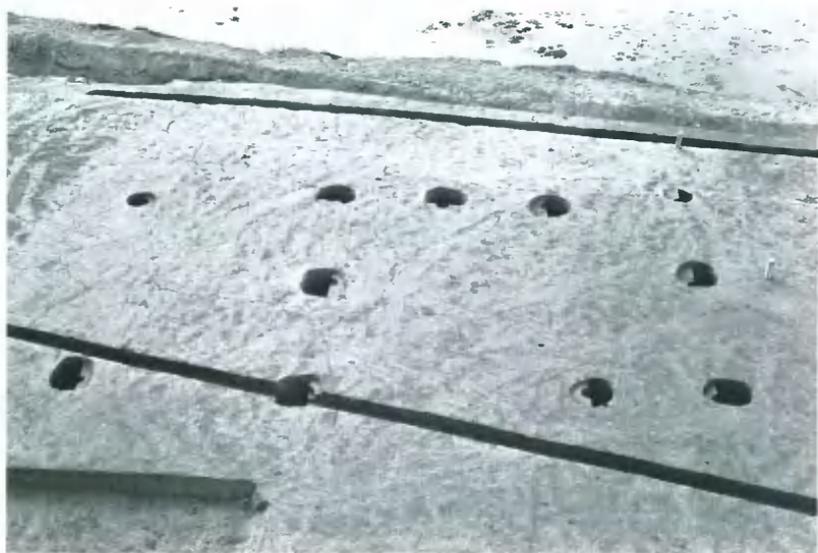
1. 高縄手A 土壙68 (東から)



2. 高縄手A 206・207-1区建物群 (北から)



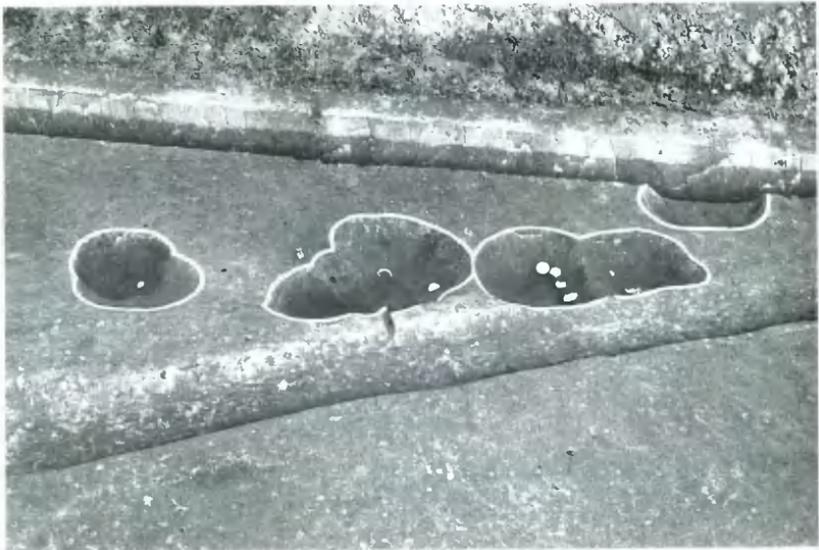
1. 高縄手A 建物15 (南から)



2. 高縄手A 建物16 (北から)



1. 高縄手A 井戸16 (南から)



2. 高縄手A 土壇71・72・74~79 (南から)



1. 高縄手A 溝53 (北から)



2. 高縄手A 溝55 (北から)



1. 高縄手B 旧河道部水田下西岸微高地下がり〈207-L・M区〉(北から)



2. 高縄手B 旧河道部水田下西岸微高地下がり土層断面〈207-L・M区〉(北西から)



1. 高縄手B 旧河道部水田下東岸微高地下がり〈208・209-O区〉(北東から)



2. 高縄手B 旧河道部水田下西岸微高地下がり〈207-L・M区〉の蛤刃石斧出土状態



1. 高縄手B 旧河道東岸微高地下がりの縄文時代遺構 〈206~208-N・O〉 (北から)



2. 高縄手B 土壙84 〈南東から〉



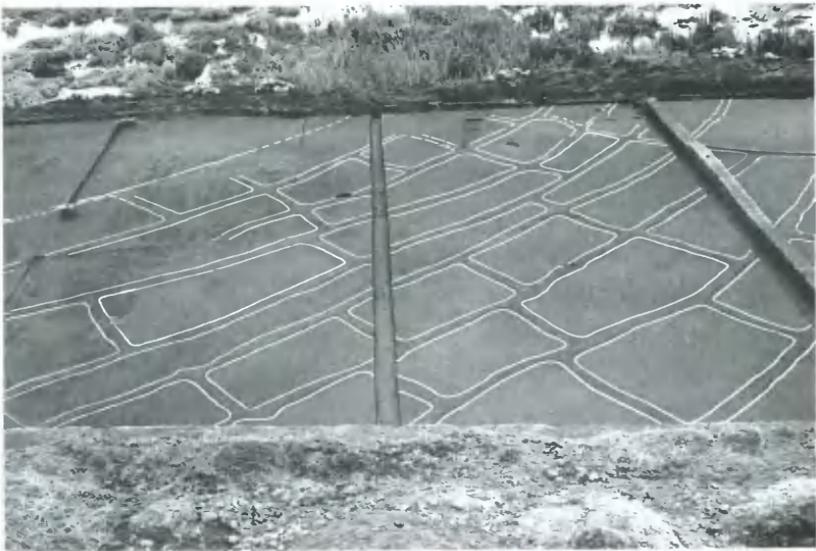
1. 高縄手B 石器集積土壌1 (東から)



2. 高縄手B 石器集積土壌2 (北東から)



1. 高縄手B 弥生時代前期水田1 (西から)



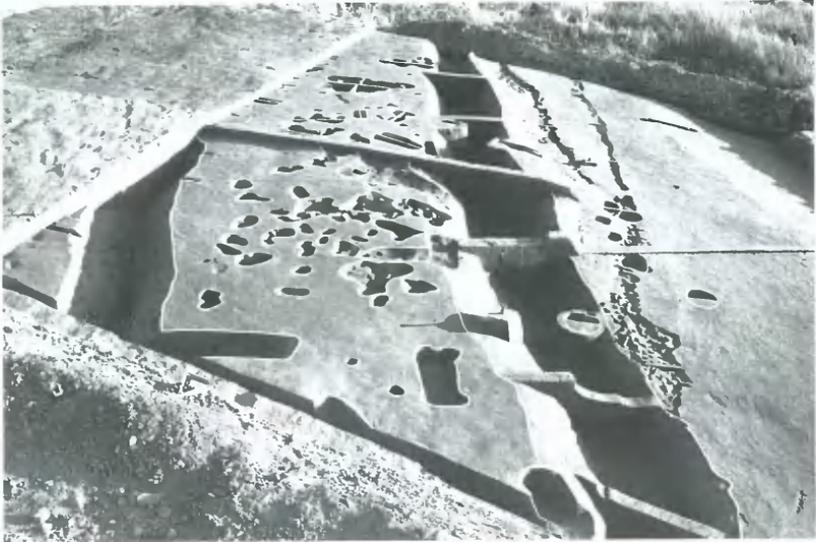
2. 高縄手B 弥生時代前期水田1 (北から)



1. 高縄手B 弥生時代前期水田2 (北から)



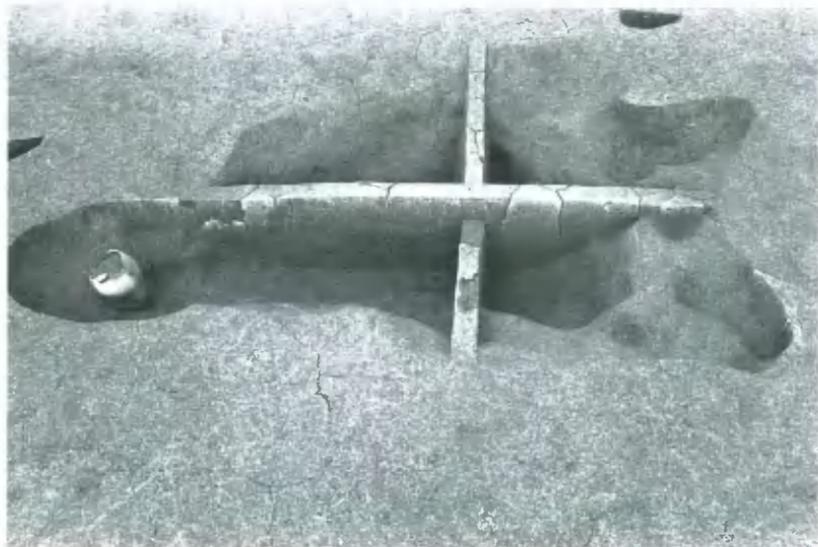
2. 高縄手B 弥生時代前期水田2 (西から)



1. 高縄手 B 207・208-O・P区弥生時代前期土壇・土壇墓群（北から）



2. 高縄手 B 207・208-P区弥生時代前期遺構（北から）



1. 高縄手B 土壇97 (南から)



2. 高縄手B 土壇101 (南西から)



1. 高縄手B 土壇103 (西から)



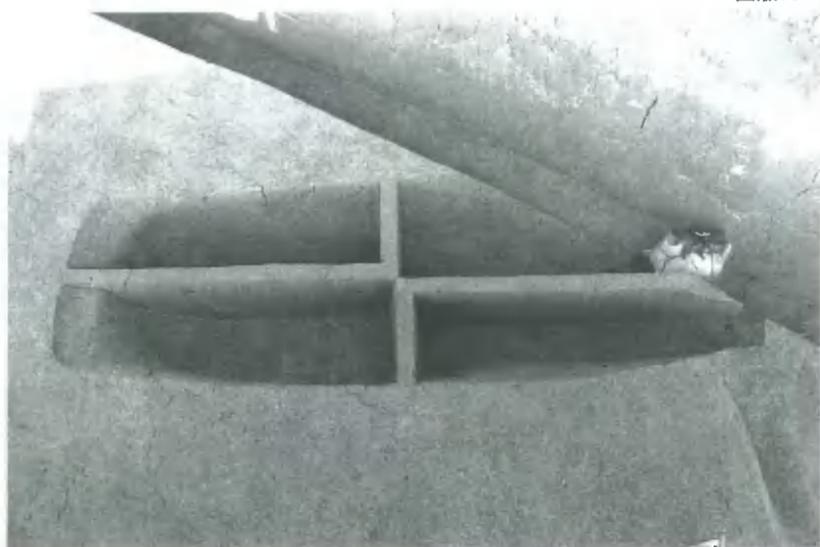
2. 高縄手B 土壇106 (北から)



1. 高縄手B 土壙墓3 (南から)



2. 高縄手B 土壙墓4 (東から)



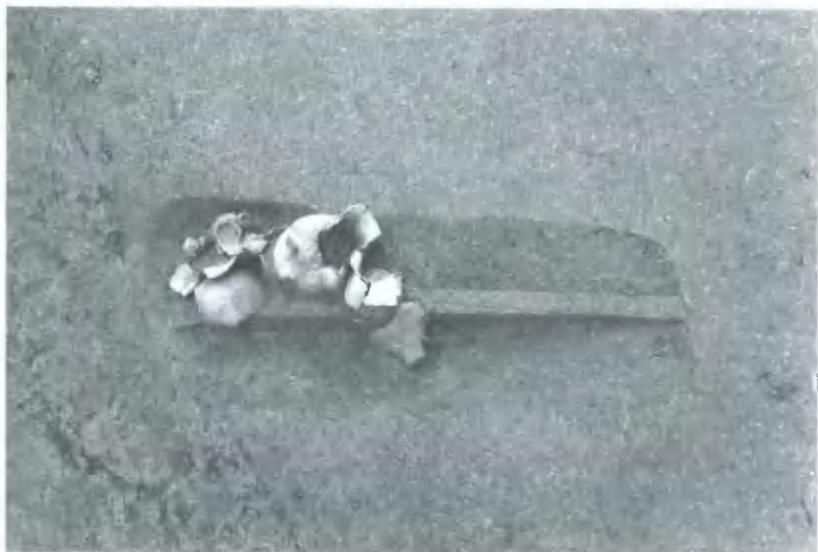
1. 高縄手B 土壙墓5 (南から)



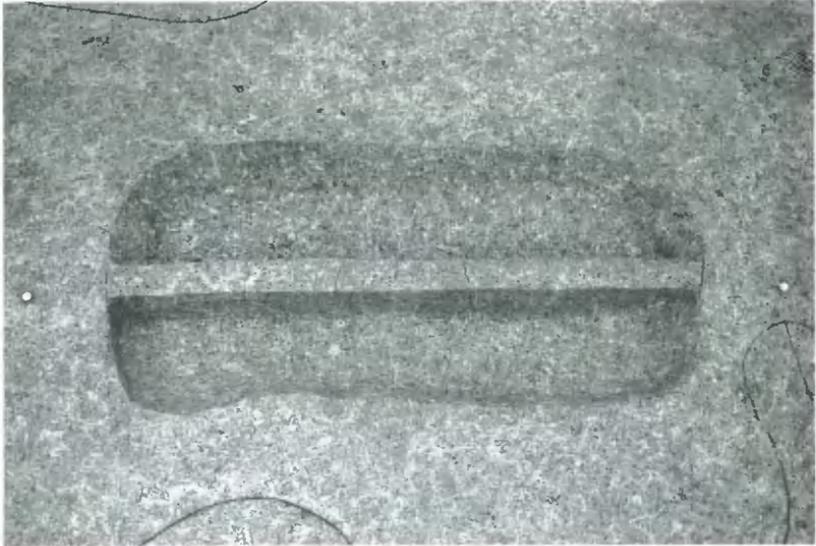
2. 高縄手B 土壙墓6 (東から)



1. 高縄手B 土壙墓7 (南から)



2. 高縄手B 土壙墓9 (南から)



1. 高縄手B 土壙墓10 (南西から)



2. 高縄手B 土壙墓12 (東から)



1. 高縄手B 208・209-W・X区弥生時代中期水田（北から）



2. 高縄手B 溝62（北から）



1. 高縄手B 溝65 (東から)



2. 高縄手B 溝66・弥生時代中期水田〈209・210-W区〉(北から)



1. 高縄手B 溝68 (北から)



2. 高縄手B 弥生時代後期溝群<209・210-U~W区> (西から)



1. 高縄手B 池状遺構1 (北から)



2. 高縄手B 池状遺構2 (北から)



1. 高縄手B 池状遺構 2



2. 高縄手B 弥生時代後期水田<旧河道部の206~208-L~O区> (西カ・2)



1. 高縄手B 弥生時代後期水田〈旧河道部の207～209-L～O区〉(北東から)



2. 高縄手B 弥生時代後期水田〈旧河道部の207～209-L～O区〉(北から)

図版64



1. 高縄手B 弥生時代後期水田〈旧河道部の207~209-L~O区〉の大畦水口（北から）



1. 高縄手B 弥生時代後期水田〈旧河道部の207~209-L~O区〉の大畦下  
木質・杭残存状態下部〈下〉（南から） 同上部〈上〉（北から）



1. 高縄手B 弥生時代後期水田〈旧河道部の207~209-L~O区〉の大畦下杭列  
(北から)(西から)



2. 高縄手B 弥生時代後期水田〈微高地縁辺部の209・210-R~W区〉



1. 高縄手B 弥生時代後期水田 <微高地縁辺部の207・208-P~S区> (東から)



2. 高縄手B 弥生時代後期水田と溝 <微高地縁辺部の209・210-R~W区> (西から)



1. 高縄手B 弥生時代後期水田〈微高地縁辺部の208・209-T~X区〉(西から)



2. 高縄手B 弥生時代後期水田と溝〈微高地縁辺部の209・210-U~W区〉(西から)



1. 高縄手B 弥生時代後期水田〈微高地縁辺部〉の足跡状痕跡



2. 高縄手B 弥生時代後期水田〈微高地縁辺部の209-V・W区〉〔北から〕



1. 高縄手B 溝77・82・116・126・128～130（北から）



2. 高縄手B 溝86～90・118～120（西から）



1. 高縄手B 93・95・96・98~100 (北東から)



2. 高縄手B 溝112・113・114・土壇114 (南から)



1. 高縄手B 209-U区溝断面 (西から)



2. 高縄手B 溝73 (北から)



1. 高縄手B 溝75・77・80・81・116・117 (北から)



2. 高縄手B 溝85・90～101 (西から)



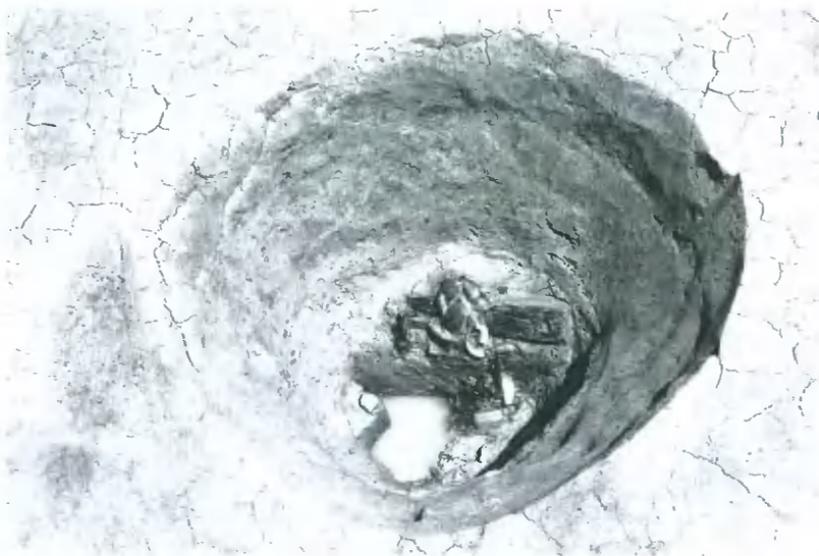
1. 高縄手B 溝91~101 (西から)



2. 高縄手B 溝117 (南から)



1. 高縄手B 建物17 (西から)



2. 高縄手B 井戸11 (南から)



1. 高縄手B 井戸12 (北から)



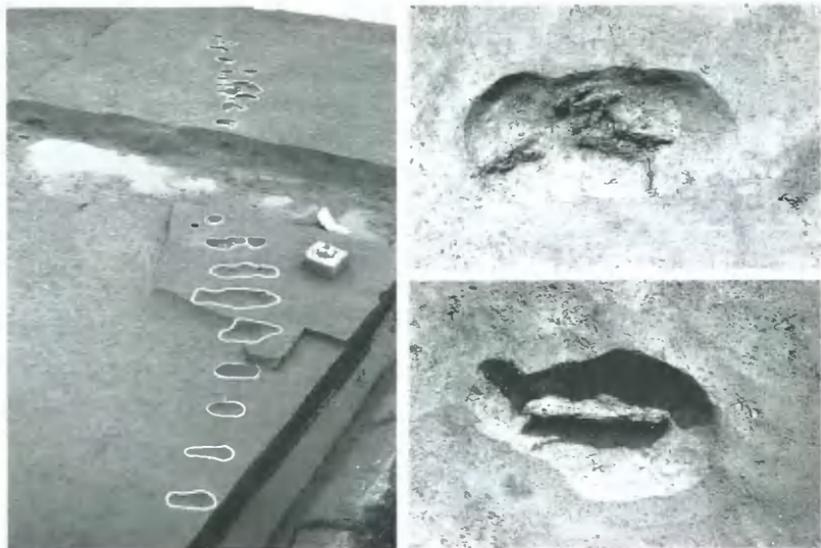
2. 高縄手B 土壙115・116 (南から)



1. 高縄手B 土壙117 第2層底 (北西から)



2. 高縄手B 土壙117 完掘 (南西から)



1. 高縄手B 柵2<左>・同柱穴<右>(西から)



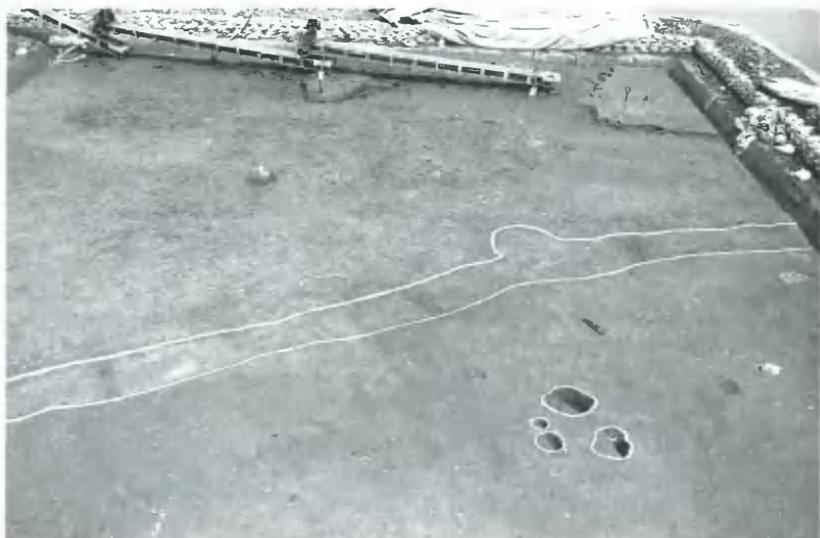
2. 高縄手B 溝124・125(北から)



1. 高縄手B 溝126・130  
〔北から〕



2. 高縄手B 溝127・132〔南東から〕



1. 高縄手B 古墳時代の遺構〈209・210-W区〉(西から)



2. 高縄手B 古墳時代の耕作痕 (南から)

図版80



1. 豎石 弥生時代後期の水田  
〈原樋高護214-M区〉(南西から)



2. 豎石 溝145~147〈原樋高護214-N区〉(南東から)



1. 豎石 弥生時代後期水田<排水機場N区216-K区>(東から)



2. 豎石 弥生時代後期水田<排水機場P区216-L・M区>(東から)



1. 豎石 弥生時代後期水田<排水機場 S区216・217-J・K区> (北から)



2. 豎石 排水機場 S区<216・217-J・K区>西壁土層断面 (東から)



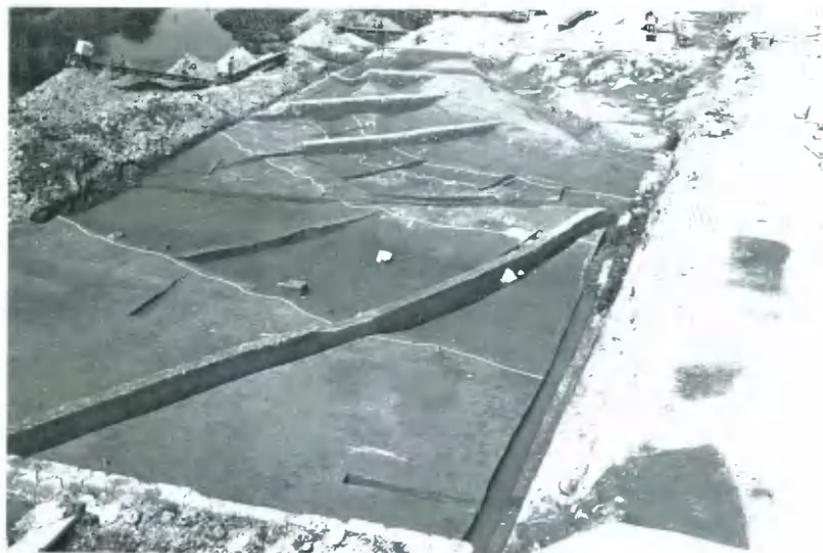
1. 足洗 溝148 (西から)



2. 足洗 溝149 (南から)



1. 足洗 溝150 (南から)



2. 足洗 溝151 (南西から)



1. 足洗 溝149・151・152・161～165・171～173（東から）



2. 足洗 溝149・152・161～165・171～173断面（西から）



1. 足洗 弥生時代後期水田<219・210-BB区> (北から)



2. 足洗 弥生時代後期水田<211・212-CC・DD区> (西から)



1. 足洗 弥生時代後期水田<212・213-EE・FF区> (南から)



2. 足洗 弥生時代後期水田<212・213-GG・HH区> (西から)



1. 足洗 弥生時代後期水田<212・213-II・JJ区>〔東から〕



2. 足洗 弥生時代後期水田の水路<213-II・JJ区>〔南東から〕



1. 足洗 弥生時代後期水田断面



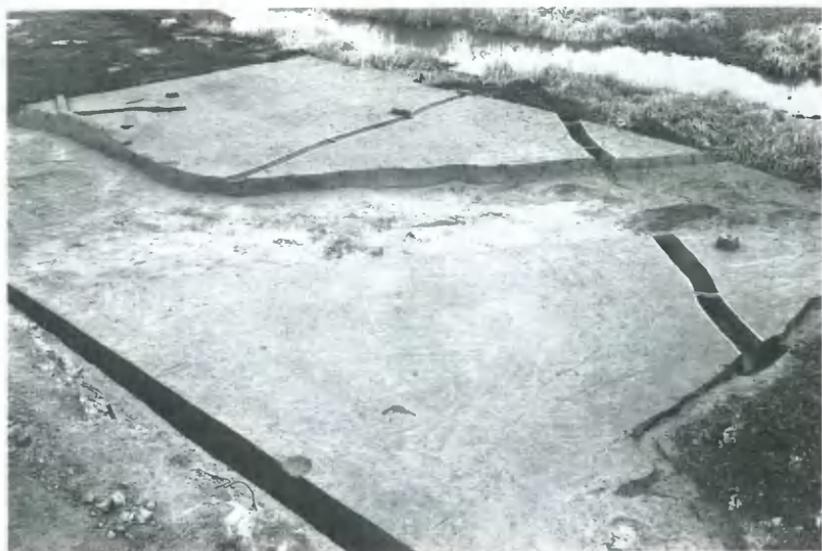
2. 足洗 弥生時代後期水田〈212・213-KK・LL区〉(西から)



1. 足洗 弥生時代後期水田<212・213-NN・OO区> (東から)



2. 足洗 溝 154・155 (東から)



1. 足洗 溝157・158 (南東から)



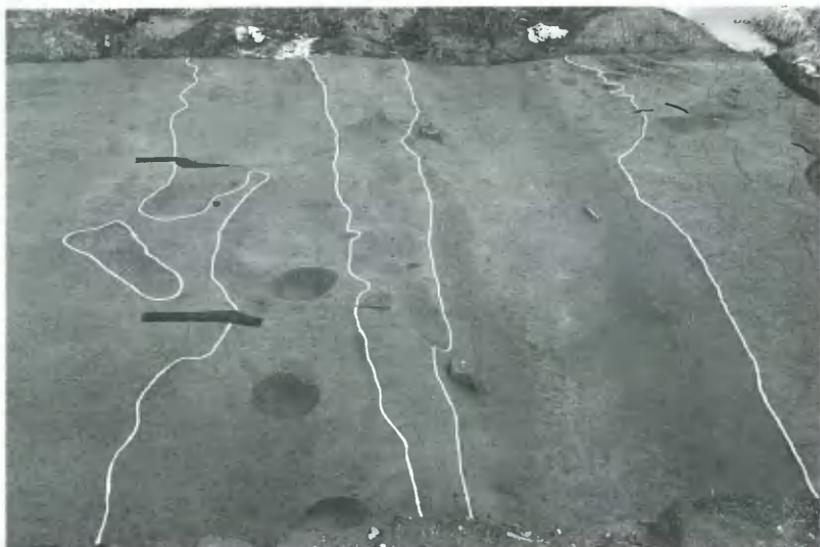
2. 足洗 溝168・169 (南から)



1. 足洗 溝168・169木製品出土状態



2. 足洗 溝174 (南から)



1. 足洗 溝175・176 (南から)



2. 足洗 中世の耕作痕 (北から)



1 四元 213-SS・TT 区の北東—南西土層断面 (南西から)



2 四元 213-SS・TT 区 北東—南西土層断面の縄文土器包含層と炉床 (西から)



1. 四元 縄文時代の遺物出土状況 <213-SS・TT区> (南から)



2. 四元 縄文土器出土状況 <213-SS・TT区>



1. 四元 土壙 123 (南西から)



2. 四元 土壙 124 (北から)



1. 四元 土壙 125 (南東から)



2. 四元 土壙 126 (南東から)



1. 四元 土壙126のドングリ出土状態



2. 四元 土壙128 (南東から)



1. 四元 土壙128のドングリ  
出土状態



2. 四元 縄文時代後期の炉床



1. 四元 縄文時代後期の貝塚（南から）



2. 四元 弥生時代後期水田〈213-TT区〉（西から）



1. 四元 弥生時代後期水田〈213-TT区〉の土層断面（北西から）



2. 四元 溝179~181・183・184・187（東から）



1. 四元 溝 179・180・181 (東から)



2. 四元 溝 179~181・183・187・189 (東から)



1. 四元 溝 180・181 (東から)



2. 四元 溝 187・188 (南西から)



1. 流田・開ノ山下 215・216-Q~W<右岸用水> (東から)



2. 流田・開ノ山下 215・216-Q~W<右岸用水> 弥生時代後期水田大畦畔 (北から)



2



3



5



4



15



26

横田 微高地西斜面洪水砂層上面 (2~5)・土壙 8 (15)・溝 7 (26) 出土遺物



43



52



53



61



59



57



62

横田 弥生時代前期包含層 (43)・竪穴住居 1 (52・53)・竪穴住居 2 (57~62) 出土遺物



64



73



65



75



67



66



74



81



82



83



84



94



101



161



164



170



171



174



175

図版110



182



199



183



235



181



241

高縄手 A 溝36 (181~183)・溝38 (199)・弥生時代前期土壙・柱穴(235・241) 出土遺物



高縄手 A 溝44出土遺物

図版112



250



253



255



258



256



265



279



278



280

高縄手 A 竪穴住居 9 (250~265)・竪穴住居 10 (278~280) 出土遺物



281



275



282



266



292



296



293



297

図版114



307



319



316



323



346



347



362



363



355



366



368



356



377



383



381



387



389



388



390



391



392



412



409



420



421



426



423



430



445



432



446



450



435



453



442



454



443

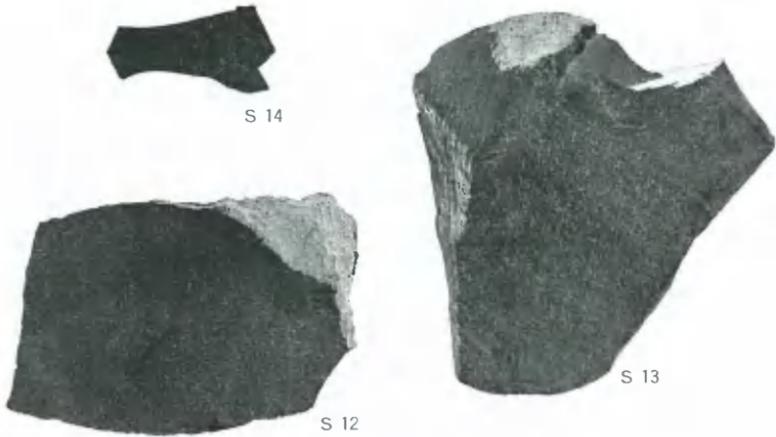


457

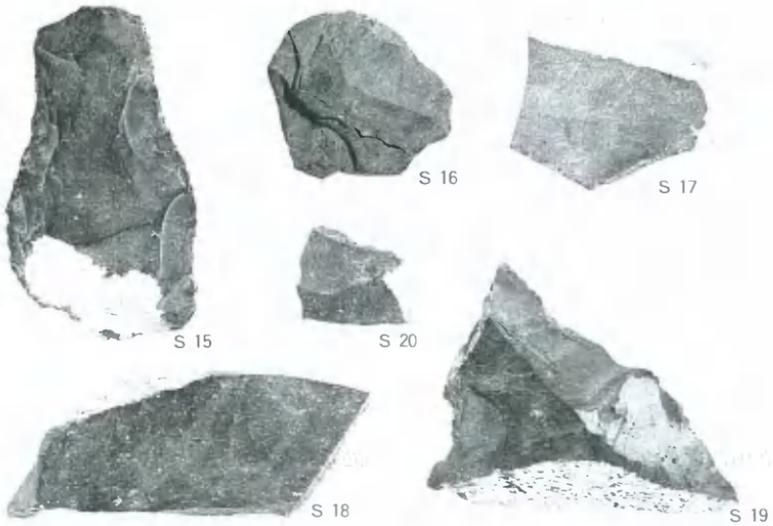


444

高純手 A 井戸10 (430~445)・土壙71 (446)・土壙75 (450)・土壙77 (453・454)・土壙78 (457)  
出土遺物



1. 高縄手B 石器集積土壌1 出土遺物



2. 高縄手B 石器集積土壌2 出土遺物





高縄手B 207・208-O 灰黒色粘土層出土遺物(2)



577



581



578



583



584

高縄手B 土壙92 (577)・土壙97 (578)・土壙101 (581)・土壙墓3 (583)・土壙墓5 (584)  
出土遺物



586



587



589



588



590



585



648



616



656



680



658



679

高縄手B 土壙墓6 (585)・池状遺構1 (616)・溝77 (648~658)・溝117 (679)・溝118 (680)  
出土遺物



703



706



704



707



705



709



710



711



667



685



714



686



715



694



717



721



722



736



727



739



728



730



737



735



752



760



740



747



743



745



761



768



750



751



776



773



821



820



777



779



778



780



799



800



781



784



782



786



804



803



787



852



788



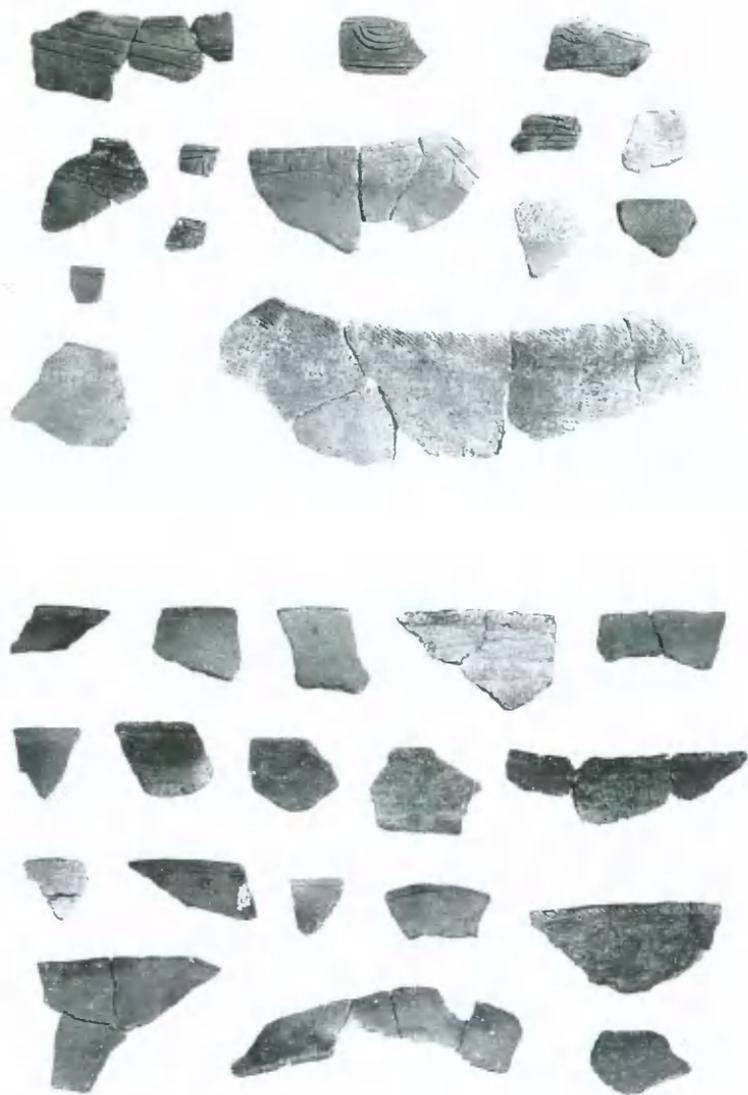
882



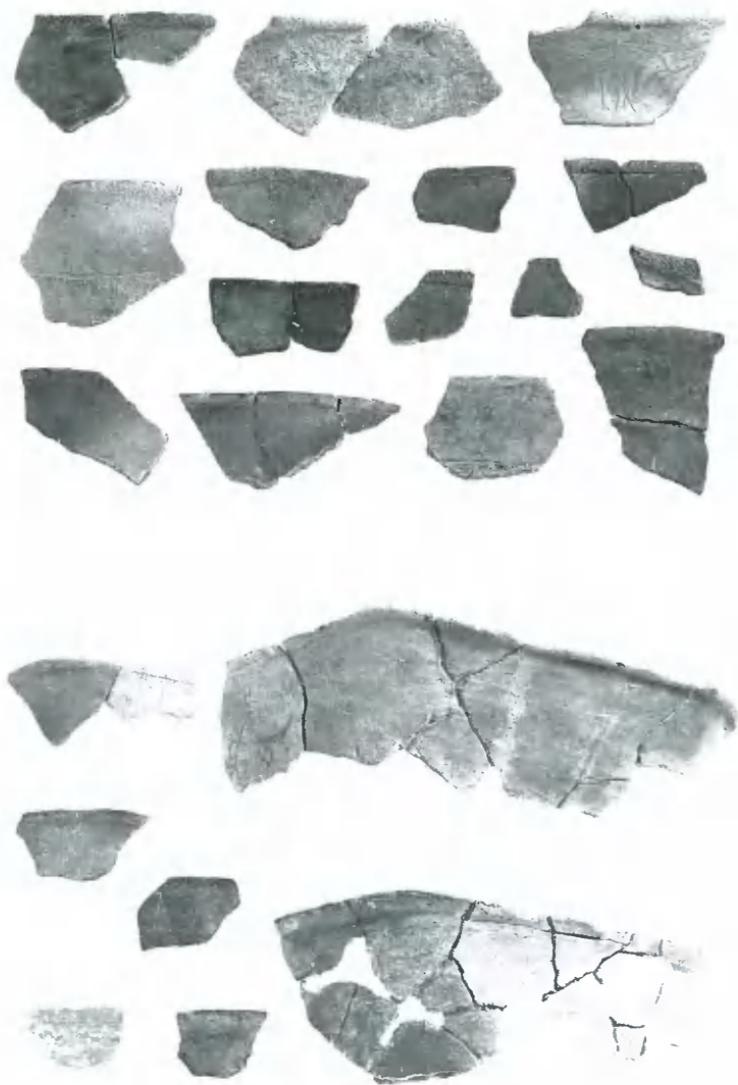
791



高縄手B 土壙117 (787~791)・包含層 (852) 出土遺物、足洗 弥生時代後期水田上面  
出土遺物



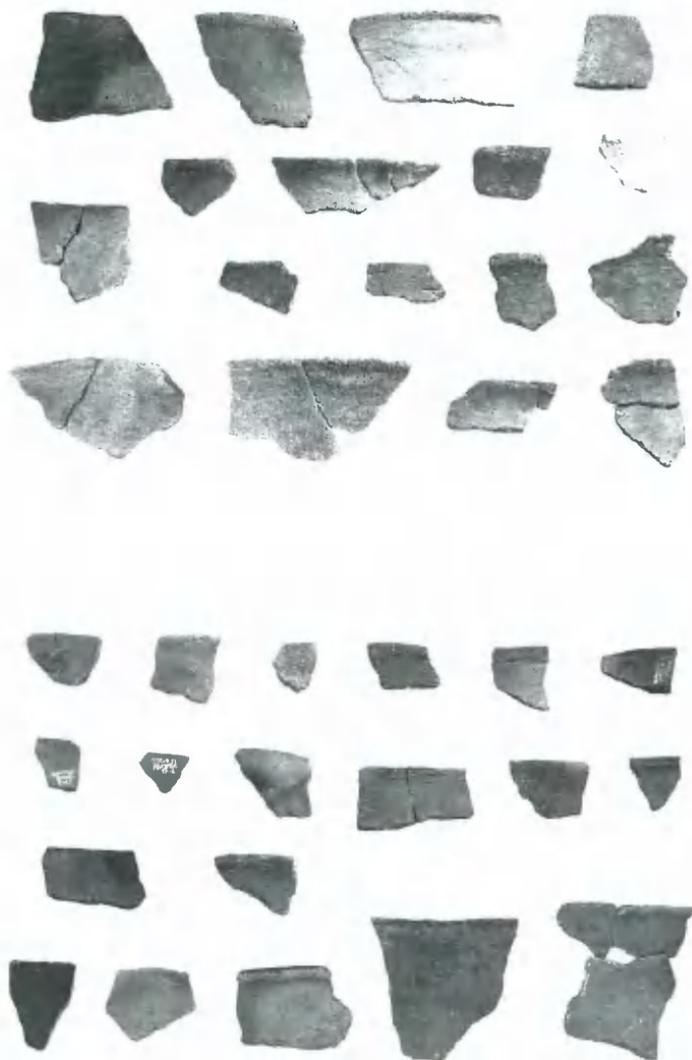
四元 213-SS~TT 出土の縄文土器 (1)



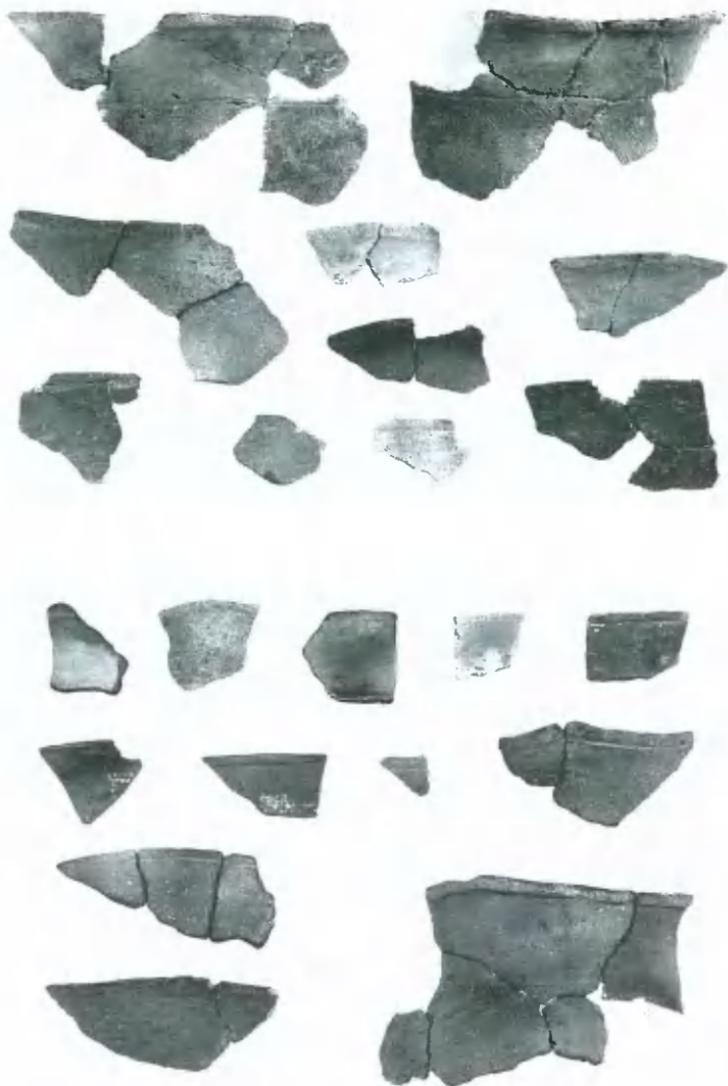
四元 213-SS~TT 出土の縄文土器 (2)



四元 213-SS~TT 出土の縄文土器 (3)



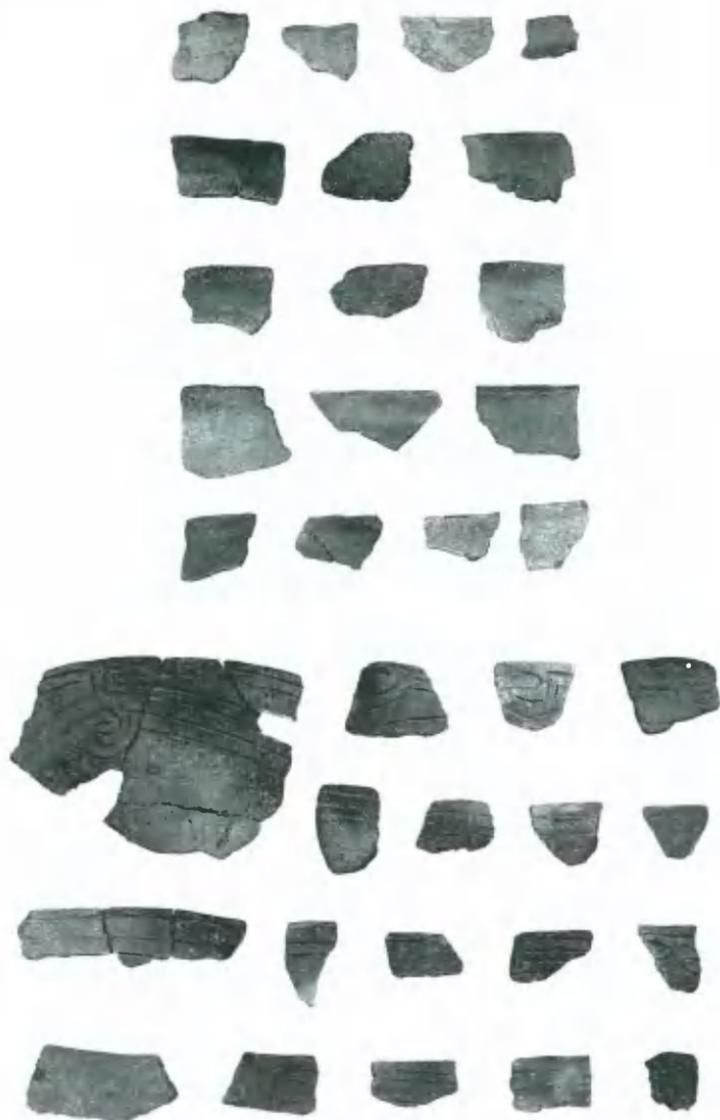
四元 213-SS~TT 出土の縄文土器 (4)



四元 213-SS~TT 出土の縄文土器 (5)



四元 213-SS~TT 出土の縄文土器 (6)



四元 213-SS~TT 出土の縄文土器 (7)



四元 213-SS~TT 出土の縄文土器 (8)

図版142



四元 213-SS~TT 出土の縄文時代石器

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告84

百間川沢田遺跡 3

旭川放水路（百間川）改修  
工事に伴う発掘調査 VIII

（表・図版）

1993年3月20日 印刷

1993年3月20日 発行

編集 岡山県古代吉備文化財センター

岡山市西花尻1325-3

発行 建設省岡山河川工事事務所

岡山市鹿田町2-4-36

岡山県教育委員会

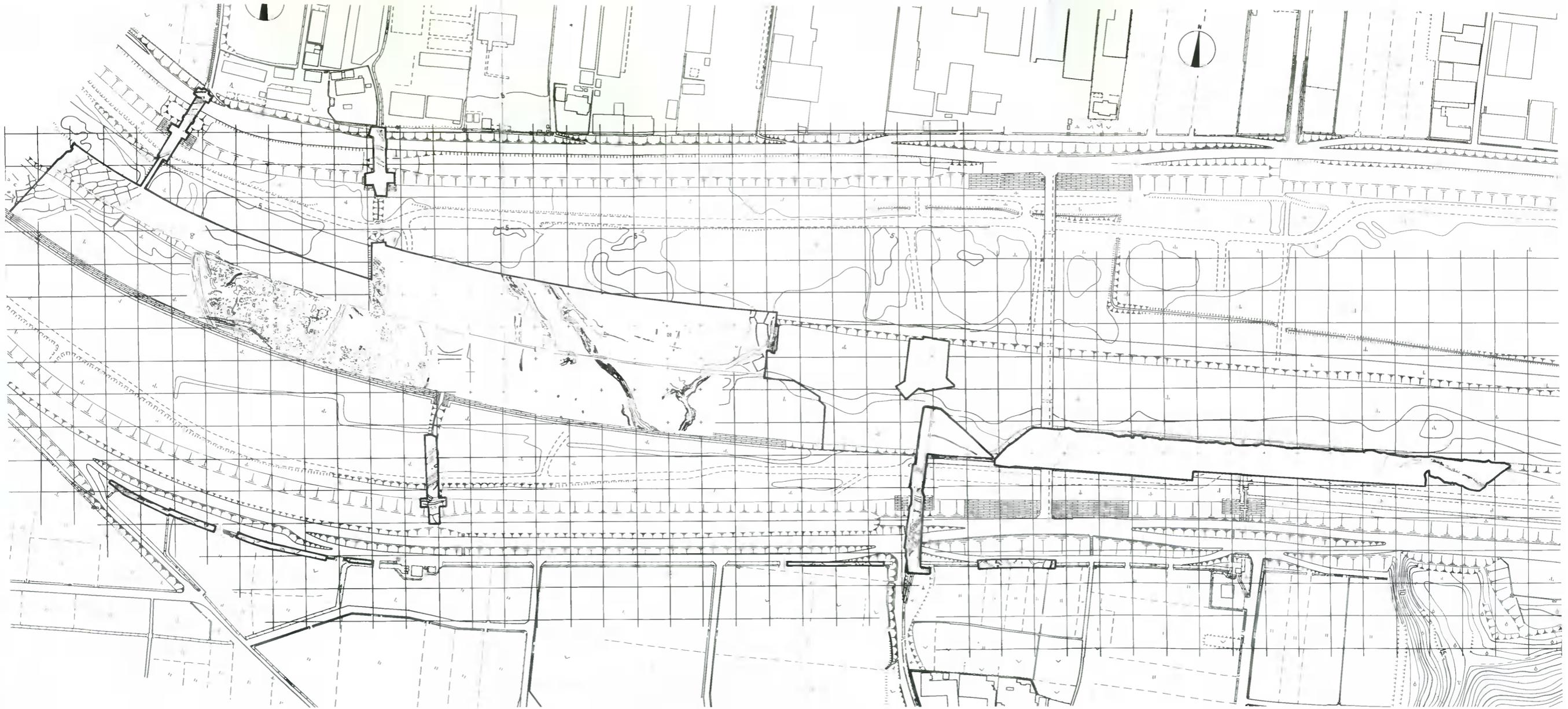
岡山市内山下2-4-6

印刷 友野印刷株式会社

岡山市高柳西町1-23

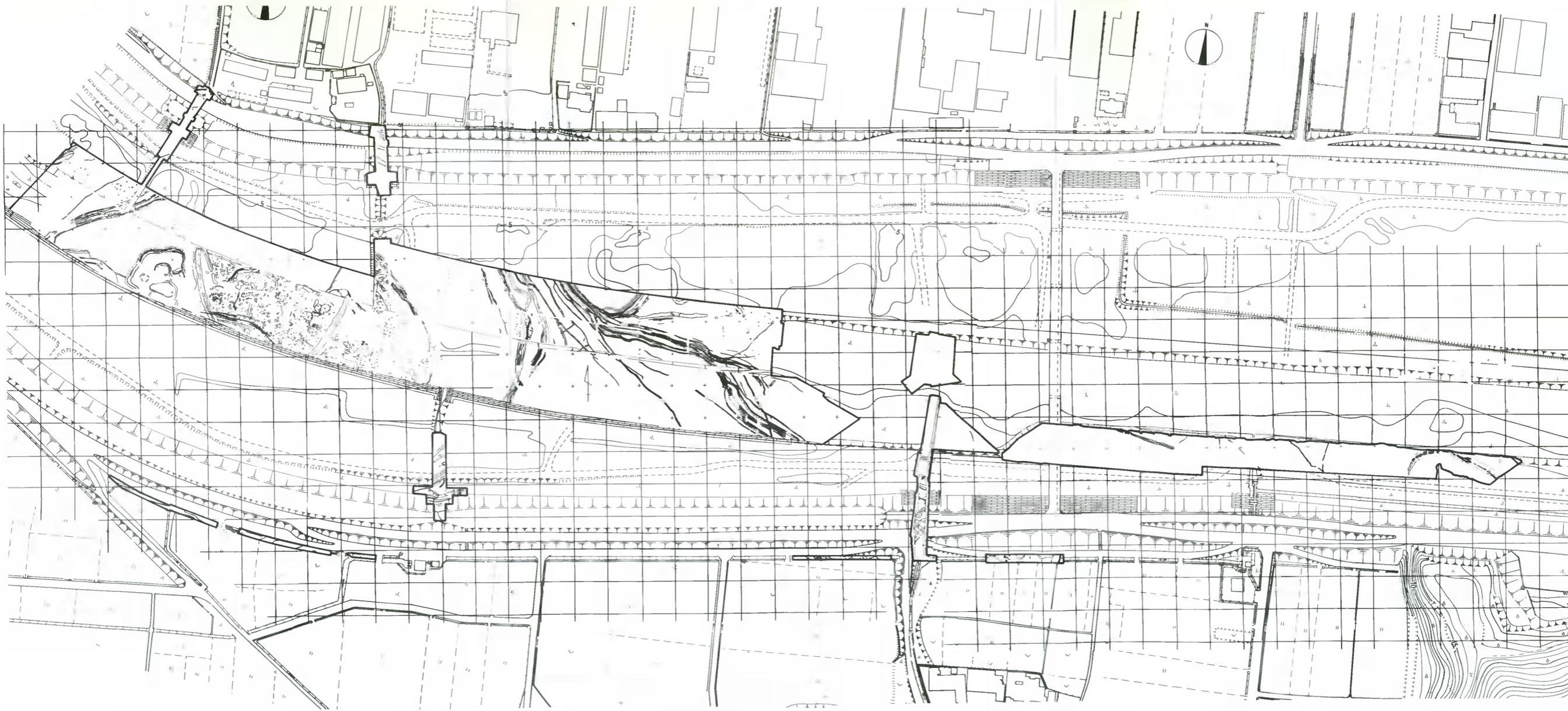


百間川沢田遺跡 3 付図  
百間川沢田遺跡遺構全体図 (S = 1/2,000) 1. 縄文時代～弥生時代前期の遺構 (本報告書掲載の調査区以外は異なる時期の遺構も含む)

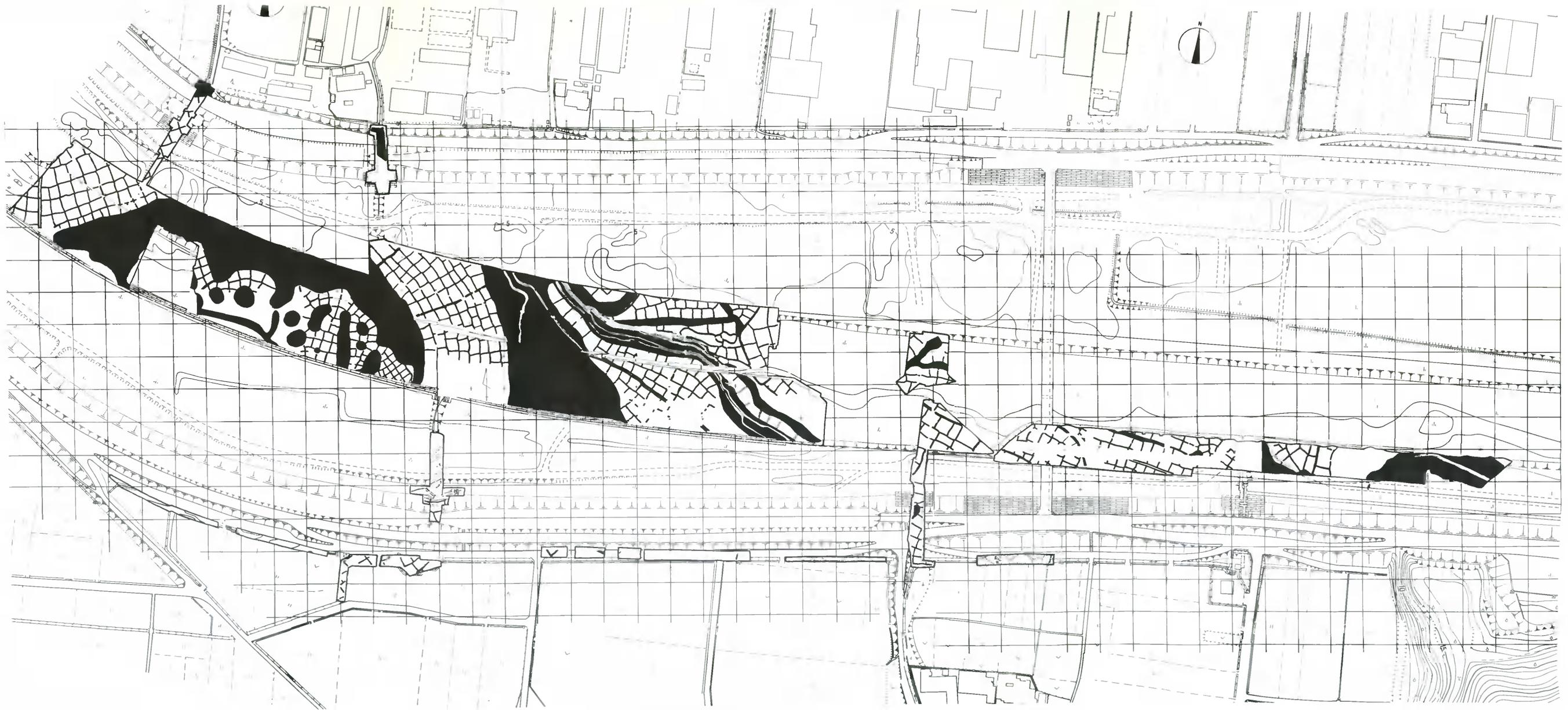


百間川沢田遺跡 3 付図

百間川沢田遺跡遺構全体図 (S = 1/2,000) 2. 弥生時代中期の遺構 (本報告書掲載の調査区以外は異なる時期の遺構も含む)

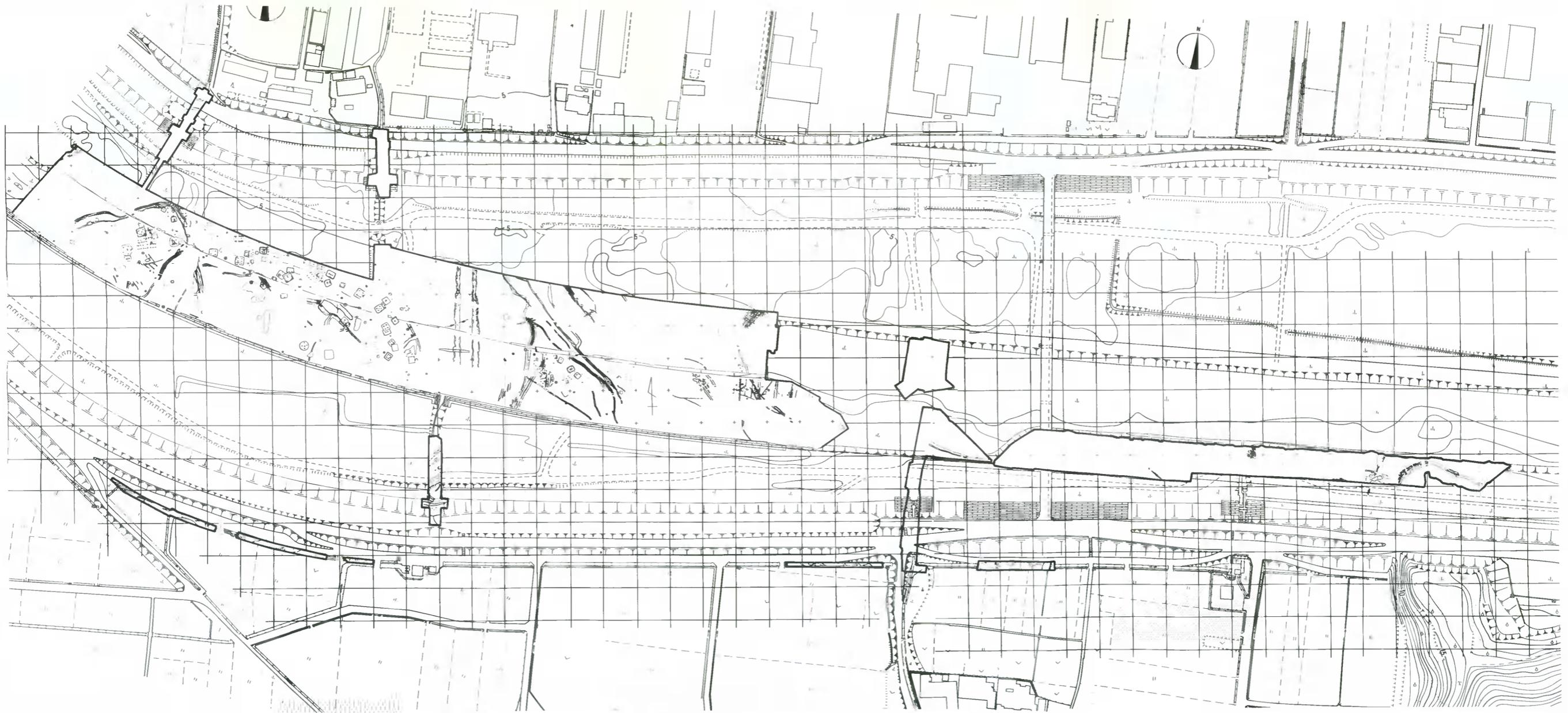


百間川沢田遺跡 3 付図  
百間川沢田遺跡遺構全体図 (S = 1/2,000) 3. 弥生時代後期の遺構 (本報告書掲載の調査区以外は異なる時期の遺構も含む)



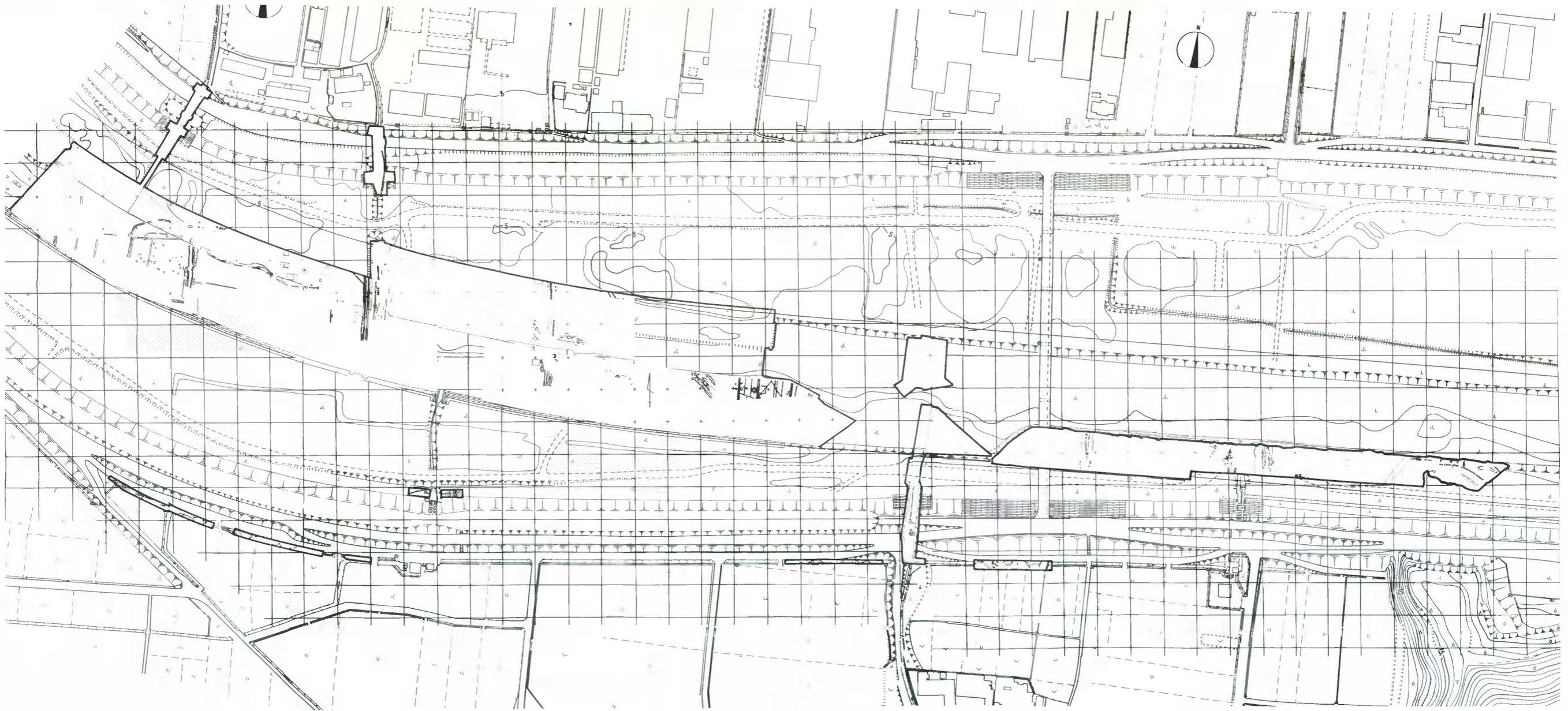
百間川沢田遺跡 3 付図

百間川沢田遺跡遺構全体図 (S = 1/2,000) 4. 弥生時代後期の水田跡



百間川沢田遺跡 3 付図

百間川沢田遺跡遺構全体図 (S=1/2,000) 5. 古墳時代の遺構



百間川沢田遺跡 3 付図  
百間川沢田遺跡遺構全体図 (S=1/2,000) 6. 古代~中世の遺構